南紀徳川史

第十六冊

南紀徳川史第十六册總目錄

南紀徳川史卷之百四十七

服制第一

目次

南紀德川史卷之百四十八

服制第二

目次

南紀德川史卷之百四十九

服制第三

服飾圖式

目次

南紀德川史卷之百五十

服制第四

目次

南紀德川史卷之百五十一

社寺制第一

目次

南紀徳川史卷之百五十二

社寺制第二

目次

南紀徳川史卷之百五十二

社寺制第三

目次

南紀徳川史卷之百五十四

社寺制第四

目次

南紀德川史卷之百五十五

社寺制第五

目次

南紀徳川史卷之百五十六

社寺制第六

目次

南紀德川史卷之百五十七

社寺制第七

目次

南紀徳川史巻之百四十七

臣　堀内信　編

服制第一

綜言（總服飾畧解）

世の開明と共に武家三百年の服章は頓に雲散霧消跡を止めす偶々一座の昔語りに登り又は畫様演劇等に其彷彿を想像するも大に實際に異也されは今に在ては此編記する處の名稱通語乃至形狀製裁等殆と盲者物色を想するに類似の感を免れさるへし故に首に從前服章の梗概を解説せされは制度體裁變遷沿革の態空しく茫乎に歸すへし依て大體を總括して略解を贅す

從前の服章は大別して裝束熨斗目麻上下（長袴半袴）服紗半袴平服野服火事裝束の六種とす皆幕府の制度に基き世上一定の服制たり尤近世は時々變更ありと雖も簡易節儉により或る部分の省略消長に止り大體に於ては嘗て替らさりし也六種服制の略左の如し

裝束

君上は御束帶御衣冠御狩衣御直垂等にて御着用之區別巨細は御裝束之部及ひ年中御召服行事に記する如し他は　公儀式服の差圖に準し被爲召たり

一諸大夫の御家老は五位の束帶（赤袍俗に赤蜻蛉といふ）同衣冠及ひ大紋を着す束帶衣冠は　公儀御大禮等之時着し御家の行事には大紋也

一無位之臣は布衣素袍なり御裝束御行列御供には布衣已上に無之共御徒頭御目付御使番御小姓御小納戸兩頭取御小姓御小納戸御膳番奥御供方は布衣を着す御同朋に限り大紋を着す輕輩には小素袍紹德退紅白丁等あり詳なるは圖式に示す

熨斗目麻上下

熨斗目は地合生絹腰明き也染色幷腰明の縞樣定りなし又大織(シジラ)小織のしめあり御召服を拜領に非されは着するを得す（一本ナシ 御召服になく共時服拜領なれば着す）內小織は尤重き服とす腰明きなきを無地熨斗目と稱し婚禮乃至凶禮に用ゆ

一麻上下とは肩衣袴共麁(キロ)麻地（橫竪共麻な云）淺黃小紋也（色鼠飴房等あれ共略也 小紋はさふし鮫の類とす）又橫麻をも用ゆ橫麻と稱するは橫糸のみ太き麻にて堅生錆絨也形容美と雖も本式にあらず重立たる時或は御用召（昇進轉職拜命など 御用召と稱す）には着するを得す龍門地を用るは尤略なり

一麻上下に長袴半袴の別あり布衣以上（小十人頭以上）は長袴右以下は一同半袴也長袴は襠高くして襠一尺計りを引く長袴之時は小さ刀（脇差にて刀の如く拵へ小柄笄を挿し下緒も刀の通り）を帶するを法とす半袴は製裁平袴に同じ唯長袴に對しての稱なり

一御婚禮式には嘉珍無地のしめ同色麻上下又は返へし小紋にて無之麻上下を着す御用掛り之面々は嘉珍色無地のしめ同色上下を用ゆ熨斗目は總して御目見以上に限り右以下は着する能はす唯御供通りの時御徒御徒押御徒目付御駕頭御小人頭等着するは特別也

一文久二戌年閏八月幕府服制を改め熨斗目長袴を廢止其翌同三亥年十一月復舊を令し慶應三年又々

廢止す一旦廢棄のもの再ひ調製せさるを得す人皆其朝令暮改に苦みたり

服紗半袴

服紗とは黒地五所紋小袖をいふ地は羽二重絹紬の類也色は専ら黒を用ゆ淺黄空色鼠等妨なしと雖も正式に非す重陽（九月九日）に限り花色（千草といふ）を用ゆ此小袖に麻上下着するを服紗半袴といふ（長袴はのしめに限る）

一小袖に時服を用るあり時服とは拜領服の稱にて地紗綾綸子色黒淺黄等にて御紋大形也（のしめにも時服あり）夏時服は麻なり

一夏は服紗之麻を染帷子といふ地麻晒にて五所紋付色は淺黄（濃淡）紺鼠或は生平（キヒラ）を用ゆるあれとも淺黄を本式とす

一極暑には縮帷子を用ゆ柳營にて閣老着用之報あつて後用ゆるの例なり本式に非す故式立たる時は用ひす

一七月七日八月朔日に限り白衣（ハクエ）を着す白衣とは白麻無紋純白の帷子也是亦のしめ廢止の時に廢止省略ありたり

平服

肩衣（カタギヌ）平袴着を平服といふ殿中平常服也肩衣袴着服共地合染色縞小紋紋所の有無等都て制なし之を繼上下とも稱す肩衣は　御目見以上及ひ肩衣　御免之者に限る從前より之制如斯なりしか安政元年以來は變更數回錯雜に渉る即ち左の如し

安政元寅年八月肩衣を廢し

御目見以上　打裂（ブッサキ）羽織袴無紋羽織 冬木綿 夏麻

右以下　丸羽織袴 三人扶持已上羽織紋付 右已下無紋地前に同し

同二卯年より

丸羽織打裂羽織紋有無無差別袴羽織共時節に不拘單を用ゆる事勝手次第式日にも同斷

文久二戌年十一月より

御家老　割羽織 打裂の事也　紋付　紐白

御役人向 重役共　同　同　同淺黄

御目付以上　同　同　同白淺黄の外

以下役　同　無紋

伊賀以下　丸羽織　同　坊主は紋付にても不苦

同三亥年十一月より

以前之通平服繼上下に復舊但時節に不拘麻單勝手次第

慶應三卯年三月　於江戸

平服羽織襠高袴小袴取交着用不苦

右之如く羽織は安政元年より初て殿中平服に用ゆ（若山にては従前は殿中羽織たりし由なれ共公文等不詳）る事となれり此羽織と稱するは必す割羽織にして維新後帶刀廢止比迄尙然りとす（木綿無地色黒紬鼠等也）丸羽織は御醫師御畫師等制外之徒又は御仕人方熊野三山貸附金方の如き商人相手の者に限れる如く諸士或は自己延氣忍ひ歩行等に

は着したれ共總して柔弱の風と見傚されたる也羽織に紋を付るは文久二年の改正を初とす（丸羽織は従來より紋を附す）襠高袴は幕府供連減省の令を發布閣老等騎馬登城行はれし比より一般用ゆるに至り隨て麻上下も襠高袴となり爾來平袴は因循服の如く評して顧るものなきに至る

野服

野服は御旅行又は御放鷹野外御延氣御供の服也貴賤共割羽織半着ギ（木綿無地又は小紋等）股引脚半（木綿淺黄小紋）草鞋かけを一樣とすいつれも麻三尺帶（淺黄中形）を常帶の上に結ふ　君上御野服も變りなし

一御旅行騎馬及ひ駕籠御供之面々は黒縮緬無紋丸羽織小袴又は踏込袴（地純子織物類裾縁り黒天鵞絨）にて紫縮緬三尺帶を結ふ餘は一般割羽織半着股引の野服也

一追鳥狩伏せ鶉等御執行之時は　君上伊達羽織を被爲　召御側向の輩亦是に准す伊達羽織とは木綿割羽織を染分け又は大形染等最も目立たる伊達を裝ひたるもの也　將軍家駒場（今の農科大學校其跡也毎歳冬期御成ありて追鳥狩興行）野御成之時は必す被爲　召蓋し是に被爲傚たるなるへし

火事裝束

羅紗割羽織（五色紫萌黄等三所紋（饅頭伏縫蛇腹縫あり）笹へり縫ひ小身の筋は羅背抜地を用るあり）胸當（羽織に準す紋一つ上部に雲形を裝ふ）小袴踏込袴を着し陣笠を冠り夜は腰差提灯を用ゆ火消役騎馬之向（御先手物頭御供番御使番五十人組之頭は勿論御家老御勘定奉行御用人町奉行御目付御作事奉行の類）は火事頭巾を着す此の頭巾は兜に羅紗の二枚錣（或は三枚しころ）を着け色交り紋散らし等華美目立たるもの也羅紗を用るは火焔豫防の爲と言ふ

御徒火事羽織は淺黄雲齋地脊に鉾の一字を付す御先手同心羽織は淺黄雲齋地三つ輪抜を徽章とす

御抱鳶之者は革羽織鎮の字にて鳶頭は赤輪拔け散らし小頭は白輪拔けを付すいつれも御仕着也此外役羽織の分あるへしといへとも詳ならす

一公儀へ出火に付ての御使勤務及ひ御城付は麻上下之上へ火事裝束を着するの例といふ

着服季節

火事裝束之外は夏冬の差別あり左の如し

九月九日より翌年三月晦日迄	冬服	小袖	繼上下羽織袷
五月五日より八月晦日迄	夏服	帷子	同　單
四月朔日より五月四日迄 九月朔日より同八日迄	袷服	同	袷

御紋服

御紋服に御召御紋形小御紋服形並時服御紋形大の別あり御召御紋御紋服は拜領に非れは着用しかたし就中御召御紋は重き事とす時服御紋は拜領無之共着し不苦總して御紋服は種々制限あり第二卷に掲る如し

一替り御紋と稱し唐花葵崩し等種々あり特旨又は　君側の外容易に賜らす殊に鍬形御紋は御主意ありとて拜領を許されす

十德　武家裝束皆具略記に據れは十德は誤にて編綴と稱すへしとあり然れ共當時の習慣公文等にも十德と稱すえた以て暫らく之に從ふ

諸御醫師御書師御數寄屋頭同坊主諸局坊主茶屋宗味の如きは熨斗目麻上下服紗半袴の廉には十德を着す夏冬とも黑紗單羽織共紐廣袖脇に襞(ヒダ)積あり着衣は諸士に同し御徒格以上の坊主は熨斗目を着

す此輩常に無袴也唯出火之時は一般に同し

紅　裏

御同朋に限り式服小袖は紅裏を用ゆ幕府に準せられし也諸士八十歳に至れは長壽を祝し給ひて紅裏地を拜領す爾來式服に用る事とす此他紅裏を用るものなし

役服御仕着

役義に係る服章不拘御徒は黑縮緬單丸羽織伊賀は淺黃小紋丸に十字の紋を付し御先手同心は黑絹單羽織脊に白抜三寸餘の大紋抱茗荷の如し不詳五十人組之同心は淺黃單丸羽織紋同斷此他諸組同心の事不詳御小人押へは筋付と稱し淺黃木綿に白抜竪山形御目付方の記章にこ寄らす障らすさいへり兩桐油も同斷　羽織着御水主は紺看板腰以下白抜大形格子也此外御小人目付御小人等は御行列衣服定の如し典禮第十一卷に記す　總御中間は黑木綿單羽織黑看板等也御中間之內勤方により小紋鎧の字紋の看板を着するあり又御掃除之者御作事之者持人才領等夫々少區別あれ共細雜今詳ならす　七里之者は木綿鼠地龍虎梅竹等色入模様の半着襟黑木綿往々自費にて黑天鵞絨を用ゆを着す　此他種々あるへしと雖も原品既に散逸關係之者亦存せすして調査の便なし

總して是等を御仕着と唱へ御勘定御貸物方係りの者擔任出納新調修補の事等司りたり

畧　衣

羽織着流し(無袴也)を略衣と稱す俗にビヤク衣と稱すれ共略衣の誤傳ならん　制外之徒及ひ御作事奉行同吟味役諸御屋敷奉行勤務上此服を常にし殿中にも用ゆ式服は通例　幕府の風に倣ひたる也奔走に便なるの義ならんか

此外無袴にて出行は制禁にて遠方は野服を用ひたとへ邸中の同僚知己親戚の往來も織上下又は割羽織袴を着せされは隣家へも出入せさるを本議となせり

然れ共若山に在ては如斯嚴ならす小祿散閑之徒は不問に處せられたる如し且つ御免編笠といふありて紺木綿にて包みたる編笠を冠れは歴々の諸士も袖肱切之紺木綿無地の半着に一刀を帶し細釣竿を肩にし川狩網打に徘徊自由にしてたとへ何人に行逢ふとも互に知らさる眞似して打過く即ち公然の忍ひ也蓋し山海に跋渉筋骨鍛練を奬勵の意に基きしなるへし

吉凶服

別に制なし冠婚喪祭共通して服紗帷子半袴を着す（婚禮に嘉珍色を用ゆるは大家の分也）若山にては父母の忌中五十日之間毎日麻上下を着し一文字菅笠を冠り（夏冬とも）墓參するの習ひ也江戸は葬式法會の時のみ麻上下を着す

足袋提物

總して夏季は足袋を用ひかたき制也然れとも體裁佳ならさるを以て夏足袋と稱し毎年四月朔日前に痛所有之を以當夏中殿中足袋用度旨を出願免許を得て用ゆるの慣例なり紺足袋は御旅行野服御供の外殿中に用る事なし

羽織平服に改まりし后は殿中紺足袋なとも取交せ用ひたり

一印籠提物扇子は式服には必す用ゆるの例たり御用召之時は足袋提物扇子とも携帶を禁し御目付之を監査す

雨衣

殿中出仕勤務出行は木綿無地袷夏は葛布等の（色紺花色鼠茶褐色等裝束付也或は羅紗羅背板を用ゆるあれ共奢侈の沙汰さす大小の柄袋は羅紗羅背板也）長合羽を着す御供は典禮之部御行列衣服定に記する如し御旅行歩行御供は上下皆桐油とす御供通りに無之も

平日半合羽をも用るあり大寄合已上は長柄傘差掛けを許さる
暴風雨之節は陣笠桐油又は蓑を着す

冠り物履物

冠り物夏季御供には諸士一文字菅笠紐白麻を用ゆ御旅行は夏冬とも同斷平素出仕には平形竹製籐組を用ゆ私用忍ひには深笠といふを冠る冬は山岡頭巾或は宗十郎と名付るを用ゆれ共僅々たり頭巾は出仕途中等は用ひさる方なり
履き物は御供には中貫草履雨天及ひ御旅行野服御供は草鞋とす地廻り御供は素足殿中出仕制止を掛る重役御役人向は御城内又は中雀御門前江戸邸中之口内等は中貫草履を用ゆ然らざるも式立たる時又は勤務上諸士互之訪問玄關前及ひ途中行逢等たとへ雨天と雖も中貫草履にはき替ゆ足駄雪駄は失禮となしたるか故也雪駄は獸皮にて穢多の製に係るを以て穢れものとなし神前等には最も禁忌す　伊勢大廟　禁中にも革靴を用る今日に比すれは唯奇と稱するより他言なかるへし

諸士家來之服

若黨は正月三ヶ日之間麻上下を着し供をなす玄關番は七日迄同服を着せしむ五節句初式日平素は丸羽織股立取り也鎗挾箱持草履取り馬口附等は木綿無地紺看板尻からけ木刀一本を帯す駕籠にて御名代御使に徒押へを召連る分は長羽織を着せしめ輿丁は總して長看板着合羽籠持は法被着とす
歩行御使向の供連は前同斷

大奥服制

大奥御召服女中服制等は御廣敷御用人等之外一人窺ひ知るものなく元より衣服定にもなく單に奥向限りの深秘に屬したる也此服制を編するに當り偶々女中筆記之もの遺存せるを發見により編纂す種類品格縫箔染模様の區別階級等多端錯綜を極め其名稱さへ容易く識別すへからすされと從來掖庭服章の整然嚴肅なる湮滅すへからさるを量り原本のまゝを掲けたり猶圖式と參照せは自つから了得を得へし

一服章の區別概略前記の如くにして　安政文久年間以降に在ては專ら虚飾を除き實用を努め自つから武備練兵に利便なる方に傾向の風を馴致し平袴は頓に廢絶襠高袴となり又裁附袴は細袴（ダン袋と云へり）ヅボンに轉々し陣笠は韮山笠端反り笠に變し割羽織はソギ袖ラシャ羽織に移りて陣羽織蹟を止めす是等判然公令の制裁によつて然るに非す唯時勢の趨嚮に促されいつとなく自然に變遷徐々洋風に近つきたる如し其沿革の度は別巻圖式に照せは今日に至る起因なきに非さるを判すへし

一軍服即ち甲冑旗章陣羽織等之事は軍制之部に掲け此編に略す

裝束

按に幕府の服制に於ける熨斗目麻上下乃至服紗小袖半袴を以て貴賤上下吉凶喪祭に通したる正服となし有位有爵たりとも特別の大禮大典に非る外は裝束を用ゆる事なし御家に在ても都て之に准せられし也（即ち元旦御登城正月初て兩山御參乃至將軍宣下重き御法會等には御裝束なり）

抑裝束と稱する大略は　君上には御束帶御衣冠御直衣御狩衣御直垂御着用五位の臣は束帶衣冠又は大紋（御同朋は制外に大紋を着す）無位の臣は布衣素袍十德從僕は退紅白張等とす皆幕府武家裝束の制規あつて位

爵の階級又は家格舊規と大小の典禮儀式により悉く差別あり而して各種の服章製裁着法等堂上專門の流儀有職衣紋の古式嚴格也其道の傳法を習學するに非されは作法以て知りかたし依之世々衣紋方と稱する職を置かれ總して御裝束の事を掌らしめ　將軍宣下等　公儀御大禮之度毎には若山より江戸に召して奉仕せしむるを例とす往昔の事詳ならされとも寶永元申年五月鷹司家勤仕の柳原源八郎なる者有職學に達するを以て新たに辟して御衣紋方を命せられ孫靱負に至る迄三代家業として襲職又享保十一年五月御徒宇治田平左衛門有職之心掛あるを以て御衣服方を被命爾來六代之間即ち維新前平三に至る迄代々家業相續御衣服の職に服せり其間侍臣にして高倉家へ入門衣紋傳授或は宇治田の門人中に御衣紋御用を被命たるもあり（御衣紋職之部に詳事は職制のにす）如此を以て到底其專門に非されは細雜を詳にする能されとも結局幕府の制度を本とし隨て百般の例規を馴致したるものなれは先つ武家裝束之規範を揭け次に御衣紋方より提出之書類且是に關する覺書布達書等を抄錄して裝束の一編となす

一此編唯裝束の大體を示すのみ其詳なるは左の御藏書にあり參照を要す

類集有職之部 義智信	三冊	公卿其他へ質問書	裝束圖彙	二帖	問答書一卷添
官位裝束大概書	六冊	文政九年松岡清助辰高の添書あり	裝束書物及書翰		
御裝束筋御問合留	一	享和元年より	同	二	文化十三年より
同	三	御狩衣筋	女房裝束圖	極彩色	
御裝束裂鑑	一帖		御裂本	二冊	

武家裝束皆具略記　幕府制度

着用之次第

一冬は先赤大口次上袴次單次袙次下重上下共上袍夏は先赤大口次表袴次赤帷次單次下重上下次半臂次袍或説先赤大口次下重袙風情の物着之次上袴を着して上袴の腰にて着籠下着一説あり以上三條裝束抄にみえたり

束帯

冠　繧掛緒紙捻略は羽二重をくけて用へし

表袴　表白平絹裏紅平絹強張或板引子細あり

笏　木品に習あり堅木をよしさす

袍

檜扇　家紋を朱にて置へし

赤大口　紅生平絹或は精好

夏扇　暑中に□[文字]の代に持參略儀なり

帖紙　時々の色目繪有へし又白檀紙

下襲半臂

石帯　馬瑙或白石

襪　平絹又夏冬平絹或宿老平絹若年練貫
劔
大帷子　襲單の略也えりに襲單袖に單の切を付る　冬白夏薄紅
平緒垂　或續僻帶子細有多くは紫緑を用　縫唐草家紋又家の紋なきも定りなし　さし織
尿筒　必用意あるへし
單　紅あや繁芳
淺沓　用意斗又用る事なし
深沓　甚雨深雪に用略は塗下駄を用
緒太　供奉の時は必是を用雨天に是を用
小袖　白平絹一つえり夏は帷子或生平絹

○右將軍宣下御轉任　御代始紅葉山　御參詣　御代々御百回忌より以後御當日

○伊勢　日光　久能正遷宮等

襲衣冠　單一共單を重
冠　纓掛緒紙より
袍　小紐友地帶同略義平絹
腰　次精好或は生或は布若年紅老者白黄
檜扇
末廣　夏扇の略なり
淺沓
尿筒
奴袴　侍從以上紫四品以下淺黄
單
劔
夏扇
帖紙
深沓
小袖　足袋は用ゆる事なし

右朝鮮人來聘之節

○衣冠

冠　纓掛緒紙より侍從以上紫の組掛を用ゆ
袍
奴袴
劔
末廣
帖紙
淺沓
深沓
緒太
尿筒
小袖

足袋は必はくましき事なれとも豫參には願に依て用供奉に用る事なし

右御代々幷　孝恭院君御法會御當日御百回忌より以後御逮夜等之節

○隨身　若年寄御使番

冠　老掛かけ緒〔若〕卷纓〔使〕細纓
袍　金襴闕腋冬夏共に裏付〔若〕紺地牡丹唐草〔使〕赤地
大帷子
表袴　平絹
赤大口　平絹
石帶　白石
劔　〔若〕蒔繪色作〔使〕鞘卷を啄木にてつけ平緒を掛添る
尻鞘
平緒垂　紫たん唐草ㇾ縫家紋なし
笏　不用
壺胡籙　梨子地御紋金卷繪
矢　塗箆水晶筈白羽白根上さしの雁股ともに七筋
弓　黒塗籐赤かれ握にしき弦赤まき
襪　練不用もめん足袋にて濟

淺沓　不用

胡床　黒塗唐草卷繪各官物

緒太　不用中ぬき草履にて濟

小袖　（使）も白むく

○直垂

烏帽子　風折紫組掛

小刀

末廣　妻紅子紅なし

淺沓　柳筥を持せ又は不持

小袖　白むく一ゑり夏白帷子

直垂　精好色不定又すき精好も紅紫淺黄は可憚事也さめ胸紐露くゝり色不定くゝりにすへし近來さしくゝり有

劔　鞘卷を持せ又はもたせす帶す事なし

帖紙　式の帖紙又は常の帖紙

緒太

足袋　よの常の心得

侍従以上年始御元服の節等着

○狩衣

烏帽子　風折紙より掛

宛帶　友地又下襲の切を用ゆる事あり白狩衣着する時は冬は黒を表にす

小刀

末廣

淺沓　同前

小袖　同前

狩衣　文紗色不定色目により紋を織武家にては必す家の紋を織入へし

奴袴　衣冠の所にしるす

劔

帖紙

緒太

足袋　不用

四品着用御老中高家衆御着用の事あり

○大紋

烏帽子　風折紙より掛

小刀

末廣

淺沓　不用

小袖　のしめ夏白帷子

○諸大夫　着之

○布衣

烏帽子　風折紙より掛

奴袴　古は布近代平絹色淺黄

末廣　しつめ折子細なし

淺沓　不用

小袖　のしめ夏染帷子下着淺黄むく一つ着へし

○素襖

烏帽子　折すへ調子かけ色不定古法平紐常時丸打

大紋　布色不定いかにも紋を大く目立様に付へし腰紐精好練貫又平絹を用直垂と同し胸紐袖くゝり色不定さめくゝり

劔　供奉の時小刀に鞘巻を帯添る

帖紙

緒太　供奉の時雨天に是を用

足袋　尋常の如し

布衣　布色不定近代はりぬきを用精好なと用る事いわれなし

小刀

帖紙

緒太　不用わら草履を用ゆ

素袍　布色不定胸紐革色不定不結はさみ置革略儀也革品々習有

小刀　　扇
帖紙　　草履
小袖　熨斗目夏染帷子

○小素袍

烏帽子　折すへ長に結調子掛丸子細なし一寸班豹文等用へし　　小素袍　布色不定袖一幅半
小刀　　帖紙
扇　白骨黒骨金銀子細なし小人故用ゆ　　小袖　のしめ紅にても子細なし
足袋　　草履　わら胴共に子細なし

御宮參の時小人騎馬の衆着せり一日晴ゆへ花みを盡へし

○退紅

烏帽子　かけ緒　　退紅　布薄紅究帯同し
黒袴　布　　刀
小袖　色木綿　　草履

御三家毛利家轅の時傘持沓持是を着す

○白張

烏帽子　　白張
刀　　小袖

草履
表御大名四品以上御譜代侍從以上式服の時具せらる

○十德

十德　布紗平絹不定家の紋侍はむな紐有中間は宛帶して留る輿昇是を着す八德とは卿の別也今中間の十德のみにて侍の着用されぬ也
刀
帖紙
足袋　中間は足袋なし

○道服

烏帽子　法體は不用
指貫　官に隨
帖紙
小袖　白むく
足袋

直綴

直綴　精好又平絹色黑
刀
帖紙

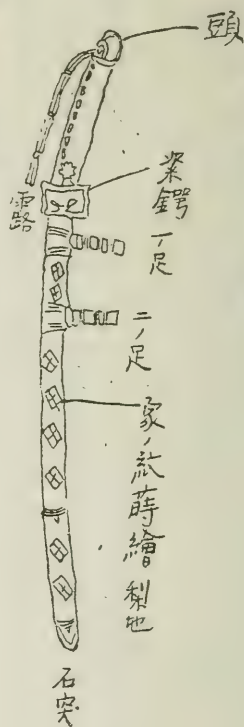
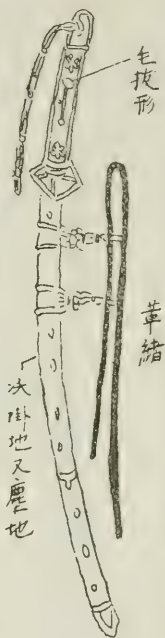
小袴　布又平絹中間は四布袴
扇
小袖　侍のしめ又平絹中間もめん

道服　又紗或平絹夏冬單略儀は純子等裏有
刀
緒太
末廣
草履

長袴　白精好又生平絹又奴袴着用もあり
末廣
緒太

小袖 白むく　　淺沓
足袋　　草履
法印法眼等の服也
○編綴
編綴 紗又生平絹色黑　　刀
扇 しつめなり　　帖紙
小袖 のしめ　　下着 白むく
足袋　　草履
今無官の醫師着す世に是を十德と云ふ誤也胸紐八德の如し
○水干
烏帽子 折すへ又風折人に寄掛緒平組又赤革馬の尾等を用ゆ　　水干 文紗家紋縫付又老若色々習あり
葛袴 葛衣裏平絹又單　　大口 精好
强袴 布多略之　　鼻高 革にて作る
末廣　　刀
帖紙
式の的の時射場へ出る體祭着用あるへし
○庇上下

上　下　長中布色不定無地本式也近頃小紋を多く用也四季の色習有　小　袖　熨斗目色不定　夏帷子省中服紗或花色　花色帷子式さす

帯　色地不定　下　着　島織物は規さしたる時は不用よし古書に見へたり二つ襟の外有へからす

扇　文字書きたるは時に不用又白骨用ゆへからす共云　帖　紙

印籠足袋式に不用

御同朋頭

大　紋　白　袴

亀井坊

素　袍　ふだうの文　御式の時御長刀持也

釈　奠

衣　冠　皆具前に同し

林祭酒御勤なき時は御儒者勤らる都て諸大夫ならぬ人袍を着せらる皆具官物を申下さる

布　衣　皆具前に同し

蒔繪劔

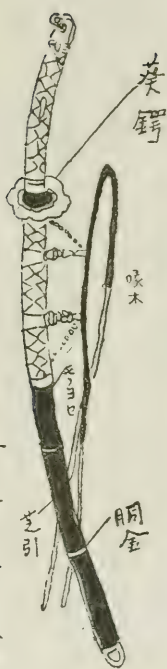
螺鈿劔　蒔繪螺鈿……束帯之時帯之
木地……樋……關東にて是を衛府大刀と云

野劔

衛府劔　毛抜形――衣冠之時近來多帯之
平鞘――革緒――

鞘卷劔

糸卷劔

衣冠之時帯之直垂狩衣の時是を持せ大紋の時小刀に帯添る

武家方にて古來野劔を帶する事なく簾卷計なるに享保の頃より四品以上帶させらる安永年中より諸大夫にても帶させらる　野劔新製

袍

縫腋と云

○地冬ハ表綾裏平絹夏羅六位は穀或は平絹

○紋轡唐草輪無唐草四品以上家例によつて着用子細なし諸大夫無輪たまたま轡を用らるゝ家有六位は無紋也

○色四位以上橡とて黑也五位は緋古代茜にて染中古より蘇芳にて染る今武家方に限り紅染多く用ゆと雖もいわれなき事也六位縹近代多く縹を用ゆ

○四月朔日より九月晦迄夏之分十月朔日より三月晦日迄冬之分也六位夏冬差別なく單なり

下襲

三位以上表綾臥蝶丸裏綾遠菱板引夏羅遠菱也四五位冬表平絹裏同老者は張若年板引また板引ならぬも子細なし

○色冬表白裏濃蘇芳のよし黑也夏は公卿蘇芳四五位若年に藍老者淺黄

○長さ大納言八尺中納言六尺三木五尺四五位四尺六位も四位の由きひすより餘る分にて近代の製なれとも今用る處も公位也卿一丈一尺計り（疊て手に持）四品以上八尺よ（上手へ二段にかくる）五六位六尺よ（上手へ一段に掛る）何も腰よりの尺也倚主の丈に依るへし

○公卿は表袴藤丸又窠霰なり奴袴八藤または鳥襷也四五位冬の下襲表袴さしぬき平絹を用へき事なるに近代小葵文と稱し織物を用る事子細なしと云へとも僣上也侍從のさしぬきも平絹の付色を用

る事式なるに織色を用る事と成れり

用意之品々

糸　黒紅淺黄紫のねりくり白絹糸少々　　針　みそのある革ぬいはり二三本

鋏　まむし鋏紐を付腰に付へし　　冠串螻蛄串を用ゆへし又針にて留る事有

錐　丸きりのめを細くけつり持へし

主人を北に向へからす　髪結ゆふに習あり裝束合羽太刀の柄袋用意すへし

御束帯之次第　（宇治田秀八郎より提出）

一御冠　垂纓　[illegible]一つ有之

御若年之内御十六歳之春迄透額（スキヒタイ）の御冠被爲　召候其後はよのつねの御冠を被爲　召候御事本儀にて御座候御纓の矯（タメ）樣家々の舊說御座候得共臣下は巾子より高く不仕樣式法にて御座候

一御掛緒　長さ極り無之思召次第

御束帯之節紙捻（カウヨリ）本儀にて御座候御衣冠之節も神社　御參詣被遊候節は紙捻被爲　召候御事尋常は紫の御組掛又はかうよりも被爲　召候時宜に隨ひ奉り候御事

一御袍

夏冬御文輪あり蠻唐草御色黒橡（クロツルバミ）と申候ふじかね染にて有之候冬の御袍御地合は御若年より御壯年之内はしじら地の綾被爲　召御中年以後は熨斗地のあや被爲　召候御事夏は御年齡かゝはり不申生薄物（ススシノウスモノ）の御袍被爲　召候御事に御座候

但四月朔日より九月晦日迄夏の御袍被爲　召十月朔日より三月晦日迄冬の御袍被爲　召候筈

一御大帷　本文大帷之所御單物被爲　召候事も有之

夏より秋に至り御帷の地薄紅を用ひ冬より春に至り御帷白地に仕候古へは汗取の帷と名付候て夏計着用候處近代夏冬共御大帷被爲　召候は全く御衣紋之爲之由に御座候本儀は單に被爲　召候事にて夏は張單と申候て紅板引の御單冬はふくさはりの御單被爲　召候儀に御座候　大慧院様には毎々御束帶にも御單被爲　召候御事にて御座候

一御袙

御若年之節は染袙を被爲　召候御事にて紅色萠黄薄色御地綾御文小葵にて御裏同し色の羽二重平絹にて御座候御中年已後は織あこめにて黄香又は表裏共白の御袙被爲　召候御事御文柄は御同様に御座候近代堂上方には袙略致され着用多くは無御座候　大慧院様には兩三度も黄御袙被爲　召候御事も御座候當時御召服御用意は無之

一御下襲幷御裾

冬は御表白に浮線綾の丸御裏黒板引御文遠菱夏は蘇芳の穀織の遠菱の御文すへ申候元來裾は下襲の襴にて候得へは少しも下襲に相替儀無之候單袙下襲と次第して被爲　召候御事本儀に候得共　公家衆零落の比より袙着用略いたされ下かさねも襟計りをひとへ大帷のゑりへ附御着用之儀に成り來申候當時も裝束好み申され候堂上方にてはいにしへの如く晴の節は次第をたて着用被致候事に御座候御裾のたけ　御代々制符不同に候得共當時は大中納言之御方一丈二三尺と

相定り御座候但御きひすよりの御たけにて尤金尺にて御座候
拾要抄に福近代大臣一丈四五尺大納言一丈二三尺中納言一丈二尺參議八尺四位七尺歟とあり

一御表袴
夏冬の御差別なく御表白縮線綾窠に霰御裏紅打御中年以後御地合綾固文の霰八つ藤の丸御裏紅打にて御座候　御年齢に隨ひ被爲　召候御事に候得共御晴之節は浮文縮線綾を被爲　召候御事　上を全く御敬し被遊候御事の由師説にて御座候

一御赤大口
夏冬の御差別なく紅の生精好結構成たいふ被爲　召候御事御壯年之内は濃大口と裝束抄に御座候得は別てこき紅被爲　召候御事に有之候

一御石帶　そこに付候すん方のきわにてかく立候樣丸ども一つはいにする
有文玉の御帶被爲　召候御事就中御法事等之節御束帶被爲　召候御儀有之候得は無文玉又は馬瑙の御帶なと御着用被遊候ても可然御事尤巡方丸鞆相交へ候通用の御帶被爲　召候事

一衞府御劔
御束帶之節御帶被遊候御儀にて金裝束にて御座候衞府と書やうとさなへ申事本儀の名目にて御座候

一御垂平緒
當時之御召は紫絨の御垂平緒と申候て諸會通用にて御座候御文柄は御先規より相定候桐唐草に

鳳凰の御模様にて御座候其外四季の花孔雀黄鳥等之御模様は御好に奉隨候御事に御座候

一御笏（シャク）

御束帶之節被遊御持候御事御衣冠之節も御社參には必らす御笏被遊御持候御事本儀にて御座候笏は櫟（イチイ）槐（エンジ）富久良（フクラ）等之木を用ひ申候櫟を上品と仕飛驒國位山より出申候を専ら用ひ申候神拜には榊にて作り笏を用ひし由に御座候

拾要抄に日本笏を取る事元正帝の御宇に定らる五位以上牙の笏六位木の笏也六位以下散位の輩は取る事ゆるさゞる由或說に見へたり異朝には天子珠玉諸侯象牙大夫魚鬚又は竹也士は木象笏を以來禮服の時計牙の笏を用尋常は押並て木の笏を執也一向制する事なし但主上上皇は近代迄も牙を用玉ふと見へたり又直衣を着する時事に依て持之さ

一御檜扇　上に御紋計に而外に御模様は無之

御束帶之節御笏被遊御持御檜扇御懷中被遊候御事本儀にて候得共併御登　城之節は被　仰出候御品も有之候得は時宜に御隨ひ被遊候御事と奉存候板數廿五枚或は廿八枚にも仕候白糸にてとち糸の餘りを以て御紋や置物にぬはせ申候御若年より御壯年之內は御紋置物にぬはせ候猶餘りの糸にて唐草抔をはし御持被成候儀に御座候堂上方にはかくの如く仕候得共御召筋是迄右體之御檜扇調進不仕候得共本儀に御座候ゆへ申上置候

此紅葉重色也當時御用被遊候は具に而紅のうるみたるやうにて候　賦さ唱ふへし形は非也形有之候て御裏は蝶鳥の模樣

一御帖紙（タトウガミ）

御束帶御衣冠御直衣御狩衣等之節御鼻紙或は御書付等にても御帖紙のあひへ御はさみ御懷中被

遊御事に御座候
右御帖紙折形數々御座候御色合御繪樣は四季通用又は四季を分ち御好に隨ひ調進爲仕候事に御座候
一御襪(シタウヅ)
御束帶之節ならては御着用不相成候御事御登　城之節は御襪代り練の御足袋被爲　召候儀に御座候　大慧院樣御國に於て御襪每々御召被遊候
一御淺沓幷御緒太　雨鼻緒とも申も有之候
御裝束之節淺沓被爲　召候御事本儀にて御座候得共御登　城之節は御淺沓代御緒太被爲　召候御事に御座候雨(ウキ)儀之節は御淺沓又は御深沓被爲　召可然御儀に奉存候深沓と申はなめし皮にて御筒高く作黑うるしにてぬり候物にて御淺沓よりは御召やすきものゝ由に御座候御表袴(ウヘノハカマ)御奴袴(サシヌキ)等之御すそ御深沓の筒の內へ入れ候ゆへ大雨之節にても御裾(スソ)ぬれ不申候
御衣冠之次第
一御冠　垂纓
右御束帶之部御同斷
一御掛緒
御社參之節は紙捻(カウヨリ)御用被遊候御事本儀にて御座候其外は紫の御組掛(クミカケ)被爲　召候御事に御座候本儀紙捻と裝束諸抄に相見へ有之候故　御社參に不限紙捻被爲　召候事時宜に隨ひ候御事と奉

存候

一御袍

御束帯之節に相替儀無之候

一御單(ヒトヘ)

襲(カサネ)の御衣冠と申節御單被爲　召候全體かさねかさねなしと兩樣之差別有之儀にては無御座候得共　公儀御昆式之節は兩樣に相定有之候故其節々の儀　仰出にて御召被遊候御事に相成御座候

御束帯之節被爲　召候御單は御年齡に拘不申紅の御單被爲　召候御儀にて御衣冠御直衣御狩衣等被爲　召候節は御年齡に隨ひ萠黄薄紅黄等之御單御好に隨ひ被爲　召候御事にて御座候

一御衣(キヌ)

御衣冠御直衣之節御好に隨ひ御ひさへ御衣御袍と被爲　召候事に御座候御色合御文柄は四季を分ち被爲　召候か又は御年齡四季通用之御色合御好に隨ひ被爲　召候事に御座候

一御奴袴(サシヌキ)　裏地紫羽二重せいけんと申候

御若年之節浮文鳥襷(ウキモントリタスキ)の御奴袴被爲　召候御地經緯(タテヌキツキ)深紫御文柄白糸にてぬひとりに織せ申候御二十二三歳より御二十九歳まで御地紫緯(ヌキ)白にて御文ぬき糸にてあらはれ候樣に織せ申候御三十歳より御三十九歳迄は御地紫緯白固文(カタモン)八つ藤の丸御奴袴被爲　召御四十歳より淺黄八つ藤の丸緯(ヌキ)白の御さしぬき被爲　召段々御年齡に隨ひ次第に御色薄きを被爲　召候事に御座候且又極熱の比は夏の御奴袴と申候て御色淺黄生(スズシ)の薄物にて御文八つ藤の丸御表淺黄の平絹を用ひ候て被爲

召候事に御座候　大慧院様には夏の御奴袴毎々被爲　召候

一御劔（タチ）
襲（カサネ）御衣冠之節は御野劔御帶被遊襲なき御衣冠之節鞘卷の御太刀御帶被遊候御事之樣に當時　公儀御定之旨承知仕候全體御衣冠に御襲ありなしの御品には不相拘御野劔御帶被遊候御事本儀にて御座候

一御末廣
御社參之節は御笏御持被遊候御事に御座候堂上方には夏は末廣冬は檜扇を持申され候事併前段にも申上候通夏冬に相かゝはらす御裝束にて御登　城之節は御檜扇御末廣御兩樣之内被爲持候御品被　仰出候御事も御座候樣に敬承仕候得は一概に難申上奉存候尤參議以上は妻紅の御末廣にて御座候御繪樣は定りたる事無之御好に隨ひ申事に御座候御末廣を蝙蝠（ヘンプク）とも書候てかはぼうとよませ申候

一御帖紙
御東帶之部同斷

一御淺沓御深沓并御緒太
右御同斷

御直衣之次第

一御冠　垂纓或は御立烏帽子

右前段に申上候

一御直衣

御若年之節は夏は御色深二藍御地生薄物御文三重襷御中年迄は二藍の御色次第に薄きを被爲
召候事に御座候御文柄はおなし御事にて御年齢に
隨ひ次第に薄きを被爲　召候御事冬の直衣の地浮線綾の丸白粉張御裏紫の平絹に御座候御年齢
に隨ひ奉り御うらの色次第にうすく仕候事本儀にて御座候御略服にて御座候得は御佛參之節被
爲　召候御事に御座候御烏帽子直衣は別て御略服にて御座候

一御衣

御衣冠の部に申上候御出衣被爲　召候とも御奴袴のうちへめさせ込候とも御好に隨ひ申候御事

一御單

前段に申上候御好に隨ひ被爲　召候御事

一御奴袴

御衣冠之部御同斷

一御帖紙

前段に申上候

一御劔

御衣冠之通本儀は御野劔御帶し被遊候筈御好に隨ひ鞘卷の御太刀被爲　召候ても不苦候御事

一御檜扇
右御好に隨ひ御持被遊候御事
一御末廣
右御同斷
一御淺沓御深沓幷御緒太
右は時宜に隨ひ被爲　召候事に御座候

御狩衣之次第

一御烏帽子　風折
御十六歳已前小諸眉（コモロマユ）と申を被爲　召御十六歳以後は右眉と申を被爲　召候尤左折御烏帽子被爲
召候御事に御座候
一御掛緒　紫御組掛
一御狩衣
冬は裏ある御狩衣を被爲　召夏は生（スヽシ）の御狩衣被爲　召候御事當時紗の御狩衣は四季通用して被
爲　召候樣相成御座候御若年之節冬は浮文の御狩衣御中年以後は固文（カタモン）に相成御文柄も遠文を被
爲　召候御若年之節は御袖括薄平（ソデククリウスヒラ）の組にてもへぎくれない紫等之打交に致させ被爲　召候紗の
御狩衣は白糸をよりて左より右より相交へ二筋並へ御袖括に仕候御狩衣御色合數多有之儀御座候へ共
四季通用の御色にて御年齡に相叶ひ候御色は又少きものにて御座候松色茶檜皮海松（ヒハダミル）等之御色合

御相當にてしほらしく相見へ申色に御座候

一御腰帶
右宛腰とも申候御狩衣之友切れにて致し候

一御衣御單
御色合御文柄は前段に申上候御狩衣にて　御社參等之節は御好に隨ひ被爲　召候て不苦御事

一御奴袴
前段くはしく申上候

一御小刀
御好により鞘卷の御太刀をも被爲帶候御事に御座候

一御末廣
通例之御儀に御座候　御社參には御笏被爲持候御事に御座候

一御帖紙

一御淺沓幷御緒太
前段に申上候
時宜に隨ひ被爲　召候御事

御直垂之次第

一御烏帽子　風折左り折

一御掛緒　紫御組掛

一御直垂

御色合之儀は御年齢にあなかち相かゝはり不申候御事之由候得共當時は官服之樣に相成候得は同しくは御年齢御相當之御色合被爲　召候御方可然之由滋野井殿にも御申聞なされ候事に御座候外御官服こ準據いたし候得は　御中年以後茶色抔の類にて御好に隨ひ被爲　召候御事可然こ奉存候御露紐抔も當時薄色紺御六十歳よりは淺黄御宿老に被爲成候ては白紐御着用又は御好に隨ひ御五十歳より淺黄御着用被遊候ても不苦候段滋野井殿にも御申聞被成候事に御座候

一御小刀

御通例の通時宜に隨ひ御鞘卷御太刀をも被爲　召候て不苦御事に御座候

一御末廣

御通例之通り

一御緒太

御通例之通り雨天之節は　御淺沓被爲　召候ても不苦候御事

外に奉申上度品

御檜扇又は御末廣御持被遊御盃御頂戴之時公卿之御方は手に被爲持　御前に御進御頂戴之時下に被爲置御土器に取添御退き被遊候御事に御座候殿上人は本座に置て空手にて被進候事に御座候公卿之御方空手は御無禮之由に御座候尤御把物笏之節も前文之御樣子勿論之御儀に御座候

以上

衣紋童訓　佐野孫兵衛提出

縫腋　束帶

先冠　垂纓　懸緒紙捻

懸緒は布子のうしろより纓ともにまはして角の上を前へこし左上右下に打ちかへてかくるなり

又衛府公卿弓箭を帶せらるゝ時は卷纓にして懸纓大臣大將不被懸之給ふなり

次赤大口　紅老人は白

腰はまへにて諸鉤にゆふなり

次襪　練又平絹

紐は强からす弱からさるの間にゆひて末を必はさみかふへし

次表袴　次大帷子　冬白夏赤本儀單下襲

本儀冬は單下襲夏は大帷子を被着也すそを表袴の中へ入て其後袴の右の腰を左の脇よりうしろへぬきまはして右の脇少前の方にて片鉤にむすひあまりを股立の中へ入る也是前衣文師の役也

或冬といへ共大帷子を被用事頗略儀なれとも久しくかくのことし單の袖單下襲のゑりを付て被用之此下かさねのゑりは夏冬の替りあり公卿侍臣のたかひも猶心付へし自四月朔日至九月晦日夏の分なり自十月朔日至三月晦日冬の分なり餘倣之

次裾

裾は下襲の尻なり夏冬の替り公卿侍臣の相違心得へし或下襲或大帷子のうしろにあてゝ前にて諸鉤に結ふへし但裾の長短は官位によりてわかちあり中古以來參議已上は緣て左の脇にて持之給ふ或は事の品によりて上手にかき給ふ歟四位已下猶上手に掛らる又太刀にかくる事秘說あり但威儀を正し給ふ時は各被引之大臣は本府隨身の弓に懸させて持さしめ給ふ云々

次半臂　忘緖

今世縫腋の袍に不被用之よし也

次位袍　縫腋夏冬　次石帶　本名草帶色々有之　次魚袋　公卿金魚袋四位已下銀魚袋

後衣文の人先いれ紐をさし次に波戸衣を入てすその高下を見合前衣文をさらせ次に後刷ひ次に石の帶を指してかりしめいたさせ上手をさし扱よく前衣文つくろはせて其後袖衣文右の方より搔なり未熟の袖衣文はおもきもの也魚袋を被用事あらは右第一第二の石の間に付之但人の肥瘦によるへし

次劔平緖　劔色々可依其官其人

太刀を着給ふ事あらは太刀の第二のあしにて平緖を一まとひして石帶の上手の付際にまとひをかませてうしろへぬき出し石の帶の上のとをりにさして前へまはし垂をさして眞むすひにゆひすゑをはさみかくすへし或はつゝき平緖は秘說あり太刀の後てらせやうは人によるへし猶馬上の太刀つけやう心得へし但上殿の時は解劔して從者に令持之又太刀つけ給さる時は平緖は用ひさるなり

次胡籙　平胡籙壷胡籙 弓
事によりて衛府の公卿或は被着之但大臣の大將は人にもたさしむ又老懸をもかけ給はさる事也
猶仗公事尤斟酌あるへき歟つけやうは粗闕腋の所に見ゆ
次笏　檜扇懐中
笏の把やうは其人の習あり
次淺履或裏無　二つ鼻緒
隨公事給ふ時は宜陽殿のうしろにおゐて靴に改らる自今便宜之所馬上之時は半靴に改給ふ也

闕腋　四位已下衛府の官帯弓箭立仗之時被束帯也
先冠　老懸　懸緒
被帯弓箭之時は卷纓老懸立仗給ふとき垂纓老懸なり懸緒に前に同し
次赤大口　次襪　次表の袴
次大帷子　本儀單下襲　次褶　以下同前
次半臂
今世尋常不被用之但晴の時或は彼用之歟
次位袍　闕腋夏冬　次石の帯　或付魚袋
闕腋に後ゐ作る事習ひあり又つくらさるも苦しからさる也其人の好によるへし
次劍平緒　同前

次胡籙

平胡籙壺胡籙は官により又事によるへし石の帶の上のほとにあて表の帶をもつて其胡籙にあて前へまはして諸鉤にゆふ也或引とゆふと其品二樣あるへし又平胡籙からみやう古今違ひありと見えたりいつれも秘事也云々

次笏 檜扇懷中

於殿上侍臣不持笏給よし也又持弓立仗給ふ間は小隨身にもたさしむ

次淺履或裏無 同前

衣冠 非公事政事而尋常參内之時被着之其中褻時單衣等被着之云々

先冠 纓 組懸紫紐或懸緒紙捻

組懸々緒の差別人によるへし或は冠とゝめを用らるゝ事あり直衣の時又おなし

次下袴へ或腰次 白布袴也

尋常不被用之褻の時或は衣單或帷子なと被着の時下袴にても腰次にてもさしぬきの下に被着之

次襪

衣冠直衣に襪被着事 御免なとては着用なき也着樣前に見へたり

次指貫

上括下括其人其品によるなり上括は尋常上下用之褻の時或衣單或帷子をかさねたまふ時人によりて下括 若年腹白 あり下括の時は下袴を用らる下括は是秘事ならひあるよし也 或上括も子細なし又

腰はまへにて諸鈎にゆふ也

次單衣或帷子

尋常着用なき也褻の時冬或衣單或單はかりかさね給ふ夏或帷子單のゑり袖なつく着用せらる今世是をかさねさいへり各すそを指貫の中へ入てさしぬきのこしをゆふなり又出衣の時ならひあり

次衣袍縫腋夏冬　次腰帶下襲切或直衣切

小紐を帶さなしより懐へいれてうちにてゆひ波戸衣のさかりたる下より腰帶をあて前にてしめさせ前をいふへし新敷袍ならは袖の襞襴の居積さるなり

次衞府劔号革緒劔云々

今世公家には衣冠直衣に不被帶劔從者に令持之以下倣之但いにしへ衣冠直衣狩衣さいへとも依時宜帶劔例あり武家には或衞府劔或鞘巻劔毎事被帶之つけやう秘説あり又神拜の時は解劔せらるゝ也

次檜扇或蝙蝠

神拜の時は笏をとり給ふと心得へし

次淺履或裏無

直衣冠り直衣　又烏帽子直衣

先冠組懸或用紙留　或烏帽子立或風折懸緒或用烏帽子留

直衣を用ゆるほどの人は皆組懸を用ひ給ふ也

次下袴或腰次　次襪　次指貫

次單衣或帷子　以上同前

次直衣 裁縫如縫腋有夏冬　次腰帶直衣切

着樣衣冠に同し但直衣は神拜之時着用なき事故實あり神拜之外拜禮之時直衣狩衣といふとも笏をとり給ふよし古記にみへたり其外衣冠直衣には笏とり給はさる也

次檜扇或蝙蝠　次淺履或裏無

已上　朝參之服也自小直衣至水干不被用朝服也

小直衣　大將已上褻の時被着之也親王被着用之時号傍續云々

先立烏帽子烏帽子留　次白袴或指貫不用下括

次小直衣 或号狩衣直衣色不定

小直衣の下に或衣單等被着用事もあり

次腰帶

うしろよりあてゝ前にて結て前衣文かひこむへし

次檜扇或蝙蝠　次淺履或裏無

半尻 親王家攝家已上御童體之時被着之裁縫如狩衣

先前張或指貫　次衣　次半尻　次腰帶

狩衣 納言已下殿上地下皆着用

先烏帽子 立或風折　次檜扇有繪或蝙蝠　次履

組懸懸緒の品人によるへし

次指貫　次狩衣 色不定又有襖狩衣

狩衣の下に單被着用事もあり又神事之時淨衣を着し給ふも狩衣に同し

次腰帶

ゆひやう小直衣に同し但今世前をかはすいかゝ

次小刀

公家には常に不被用之武家には被用之を又供奉之時は小刀に鞘巻の太刀を帶せらるゝ事有直垂の時准之

次蝙蝠　次淺履或裏無 余倣之

道服 大納言以上或被着之但父子相並之時可有斟酌歟

先烏帽子 立或風折組懸

入道被着用之時は尤烏帽子なし

次道服 胸紐

或白袴或指貫着用の事あらは道服より先に被着之

次蝙蝠

直垂 公卿殿上人褻時被着之

先烏帽子 立或風折組懸或懸緒　次直垂 精好色不定胸紐色不定

次袴 色同上

直垂のすそは袴の中へ入るなり腰のゆひやう心得あり

次小刀

陽明の御家の外諸家には不被用之武家には皆これを用ひらるゝ也委前にしるしぬ

次蝙蝠

布直垂 俗号大紋諸大夫侍の品着之

先烏帽子風折懸緒 次布直垂付其家文 次袴 同上

直垂と裁縫聊かはる事なし

次小刀 同前 次蝙蝠

水干 色不定 袴

着用大概直垂に同し又諸家童體の人も被用之但是は白き水干也是も略儀之時は袴はかり被用之其絹これを長絹と云歟其説區々也又牛飼居飼舍人等も着之其色不定是は布を用る歟古今差別尋へし

召具裝束

本府隨身 上皇執政給兵仗大臣或大將具之依其官人數不同見弘安禮節

冠卷纓懸緒 緌 赤大口 襪 表袴或着褐衣冠之時狩袴歟

大帷子付單 下襲 裾

位袍闕腋或依時褐衣歟 石帶褐衣之時不用之 劔或尻鞘

壺胡簶弓　　淺履

大臣不兼大將節會の日束帶胡簶猶着用之具古今替りある歟

小隨身　衛府官具之依其官人數不同

冠細纓緌　　袴依左右有色目　　單重今世多略之本儀用之

褐同上　　褐或蠻繪依左右繪有替　　石帶本儀用白布帶

劔今世多用平緒本儀用革緒　　壺胡簶弓　　淺沓或裏無

主人騎馬之時或馬副手振被具之手振は褐衣冠にて不帶弓箭也

衛府長　或号雑色長或沓取官人是本府隨身勤之攝淸公卿令具之

烏帽子平禮　　袴色不定　　單紅

狩衣色不定　　腰帶　　太刀革緒

壺胡簶弓　　淺履

又諸家公卿事により以青侍被具之于時着布衣号長是歟

布衣　号小雑色

烏帽子風折　　指貫淺黃　　布衣本儀用布今世平絹也布衣狩衣裁縫無差別本同物也但有位之人有文無位無文也故布衣與狩衣存差別云々

腰帶　　小刀武家用之

又布衣隨身あり着布衣單等を弓箭帶す大概如衛府長歟是諸家公卿被兼衛府官之時依事被具之

如木雑色　名家公卿或辨官被具之

烏帽子柳佐比異樣　指貫　單同前

如木上古用强張布故云之如木但今也用白絹不審　腰帶　太刀常不帶之但遠所之時用尻鞘劔云々

本府隨身衞府長者近衞官人之役也自小隨身至如木靑侍之品勤之

素襖武家無官人着之又社家僧中行列之時具之歟又於公家被具之

烏帽子折俗云侍烏帽子　素襖袴　小刀同前

退紅可然家具之令持履

烏帽子柳佐比俗号鍬烏帽子　黑袴布　退紅布也是云荒染

白張諸家具之或履笠或松明令持之

烏帽子同前　白袴布　白張布

腰帶

十德轅舁着之不着烏帽子袴頗異體也

十德院御轅舁着小紋十德其外依家々紋替也　腰帶

退紅已下十德に至て仕丁之品着之

右の一書は天保八酉年御衣紋方佐野孫兵衞より呈上する處也孫兵衞は宇治田平左衞門忠恕の三男にして天保八酉年三月宇治田兵衞病死に付當分衣紋方相弟子稽古頭取世話及ひ衣紋方御用勤を被命同年九月將軍宣下之節御用畏り嘉永四亥年迄衣紋方勤務したり

覺書　御衣紋掛侍臣所藏

一笏　飛騨國位山と申に有之櫟と云木の昇杢に而作れる是を上品とす

一櫻柊　是にても作る尋常の通用なり

一榊　榊配なとのせつ用る

一富久良と云木にて作るよのつねの通用也是れは何の木と云事細工人の方にても不分明の由

一紀伊國白石大崎石也五位以上石帶の玉に作れる事あり五位以下帶する事を禁とあり

一女官の檜扇をよこめの扇と云木を杉にしてぬりたる也もように色々の繪など書ける事もあり

一士烏帽子は折ゑほしと云か本儀なり

一立帽烏子は風折ゑほしの折らさるすしなり

一ひつたてゑほしは狂言の大名杯の戴きたるを云ふなり

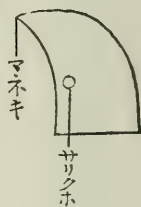
一上手（ウハテ）　石帶の上に挿むもの丶事

一任官之事　直叙（ノウシユク）五位以上を云ふ　叙爵五位以下を云ふ

一加階　従より上に移る事此方にいへる役帶に並より格になり格より本役になると云ふ様なる義なり

一叙留　其役々に居て格式ある事を云なり

一折烏帽子の上きよんとしたるは元來雛形と云ふは本儀なるへし

一即位　しよくいとも云なりよのつれ即位なり

一裝束のひた都て一重に成るを嫌ふ一針にて留る事はせんが洞一つ大ひたの留りに一つ手の中る下にて一つ皆上へ見えさる様にする事大事外家には所々にて留る事なれとも所々にて留ては賤くなる故高倉には三所はかり也

一裾見計いくつに成共疊み末にて夫を又二つに折太刀の下より持す事

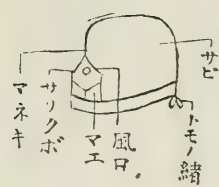
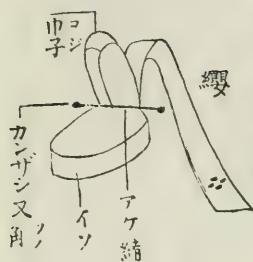
一奴袴下たくゝりは大様上さんりの當りにてくゝるへし是は向ずね横表の事なり

一位官に後のひだ角袋の下ひたより中のひだは五分程おとるべし山科家には中のひだを狹くよせると云とも高倉には前段の通

一大ひだは格別後へ廻らせる様にすへし五位以下は後へ廻る事を専とすれとも三位以上は下へ筋を通し大ひだは後へ廻さす併時宜に可依事

烏帽子

マネキ
サリクホ

一冠名所何れの冠にても名所同斷

圖は立烏帽子也風折にても名所同斷

一大臣は三つ襟大中納言は二つ襟ニ有之候右に付　中將樣には三位之御方樣に付二つ襟に有之候由

天明六年十月七日より二ツ御ゑり被成る尤御袖口は幾つゝ中數定り無之由　右平吉申出る

御狩衣御本儀

一白綾御下召二ツ襟

二御衣もへき也

本文御二つひさへ御三ツ御衣之答御ひさへ御あこめならば二つ御ひさへ三つ御あこめ之答本文は平吉不念也

三御ひさへ　一體御色は紅の筈に付紅色之節は御ひさへさ計唱申候外色之節は何の御ひさへさ唱申候筈

四御下袴　紅色御本儀

五御奴袴

六御狩衣御等にても御傘風にても御持不害候

一白むくに御下袴計召候儀は御略儀に付京都抔にて地下へ内々略し對面抔又は平常に右等着有之由

尤御衣着候節も有之由

一布袴

御布袴被爲　召候儀は一體御略儀にて御衣冠を直に御角付け御野劔御帶被遊御石帶も被爲　在候事乍然關東にて御勤向に御用不被遊候也

覺　書　裝束着け方

一裝束の紐の結ひ方袴頭忘緒等初總して左上右下に結ひ左の圖の如く貳つゝからげてゆるまさる樣

結ふ也但其紐に寄て兩はなに結ふと又結ひ切るとあり平緒は前の如く結ひ切り兩はなにせす

赤大口　表袴

奴袴　裙

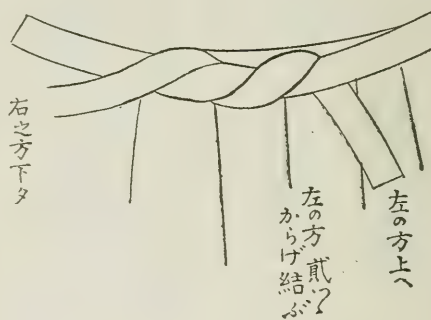
石帶　太刀平緒

衣冠之時忘緒

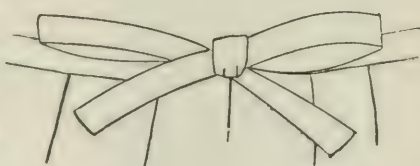
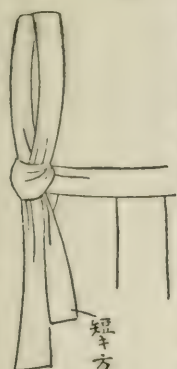
狩衣腰帶

下袴

直垂袴等

圖の如く結ふ

一冠の懸緒紙捻は眞結ひに致し餘りを切り取る事本義也但懸は兩はなにむすひ下る勿論也然るに紙捻も羽二重にて拵へたるは多く兩はなにむすひ置元來此紐は略義也

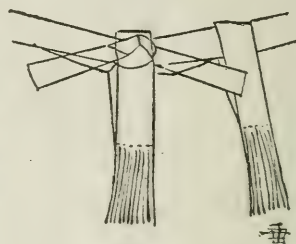
一直垂冠の紐は總して差貫の如し但袴の前紐は垂ある時は狩衣に少しも替る事なし垂なき時は平常の麻上下の袴の樣にむすふへし垂なき方可然歟

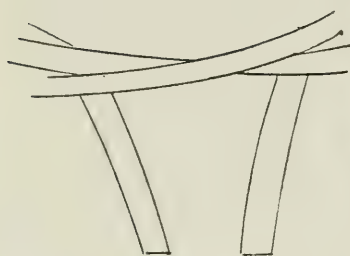
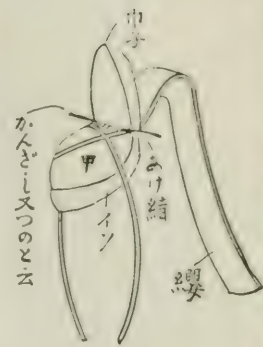
赤大口
奴袴　裙
石帶
下袴等
眞結ひにて兩端左右ひも
の下へはさみこむなり

一長袴の紐左の袴の中より右の横へ引出し後へ廻し左の横にて片はなに結ひ餘りの長き方を又一つむすひからげ袴相引の內へ隱し入る

此長き方を結ひからげる
二印の圖の通りになる

長き方にて末をからげたる圖

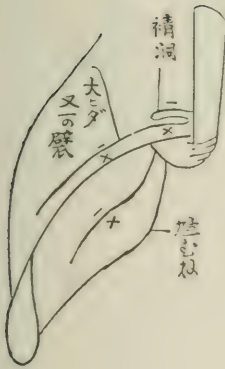
圖の通りに相引の內へ入る

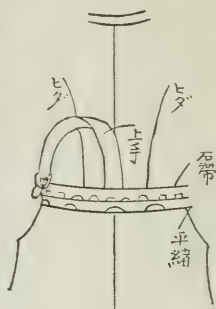
一平緒は眞結ひにして結ひめの上へ垂を寄せ紐の兩端の餘りを疊みて掻込（カイコミ）へ入る

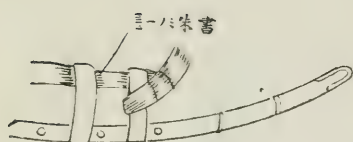
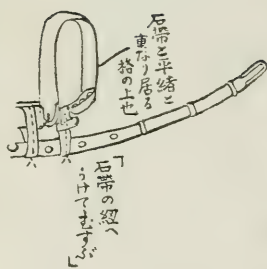
此の通り挾み込垂を
前正面へ寄せる

狩衣の腰宛も前にて結ひ方同様なり但前の垂は一つ前より上へ卷かへしたらす

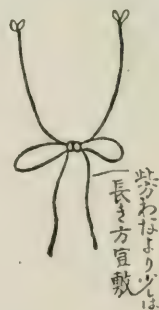
一奴袴後の紐前へ廻し圖の如く前の紐の下より引出し兩はなに結ひ端を左右へはさみ込

一冠懸緒は纓共に巾子の後より角の上を越し左上右下に相違へて懸る也又眞結にし餘りを切る

但懸の時は雨はなに結ひさける

一袖

左右共同一印の邊にてとじる×印は結ひ目也總て結ひめ下にかくるゝ様にする也とじ糸は袍の糸に准ず　絹の太き糸也關東にて大白糸といふ

一束帯の時格を後ろより見る圖

石帯平緒と順々圖の如くかさね付る但圖の如く、格の上より石帯平緒重なり見へにくきものなれとも可成丈圖の通り相成候様心得可有事

平緒緒革緒共圖の如し
太刀のあしへ付る

三一ハ朱書

上の圖を横より見る太刀の付方
圖之通り上手の内より平緒を前の足へ通す

一直垂胸紐結方

直垂胸紐は圖の如く貳つに折返し左上右下に眞むすひにすれは二圖の通になる

舜恭公服章古實御調査

御同公御隱居後御召服之事

御同公には服章衣紋古實の上に御明通常に其專門家へ御下問又長澤六郎養子同苗衞門（文學傳に詳也）は和學に通し高倉家門人にて衣紋古實之道に堪能なるを以て常に御前に被召御推問又京都へ被遣講究を被命たり今衞門自記に係る西濱御殿御用留といふにより服章に係る條項を抄錄する左の如し

天保九戌年四月廿八日　西濱御殿へ召され江戶在勤中御用向の振合且衣文服の色職學（本のまゝ）に付たる事共御尋被遊夫々御答申上御膳御酒菓子頂戴

閏四月六日出殿御道服裁縫幷御召樣之事共上野勘解由を以御尋委細御答申上る

九月十日小忌着用之儀幷御道服召振之儀御尋有之御答申上候處尙又一橋儀同樣御振合松岡淸左衞

門へ可問合旨御沙汰有之則江度へ申遣候處七月五日松岡より返事來其儘さし上る
十月六日葡萄染は蝦色にも染るやと御尋に付葡萄染考一帖九日に差上る
裝束圖彙に冠の圖の泄れ有之增補被　仰付候に付則有文冠重文遠文卷纓拍夾細纓矮外に黃衣之圖等廣隆に爲認弁文章考証一冊そへ差上る
同廿五日細長考一冊さし上る下襲の考さし上る
天保十亥年
正月五日車轅之事御尋有之
同十三日車轅之事御再問安元御賀卷物三條西殿より差上候由右安元はいつ比との事御尋に付即日御答申上る
十九日右安元御賀畵卷拜見す
一十一月十日去年より被仰付有之裝束着用圖百枚淸書出來指上る
天保十一子年
一正月廿一日(一字不明)上道服へ御立烏帽子被爲　召候て宜敷哉との御尋に付被爲　召候ても不被爲　召候ても可然公卿褻服に有之旨倂三條家裝束抄には立烏帽子着用に有之趣勘物さし上候事
天保十二丑年
一冠立烏帽子懸緖之事に付橋本殿へ尋に遣し返事朱書にて六月廿二日來る本書の儘さし上候事
一廿二日兼々御誂被遊候揉烏帽子松下能登より出來今日さし上候事

地綾織蝶丸五倍子鐵漿染　一頭

一廿四日懸緒之事左之通認一應問合に遣し候樣との御沙汰にて御下書下る

立烏帽子掛緒之事

後柏原院之御比より寛政之比迄は右懸緒無之候處寛政末比關東へ下向被致候堂上方多分懸緒有之當時も大方懸緒被致京都にても飛鳥井家傳授相濟候筋は紫平組之懸緒被相用傳授不相濟筋は紙捻を被相用候樣子に候勿論當時の形ちに烏帽子を折候比より懸緒有之候趣に候處後柏原院御比より懸緒無之樣相成又當時にては堂上方專ら掛緒被致候樣子右は何故相止中比は懸緒無之事に成又當時の樣に多分懸緒被用候はいかなる譯合に候哉右懸緒有無之境承知仕度奉存候事

六　月

右答七月朔日着二日差上る答の文冊案之通故別に不記之

一古製革帶附方

天保十三寅年八月廿六日出殿之處右品先年平松大納言殿より被差上候處附方御不審之所々御尋に付御答申上る

一牙笏之儀御尋に奉答　天保十四卯年正月

古代は牙笏を專用之由左候はゝ當四月日光へ御豫參之節抔御用被遊候方宜敷當時攝家方初堂上方用ひ方如何哉との御尋

御答

古代は五位以上は牙笏五位已下は木笏用候儀定格に候得共　鳥羽院御代以來五位已上も木笏用候樣に相成候後は禮服之時のみ牙笏相用朝服に牙笏用之儀は曾て無之右禮服着用之儀は後世は御即位之節計にて牙笏は右之節用ひ候より外無之最早數百年來之定制にて當時堂上方之樣子も同樣にてたとへ攝家たりとも朝服に牙笏用之儀決て無之事にて日光　御豫參之節御禮服被爲召候はは牙笏御至當に候得共朝服被爲　召候て牙笏御用被遊候ては故實に違ひ可申か且古代五位以上は朝服にも牙笏用之定制に御座候得共其比之朝服と中古以來之朝服とは裁縫も相違に相成候事候間古代之朝服に牙笏用候例を以當時之朝服に牙笏相用候ては都て故實に違ひ可申候當時禮服に用候牙笏寸法は木笏之寸法と同樣にて木笏よりも少きも有之候得共其は畢竟略之由に御座候

一御小直衣と小狩衣之別　天保十五辰年正月

天保八酉年十二月　伏見入道之宮樣より　一位樣へ被進候御小直衣色目濃香穀織文樣菊之折枝丈け短く御袖も少さく總體小振りに有之右裁縫は御小直衣に相違無之御老年御着用には御進退御便利に候得共元來小直衣と小狩衣と一物二名裁縫大小之相違にて唱振り替候哉又は別段なるや唱紛れにて小狩衣と申事哉可取調樣御沙汰申來る

御答

小狩衣と小直衣とは元より別物にて小狩衣は狩衣を小振に致し尻を前より一尺計りも短く製し總體は半尻に似たる服にて御座候小直衣は襴有之服に候滋野井故大納言殿の説には小狩衣は半

尻之事童體にて着するを半尻と唱へ老者之着するを小狩衣と唱ふ半尻小狩衣一物二色也と兼々御物語に承り有之候右小狩衣當時著致し候方絶て無之尤古書之上にては高貴の方のみ着用之趣に候得共當時は高貴之方御用無之尙裁縫には寸法雛形も有之候付承合候處小直衣小狩衣は尤別之裁縫之旨申出候四條殿橋本殿等承り合之趣も如此御座候

然るに尙又押返し御尋

小直衣に狩衣と申唱有之其上　宮樣方にては普通之狩衣は不被　召半尻より直に小直衣に被爲移故小直衣を狩衣とも被唱又側續とも唱へ絶て裁縫に不拘小狩衣と裁縫の狹を唱候事には無之哉

御答

半尻より小直衣に被爲移て狩衣を不被爲　召か狩衣を賤しとして召されさるにて是臣下と別なる　宮樣之御規模に被爲在候然るに其賤しめらるゝ狩衣之名を小直衣之上に及ほして貴き小直衣を小狩衣と唱へ候儀は有間敷事に候

一半尻に前張を用候儀普通に候歟又指貫を用候事有之歟當時は専ら何れを用候哉

御答

半尻之下袴は前張をも指貫をも又常之白大口をも相用候て一定ならす候當時迄も同様に候得共多分前張を被用候事

一時宜に寄候て半尻之尻長も有之候哉

御答

半尻之尻長と申儀は決て無之候

一宮方御童形には細長を被爲　召候か先年　日光新宮御下向之節萠黄之半尻之様なる物を御着用にて麹町御屋敷へ被爲入候御半尻とのみ思召され候得共右御後至て長候故細長にも被思召候との御事右體之節は前張に候哉又指貫に候哉右之節之儀旋と御覺不被爲遊候得共白き様に御思召被遊候付前張とも被爲思召候普通には何れを被爲用候哉

御答

細長は男女とも童形之節着用之服にて尤下も袴は着せさる事に御座候

日光新宮様御着用も定て半尻に白前張を被爲　召候御事に可被爲在半尻は俗宮法中宮とも御若年之時必被爲召候御事に御座候

舜恭公御隱居後御召服

舜恭公御隱居後御召服

高倉家へ御問合にて被爲　召候儀にも無之全く御好事にて御老年只々御樂に被爲　召候との御事併下通は御老中方へ御内談も有之大體左之通被爲　召候事

一都て御熨斗目御長袴又御半袴之御廉へは

御熨斗目

御道服又は御直衣

多分御小さ刀

一御服紗御半袴之御廉へは
御服紗小袖
御道服又は御直衣
右之節々御小袴被爲　召候得共依時宜御着流し
一御平服之御廉へは御直衣御着流し
右之節も依時宜御道服御着流にも被爲　召候
右之御例は　太眞樣御落飾後前段之御振合にて　御同所樣には御平日共多分御道服計被爲　召稀には御切袴被爲　召候得共　一位樣には　公邊へ乾度御達と申にも無之御内談計之儀にて先御封内限り之御事尤　上使等御出會も御座候得は左之通被爲　召候御定に候乍去以來未御出會は不被爲在候事
一上使御出會且　公邊御靈屋方へ御參詣之節
當時年頭之外御參詣は九月八日計り之御定
御内着　白綾又は白綸子大紋綾羽
御道服　色目
御指貫　禁色
右之御定は前段御老中方へ御内談之節御答に被爲寄候事之由
先右之御振合にて年頭其外御裝束之御廉は以前に被爲替候儀不被爲在候事

但御道服御直衣とも御好にて少々つゝ御裁縫替且御熨斗目以下之御召は多分色目に無之黒顯文紗唐菱等之遠文を御用冬分は黒繻子の遠文等被爲　召候事

一此節御髷之御樣子御平日共御臥髪に被遊候事

右は天保十五辰年十一月水戸樣御衣紋役京都在勤奥宮喜四郎と申者より長澤衞門は高倉家同門之因を以京都滯在之衞門へ水戸樣御内命之由を以問合越したるに對し若山へ伺之上上野勘解由之指揮を以衞門より及答たる書付面也　水戸老公當節　公儀より御隱居御拜命駒込邸に御蟄居にて御召服之儀高倉家へ御問合之儀も有之たれ共答振今少し不慥に付其筋は御見合せ　一位樣年中被爲　召候御服風に被遊度思召にて右喜四郎手を以御内々　此御方へ御問合相成たる趣長澤衞門自記西濱御殿御用留といふに記載あり

一右御道服等被爲　召之事御家中へ布告面御徒目付方記錄中に發見す依て附記す

天保十亥十二月十五日
一位樣被爲及御老年候付御召服之儀先達て追々被　仰出有之候處此度御國内御長袴御半袴之廉へ　御薙髪之御姿にて御道服（御小袴或は御着流し）又は御直衣被爲　召此表へ之　上使御出會之節幷重て若御參府之節も御長袴御半袴之廉へ右之御召服被爲　召度旨水野越前守殿へ御談させ被遊候處御白小袖にて　御道服御直衣等御勝手次第被爲　召候樣尤　公邊へ被對候節は　御着流しにて無之方可然趣被申上候付以來右之趣を以御道服御直衣之類本儀之通多分可被爲　召候旨被　仰出候事

十一月廿三日　天保十亥年なり

右一通

御召服被爲替候後　御位階も被爲進候御事に付御着流にて　公邊御靈屋方へ御參詣被遊候儀も
何さか御躊儀に被思召候處此度　最樹院樣被爲　召候御道服御裁縫之御形御手に入御仕立させ
則今日御試に被爲召候處甚御召心も御宜敷被爲在候由右御裁縫方は日野家山科家兩家之好み樣
にて勿論御差寄等被爲　召候　思召にて以來　公邊御靈屋御靈前方御長袴之御廉之　御參詣に
限り右の御召服可被爲　召則來月八日　俊岡院樣御靈前御參詣之節より右御道服可被爲　召旨
被　仰出尤御烏帽子も無之付ては御長袴御同樣之御廉に付勿論御供通も御長袴之節之通相心得
候樣三宅大輔より申來之

但今日之御召服色目左之通

首帽　御道服　海松色紋紗裏萌草　御指貫　薄紫八つ藤

一坊官之服　天保十五辰年十一月廿六日

一位樣より御尋に

法親王門跡方之坊官都て内着は白に可有之併右之内若色目且黑にても着用之節は無之哉

御答

本儀は白に候得共五節句其外之式日にも直綴着用致候節は色目をも又黑をも着用致候素絹着用
致候程の大禮には必内着は白に限り有之候但し宮門跡方御室々之御流例によりて少々の異同有
之樣子に御座候乍去内衣に熨斗目着用之儀は諸室共先つは無之趣

尙又御尋

内着に外色目且黒なと着用之節若禁色之指貫相用候儀を見受候事無之哉

御答

右は五節句其外之式日にても黒又は色目着用致候得は必す着流しに致し候例にて指貫は決て着用不致素絹着用仕候程之廉に候得は平絹淺黄之指貫着用仕候禁色指貫之儀表向は勿論たとへ褻に候共地下にては僧俗とも決て着用不仕候尤堂上にても御免無之分限は着用不致儀に御座候まして坊官共は絕て着用不仕候素絹着用之節も指貫は淺黄に限り有之事

御再問

江戶にては　公邊御醫師法印法眼之筋五節句其外重立候節は直綴に白之下袴着用東叡山之坊官重立候節は素絹且直綴等着用尤素絹着用之節は禁色之指貫着有之由右に付京都之樣子御不審に被思召候との御事

御答

元來東叡山之儀は法中宮にては御上首之御室柄にて格別之御儀とは乍申着服に限らす京都之御定令通にも不被成　禁中と　公邊との御模樣を御折中被成候て御一派限之御定例に相成候事も被爲在候由に付東叡山之御規矩を以京都宮門跡方之御振合に押合せ候ては相違之儀も可有之哉右之內にも東叡山は多分　公邊之御振合に被準候御事之由既に右坊官忌服一件なと全く東叡山御手限之御事と窺はれ申候禁色之儀京都にては坊官は扨置たとへ院家にても　勅許無之輩は着

用不相成（併大臣之子か孫かに相當り候院家に候はゞ勅許無之共着用仕候事）程之事に御座候坊官の中にも法印法眼之位に叙する有之院家にて少僧都位之筋も有之候得共元來院家と坊官は規矩も相違有之（院家は堂上之御連枝たち入院いたし坊官はいつれにても皆地下にて候）事に付禁色も院家には　勅許有之坊官には　勅許無之事と奉存候

一都て紫紅之色目之外綾織物等は皆々禁色には候得共單には堂上地下共　勅許之有無を不論綾を用候事にて是甚た不審之至御座候猶禁色之儀兼々禁色考と題候て書置候書物も有之中々容易に一筆に申上盡兼候事に御座候

萬延元申年四月改

年中御召服行事　奥之番覺書

正　月

元　日　御直垂　年頭爲御祝詞御登　城被遊候節

歸御之上御二度目後於御休息御書初御讀初被遊相濟於御座之間御祝且御年寄初御勘定奉行御用人御祝儀申上相濟御成廊下にて　御簾中樣御用人幷御匙醫之面々御禮被爲受夫より御小書院へ　出御被遊　左京大夫樣へ　御對顏相濟重役以上幷表向一統御禮被爲受候事

二　日　御狩衣　御祝幷御物初且年頭御禮表　出御之節

大奥御禮は三ヶ日共御裝束

御成廊下にて奥詰平士幷奥醫師等御禮被爲受候於御小書院　彈正大弼樣へ御對顏被遊候

三　日　御狩衣　大奥御禮被爲　受候節

同日夕　御服紗御半袴　御祝之節
同日夜　御拝領御熨斗目御長袴　御謡初に付御登城被遊候節
　　　　御熨斗目御半袴　於御座之間御謡初御祝儀之節
　　　御登　城歸御之御儘長袴之御下計にて被爲濟候
四　日　御服紗御半袴　當日御召幷若餅御祝之節
五　日　御平服　御當日御召
　　　　御服紗御半袴　大奥五ヶ日御禮被爲受候節
六　日　御服紗御半袴　御當日御召幷夕御祝之節
七　日　御淸御服紗御半袴　日光　御宮へ御名代被　仰付候節
　　　御袴御刀掛差上不申事
同　日　御服紗御半袴　當日爲御祝詞御登　城被遊候節
同　日　同　斷　若菜御祝被遊候節
八　日　御直垂　年頭に付御庭御堂　御宮殿幷　顯龍院様　憲章院様　御靈前且御忌
　　　　日幷正月に付　舜恭院様御靈前へ御參詣被遊候節
九　日　御服紗御半袴　寺社幷御用達町人共年頭之御禮表　出御之節
十　日　御直垂　東叡山大猷院様　御靈前へ御參詣被遊候節
　　　歸御之節　日光　御門主様被爲　成夫より御忌日に付　御庭御堂　南龍院様　御靈前へ御

參詣被遊候
十一日　御服紗御半袴　御具足御祝之節
十三日追て十五日に成　御服紗御半袴　御誕生日御祝之節
十四日　御半服　御當日御召
　御服紗御半袴　夕御祝之節
十五日　御半服　御當日御祝之節
　同　斷　當日爲御祝詞御登　城被遊候節
十七日　御清御直垂　紅葉山御宮へ　御豫參被遊候節
廿　日　御服紗御半袴　御召御具足御餝　御覽被遊候節
廿三日　御半服　於御小書院講釋初　御聽聞被遊候節
廿四日　御直垂　增上寺　台德院樣　御靈屋へ　御豫參被遊候節
歸御之節鐵蓮社　明信院樣　貞恭院樣　俊岳院樣　信恭院樣　御靈前へ年頭に付御參詣被
遊候
廿八日　御半服　式日に付被爲召候
晦　日　御服紗御半袴　東叡山　文恭院樣　御靈屋へ　御豫參被遊候節
　御服紗御半袴　日光　御名代歸被召出候節
御帶御刀懸差上不申御衣躰御清も無之候事

正月二日之内水仙梅壹臺　文恭院樣へ御備に相成候付御花筒御臺小買物方へ申付出來可申事
但御筒御臺共大さ麒麟木御筒寸法御同樣三月末に委細認有之候事

二月

朔日　御平服　式日に付

二日　御服紗御半袴　日光　御門主樣被爲　入御對顏之節

御手焙御蒋表御小道具方へ相渡可申事

御手焙大奥へ申込出候事

御平服　御前御會讀初且御前講之節

御服紗御半袴　除夜御祝之節

御休息へ梨子地御刀掛御贖板御蒋差上可申事

御豆包御疊紙六ッ出來差上可申事

正月

八日　御服紗御半服　舜恭院樣
貞恭院樣御證忌日に付御拜被遊候節

同日　御平服　温恭院樣
顯龍院樣御平月御拜

十日　同　憲章院樣
鶴樹院樣同斷
觀如院樣

十四日　同　智德院様同断

廿日　同　服德院様同断

廿二日　子年十二月より毎月御拝無之　同　愼德院様同断

廿三日　同　香嚴院様同断

廿四日　思召御拝也　御服紗御半袴　瑤林院様御證忌日に付御拝

同日　御服紗御半袴　新宮様御使僧へ御出會之節

同日　同断　久能山德音院戸隠山觀修院より之代僧御目見之節御鏡御平し之事

八日　御平服　温恭院様
舜恭院様御平月御拝　舜恭院様は思召御拝也
顯龍院様

十日　御服紗御半袴　觀如院様御証忌日に付　御靈前へ御參詣

同日　御平服　南龍院様
憲章院様御平月御拝且講釋御聽聞
鶴樹院様

十四日　御平服　智德院様御平月御拝

十七日　御清　御服紗御半袴　於御清之間御宮御遥拜

廿日　御服紗御半袴　最樹院様御証忌日に付御拝

同日　同断　照德院様御平月御拝

廿三日　御平服　香嚴院樣御平月御拜且講釋　御聽聞
廿四日　御服紗御半袴　東叡山　孝恭院樣　御靈屋へ　御參詣
廿五日　御服紗御半袴　御証忌日に付御庭御堂　菩提心院樣　御靈前へ御參詣
廿六日　同　斷　天眞院樣御証忌日に付御拜
廿八日　御平服　式日に付被爲　召候
御狩衣　初午に付御庭稻荷社へ御參詣被遊候節
御野羽織御裁付　右同斷に付鳳鳴閣被爲成候節
子供へ被下　赤飯四桶　密柑七箱　雜菓子金壹兩分御授物
右奥取扱に付御召方にて申付爲出候事

三　月

朔　日　御平服　式日に付被爲召候
三　日　御服紗御半袴　當日爲御祝詞御登　城
八　日　同斷　本性院樣御証忌日に付御拜
同　日　御平服　温恭院樣
舜恭院樣御平月御拜
顯龍院樣
十　日　御服紗御半袴　憲章院樣御証忌日に付御庭御堂御參詣
同　斷　御同所樣　御畫像御拜

同　日　御平服　南龍院様 鶴樹院様御平月御拜且講釋御聽聞 觀如院様

十四日　御平服　智德院様御平月御拜

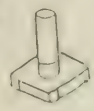
十五日　同　斷　當日爲御祝儀御登　城

十七日　御清御服紗御半袴　於御清之間　御宮御遙拜被遊候節

廿　日　御平服　昭德院様御平月御拜

廿三日　同　斷　香巖院様御平月御拜講釋御聽聞

廿八日　同　斷　式日に付被爲　召候

三月四月之内[illegible]木御花御備に相成候はゝ御備御臺左之通に買物方へ出來可申付事

臺木品杉
三寸八分四方
白木御居臺
高サ縁共
四寸七分

右之通[illegible]奉

四　月

朔　日　御平服　當日爲御祝詞御登　城

今日より夏分御[illegible]差上候　御駕へ御烟草盆差上可申候

四日　御服紗御半袴　倫宮樣御誕生に付被爲　召候
八日　御平服　温恭院樣
舜恭院樣
顯龍院樣　御平月御拜
十日　同　斷　南龍院樣
憲章院樣
鶴樹院樣
觀如院樣　御平月御拜且講釋御聽聞
十二日　御服紗御半袴　明信院樣御証忌日に付御拜
十四日　御平服　智德院樣御平月御拜
十五日　同　斷　當日爲御祝詞御登　城
十七日　御清御直垂　紅葉山　御宮へ御豫參
同日　御服紗御半袴　御祭禮に付被爲　召候
御豫參　御參詣等無之候はゝ御平服　弘化四未年九月十七日相極ろ
廿日　御服紗御半袴　東叡山　大猷院樣　御靈屋へ　御豫參
同日　御平服　昭德院樣御平月に付御拜
廿三日　御平服　香嚴院樣御平月御拜且講釋御聽聞
廿八日　同　斷　式日に付被爲　召候
晦日　御服紗御半袴　增上寺　有章院樣　御靈屋へ　御豫參

五　月

朔日　御平服　當日爲御祝詞御登　城
御紋御帷子御半袴　前同斷
今日より御團扇差上候事
御菖蒲御入湯之事　菖蒲大奥へ申込候事
七日　御平服　御武具方御預御道具　御覽之節
按に大阪落城日により武器御覽なり
御紋御帷子御半袴　資成院樣御証忌日に付御拜
八日　同斷　東叡山　嚴有院樣　御靈屋へ　御豫參
同日　同斷　顯龍院樣御証忌日ニ付御庭　御堂右御靈前幷日に付　南龍院樣御初御靈前方へ御參詣
同日　同斷　顯龍院樣　御壽像御拜
同日　御平服　溫恭院樣
舜恭院樣御平月御拜
十日　同斷　南龍院樣
憲章院樣
鶴樹院樣御平月御拜且講釋御聽聞
觀如院樣
十四日　御紋御帷子御半袴　御証忌日に付御庭御堂高林院樣御靈前御參詣
同日　御平服　智德院樣御平月御拜
十五日　同斷　當日爲御祝詞御登　城

十七日　御清御紋御帷子御半袴　紅葉山　御宮　御豫參
廿　日　御平服　昭德院樣御平月御拜
廿三日　御平服　香嚴院樣御拜且講釋御聽聞
廿四日　御紋御帷子御半袴　淨眼院樣御證忌日御拜
廿八日　御平服　式日に付被爲　召候
廿九日　御紋御帷子御半袴　本性院樣御證忌日御拜
同　斷　上使を以巢鷂御拜領被遊右上使へ御出會且爲御禮御登　城被遊候節

六　月

朔　日　御平服　當日爲御祝詞御登　城
同　日　御紋御帷子御半袴　氷餅御祝に付被爲　召候
二　日　同　斷　觀自在院樣御證忌日御庭御堂御參詣
八　日　御平服　混恭院樣　舜恭院樣御平月御拜　顯龍院樣
十　日　御平服　南龍院樣　憲章院樣　鶴樹院樣御平月御拜且講釋御聽聞　觀如院樣

十二日　御紋御帷子御半袴　増上寺　惇信院様　御靈屋へ　御豫參

十四日　同　斷　寶池院様御証忌日に付御拜

同　日　御平服　智德院様御平月御拜

十五日　同　斷　式日に付被爲　召候

同　日　同　斷　祭禮に付御祝之節

同　日　同　斷　氷川社/山王　祭禮に付北/巽御物見へ被爲成候節

十七日　御清御紋御帷子御半袴　於御清之間　御宮御遙拜

隔年山王は六月十四日

十八日　同　斷　一生院様御証忌日に付御拜

廿　日　同　斷　東叡山　有德院様　御靈屋へ　御豫參

同　日　御平服　昭德院様御平月御拜

廿三日　同　斷　香嚴院様御平月御拜且講釋御聽聞

廿五日　御紋御帷子御半袴　觀達院様御証忌日に付御拜

廿八日　御平服　式日に付被爲　召候

晦　日　同　斷　水無月祓御祝之節

御紋御帷子御半袴　暑中爲御尋女中　上使被進御出會被遊候節

土用丑之日御臍之緒御風入大奥へ可入事

七月

朔日　御平服　當日爲御祝詞御登　城

二日　御紋御帷子御半袴　大惠院樣御証忌に付御庭御堂御參詣

七日　同斷　當日爲御祝儀御登　城

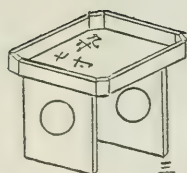
八日　御平服　温恭院樣
舜恭院樣
顯龍院樣御平月御拜

十日　同斷　南龍院樣
憲章院樣
鶴樹院樣
觀如院樣御平月御拜且講釋御聽聞

十一日　御紋御帷子御半袴　御生身玉御祝儀に付被爲　召候

十三日　同斷　盆に付夕御拜被遊候節

御備之御花三臺小買物方へ申付出來夕七ッ時迄に大奥へ入可申事午七月相極る

青竹
曲尺七寸廻り
高サ七寸
木ノ分六分
六分
切
五寸四方

高サ六寸八分
三分

御花筒青竹曲尺七寸廻り高さ七寸
臺木五寸四分厚六分
居臺九寸に七寸高さ六寸八分
格好都て前圖之通

十四日　御紋御帷子御半袴　盆に付御庭御堂　御宮殿　顯龍院樣　憲章院樣　御靈前へ御參詣
同　日　御平服　智德院樣御平月御拜
入御之節御長袴にて入御被遊候方大奧御都合御宜旨被申出候付　歸御之上一且御召替に相成候はゝ　入御之節御長袴差上可申事　万延元申七月十四日
十五日　御平服　式日に付被爲　召候
同　日　同　斷　當日御祝之節
同　日　御紋御帷子御半袴　盆に付夕御拜之節
十七日　御清同　斷　於御清之間御宮御遙拜
十九日　同　斷　明脫院樣御証忌日に付御拜
廿　日　御平服　昭德院樣御平月御拜
廿二日　御紋御帷子御半袴　增上寺愼德院樣御靈屋へ御豫參
廿三日　御平服　香嚴院樣御平月御拜且講釋御聽聞
廿八日　同　斷　式日に付被爲　召候

八　月

朔　日　御紋御帷子御半袴　當日爲御祝詞御登　城
八　日　同　斷　東叡山　温恭院樣御靈屋へ御豫參

同日　同断　清溪院様御証忌日に付御庭御堂御參詣

同日　御平服　舜恭院様
顯龍院様御平月に付御拜

十日　御紋御帷子御半袴　鶴樹院様御証忌日に付御參詣

同日　御平服　南龍院様
憲章院様
觀如院様御平月御拜且講釋御聽聞

十四日　御紋御帷子御半袴　智德院様御証忌日に付御參詣

十五日　御平服　當日爲御祝詞御登　城

同日夕　同断　御月見御祝之節

十七日　御清御紋御帷子御半袴　於御清之間御宮御遙拜

廿日　御紋御帷子御半袴　昭德院様御証月御參詣

廿一日　同断　養珠院様御証忌日御拜

廿三日　御平服　香嚴院様御平月御拜且講釋御聽聞

廿八日　同断　式日に付被爲　召候

御紋御帷子御半袴　上使を以雲雀御拜領被遊右　上使へ御出會且御禮御登　城被
遊候節

九月

朔日　御平服　式日に付被爲　召候

二日　同断　日次講釋御聽聞（按に月次講釋は十日廿三日也本條誤ならん）

八日　御服紗御半袴　東叡山俊明院様御靈屋へ御豫參

同日　同断　深覺院様御証忌日に付御庭御堂御參詣

同日　同断　俊明院様御畫像御拜

同日　御平服　温恭院様　舜恭院様　顯龍院様　御平月御拜

九日　御服紗御半袴　當日爲御祝詞御登　城

今日より冬分御褥幷　御駕へ御（案火）（一本行火）差上可申事

十日　御平服　南龍院様　憲章院様　鶴樹院様　觀如院様　御平月御拜且講釋御聽聞

十三日夕　同断　御月見御祝之節

十四日　同断　智徳院様御平月御拜

十五日　同断　當日爲御祝詞御登　城

十七日　（御清）御服紗御半袴　紅葉山御宮御豫參

御神事に付被爲　召候

御豫參御參詣無之候はゝ御平服　弘化四未年九月十七日相極

廿日　御平服　昭徳院様御平月御拜

廿三日　同　斷　　香嚴院樣御平月御拜且講釋御聽聞
廿八日　御平服　　式日に付被爲　召候
同　斷　　御茶口御覽之節　板御褥御刀掛差上可申事

十　月

朔　日　御平服　　當日爲御祝詞御登　城
二　日　御服紗御半袴　　俊岳院樣御証忌日に付御拜
七　日　同　斷　　源性院樣御証忌日御拜
八　日　御平服　　温恭院樣
舜恭院樣御平月御拜
顯龍院樣
十　日　同　斷　　南龍院樣
憲章院樣
鶴樹院樣御平月御拜且講釋御聽聞
觀如院樣
十四日　同　斷　　智德院樣御平月御拜
同　日　御服紗御半袴　　增上寺文昭院樣御靈屋へ御豫參
十五日　御平服　　當日爲御祝詞御登　城
十七日　御清御服紗御半袴　　於御清之間御宮御遥拜
廿　日　御平服　　昭德院樣御平月に付御拜

廿三日　御服紗御半袴　香嚴院樣御証忌日御庭御堂御參詣
廿五日　同　斷　妙操院樣御証忌日に付御拜
廿八日　御平服　式日に付被爲　召候
御紋兼房御小袖御紋付紫御下召御半袴　玄猪御祝且表出御之節
玄猪召御のしめ御長袴之御廉に候處安政三辰年三月二日　公邊御問合之上本文之通相成る
御炬燵明け之事

十一月

朔　日　御平服　當日爲御祝詞被爲　召候
八　日　同　斷　温恭院樣
舜恭院樣
顯龍院樣御平月御拜
十　日　同　斷　南龍院樣
憲章院樣
鶴樹院樣
觀如院樣御平月御拜且講釋御聽聞
十四日　同　斷　智德院樣御平月御拜
十五日　同　斷　當日爲御祝詞御登　城
十七日　御淸御服紗御半袴　於御淸之間御宮御遙拜
十八日　御狩衣　御庭秋葉社御參詣
同　日　御野羽織御裁付　鳳鳴閣へ被爲成候節　子供へ被下品二月初午之通

廿日　御平服　昭德院樣御平月御拜
廿三日　御服紗御半袴　榮恭院樣御証忌日御拜
同日　御平服　香嚴院樣御平月御拜講釋御聽聞
廿四日　同斷　大師講御粥御祝之節
廿八日　御平服　式日に付被爲　召候
同斷　冬至に付被爲　召候
百柚御入湯之事　但柚小買物方より爲出御釜にて焚出候事

十二月

朔日　御平服　當日爲御祝詞御登　城
八日　同斷　温恭院樣
舜恭院樣御平月御拜
顯龍院樣
十日　御服紗御半袴　歲暮に付御庭御堂
御平服　南龍院樣
憲章院樣
鶴樹院樣御平月御拜且講釋御聽聞
觀如院樣
十三日　御服紗御半袴　御煤納御祝儀之節
十四日　御平服　智德院樣御平月御拜
十五日　同斷　當日爲御祝詞御登　城

十七日 御清 御服紗御半袴 紅葉山御宮御豫參

廿日 御平服 昭德院樣御平月御拜

廿二日 同 斷 香嚴院樣御平月御拜

廿七日 御服紗御半袴 御搗揚御祝之節

廿八日 御平服 歳暮に付爲御祝儀御登 城

同日 御服紗御半袴 同斷爲御取替御祝儀

晦日 御服紗御半袴 御年越御祝に付被爲 召候

御服紗御半袴 兩御番頭之內御鷹之鶴御拜領被遊右 上使へ御出會且爲御禮
御登城被遊候節

同 斷 寒中爲御尋女中 上使被進御出會之節

同 斷 歳暮爲御祝儀 和宮樣 天璋院樣より御使を以御目錄之通被
進右御使へ御出會被遊候節

同 斷 兩御番頭之內を以八代蜜柑御拜領被遊右 上使へ御出會且爲
御禮御登 城被遊候節

同 斷 除夜御祝之節

御休息へ梨子地御刀掛御鬮取御籌差上可申事

御豆包 六ツ 御休息御座之間御小書院二ツ

信按に右は江戸御在府年中恒例の御服制にして此外幕府吉凶の典禮御社參御豫參は時々幕府の布達に隨ひ御着用又御一家に於ける吉凶大小の御禮服は御用人にて先規を調査制裁を仰くの例なり御在國にては月次御登　城御豫參の事は無論無之も幕府御家代々御証忌月日御寺方御參拜且時々社寺御參詣等（若山にては釋奠の節學校へ御參詣あり此時御服の事學制の部にあり）被爲在御召服亦本記に准せさせらる然れとも當公は御相續後文久三年三月始て御歸國時に攘夷鎖港の論激烈天下騷擾を極め續て征長等の事有て概ね京攝間に御滯在染み〳〵御在國の御暇あらせさりし故に御在國御召服の行事は未た制定に至らさりし也　御先代樣方御召服行事は傳はらされとも蓋し本記と大同小異なるへし

一從前御熨斗目に小絨（シジラ）を被爲召事あり御婚儀等には嘉珍無地熨斗目を被爲召

一御長袴御半袴は總して淺黃小紋麻御上下にして御長袴と云は裾を長く引きたるなり

一御服紗は黑御紋付御小袖に御上下御着用の事也

一御帷子は染麻御紋付也縮み御紋付は御城にて御老中着服有てより被爲召白衣は白無地御帷子なり

一御平服とは總て御肩衣御袴の事をいふ

平素御座之間にて午時迄は御肩衣御袴御着用御晝餐后御肩衣計被爲脫

一前記之外左之御服裝あり

御野服　御半着股引割御羽織　安政二、三年の比より割御羽織裁付を被爲召たり

郊外御通行又は御放鷹追鳥狩御鹿狩等に被爲召時として伊達御羽織を被爲召事あり

御旅服　黑ちりめん御紋付丸御羽織に織物御野袴

火事御裝束　羅紗御紋付割御羽織御胸當御踏込袴

御陣笠は黑塗裏金又は白たゝき裏金等を被爲用別に御制定なし或は御火事頭巾を被爲召也

一奥之番は御衣服を管理するか故に前記行事書により節々の御召服を奉呈す書中御清とは御神事に付御身體御清め服穢御改めを云ふ水仙梅麒麟木御備へは　文恭公より御拜領木ゆへ也菖蒲湯氷餅柚湯等は習俗に准し御祝ひ事あり其供給亦奥之番擔當なれは行事とし附記したるなり

一御召服は總て奥之番主管し御召方坊主之に屬し年中新裁之御服を調理す講入縫裁等は御納戸頭之を掌り仕立師御羽織屋六郎兵衛（駿河越舊家にて代々御納戸御用を勤む）日々御納戸局に出勤縫裁をなす總して御裝束御火事具抔の他は一二回御着用御褻衣類御足袋等は一同切にして毎年十一月に至り御側向一統へ一二点つゝ下賜品種點數等職々の差等皆例規あり一つに奥之番の主裁にして之を御捨り物頂戴と稱す奥之番の如きは係り員たるを以て一人一回の下賜品實に積て山をなす其多額想像の及ふへきに非す

御召服に關する公文

御召服に關する公令

寛政七卯年九月四日

一御法事之節　御參詣御召物之事

公儀御代々樣御參詣　御衣冠　百回御忌之節より御束帶

御家父樣
御廉中樣御參詣　御直垂　百回御忌之節より御衣冠

右之通向後御極置可被遊旨被　仰出候事

文政六未年二月廿七日
一上使御側衆を以御直衣御着用御冠も御召繁文御用被遊候樣御品は追て可被進旨公儀より被　仰出
　但御品は七月　宰相樣にも御同樣にて御直衣御拜領
文政十三寅年六月十八日
一前大納言樣舜恭公御事御老年に付御長袴被爲召候廉御國内限り御袷衣をも被爲召候事
天保八酉年十二月十六日
一御大禮に付御登　城之節退紅之者以來三人以上御召連之儀は御遠慮被遊候樣にと御老中より書付相渡
同十二丑年六月
一御家父樣方御年回に付御庭御堂へ御參詣之節五十回御忌迄は御直衣被爲召候御定に候處向後は御狩衣被爲召候段被　仰出
文久二戌年十月七日
一此度衣服御改革に付以來　尾水樣へ被爲成候節々年頭之外御慶事等を初都て御平服にて被爲成候筈之事
同年十月十五日
一御召之端反笠　思召を以御拜領御平日御用被遊候樣　公儀より被　仰出
明治三午七月十五日　家令所令
一今度官人衣服之制度出候付　正三位樣今日より御參詣等幷御役宅にて御式事等にて是迄御半袴被爲　召候御廉は御袷衣御立烏帽子上け御平服之御廉は御袷衣被爲　召御烏帽子は上け不申筈
　本文之通候得共御內々にては是迄御平服之御廉は矢張是迄之御平服にて爲御濟被遊候事
一是迄　御社參且御參詣等御衣冠御垂直御狩衣等之御廉は其節申見候筈

明治三午年七月十五日　同上

一今日御祝之節御平服と有之處大奥にての御祝にも有之旁々是迄之御平服被爲召候事　御羽織御袴也

明治三午年十一月朔日　同

一左之通納戶方より談出候付奉伺相濟其段及挨拶候事

一御上下被爲　召候御廉は御袷衣御烏帽子可被爲　召哉

一御肩衣被爲　召候御廉は御袷衣可被爲　召候哉

一御火事羽織幷御そぎ袖だん袋　御裁付御陣股引被爲　召候御廉は此度御改正之御戎服可被爲
召哉

一御馬乘袴御野袴御小袴爲　召候御廉は御襠高袴可被爲　召哉

右之通御召服御改正被遊候はゞ左之品々向後御廢可被爲遊候哉

一御上下　一御肩衣　一御小袴
一御野袴　一御裁付　一御火事羽織
一御陣股引　一御平袴　一御馬乘袴
一御そぎ袖だんぶくろ

明治四未年八月十三日　家令所制

一御式事且　御參詣之節御召服之儀是迄御廉々御衣冠初種々被爲　召候得共以來左之通被爲　召候
等相極之

御衣冠　御直垂　御半袴　御鎧直垂共

御狩衣之儀は先つは御召之儀無之事

南紀德川史卷之百四十八

臣　堀内信編

服制第二

御家中服制

按に御家中初市在服制之事歴世之記備はらす僅かに國祖之御時及享保度の發令を存せり寛政以降は粗蒐集を得と雖も官簿逸失の殘餘乃至私乘中よりの拾收に係れは遺漏免かれかたきは無論なり享保令を察するに頗る驕奢を抑制せられたる觀あれ共國初之制と敢て大差を見さる如し爾后安永天明頃迄は尙古制に隨順所謂田舍侍風を固守しつゝありしならん寛政に至ては世の益饒季と共に驕奢風をなし且總して　幕府に模倣せられしを以服飾躰裁亦江戸風を競ひ大に昔日之面(目)を改む故に服制之事頻々煩文を來せり爰に明治維新後に至る迄服制に關する令文を列記し服制沿革之概畧を示す

寛永十二年令

覺

一衣類之事白綾白小袖むらさきあわせむらさきうらねり無紋此等之類着用申間敷候事

一家宅營作可隨其分限事

一乘物之事年五十以上之人は御目付衆へ相斷のるべし御免之人は醫者病人は不苦みだりの輩是又可

御家中服制

寛永寛文・間衣服之令

爲過料事

今度　公儀より被　仰付候御法度之内御家中相應之次第申付候へき之由　御意に付右之趣有增書付進候御家中へ急度可被　仰渡候

八月廿七日

安藤飛驒守

水野淡路守

「今度　公儀より被仰付とは寛永十二年六月廿一日武家諸法度の發令を云也安藤飛驒守は寛永十三子年九月卒す故に其前年たるを知るへし家老衆輿の事一紙連記なるを以て其儘揭く」

寛永十八年令

下々衣類之御定

一御弓御鉄炮之者家中之歩若黨の衣類ひの紬木綿紙子可着也但他國にては有合之衣類たるへし小者中間は布木綿紙子可着之也若相背之輩有之は衣類をはき取へし其上主人より爲過料銀壹枚可出之事

一町人衣類年寄頭立候者は着候はて不叶時は　御公儀御定の通さやちりめん平絹はふたへ常は絹紬可着用なみの町人は絹紬着用可仕事

一町人召仕候者紬布木綿帶同前之事

巳六月

「原書年号を欠記と雖も御弓御鉄炮之者云々は寛永十八巳年二月十三日法令四十一條の内第三十六條と同文言なれは巳六月とは即ち寛永十八年の六月なるを知るへし下々の服制を示する爲め三十六條へ町人の服制を加へ更に布告のものと察す」

御領分百姓共へ可申付覺

一大庄屋着類之儀絹紬は不苦候　附女房可爲同前事

一小百姓之分は木綿布かみこの外不可着事　附女房可爲同前事

一大庄屋總百姓之女房娘娵之帶はさやちりめんはふたへくるしからす候巻物之類ぬいはくの帶堅く可爲無用事

右之外何にても爲奢儀仕候は可爲曲事者也

寛永十八巳五月廿六日

後藤彌二兵衞

海野兵左衞門

「按に後藤彌二兵衞海野兵左衞門共に此時御勘定奉行なり前四十二條の法令に基き百姓共の服制を在中へ布告したるなり次記兩件も引續き細目を示したるものと察せらる」

一もめんかつはにびろうとのゑり無用の事

一びらうどの袖つき無用の事

一びらうどどんすあやにしき無用の事

「一本に一びろうどの脚半無用の事との條あり」

右之條々江戸御法度に御座候同心若黨下々迄急度可被仰付候以上

公儀御定之覺

一庄屋は絹紬女房共に帶同前

一小百姓は布木綿女房共に帶同前
如此御領分へ彌堅可有御申付候將又庄屋の娘たりとも小百姓の女房に成候はおつと同前にて可有
候間左樣御心得御申付可有候
一町人りんす卷物之類御法度但さや平島ちりめんはふたへは不苦
如此御定にて候へ共町人の內にても年寄頭立候者は此通なみの町人は絹紬可然候年寄之者も常は
きぬつむきにて可然何とも着候はて不叶時御定之通尤に候兎角結構に無之樣に御相談候て御申付
可有候
一町人召遣之者は絹紬木綿布同斷
如此御定にて候へ共町人召遣候者は布木綿にて可然候加樣の段は　公儀の御定より御領分なとに
て彌うち(本のまゝ)(ば)に物こと輕く有之樣にと思召候左樣御心得可有候

御家中衣服
定

一衣類之儀はひのきぬの類紬もめんかみこ帷子は地布袴も木綿地ぬのつねに可着事けんふ之類不可
着候羽織は有合くるしからす但毛織の羽織は不可着古きけんふたり共下着にも可爲無用但いかに
も古きはくるしかるましき事
一於江戸も紬或はふるきけんふなりとも着用仕不苦樣子候事
一勅使院使上使之時はついの上下可着事

一攝家衆宮御門跡衆御越之時は御供番以上對之上下其外は布木綿袴之上にかたきぬ可着事幷公家門跡大名衆御旗下衆御越之時は番頭奏者番御小姓衆大小姓衆對之上下但其客により御供番以上かみ下其外も御横目衆指圖次第に可仕事

一十七日御社參廿日廿一日廿四日御佛參之時は御近習衆役人瑞籬之內へ入候者は對之上下其外は常之あらい衣服之類にても常之袴肩衣可着事

一元日對之上下二日より御禮衆任之時は役人對之上下尤長袴其外は十五日迄常之布木綿袴の上に肩衣可着事

一五節句はぬの木綿袴之上に肩衣可着七夕八朔と云共有合の帷子也さらしは不可着候總て對之上下着用之時は衣服をも江戸にて之上着之類可着事

右之旨於違犯は過錢銀壹枚可出者也

右之御法度九月朔日より急度御定

一按に本記は往昔の御家中衣服定也原書年号欠記文中の廿日は　大猷公廿一日は養珠尼公廿四日は　台德公御忌日にして　大猷公は慶安四年四月廿日薨去　台德公養珠尼公は其以前の薨去なれは此法令發布は慶安四年以降寛文初迄の間にありしならん一

御家中衆召仕の女しんめうより上迄の衣類

一羽二重平縞絹の類可着但縫はく鹿の子は無用の事併少のかのこは不苦

一帶今織無地の帶織帶染帶少のかの子入迄は不苦　但縫はく總かのこ繻子しゆちん緞子の類は無用の事

一帷子地へに桔梗染縫はく無用鹿子は右同断

中　居

一木綿着物但祝言の時或は主人よりもらひ候分紬にても不苦

一帷子は地布はつかう帯はさや縮緬絹の類は何にても染帯不苦勿論木綿織之類不苦但ゆひ鹿子金入は何にても無用の事

下　女

一木綿着物地布帯絹之類不苦

一町人着類年寄頭立候ものは着し候はて不叶時は　公儀御定の通平縞羽二重常は絹紬可着用並の町人は絹紬を着用可仕事羅紗の類無用

一町人召仕之下人布木綿帯同前の事

一町人手代絹紬可着事

一町人女房衣類絹羽二重可着縫はく鹿子緞子金入の類小袖不可着襟帯同前の事

一町人召仕の針めうは衣類平縞絹の類迄は可着事

一町人下女の衣類木綿着物帷子は地布帯は絹之類不苦事

一庄屋は絹紬女房共に帯同前

一小百姓は布木綿女房共に帯同前庄屋の娘たりといふとも小百姓の女房に成候はゝ右同前の事

一百姓男女紫紅に不可染此外の諸色かたなしに染可申事

当年之御定　戌の年より用之

一毛織の羽織合羽自今以後不可着用其外の衣類於御國は先年の御定の通たるへし同心は木綿晴之時は御仕着せの羽織可着用次又若輩自今以後紬木綿の外不可着用但羽織は絹にても不苦事

一御家中諸士召仕の小姓衣類の儀絹紬布木綿の外着申間敷候羽織袴等も右之通最結構成縮帷子是又爲着申間敷候

一御先乘足輕御薬込御手弓御手筒幷諸手代總同心並に木綿着申候筈に御座候

「以上皆　國祖の御時の發令にして御藏書類集の內定法書及ひ監察府記錄に因て抄出す原書互に遺漏錯簡あり校訂補述す」

享保七年
衣服節儉

享保七寅年

御家中衣服節儉之令

此時衣食住節儉の令あり內服制に係る分を抄出す

諸士衣服御國にては重役たり共紬もめんの外着被致間敷候其外はもめんを着用可被致事

但上下をも着候節は重役は羽二重絹不苦候其外は絹紬より上のものは着被致間敷候勿論御紋付に候共右の外は不罷成候

一羽織は絹紬もめん着可被致候重役は羽二重にても不苦候右羽織之裏は茶丸類無用絹類無用絹類を(紬脱カ)可被用候勿論御紋付に候共右之外は不罷成候事

一袴さんとめ此外毛綿之類着可被致候裏之品羽織之裏同斷

一帶襟袖口頭巾幷雨羽織紙子之裝束等卷物之類無用に可被致事
一帷子は半さらし縞類越後ちゞみにても麁相成を着可被致候上下をも着候節はさらし紋付不苦候事
　但火事羽織は唯今之通
一夏袴は高宮縞より上之物無用に可被致事
一諸士之妻娘姉妹等之衣類居宅にては毛綿着致他出之節は羽二重絹迄着爲致可申候重役之妻娘等は御紋付に候はゝ綸子迄は不苦候其外は御紋付に候はゝさあやちりめん迄は不苦候縫はく有之卷物類は無用に可致候此節持合候はゝ下着には不苦候帷子も隨分麁相成を着可致事
一唯今迄御扶持人之妻子等猥に御紋付之衣類着用候樣に相見候此段不心得之儀に候付自今は御紋付衣類着し候格之者之妻娘姉妹の外は一切可爲無用事
一此度極り候衣服之品は來卯四月朔日より役人改申筈
一在江戸之面々衣服之品は是迄之通に可被相心得候妻娘等御紋付衣類着用之譯若山に准し候儀は堅可被相守事
　但勢州上方役人と在江戸之面々同斷
　御國にて諸士召仕之者之衣服定
一中小姓より上之者年頭五節句幷押立候祝儀之使婚禮之輿之節は絹紬さらし帷子迄は不苦其外常々はもめんはつかりの頭着爲致可被申候羽織袴等ももめん類たるへし尤右裏幷帶襟頭巾袖口絹より上不罷成候事

一若黨の衣類もめん高宮羽織袴毛綿類可着帶襟頭巾袖口とも紬より上不相成候事
一小者衣類万々毛綿地布を可用事
一小者頭巾もめんの外一切不罷成候且又雪踏幷ふくろ足袋はき申間敷事
一總て男奉公人衣類定之外はたとひ主人より貰合有之候衣類にても着用不罷成候事
一しんめうより上は女絹紬より上之衣類着せ被申間敷候形ちらしは勿論紋所たりとも縫はく幷鹿子は一切不罷成候事
帶絹紬より上之物無用尤無地を可用形ちらしは不罷成候
一襟幷帽子ふくめん袖へり等も右同斷
一帷子ゆかた染に候はゝさらしにても不苦茶屋染は不罷成候
但地べに地桔梗黑べに縫はく明石ちゝみ絹ちゝみ等不罷成候
一增し帶之儀紬丸くけに候はゝ絹紬不苦候丸くけに不致候はゝ毛綿鹿の外不罷成候
右增し帶いつれに致し候てもべに紫にそめ申間敷候
一中居女下女衣類毛綿地布はつかうを可用帶襟等も毛綿の外不相成候帽子ふくめん絹紬不罷成候增帶もめん布之外無用尤べに紫に染申間敷候事
一總て召仕女帶之たけ八尺より上不罷成候事
一總て女衣類等主人より遣候とても右定め之外之物は着用不罷成候事
一中居女下女近年は絹紬類を下着に仕樣子に候自今堅不罷成候事

一御徒並以下之者妻娘も此度改候しんめう女衣服同斷
一御中間躰之者妻娘衣服此度改り候中居女同斷
　以上享保令
寛政二戌九月廿四日
一於江戸御役替等幷養子緣組願濟之儀頭支配申渡之節自今一統麻上下着用致罷出候樣被取計候筈
　但麻上下着用不相成輕き者は是迄之通り之筈
右麻上下着用之儀申渡等に付呼出之節麻上下着致罷出候樣其節々相通候筈に付此節分て支配之面々へ相通し候品には無之事
同三亥年十二月十八日
御徒目付
　御用之品に寄是迄肩衣着相勤候へ共自今役儀に付肩衣御免之筈
　御供幷夜廻り之節は役目羽織着之筈
同年六月廿六日
一江戸表に於ては御徒並以上のしめ着致格役の者は七夕八朔白帷子着用勝手次第且右之外平日他所へ御用出之節肩衣をも着用不苦事
同年七月廿八日
一御勘定人於江戸は御徒並以上之通着服不苦事

同四子年十二月十日
一若山表にても御徒並以上向後のしめ幷白衣着致候儀勝手次第之筈
寛政六寅年六月九日被　仰出
一召狀にて罷出候節幷都て被　仰渡候事奉り候節御紋服着用不相成候事
同十午年正月十日
一御召御紋着用之儀は當人は勿論親祖父之內拜領有之候得は着用不苦若三代之內拜領無之候へは着用無用之筈先年被仰出有之何れも畏り居候事に候へ共　御側向は別て不相紛樣新番中へ可申合事
一御召御紋拜領仕候者は小十人頭以上之通御側向も　御召御紋時服御紋と重着用之儀は不苦事
　但外出之節一僕なとにて着用は先無用可致事
寛政十一未年正月廿八日被　仰出
一殿中衣服之儀五節句八朔は御夜詰迄半袴着尤長袴着之向も御禮濟後は半袴着之事
　其儘長袴にて罷在候儀勝手次第之事
同年五月廿三日
一御紋附時服之上へ御紋附上下着用之儀奧役は不苦右之外は不相成候事
一御召御紋附衣服之上へ御紋附上下着之儀は不相成候事
一御醫師は御紋附時服之上へ御紋附羽織着致し不苦候事
一御同朋は御紋附時服之上へ御紋附上下着不苦候事

同年五月廿九日被　仰出

一御召御紋附衣類拜領いたし候得は孫之代迄は着用不苦候尤御上下致拜領候へは小袖等へ附候ても不苦御小袖拜領いたし候へは上下肩衣へ附候ても不苦事

寛政十一未年十一月八日被　仰出

一初て　御目見之節衣服之儀是迄服紗半袴にて有之候處向後は布衣以上之惣領熨斗目長袴右以下頭役以上之惣領幷平士之惣領のしめ半袴着用候事

同十二申年六月十九日被　仰出

一召狀にて罷出候節幷都て被　仰渡事奉り候節御紋附衣服着用不相成等先達て相達候事候猶又細雜之儀は左之通相心得候樣都て召狀にて罷出候節は勿論其外頭支配之申渡奉り候節も自分に付候品にて廉上下着罷出候節幷組支配之儀に付被　仰渡奉り候節は着用不罷成候

縮帷子夏冬共足袋下物等不相用筈

一年頭五節句朔望廿八日御目見御歡事其外一同之頂戴物之節は着用不苦候事

縮帷子夏冬共足袋下物等相用不苦事

一文化三寅年九月御家中浮置歩增被　仰出候節衣服儉約之儀左之通被　仰出御家中幷在町衣服之品幷儉約之儀等享保年中別帳之通被　仰出有之候處近年相緩候ヶ條多有之に付此度別帳へ相添候ヶ條相改被　仰出候間別帳の趣幷新規之ヶ條共向後嚴敷相守可申事

別帳に添候ヶ條

文化三年
衣服省略

江戸衣服之儀も平日は勿論御客等之節にても先方家來等へ應對無之向は　御目見以上たり共絹紬半晒之類着候ても不苦候客衆見通し之所にても御番方應對無之向は勿論同樣たるへく候服紗半袴之節も同樣に候事

一縫はく有之卷物類持合候はゝ下着には不苦旨被　仰出有之候得共縫はく卷物類は持合候とも堅不相成候事

一女帶之儀も衣服に准し麁相成を相用ひ結構成織物ひろうと或は金入之類は堅不相成事

　但衣服之儀は來年頭より役人相改させ候事

一都て女之髮飾に至候迄も近年は別て流行之姿に馴縮緬絹わけくゝり等相用ひ候儀に候得共右等は屹度不相成候猶又金銀幷へつかうたいまい櫛笄差候儀不相成筈享保年中御定之通に候諸士妻娘等銀かんさし一本は不苦召仕女は銀四分一なとにて銀色に似寄候品も不相成候しんちうなとの製は不苦候

「享保度被　仰出は前に記載之如くなれは畧す且原文都て之節儉ヶ條あり衣服に係る條のみ爰に抄出す」

文化四卯五月　於江戸

一御家中儉約之儀享保年中被　仰出之通可相守旨去年九月於和歌山被　仰出江戸表之儀も右に准取締方第一に相心得候樣衣服之儀に付ても其節相達候通に候へ共猶又左之趣被　仰出候

御目見以上以下奥表共都て平日は絹紬之類夏は半さらし麁相成嶋縮袴は棧留嶋糸入嶋夏は葛布

之類より川越平等相用右餘之衣服を限と存候程に平日は相心得其外勝手次等麁品を相用ひ總て結構成品無用たるへき事

件之通に付　御目見已上綿服にても勿論勝手次第たるへき事

一御晴ヶ間敷御客幷御供御使或は私用にても他所へ向晴ヶ間敷節は持合候時服或は卷物類にても面々心得を以相用平常御客之節は決て取繕に不及御番方は勿論に候事

一御醫師幷隱居之面々且八十歲以上十五歲以下之面々は制外に候然共一躰浮華之風を被指止候事に付持合は格別新調之品は外々に准し斟酌可有之事に候

一家內およひ召仕男女之儀も勿論質素之風に相成候樣勘弁可有之候尤家內之者持合は格別新調之節は隨分麁相成を相用召仕之もの看板等に至候ては見分に無構成たけ有合を可被用事

右之條々堅可被相守候尤平日之衣服急速に相改候儀は都て難澁之筋も可有之に付來辰十二月迄は持合之品勝手次第相用來々巳正月より屹度可被相改候若年之輩なとは他見を耻候心も可有之哉に候へ共近來別て浮華の風に馴來り專外見而已飾武備等之心掛薄畢竟本末取失候事に候間此旨頭支配幷親兄より得と致教諭永々質素之風儀不取失其餘儉約之義も追々被　仰出之趣を以厚心掛候樣可被致候

按に右文化三年御家中衣服節儉之事發令隨て殿中服制省畧の規定を建られたるならん如何んとなれは下記文化十四年六月の衣服定に寅年以前に復舊云々の文あれは也然れとも該定書其他更に存するものなし唯文化十酉年十二月御目付方答之衣服定といふあり頗る漠然不了と雖も參考

に附記す

衣　服　定　文化十酉年十二月御目付方問合

一年頭三ヶ日幷年頭に付和歌へ拜に罷出候節計のしめ着用其餘三ヶ日後は御年寄衆宅へ罷出候節こ
ても服紗半袴

但御法會に付自拜に罷出候節はのしめ着用之事

一正月四日より七日迄麻上下着之事

一五節句八朔布衣以上之面々長袴着之事に候得共半袴着之筈且若菜上巳服紗着用之事

一御着城御發駕之節　殿中幷御途中へ罷出候者暫服紗半袴着用之事

一右之外御用捨被遊左之通相成候筈

正月十一日　御祝儀有之御用掛之外服紗麻上下

十四日　十五日　廿八日　平服

四月朔日　仝

端午七夕八朔重陽　是迄之通

但前段之通布衣以上も半袴

四月　九月　十七日　服紗

和歌へ相詰候はゝ衣服是迄之通

御誕生日　半袴

文化間衣服之令

但冬は服紗

一自今頂戴物之節當番衣服頂戴に罷出候輩之通着致候事

文化六巳年十一月五日被　仰出

一縮熨斗目の儀向後致拜領候者は孫之代迄着用不苦候其餘は勿論着用不相成候事

但御供には着用不相成其外他向へも着用無用之方に候事

文化八未年四月十日被　仰出

一御野服にて　出御之節御供着用致候半着野羽織之儀時候により三月半比より且九月中も麻半着麻

野羽織勝手次第着用不苦候事

文化九申年八月　頭役以上肩衣着右以上之節着用致候はゝ其段相達候上着用之事

文化十酉年正月廿九日被　仰出

一大縮熨斗目は　御城御先番御供　公邊に掛り候御給仕等には着用不相成候御緣家樣御先番御供

尾水樣御初御內輪之御給仕等に着用不苦候

小縮熨斗目之儀は　御召御紋にて候間御城御先番御供上使其外御給仕之節にても御召御紋御小袖

に准着用之儀不苦候

一時服並熨斗目御召御紋上下並御紋着にて　御城へ御供御先番等に參候儀不苦候間折々右之通着用

仕候樣との事就ては御小姓御小納戸は着用不苦候事

文化十酉年五月廿日被　仰出

一御用召之節平日は半袴着之事候へ共向後江紀共殿中差定り候熨斗目着之節幷御祝儀事等にて殿中熨斗目着之節は都て殿中之着服にて罷出候筈候事

但御祝儀事等にて奥表衣服違候儀有之候付奥計のしめ着之節は奥向之輩其儘其日之着服にて罷出候事

文化十二亥年七月五日被　仰出

一初て　御目見之節江紀往來又は出在等にて着發　御目見其外身分に付候御禮事之節向後御紋服着致し候ても不苦候事

同十三子年七月十六日被　仰出

一御紋附衣服着用之儀は御定有之獨禮以上之向ならては着用不相成候處向後御目見以上着用　御免可被遊旨被　仰出候事

但此度獨禮以下之向御紋附着用御免被　仰出候得共御門外無僕にて着用致候儀は不致候樣　御召御紋附衣服之儀は先達て相極有之通り可相心得事

文化十三子年十月十七日被　仰出

一表向御番方之面々幷其外式日月番年寄衆御退出有之候得は平服に相成候樣との儀先達(欠落)有之候へ共月番年寄衆御退出に不拘九半時打候はゝ御番引候事

同十四丑年六月

一殿中衣服復舊

衣服定文化十四年復舊

文化三寅年九月御家中節儉被仰出衣服省略の處寅年以前に復舊左の通被定記類欠逸詳ならされ共浮置歩増既に十年を過き且去年六月　式部卿様（顯龍公也）御聟養子被　仰出御引移も被爲在等によるもの歟

衣服定

正月元日
諸大夫大紋御禮之向一統長袴當番之向半袴

同　二日
年寄共初重役御用人幷御規式掛之向元日之通
大殿様方虎之間以上長袴年寄共初重役嫡子布衣以上惣領長袴右以下御禮之面々幷當番之向半袴

同　三日
年寄共初重役御用人幷御規式掛之向元日之通御禮之面々當番之向半袴同夜御謡初に付頭役以上幷御規式掛之向長袴

同　四日　のしめ半袴

同　五日　同　斷

同　六日　寺社御禮に付元日之通

同　七日　のしめ半袴

同十一日　　同　斷
同十四日　　同　斷
同十五日　　寺社御禮に付元日之通
同廿八日　　のしめ半袴
四月朔日　　同　斷
同十七日　　同　斷
　御祭禮に付　御假屋へ相詰候布衣以上長袴豫參之面々布衣
九月十七日　　同　斷
三月三日　　布衣以上長袴右以下のしめ半袴
五月五日　　布衣以上染帷子長袴右以下半袴
七月七日　　同　斷
八月朔日　　布衣以上白帷子長袴右以下白帷子半袴御目見以下にてものしめ着之分白帷子着用
九月九日　　布衣以上服紗長袴以下服紗半袴
嘉　祥　　布衣以上長袴
御誕生日　　のしめ半袴
玄　猪　　布衣以上長袴右以下のしめ半袴御給仕之輩も長袴
御煤拂　　服紗半袴

歳暮御取持　奥向のしめ半袴
除　夜　のしめ半袴
十二月廿八日　同　断
朔望廿八日　服紗半袴
御宮御靈屋御靈前方御牌前方　奥向のしめ
其外都て御參詣之節
但中奥表諸役所勤之面々平服表役にても　御目通罷出候御目付一岡御門へ罷出候御先手物頭
岡中御門へ罷出候御留守居番頭御玄關前へ罷出候御徒目付のしめ
一御城より御裝束にて　御參詣之節御玄關より出御の儀にて當番之御供番人御番御徒のしめ半
袴着用

御供衣服

一御規式壹貳之御行列共寅年御用捨以前へ復可申事
一地之御行列にて御藥種畑等へ被爲成候節式日一統麻上下平日は繼上下御徒御手弓筒之者共役羽
織
一坊主年頭三ヶ日十德五節句勝手次第
一御先詰豫參之面々其外衣服之儀も以前へ復左之通之筈候事
御裝束にて　御參詣之節御先立御先詰御年寄諸大夫は　上之御裝束に隨ひ其外豫參之面々且寺

社奉行布衣着之事
但御先詰御側御用人幷御用人のしめ牛袴着之事
一御長袴にて　御參詣之節御年寄は都て長袴其外一統のしめ牛袴着之事
一御宮へ　御參詣之節御獻備之御太刀馬代取扱御裝束之節は御年寄は其日之裝束にて御納戸頭布衣御長袴之節御年寄幷御納戸頭長袴着之事
附添御納戸のしめ牛袴着之事
一御宮へ　御參詣之節御先詰新御番頭御使番新御番組頭新御番熨斗目牛袴着之事
御裝束之節は御使番計布衣着之事
一御法事之節自拜罷出候面々布衣以上は長袴右以下のしめ牛袴着之事
一御着城御發駕之節　殿中幷御途中へ罷出候面々衣服寅年以前へ復のしめ牛袴着之事
一學校釋奠之節同所衣服

學校詰
御側御用人
大目付
御勘定奉行　長袴
御用人
御目付　のしめ牛袴

一御供番頭以上熨斗目長袴
一御目見以上一統のしめ半袴以下にても御用掛衣服同斷
一學校附坊主十德弁同所へ相詰候坊主十德着之事
「記中一岡とは市の橋御門岡口御門の略語なり朔望は朔十五日とす」

一殿中衣服定
此服制はいつ頃の制定なるや年月不明と雖も安政元寅年同二卯年衣服省略迄江紀共總して此制によりし也蓋し文化の制を布演したるものゝ如し

衣服定

一正月元日
諸大夫　大紋
布衣以上　長袴
右以下のしめ半袴

一同　二日
御目見以上のしめ半袴
諸大夫　大紋
列居之面々長袴
御規式掛りのしめ長袴
同斷半袴

一同　三日
熨斗目長袴

御謡初に付ても同斷
但江戸表にても於御書院御謡初之御規式有之御流頂戴
等有之節は頂戴之面々御給仕等長袴

一同　四日　一統のしめ半袴

一同　五日　同斷

一同　六日　同斷

一同　七日　同斷
若菜御祝儀に付ても衣服無差別

一同　九日　寺院御禮に付御席へ罷出候輩のしめ長袴
御禮過平服

一同十一日　のしめ半袴
年寄衆退出後平服御留守年同斷

一同十四日　同斷

一同十五日　同斷

一正月廿三日講釋初　一統服紗半袴
二月に相成候へは年寄衆御側御用人平服其外御役人向聴衆之面々服紗三月に相成候へは一等平服之極に候事

一同廿八日　熨斗目半袴
一上巳　布衣以上のしめ長袴
一端午　染帷子長袴
一七夕　白帷子長袴
一重陽　服紗長袴
一八朔　白帷子長袴
一朔望廿八日　一統服紗半袴年寄衆退出後平服
一四月朔日　袷のしめ半袴
一同十七日　熨斗目半袴
一四月十七日　御豫參御參詣濟　歸御之上平服　御留守年は平服
九月十七日
和歌御祭禮濟御左右相達候節諷衣服服紗
御神事濟も同斷
一嘉祥　布衣以上染帷子長袴
右以下染帷子半袴
御祝濟平服
一玄猪　布衣以上并御祝掛りのしめ長袴
右以下半袴

一御煤拂　　日之内平服
除　夜　　一等服紗麻上下
殿中のしめ半袴
日之内平服
一十二月廿八日　　のしめ半袴
一御豫參
御參詣の節　　歸御迄のしめ半袴
一上使等にて不時
御登城の節　　歸御迄
御前へ罷出候輩幷遠侍向麻上下
歸御迄
一不時御登城之節　　奥向御役人幷御側向奥役麻上下
一都て御拜領之品　　御拜領之鶴杯御披之上年寄衆初
御披　御頂戴之節　　頂戴被仰付之節のしめ半袴
一女中上使被進候節　　奥向御廣敷向麻上下
一御堂御參詣之節　　奥向熨斗目半袴
一御着座
御發駕　　一統熨斗目半袴
御着座之節は御歡等申上等相濟候はゝ年寄衆退出後平服遠侍向終日のしめ半袴御發駕之節御
客衆退出之後年寄衆退出に不拘平服遠侍向終日のしめ半袴
一御國許へ之御暇被仰出御登城之節　　一統のしめ半袴
御參府御登城之節

一御誕生日　　一統のしめ染帷子半袴
　　　　　　　御留守年は平服

天保弘化間衣服之令

天保二卯年七月御目見以上之面々長袴着用之儀私用にても勝手次第の事

同十亥年十一月廿七日

一家督初て之御目見其外身分に附候御禮事等之節　御召御紋服着用之儀不苦候事

年月日不詳

一布衣以上惣領長袴着　御免之事

弘化四未年九月

一四月九月十七日殿中一同熨斗目着用之儀以來　御豫參御參詣等無之候はゝ殿中平服之筈

安政間衣服省畧

安政元寅年八月五日布達

一御家中之面々常服被　仰出式日は繼上下着平日は袴羽織着

　但御目見已上は打裂羽織右已下丸羽織三人扶持以上紋付右已下無紋冬木綿夏麻

一按に從來之制出殿之面々御目見以上以下何にても肩衣御免之向はいつれも平日たり共繼上下着式日は麻上下着之處以來御家老初平日は羽織袴に改正ありし也

安政二卯年十一月廿五日　於江戸

一御家中衣服省略左之通御家老より布告す

御家中衣服之儀去年御用捨被仰出有之候處今度於　公邊衣食住を初諸事省略之儀別紙之通被仰

出候間年頭を初右に准し相用可申候尤　御手前にても追々簡易之御制度に被爲復候御趣意に付銘々諸事格外に可致儉約候此度於若山も常服格別に御改之儀被仰出候處此表之儀は若山通りにも御改難被遊候得共節儉を相守候儀は此表迚も同樣之事に付彌質素之風俗に相成是迄之衣類よりは格段際立候樣麁品を相用ひ武備之儀は別て厚心掛候樣可致事

一熨斗目幷白帷子は先年之通御目見以上之外自今着用不相成事

右一通

一先達て嚴敷御取締被仰出追々御締方之規矩も相立可申折柄此度之地震に付ては又候莫大之御出方量入爲出之見當も難相立候付猶又　御代々樣之御內格別御質素御簡易之御風に御復し嚴敷格外之御取締被仰付此上御家政向は勿論御供連之儀迄も萬端是迄之半减位にも可被遊既に先年香嚴院樣には御乘切にて澁谷御屋敷等へ被爲成候御振合も有之候付右等御格合に御復し之儀も可有之との趣　公邊へ御內達相濟候付其段相心得彌以銘々無油斷厚致勘弁聊たり共心附候品は其邊に打過不申早速我々共へ申談候樣可被致事

件之趣下役共へも厚相心得させ可被申事

公儀被仰出面　但十月十六日

今度諸事簡易之御制度に被爲復候御旨も有之殊に此度地震に付ては諸向一同難澁に及ひ武備其外容易に舊復も難相成候に付銘々衣食住を始諸事格外に省略可致候就ては殿中を始着服之儀當分左之通可相心得候

一熨斗目は正月御規式十五日迄且　御宮　御靈屋へ　御參詣之節計相用尤無地にても腰明にても勝手次第可致着用候其外は都て服紗小袖服紗袷可致着用候

但是迄熨斗目長袴之廉も熨斗目不相用共勿論長上下も着用に不及候

一勅使參向等之節は是迄之通其外重き御祝儀事等格別之儀に付ては時々可相達候

一万石以上以下家督初て　御目見其外御禮之節着服之儀は是迄之通可相心得候尤披露幷進物持出之役人等は當日之服相用可申候

一八朔御禮は是迄之通七夕は染帷子重陽も万石以上にても花色に不限常之服紗小袖着用不苦候

但七夕重陽共長上下着用に不及候

一殿中廉上下之節も木綿紋付之儀は服紗同様相心得着用可致候肩衣袴之儀も時節に不拘廉木綿幷單を用候儀可爲勝手次第候此外麁末之品相用候儀銘々心次第たるへく候勿論家來又者等彌以麁服相用可申候總て無益之入費相省實用之武備相整候樣專務に可心掛候

右之通被　仰出候間向々へ不洩樣可被相觸候

一若山布告

御家中衣服之儀去年御用捨被　仰出有之候處今度於　公邊衣食住を初諸事省略之儀別紙之通被仰出候　御手前にても追々簡易之御制度に被爲復候御趣意に付銘々諸事格外に可致儉約候就ては常服之儀も猶又先年之振に相復し向後左之通被　仰出候間彌質素之風俗に相成是迄之衣類とは格段際立候樣麁品を相用ひ武備之儀は別て厚く心掛候樣可致事

件之通に付家內召仕之男女風俗之儀も專ら質素に爲致衣服も格段麁品を相用させ可申事
一持合候共花美又は目立候品は決て着用不相成候事
御年寄菊之間詰之外一統常服羽織袴之事
但丸羽織打裂羽織幷紋所有無之無差別持合之麁物を相用若持合無之分は羽織着用不致候とも不苦事
一袴羽織共時節に不拘單を相用候儀勝手次第之事
一式日にても無差別袴羽織着之事
一講釋初之節も同斷之事
一正月七日迄且　御祭禮御神事　御靈屋方等へ　御參詣之節は是迄之通のしめ着用尤無地にても勝手次第其外是迄のしめ着之廉には都て服紗小袖服紗袷着之事
一八朔は是迄之通白帷子七夕は染帷子着用之事
年頭之外五節句八朔共長上下着に不及事
一熨斗目幷白帷子は先年之通　御目見以上之外自今着用不相成事
一嘉祥　玄猪　御煤拂　除夜は御留守方常服之事
一一通り之御祝儀事且御機嫌伺等都て謁之節先年之振りに常服之事
重き御祝儀事幷御法事等之節は其節に可相達事
一伊賀以下之內是迄廉上下着用いたし來候者幷坊主共は正月三ヶ日廉上下且十德其外は常服之事

一御門番同心年頭初寵上下着之廉は都て役羽織着之事
一若黨初供廻り衣服文化之度以前之通相成候樣
右之外細雜之儀は都て文化之度以前之通相復候筈
一前記の通に付年中殿中衣服變更之廉左朱書之如くに成る
一正月廿三日講釋初に付　一統　服紗半袴
「是迄は講師のしめ着之處服紗に相成候事」
二月に相成候得は御年寄御側御用人平服其外御役人向聽衆之面々服紗二月に候へは一統平服之極に候事
一公邊は二月十日講釋初に付一統服紗講師も服紗之由
一正月廿八日　のしめ「服紗」半袴
上使衆并　水尾樣被爲入　日光御門主樣并御使僧被進且　勅使衆入來京都御使歸り之高家衆參上之節は　御先樣御服且服に准し候事
一上巳　布衣以上のしめ長袴
「一統　服紗半袴」
一七夕　同　白帷子長袴
「同　染帷子半袴」
一重陽　同　服紗長袴

一四月朔日　「同　半袴
のしめ袷半袴
「服紗」

一同　十七日　御豫参御参詣済　歸御之上
平服　御留守年は平服

和歌御祭禮濟御左右相達候節諷衣服　「ふくさ　御神事濟も同斷」

一五月廿七日　御誕生日御祝ひに付殿中染帷子半袴

公邊御誕生日御祝ひ是迄の通殿中のしめ着の由

一嘉祥　布衣以上　染帷子長袴
右以下　染帷子半袴

御祝濟平服　「一統　染帷子半袴」

一玄猪　布衣以上并御祝掛のしめ長袴
右以下　のしめ半袴

日の内平服　「一統　服紗半袴」

一除夜　殿中　のしめ半袴
「服紗半袴」

日の内平服　御祝掛之向御席被罷出候者のしめ半袴

一十二月廿八日　のしめ半袴
「服紗」

安政三辰年正月廿日

一道中衣服之儀向後木綿打裂羽織小袴襠高袴伊賀袴裁附等勝手次第着用之筈候事

安政五午年二月廿九日
一五節句八朔衣服之儀於江戸は向後右卯年以前之通着用可致其外は諸事是迄之通之旨被　仰出候事
安政五午年十二月廿三日
一右卯年被　仰出候内左之節々於江戸表は向後右以前之通着用可致候其外は諸事右卯年相達候趣堅相守可申事
五節句八朔は當二月達之通也
正月廿八日
四月朔日
十二月廿八日
御目見以下は是迄之通候事

文久間衣服變革

文久二戌年閏八月廿三日　於江戸
一幕府服制變革に付布達
昨日於　公邊衣服之制度御變革被　仰出候付　御手前にても右に准し御變革之筈に付委細跡より可申聞候得共先明廿四日より平服之廉は羽織小袴襠高き袴着用可致事
本文之通候得共平服取交着用之儀も勝手次第之事
公儀被　仰出は左之如し
一今度衣服之制御變革左之通被　仰出候間明廿三日より書面之趣可相心得候

一熨斗目長袴は以來總て被廢止候事
一正月元日二日　裝束
一正月三日　無官之面々御禮服紗小袖半袴
一正月四日より平服
一正月六日七日　服紗小袖半袴
一正月十一日　御具足御祝ひ服紗小袖半袴
一二月朔日　裝束　但御禮席に不拘面々は服紗小袖半袴
一三月三日　服紗小袖半袴
一四月十七日　御參詣之節裝束　但殿中は服紗袷半袴
一五月五日　染帷子半袴
一七月七日　同斷
一八月朔日　同斷
一九月九日　花色に無之服紗小袖半袴
一御神忌且格別重き御法事等之節は是迄之通　裝束
一御定式　御參詣之節は諸向共服紗小袖半袴
一勅使　御對顏　御返答之節は是迄之通　裝束　但御席へ不拘向には服紗小袖半袴
一勅使御馳走御能之節は都て服紗小袖半袴

一御禮衆万石以上以下共都て服紗小袖同袷又は染帷子半袴

一月並は別御禮衆之外平服

一平服は以來羽織小袴備高き袴着用可致候

右之通万石以上以下共不洩樣可被相觸候

按に此時　勅使を以攘夷及幕政改革之儀を關東に被迫松平春嶽侯は　叡慮に依り御政事總裁職となられ大改革を斷行諸侯の參勤幷獻上物等之制を緩め其妻子を國邑に歸へし御謠初嘉定玄猪の規式を廢し供連減省乘切登城等之事始る故に服制亦此變革に及ひしにて實に幕政に於ける未曾有之一大變動なり

文久二戌年閏八月廿六日

一左之通此度從　公邊被　仰出候間於　御手前も同樣相心得可申事

足袋之儀以來平服之節は紺相用候ても不苦

一以來夏足袋相願候に不及勝手次第相用不苦候尤　御前邊且御用召之節は是迄之通相心得　御前邊へ足袋用候節は其時に可申聞候

但御目見以下之者も右に准し夏足袋相用不苦候事

文久二戌閏八月廿七日

一此度於　公邊衣服之儀制度御變革被　仰出候付　御手前にても右に准し向後左之通御變革被　仰出候間彌麁服相用武備之儀は十分に行屆候樣可致事

正月元日　諸大夫 大紋 其外一統服紗小袴 半袴
同 二日 三日　右同斷
同 四日 五日 六日　平服
御表出御之節御供之面々并御祝之節御席へ罷出候筋計半袴
同 七日　一統服紗半袴
同 九日　寺院御禮に付御席へ罷出候輩二日之通 御禮過平服
本文御禮被爲受之御供計廊上下着之旨御小姓頭取申合候事 亥正月九日
同十一日　御具足御祝に付殿中服紗半袴
御祝儀頂戴相濟候上平服　御留守年は平服
同 廿日　御前へ罷出候面々服紗小袖半袴
右前々日に達出候事
五節句八朔　一統服紗半袴染帷子
重陽は花色に無之服紗
朔望廿八日　平服
正月十五日 廿八日 四月朔日十二月廿八日差別無之
本文十二月廿八日奥向廊上下に相成候品未可見合事

御祭禮に付一統服紗半袴

四月十七日
九月十七日　御豫參御參詣無之候はゝ殿中平服御豫參御參詣濟　歸御之上平服

右壹通

一御謡初　嘉定　玄猪

右御規式　公邊御振合に御准以來相止候事

右壹通

文久二戌年閏八月廿七日

一熨斗目長袴は以來總て被廢止候事

正月廿八日　二月廿八日　四月廿八日

五月朔日　七月廿八日　九月朔日

右日限以來月次御禮不被爲　受其外是迄之通に候間此度　公邊より被　仰出候付右日段　御登城

不被遊候事

文久二戌年十二月八日　未十一月八日の次に可記の處改革の事見易からん爲爰に記入

一先達て相達候外

殿中衣服

一正月十四日　平服

一御煤拂　平服

一除　夜　　御年男初御祝儀に掛り候面々服紗小袖半袴
　　　　　　御年寄初御式に掛り候面々幷奥向服紗半袴
　日之内平服
一十二月廿八日　　歳暮爲御取替に付奥向旒上下
一御豫參御參詣之節　　御前へ罷出候輩遠侍向共平服
一上使又は御祝儀等にて
　不時御登城之節　　同斷　平　服
一都て御拜領之御品御拔き御頂戴之節　　奥向平服
　御用掛之面々旒上下
　一御拜領之鶴抔　御披之上年寄衆初頂戴被　仰付候節旒上下
一女中上使被進候節　　御廣敷向旒上下
一御連女樣方年頭被爲入候節　　右同斷
　但平日被爲　入候節は奥向御廣敷向共平服
一御堂　御參詣之節　　奥向も平服
一御堂幷御庭稻荷秋葉社へ
　御裝束にて御參詣之節　　奥向旒上下
一御着座幷御發駕之節　　一統旒上下

御着座之節は御献申上等相濟候はゝ年寄共退出後平服遠侍向は終日廊上下
御饗應之節は御客衆退出後年寄共退出に不拘平服遠侍は終日廊上下
一御國許へ之御暇被仰出御登城之節　一統廊上下
御參府御禮御登城之節
但歸御之上御式等相濟候はゝ平服遠侍向は終日廊上下

正月十二日
御誕生日　殿中廊上下
御祝濟平服　御留守方平服
一御嫡子樣御誕生日　殿中廊上下
但別御殿に被爲成候得は御居御殿計
一御簾中樣御誕生日　御廣敷向廊上下
一御年賀御祝儀　奥向廊上下
一御生身玉御祝儀　同　斷
御祝相延候はゝ御祝有之節廊上下
一御裝束にて出御之節　供奉年寄共　束帶衣冠大紋布衣
殿中衣服は御廊々に付極之通
一御先立年寄共　廊上下

一御先立御用人御同朋　廡上下
一勅使入來之節并日光御門主樣被爲入候節　年寄共初御席へ罷出候輩御徒格迄　廡上下
一上使を以御祝儀物御拜領被遊候節　年寄共初御席へ罷出候面々廡上下
一御位記　宣旨御拜覽之節　取扱之諸大夫　大紋　年寄共初御席へ罷出候御供番頭以上御用人表御右筆御書方　廡上下
一尾州樣　水戸樣年頭被爲　入候節　御目通りへ罷出候面々　廡上下
　其外御慶事等にて被爲　入候節平服
一御表へ不時　出御大名衆初御出入之衆或は初て　御逢　御目見等被爲請候節并御使等被　召出候節
　　御席へ罷出候面々　御召服に奉准　廡上下
一初て　御目見之者　重役嫡子初平士惣領迄廡上下
一尾州樣御初へ爲御年禮被爲　成候節　殿中平服
一坊主共年頭元日二日五節句八朔其外廡立候　殿中服之節　十德着候事
一都て一等廡上下着と有之節は　御目見已下御徒格迄右に准し候事
一講釋初　　　　　平　服
一年頭五節句八朔御夜詰過平服の事
右之通

文久二戌年九月四日

一左之通此度從　公邊被　仰出候間於　御手前も同樣相心得可申事

諸向新役之者見習中三日廳上下着用仕來之處以來御役御番等被　仰付候翌日より平服着用可致候

右之趣向々へ可被相達候事

同年同月十八日

一此度衣服御變革被　仰出候付和歌　御宮并和歌長保寺初　御家父樣方御靈屋御靈前御牌前御廟所へ之　御名代且諸社へ之　御名代衣服之儀是迄布衣長袴のしめ半袴着之廉には向後都て服紗小袖染帷子半袴着之筈候事

附紙　年頭に付　御宮　御靈屋御靈前へ之　御名代且御祭禮御神事且學校釋奠之節　御名代衣服之儀は追而相達可申候

文久二戌年十月廿六日

一紀州勢州より到着之面々爲伺御機嫌　出殿之節是迄半袴着罷出候得共此度省略被　仰出候付ては右の面々以來平服にて罷出候事

文久二戌年十一月八日

一先達而於　公邊衣服制度御變革被　仰出一統羽織袴着相成候付而は身柄之輕重　御目見已上已下之差別も無之候付來十二月朔日より左之通着用可致事

御役人向幷重役は羽織紐淺黃染相用可申右之外淺黃紐不相成事

一都而　御目見以上は紋付羽織着以下役は無紋着用可致事
一伊賀已下は割羽織着不相成無紋丸羽織着用可致事　但坊主紋付にても不苦事
上け紙　我々共は（御年寄を云）羽織紐白を相用候事
文久三亥年二月朔日御用人より達
一御參暇等之節御道中騎馬御供之面々向後野袴相止小袴襠高之内取交着用地合之儀棧留小倉之類相用割羽織着用可致事
但騎馬御供之外にても是迄野袴着用之向も同樣之事
文久三亥年二月六日御用人より達
一御道中步行御供之節野服陣笠相用候樣
文久三亥年二月十二日同斷
一此度御供之面々　御目見以上已下共都而塗笠相用可申事
但塗色等勝手次第銘々所持之筋相用可申事
騎馬御供之面々も同樣之事伊賀已下之者は陣笠御貸渡之筈候事
坊主は菅笠相用不苦候事
一又者之儀帶刀之分は塗笠之事
按に從來は上下一同菅笠を用ゆ塗笠は即ち陣笠の事也此度の御供とは攘夷の嚴勅ありて紀州海防の事勅命に依り幕府へ御願御歸國ありし也

文久三亥年二月十七日同斷

一是迄騎馬御供之向初御道中縮緬三尺帶相用候節有之候得共以來一同麻三尺帶相用可申事

同年十一月被仰出

一此度於　公邊衣服之制度去年御變革被　仰出候以前へ御復之儀別紙之通被　仰出候付　御手前にても右に准し去年九月御變革被　仰出候以前へ御復之筈候間右樣相心得可申事

別紙

一先般衣服之制度御變革被　仰出候處以來前々之通熨斗目長袴等着用可致旨　被仰出候

但正月八日より平服之事

一正月六日裝束

一九月九日御禮之節前々之通万石以上之面々花色小袖たるへく候

一平服は已前の通繼上下たるへく袴は襠高にても平袴にても勝手次第着用不苦候

但足袋之儀も前々之通相用可申尤夏足袋不及相願候

一布衣以上掛御用被　仰付前々白衣にて相勤候廉は以來羽織襠高袴相用可申候

一陪臣之儀諸獻上物御禮事等にて　御城へ差出し候節幷平常共着服之儀前々之通たるへく候

一右之通相心得のしめ長袴は十二月朔日より其外は來る十五日より書面之趣に着用可致候

右之通万石以上以下共不洩樣可被相觸候

十一月

按に御政事總裁松平春嶽侯は當三月於京都總裁職辭表を呈し屆捨にて歸國同八月には朝議一變攘夷御親征は全く矯勅さの事に至り幕威少しく挽回の如き傾きありしより此發令ありし也上下唯幕令の常なきに苦しみ亦幾分の威信を失ふに至る

文久三亥年十一月廿三日被仰出

一此度於　公邊衣服之制度前々之通御復に相成　御手前にても右に御准し以前へ御復之儀此程被
仰出候事候然る處熨斗目長袴は一旦御廢止被　仰出候付ては少祿之面々熨斗目之儀自然手放し候
儀も可有之處右被　仰出候に付ては此節柄相調候ては銘々出方にも相成難澁可致候間右等之筋は
先是迄之通當分熨斗目之廉も服紗にて不苦候且肩衣之儀も勿論時節に不拘麻并單を相用候儀勝手
次第之事候條此段諸向へ可被相達候事

十一月廿三日

慶應間衣服變革

慶應元丑年閏五月廿二日

一長州征伐御總督して御滯陣中は（大坂御滯陣ならん）御家中一等陣羽織着可致旨御家老より布達す

公方樣御着坂迄之間は割羽織取交相用不苦且具足或は平常之衣類小袴裁付襠高袴等勝手次第之
旨布達ありたり

公方樣には本日御入京にて廿五日御着坂御入城被爲在

慶應元丑年十月六日

一衣服之制左之通御立被遊候條堅相守可申事

紗綾　綸子　縮緬

右頭以上平士にても千石以上不苦其以下不相成事

羽二重　絹

右御目見以上不苦其外不相成事

紬

右御目見以下不苦其以下不相成事

一右三等共毛綿相用候儀勿論不苦事

一伊賀以下之者は毛綿之外不相成事

一都て家內衣服は當主之格に准候事

一持合候共右制外之品々は着用不相成事

一羅紗吳呂服連は御目見以上以下之外は不相成事

同年十二月

一御家中常服割羽織染色之儀向後黑染紋附は御紋服着用之向に限り相用右之外着用不相成事

但黑色に似寄紺染等も着用一切不相成候且又本文之品は御家中に限候儀に付地士町人等は縱令御紋服着用相成候筋にても黑染色着用不相成事

一伊賀以下末々向後襠高袴着用不相成平袴裁付着用可致事

但御出陣中は是迄之通候事

慶應二寅年九月十一日

一此節專ら銃隊調練に付出勤前幷退出より罷出候節は　殿中筒袖陣羽織陣股引等着用致候ても不苦事

一右調練見分に罷越候向も右同樣之事

一出火之節も勝手次第着用不苦候事

同年九月廿九日

一常服割羽織染色去暮被　仰出多分黒染に相成候樣申合致候得共上け米等被　仰出候に付ては一樣に黒染に相成不申とも可然と之旨御用人へ致申合候等

同三卯年三月七日左之通布達

一公邊にて今度衣服御改革被　仰出平服之廉は羽織襠高小袴取交着用相成候付此御方より他向へ平服之廉にて御使被遣候節は以來右之衣服に相成候事

同年三月廿四日　於江戸

一年中衣服之儀此度於　公邊御改革に付　御手前にても向後左の通着用可致事

正月元日　諸大夫大紋　　同　二日　其外一等服紗小袖廉上下

同　三日
同　七日　服紗小袖廉上下　　同　九日　寺院御禮に付御席へ携候者計　右同斷

同十一日　同斷　　三月三日　右同斷

五月五日　染帷子廉上下　　七月七日　同斷

八月朔日　右同斷　　九月九日　服紗小袖廉上下

但三兵之内當番之向は元日初都而平服之事
右之外御朔望廿八日正月四日五日六日十四日十五日廿八日四月朔日十七日九月十七日十二月廿八日
講釋初御業拂除夜南山等　御豫參御參詣之節幷御祝儀事等にて不時　御登城之節も　殿中平服
之事
下け紙
本文平服之儀は羽織襠高袴小袴取交着用可致候
當分平袴も取交着用不苦候尤他向へ御使等之節は見合可申事
一三兵之面々はそき袖羽織袴を平服と相心得可申事
一恐悅事
一御禮事
右服紗小袖染帷子麻上下着用之事
一御機嫌伺
一御法事濟
一紀州等より到着
右平服之事
慶應三卯年十月廿日　於江戸　御家老より布達
一出火非常之節向後そき袖羽織細袴着可致事

當分之内出火之節は是迄之火事具相用候ても不苦事

維新後

慶應四辰年五月十四日

一五位之御家老官服着用之儀伺・左之通參事へ伺之處上け紙之通差圖有之

一紀伊中納言家老五位之者參内等之節官服之儀是迄之通着用可仕哉

一狩衣之節は風折烏帽子單狩衣幷淺黄差貫着用可仕候哉

一諸侯方直垂着之場所へ布直垂着用可仕哉

上け紙　可爲伺之通事

同年六月十日

一衣服制度御下問

左之書付大原左馬頭より渡

在京　諸侯中

衣服の制寒暄稱身體裁適宜上下の分を明にし内外の別を殊にする所以なり然るに近世其制一ならす人各其服を異にし上下混淆國體何を以て立つ事を得ん故に古今の沿革を考へ時宜を權り公儀を採り一定の御制度被爲立度思召に付各見込之儀書取を以て來る廿五日限上言可有之樣御沙汰候事

六　月

右に付御答

此度衣服制度之儀御下問之趣奉拜承 臣茂承 謹て愚考仕左之通御改正被爲在候はゝ如何可有御座哉と奉存候

服制三等

禮　服　　大禮幷外國公使參内等依旧束帶

常　服　　官局出勤等羽織袴

戎　服　　當節專用の洋制

右三等之内常服羽織袴は最簡便にして時宜に應し可申候得共有位庶人之差別不相立餘りに混然たるものに可有之か左候はゝ地合にて顯紋紗綾等の羽織は有位之用絽綃等は無位の用差貫大口は有位の着用常の袴は無位の着用と申樣に被定候はゝ平常外國人なとに對し候ても自然貴賤の差別相立可然且又偏に簡便をのみ要し候ては畢竟有位之詮も無之輕蔑之意も生し可申旁此制相立候樣御評議御座候て可然哉と奉存候仍て鄙見之趣奉陳述候誠恐誠惶頓首

六月廿五日　　紀伊中納言

明治二巳年七月廿五日布達

一此度拜領之時服是迄御紋服着用不相成筋にても着用不苦候事

右は春來御國政改革に付盡力之御賞して執政諸參事初文武諸官員へ時服を賜りたるに付て也

同年九月十七日　家令所布達

一向後緝服御着用御附屬以來緝服着用可致との事

今般　御奉命被爲在候付ては萬緒適宜之御家法被爲立度との　思召にて　御手元初後宮向格別に御取締被遊乍恐向後　御二所樣御綿衣をも御取交麁服重に可被爲　召との被　仰聞有之誠以難有　思召且は奉恐入候御儀に御座候間以來家令所支配之面々は能々　御趣意を相辨來る廿日より遠近御使他所勤等に至る迄綿服着用可致事

但是迄頂戴之御召たり共御綿衣之外は以來着用之儀共節々家令所へ可承合事

一是迄御紋服頂戴致候得は右を自分衣服へ寫し候ても不苦旨被　仰出有之候得共向後御紋を寫し取候儀は一切不相成候事

同年十二月廿九日

一來年頭家令所內衣服左之通

三ヶ日　　七日

家從並以上半袴右以下殿中衣服定之通　尤西丸詰は半袴

一家令所內衣服定

明治二巳年六月版籍御奉還被　聞召知藩事御拜任爾來藩治は御家政と分裂總て御體裁一變により家令所內衣服の制左之通り定めらる

一正月元日　　服紗半袴

一同　二日　　諸官人并士族以上無役之面々三ヶ日年頭爲御禮參上に付

半袴其外平服

一同　三日　　應壹人

一同　六日　　寺社之面々年頭爲御禮參上に付　二日三日之通

一同　七日

一七　節　　服紗帷子　半袴

一正月十五日　　御誕生日に付　服紗半袴

御祝濟平服

一四月四日　　御簾中樣御誕日に付　同斷

同　斷

一四月九月十七日　　御祭禮御神事に付　同斷

御參詣無之候はゝ平服　御參詣歸御之上平服　御留守方平服

一九月廿二日　　御降誕日に付　同斷

一御髮置御着座之節　　服紗帷子　半袴

右之通

明治三年年五月十五日政事廳布令

一文武官人服飾之制

官人服飾別帳之通被　仰出是迄之式服平服とも自今相止候事

七月十五日より着用之筈

一本文式服急に調達可難相成付當分式服着用之廉も平服相用ひ可申參事以上式服之廉は風折烏帽子可相用事

一私用他出之節幷御用にても他所勤之向旧服着用之儀は時宜に寄可申事

一士農工商式服平服之儀は當分是迄之通り候事

右は去年二月大改革以來諸般着々更正兵制も既に整頓此上は服飾の制を定め文武之章尊卑の別判明せされは規律難立の場合たるを以て　朝廷へ御屆之上天下一定之制度被　仰出候迄藩內限文武官人の服制を定められし也則文官式服は知事公衣冠束帶無位大小參事は直垂切袴風折烏帽子大屬以下小史生に至迄素袍切袴折烏帽子武官式服は一同鎧直垂引立烏帽子色を以て上下を分つ文官平服は袷衣小袴を用ひ色及組紐菊綴等之疎密に依て上下を區別す武官平服は軍服兼用一般黒色の洋服ズホンマンテルの製に倣ひ帽を用ゆ唯名稱は和樣に隨ひたれ共便宜洋風を折中したるものなり

詳細は別に揭くる圖式の如し

按に此改正は武家古今の服制を折衷し傍ら洋風を模擬したるものにて頗る服章彬々の美を爲し文官は常に紫の組紐にて束髮し從者に太刀を持する抔高尙優美にみへたれとも三百年來因襲固習の上下袴羽織を一朝に廢し畵卷物抔の外より見聞もなき艶ひを實際に目擊の事とて人々奇異の思ひをなし我と吾から心耻かしけなりし（中には意氣揚々たるも不少）固より一己の藩內に限りて一般の制度といふに非されは廢藩置縣に至ては行はるへくもあらす僅に一ヶ年はかりの事にてありしなり

明治三午年五月晦日

一官人從者衣服等之儀左之通相成候事

侍無羽織之事

文官從者

夏衣 麻毛綿勝手次第之事 紋付
冬衣 毛綿紋付之筈 服連之儀は不苦
小袴 脚半當 地合 夏衣冬衣に同し

武官從者

小者 法被 毛綿 單色付 なまこ襟 背印壹

侍 戎服 夏冬共 地合 毛綿 服連勝手次第

從者人員當分左之通

權少參事以上

平日 侍 定無之
小者 定無之 袋杖持 乘馬之向は口付壹人

式日 侍 定無之
小者 定無之 長柄 乘馬之向は口付貳人

都督傳令使列少屬 以上 平日式日共 侍一人

明治三午年七月十二日政事廳より布告

一諸官試補并當分勤等之向章服之儀藩內限り本官に准し着用之筈候事

七月十二日

右壹通

官人章服着用不致節は行違候共不苦候得共其官人たるを知れは成丈け路を讓り不敬ヶ間敷儀無之樣可致事

右壹通
大史生學校兵學寮一等助教章服之內挂緒初左之通改正相成候事

式服

挂緒　萠黄

胸紐　萠黄革　袷衣同斷

菊綴　同　袷衣同斷

明治三年七月十四日政事廳より布告

一相當正八位以下太刀打刀等自分佩し可申事

但袷衣左褄へ鞘扱を明け可申筈

相當正七位以下平服之節小袖帷子に縞類取交着用不苦候事

但式服之廉は染小袖帷子着用之筈

同年七月十八日公用局より達

一奏任以上御定之塗笠に候得共平日は便宜に寄り着用不致候共不苦候事

但別に異樣之笠は着用不相成筈

一文官之向日覆之爲參事紺紙右以下淺黃紙凉傘相用候儀當分不苦候事

雨傘

參事　紺蛇目

右以下　緑黒

一雨天之節侍に爲持候太刀指袋相用候儀は勝手次第之事

一式日平日共足袋は白相用候事

一草履式日中ぬき平日は裏付取交相用候筈

但天氣合に寄御免下駄も不苦事

木履之向革とも不苦

一侍は式日紋付平日は縞幷小紋取交不苦候事

但雨天之節は紺毛綿半雨羽織之事

一侍雨天之節は手傘暑氣の節は黄漆輸代平笠野服之節は塗笠之事

但塗笠シンゲン笠と唱候筋重に可相用事

一小者は不斷黒壺笠之筈

明治三年年七月　家令所制

一御召御紋服之事

實家父　御召御紋服拜領致し有之を讓受養家にて着用否之儀問合候付申見候上右は着用不相成筈之旨及挨拶候事

同年閏十月廿六日　同達

一所持之絹類衣服着用不苦との事

御家政向御一新に付ては御手元之儀格別御質素に被遊候　思召にて乍恐　上にも御綿衣御取交被爲　召候付家令所勤之面々綿衣着用之儀被　仰出候得共綿服之外着用不相成候ては兼々所持之品も無用に相成却て難澁之趣且旅行等之節木綿類は荷物嵩にも相成候間向後所持之絹類取交着用候ても不苦旨更に被　仰出候乍併御手元御質素之御趣意を不取失候様可成丈麁服相用候様可心懸事

御簾中様年中御衣服

正月元日

一御髪　すべし

一御袿（ウチキ）　御下召紅梅織　白練り　裏白羽二重　白

一御袴　濃き　又は緋　御元服前は濃き色　御元服後は緋

一御帶　御袴色に同し　細

御召替　御二度後

御搔取り　總縫入縮緬　色　紫黒　桃色淺黄　萌黄ひわ色　紅裏

御合着　赤　大紋　紐白　二つ重ねを紐白と云ふ　御帶　朱子縫入　色品々

一御鏡御頂戴之節の御搔取り繻珍御袴

正月二日　三日

一御髪　すべし

一御搔取り　繻珍織　紅裏　繻珍萌黄地に牡丹蝶　赤紗綾形織八つ藤紋等

一御合着　緋大紋　組白

一御袴　元日之通

一御帶　御掛け下と同斷

御召替　晝後

元日之通り

一三日夕方總縫入御合召赤組白にて御引初被遊

同　四日

一式日御服　御地下け地白綸子　若かちん上り候付　式日御服十一日の部に記す

同　五日

一五節句御服　正月五日　三月三日　五月五日　七月七日　九月九日を五節句といふ

一御髮　すべし

一御搔取り　菊綸子 白赤黑　地縫入　之を地白、地赤、地黑と唱ふ菊綸子の他は用ひかたし　紅裏

一御合着　緋の大紋又は緋紋ちりめん　紅裏　組白

一御袴　元日の通り

一御合帶　紫黑 萌黄赤　淺黄　繻子地に縫入

御召替　晝後

御髮　御守殿下けしたし　下け髮下地の義直に下け得らるゝやうの曲け也花笄　鼈甲花形さし込之を上けかんざしといふ

御召　縮緬縫入　組白　紅裏　（御召紫　桃色　萌黄　黒／淺黄　ひわ色　地に縫入）

御帯附　朱子地綾地織物大形　（五色　搔取に無之時ゟ帯付さいふ／紺色等　左やの字に結ふ）

同　六日

一御　髪　すべし　（百人町（西條樣也）より御使に付）

一御　祓

御召替　御搔取り　縫入

夕方より御年越に付御地下け　御袴　御祝上る

正月七日

一御　髪　すべし　繻珍　御袴

御召かへ　縫入

同　八日　九日　十日

一御搔取り　總縫入　（平日に候得共正月は／別段）

御召替　帯付

同　十一日　（御鏡ひらきに付）

一式日御服

御髪　地下け　（御守殿にては下け髪さいふ）

御搔取り　菊綸子　（地白　地赤　地黒の内）

御合着　五節句之通り　　御　帯　五節句之通り

御召替　背後

御髪　御守殿下けしたじ

御召　縫入　模様　地合縮緬　色五節句御召かへに同し

紅裏　紕白

模様に縫したるを縫入といひ模様計にて縫入無之を模様と單稱す

御帯附　色さりよき織もの

同　十二日　十三日　平日

一御掻取り　縫入

同　十四日　年越

一六日之通り

同　十五日

一五節句御服　御召替より縫入

同　十六日　十七日

一御掻取り　縫入　十六日御召替　御模様　御帯付

同　十八日より正月之内

一御掻取り　模様　御召替　御紋付　紕白　帯付

同　廿八日

一式日御召

二月朔日　十五日　廿八日

一式日御召

初午　御搔取　縫入　御召替縞もの十五日より紐白之所一つ白に成る

三月二日

一御搔取り　縫入　御雛に付　御召替　模樣

同　三日

一五節句御召

今日に限り御搔取り　桃色朱子縫入　紅裏　縫は地白地赤地黑と同樣

御合着　白大紋色なし縫入　色なしとは赤糸なきをいふ

四月朔日

一今日より御袷　御附帶　紺白萌黃赤地織もの又は赤白段織等

同　十七日

御入年　五節句　御召替　縫入　御入年とは御參府年の事ならん　御豫參濟御禮に付て也

御留守年式日

五月五日

一五節句
今日より辻を被爲召　絹縮之白赤黒之内縫入な御單の辻といふ晒地白黒に縫入な白辻 黒辻といふ土用中は地合の縮白黒に縫入な白黒のし辻といふ
御附帶
夏御召替　縫入模樣地合晒のし縮絽　中色　水淺黄　白地重ね付　御付帶
六月十六日　嘉定に付
一五節句　辻　御附帶　御腰卷　生糸織 嘉珍色 摺金縫入 總形色の裏 赤生れり
御召かへ　縫入　御帶付
一十五日　氷川　山王祭禮に付　御物見へ被爲成候はゝ縫入御帶付
同　晦日
一縫　入　御附帶　水無月はらひ上り候付
七月六日　夕方より
一模　樣　御附帶
同　七日
一五節句　のし縮之白赤黒之内縫入　即ちのし辻也　御附帶　御腰卷
御召かへ　絹ちゝみ　絽　縫入　御附帶
同　十一日
一五節句　御生身玉御祝に付

同日夕方より御提灯に付十六日迄御模様

同　十三日　十五日　夕方

一御清之間へ被爲　成に付　地白辻　御附帶紺地

同　十四日

一御兩親様被爲在候はゝ御祝被遊御召其外新らしきもの被爲召

同　十六日

一總縫入　御附帶　さい日に付

八月朔日

一五節句　御召　白辻　御附帶　御腰卷　今日は白縫辻に限る

同　十五日　式日

一御月見に付夕方より縫入御附帶

九月朔日　式日

一今日より御袷被爲召

同　九日

一五節句　御搔取り　地赤地黑菊綸子　御合着白大紋又は　紋縮緬一つ白

同　十三日

一御月見に付十五夜と同斷

同　十七日

一御縫入　總縫入之方　御宮御祭禮に付て也

十月朔日　式日

一今日より御合召赤に成る

一初の亥の日　玄猪に付

五節句　正月五日記載之通り

一十五日より紺白被爲召

十一月

一冬日之節　式日

一十八日御庭秋葉社祭禮に付御縫入御搔取

一寒入　御縫入御搔取り　土用入も同し

十二月十三日　御煤納に付御祝上りに付

一五節句　御袴なし　御召替は御模様

同　廿七日

一御搗揚に付　御縫入

同　廿八日　歳暮御祝儀に付

一五節句　御袴　御召替御縫入

同　大晦日

一夕より五節句　御祝上り候節計御袴　御祝の節御袴なし

節　分

一五節句　年内なれは朝縫入　夕方より五節句

來正月十五日前なれは朝式日　夕五節句

右之外

一御慰事之節々　御縫入御搔取

一奉文を以御拝領物之節々　御模様

一御國へ御暇御登　城之節　式　日

一御參府御發駕共山川御越被遊候御飛脚着之上　御縫入

一御發駕　御當日　五節句　御袴

一御參府若山御立當日　御縫入

一兩山へ　御豫參之節　御模様

一誕生日に付　御髪上け式日

一御乳附出候節　總御縫入

一御表様奥御登　城之節　御縫入

一御拝領御鷹之鶴御披き之節　御縫入

一御發駕前御膳御上け之節　御縫入

一御國へ御着城御飛脚着之上　式　日

一同　御當日　上使之節　式　日

一右御飛脚着に付　式　日

一御貳所様御灸之節々　御模様

一御誕生様被爲　在候節　夏地白こん地御付帯　御召かへ御模様　御髪上け式日

一御四つ目より御六つ目迄　御模様

以上は局（ツボネ）方に存する舊新筆記の分を甲乙校正掲載するものにて區別錯雜或は誤謬なきや保しかたし五節句式日とは服制の一名稱となり來て五節句といへは何々の服装たるを了知する習

ひ也しさいへり尚一日解し安きやう左に其例を示し及ひ一二補遺を記す

五節句

御髪　すべし

御掻取　菊綸子　白赤黒地縫入　紅裏　地白地赤地黒と唱ふ　菊綸子に他家には用ひかたし

御合着　縫の大紋又は緋ちりめん　紅裏　紐白

御合帯　紫　萌黄　淺黄　黒赤　繻子地に縫入

御袴　濃き又は緋　御元服前は濃き色　御元服後は緋

三月三日　五月五日　七月七日　九月九日の事は前に記する如し

同　御召替　晝後

御髪　御守殿下け下地　花笄　鼈甲　花形さし込

御小袖　縮緬縫入　紫黒　桃色淺黄　萌黄ひわ色　地　紅裏　紐白

五月五日　七月七日の事前に記す

御帯附　朱子地綾地織物大形　五色紺

式日　毎月朔日　十五日　廿八日

御髪　地下け　御守殿にては下け髪といふ

御掻取　菊綸子　地白地赤地黒之内　四月一日より五月朔日迄　九月朔日　御袷

御合着　五節句之通　二月十五日より九月朔日まて　一つ白

御帯　夏は土用中は　縫入　模様　地合のし縮み　地合晒絽のし縮み　白黒に縫入之を白黒のし辻と云　中色水淺黄白地　重れ付　五節句之通り

四月一日より八月廿八日迄御附帯

同　御召替　書後より

御髪　御守殿下け下地

御召　縫入　模様　縮緬地　色五節句に同し　紅裏　組白

夏は縫入模様地合晒のし縮絹ちゞみ色中色、水淺黄、白地
桔梗色、同かすり（桔梗色は御上方に限る）いつれも重れ付
縫入とは模様に縫あるを云模様計りにて縫入なきを模様と單稱す

御帯附　色取りよき縫物　夏は御付帯

御平常服

御髪　御守殿嶋田　ふきわ　御元服前　御半元服　片はづし　御元服後

日々御笄　御下け下地の時は鼈甲花さし込御常まゆ也

御掻取　縞縮緬　織立もの　紫　萌黄　淺黄　黒　鼠　茶等　紅裏　織立ものとは京都へ注文特に織立しむる也

御合着　緋ちりめん　緋板しめちりめん緋山まゆちりめん等　紅裏　組白又は一つ白

夏は絽　越後　透綾　絹ちゞみ　縞かすり　色々いつれも白重れ

御合帯　琥珀地　五色之内織もの　夏は御附帯

同　御召替　書後

御召　縞ちりめん　地上けもの　紅裏　白一つ
地上けとは京都織立に無之　江戸呉服店より有合品御買上けないふ　夏は　絽　透綾　上布　越後縞等色々白重れ
御帯附　織もの綾地こはくの類
毎朝　御仕廻ひ上けといふ
御召　八丈縞　唐　黒出　紅裏　白一つ　夏は　絽　透綾　越後　白重れ
御帯　紫ちりめん　ふくさ
御寝まき
御召　白羽二重二つ又は一つ　袷單の時も白羽二重　夏は　絽　縞染　白重れ　御繻ばん　白絽に限る
御帯　緋ちりめん御しごき　夏冬とも
一御ひふ　冷氣御羽織にても可被爲召時節
黒繻子に花筏花丸等縫入又は紫紋縮緬　紅裏
一箱せこ　御懐中もの
五節句　式日　五色びろうどの内縫入　道具さし入
平常　五色織もの　同
道具とは銀製七つ道具と稱し錐鋏小刀筆（黒紅両筆無双）物さし　花色　好きなり
一御搔取りかゝけの時は鏡付と稱し御懐中鏡と銀御かんざし鎖付なさし御懐中なりくさりは前へ下る
一公邊幷御家御精進日
御搔取り　葵御紋付　地紋ちりめん　無地ちりめん之内
色紫　萌黄　黒　藤色　ひわ色等

定女中衣服

御合着　　平日之通り

一縫模様の區別

繻子總縫入　總模樣縫入にて模樣大形也　夏は晒のしちゝみ絹ちゝみ辻

縮緬總縫入　右同斷　夏は絽晒のし縮絹ちゝみ

右の通にて縫なきを總模樣といふ

御紋裾縫入　縮めん色々　御紋五つ所　夏同斷　地合色々　腰の邊より模樣有之御振袖は袖にかゝる

右の通にて縫なき染ぬきを模樣といふ

中縫入　縮緬色々　御紋なし　袖の中程より模樣縫入　夏は地合色々

女中衣服定

一五節句之衣服

但五節句之衣服と有之は五節句計着するにあらす衣服品分け之唱にて年頭五節句其外重き御祝儀事等之節着す

正月朔日より三月二日迄

十月朔日より十二月晦日迄

かひとり　綸子　地白　地黑　あひ着　綸子　縮緬　紗綾　紅　桃色

年若は搔取りに綸子之地赤をも着す此節間着は縮めん地白或はうこんの縫入を着す此縫紅糸を交用る

髪　長かもし 絵元結　上﨟は両あや杉 以上は片あや杉　まゆ　年若は髪すべらかし眉　元服以前は 髪わらは白きわ

かひとり　しゆちんをも着す重き品也

一上巳之衣服

かひとり　緋大紋綸子　あひ着　綸子　縮緬　地白　あひ着は素縫有なも着す紅糸な用ひす

右上巳に表使以上着す以下は左之通り候事

間着素縫なも着すと記置候得共御本丸にても先は素縫無之無地白綸子白ちりめんを着致候事に付　此御方にても無地白綸子白ちりめん着可致事

御右筆より呉服之間迄

かひとり　緋常紋綸子　間着　前段におなし

御三之間より御末頭迄

かひとり　緋　紗綾　縮緬　間着　白　右同断

三月四日より同月晦日迄

九月九日より同月晦日迄

かひとり　綸子　地黒　地赤　間着　縮緬　綸子　地白　素縫有な用ゆ紅糸な不用

四月朔日より五月四日迄

九月朔日より同月八日迄

袷　綸子　地白　地赤　地黒　つけ帯　白地　紺地　萠黄地

右の外にも紅桃色紫等之段替りをも用ゆ　髪眉は小袖之部にあり

五月五日より八月晦日迄

辻　晒　地白　地黒　五月八月は絹縮の辻をも用ゆ六七月は縮の辻をも用ゆ尤絹縮には地赤をも用ゆ

つけ帶袷の部に同し　髪眉小袖の部に同し

一式日之衣服

衣服五節句と同し　あひ着は綸子を着せす紗綾縮緬を用ゆしほり鹿の子之類をも着す

髪　下けかみ　まゆ　元服以前は下かみ白きわ

右縫入之衣服輕き御祝儀事御客來等に着す

小袖

かひとり　縮緬　紗綾　羽二重　縫入紅糸を交用ゆ染色極りなし　あひ着　式日に同し

袷　縮緬　紗綾　羽二重　絽　縫入紅糸を交用ゆ染色極りなし　つけ帶　前に同し

帷子　晒　縮み　のし縮　絹縮　絹　縫入紅糸を交用ゆ染色極なし　一絹縮絽は麻重ね附候は帷子に用ゆ絹重ね附候は單に用ゆ

右縫入之部夏冬無差別　髪平日之通り

縫無之衣服

小袖　袷　帷子とも平日之通之衣服也　縫なしとは染出し模様計り附をいふ紅糸いらさるは縫なしにも用ゆ

小袖之節　あひ着極なし　鬱金紫は不用　袷帷子之節　つけ帶

總てかひとり下の帶は地合染色無差別候得共五節句等之衣服着用之節は繻子縮緬之類に縫付候

を重に用ゆ
右表使以上衣服　但表使は中かもしを用ゆ
御右筆より呉服之間迄
年頭五節句之衣服
中かもし　まゆ　縫入　中かもし　まゆ
式日　縫入　平日之髮　まゆ
御三の間より御末頭迄
年頭　縫入　下け髮　まゆ　五節句　右に同し　式日　縫なし　平日之髮
御中居　使番
年頭　縫入　五節句式日　もやう
火之番
年頭　三ヶ日計　もやう
一上巳に御中居使番緋縮緬小袖を着す
一御中居以下はかひとりつけ帶を不着
一女中　上使之節は一統式日之衣服にてまゆなし
一式日御慶事等之節　御城使之老女は式日之衣服にてまゆなし
一御婚禮之節

正月朔日より三月晦日迄

九月朔日より十二月晦日迄

髮　長かもし　繪元結銀色直後金　まゆ　服　かひさり あい着　白幸ひ菱綾 白綸子

帶と懷中物之地合かひとり之通

御色直しより　前段同樣にて白地のもの紅に相成候事

右表使以上　但表使は中かもし

右之通には候得共御色直後表使以上はかひとりに紅梅をも用

附紙　本文之通候得共　種姫君樣御婚姻之節御色直後　御同所樣御老女紅梅を着致候付
御本丸御樣子をも御問合有之候處御同樣之節は都て紅梅を着致由に候左候得は本行御定之通り紅幸菱綾を着候ては
御本丸之御振合よりも踰候付此御方にても向後紅梅を用候樣本文小書には紅梅をも用ると記置候得共專ら紅梅を用
候やうとの　思召候事

御右筆より呉服之間迄

髮　中かもし　まゆ　服　かひさり あひ着　白綸子 白紗綾

帶と懷中物右同斷

御色直しより　前段之服紅に相成候事

御三の間より御末頭迄

髮　下けかみ　まゆ　服　かひさり あひ着　白紗綾 白縮緬

帶と懷中物右同斷

御中居以下

そら色縫入　　とうあけの服

老女同様

四月朔日より九月八日迄暑中とも

髪　長かもし　繪元結銀御色直後金　まゆ

服　袷　白幸菱綾　つけ帯　同　　腰巻　白ねり　銀箔にて寶盡し附る懐中物地合袷帯之通

御色直しより　前段同様にて白地の物紅に相成候事

附紙　紅梅用候儀は前附紙同斷

腰巻　紅梅

右表使以上　但表使は中かもし

右之通には候得共御色直後表使以上袷に紅梅をも用

御右筆より呉服之間迄

髪　中かもし　まゆ　服　袷　白綸子　つけ帯　同　懐中物右同斷

御色直より前段之服紅に相成候事

御三之間より御末頭迄

髪　下け髪　まゆ　服　袷　白紗綾　つけ帯　同　懐中物右同斷

御色直しより前段之服紅に相成候事

御中居以下

そら色縫入　ごゞわけの服

老女同樣

御中陰中　御法會之節

小袖　色なし　色なしとは白地縫に紅糸なきをいふ

かひとり　綸子　あひ着　綸子縮緬之類　但色はうこん

帯　淺黄　黒繻の類にて色糸なし　下け髪

袷　色なし綸子　附帯　白地色なし　下け髪

帷子　色なし　辻　つけ帯　白地色なし　下け髪

御百ヶ日幷御年忌之節は紅糸入之縫をも用ゆ

御忌中

御忌日之服にて模樣附と御紋附を着せす自分紋目立さる縞類を着す

かひとりの分は間着うこん

御入輿之節御供女中衣服　老女

上着　白綾幸菱 裏白　あひ着　白綸子 裏白　帯　白綾幸菱

御色直之節

上着 れり紅梅 うら紅　あひ着 紅綸子 紅裏　帯 紅綾 幸菱

御三度目

上着 地黒綸子　あひ着 地赤

右同断

表使以上

御右筆

御次

呉服之間

白綸子　白紗綾　白綸子帯

御色直し之節

緋綸子　緋紗綾　緋綸子帯

御三度目

上着 地黒綸子　あひ着 地赤

御三之間

御末頭

白紗綾　白縮緬　白紗綾帯

御色直し之節

緋紗綾　緋縮緬　緋紗綾帶

御三度目

空色縫入　あひ着　地赤

御中居

使番

白紗綾　白縮緬帶

御色直し之節

緋紗綾　緋縮緬帶

御半下

地白看板　龍紋帶

御手輕にて御入輿之節御供女中衣服

老女より御末頭迄

右同斷

御中居

使番

空色模樣

御半下

右同斷

御引移之節御供女中衣服

但御先方にて式正若し替り候節は御手輕にて御入輿之節之通

老　女

地白綸子紫糸なし　あひ着白模樣縫入　帶同斷

若　年　寄

地白綸子紫糸なし　あひ着相白　帶白模樣

御　右　筆　初

地白綸子紫糸なし　相赤帶空色にても花色にても

御　三　之　間

御　末　頭

空色縫入　相赤　帶同斷

御　中　居

使　番

空色模樣

御　半　下

右同斷

右之通

文化十年酉八月十日

上　　　　　　﨟

老　　　　　　女

一冬向掻どり裾引　ねまきも掻取同し事

一夏向附帯着替も附帯致し候事

一五節句綸子掻どり長かもじ附着替縫入髪さけしたちに結

一式日綸子掻とり髪地さけ着替模様髪下したちに結

一五節句式日夏向辻に附帯着替縫入又は模様同附帯裾引居候

一御城御使之節五節句の衣服又は式日の衣服之節も有之

一御代參之節式日衣服

一御能御座候節五節句式日御祝に寄衣服着用致し候

一御誕生日式日衣服之事

一御庭しまりの節縫入掻どりからげ

若　年　寄

中　年　寄

御錠口の人

一年中冬向搔どり裾引着替搔どりからげ　　上﨟

一五節句　式日　御結納　御婚禮　　老女　同様

一御能の節　御誕生日　御庭しまりの節

一夏向附帶裾引着替幷に朝番は平日帶附にてからげ

御本家

中﨟

御前詰

一年中夏冬共裾引平日帶附着替も同し事

一五節句　御祝日　　若年寄初同様

西御殿

中﨟頭

中﨟

一年中中出番すそ引冬向晝前搔どり着替裾引帶附朝番はからげ致候事ねまき帶附

一夏向晝前はすそ引に附帶着替より帶附に致

一御祝日　　若年寄初同様

御小姓

一御本家御中﨟同様之事

表使

一五節句綸子掻どり裾引髪さけ中かもし着替縫入掻取からげ

一式日綸子掻取裾引髪地さけ着替模様掻とりからけ

一夏向五節句式日辻に附帯髪同し着替縫入模様附帯之事

御右筆

御次

呉服之間

一年中夏冬帯附からけ着替なし

一五節句綸子掻とり裾引髪中かもし附着替模様帯附からけ

一式日縫入掻とりからけ髪下けしたち着替平日附帯からけ

一夏向（五節句式日）附帯着替平日帯附からげ

此内右筆は古く勤候人計り裾引着替よりからけに致候事

御三之間

一年中平日からげ帯附着替なし

一五節句總縫入掻取からげ髪下け中かもし着替正月計模様跡は縞物

一式日模様掻どりからけ髪平日着替縞帯附

一夏向（五節句式日）附帯からけ着替帯附

御末頭
御使番頭

一年中白なし縞からげ
一五節句縫入掻とりからけ髪さげしたち
一式日は平日之通り
一夏五節句計附帯髪さけしたち着替平服

御中居
御使番
御火の番

一夏冬平日下かた風の着類
一正月計縫入白付帯附からけ　五節句模様帯附からけ

御膳所番
御半下

一平日夏冬共上かた風の着類　一五節句計模様帯附からけ

茶所子供

一平日夏冬共下かた風着類
一正月計縫入振袖白附にて帯附ひしこ下け格別の衣服着用致し候尤皆々豪家の宿より願出候人ゆへ

踊り子多く別物に致し候

腰帯の事

一上﨟初三字名の人梅尾杯の類岩野白き腰帯

一中﨟初おの字名の人赤き腰帯　御簾中様附は老若共白

一御次頭御使番頭に成候とおの字名に相成候おくらおはまの類

一御末の人は源氏名桐壷梅ヶ枝の類紫こし帯

一茶所子供は源氏名赤こし帯

一三月三日御雛祭之節

緋の大紋紅裏掻取

合着白大紋裏帯は黒縫入

同紗綾紅裏掻取からげ

合着白ちりめん紅裏

同縮緬紅裏掻取からげ　合着白

同ちりめん紅裏白重黒帯附

右之外末々縞物着用致候事　御雛両御殿御持に付　御簾中様御附女中殘らす三月三日計はからげ

上﨟初表使迄

御右筆
御次
呉服の間

御三の間
御末頭
御使番頭

御中居
御使番
御火の番

候事

一御婚禮之節女中衣服

御式掛り

御兩所

上　　﨟

同　老　　女

若　年　寄

御　錠　口

中　年　寄

中　﨟　頭

中　　﨟

御　小　姓

一御結納之節地白綸子間着白縮緬縫入紫色なし着致し帯も白地縫入

一御婚禮之節白幸ひ菱織物白裏相着白大紋同白裏帯白幸ひ菱織

一同御色直し之節搔どりかちん色本ねり無地紅裏相着緋の大紋紅裏帯赤色之事

表　使

御　右　筆

御婚禮之節

一地白綸子紫糸なしの縫入相着白紅裏

御婚禮之節

一中色總縫入紫色なし模様相着白紅裏掻とりからげ

御婚禮之節

一中色模様紫色なし白重帶附からげ

御次
呉服の間
御三之間
御末頭
御使番頭
御中居
御使番
御火之番

右記中 御本家とは本末の義に非す殿樣方の義也或は御表樣とも稱する事あり 西御殿は 御簾中樣御住居殿の稱なれは 御簾中樣方を總して西御殿と唱ふ

附 錄

衣服之事諸向より 公儀大小御目付へ問合書

此一書は衣服の事を 幕府の大小監察へ諸向より質問應答を記したる也 御家に關する記には

非され共服制古實等の事本編の參考に足るへきものあり故に附記す

原書には袈裟幷武具問答の事を合記す爰には衣服に係る條のみ割載餘は典禮行列の部に分記す

御紋附服着用問答之事

一文化三年寅二月四日御旗奉行之本多攝津守とのより御目付へ問合之事

御旗本方其身御紋付之御時服拜領致し候は丶三代目迄着用を致し候ても不苦候哉之旨聞合度候

返書之通りにて宜敷候二男三男は着用致事決て不相成候事

一文化六年巳十二月廿一日新御番頭之羽倉和泉守より御目付へ問合之事

一御旗本にて御紋付之羽織親拜領致し候は丶其總領計一人着用致候ても不苦候哉又は自分拜領不致候は丶着用難成候哉此段奉伺候以上

返書　親拜領仕候莠御紋附之羽織總領計にて着用致事不相成候事

一文政二年卯九月十二日六鄕佐渡守殿より大目付へ問合之事

一万石以上以下共御用召之節は御紋付之御服は不相成候處前々より仕來にて着用仕候分は不苦候哉此段問合せ度候事

一返書　由緒有之候て着用致來候は丶格別其外決て不相成候事

引下け勤之者御紋付着用之事

一文化十二年亥三月十一日大目付役之中川飛驒守より御目付彦坂三太夫へ聞合之事

一御支配下之内にて御目見以上持格にて引下け勤之者其父勤役中拜領仕候莠御紋附御時服右引下け

勤之者　殿中へ着用致し罷出候哉又勤に付候節は着用不致身分に付御禮廻勤等之節は着用致候哉承知得度候事

右引下け勤之者御徒目付表火の番御紋付御時服着用之儀は素袍長上下着用致し候節幷に身分に付御禮廻勤等之節計着用致候筈に候其外殿中向へは勿論外出之砌も勤に付候之節には着用不致候之心得に御座候此段彥坂三太夫より挨拶に被及候事

長上下之事

一長上下は諸廡を用る事は本式也今時は龍文絹廡之類を用る事は略儀ならば殿中憚るへき事なり既に文化八年未二月內田和泉守とのは絹廡之長上下着用にて罷出又文政元年寅四月上杉駿河守殿龍文之長上下着用にて罷出候處御沙汰有之しか家之先格之由押て答て用られたり都て色合は定りのなき物也古へは無地を本式としてたまく小紋を用しか享保之頃迄は多無地也寶曆之頃より多小紋を用る事になれり又古の搢振りは袴の腰板立て狹くして紐を腰につゝけて出して兩方へ引通したる物成りしか今は切て別に付るなり又裾に括りを入途中步行之時は括り上る事は本式成るに今は袴より別に紐をは出して括り上る也但し凶事には淺黃の無紋を用る事なれは花色に無地は好へからす

半上下之事

一都て半上下といふ物は足利家之頃には素袍の事にして今の上下にあらす足利三代義滿公之時代內野之合戰は正月元日に發る此時殿中祝詞之面々素袍之袖と裾とを括り上て出陣有此時より此上下

之形初ると云其後又十代之義稙公攝州有馬の温泉湯治之節供奉之徒衆廿人肩衣に半袴を着せし事有り此時より此上下之形初るとも云何れも定かならすされとも鎌倉年中之行司に鎌倉との出門之節に金襴の肩衣に小袴とて羽二重の括り袴を着せし事あり又靜か物語に梶原か靜を向に行所之繪に今の肩衣と袴を着せし躰もあり去は今の上下と言物は鎌倉足利家の頃より以後専ら用る物と見ゆるなり

一芭蕉布上下之事享和二戌年四月十一日遠山美濃守より大目付へ問合せ之事

一五節句又は式日の内都て夏向芭蕉布上下着致し候ても不苦哉　公邊御定法相伺度候以上

一返書　目立不申候分は着用致候ても不苦候旨大目付安藤大和守どのより挨拶に及れ候事

羽織之事

一羽織といふ物は足利六代義敎公之頃まて是なし其以前迄は胴服といふ物あり其丈至て短くして胴計に着す此一名を羽織と名付たり是は帶をしめすして羽織懸て着するゆへの名なり足利の頃には常に是を着さす旅行抔の節には風を凌く爲に着したる物なりしか後には羽織といふ物例服之樣に成て又後々には禮服となつて今時は役羽織抔といひて役服になれり既に　公方樣には遠御成の節には徒組頭には茶縮緬の單羽織に萠黃紐なり御徒には平生とも黑縮緬之單羽織に茶の紐なり御小人目付御玄關番中之口番には黑絹無紋之單羽織に茶の紐なり御小道具組頭には萠黃縮緬之單羽織に黑き紐なり御小人御中間之類には黑絹單羽織に黑紐なり尤平日着用之品身分に依て遠慮あるへし又四季の相當あり袷羽織には紐丸打を用單に平打を用る也

扨又阿蘭陀人登城之節は　公方樣には御廉上下の上に御羽織を被爲召て　御覽ありし也扨又風崎羽織と言ふ物は騎馬以上の人着用の物成しか今時は差別なく人々着用する事なり

袴の事

一袴といふ物は地合は何と云定りのなき物なり五月五日より九月八日まて夏の分を用九月九日より五月四日までは冬の分を用る也古へは金襴緞子抔を用し物成今時は茶宇丹後嶋抔は夏用るなし例也　巖有院樣之御代万治寛文之頃まて繻子純子抔を用し物也よつて袴は何といふ定りのなきもの也

白無垢之事

一白無垢是を小袖といふ白羽二重にて拵へ一つ着るを本式なれとも二つ三つ着る事子細なし公卿方には綾を用る也古へは熨斗目を用ひすして白無垢を用られし物なり今も日光御門衆の諸太夫は白無垢の上に直に大紋を着す夏は白帷子を用染帷子も不苦といへとも本式にあらす既に文化六年巳四月十七日紅葉山への御參詣御延引に相成り六月十七日に成たる事あり此時大紋行列供奉之内二人染帷子着用之人俄に着かへられし事あるは必々白帷子を用る事と心得へし

熨斗目之事

一熨斗目と云は全躰ちぢらに對していふ名なりちぢらをのしたるゆへにのし目といふ名なり今はちぢらをちぢらのし目といふ僻事也扨此服袷を本式とし綿入を畧儀也といふ説あれども左にあらす袷のし目は四月朔日より五月四日まて着用なり又ちぢらのしめは四品以上の官服にして大ちぢら

小ちじらの差別は無之唯四品に大ちじら侍従に小ちじらとありて侍従以上の官服也文化年中に建部内匠殿諸大夫にてちじらを着用致し度旨伺れし所無用之旨御沙汰有之又陪臣にては主人より賜りし由緒にて是を用る事なれとも文政年中に南部美濃守殿代替り御禮之日家老に大ちじらを着せし人有しか如何之由御沙汰有之又松平陸奥守殿には御達し之上着用せしむなり扨又熨斗目の腰の嶋明らか成事は上躰肩より裾まて嶋筋通りたるをは足利家之頃には衰微之様に思ふて大慶之節には新き嶋を目立様に別に縫付て着用せし物成を近代に至て腰替り抔と言ふ爰を以て其頃より凶事には無地腰の熨斗目を用ゆる事になれり

帷子之事

一帷子とは地は何にても單成る物を言也片とは方つら也都て裏なき物を云也びらうとは薄くしてひらめくを云御殿の帳帷も片ひら也机に懸る絹も單ゆへに片ひらと言箱に納物を包む絹をも入帳といふ皆是單成物なり夏着する麻の衣も單成故麻片ひらと云也麻の衣は宜敷人の着すへき物にはあらねとも夏の暑さに堪兼て詮方なく内々にて密に假て宜人も着する也依之染るにも不及白きを用るを本式とする也是ゆへ染帷子は賤しき人の着する服なり

下着の事

一白無垢は諸大夫以上之物なり其以下は淺黃無垢を用ゆへし隨分色は濃き方はよろし都て花色萠黃茶抔は子細なし紕色鳶色の類は年齢に依て用ゆへし又嶋小紋之類は急度したる節には下着にも用ゆへからす

火事羽織之事

一火事羽織は明暦三年大火之頃までは諸大名は皆火事羽織は革を用ゆ御旗本は羅紗を用ゆへし大火後より諸大名は皆羅紗を用御旗本以下は輕き者迄革火事羽織を用る事になれり都て色合は定りのなき物なれとも先黃羅紗は遠慮すへし其外都て火事裝束には法式之なき物なり

一寬文二年子三月廿九日堀田相模守殿より御書付を以被仰渡し

一御老若初御出番夏向き出火之節に一日革(本のまゝ)火事羽織相用不申候樣相成候に付諸向へも其旨可相達事

一万治二年亥正月廿一日新御番頭永田筑後守より御目付へ聞合

出火之節御場所又は風筋に寄り登　城且寄場所へ罷越候節召連候家來侍以上のもの火事具之儀所持致來候目立不申候之仕立等之革火事羽織相用候ても不苦候哉此段聞合度候以上

一返　書

出火之節召連候家來侍以上之分火事具之儀御定法は無之候得共火事場同心着用之役革火事羽織に似寄候品に無之候はゝ着用致させ候ても不苦候旨被及挨拶候事

南紀德川史卷之百四十九

臣　堀内信編

服制第三

服飾圖式

一裝束は服制第一卷に既說の如く有職衣紋の古實制裁等多端復雜斯道專門の書冊及圖式浩翰備具それは圖式を示すの要なしと雖も其書に據り照查せんか頗る渺漫一見領袖を得やすからす依て唯服制部乃至典禮御式部等散見の者參照に便ならん爲め極めて其大畧を揭け束帶とは如何のしめ衣冠とは那樣といふ邊を示すのみ

四位以上の袍黑此文丁子唐草

大塚嘉樹云く今世纓の末と巾子の末の上に文をとち付るなり

蟬翼中に菱付たるか古の有文なり

正曆の比迄は來た紫にて染たれとも四位の袍に紫を多く入て染たれは正位の袍に似たるへし是に依て四位の人とも三位の袍を用ゆ是違ひ來れる始なり

四位以上の袍黑本名橡と云

懷中に帖紙あり

一一說に當將軍家御袍丁子唐草に葵御紋也又織文集に丁字唐草に御紋と松竹唐草に御紋と二品みえたり

同 後

大塚嘉樹云く
裾之事依官位有長短延久二年の符宜建暦二年の制真寛三年の制符等有之代に依て寸法不同

衣冠　前

袍　四位以上黑　本名橡　此文轡唐草

冠　懸緒紙より也或は紫組を用ゆ本式に非す　勅許にて用之

野劍　俗に衞府の太刀と云

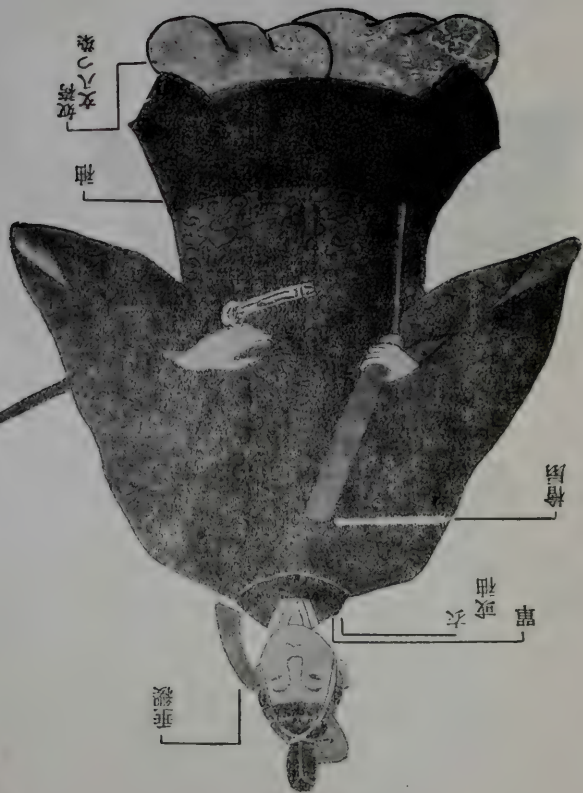
嘉樹云毛抜形に平鞘の太刀とも云辰方云武家にては糸巻たるへし

袴の下に下袴或は腰次を着す外へは見へす

當時奴袴に袍はたりを着するを衣冠と云單又は衣斗り着するをかさねと云

嘉樹云單を着するを單の衣冠と云也

懐中に帖紙あり　襪をはく

同後

はこゑを不立
あてこしあり腰帯と云
衣冠には石帯不用也
一に云ふあてこしに非す小紐なり
あてこしは　はこゑの下にあり

直衣
此文は臥蝶今ふせんれうと云は誤也
立烏帽子或は風折或冠時に依て用之
單
衣
檜扇
あてこし有腰帯と云
奴袴
下に下袴或は腰次を着す外へは見へす
襪を履

小直衣
嘉樹云或號狩衣
直衣地下不着
立烏帽子
此色は香染か
何色にても色にかゝはらす
蝙蝠或檜扇
あてこし有
腰帯と云
袖くゝりあり
奴袴
下に白袴を着す
外へはみえす
襪はくへし

狩衣　武家四位着之

風折
懸緒紫組
本式紙より
蝙蝠
袖くゝり
あて腰あり
腰帯ご云
奴袴
武家にては狩衣の時は小さ刀
打刀佩副又糸巻の太刀を佩副
る事もあり
武家にては襪はかすす足也

直垂
武家侍従以上着之
紫と紅は可憚也
左折風折
髻結本式紙より
江戸にては侍従已上
白小袖
小さ刀
作り様古と異也武家出仕には
打刀を佩副る供奉は糸巻
大刀を佩副る也
蝙蝠
近年腰紐の結余りを
垂下るは誤なり

冠　五位以下は無文

袍　色淺緋
文わなしと云本名
はわちかへと云わ
なしは別にあり

嘉樹云今世淺緋なく
深緋斗也茜根染なり
あかね今世知れかた
きゆへ蘇芳染を用ゆ
紅染は甚以て非なり

同後

嘉樹云今世大帷と號し單と下重の襟を付て袖に單斗付て用之頗る略なり

五位衣冠　前
武家五位着之
白小袖
糸巻太刀
武家にて必糸巻を可用
四位以上にても野劔を用る事古來なし
木瓜鍔
淺黄奴袴
うす花田老者程
うすくすへし
懸緒紙より
嘉樹云五位の侍從
は紫の組掛緒なり
扇
武士はぬり椙の扇を
持公家方にては白骨
を持事習なり
武家必黒骨を用る事なり

同 後

袍色淺緋
時常衣冠又直衣狩衣之時是を着
す淺深隨年隨官斟酌すへきなり
禁色の聴たる人は織物不然人は志
々羅の平絹裏何れも平絹色表同
奴袴　嘉樹云　きぬかり袴なり
布の和訓ぬなり
足袋不履

大紋
布直垂也
武家五位諸太夫用之
俗に大文と云
熨斗目
左折風折
かけを紙より
嘉樹云直垂と裁縫聊替事なし素襖との替同胸緒革と打組との替也
小さ刀古に異也　打刀を佩副る上野増上寺
御成豫參供奉の時は糸卷の太刀を佩副る
蝙蝠
近年腰紐の結余りを
長く垂るゝは誤りなり
左右共に　此方の文は
なし削去るへし

布衣
武家無位無官着之
素襖の上也服を以
士の上下を分つ也
左折風折
かけを
紙より
熨斗目
小さ刀 作り古と異也 打刀佩副る
嘉樹考
一古は布衣と書てかりきぬとよむ
一今は織文あるを狩衣と云ふ
無文なるをほいと云
蝙蝠
腰帯あり
こてこし共云
奴袴あさき無文
武家にては襪はかす
徒足也

素襖　又素袍
武家無位無官
着之布衣の下也
侍烏帽子
折烏帽子
紐革むすぶ
帯へ挾は誤
懸緒紙紐也
額ヽ風口へ入は誤
嘉樹云折品々あり
其家々の折あり
熨斗目
小さ刀
作様古と異也打刀佩副る
素袍の時武家にては
蝙蝠不持
此所に紋
あるへし左
右とも同し

退紅
依家傘持
沓持は着之
內衣不定
荒染共云地布
薄紅染
袖くゝり木綿の平組
刀
黑袴布

白張
仕丁着之
傘持沓持等着之
内衣不定
布白粉張
袖くゝり木綿平打

殿中服雜服

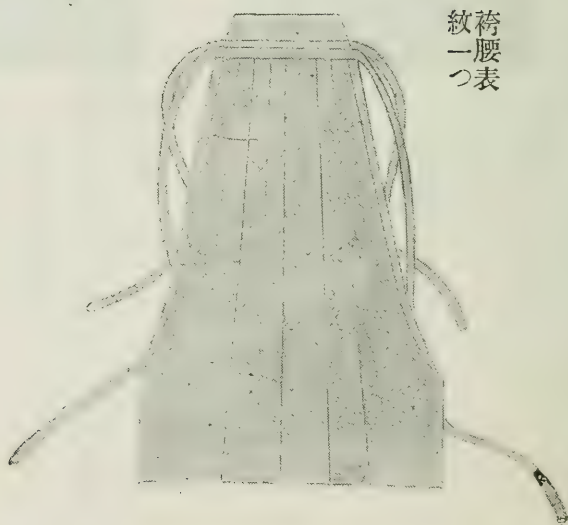
殿中衣服之事服制第二卷に記せり然るに多く當時習慣の通語ありて即ち上下と唱へ熨斗目と稱する如き其現品は既に絶滅名稱亦耳目に觸れさる今日に在ては更に何等の物たるを制しかたく想像も及はさるへし故に概略の圖様を掲く殿中衣服定及ひ第一卷緒言と併せ見るへし

一圖中時服を畧す普通熨斗目と異なるは唯葵御紋大きく經二寸二三分斗あり但しのしめに限らす服紗もあり　幕府にては常に時服拜領之事ありたれ共　御家にては稀有の事とす然れ共諸士多く用ひし也時服は拜領にあらすとも着用妨けなく又服商公然市に鬻を得たり

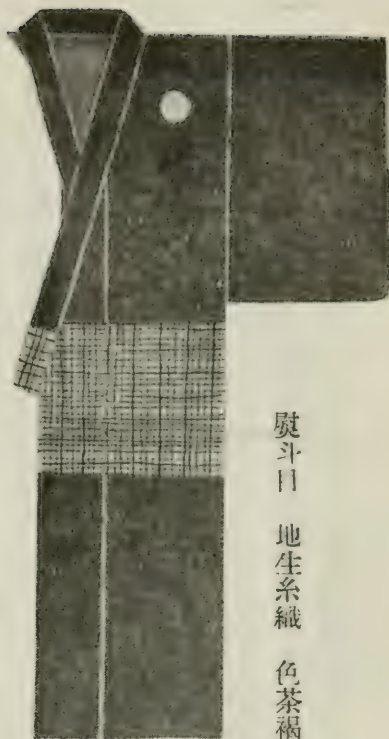
一圖中通觀以て服制の沿革時勢變遷の度粗見るに足るへし即ち肩衣廢して羽織となり平袴は襠高に變し又裁付細袴に轉々す冠りものに於けるも同樣にして安政開港以來漸次幾分か洋風に擬似せんとしつゝも尙憚忌の色あるさま也獨り服飾のみにあらす世事百端同一轍理ならんダン袋はヅボンの母深笠は麥わら帽子（シャップ）の先天と評せんも一奇といふへし

麻上下　單に半袴とも云　地麻　淺黄小紋　鮫小紋霰小紋篭小紋等あり又兼房小紋あり畧なり

脊に紋一つ

袴腰表紋一つ

長上下製同し但袴半袴より一尺許長し畧す

小さ刀

長袴の時は小さ刀を用ゆ・脇差の通りにて小柄笄あり鍔寸切刀の如し下緒亦刀の通り長し鞘蠟色

熨斗目　地生糸織　色茶褐紺淺黃等

腰明縞色々

腰明きなきを無地

熨斗目と云

紋五所

服紗小袖　地黑羽二重絹紬等

色黑を常とす淺黃鼠等あり

九月重陽は淺黃に限る之を千草

小袖と云

紋五所

染帷子　地麻晒　極暑縮を用ゆ

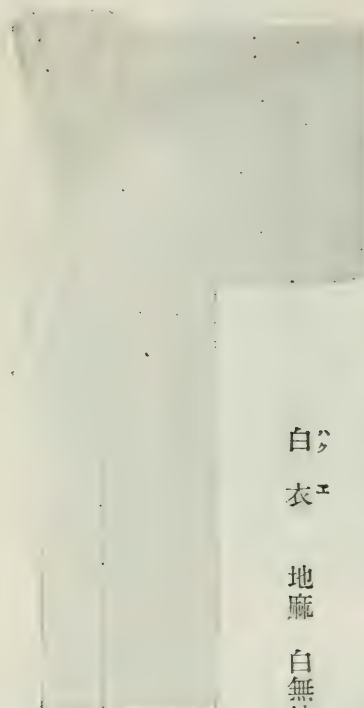
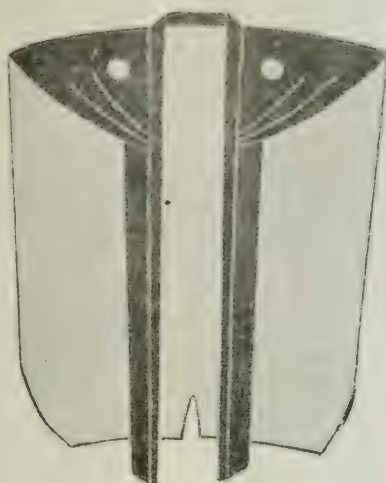
色淺黃鼠茶白茶紺等色々あり

正式は麻淺黃に限る

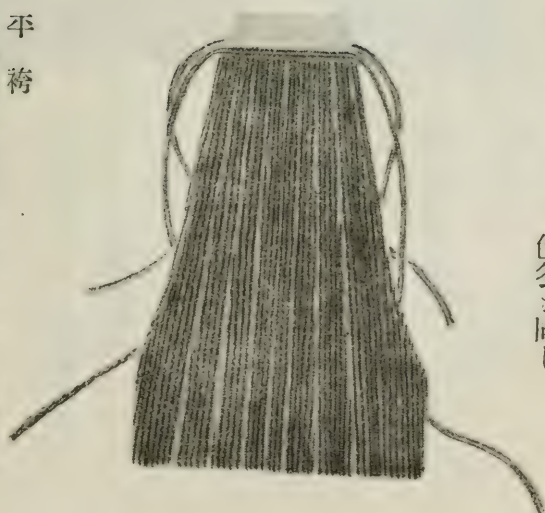
紋五所

白衣　地麻　白無地無紋

八朔にのみ用ゆ

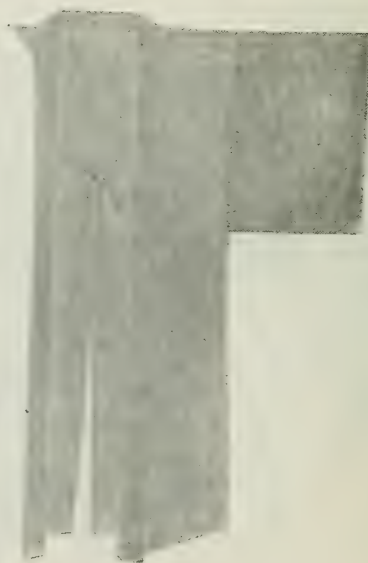
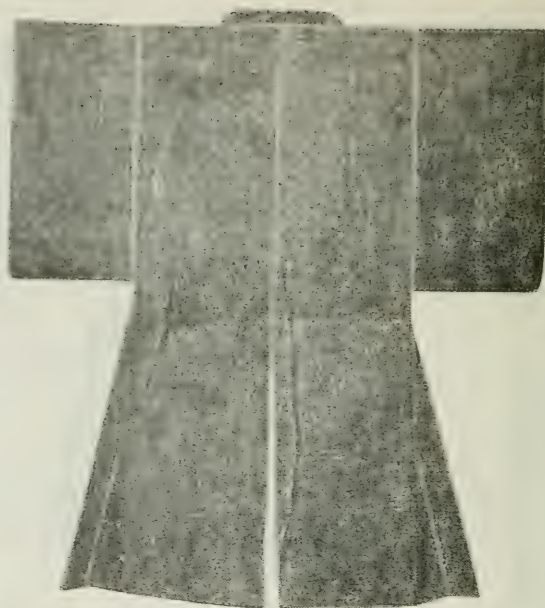
肩衣（キヌ）

地重もに絽を用ゆ
色黒茶紺黄萠黄紫
爲色鼠等色々紅白は用ひす

肩衣平袴を繼上下共稱す
殿中常服也

紋三所
裏八丈海氣茶苧の類
夏は單　絽　紗　綟子の類
　色冬と同し

平袴

地　仙台平　茶苧　小倉　桟留の類
裏　肩衣に同し
夏は單　仙台平　五仙平　葛織
　川越平　小倉桟留の類

打裂羽織（ブッサキ）　割羽織とも云

地木綿に限る
無紋

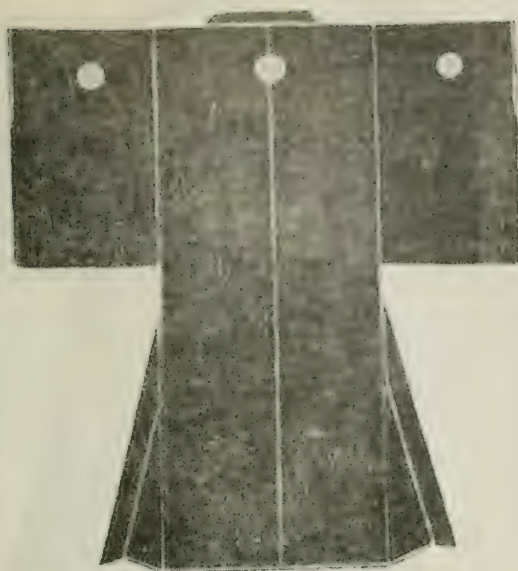
色紺茶浅黄鼠等
夏は單　麻縮絽等

肩衣着用の比には御道中御供野服御供の外勤務に用ず唯御作事奉行諸庭奉行諸御屋敷奉行等着流勤のみ勤務に用ゆ従前はいつれも無紋也

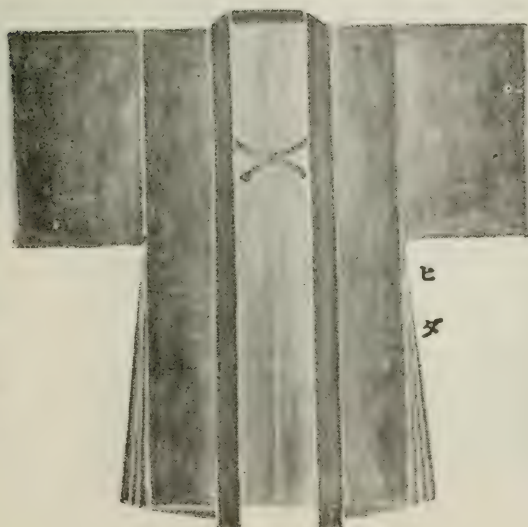
安政元寅年八月より御家中常服御目見以上は打裂羽織右已下丸羽織三人扶持已上紋付右已下無紋となる

文久二戌年十二月朔日より御目見以上は紋付割羽織以下役は同無紋伊賀已下割羽織着不相成無紋丸羽織着用羽織紐左之通定めらる

御家老　白

御役人向重役　浅黄

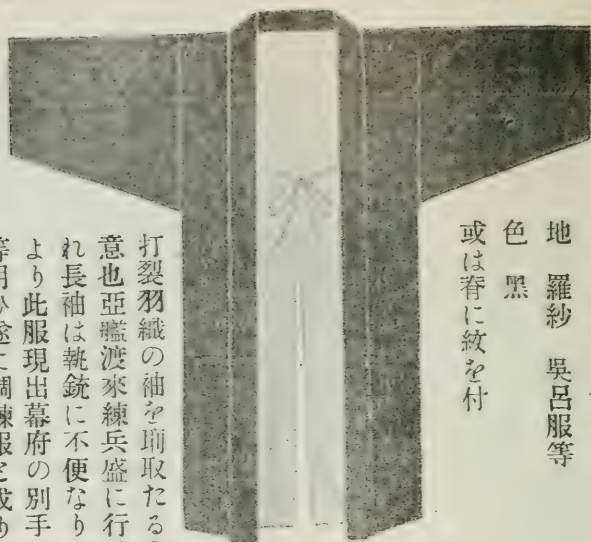
丸羽織　地羽二重七子絹紬等御醫師は
縮緬をも用輕輩は木綿をも用
色概ね黒

安政元寅年以前諸士公務には丸羽織を用ひす醫師畫師坊主は公私共に用ゆ諸士私行に用ゆれとも柔弱視する習慣たり

十徳　地　生絹織　薄もの
色　黒　無紋
廣袖
紐友ひも平ぐけ

十徳は醫師畫師坊主等の正服也
熨斗目着の廉に着す
夏冬差別なし

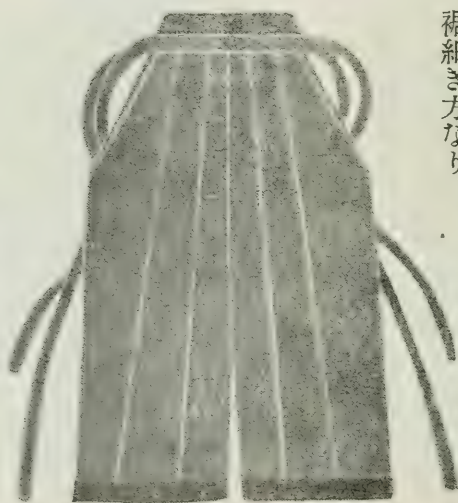
刞袖羽織（ソギ）　一にテシヤ羽織と稱す

地　羅紗　呉呂服等

色　黑

或は脊に紋を付

打裂羽織の袖を刞取たるの意也亞墨渡來練兵盛に行はれ長袖は執銃に不便なりしより此服現出幕府の別手組等用ひ遂に調練服と成り來る筒袖に擬したるなり慶應三年より火事羽織に替へ又殿中にも着す退局直ちに調練出張に便にす

野　袴　地純子織物の類　裾　天鵞絨

御旅行騎馬駕籠御供の面々用ゆ小袴とも云踏込袴も之に類し裾細き方なり

文久二年衣服省略發令以來平素用ゆる事となる尤花美を省き棧留小倉の類とす

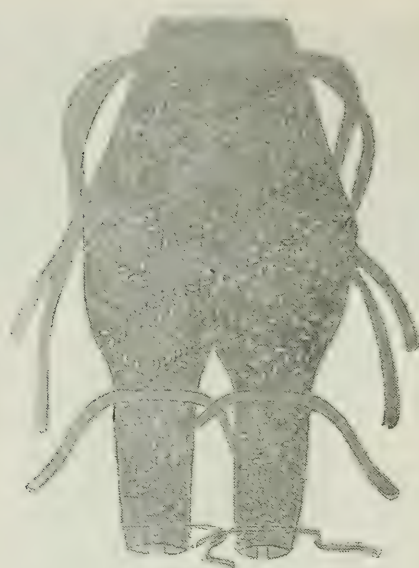
馬乗袴

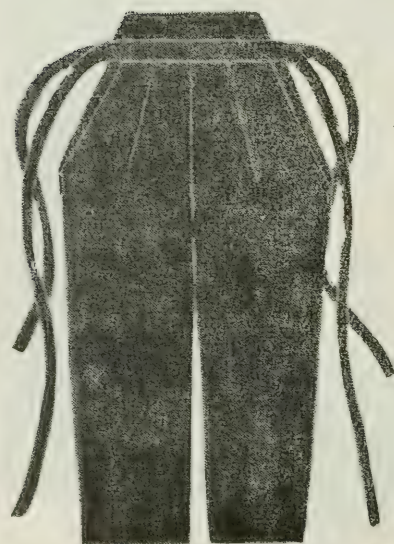
地重もに小倉を用ゆ馬術修行にのみ用ゆ馬術御覧見分の時は肩衣に此袴を着し馬上にて御使御名代勤務にも此袴は用ひす平袴にて股立取りし也

襠高袴

地合品柄は平袴に同し馬乗袴同様にて襠少し低し幕府衣服節倹を發令供連減少等より馬上登城多く成り自つから流行一般用ゆる事に至り麻上下も襠高となり遂に平袴(半袴)廢毀に至れるなり

裁付袴（タチ）　地木綿中形色種々

亞艦渡來後西洋調練盛に行はれ下曾根高嶋派初諸家練兵皆之を用ひ或は家々の揃ひをなし何色何形は誰派誰家杯と識別するに至れり半着服引より轉し來る

細　袴　地羅紗吳呂服の類色黑

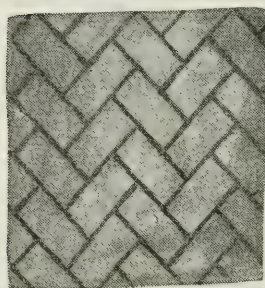
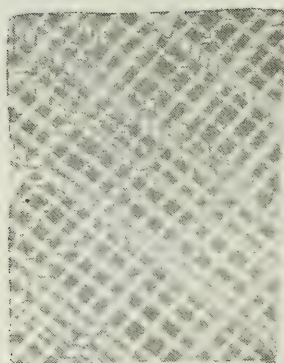
亦調練服也裁付より轉し來る一つにダン袋とも俗稱す何の謂たるを知らす此比は專らテシヤ羽織を用ひたり漸次洋服を模擬し來るの度察すへし

細袴以後ヅホンに轉す

野服　半着　地木綿　淺黄小紋又は中形
夏は麻をも用ゆ
夏冬共單

股引　地色共同上　但小紋に限る

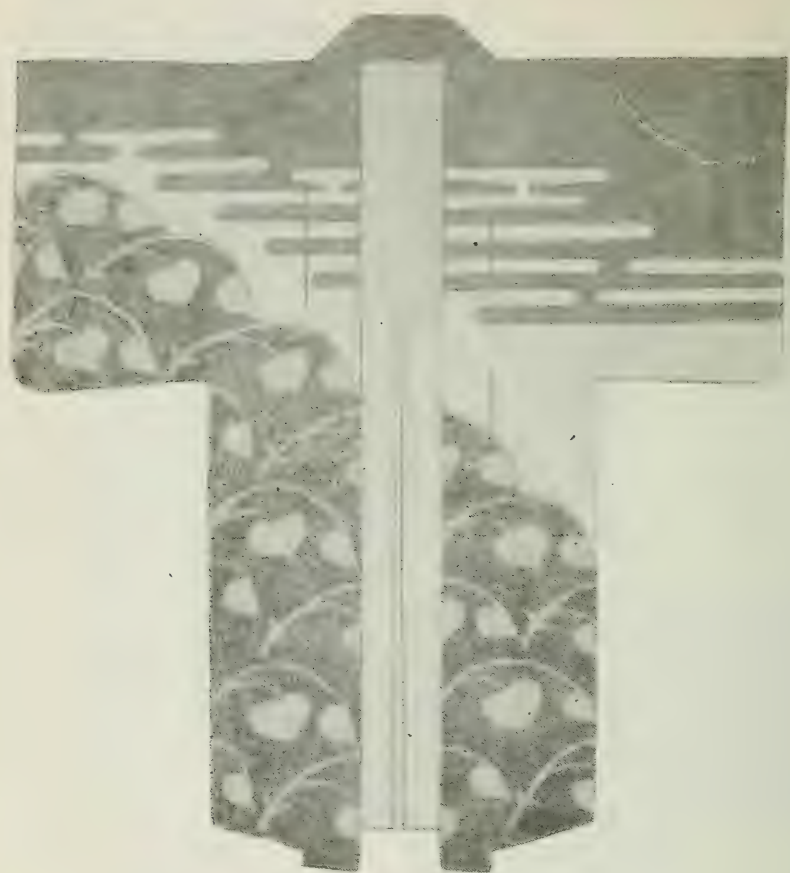
脚半

打裂羽織に半着股引脚半を野服と稱し御旅行御放鷹御供之に限る總して遠行には公私共用ゆ野服には三尺帶と稱し麻中形の一巾を四折にし帶の上に締め前にて結ふを常とす又御供通りには夏冬共一文字管笠白麻紐を用るの例なり

一君上御野服も御打裂羽織御半着御股引脚半御草鞋なり都て製裁前記に同しと雖も御半着は重もに
中形木綿物を被爲召模樣柄色合等種々無量枚擧し難きも概ね草柳地ない繩業平菱。中色瀧縞に海
松形。藤鼠地智惠輪形白上り。薄栁地飛檜垣形同黒檜垣形。しやれ栁地藍五崩形。花色地飛小
菱繽。白地鳶三崩形。空色地白綃手形等の類とす御股引脚半は多く兼房小紋鎮色小紋等被爲召た
り御半着の柄一二を示す

一御伊達羽織

常御野服には通常御打裂羽織なれとも御鷹野又は追鳥狩伏鶉等の時は伊達羽織といふを被爲召冬は木綿袷夏は麻布にて大形染分け抔一と際伊達を裝ひ目立ちたるもの也　將軍家毎歳駒場野御成には必す伊達羽織を被爲召れは此御風に准し給ひしならん地合等雛形帳ありて丁字茶裾白上り網代。紺地上の方影七寶白上り。花色地に紺小菱續。空色地裾七寶續白上り。薄柿地、裾中色七寶繋。藍地立浪白上り白地雨龍藍上り。空色地に裾釣万字白上り。白地に藍七寶繋。上鳶地に裾藍網代紺地に裾影七寶白上り等其他逐一枚擧すへからす

顯龍公には江戸御庭御放鷹の時被爲召たるを信常に拜し奉れり或は　將軍家より御拜領又は　御簾中樣より被進の御品ありしと傳へり今時に在ては頗る珍奇の感あれと御召の一二を左に揭く余は押して知るへき也

君上御伊達羽織の時は御供の御側向も伊達羽織を着すいつれも思ひ〳〵に伊達を裝ひたり

長合羽　地　木綿　袷

色　多く紺無地　或は草色鼠茶等あり

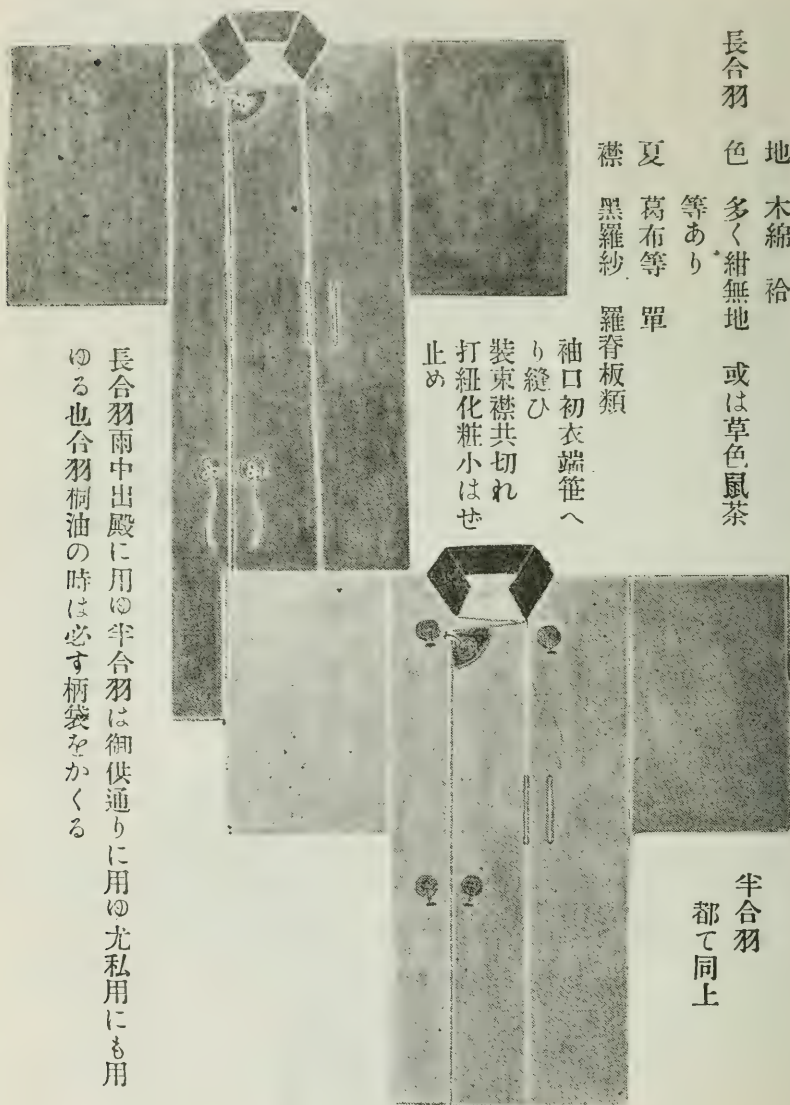
夏　葛布等　單

襟　黒羅紗　羅脊板類

袖口初衣端笹へり縫ひ

裝束襟共切れ

打紐化粧小はぜ止め

半合羽　都て同上

長合羽雨中出殿に用ゆ半合羽は御供通りに用ゆ尤私用にも用ゆる也合羽桐油の時は必す柄袋をかくる

桐油

柄袋　大小

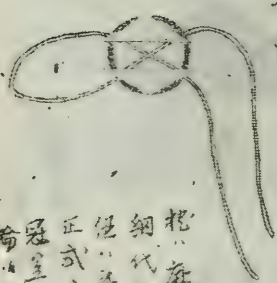
紺黒淺黄羅紗又は羅脊板　裏海氣
紐又はこはせにて両刀の栗形邊に結び留む
御道中又御鷹野御供には革製金紋の分用ゆるあり

後ろ

紙製袖引　色黒青淺淺黄等
御旅行御供歩行の面々一同桐油を着す
馬上御供も同論也地廻の御供には手傘
を用ひさる分は桐油也余は大風雨に用ふ

着する時は如此両袖を後ろへ折る前に双
方の穴なく刀柄の上より覆ふ容易に手も
出し難し故に櫻田の變不覺を取りたるさ
の事より人々注意する事さなれり

冠笠
一文字菅笠
笠當

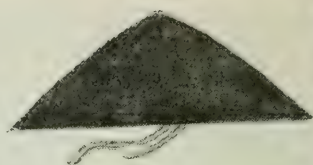
陣笠

張貫製　漆塗
色隨意專ら黒叩き蠟色塗を用ゆ金にて自紋を付す白叩き裏金は幕府の御使番の役笠故禁制なり
出火又は大風雨或は炮術町打等に用ゆ嘉永癸丑後和流調練には必す用ひたり文久三年二月御道中御供には菅笠を廢し上下之を用へきの發令ありたり

端反(ハソリ)笠

張貫又は皮製　蠟色塗金紋裏朱
文久二年衣服節儉供連減省の幕令出閣老諸有司馬上登城調練出場等刵袖羽織細袴の比より之を用ゆ陣笠より變轉聊輕便に取れるなり
長州征伐の時　將軍家にも用いさせられ當公御拜領あり

韮山笠

捻紙縷組(カンゼコリ)製　漆塗
金自紋を付す
嘉永癸丑後伊豆韮山の御代官江川太郎左衛門門下生調練に用ひたるに初る平らに二つ折とし携帶に輕便なるより西洋調練には一般用ゆる事となりたり

網笠　菅の編笠を紺無地木綿布にて包む

若山にて諸士川狩山獵に用ゆ此笠を冠り紺木綿單袖なし半纒を着し一刀にて出るも免許せらるゝ事古來より之制なり微行忍ひ笠とす但し若山に限る

宗十郎頭巾　地黒縮緬袷

醫師等制外の者用ゆ諸士或は同と雖も遊惰視せられ擯斥の方なり

山岡頭巾　地黒八丈

上下の諸士冬分公私に用ゆ但正式には用いず

同上冠りたる形

上部袋形を三に折り其端を額に挿す両端の垂れを首に纒ふ

役羽織同看板法被

御徒役羽織は黒縮緬無地單丸羽織也圖畧す此外諸同心御小人御中間等種々の役服有と雖も今不詳

伊賀役羽織　淺黄地　小紋
紋丸に十字形

御小人押役羽織　地淺黄木綿單紋白丸
白竪山形染抜きだんだら筋と云

御先手同心役羽織

黑絹地　單　紋大形崩字

襟　紐下　白一文字下圖と同し

表御門番儀式の節又は諸警固の時等着す

一說に紋は追ひ茗荷又は追ひ橘の如くにありしと

五十八人同心役羽織

淺黃絹地　單

紋同上

同上の時着す

御小人役羽織

黒絹地單無紋
御小人目付　御長刀の者
御小道具の者　御供世話役
御使之者　御口之者等着す

七里之者役半纏

木綿鼠地
龍虎竹梅模様色入
襟　黒天鵞絨

御駕之者　御茶辨當持　御雨覆　御玉簞笥持
等は右同斷長着也
御馬飼　御挑灯持傘枠菅笠雨具枠持等黒木綿無地長着

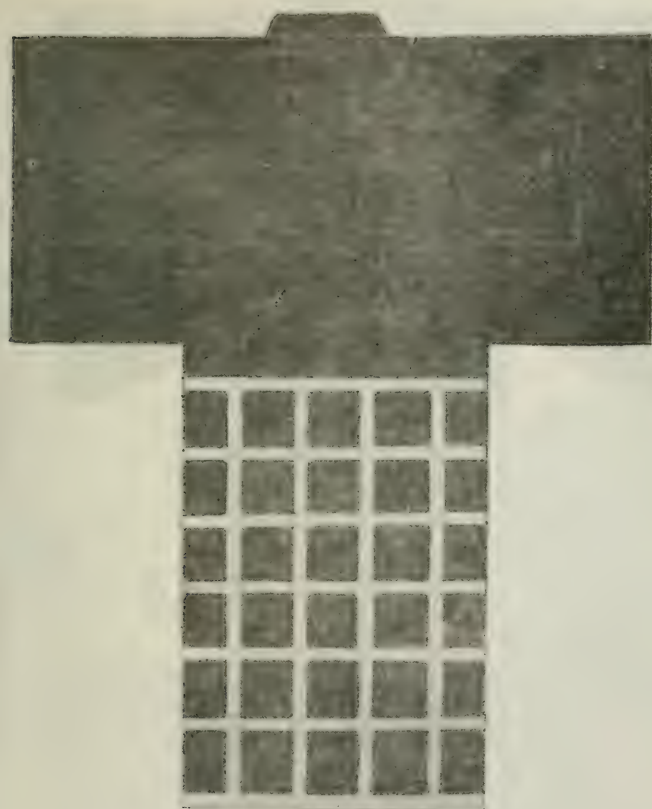
御駕籠之者看板

黒絹無地長着羽織着迄は如圖紋五所
地　紺木綿右羽織着以後は黒木綿無地となる

明和天明比は黒地紋
白ぬきにて左の如し

絹地淺黄目立ざる
小紋
夏は麻淺黄小紋

御草履持羽織

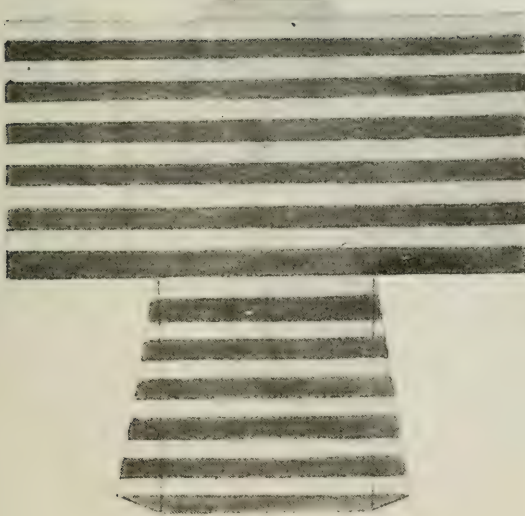
御水主看板

御中間看板　淺黃木綿小紋袷
鎮の字紋三所

總御中間常看板は黑木綿無地袷
夏は麻單也人廻し御貸人若黨に
出る時等又は御廣敷中の口番は此看板を着す

御中間法被　淺黃木綿
單袖白筋

風廻り及火消撰人
御中間其他非常の時着す

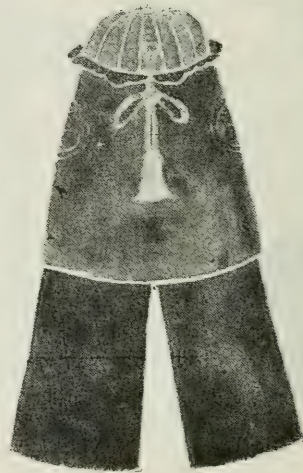
御中間法被　淺黄木綿單
山の字白
火消平御中間等
着す

御掃除の者法被　淺黄木綿單
横筋紺

火事頭巾　綴　羅紗地紋羅紗饅頭縫

同羽織　背紋三所　大形

一般の火事具とす地羅紗又は羅脊板也
色種々制なし　紋羅紗饅頭縫端笹縁付

馬上出役之者用ゆ
色種々取合伊達を飾る
紋散しもあり

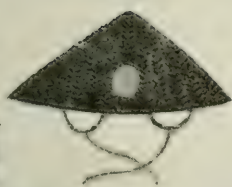
後

胸當　羽織と同地同色唯色替りを示す

踏込袴　地純子織物類

上下一般用ゆ

裾天鵞絨

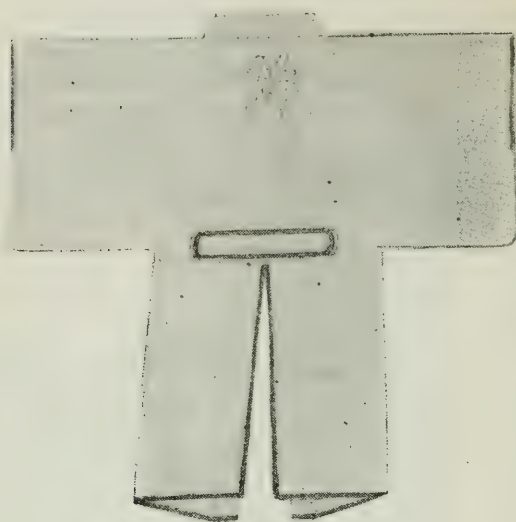
陣笠

火事頭巾の余
一般之を用ゆ

中間笠　竹網代組紙張り
澁引黒塗

柄鯨
無双

腰差提灯
上下一般用ゆ

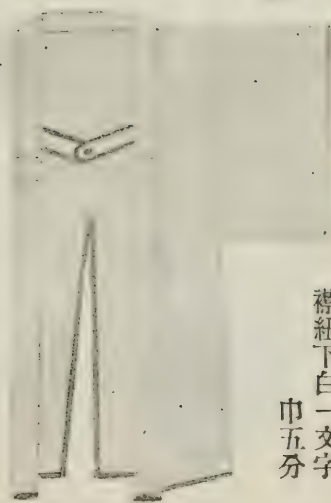
手丸提灯　若黨等携帯す

御徒役火事羽織　地淺黃羅脊板
脊に鉾の字一つ

出火御出馬御供には必す着用と雖も躰裁宜からされば他出火公用には御勘定所御貸物方にて普通の火事羽織を借用又は自服を用る多しと云ふ

此外以下役役火事羽織着の分ありし由なれとも今不詳

江戸御先手同心役火事羽織

地太毛綿花白染
三輪抜紋三所白上り
縁茶色　紋曲尺三寸五分

表

襟紐下白一文字
巾五分

頭巾

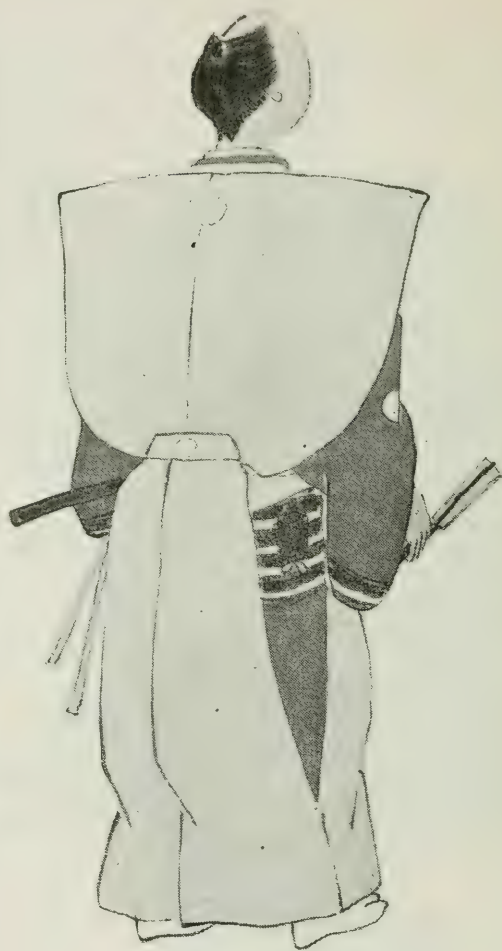
御抱鳶頭万右衛門長半纒　紺地朱輪拔　自製

小頭は襟に斗朱輪拔

鳶之者御仕着皮羽織
頭平共一同

殿中着服之圖

熨斗目長袴　布衣以上諸士着之

熨斗目半袴　御目見以上諸士着之

印籠提物は金蒔畫梨子地又は蠟色蒔畫乃至革袋物等隨意にて制裁なし
正服には必ず用ゆ

平服

諸士以上及肩衣御免の輩平常服

一に繼上下とも云上下共冬は裏付夏は單

肩衣は專ら絽を用ひ夏は絽紗綟の類色隨

意と雖も紅を用る者なし

袴地合不同仙台平、茶苧、五仙平、嘉平

次平、川越平、小倉縞、桟留縞の類

十徳　御醫師御畫師等の禮服

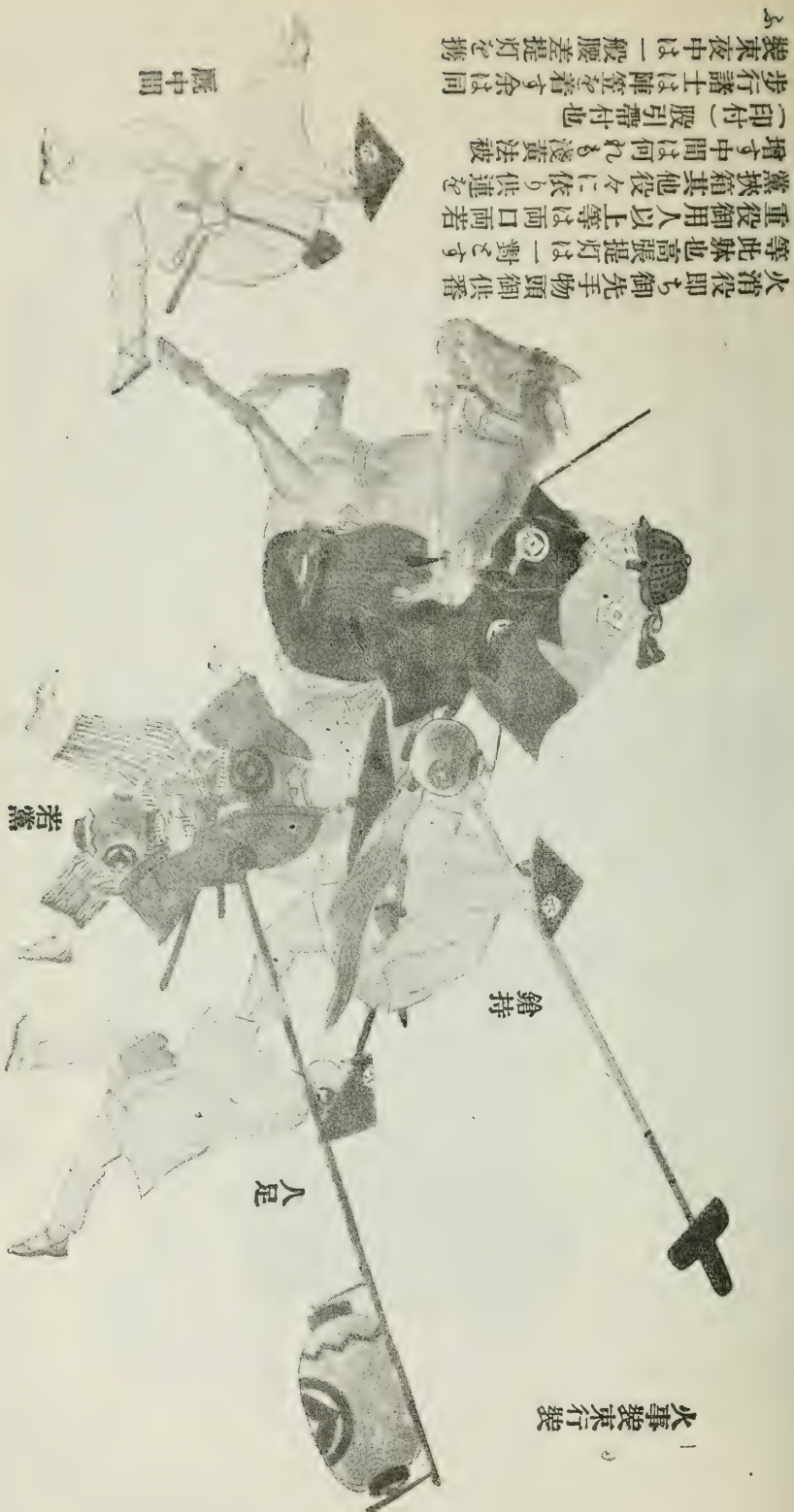
諸士熨斗目服紗麻上下着の時着す

羽織夏冬共紗生絹單黒無地（共紐）制外と稱する者の禮服也裝束輟昇の十徳とは異也一に偏綴（ヘンセツ）とあり當時は總して十徳と通稱す

輕輩坊主の禮服も十徳なり

安政元年殿中肩衣を止め羽織平服となりし時の風
但御目見以上は羽織無之處文久二年十一月より有紋に改む

以上は殿中於て各種着服の様を示す殿中は帶刀を不得携へたるは出仕退散の時中の口より各局迄昇降の風とす
一平服着座は遠侍向初番士當直の風也諸局文官机上に文筆を執る者御目見以上は皆同様にて脇差を不帶側に置く以下役は肩衣を不着
一上下熨斗目等正服には印籠提物扇子足袋を用ゆ自己に係る御用には用る能はす足袋は夏季は用ひ

火事裝束行裝

火消役即ち御先手物頭御供番等此躰也高張提灯は一對とす重役御用人以上等は両口両若黨挾箱其他役々に依り供連を増す中間は何れも淺黄法被（印付）股引帯付也
歩行諸士は陣笠を着す余は同裝束夜中は一般腰差提灯を携ふ

和歌山供連の風　二三百前後頭役平素の供連概如圖重役番頭以上は両若黨鎗挾箱或は長柄傘徒押等身分祿高により種々差等あり
袋杖は重役御用人町奉行御廣敷御用人御目付に限る
御用箱は御勘定奉行寺社奉行御用人町奉行御廣敷御用人奥御右筆御勘定組頭等樞要の職持たしむ

江戸にて
御勘定奉行御目付御作事奉行等は附人と稱し部下の小吏役羽織着從ふ御用人は供廻間に合さるか又は臨時見分の時等御使之者一人召連る事あり

海鼠襟看板は若山に限る江戸にては普通看板也
袋杖の袋は黒革製黒紐江戸にては重役御役人向は平素にても挾箱を持たしむ

江戸四つ供の風 四人召連るを以て通称す平士御使及吉凶儀立たる時の供連也
尤主人廐上下又は平服其時に應す
挾箱持
若黨
鎗持
草履取
平素重役御役人向は若黨草履取挾箱持頭役は若黨草履取草履取のみ召連平士は或は若黨一人御供番御小姓組は平士にても挾箱を持しむ普通番士又は小祿の士は無僕なり頭役たり[illegible]素は鎗を持しめす若黨は自分衣中間小者は仕着石板黒紺、袷、夏は紺廐帯は[illegible]格子の縞又は無地草履取に限り巾廣無地萌黄又は黒なり鎗持以下木刀眞鍮[illegible]

大奥御服圖

此圖は目下内庭に御保藏の現品と古老女中の誦説に就き模寫したるものなれとも唯百分一の大概を掲け大樣を示すのみ此外御誕生御產室の式服又は人形に着服せしめたる服裝の雛形抔ありと雖も記するに暇あらす總して男子と違ひ五節句式日或は季節により種々の區別復雜多端なる事前卷既説の如くにして到底圖寫の勝ゆへきにあらす御模樣衣之如きは京都織元より其都度二三通りつゝの圖樣を案出せしめ老女等の考按裁定を待て調進に至る圖樣の原紙今尙遺存のもの百數十枚あり意匠の優美高尙なる近世新案の比にあらす實に精功美術を究竟したるものと云て可ならん是等他日を待て蒐錄する處あらんか此圖時々の御着服御髮容御裝飾品等の一分つゝを示し併せて女中髮容等の區別を示す

御簾中様御服

御元服後　元日御服

御すへらかし　御びんつら

ゆり出しこなし張紙入

御袿　御下召紅梅織　白練　白

御袴緋

御元服後五節句御服　御髪御守殿長づと
御下け髪

式日も御同様但御髪地下け

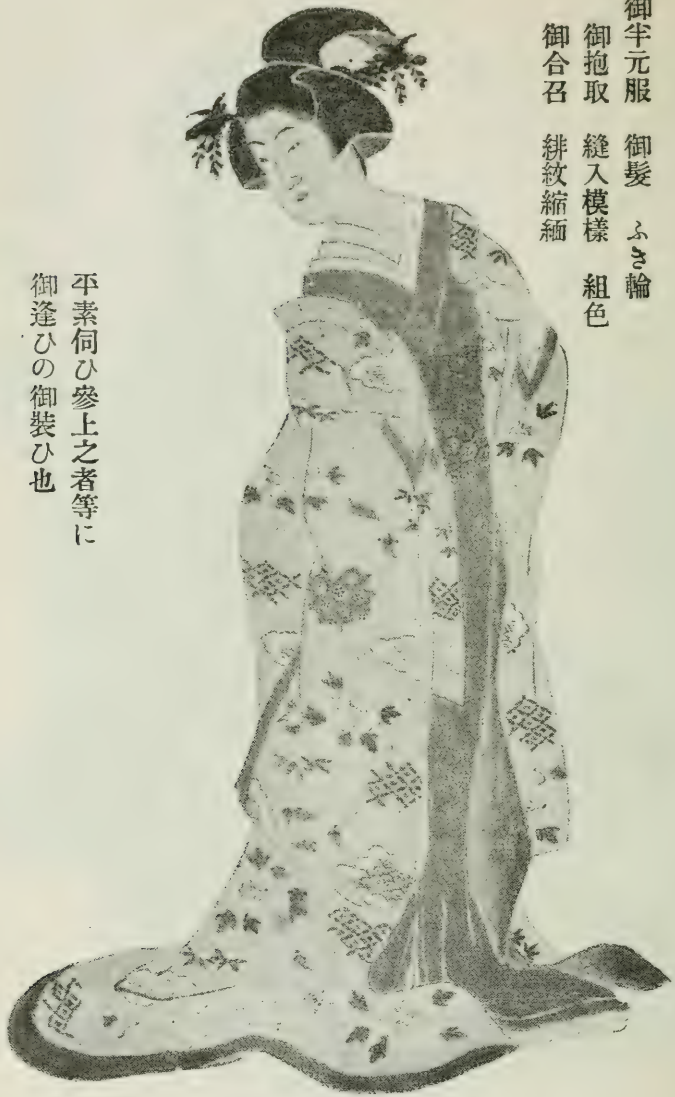
御抱取　菊綸子縫入
御合着　緋の大紋

御元服後　平日午後御召替
縞縮緬　紅裏　一つ白
御帯　織物綾地琥珀類
夏は絽透綾上布
越後縮等

御元服前元日御服　御髪わくり　びんづら
御衵　御合召　紅梅織
御袴　濃色精好　長
御下着　白生練

半元服　同
御髪　すべらかし
御袿
御袴　濃色

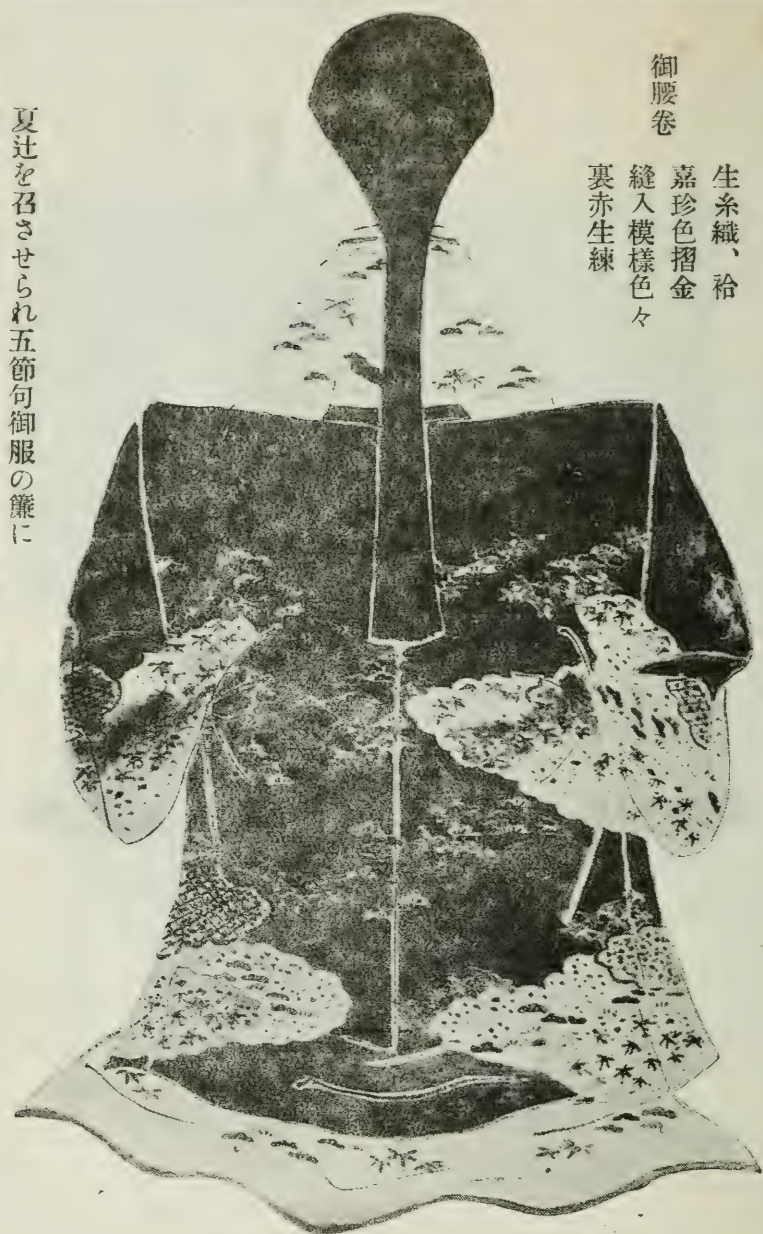
御半元服　御髪　ふき輪
御抱取　縫入模様　組色
御合召　緋紋縮緬

平素伺ひ參上之者等に
御逢ひの御裝ひ也

御元服前御平素　御髪　高嶋田
縞縮緬等　御帯　織物

御元服前式日御服
御抱取　地白地黒縫入
御合召　赤
御　帯　朱子縫入

御半元服　御平常　御髪ふきわ
御帯織物等御召服に取合よきを用させらる

御腰巻

生糸織、袷
嘉珍色摺金
縫入模様色々
裏赤生練

夏辻を召させられ五節句御服の簾に
御附帯の上へかけさせらる前襟に紐ありて御帯へくゝる

御附帯

四月一日より八月まで

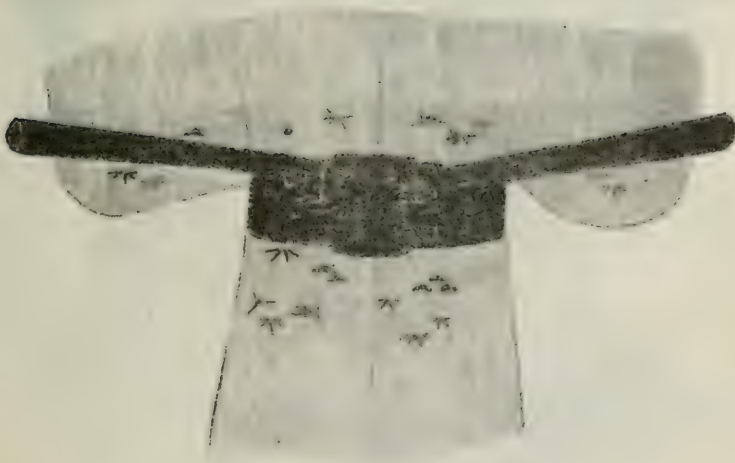
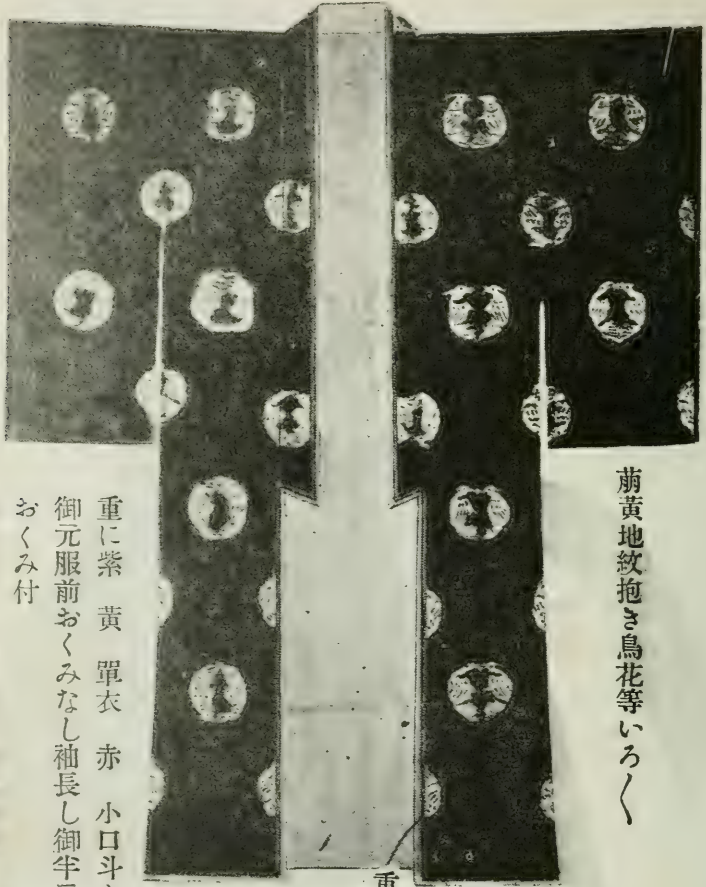
御附帯には御拖取なし

地織物　色白萠黄赤又赤白段織等色々

地合色は上下の別なし

帯　巾三寸余　両角は丸し

結ひかた上へあかる京方は下るといふ

御袿

重に紫　黄　單衣　赤　小口斗り
御元服前おくみなし袖長し御半元服より
おくみ付
御合召　紅梅　紫　御元服後も同し
袖短し

御袴　御元服後緋　精好

紐　前巾二寸二分

後巾四寸二分

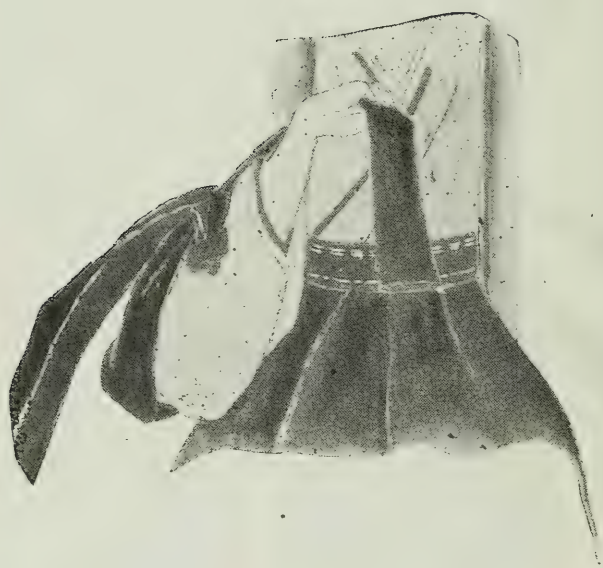
垂れ五尺五寸程

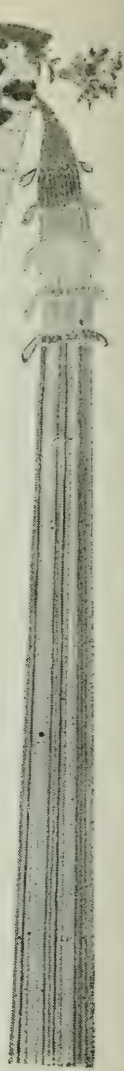
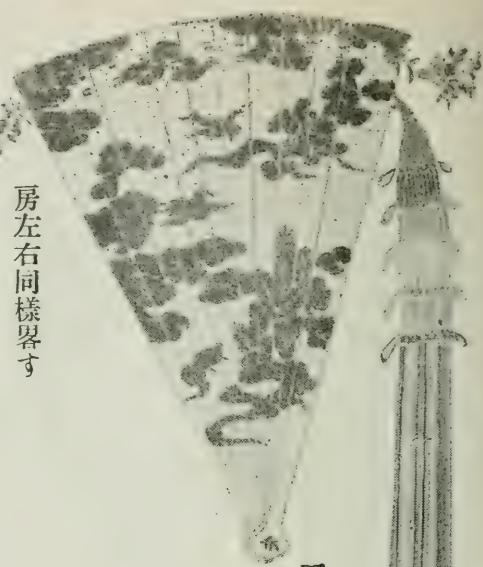
仕立方前後同し

結切

御袴召され様

圖の如く結切へ御左手に貫き召させらる

御袴

御元服前濃色
御半元服も同し
少し太き方

紐下三尺八寸
紐貳筋にて
長一丈二尺五寸

房長さ　鯨九尺二寸　左右同し
十二條　より糸
金色如圖　赤黄紫白薄紅萌黄交り

鼻紙四つ折にし
挿入

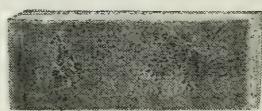
二寸六分
五寸五分

紙入
松葉重ね

房左右同樣畧す

練線作り花
紺青淺黄白又は赤こび薄紅白等
にて三四色に隈取り尤表裏は模
樣色々あり

繪　鶴龜松

雲形金

地松葉色　重ね紅　鶴松霍金泥
紅葉重ねあり紅色　重ね紅
金泥書

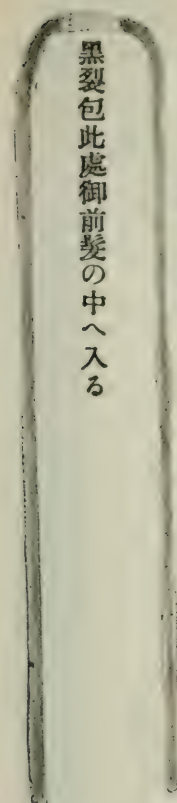
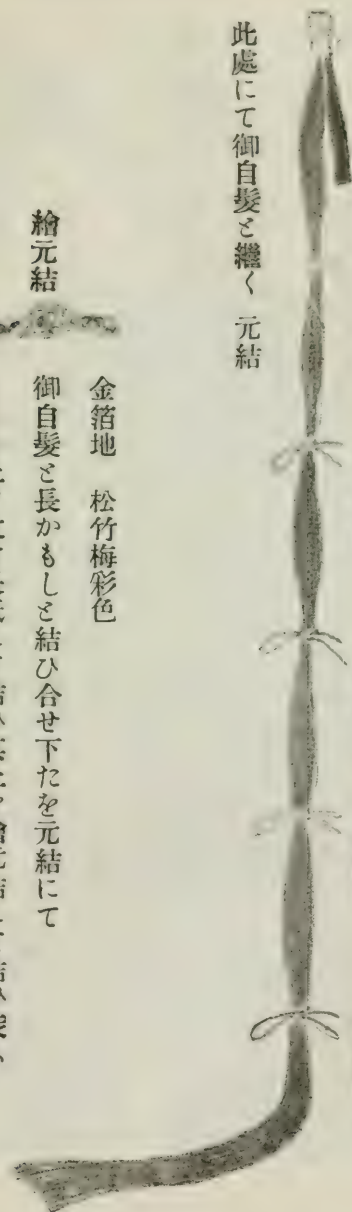
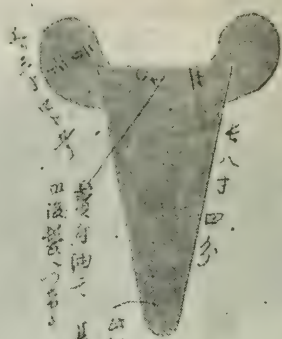
裏　白地に金雲形有職蝶鳥模樣
御年若は二十二枚御位高く御年寄らせたれは
三十六枚親骨の外は竹をぬりたる也

長かもじ　總長鯨五尺三寸七分

此處にて御自髮と繼く　元結

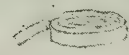
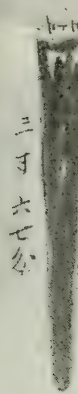
繪元結

金箔地　松竹梅彩色

御自髮と長かもしと結ひ合せ下たを元結にて
くゝり上を丈け長紙にて結ひ其上を繪元結にて結ひ裝ふ

鬢（びんづら）

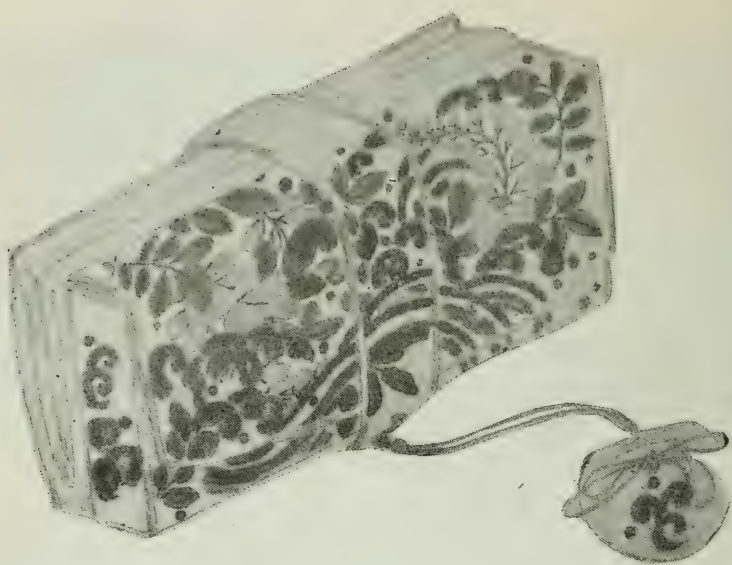
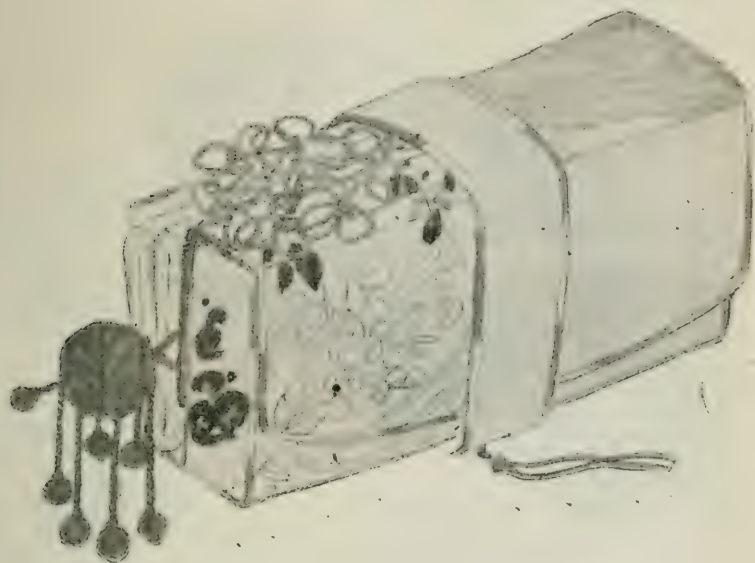
長鯨　二尺七八寸

黑裂包此處御前髮の中へ入る

黒鼈甲製
桐木
太長紙
眉墨入
黒塗蒔画

笄　指込　鼈甲　模様種々

黒鼈甲

裏

箱せこ　御懷中物也

五節句　式日
五色天鵞絨の內縫入
道具さし入
平　常
五色織物
同　斷
御抱取からけの時は鏡付と稱し
御懷中鏡と銀鎖付御二字欠字をさし
御懷中くさり前へ下る次圖の如し

御抱取からけの時如圖

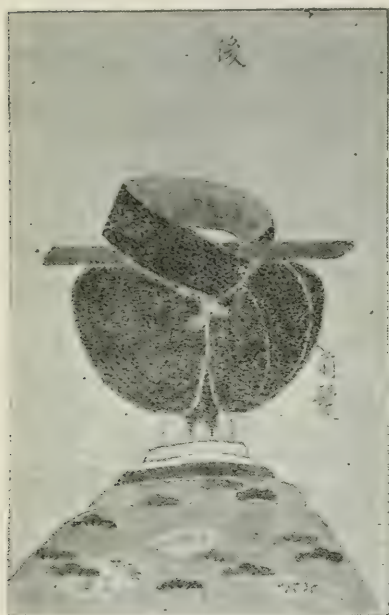
道具指の化粧房を上に飾り

中締をなす

道具指へは左之通り指す之を

七つ道具といふ

錐　鋏　小刀　筆（墨紅両筆 軸無双）

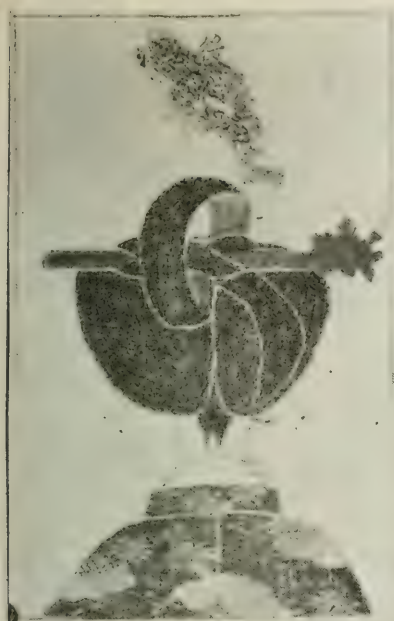
物さし　匙　毛ぬき

女中髪様

片はづし

老女初御三之間まで

一様

下けした地

老女初下け髪の節晝後着替へ後此髪になす着替へなして下け髪に居られぬゆへ也御簾中様にも御召替後は御同様のよし

笄に片花さし込を用ゆるは御簾中様幷に御側使の女中のみといふ

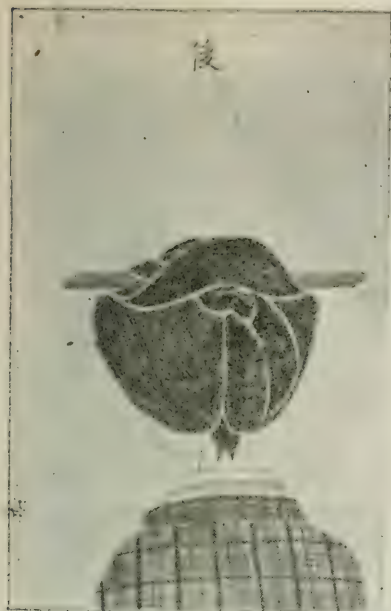
御小姓女中
高しま田

おちご
御姫樣方にも御幼年中は
同樣おちごのよし

御半下女髮風

しの字といふ

長惰圓形の別髮の輪を當て髻よりの白髮を笄にからみ押へたる也

女中召使の又者を髮方者と云髮風は御半下の如にて市を結ひたる元結を前の方に相角をなし後へ出すいちを竪に捻じたるを横平になすの違ひ也

抱取からけの風

老女はしめ裾引無き時及ひ御庭締り御供等にて抱取からけ也

箱せこを懐中かんさしの銀鎖を前に垂る

腰帯　三字名の者は白　御中﨟初おの字名の者は赤

御簾中様附は老若とも白

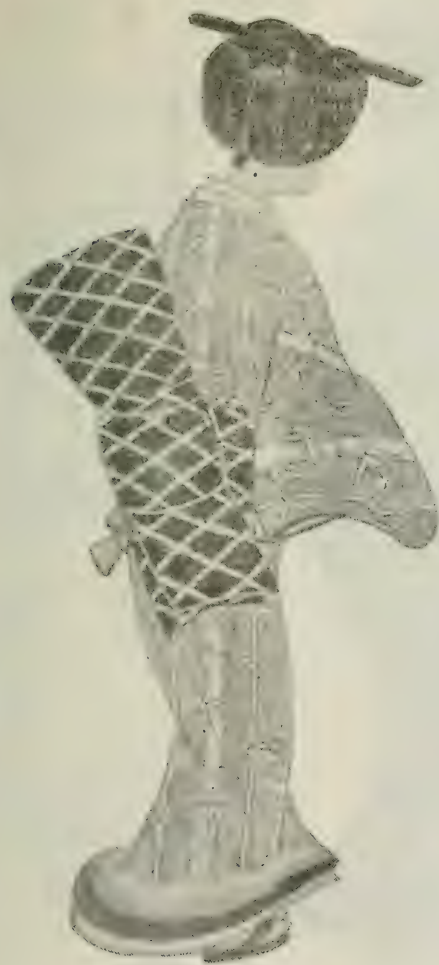
御輿昇御牛下着板着

冬淺黄羽二重白竹模樣
夏白地晒竹淺黄染出し
帶黑紗綾地白竹菱形
腰帶夏冬共白

御抱取下御帯結ひ様

御袖留後は御前帯に被遊

御掛け下といふ

御帯朱子地縫入

色品々巾六寸五分

帯結ひ方

紀州の左やの字と稱し

御簾中様初女中

一般此結ひ方也

御簾中様火事御頭巾
出火御立退等の時
被爲召

地黒朱子御紋白縫
鉢巻白

女中火事頭巾　地黒朱子
御目見以上女中は黒綸子
時服御紋抱取着からけ也

御婚禮服

倫宮様御結納の節中納言様より進せられし御召

倫子縫入地黒　丈四尺三寸 袖下一尺三寸　總丈三丈四尺八寸

霞白糸かけ　　　水白上り金糸日向

水玉金糸日向　ふゞき白いと　　岩山白上り縁縫茶糸

松の木金糸かけ　　　松の葉白上り金糸萠黄糸ひわもへき糸

松のもく茶糸金糸　　　竹白上り金糸萠黄糸日向

竹の葉白上り中紅鹿子金糸萠黄糸ひわ糸日向

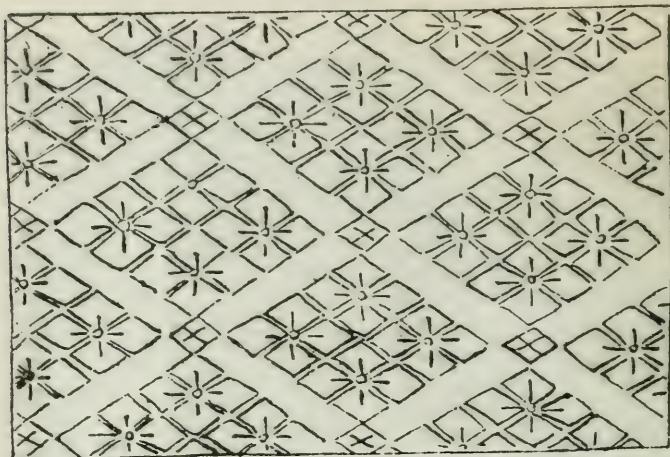
橘の花同葉とも白上り縁仕分赤糸中紅鹿子赤糸金糸萠黄糸ひわもへき糸日向

鶴白糸鼠糸赤色にて生のことく取合よく

龜鼠糸白糸金糸赤糸取合よく生のことく

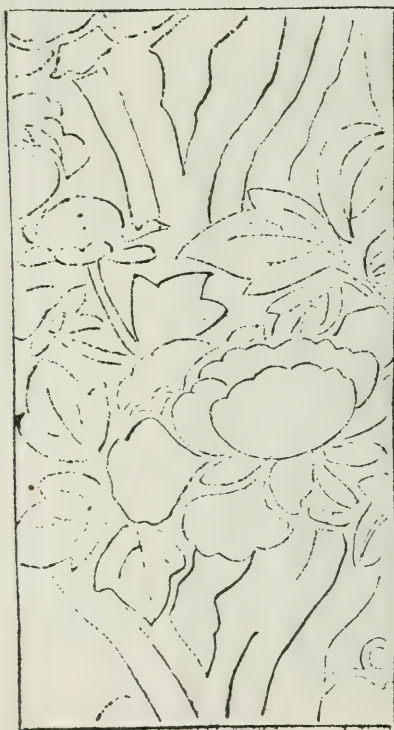
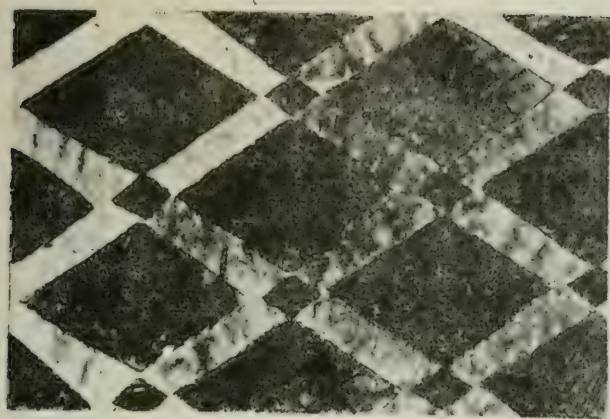
御簾中様御婚禮御式の御召

白幸菱織　裏白羽二重

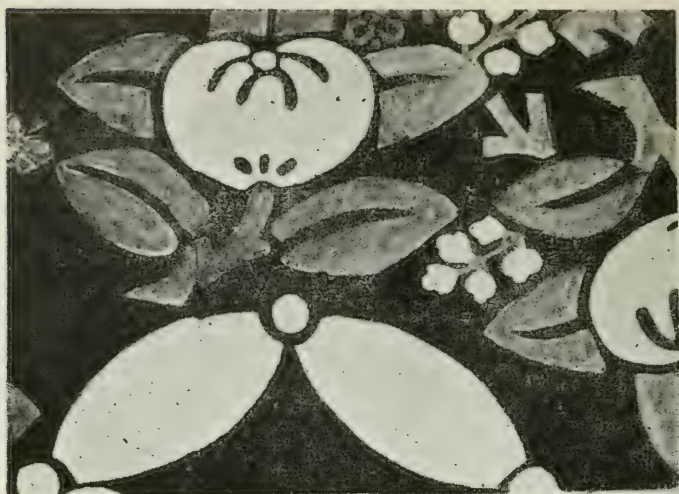
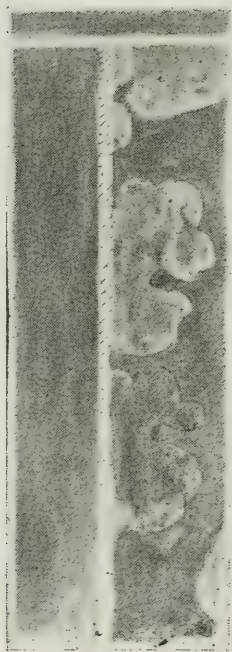
白唐綾と云

菱は白ねりくり浮織なり

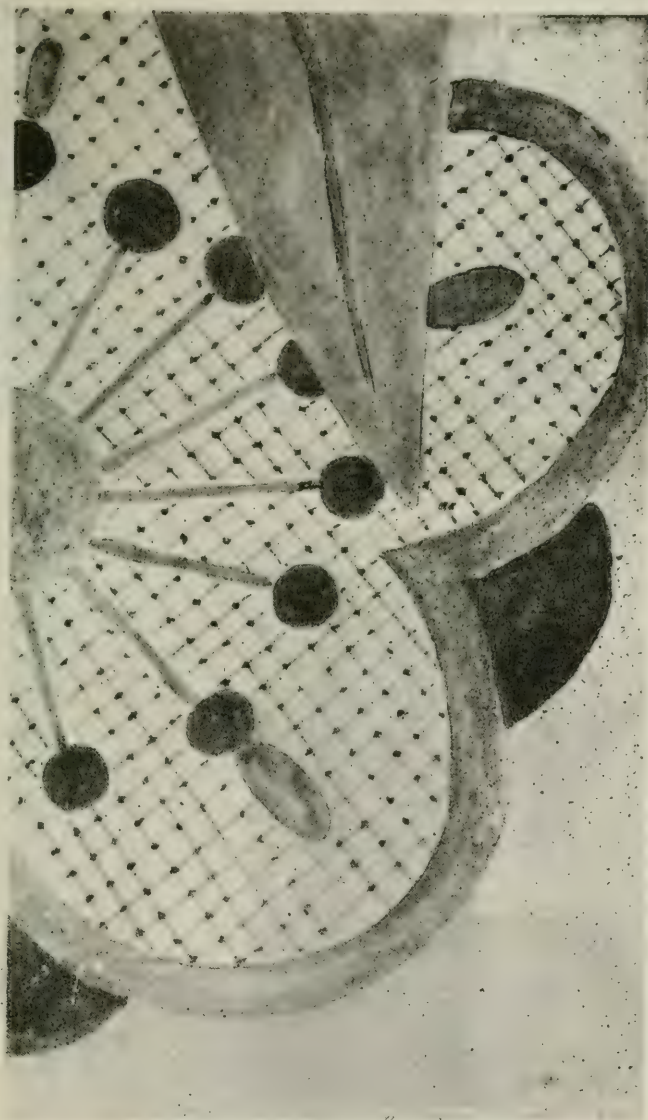
御帯も白幸菱の事

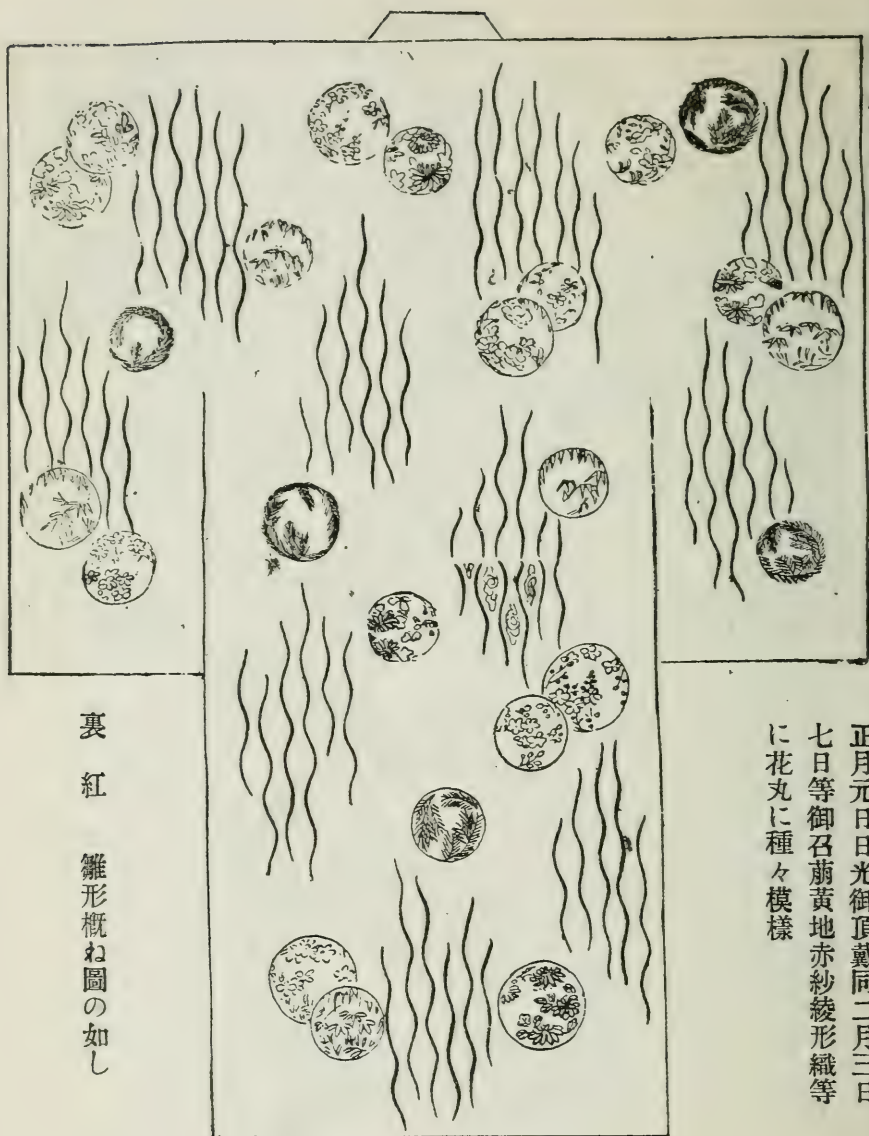
同断　御相召　白大紋　裏白羽二重

紋柄竹　爰には牡丹をかゝぐ

同御色直し後御召　赤幸菱織　裏紅羽二重
紅唐綾　　　　　　　　　　菱赤ねりくり浮織
御帶も赤幸菱の事

同御相召緋大紋　裏紅羽二重
紋柄梅　　　　　爰に牡丹唐團扇を示す

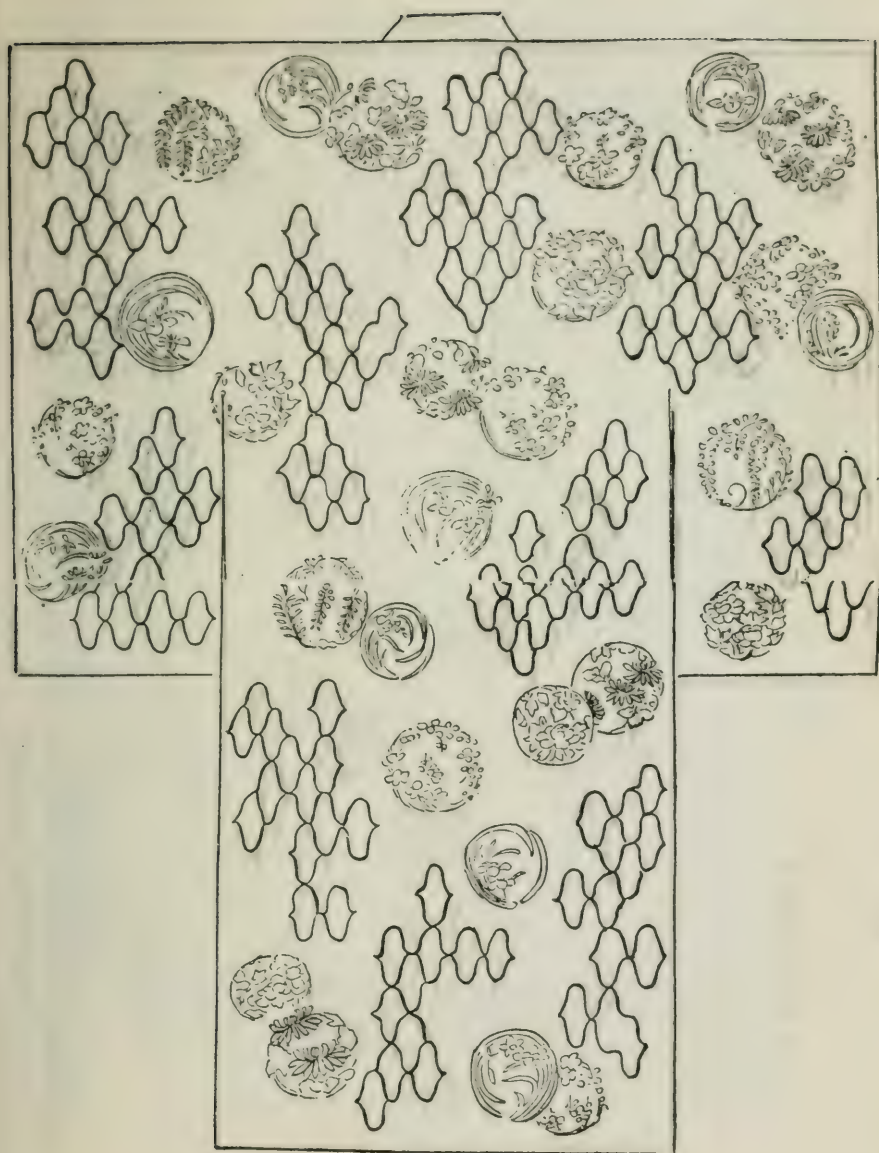
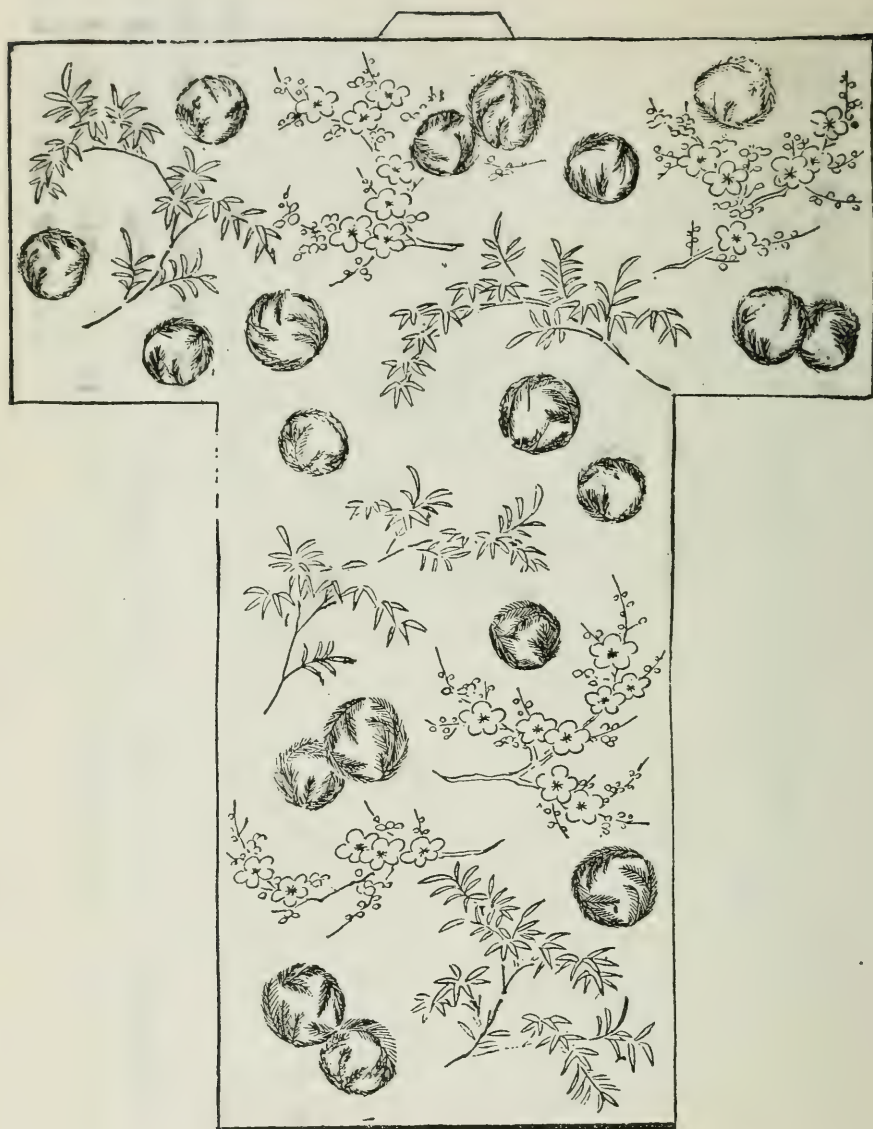
紅白とも模樣大さ如圖

御婚禮御式純子御夜具地
地紺　紋柄七寶に橘紅萠黄白糸にて織立
裏地　紅羽二重
司織

御式續ふさん二通り緣は右御夜具地同裂地にて鏡地は紅大紋純子或は紅大紋綸子左に揭くるは僅に遺存の裂地を寫したる故模樣の全般辨しかたきも牡丹模樣なるへし

御枕は右紺地七寶橘純子裂地にてさる

同御式中御夜具地　淺黃綸子に金糸赤萌黃縫大形裏紅羽二重

地白淺黃さび色虎の子は染ぬき金赤萌黃は縫なり
右は僅に遺存の裂地を模寫したる故模様の全般辨しかたきも蓋し松竹梅なるへし又空色縮緬に梅龜甲模様もあるよし
一此外中御夜具にて小納戸縮緬花色純子二通り（裏白羽二重）御積布團に花色ちりめん（御下ふさん紅）一重夏御纏ふさん空色紬ちゝみあり裂地存せす圖取かたし

繻珍織御掻取模様

正月元日日光御頂戴同二月三日七日等御召萠黄地赤紗綾形織等に花丸に種々模様

裏　紅　雛形概ね圖の如し

菊綸子地白地赤地黑御搔取模樣

五節句式日及五節句服被召べき廉々に召させらる但三月三日は桃色朱子縫入夏は辻を召させらる

菊綸子は御當家に限れるよし也　夏紅縫模樣數百種あり總縫入に比し少しく大形也尤疎密あり

模樣柄雛形大畧圖の如し彩色を畧す

菊綸子の形は次に掲く白赤黑地共に同し

如此菊と蘭と打違ひ段々織出し尤菊蘭の形ちは少しく違ひ模樣あり

菊蘭の間は總紗綾形地紋織出し

又
青海波紗綾形段々に牡丹菊杜若の花束蝶露の
摸様
紗綾形に櫻牡丹菊の花束
同所に藤櫻菊の花束摸様等あり

唐團扇菊ちらし　又唐團扇ニ牡丹菊　藤の花束あり

藤ニ横山形枠ニ菊ちらし　又曰枠ニ牡丹菊　藤の花束あり

牡丹 菖 杜若 藤折枝ニ錦折裂

櫻 牡丹ニ鳥たすき

車輪ニ葵牡丹藤櫻菊芦

此外左の車輪形ニ下記花折枝模様類
多シ模様配欠同小異

形ニ蔓葵牡丹杜若

切ヒ紗綾形ニ牡丹菊藤又ハ
櫻菊藤梅杜若
又斜雲形、藤或ハ雲形ニ
牡丹菊
又牡丹藤菊蔦躑躅

菊籬ニ扇ちらし

右左の扇ちらしハ絵ニ花模様類ハ、

藤 牡丹 菊の花交

葵 藤 牡丹の花交

藤 葵 模様流なる形

藤 牡丹 菊の花交

牡丹 菊 梅 藤の花交

野辺菊 露 模様流なる方

葵 藤 模様流なる方

巻水ニ萩蝶露　又巻水ニ杜若蝶露の模様なり

巻水ハ金糸紫糸ニて陰の向
萩蝶の胴黒糸ニ入露ハ金糸縫となり

羽衣ニ櫻折枝

葵蔦秋海棠ニ烏だすき

紗綾形ニ梅菊牡丹藤杜若

花七宝に梅櫻牡丹菊の花束

萬字つくしに桔梗牡丹菊杜若の花束と霰

七宝に菊梅牡丹　草折枝七宝に菱の子ふち　金糸

梅楓萩女郎花杜若菊躑躅櫻の花筏
又水かくしに菊萩牡丹折つゞ梅の花筏なり

羽団扇に雲形菊蕣並花束 又羽うちて雲形に分花束にけり

本形にいてふ並 杜若菊桔梗の花束

簾花七宝に藤

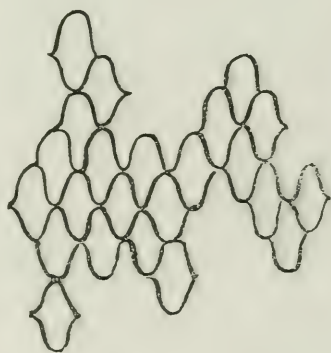
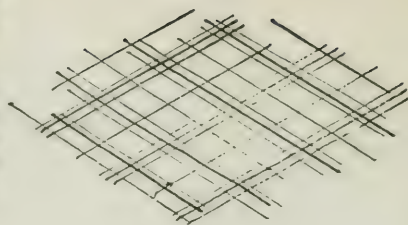
石橋

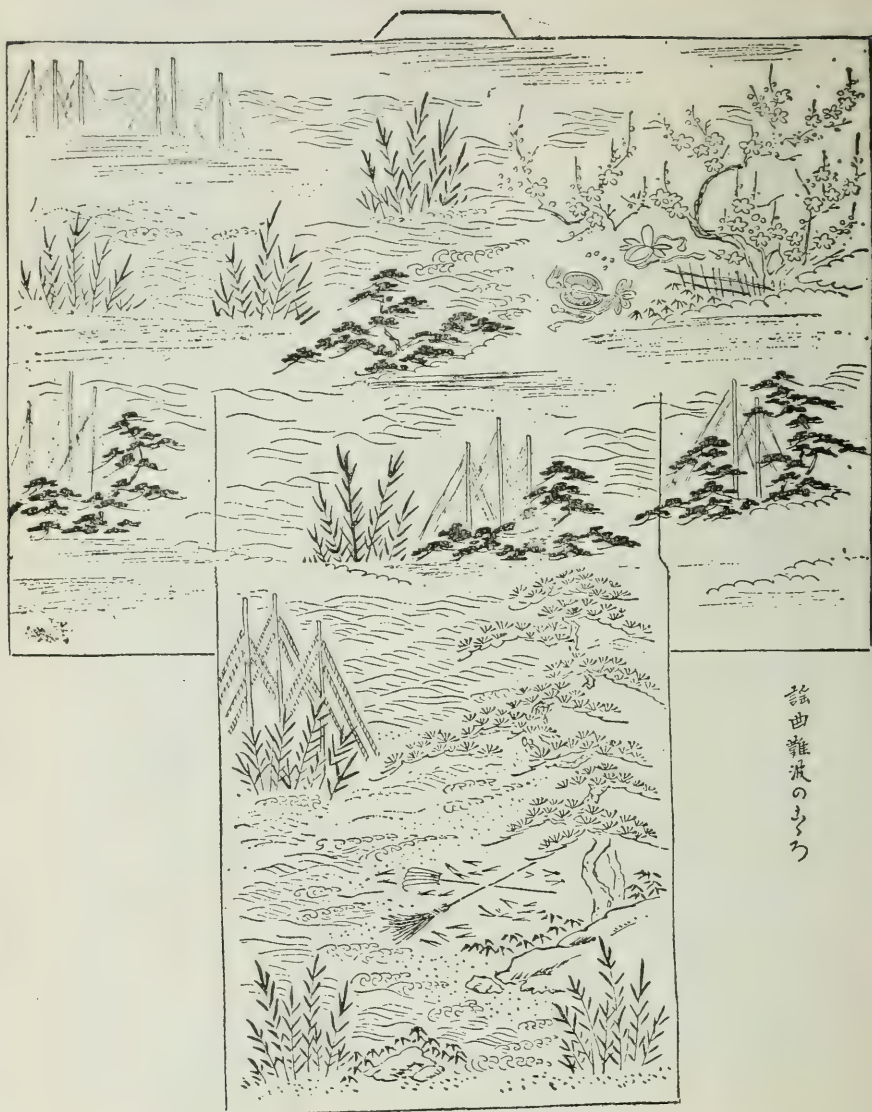
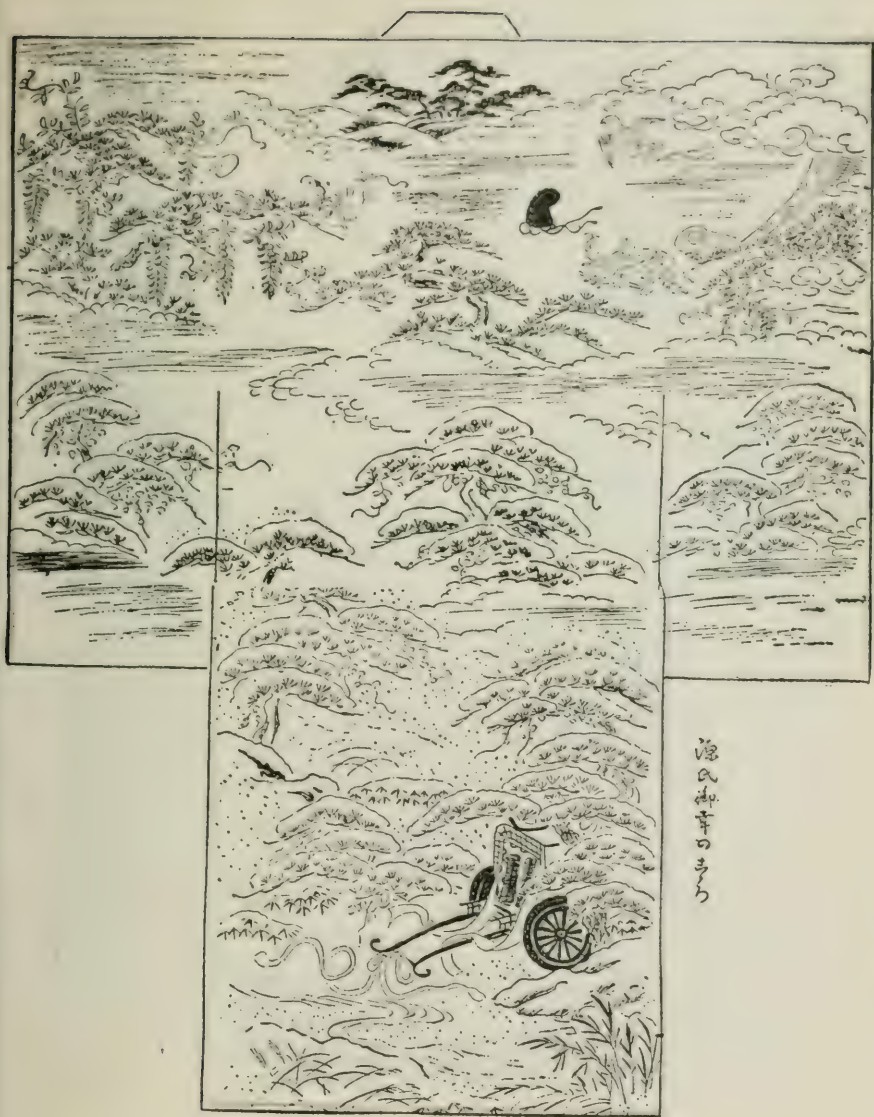
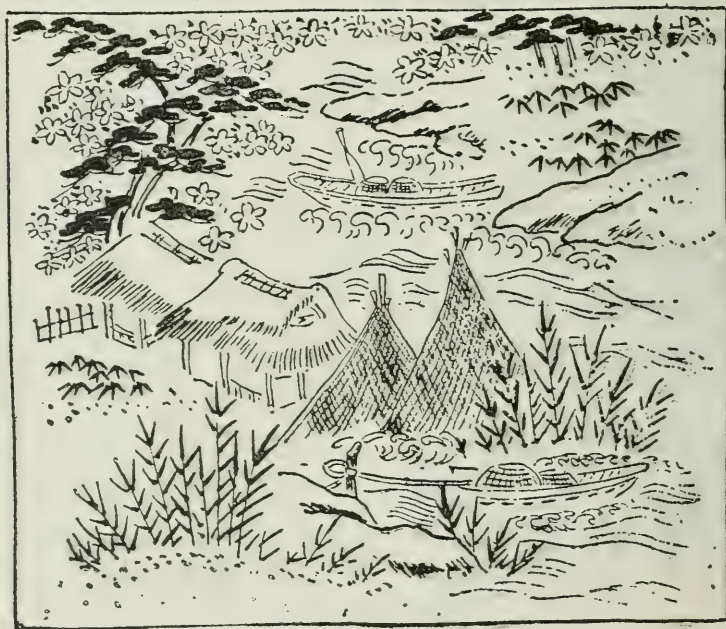
花車

浪枠 梅蔦水仙牡丹藤桜杜若菊の花束

右記する處は綸子地白地赤地黑總縫の模樣雛形とす此外尚數十百種枚擧すへからす仍而同種類にして取合模樣少しく變りたる分即ち車輪かた又は扇面の如き唯花束の取合を異にし或は間模樣雲形の如きも小異なるあり是等は畧して記さす唯別模樣を一種つゝ揭けて躰裁の概容を示す

附間模樣に左之類ありいつれも花束乃至花折枝也

總縫入御摘取模樣

五節句御召替又は御目見願出候節等に召させらる地合縮緬色は薗黄薄萌黄紫淺黄黑桃色等裏紅縫模樣柄亦數十百種大畧變りたる模樣の雛形圖の如し大躰續き模樣なれと御腰上下たの趣きを異にするなり

圖中上下とあるは御腰の上下をいふ縫なきを總模樣と稱す

謡曲難波のもやう

源氏御車のもやう

下の方ハ柴垣折戸流レニ籬菊なり 菊紋を取合

上の方ハ冠檜扇ニ取合松瀑布流レ竹垣等

上ハ松小山さゝ波芦乱杭告取合セ

上ハ雪松梅流レ竹笹小菊取合セ

上ハ松欅菊ニ扇ニ短冊散取合

上ハ松欅菊霞等

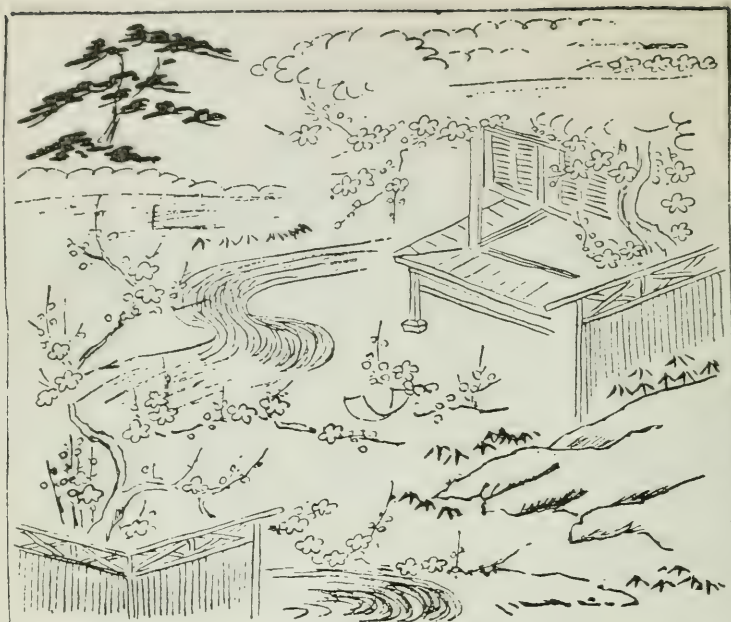
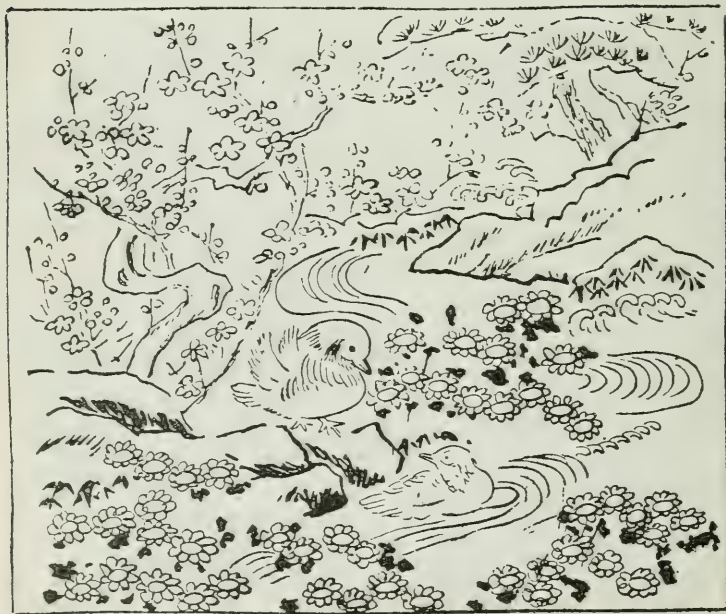
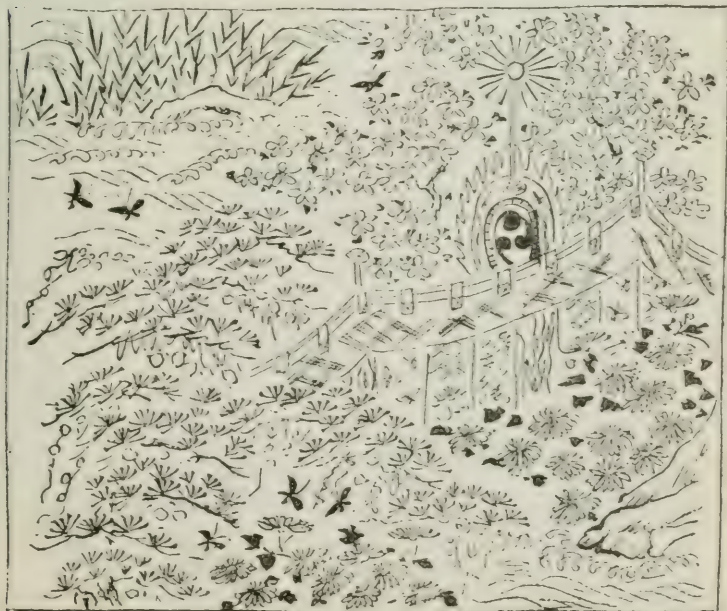
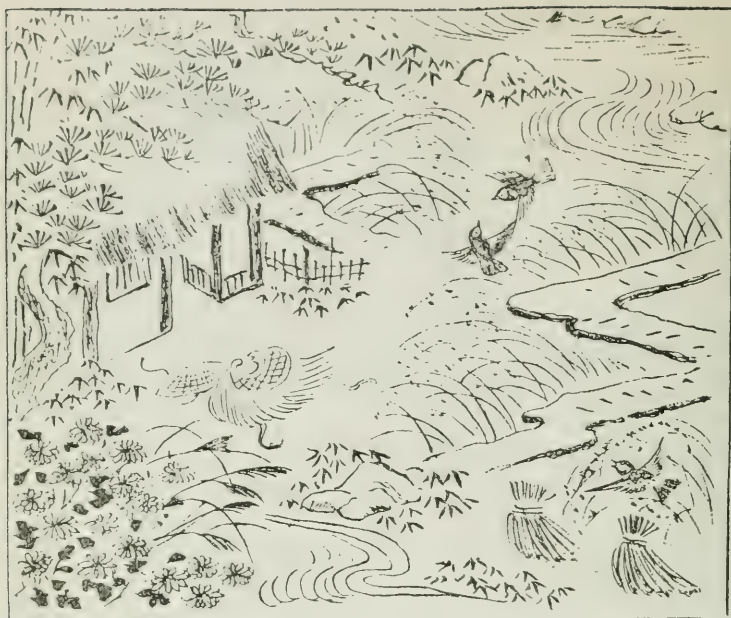
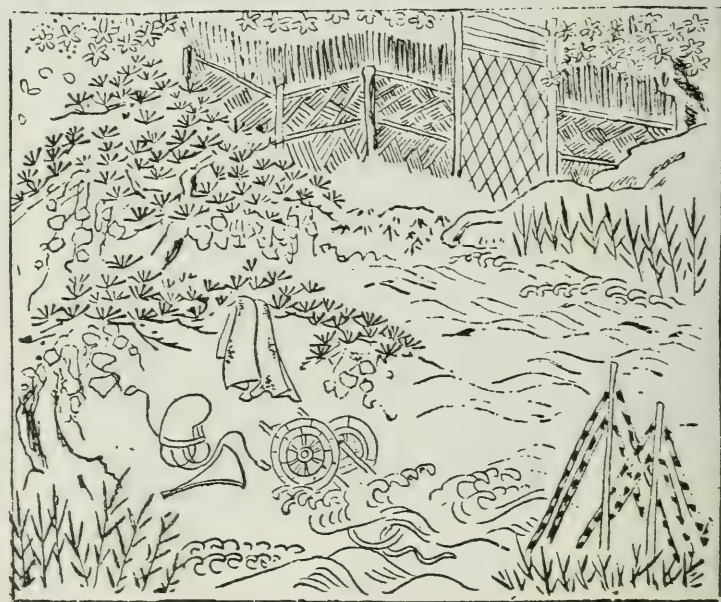
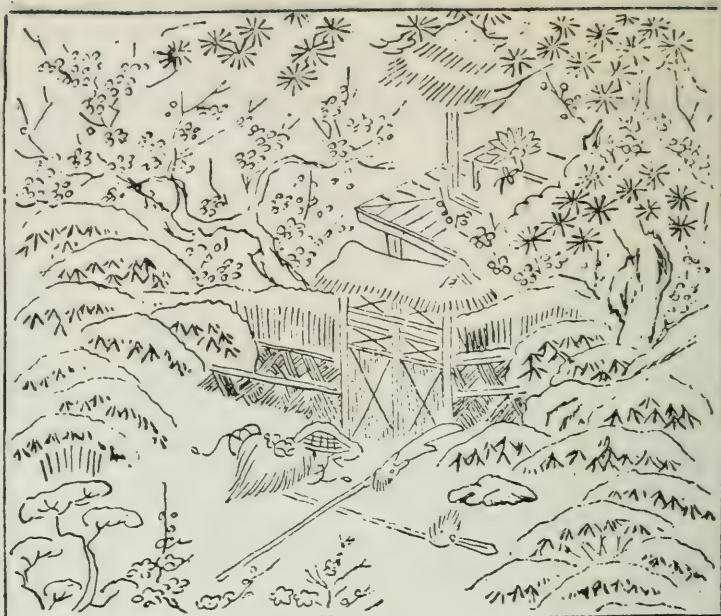
上ハ松櫻菊ニ柴垣木戸取合

惣躰雨ニ櫻松切ニ幕

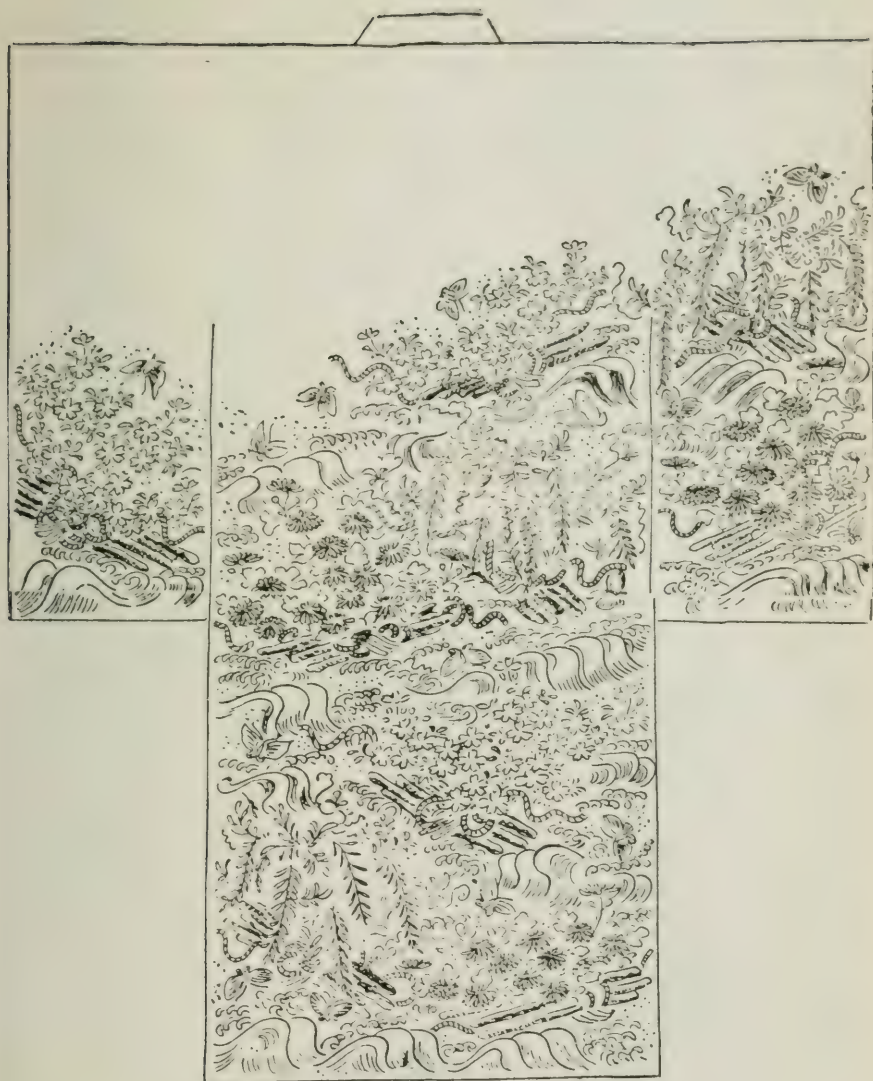
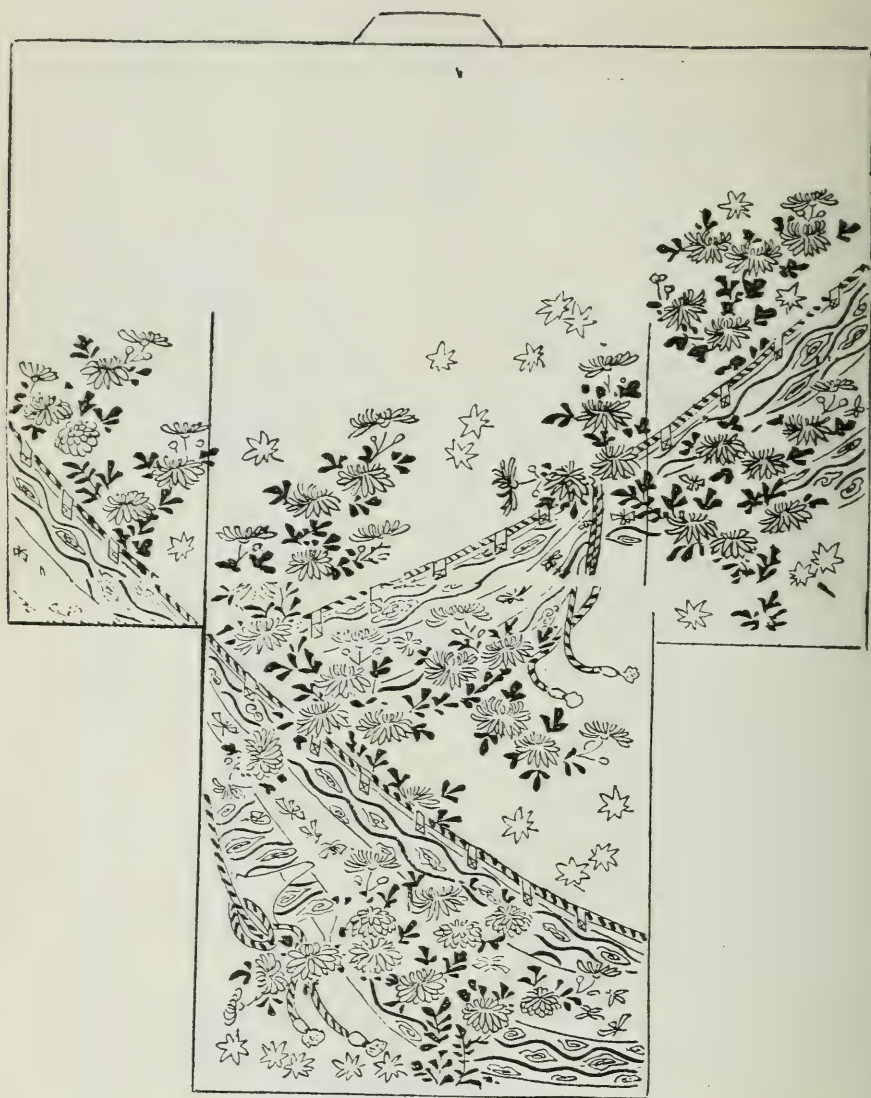
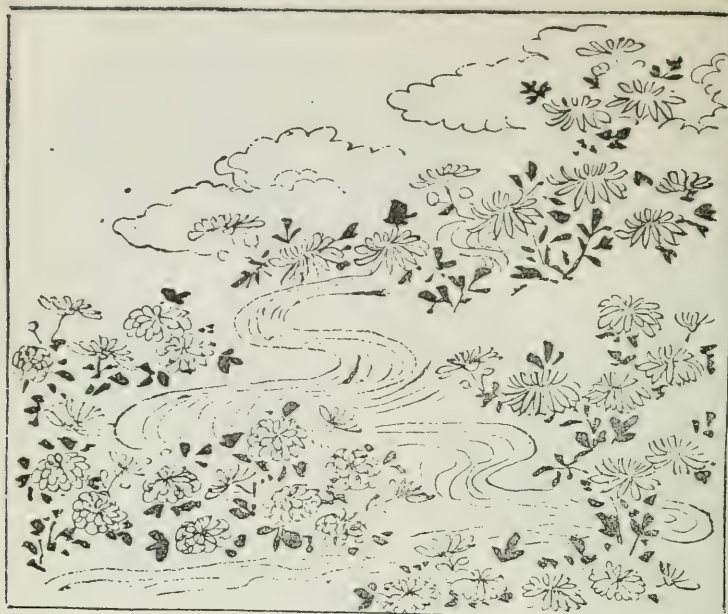
惣体秋草虫之模様透なる方又秋草ちらしなり

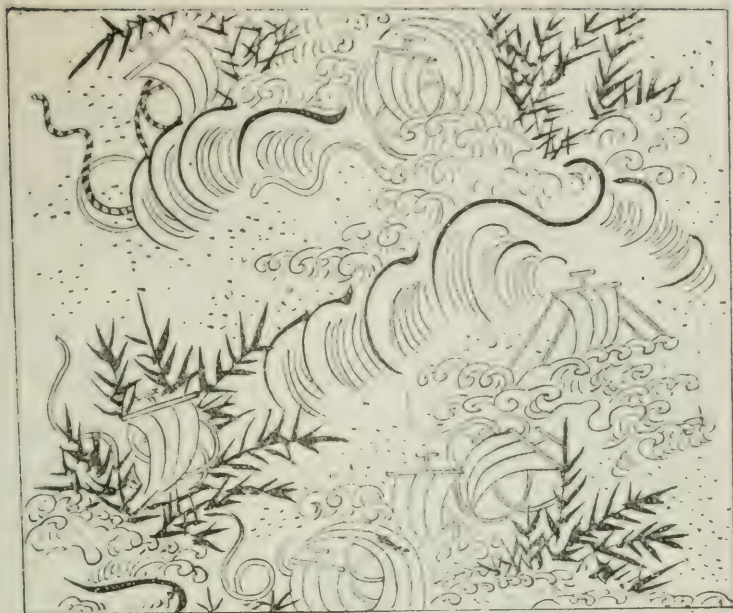
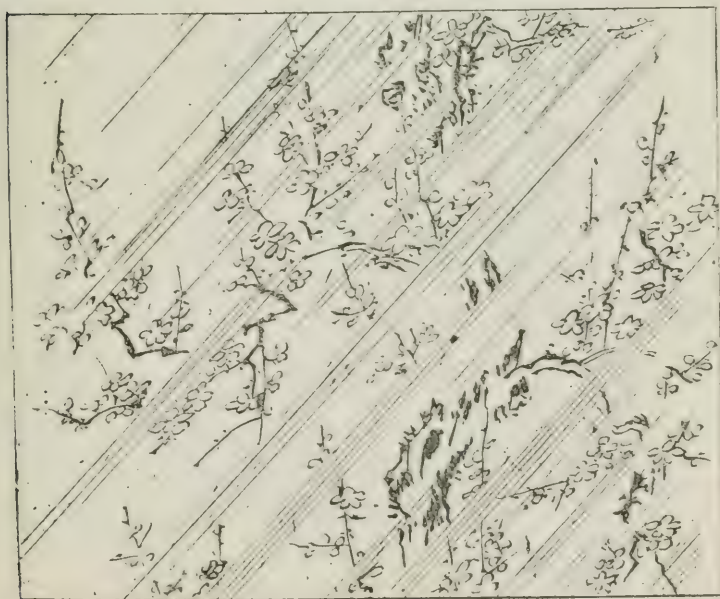
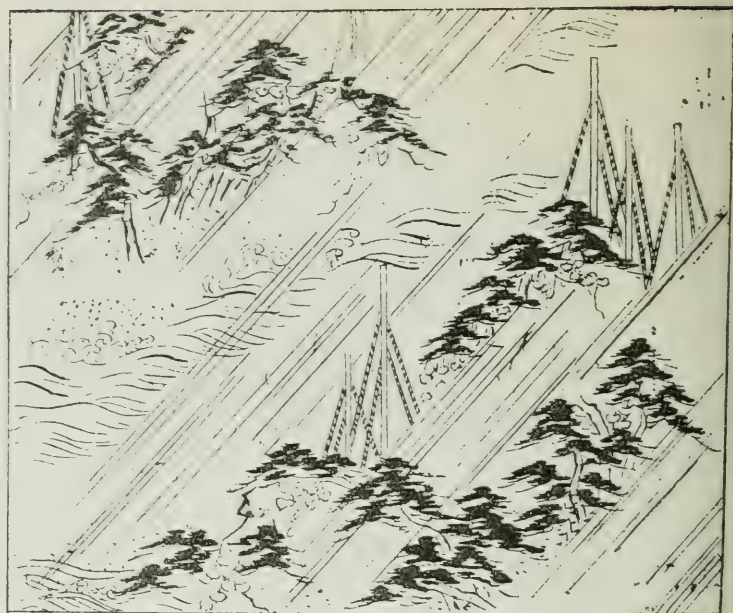
上ハ山に松霞取合に可然又ハ引廻絹烏帽子

上ハ雪持松梅流芦山霞寺取合

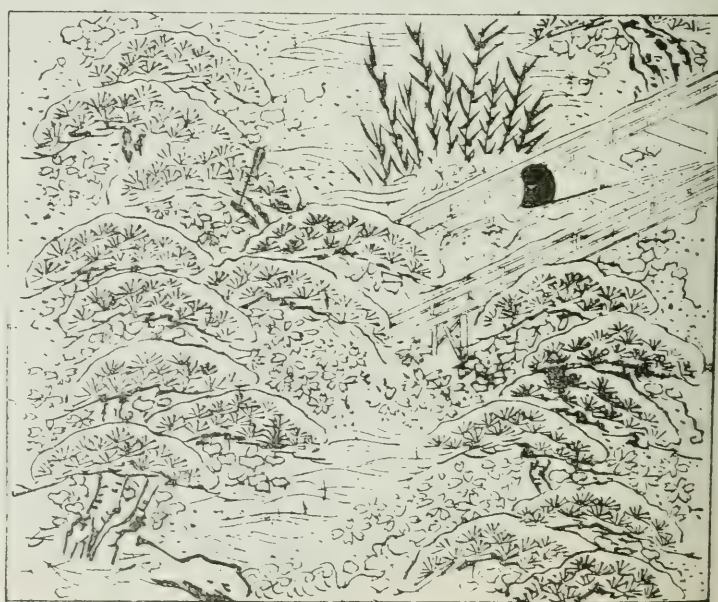
上ハ雲霞松梅取合右方籬檜扇左方御所車形ニ春駒

御紋なし中縫入模樣

白を重ね式日御召替に御帶付とて召させらる併し御掻取にも召させらるゝ事あり地縮緬色は總縫入同樣縫なきを中模樣といふ模樣柄亦數十百種なり大畧雛形圖の如し

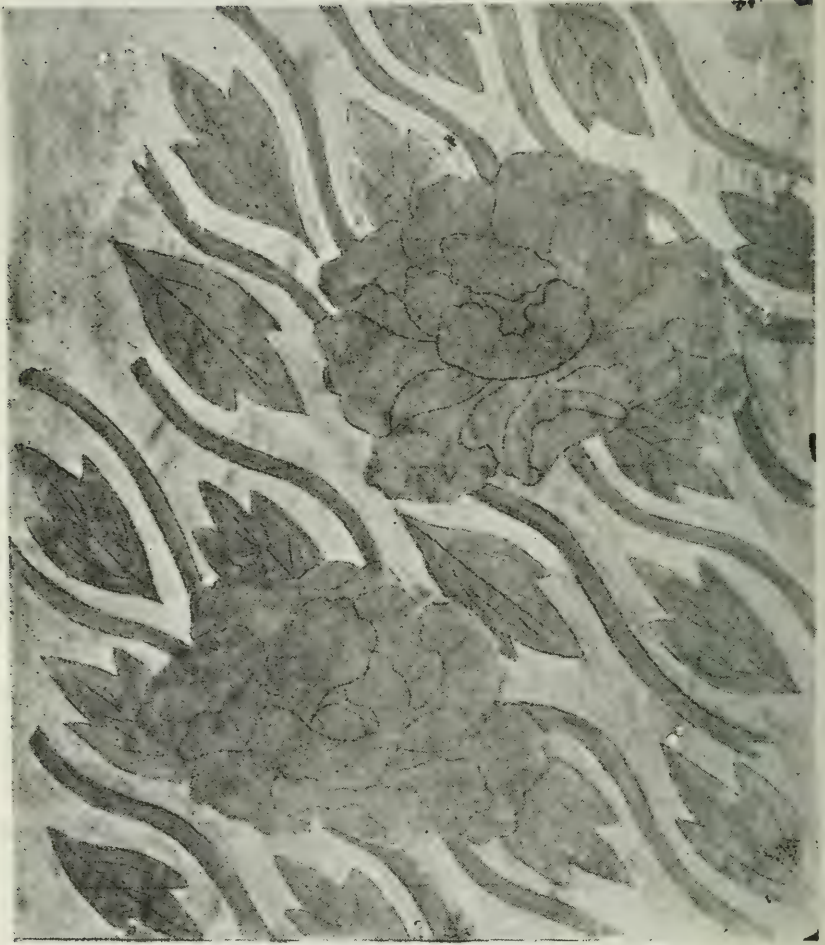
1100

上の方

下の方

下の方

下の方

御合着紅白大紋

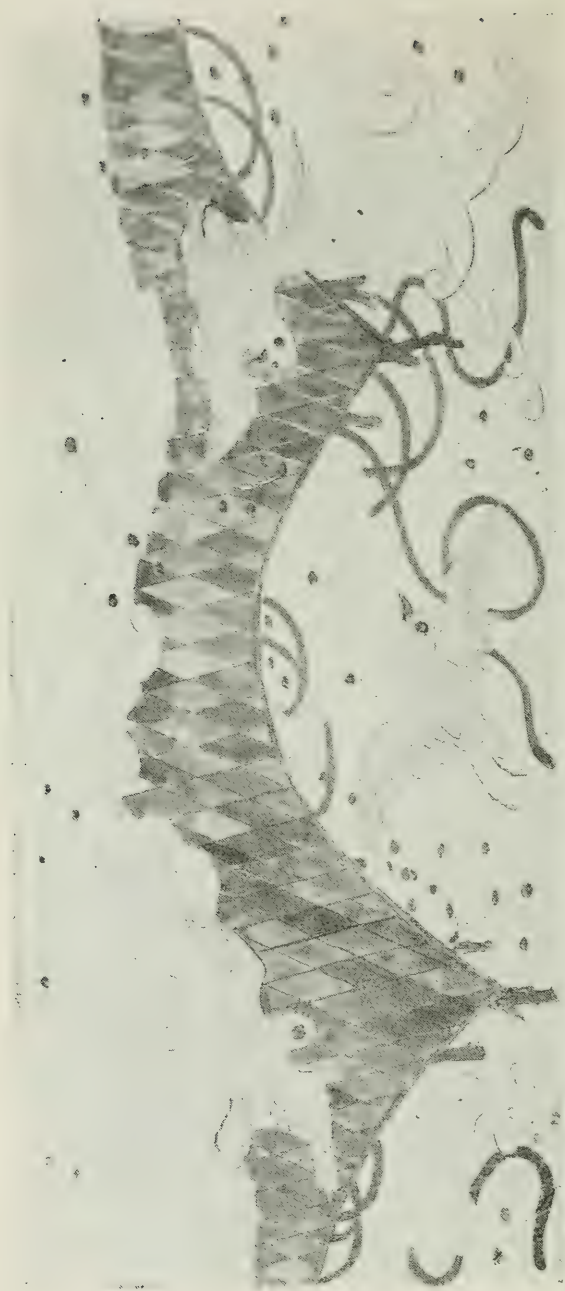
正月元日（御召替後）同二日三日及ひ五節句御搔取下御合着の緋大紋又は緋紋縮緬三月三日九月九日御搔取下御合着白大紋同紋縮緬等の雛形二三を示す尤模様柄は種々あり唯體裁を掲くるのみ但三月三日に限り御搔取は桃色繻子地縫入に御合着は白大紋形に色なし縫入を召させらるゝ色なしとは唯赤色なきいふよし也

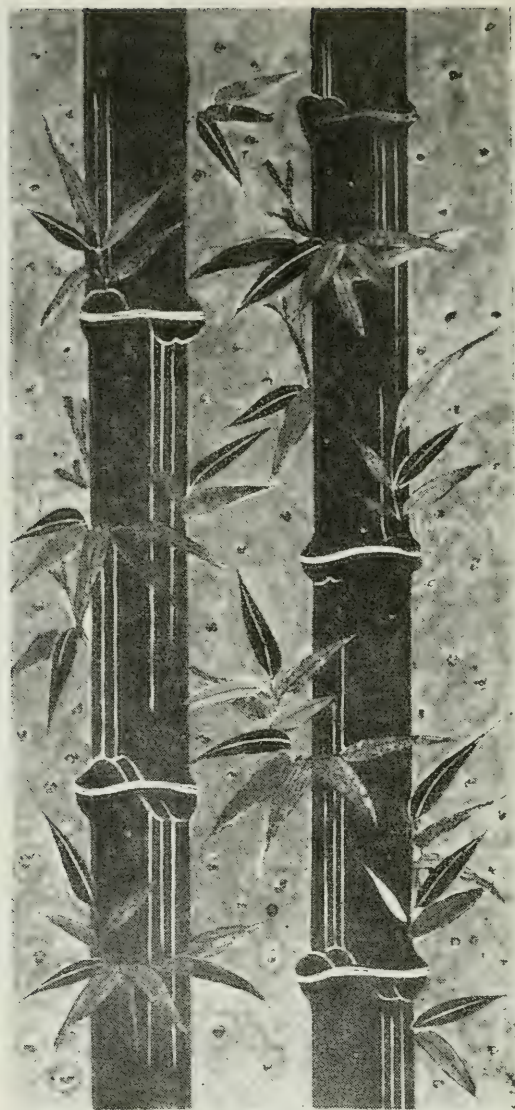
次の大形二圖は現物大紋の大さを示したる也

緋大紋綸子又は緋紋縮緬

白大紋

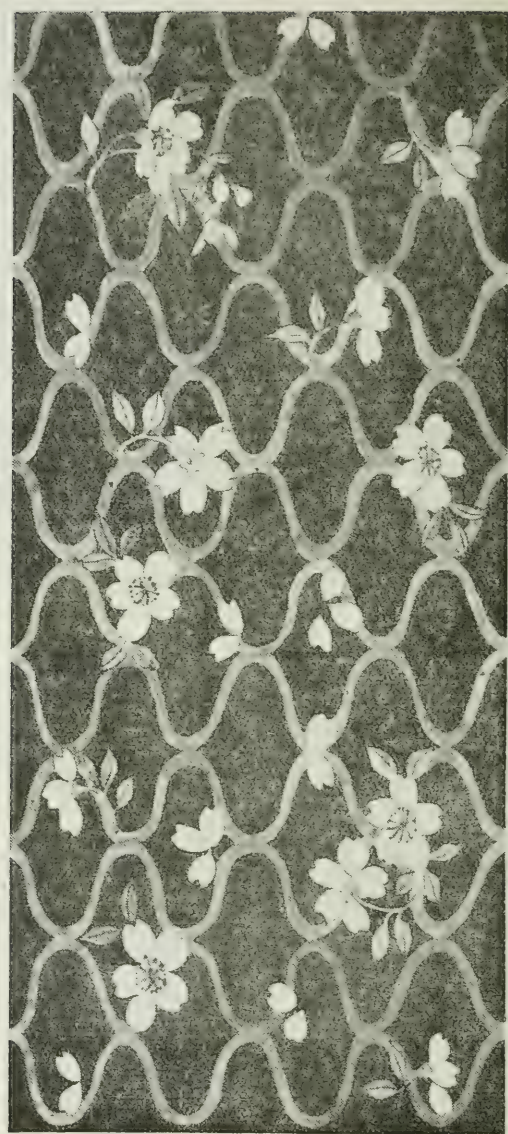
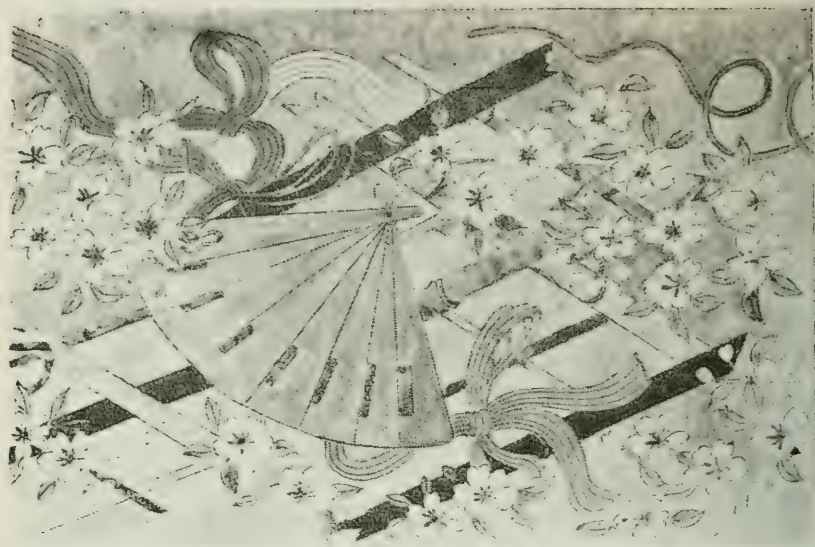
緋大紋

同
杜若花束
向ひ合蝶
の段模様

御帶類

御帶類亦亘多なり下繪雛形遺存のものにより五節句式日等御召の模樣柄色合等の概畧を示す　皆縮圖

赤繻子地　竹黒金紫　竹の葉黒金かち候方紫も程よく入

水玉金計　丈鯨一丈一尺　織出の外巾八寸

繻子地　市松紫円　牡丹花紅ぼかし　杜若紫金
菊の花金紫ぼかし紅ぼかしかば糸も入蝶黒金紅其外色々入
いつれも色取よく紅がち　鯨丈一丈一尺　巾八寸　織出の外

草柳色琥珀地　梅花赤　木黒
蝶色取よく　金糸無用

三一五

花束左右向ひ合ひ
中に檜扇

五節句式日御帶は紫萠黄淺黄黑赤地繻子縫入御召替後御帶付米子地綾地大形織物五色紺等なり

御平常御介取下は琥珀地織物五色之内御召替後同斷且綾地天鵞絨（縞とも）の類種々盡しかたし

夏季御附帶は紺白萠黄赤地織物又は赤白段織物等なり御寢卷帶は夏冬とも縮緬御しごきとす委細は服制第二御簾中樣年中御衣服の部を參照すへし

御腰卷の大樣は前に掲けたれとも先前御姫樣方御用ひの記類發見により其地合模樣から寸法等の事再ひ爰に記載す

懿姫樣御召　天明三卯年八月

御腰卷　地黑紅梅綸（ねりと訓す女巾にて習用ふ）模樣七寶花摘若竹折枝代銀三貫八百五拾目裏紅綸代銀貳百五拾目

方姫樣御召　寛政二戌年六月

同　地黑紅梅綸　模樣万字つなきに菊折枝代銀二貫八拾目裏紅綸　代銀二百五拾目

承姫樣御召　寛政五子年十月

同　地黑紅梅綸　模樣龜甲椿折枝　代銀三貫五百目

同　地黑紅梅綸　模樣七寶梅橘折枝代銀三貫五百目　裏紅綸貳反代銀五百目

右吳服師丸屋積

寸法御身丈に應し少々つゝ長短あれと大凡左の如し

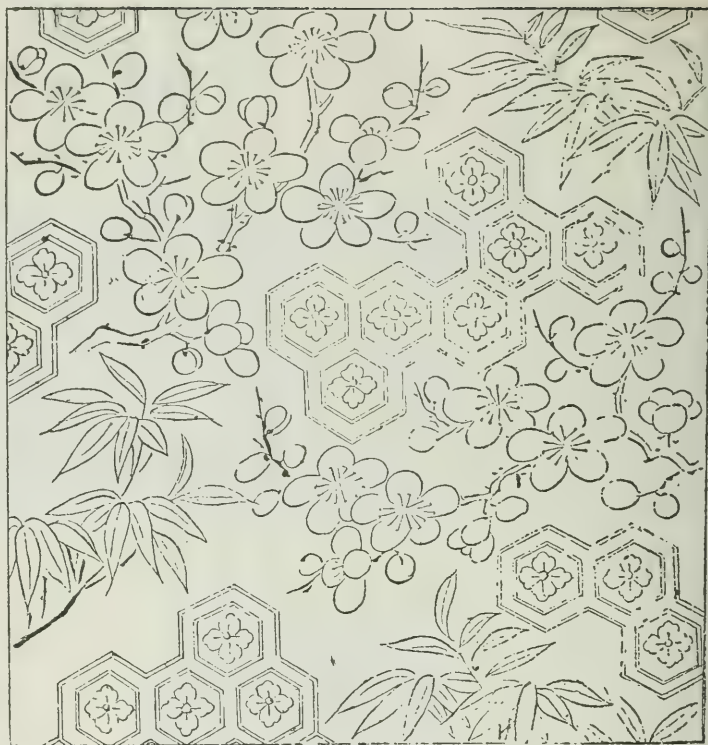
丈四尺九寸五分　縫立丈　四尺六寸　前　四尺七寸　縫巾　上九寸五分　下一尺
　　　　　　　　身巾（八寸五分／七寸五分）　巾　一尺三分　縫巾　一尺

袖　二尺六寸　縫立丈　二尺三寸　ぬい　二尺三寸五分
　　　　　　　巾　身同樣

奥身丈四尺七寸　巾　上四寸　下七寸
　　　　　　　　ぬい立　五寸　ぬい　上は巾に減し下六寸

襟　貳尺六寸　巾　五寸
　　　　　　　ぬい立巾　三寸二分　ぬい巾四寸

總丈五尺貳寸

彩色大同小異畧之

右模樣柄の二三例を示せる也此外末廣鶴等色々あり總して現品模樣は圖より少し大きめなり
總して金糸金箔赤糸萌黄糸ひはもへき糸白糸紅糸縫又は摺込箔

南紀德川史卷之百五十

臣　堀内信　編

服制第四

文武官服制圖

明治二巳年藩政大改革續て同三午年五月十五日從來の式服平服共廢止更に藩内限り文武官人の服飾を制定以て尊卑の別文武の章を明かならしむ則文武官式服に於て知事公は衣冠束帶無位大小參事は直垂切袴風折烏帽子大屬以下少史生に至る迄素袍切袴烏帽子とす武官式服は一同鎧直垂引立烏帽子服の色を以て上下を分つ文官平服は袷衣小袴を用ひ色を以て上下を分ち太刀を用ゆ武官平服は軍服兼用一般黑色の洋服に模し帽を用ゆ唯名稱は和樣を襲稱し組紐菊綴等の疎密に依り上下を區別するの制とす即ち同年六月五日公用局參事より圖面之通の新服を可用旨を布告せり服制第二明治三午年五月十五日の條及ひ其以下と併せ見るへし

和歌山藩官人服制圖

文官式服　冠下束髮 平服にも同し

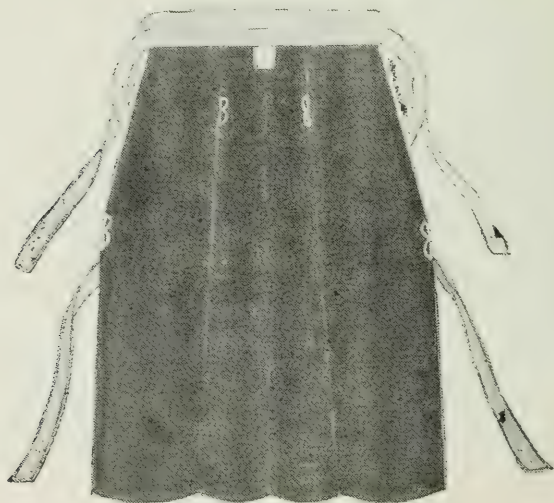
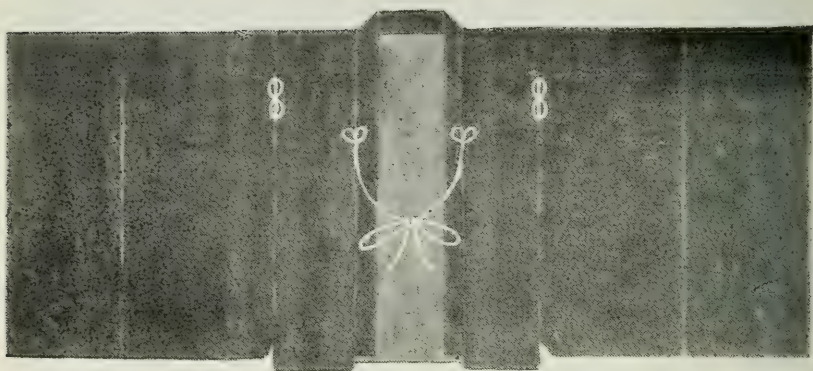
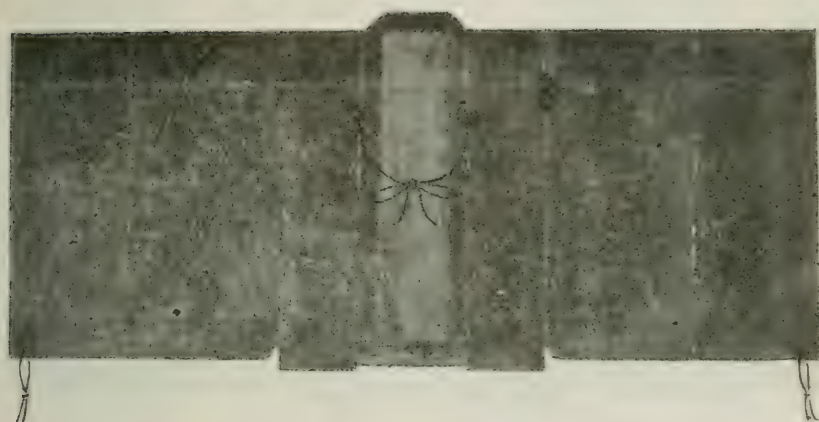
衣冠　束帶　圖畧之但定式之通　以上知事

直垂 色焦茶　切袴　風折烏帽子　白小袖　以上無位大小參事

素袍 色薄茶 無紋　切袴　折烏帽子　染小袖　以上大屬以下史生に至る

大參事
權大參事　小豆色
掛緒　白
胸紐　白組
菊綴　同
袴紐　白

少參事
權少參事　小豆色
掛緒　黃
胸紐　黃組
菊綴　同
袴紐　白

大學

權大屬　柿色

學校一等教授

挂緒　焦茶

胸紐　焦茶帶

菊綴　同

少屬

學校二等教授

同　三等教授

大史生

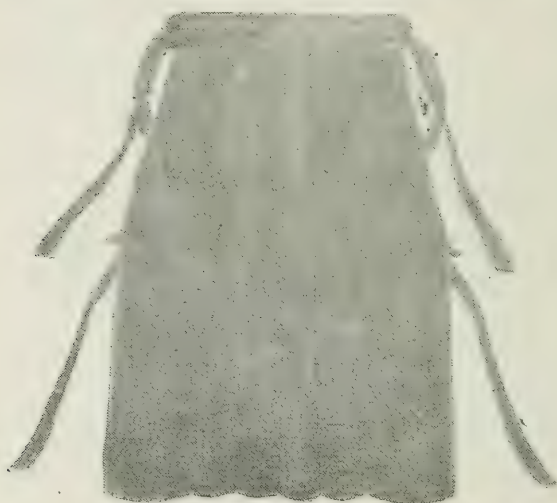
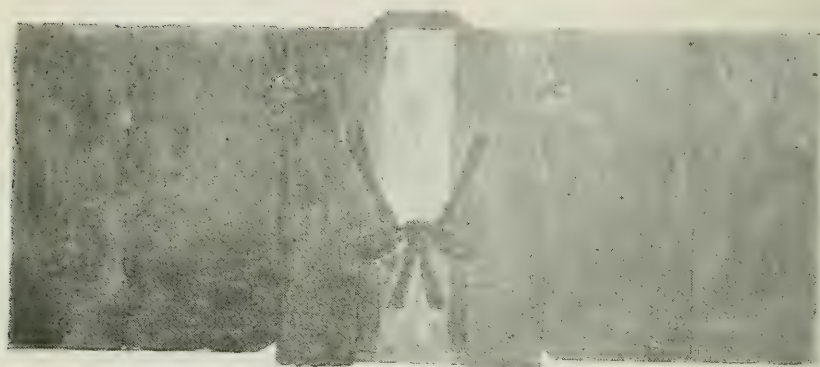
權少屬

學校一等助教

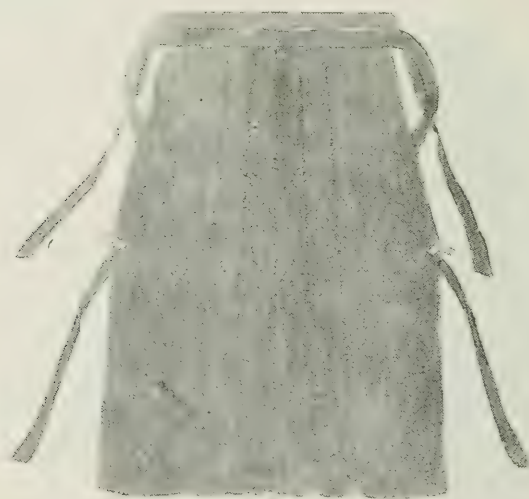
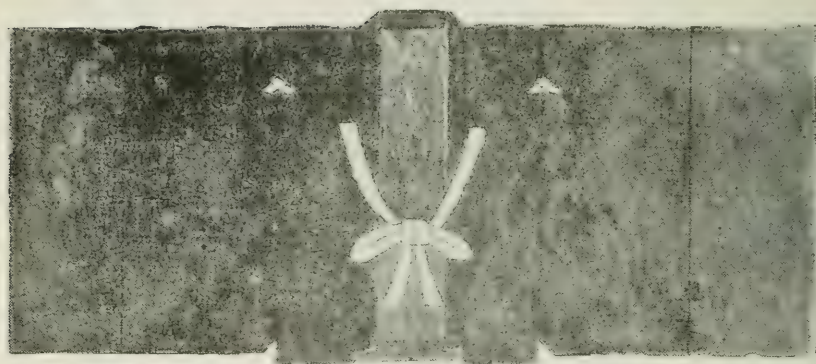
袍色

掛緒　藍

胸紐　藍革

菊綴　同

少史生　柿色
挂緒　萠黄
胸紐　萠黄革
菊綴　同

武官式服　冠下散髪平服同し

鎧直垂

但都督副都督地合　夏生絹單冬綾絹裏打　色黒右以下地合夏冬共麻單色薄花田

引立烏帽子

戍兵部督　黒

鉢巻　白

胸紐　白組

菊綴　白絲三つ

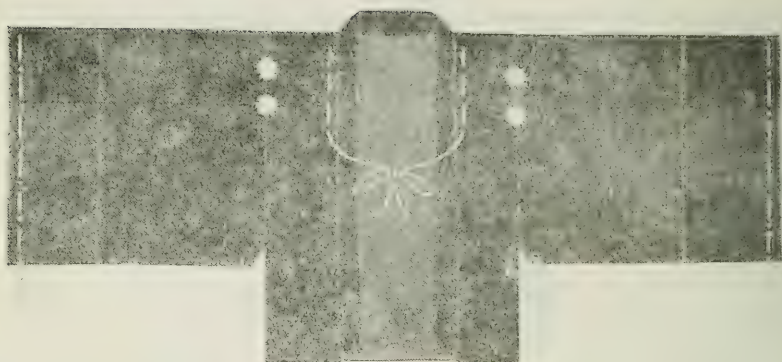
指貫　上下共同

戍兵副都督　黒

鉢卷　白

胸紐　白組

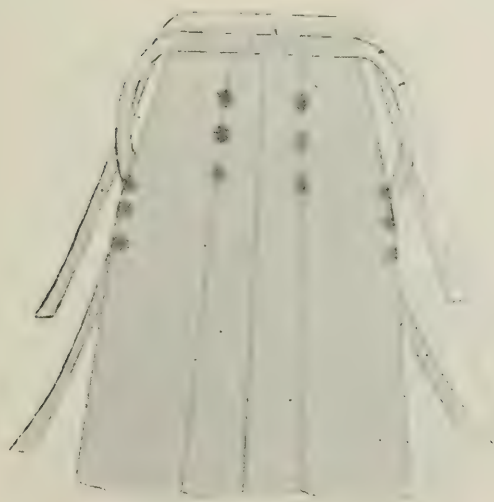
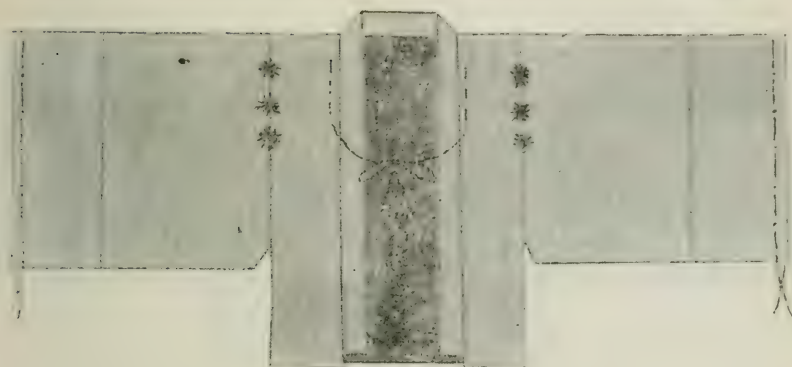
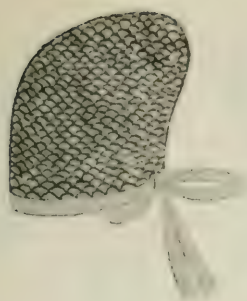
菊綴　白絲二つ

指貫　上下共同

歩兵聯隊長　淡花田色

鉢卷　焦茶

胸紐　焦茶麻苧

菊綴　同三つ

指貫　上下共同

歩兵大隊長
騎兵聯隊長　淡花田色
砲兵
兵學寮長

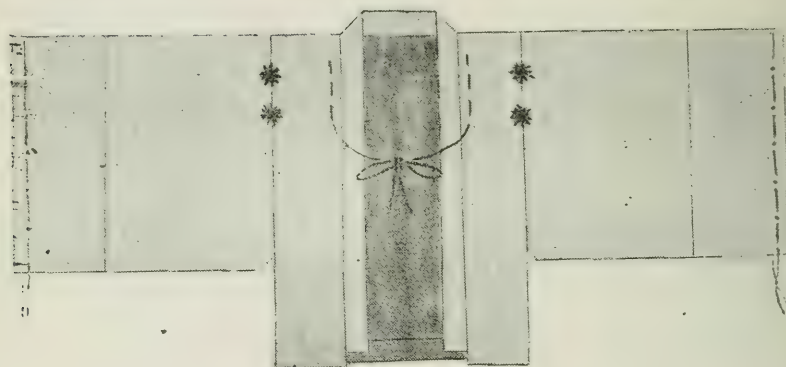
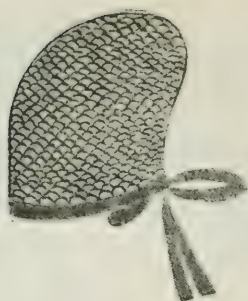
鉢巻　焦茶
胸紐　焦茶麻苧
菊綴　同二つ
指貫　上下共同

都督傳令使

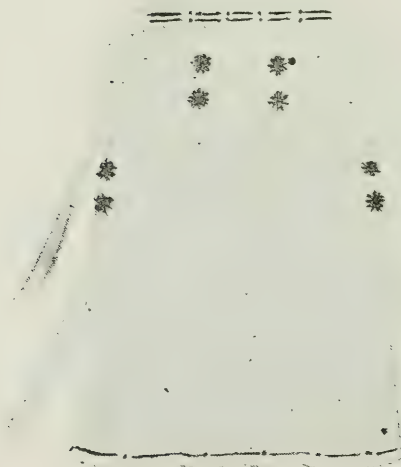
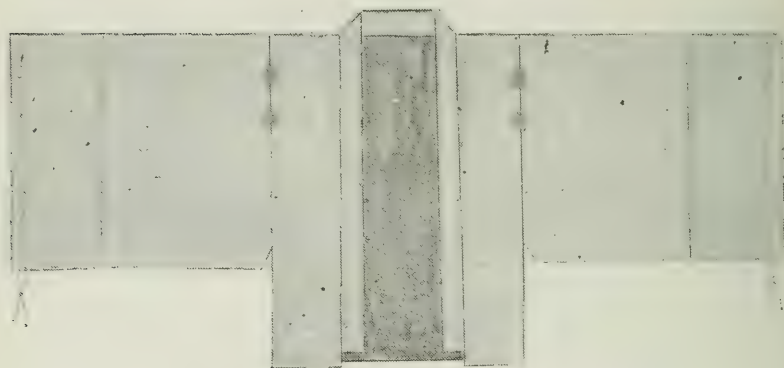
歩兵
騎兵
砲兵
工兵
輜重　小隊長　淡花田色

兵學寮一等教授

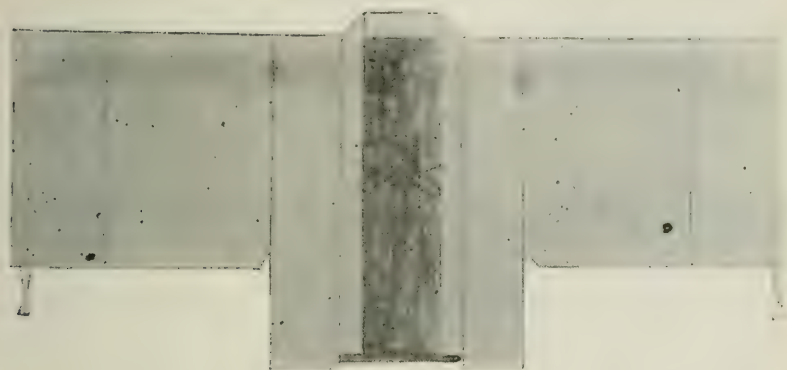
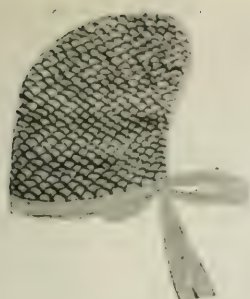
鉢巻　濃花田

胸紐　濃花田鹿子

菊綴　同三つ

指貫　上下共同

步兵大隊傳令使
砲兵聯隊傳令使
步兵
騎兵
砲兵一等分隊長　淡花田色
工兵
輜重
兵學寮二等教授
兵器
火藥　司長
鉢卷　濃花田
胸紐　濃花田麻苧
菊綴　同二つ
指貫　上下共同

歩兵二等分隊長
歩兵大隊計司
砲兵
工兵 二等分隊長
兵學寮三等教授　淡花田色
鉢卷　濃花田
胸紐　濃花田麻苧
菊綴　同一つ
指貫　上下共同

都督史生

歩兵
騎兵
砲兵　下司長　淡花田色
工兵
輜重

鉢卷　萌黄
胸紐　萌黄麻苧
菊綴　同二つ
指貫　上下共同

歩兵
騎兵
砲兵
工兵
輜重

下司　淡花田色

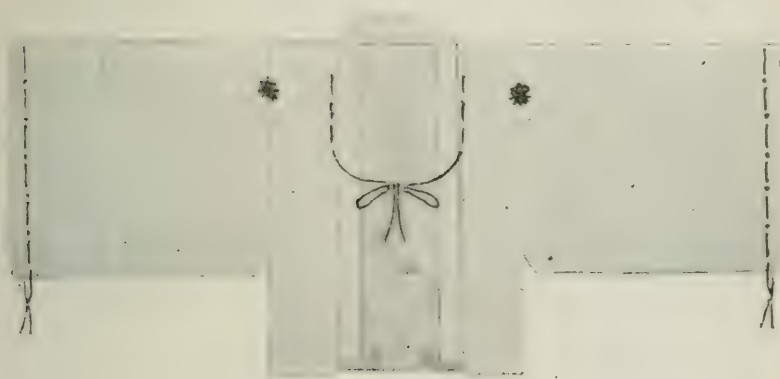
兵學寮一等助教

兵器
火藥　下司

鉢卷　萠黄

胸紐　萠黄麻苧

菊綴　同一つ

指貫　上下共同

文官　平服　軍服火服野服同斷

但火服野服は袴の裾を括り脛巾（色地小袴に同し）を當て軍服は袖をも括り當腰（地色袷衣に同し）太刀又は打刀を佩ひ候事

袷衣

知事地合（夏顯文紗單 冬有文絹裏打）色黑大少參事地合は地文無之絹勝手次第色黑（夏單 冬裏打）

右以下麻毛綿勝手次第色黑（夏單 冬裏打）

但麻地合縮相用候儀不苦

小袴

知事地合（夏有文生絹單 冬有文練絹裏打）色紫大少參事地合は地文無之絹勝手次第色濃花田（夏單 冬裏打）

右以下麻毛棉勝手次第色薄花田（夏單 冬裏打）

但麻地合同斷

本文奏任以上は直垂着用に准し袷衣相用ひ右以下は素袍着用の廉を以て麻布にて裁縫袷衣同樣に製し假に袷衣と相唱候事

太刀或打刀

都て從者に爲持從者無之輩者自分佩するとも不苦

笠

御定の塗笠

雨衣

但地合裁縫共定り無之御定之塗笠着用の節雨衣着用無之節は手傘勝手次第之事

知事

羽織　薄墨　地紋黒

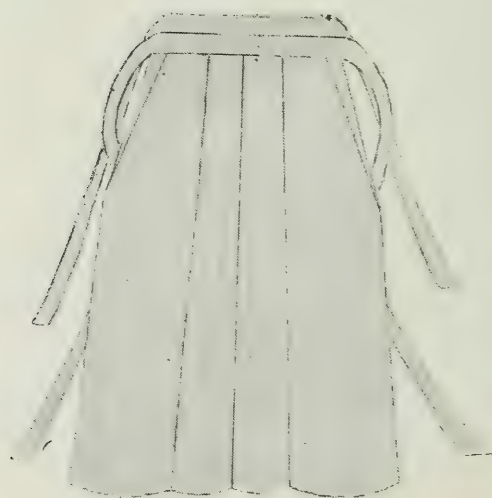
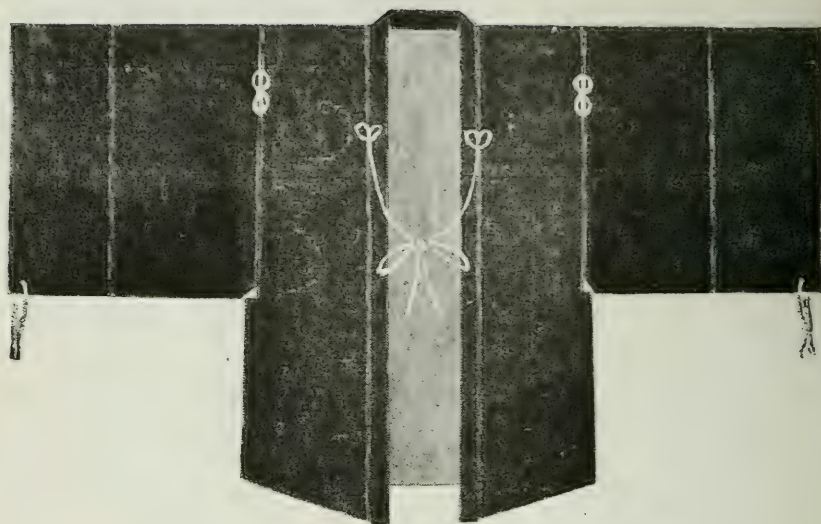
袴　薄紫　地紋白

胸紐　紫組

菊綴　同

袴紐　白

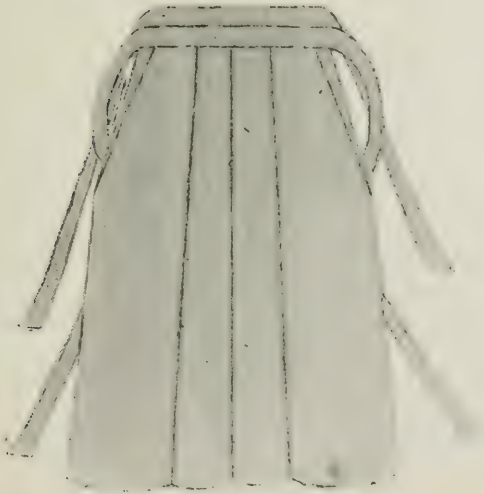
一

大參事
權大參事
羽織　黑
袴　花田
胸紐　白組
菊綴　同

少參事
權少參事
羽織　黑
袴　花田
胸紐　黄組
菊綴　同

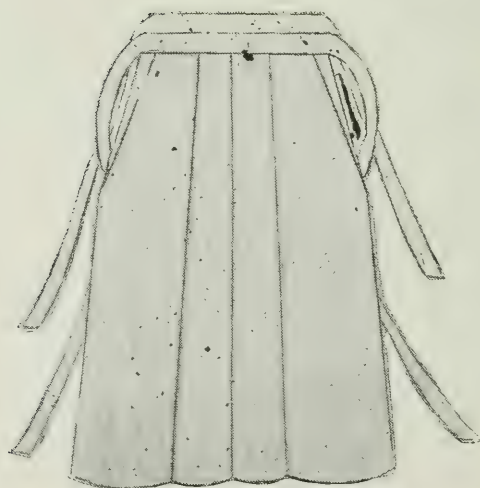
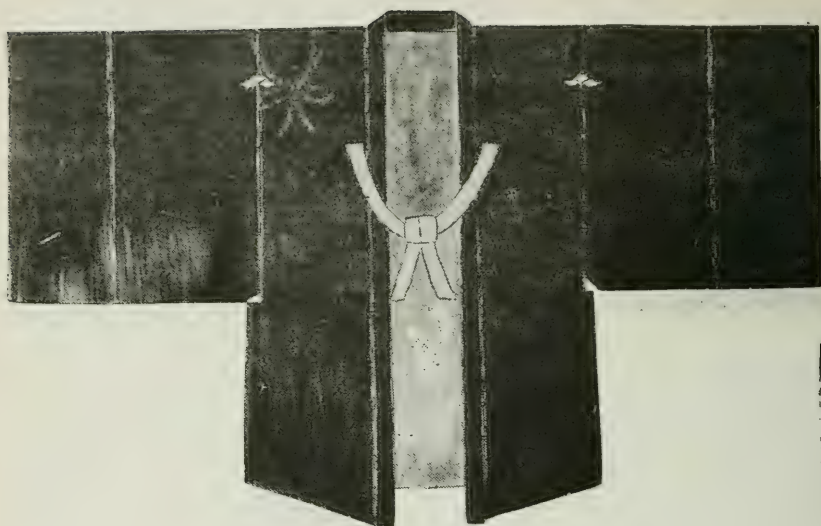
大屬

權大屬

學校一等教授

羽織　黑

袴　花田

胸紐　茶革

菊綴　同

少屬
學校二等教授
同　三等教授
大史生
權少屬
學校一等助教
羽織　黑
袴　花田
胸紐　藍革
菊綴　同

少史生

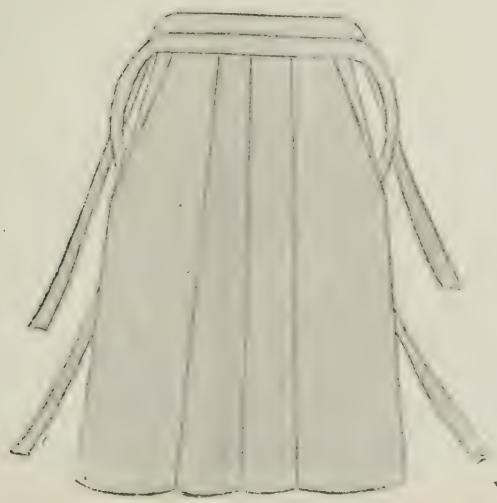
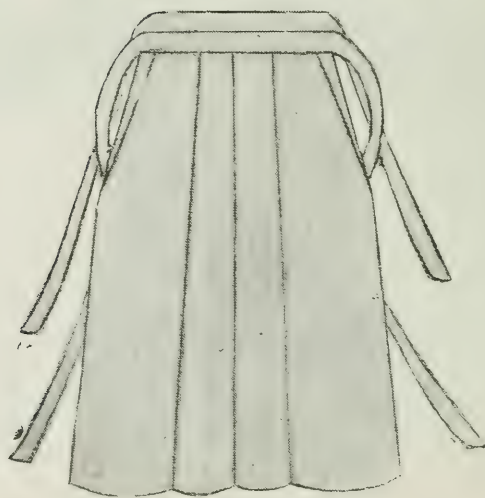
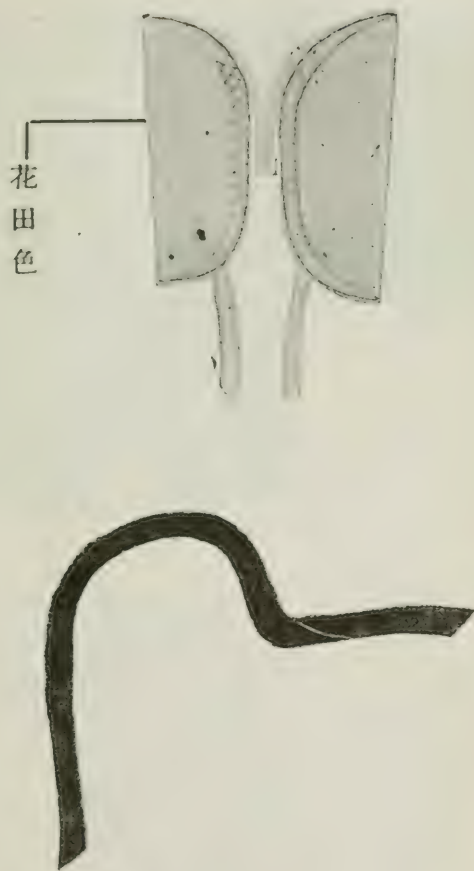
學校二等助敎

同　三等助敎

羽織　黑

袴　花田

胸紐　萠黃革

菊綴　同

武官平服

軍服火服野服同斷

但戍兵都督初兵學寮三等教授以上地合夏冬共黑羅紗右以下黑呉呂服連

戍兵都督
烏帽子　鋪中しぼ
挂緒　白組
胸紐　同數五
蜻蛉頭如圖
菊綴　同數七
指貫　上下共白絲

戍兵副都督

烏帽子　錆中しぼ

掛緒　白組

胸紐　同數四

蜻蛉頭如圖

菊綴　同數五

指貫　上下共白絲

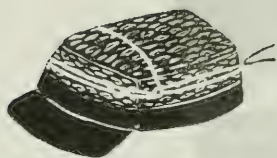
步兵聯隊長

烏帽子　鋳梨子打

挂緒　茶組

胸紐　茶革數五

蜻蛉頭如圖

菊綴　同數五

指貫　上下共同

歩兵大隊長
騎兵砲兵聯隊長
兵學寮長
烏帽子　鍮梨子打
挂緒　茶組
胸紐　茶革數四
蜻蛉頭如圖
菊綴　同數三
指貫　上下共同

都督傳令使

步兵
騎兵
砲兵　小隊長
工兵
輜重

兵學寮一等教授

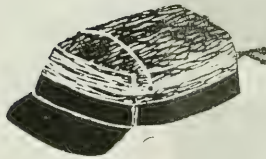
烏帽子　錆梨子打

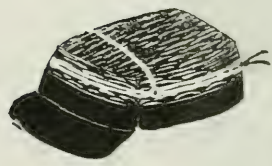
挂緒　藍組

胸紐　藍革數五

蜻蛉頭如圖

菊綴　同數三

指貫　上下共同

步兵大隊傳令使
砲兵聯隊傳令使
步兵
騎兵
砲兵　一等分隊長
工兵
輜重
兵學寮二等教授
兵器
火藥　司長

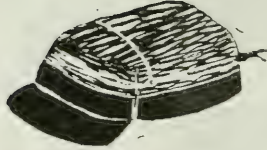
烏帽子　鍮梨子打
挂緒　藍組
胸紐　藍革數四
　蜻蛉頭如圖
菊綴　同數二
指貫　上下共同

步兵二等分隊長
步兵大隊計司
砲兵
工兵二等分隊長
兵學寮三等教授

烏帽子　鏽梨子打
挂緒　藍組
胸紐　藍革數四
　蛸蛤頭如圖
菊綴　同數一
指貫　上下共同

都督史生

步兵
騎兵
砲兵　下司長　同下司
工兵
輜重

兵學寮一等助敎

兵器
火藥　下司

烏帽子　鋳横
掛緒　萌黄毛棉組
胸紐　黑くゝみ牡丹數五
菊綴　萠黄革數三
指貫　上下共同

背打裂無之
黒くゝみ牡丹二つ
以下准此

步兵上等伍長
步兵大隊史長
騎兵
砲兵　上等伍長
工兵
兵學寮二等助教
步兵
砲兵　下等伍長
工兵
兵學寮史生
同三等助教

烏帽子　鑄横
挂緒　萠黄色棉組
胸紐　黒くゝみ牡丹數四
菊綴　萠黄革數二
指貫　上下共同

上等戍兵
小隊史生

烏帽子　錆　横
挂　緒　萠黄木棉組
胸　紐　黒くゝみ牡丹數四
菊　綴　萠黄革數一
指　貫　上下共同

下等戍兵

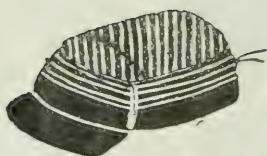
烏帽子　鍺横

挂緒　萠黄毛棉組

胸紐　黑くゝみ牡丹數四

菊綴　無し

指貫　萠黄革

徽章

徽章の事別に制度等記述之ものなし其當時に在ては慣例に馴致し人々能く熟知する處なり即ち御印しと唱ふるは御紋及ひ中黑輪拔け紀の字鎭の字の四なり今順次之が略解を下し各種の圖樣を示す

御紋

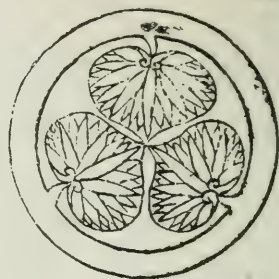
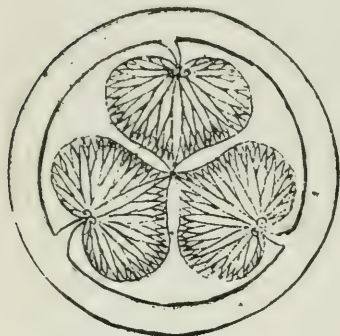
葵丸本御紋を單に御紋と稱して葵御紋と復稱せす御紋容は新古輪環の厚薄葉形の大小蘂の繁略等區々異動あり總して古へは葉小さく莖長き方也中世以後よりは當時に於けると同し自然之沿革なるへし近時傳ふる處に　公儀御三家方等格好は一つなれとも葉蘂の數異にして　御當家は十三蘂にて尾府は繁く水府は尙多しと亦慣用例をなしたるならんか葵御紋の事は舊考餘錄（文政十二年竹尾次春編）の葵御紋考に衆說を列し考証を揭け巨細を詳記しあれは爰に贅せす酒井左衞門尉氏忠か丸盆に葵葉三枚を敷き熨斗勝栗昆布を置信光公に奉りしに是を汝か家の紋にせよとて賜りこれより酒井家の家紋に定めしが後　神君御所望にて（又は長親公の仰ともいふ）葵を御紋に定め給ひ鳩酸草の紋を酒井家へ替へ賜りしとは世普く稱する處なるか祖公外記には左の記あり葵御紋考にも揭けさる所依て附記す

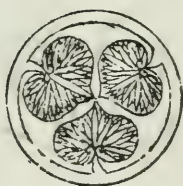
一御當家之御紋は蕎麥葉を被用候御事と太閤佐助申上候付布施三悅加納遊快へ御尋之處先御代より葵葉を用來候と申上候仍之佐助閉門可被仰付之處猶又御吟味被遊候得共七本之御旗も蕎麥葉に相違無之候付左助へ御加增被遊候又慶長之砌　神君御上洛之節加茂の祭禮へ御參詣被遊其御時より葵葉をも御紋に御用被遊候葵葉蕎麥葉紋に認候へは能似候得共內之蘂は少々違ひ候又御先代松平和泉守信光公御代文明十一年乙亥七月十五日安祥城を御攻落候節酒井五郎親清へ丸之

内に三葵を其方之紋に用候樣被　仰付候其後松平出雲守藏人次郎三郎長親公御代文龜元年辛酉四月酒井家葵紋を御所望被遊代々酸漿(かたばみ)之紋を用候樣被　仰付候

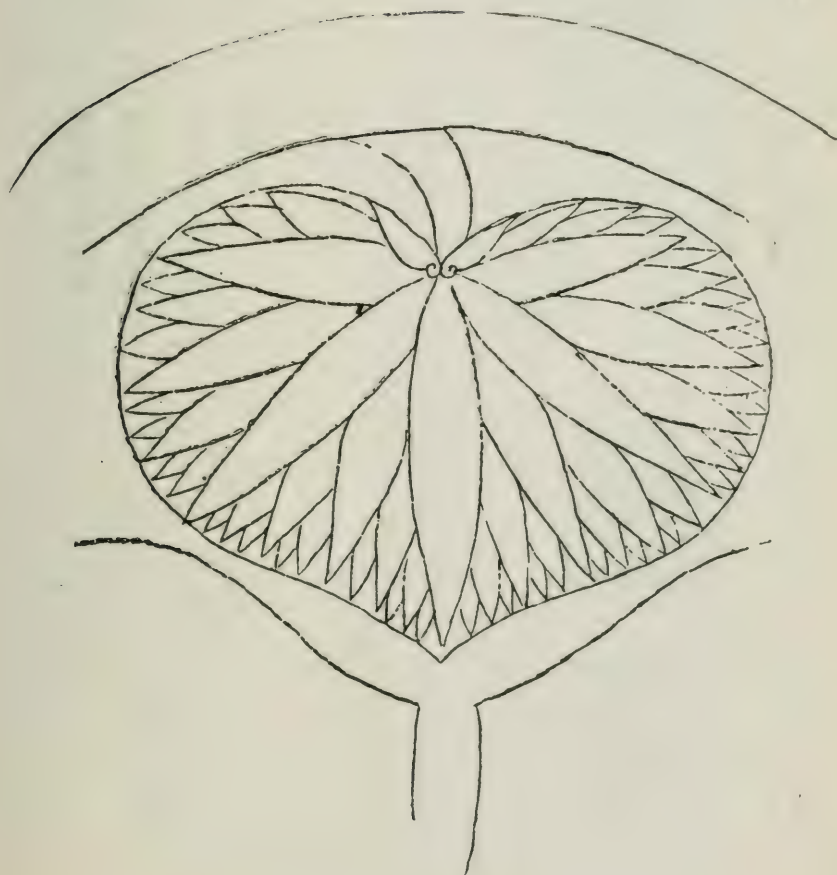
葵御紋古今之圖

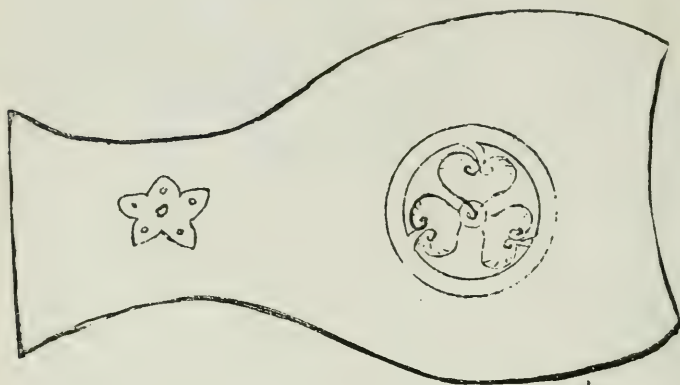
歴世の御紋容悉く調査の料なし僅に發見の數種を揭け概略を示す第一圖は　和歌東照宮御寶物中の神器に就き寫正し　神君及ひ御家御數世の御紋容を示す之に據て考ふれは古樣にも近世に酷似のものあり唯　龍祖御劔鍔の御紋は少しく異樣の觀あり尤原圖朦朧確寫しかたく或は圈囲極めて細小爲に彫刻緻密を悉し得さりしならんか概して中世迄は形狀粗密等に區々たらす多く葉莖繁文に從われし如し　舜恭公に至て初て十三蘂に一定爾來之に準憑唯時として異同ある事圖の如し第二圖は報恩寺什物を寫す第三圖は舊考餘錄葵御紋考に載する處最も異樣也第四圖は明曆延寶元祿武鑑所記にして葉容其類を見さるもあり蓋し世間の印本深く推究する處にあらさるか唐花御紋の如きも近世とは大に體々異にし古風想ふへし共に參考に備ふ

第一圖

東照神君御召領
御鞍御紋金銀切入
天正十六年二月日
井關作

同御召領御鞍
御紋
天正十七年月日
於駿州井關作

同御召服御紋

同御鈒鞘御紋所
清溪公御奉納品

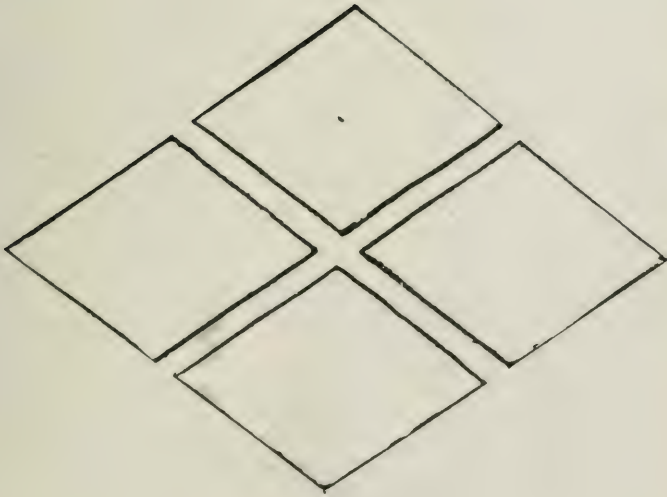
東照公御召服箱之御紋

三つ葵の一葉を畧寫繁蘂の數を示す

大坂御陣之時
龍祖御着用

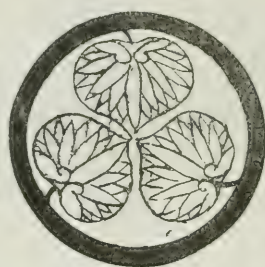
御具足
之臂章

御具足御下着の模様

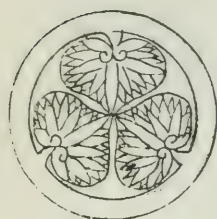
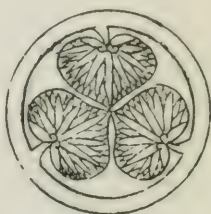
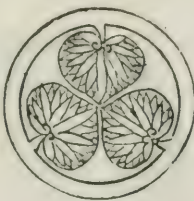
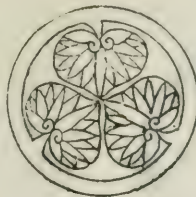
同御下着上部之模樣

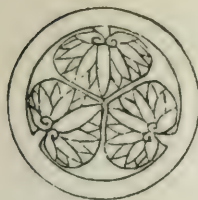
同下部之模樣

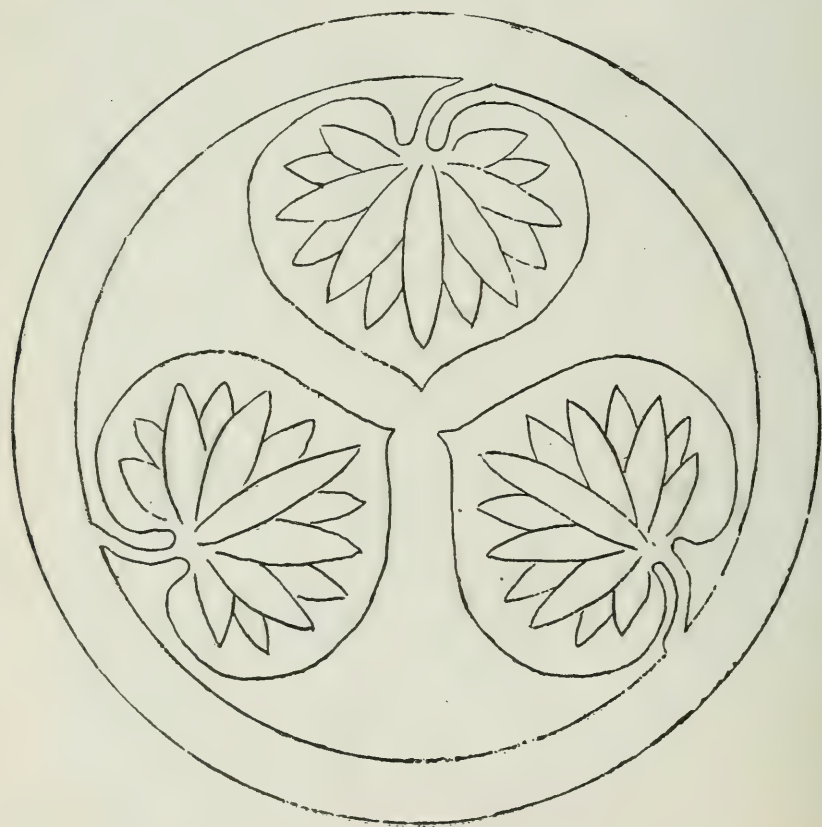
龍祖御太刀鍔之御紋

御太刀來國俊長二尺三寸八分半御鍔は七子御紋散しにて直徑二分五厘乃至一分七厘以下の小形にて容狀睹易からす仮に六倍强の大として模寫然れとも原形分明ならざる所あり概畧を示す

養珠院殿御遺物蒔畫の御紋

此圖は甲州大野本遠寺寶物養珠大尼公御遺器蒔畫御紋也　龍祖御代の御紋を示す爲に爰に加記す

寶永七年寅五月

有德公御寄附眞御太刀鞘之御紋

明和三年戌四月
觀自在公御奉納忠廣御太刀鞘の御紋

安永五年申六月
香嚴公御奉納正俊御太刀鞘の御紋

寛政二年戌十一月
舜恭公御奉納行永御太刀鞘之御紋

顯龍公御奉納忠國御太刀箱之御紋
原御紋大さ直徑五(分)一分五厘今縮圖す

（第二圖）

加藤清正公より龍祖へ進獻
蜀紅錦の御紋　　蓋慶長間

右蜀紅錦は瑤林大夫人御婚嫁の時御携品の由大夫人は慶長十四年御許嫁元和三年正月駿府へ御入輿清正公は慶長十六年六月逝去なれは是に先ち御許嫁の時御調度たりし知るべし然るに寛文六年瑤林大夫人薨逝の時清溪公より右裂地を御菩提所若山報恩寺へ御寄附依て同寺にて七條の袈裟に製し唯一の寶物とし今に保存するもの也御紋容に於て最古樣とす

武家織物記一 寛永十四年夏 中院愚齋周晳序

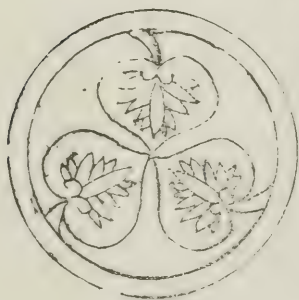
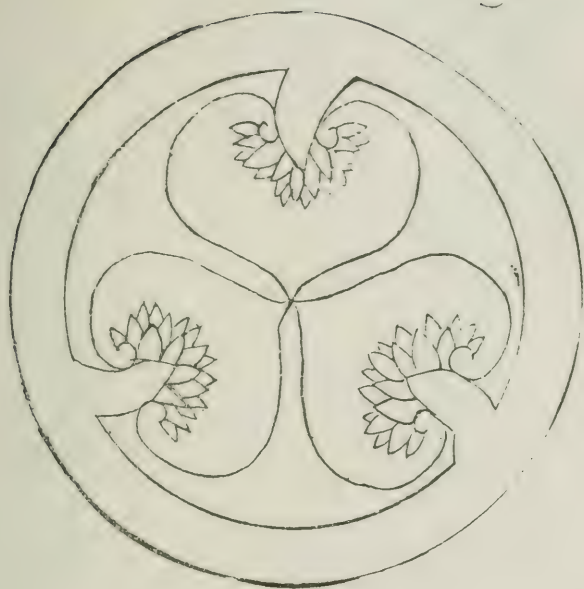
紀伊大納言樣

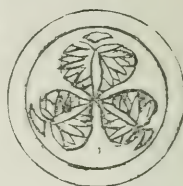
大御馬印

（第三圖）

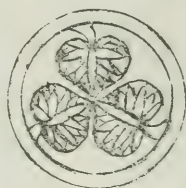
明暦二年版御指物揃目錄

紀伊大納言樣

御馬印

明暦年中武鑑
紀伊大納言賴宣様

（第四圖）

松平左馬頭様
松平右馬頭様
尾張右兵衛督光義様
右御紋同様とあり

尾州家本御紋御替紋共同様
水戸家本御紋を記さす御替紋如左

元祿年中東武鑑
紀伊大納言光貞卿

御替紋

近世御紋及替り御紋

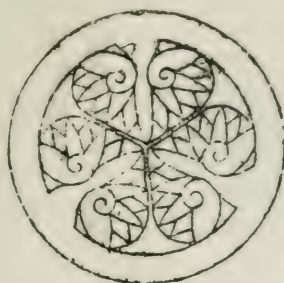
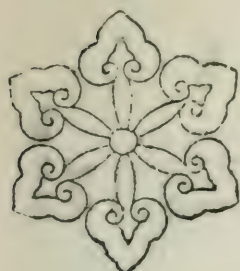
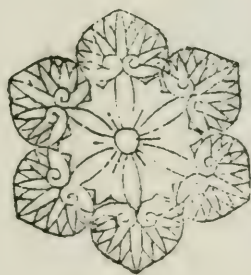
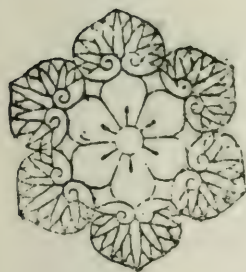
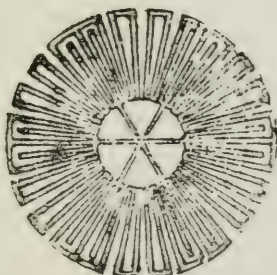
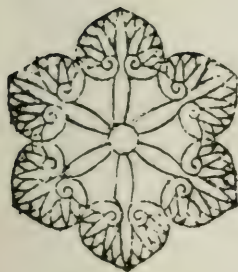
舜恭公以降　當公に至る本御紋及ひ替り御紋様は次に圖する如し替り御紋と稱するもの十一種あり唐花は殿館長押釘隠襖引手又は器具の紀章にも用ひさせられ余は御召服に限れる如し唐團扇は御陣羽織に附け給ひし由なれとも他に御用ひの事を知らす三つ鍬形は就中重き御紋の由にて維新前は重臣侍臣も拜領叶はさりしといふ鍬形御紋の事葵御紋考記する處左の如し

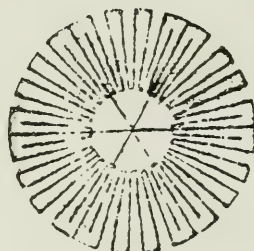
或云　東照宮より讓らせ給へる所の御紋なりとて紀伊殿庶流松平左京大夫にては三鍬形を以て殊に重く取扱はるゝ事はむかし　東照宮賴宣卿へ御咄に織田右府と豐臣太閤と我と三人各鍬形の兜を着て天下の時勢を論せしと或夜夢見し事ありしかは汝わするゝ事なかれと　上意により附傳ふる所と云々

按に　西條家にて三鍬形御用ひは　龍祖より御讓に成りし事知るへし葵御紋考記者は偶々西條家の事を知て御本家に及はさりしは臣下にも賜はさりし程にて他人容易に聞知を得す故に本記の如く記したるものと察せらる

本御紋　唐花　葵字

一重唐花　花葵　六葉葵

寄せ葵　唐團扇
二重唐花　蔓葵
三つ鍬形　一重葵字

西條公及御庶流御紋

舊考餘錄葵御紋考に曰く御家事記云紀州家庶流者石井筒之内葵近代似隅切角證分者陽石井筒之内葵尾州家庶流は菊座之内葵水戸家庶流は隅切角の内葵但讃岐守は丸の内葵とあり如此記載あれ共下圖によれは西條には御初代より隅切角の内葵を御用ひ今に至て替らす　深覺公清溪公御三男內藏頭公　有德公同御四男主稅頭公御庶流の御時は石井筒之內に葵を用ひ給ひしは元祿武鑑にも其通りなれ共修理大夫菩提心公御二男君以下は皆隅切角丸の內に葵也故に御紋考近代似隅切角といひしならん內證分とは

御乗出し前をいふ（将軍家へ御目見前を乗出し前と通稱す寛政以前の比は内證分と云ひたる如し）しかし辰次郎君（憲章公御子）には御幼冲御乗出し前無論なれとも同しく隅切角丸之内葵にして石井筒の内葵にあらさりしは信能く知る所也

延寶九年暮春大譜江戸鑑上に

松平左京大夫頼純少將

同替紋

元祿年間東武綱鑑に

松平左京大夫頼純

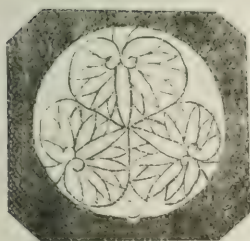
同　替紋

御二男
松平大之助頼雄

元祿年間東武綱鑑に

松平内藏頭頼職

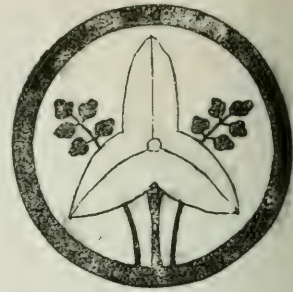
松平主税頭頼方

同　替紋

松平修理大夫頼興様　菩提心公御二男　御幼名榮三郎

松平金十郎様　同御四男

松平職之亟様　同御五男

松平辰次郎様　憲章公御二男

菩提心公以下御代々御二男様方なし

養珠院様御紋

甲州大野本遠寺御廟及ひ同寺へ御寄附御遺物器蒔畫御紋を寫す御里方蔭山氏の家紋也

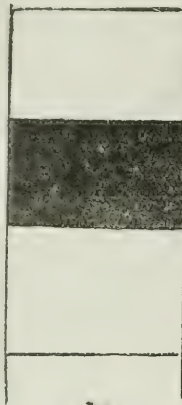
紀州和歌浦妹脊御寳塔唐戸には水に澤瀉を彫刻せり

御庶流にはあらされ共類により附記す

章標　四種　御印と云

御紋之外一般の章標とするもの中黑初四種あり是等軍事の外平素用ひらるゝ所其略左の如し

一中黑は蓋し中黑御旗に基くなるへし 中黑御旗の事軍制の部に詳也 平素は唯小丸高御提灯に附するのみ維新後には餘の提灯にも用ひらる

中黑

一輪抜は火消道具又御供世話役々提灯等に用ひ其他に用る事稀也御先手同心火事羽織は三つ輪抜御抱鳶之者印し半纒革羽織にも輪抜を附す維新後は馬丁法被等に用ひらる輪抜の事葵御紋考に記す

る處左の如し

幕府旗下軍事兜の前立物背旗は一般輪拔なりし也

輪拔も又御紋に等しけれはさて容易に附る事を禁せらる朱丸はわきて禁せらるゝ所なれは普通に用ひす

御家事記云輪拔又名弦卷

輪拔

一紀の字は多く御長持提灯等に附し又船印火消道具にも用ゆ又官物運送等には紀御用（紀州御用とも記す）と署し上に葵御紋を附したる標札（鑑札又は衛符と云）を挿す途中守護の爲也道普請にて車止の場所も此鑑札を掲くれは無支障通行を得たり道中飛脚荷物にも之を用ゆ諸御用達商人又は道中御用達（即ち宿驛本陣川役人の類）の者共依願御勘定所より右鑑札を下け渡したるも尠からす

紀の字

一鎮の字は何の謂れなるや蓋し鎮靜の義に取れるなるへし御駕之者看板又は火消道具御抱鳶の者半

纒或は御中間看板等に付したり

鎮の字

延寶九年及ひ明和天明文化頃武鑑に御駕之者看板印に鎮の字五つ所紋に附たる旨記載あり古くより用ひ來れる也而して字様各異の故詳ならす近世は前記の躰に一定しありたり

延寶九年比

明和天明比

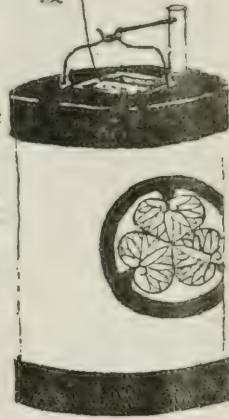
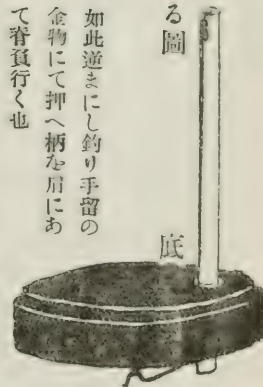
文化四年比

提燈徽章

提灯は箱弓張高張小丸高腰差の五種にして御用提灯は皆本御紋を附す（或は紀の字を付するもあり）小丸高とは中上けと稱し丸形中黒白御紋の高張りにして御馬前後等に捧く箱提灯は御供通り幷に御使又は御中間等他所使等にも用ゆ諸士自分箱提灯は重役以上且御役人向は平常に用ゆ右以下にても婚禮等儀式の時には用ゆ敢て制なし

一御行列帳に提燈の立場を示すに朱にて左之符號を記する事一定の例なり

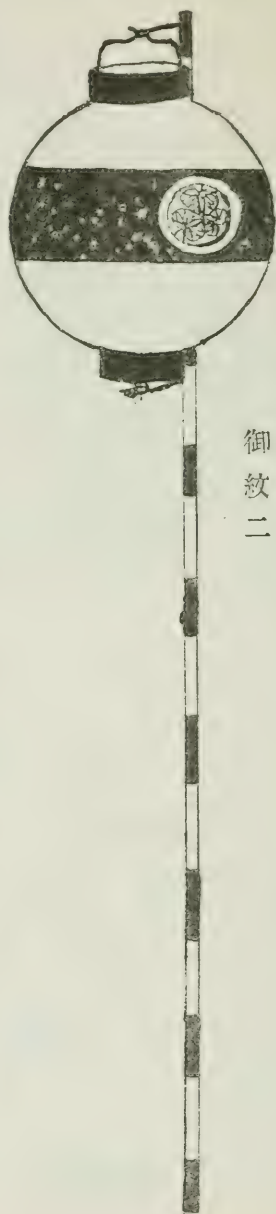
○箱提燈　△高張　□小丸高　⊙増御供之分

箱提灯

一高張は地廻り及ひ御道中御行列に立つ其他事に寄て御門々へも立つる事あり
諸士にて玄關を構ふる者は式臺の左右側に必す自分紋の高張を立て置くを例とせり火消役馬上出場には二張重職は四張以上を携へしむ此他近火非常等には門に立て目標となす外平素他に用ゆるは稀なり

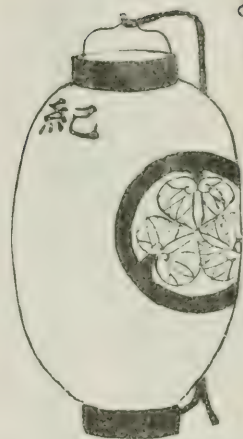
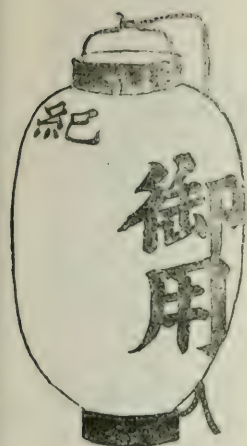
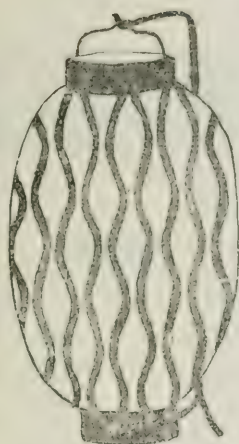
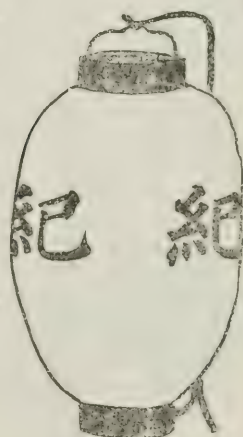
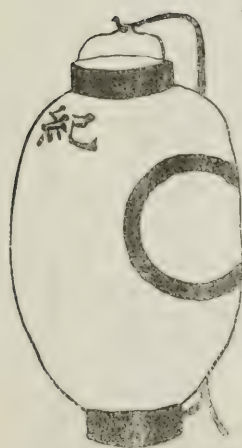
高御提燈

一小丸高御提灯は夜中御行列御駕御馬上の前後に四張りつゝ並列する也

諸士にては大御番頭以上の向は出火非常の出馬の時自分紋小丸高二張を持さしむ（諸士以下一本云 御家中にては重身の向は出火非常出馬の時は自分小丸高二張を持さしむ想ふに大番頭以上なりしか不詳）

御紋二

一弓張提灯は諸役所用共御紋二つ正面上に紀の字（小形）を付す又三紀と稱し紀の字を三方に付するあり出火の節火元見御勘定所公事方御作事方等多く用ゆ是は見分けやすきと刑事穢れ物（行倒人溺死人負傷者取扱等を云）の件には御紋を憚りし故といふ

御小人目付同押へは筋付弓張提灯を用ゆ筋付は御目付方の記章にて竪山方なり俗によすら障らすと稱し見て見さる監察の意に出たりと云御供世話役は輪抜を用ゆ此外役に付ての提灯もありしか不詳大かたは御紋を用ひたるなり

御紋付
筋付
紀
御用
紀
紀
三紀
輪抜ケ
紀
紀
紀

右御用とある提灯は御出入町人御用達町人へ御勘定所より下渡するものにて御出入町人は其義務として十二月殿中初御煤拂日又は出火の時驅付け人足を出す爲にて三張を下付すれは三人を出すといふ如き規定の由又御用達町人へは御道具等修繕に下けある時の爲め同斷の高張提灯をも下け渡す之は其家近火の時家根へ建置き火消等手込に登る事を禁し亂暴混雜を防く爲也御仕入方御用達大阪町人等へは御紋高張同箱提灯をも下付したり商人等之を有すれは店の羽振り利き浮浪暴客の難を免れ御威光に藉て商業の信用不尠を以て無比の榮譽とし頻りに其下付を願仰したる也

總して御紋付乃至紀御用の弓張を携帶すれは深夜山野を獨行するも安全にして盜賊は踈か狐狸迄も害を加へさるものと信用崇拜し道中筋抔は別して尊重したるものなり

諸士夜行には自分紋の弓張提灯を從僕に携へしむ獨步には自ら携へたり

一臺提灯と稱し御近火非常之時は表御門初諸御門々大辻番所（平常書も飾り付る）へ出し燈す　上使御客來御他行御吉凶事等夜に掛る時も表御門最寄の御門々大辻番所へ燈すの例なり若山にては諸士大身の向は是に倣ひしといふ

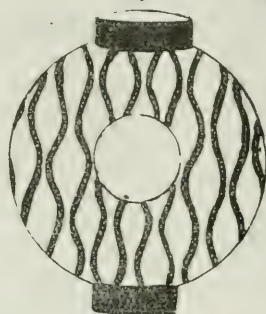
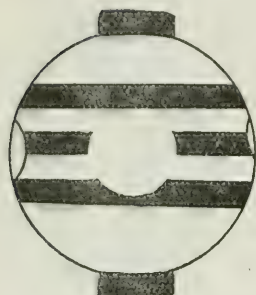
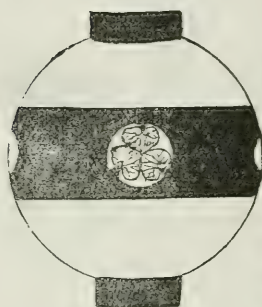
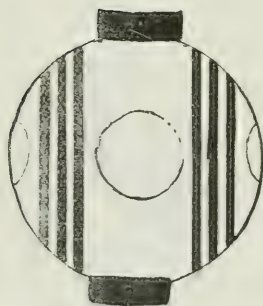
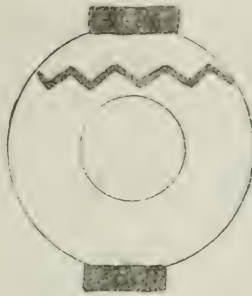
臺提燈

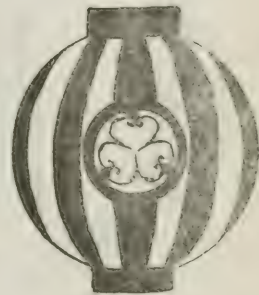
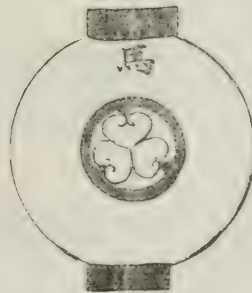
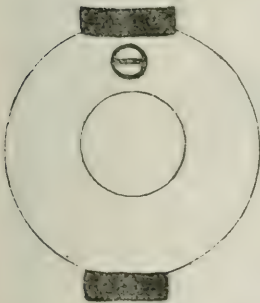
一腰差提灯は出火非常の時馬上に不限一般及ひ歩行にも用ゆるなり腰指提灯といふ後ろ腰に指す爲なるを以て名つけたり役々規定ありて御側勤は赤中筋に白御紋　君上と同しいつれか　君上なるや分明ならさる爲といへり御目付は黒筋付御使番は横黒三筋御供番は朱竪三筋御徒目付は三つ鱗其外圖に示せる如しと雖も尙洩れたる分あるへし今詳なるを得す餘は概ね自分紋の腰さしを用ひたるなり（火元見切御馬役御紋を付るは如何なる火近たり共紀伊殿火元見切御用と云へは幕府の御使番火事場見廻役共乗切通行を禁せさる爲なり）

一總して殿中には提灯を張りたるまゝ携帶を許されさりしか文化十一年二月廿日左の發布ありて出火の節は張りたるまゝ持參を許されたり

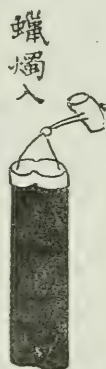
出火之節出殿之面々提灯紋候て殿中持參候儀に候得共向後絞り候に不及其儘持參不苦候事

一諸士は腰さしの外手丸提灯を稱し腰差の形にて弓張なるを出火の時若黨に携へさせたり

腰差シ

奥詰
御紋三ツ
赤筋六ツ、
自分紋三
御徒目付
紋三
三鱗ハ役章也
御警衛
奥詰
御紋三ツ
赤筋六
大丸見切
御馬方
馬
御紋三
御徒
自分紋三

三九〇

大畧右の如くにて役章なき諸士は上下共自分紋三つを付す朱紋黒紋制限なし全躰の格好左の如し

雨覆張扱塗

柄をむさふにして鯨を繰出し用ゆるもあり

用意蠟燭二本を入従僕の腰に提さしむ

一ぶらくり提灯　御旅行御供には諸士従僕にぶらくり提灯といふを携へしむるの習慣也形ち弓張りの通りにて二枚折りの小板を雨覆ひさし短き竹を柄とす頗る簡便なり平常にも用ゆる也一種の紀州風と稱へたり

従來の体如此の處維新後に至り變更する處あり其略左の如し

維新後

明治二巳年十一月廿日公用局參事より布告

一御當藩にて相用候御幕御提灯等十六葉菊御紋附候事

　但先つ高張御提灯へ相用ひ其外之儀は尙跡より可相達事

同三午年正月廿二日於東京公用人より辨官御役所へ伺

一今般提灯之御規則圖面を以御布告相成候處當藩知事始大少參事之向爲相持候高張并中揚提灯之儀

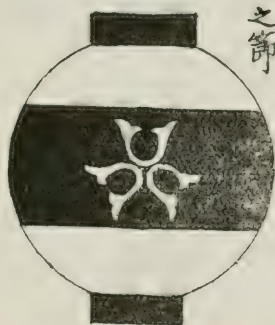
は前件御規則之圖面同様赤印に仕候て可然哉此段奉伺候以上

右答澤官掌より口達にて

今度御布告相成候提灯御規則之儀は腰差或は手丸之内一張相用候筈尤高張中揚提灯之儀御定印に紛敷無之様可致旨

一知事様御役提燈等左之如く御改正　年次失

御役提燈

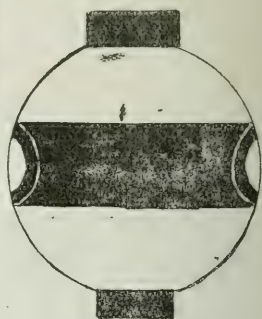
御忍出駕之節

明治三午年二月廿一日

一御簾中様御提灯以來中黒御紋赤に相成候事

同年四月五日

一御側向御役提灯是迄は御紋附に候得共以來左之通中黒自分紋附に相成候筈候事

右に付向後出來等手前凌之事

紋三所

紋黒上リニテ

明治四未年二月公用局參事より布達

一此度御定被　仰出候提灯御印之儀は腰差計へ相用御藩之印も同様之事

　但局々にて相用候御用張提灯へ御藩之印相附候事

提灯之外御藩之印相用候儀は此程被仰出之通雛形を以相伺候筈

　藩印は合印の處に記す

　幕紀章

御幕は紫縮緬赤地淺黄絹白地布交紺無地の別あり何れも御紋附にて紫縮緬は御寺方御法會の時御旅行御本陣等御座所の玄關へ張る赤地は御船幕也白地は表御門番所其外儀式立たる時に用ひらる淺黄地は御廣敷方に用ひられしなるへし布交（紺白布交の義、署してのまぜと云）は何事にも常用す紺無地（御紋なし）は専ら見隱し用にてたとへは御庭縮（御簾中様御庭御覽之時を云）の時御庭境樹木空隙其他外より見越すへき様之ヶ所へ二重三重も高く張り詰るの類とす此外菊葵御紋抔六七種の幕御勘定所に備へありたれ共實際に用ひし事更になかりしと傳へり

諸士自分幕は一般用ゆる事にて系譜にも幕紋何と認め出せり御門々を預る向は御家老初頭々の分は自分幕を御門番所へ張りたり道中旅宿へ自分幕を張るは役により制限ありし如しと雖も今不詳

紫御幕

御召艦御旅館其他

御座所に張る

御關船等には

縫仕切幕緋花色純子

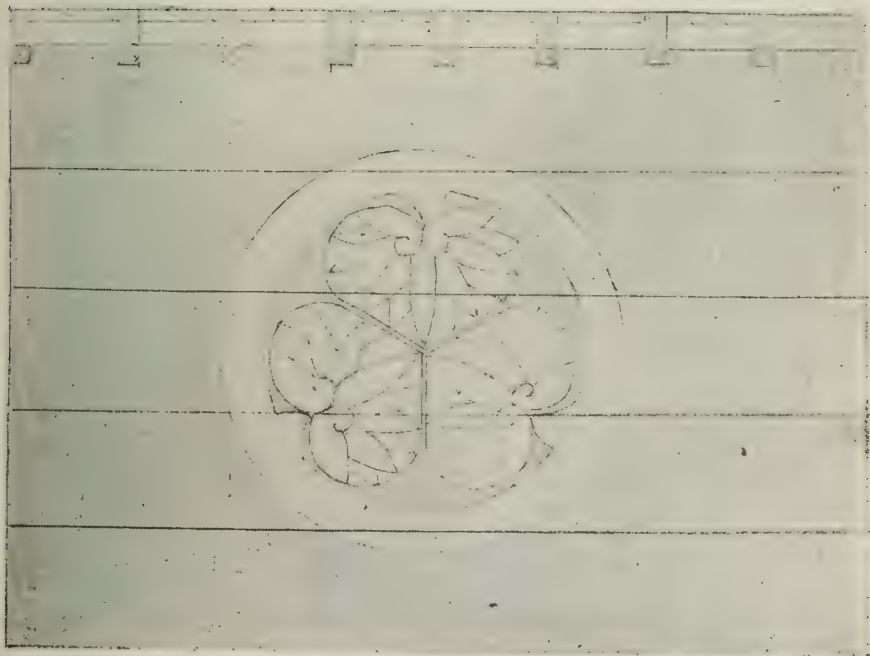
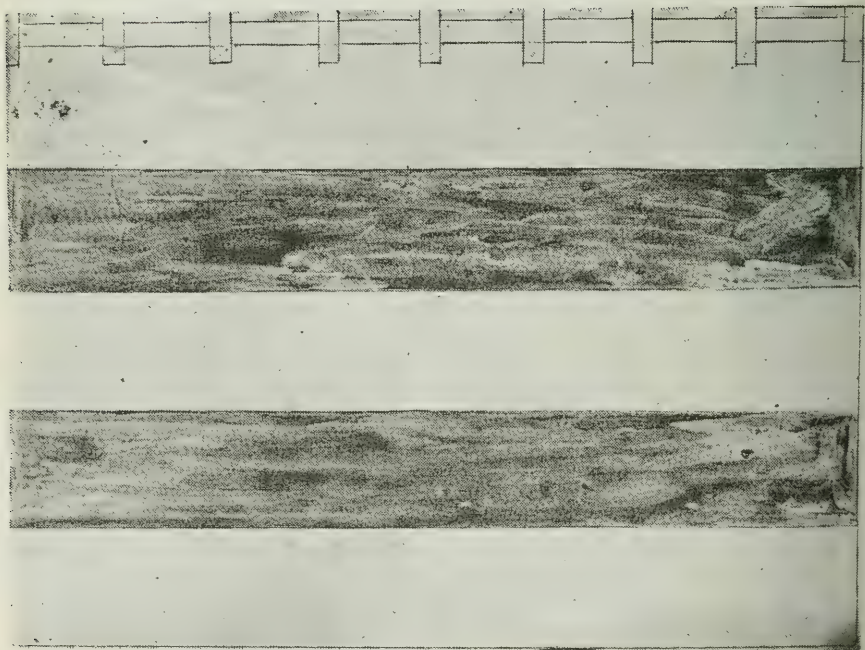
布交

御船幕飛紗綾山科茜染

葵御紋開幕は毛細紺白

布交等也職制附錄第二

に詳也圖略す

布交幕（ノマセ）　麻木綿　白紺

一維新後幕制の變更左の如し　駕籠船の事布告速記により原文の儘記す

明治三年年八月五日政事廳より布告

駕籠等之制度左之通相定候事

駕籠　勅任以上　長棒　日覆　黒羅紗
　　　奏任以上　切棒　同　　紺木綿
　　　判任以下病氣且旅行之節垂駕籠相用候儀不苦事

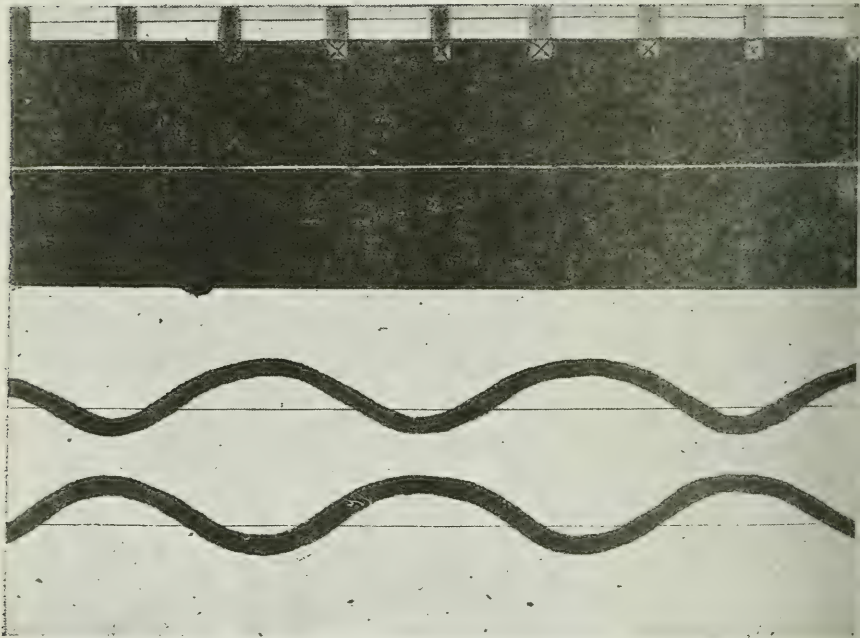
船　　勅任以上　日覆黒羅紗 障子入　船幕紫縮緬　夜中は舳へ自紋の丸提灯二 艫へ同高張提灯二
　　　奏任以上　日覆紺木綿 障子入　船幕同斷　夜中は舳へ自紋高張提灯二 艫へ同高張張灯一
　　　正七位以下從八位以上　夜中は艫へ自紋高張提灯一
　　　右之外屋形内へ提灯今一つ点し候は不苦事

幕　　勅任以上　竪幕　地合縮緬色紫 上横布へ自紋白上り
　　　奏任以上　横幕　地合麻色納戸 白紋白上り
　　　從八位以上　休泊札掲け候筈
　　　　但出張御用之品柄に寄り其局々より官幕貸下け候儀も可有之事

一官幕は別紙圖面之通出來可致事　是迄之布衣にて漸々出來候樣

右勅任巳上とは知事公奏任以上とは大少參事をいふ也駕籠は從前は五十歳以上駕籠御免右以下は日切駕籠と稱し痛所有之乗馬にては勤難き旨願出乘駕の制にて頭役は道中地廻り共長棒平士にても君側勤等は道中長棒を用ひたり垂駕籠とは引戸にあらすして左右に莚を垂る也道中に賤士陪臣等用ゆ船は和歌山にて近邊河海遊航の時たいふなり

官幕

明治三年八月定

明治三年年十月十五日公用局參事より布達

一諸官人幕之制度先達て御定相成候處右は旅行等之節勅任は自紋幕相用奏任以下は幕不及相用事

船　印

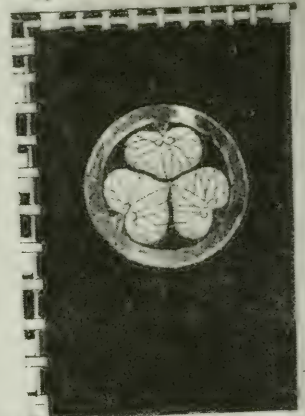
御船印は軍制第一旌旗圖に記載の如く御乗艦御供船荷船等の船印十二種あり元來西國四國諸侯と違ひ昌平の世上下共遠洋航海の事なく國初御一二代は御參暇に吉田御渡海あり又　觀自在公御比迄は勢州大口浦より白子四日市等へ御渡海あり其節々の御船印は該十二種のもの御用ひありしや今不詳桑名御渡海佐屋御渡船は尾州家よりの御馳走船に御乗艦の由なれは御家の御船印に非さる事知るへしされは近世は御國内近海又は御川狩に止まりし也是等の時の御船印の事御船奉行方に成規ありしならんも記錄傳らすして知るに由なし

一幕府大船製造の禁を解かれしを以て安政四年君澤形翔隼丸を製造慶應の初年より西洋形帆前船致遠丸同蒸氣船明光丸ニツホールの二艦を購入せらる翔隼丸船印は白地中黑吹貫帆白地中黑外に白地赤紀の字の幟と天日を用ひ致遠丸には竪中黑白地赤紀の字の兩旗を用ひ蒸氣船には白地朱の紀の字旗を用ひられたり日の丸の國旗は無論なり

一御船手普通又御用荷物運漕には專ら紺地白紀の字四半幟を用ひたり

十二種御船印圖は軍制第一旌旗の部に揭るを以て爰に略す唯下記三圖を載せ地合染色等の一端を示す

御船印

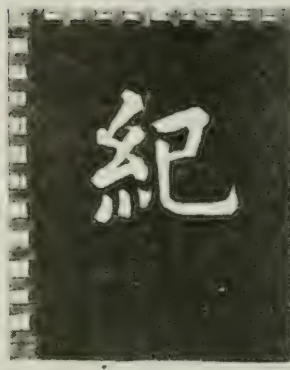
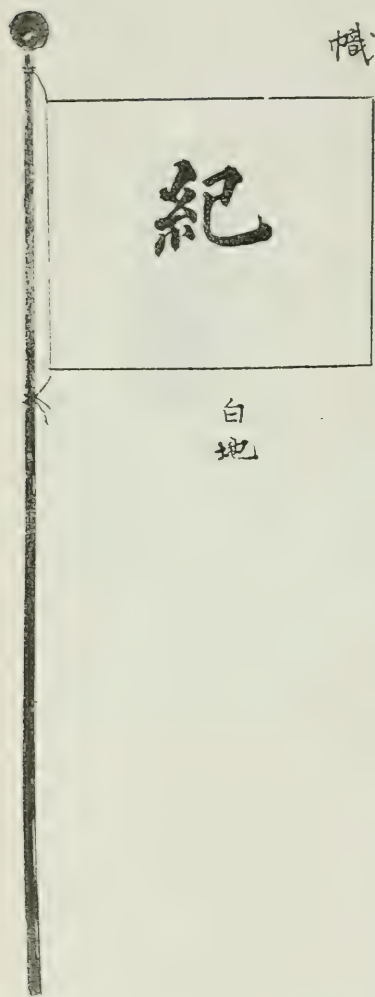
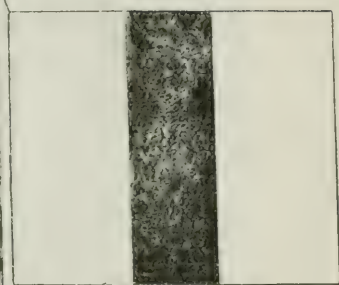
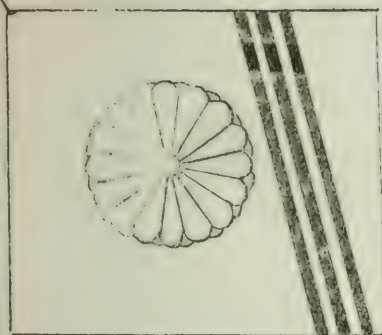
御關船　御船印　御乗艦には御印天目

地綸子碁盤指山科壺染
柄竹重藤巻
地紗綾碁盤指
山科壺染　角取紙三好奉書
柄日前
縄上ヶ紐　絹染緒

御船手方船印

紫地

居澤秋翔鳥毛船印二種

大川

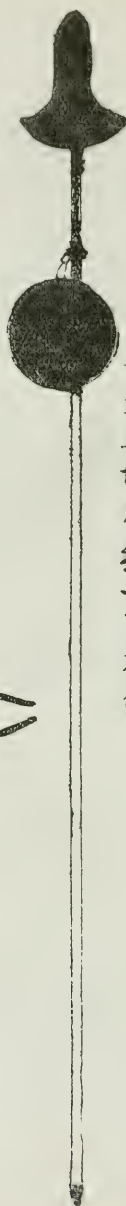
幟
紀
白地
吹貫
中黒

致遠丸船印 二種

白地中黒

致遠丸は右中黒と白地赤紀の字〔翔隼丸に同し〕の兩印を用ひたる處御維新に付左記赤三筋菊章に改用の旨慶應四辰年六月江戸にて參謀へ屆出る

白地

合印

軍事の合印は兜の前立に三寸の金の丸也詳なるは軍制の部に記する如し
一列藩の陪臣は悉く鎗印を常に用ひたれ共御三家は幕府旗下と同しく一切鎗印を用ひさる也然るに
慶應三年正月指物を廢し袖印に變更の時 袖印の圖軍制の部に出す 爾來御家に於ても金の小丸形 革製 の鎗印を用
ゆへき旨布告あり

鎗印

革金無地丸経一寸九分

一維新後合印
明治四未年二月當藩合印左雛形之通相用候事
但し右合印は無役幷末々之者相用申間敷と政事廳
より布令す

山數無限

奥向合印

一従來奥向にては　君上御初方々様の御次道具文箱廣蓋木具皿鉢風呂敷服紗等何に不限祝意を表したる七寶鶴龜松竹梅の類を付記し以て御部屋毎附属品の區別を立たり隨て方々様の御稱呼にも轉用すたとへは鶴印様松印様抔稱して御官位名稱を稱へさる習ひ也幕府初諸侯の奥向も亦此風也しといふ

類により附記す

圖大様左の如し

七寶印

鶴印

龜印

松印

竹印

梅印

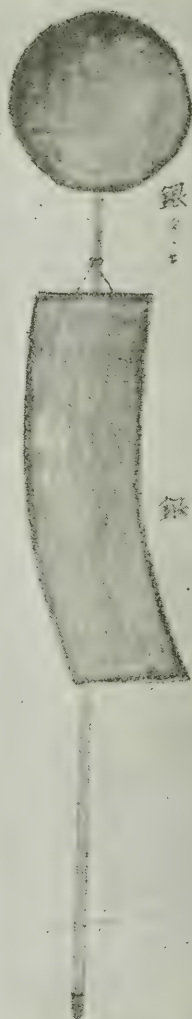
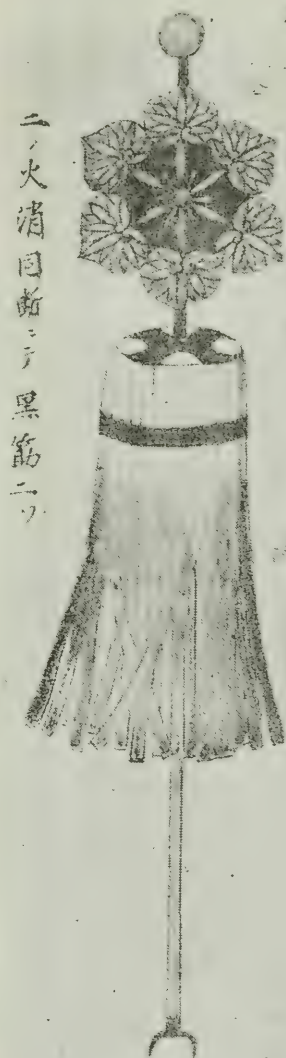
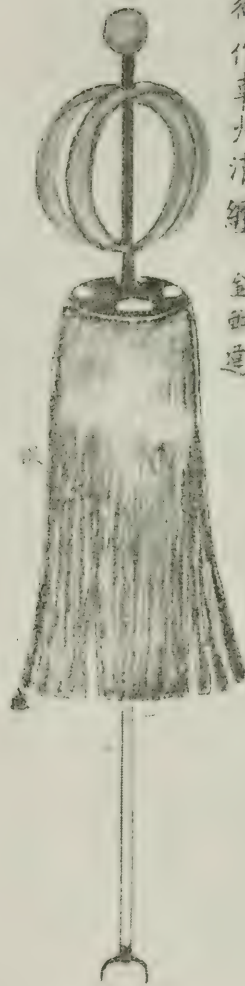
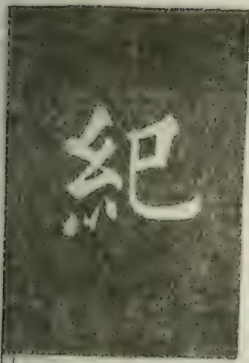
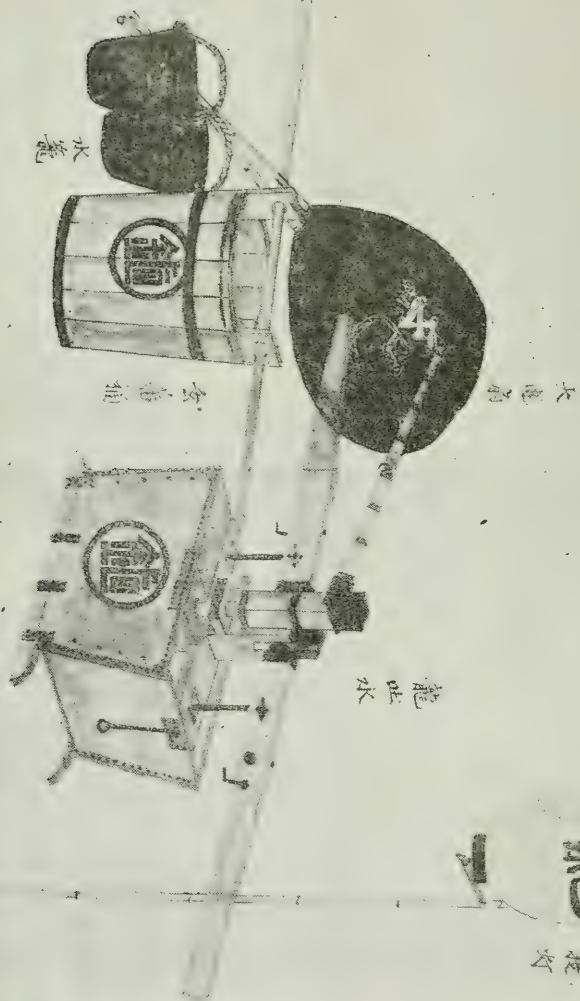
火事具徽章

江戸に於て出火の時は幕府火消役を初大名火消及ひ町火消共纏を以第一の印章となす故に武鑑にも家々の纏の圖を掲けあり御當家纏は明和天明の頃は銀の丸に銀短冊を提へたり近世は一二の火消御勘定所火消は唐花葵を用ひ（天明比武鑑には下圖の如く記せり）御作事火消は輪抜違ひなり提灯幟大團扇等は紀の字龍吐水玄蕃桶水籠等は鎭の字とす此外御先手同心御抱鳶之者御中間等の火事衣各印あり服制の部に掲け爰に略す

纒　明和天明間
銀
銀
一の火消は邑連横筋地黒ニ畫二の火消は同二畫
仝　今世　一ノ火消
二ノ火消同断ニテ黒筋二ツ

御作事火消纏
金鈴道
幟
番幟夜ハ提灯
紀

高張提灯
紀
龍吐水
水籠

御印章

御歴世御黒印あり歳入歳出決算等に申受る如しと雖も御家老直々の取扱に係り今審ならす御勘定所一根元覺帳に御加増知行目錄文段に何百石右爲御加増被下候御黒印重て申請可進之候也と認め來りたれ共御入國以來御黒印御書出たる事無之只舊例により認來るのみにて名實相違故右爲御加増被下候可有所務候と改めへく哉と御勘定奉行より政府へ伺出之事記錄あるを以て見れは知行御加増の御黒印狀は唯法例のみにて實際其事なかりし事知るへし御黒印は就中貴重のもの御捺印は必す政府の預る處信同府にありし内も別に聞く處なかりし先は御使用なかりしものと察せられぬ御歴世の御印影も傳わらす蓋し御一世毎燒棄したるものならんか（君上の御書の如きも御保存なきものは無勿体さて悉く燒棄したるもの也）

一御朱印と稱するものは　將軍家に限る事とし憚りたるものにや御書等の御落欵御欵冐御遊印の外御朱印の事絶へてなく全く御使用あらさりし如し

一御花押は　幕府御同族方諸大名其他都ての御書札御返翰に押す該御書札は表御右筆御書方執筆す故に料紙（大奉書を横に二つ折）を兼て同役より御用人へ提出し御用人之を御小納戸御判紙係員へ渡す御判紙係は右白紙へ朱板の御花押形を素押し其型通りを黒抹之を御用人へ授く御書方申受て御書信之節々例規の文言を記入御名を署す（紀伊大納言抔と大書し脇の方御花押の上に御實名を小書す）

御歴世之御花押傳はらす偶々發見の二三を掲く

昭德公は爾の字　當公は承の字を崩し用ひ給へり

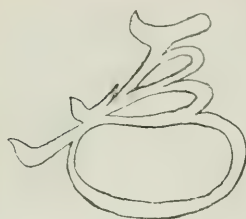
南龍公御花押

小笠原與左衛門へ賜ふ

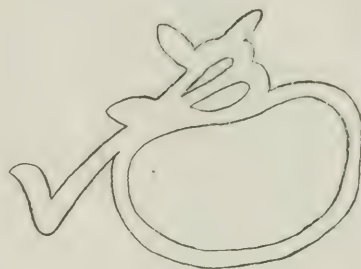
御書の御花押七月十六日常陸介とありて年號なし

與左衛門は　神祖より御附人にて慶長十七年七月十三日病死す

恐らく慶長十六七年頃の御書なるへし

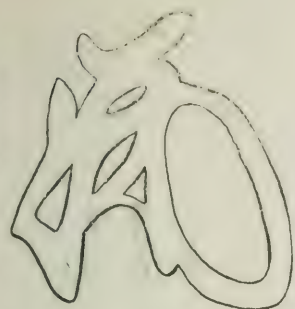
御遺命書の御花押

吾可必以天台宗葬云々漢文の御親書

年月日とのみにて年號不明

右御遺命書の御墨印

甲州大野本遠寺藏

御寄附紺紙金泥圓頓者經卷奥に

從二位源朝臣賴宣 （御花押）

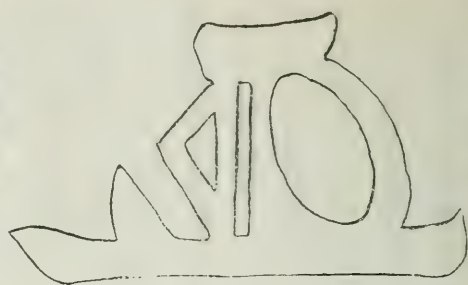
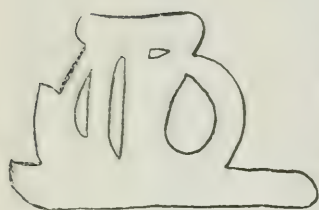
寛永廿一年龍集甲申三月吉日とあり

本遠寺へ之御書

甲州大野本遠寺建立事

當山以爲養珠院之葬地云々

承應三年八月廿一日大納言源 （御花押）

とあり

同斷今度爰許逗留中云々八月十七日とある御書も同御花押なり

清溪公御花押

本遠寺への御書
御歸國に付使僧差上たる御挨拶御書なり
紀伊宰相光貞（御花押）
とあり

大慧公御花押

菩提心公御黒印

一御落款御款冑御遊印等の御印章は　舜恭公御以下は御藏御印本に詳也

右以前御歴世の分不詳

虎御印之事

一虎御印は　龍祖之御印也と紀人いひ傳ふるものあり鈴木六兵衛家に傳ふる禁制書虎朱印其證也と

禁　制　　飯　塚

右軍勢甲乙人等濫妨狼籍堅令停止畢若至于違犯之輩者可遂披露速可處嚴科旨被仰出者也仍如件

癸未十月二十四日　石巻左馬允 奉之

右禁制書を按に癸未とは天正十一年に非れは寛永二十年也此年季に　龍祖より軍勢甲乙人等亂妨之禁令を發し給ふいはれなし全く小田原北條家之虎印なるへし（鈴木六兵衛は年月不知於駿河　龍祖被召出家譜に舊記斷絶の由にて上總介忠輝卿に奉仕御滅亡後浪人罷在とのみ記し他不明なれ共案し北條家に仕へし事ありしならん）其証は勢州之角屋七郎次郎 相州小田原へ廻船 北條氏政より頼により愛宕伊勢の神社へ差上物に托し海路三河への御通路御用勤めたる際氏政氏眞より虎朱印狀三通を附與せらる其朱印の印影文字格好共都て前段鈴木六兵衛に傳ふるものと同印也其印圖巨細は角屋七郎次郎傳（後傑傳）に詳なり

又國朝舊章錄御當家御代々御判物御朱印の圖と云部に氏眞虎の印天正十七年十月廿四日と記し印圖を掲く其印影字躰格好寸法共右兩印に異なる處なし

又紀伊國名所圖會有田郡廣村梶原源兵衛家に藏する小田原北條氏之文書虎印判の圖を載す是亦

字躰方寸前同斷也

一神祖にも虎之御朱印あり然れ共印影字躰共前記之ものと全く異なり　神祖より朝比奈惣左衛門泰倫へ賜りたる慶長七寅年十月二日江州にて知行千石之御黑印同十三申年二月廿日常州にて三千石之御朱印此兩御判物は虎之御印と稱し包紙に　權現樣より頂戴と記し代々大切に持傳へ代替りに一度廳上下着にて拜見する家例也といへり信甞て該御判物を拜覩するに押影模糊字躰甚た解しかたく虎の因故判知すへからす

御黑印　御印

是に據て見れは虎の印は北條家及ひ　神祖御用ひありて　龍祖には非さる事知るへし

藩印印形書判

一從前藩印局印都てなし故に内外公文辭令書等都て捺印の事なし唯鑑札押切判（御門鑑札衛府鑑札御出入町人鑑札の類燒印を用ゆ押切判さは局々にて物品取出し御中間使用元通し湯漬渡し等に局名の木判を捺し証さするなり）ありしのみにて尤無造作を極む

一諸士の實印之を印形と通稱し上下公私共專ら金穀に關する証書等に用ひ願書屆書抔に用ゆる事なし父祖の跡を襲き新たに戶主となれは政府へ可提出系譜に實印花押を捺し江戶にては御勘定所御目付方（御門出入の爲也御門札及ひ御門出入切手には實印を押す）芝御藏所（御扶持米受取に付て也）御金藏御貸方（御切米受取及ひ借用金の爲也）へ判鑑を出すを成規とす而して悉く黑判を用ひ朱印決てなし當時の如く朱印の流行は維新後之事也印の大さ通例七分計り重臣要職の輩は八九步を用ゆる有たり元より制あるに非れ共印大なれは威權ある如くに思ひ取たり是等之瑣事亦時勢に隨ひ自然の變遷を來すは奇といふへし

一書判（カキハン）即ち花押は公私書札神文誓詞には必す用ゆる慣例にて實印よりは却て重きを置くの風たり一層重きは血判をなす（誓詞堅めと云類）書札は敬禮の義誓詞は武士道僞なきを証するの義なり元來自書すへきものゆへ書判と稱すれ共体裁を飾り且煩を省き大身重職の書札花押は僚属に任せ木型を押して墨抹せしむる習なり

一明治元辰年十月天下府藩縣の三治に歸し同三午年二月藩印之事東京に於て左之趣布達あり是藩印等を用ゆる嚆矢也

二月十三日東京辨官より印影を被渡藩印は京都留守官にて可被渡印影引合受取候樣且藩印は判任并藩士家督及府藩縣重立候應接等總て重大之事件に而已相用驛路人馬繼立等には決て不相用其外小事には不相用樣且又驛遞等に相用ひ候藩印は孰れ御規則御決定の上被　仰出候間先從前之通相心得候樣

右に付印材は西京に於て留守官より渡されたり

南紀徳川史卷之百五十一

社寺制第一

臣　堀　内　信　編

緒言

此編の主眼は國初以降邦内社寺に於ける施政の概略を示すに在て其社其寺の由來縁起舊典古蹟乃至伽藍寶器等の事に及はす是等は既に紀伊國續風土記同名所圖繪紀州神社錄等記載備はるあつて亦贅言の要なし抑本藩社寺の統治は幕府に傚ひ寺社奉行之を掌り（寺社奉行は並高四百石大廣間席寺社吟味役六人同心二十人屬す國政改革の時民政局の管理となる）君旨を奉し執政の指揮を受け命令を下し請願訴訟を聽斷し社殿佛閣の興廢存立祠官僧尼の任免進退社領寺領物品公付の事より諸般の典儀格式に至る迄悉く法規舊慣によつて主裁す然れ共其敎旨宗法の如きは各自の自由に放任し唯其不法を正して秩序を修め宗義外護の点に止るのみ紀勢封内大小之社寺其數五六千年歷二百七十年此間之政令法度沿革變遷の跡載せて寺社局の簿冊に備具せしは必然と雖も蓋し維新紛雜之際散逸に歸せしか今傳はらす故に此編唯世史載する處紀伊續風土記同名所圖繪等に據り或は舊記の殘箋廢紙を拾集乃至其社寺に就き諮詢質疑甲乙參酌取捨訂校を加へ以て輯纂す冀くは歷世社寺に於ける施政方針の大略粗須知の具に供するのみ

一熟々社寺の沿革を察するに足利氏の末國内四分五裂互に攻戰を競ひ大小の神社佛刹或は掠奪せられ或は兵燹に罹り衰頽荒廢是れ極るの處天正十三年豐公根來山の剛戾不屈を憤り大軍を率して火

を放ち四百六十年前　勅願の大伽藍を悉く焦土となし續て紀の國造及ひ國士等根來寺に黨せしを怒て之を太田城に攻屠り　伊勢大廟に齊しき日前國懸の大社をも一炬に焚燼社林を伐盡し神領を沒收す國造身を以て神器を護し高野寺領に潜匿神器僅に全きを得たり其餘憤は爰に止まらす所在あらゆる神社佛閣如何なる靈區名勝も千載の伽藍國家の珍寶も地を拂て忽ち煨燼に付し乃至全國の社寺領盡く沒收せられ殆と寸地を餘さす深山幽谷熊野の如きに至るも然らさるなし社寺にして如此慘毒極難に罹りしは前代未聞他に其比あらさるへく嗚呼酷なる哉後大和大納言又は淺野家の領國となり少しく其餘燼を修め幾分の社寺領を補し聊安堵の政策を取りしも日尙淺く且數郡荒亂全廢之跡固より一朝一夕之故に非す

龍祖御就封以來普く舊典古蹟を追究し且淺野氏の遺を補述して續々絶たるを繼き廢れたるを興し離散を來し流亡を懷け鎭撫慰安に御餘念なく社殿佛閣の再建神領寺田の復舊寶器什物之寄附等枚擧すへからす就中日前國懸の兩社熊野三山根來山粉川寺の如き千古の靈域依然今日あるは豈偶然ならん哉而て歲時社寺の御親拜の頻煩なる扈從の士殆と勞に堪難く思ひしにや嘗て江戶御參勤之前諸社佛閣へ御參拜ありしに吉見喜左衞門は扨々君には御信心者哉と下々沙汰仕候と言上せしに汝等は江戶へ出立の際には親戚知己へ暇乞には參らさる乎我參詣も之に同し國の守護は此賴宣に被命たり士農工商僧俗共に勸善懲惡の仕置をなし國家安全を專とす國中の神佛は是又國土を守る社稷也　賴宣留守中諸寺諸社の佛神達は國中風雨水火の災なき樣に守り給へ來年罷上るへしと暇乞に參詣仕るにて信心にて有へき樣なしと仰られたりとあり敬神愛國之御至誠は此御一言に溢る

宜也御一世に於て御再興の社寺大小十四新たに御建立の者三十社寺領御寄附の者四十九（淺野氏遺制に因襲する者を除く）他は勝て數ふへからす（勢州三領之事不明なれはなり）而して式内及神明帳の舊社にして從來兩部奉祀の如きは能く古典を糺して唯一に復し別當寺を外に移し給へり又極めて宗廟を御崇敬あり宮殿の煥美祭典の尊嚴至らさるなし　養珠大尼公御孝道の爲には巨資を擲て佛刹僧坊の新創に汲々是日も足らさる如くにあらせられたり　公が天下文武俊傑の士を愛せらるゝ食色よりも甚しきは世普く知る處と雖共啻夫のみに非す時の名僧高德は皆之を城中に引き或は其草庵に屈辱聽法顧問に備へ寵遇親愛あらせられしは酷た　東照公に肖似し給へり即南光坊天海、金地院崇傳、高野山遍照光院賴慶、本遠寺日遠、光恩寺信譽、永平寺光韶、眞如院豪俔、吹上寺圭瑞、禪林寺夾山、大恩寺玄恕、淨心寺忠桂、久昌寺全超、總持寺南楚、養珠寺日護、雲蓋院憲海等是也　光明寺圓通の如きは大誓願の爲に應聘せさるも任意其願を果さしむ殊に奇なるは遍照光院の弟子永胤を官途に就しめ僧形を以て俗吏に伍し事を執しめ給へり苟も下問を耻す多聞を友とするは如何に明君英主と雖共内疚しき處あるに世外の徒而も八家九宗をも問はせられさる御大智は虞舜も豈他あらんや夫神明佛陀は國家の鎭護万民立命安心の憑依故に政敎一致乃至國家の外護と稱す治者一己の偏見愛憎を以て猥りに千古の舊慣習俗を紊るは眞に敬神愛國の極理朦暗不文の咎に屬し畢竟笑止の奇談に歸せんのみ世往々此奇談の例証なきに非す之を　龍祖の濶達洋々に比すれは三尺の童尚辯を俟たさるへし爾來歷世の公亦能く御遺法を紹述せられて愈神明佛陀を御崇敬社寺保護の政策悃篤を加へられ宗廟の禮益々周到を盡し給ふ事　淸溪公　有德公　大慧公　菩提心公　觀自在公　舜恭公に於て蓋し其著しきを

見るへし爰に數公の御事蹟を列叙す餘は皆先規恒例を遵奉し給ひし也

明治三十二年八月　　　　　　　　　　堀　内　信　誌

例　言

一歷世年序に依て記事次第すと雖も一社寺にして　數公に係る者は一所に集錄す其例感應寺又は熊野三山に於る如し各自の沿革終始見易からん爲なり

一社寺共其末項に社寺領高を附するは紀勢御領分高帳寺社局直支配寺社帳及ひ明治三年社寺領一般上地布達面に對照以て上地迄の現在を示したる也社寺領一般上地の事は社寺制第五卷に詳也

一龍祠薨去の後民庶鴻恩に感し私に建祠神に崇め祭祀今に至て絕たさるもの八ヶ所に及へり仁政の深く民心に入るを証すへし類により之を　公か御事蹟の後に附記す

一廟は廟堂の義又は廟貌の義先祖形貌之所在とも云幕府の世は總して冢塋を廟と稱し墓標を寶塔と唱へ尸牌を祀るの所を靈屋と稱するの通儀也公文亦然りとす編中御廟御靈屋とある者皆此例なり且御靈屋と稱するは幕府及ひ我列公と正夫人にして餘は御靈牌堂と稱する如し

一太夫人の中及ひ公子公孫の塋江戶にある者多し又芝上野兩山日光等に御宿坊と稱するあり故に江戶御寺方と唱ふる者も尠からされは分て一部類に編す考査の便に從ふ也日光身延山高野山も亦此部に附す

一編中多く紀伊國續風土記を引証す記事自つから詳なるか故也同書及ひ紀伊國名所圖會皆紀伊國の三字を略す頻を省きしなり和歌山府下且近隣にある社寺は地字を記して郡名を略す地名自つから

通し易き爲なり

一牟婁郡田邊新宮領內之社寺へ安藤水野の兩家より寺社領寄附の者あり伊作田村高山寺三石三斗湊村鬪鷄權現社五石林村八幡社四石天滿圓心寺八斗の如き是也本藩の治外なるを以て揭けされとも亦　國祖の制を遵奉したる也

一他州に在て伊勢慶光院貝塚卜半藤澤遊行寺鎌倉英松寺の類往昔より御道中御旅館となり又は謁見年始寒暑の書札捧呈等維新迄應答絕へさるの例規なりし殊に卜半の如きは歷世より拜賜の數品を傳來し御旅館の爲能舞臺迄設置と云蓋し　國祖以來深き御由緖のありしならん今考究に暇あらす暫く後の審査に讓る

一切支丹宗國禁たるを以て宗門改と稱し國中の寺院各檀下の人別男女八歲以上を每春招集して改宗の有無又は切支丹宗に入らさる旨の証印を爲さしむ是を判改め又は判押と云各寺は人々の寺手形なるものを作て三月中に直接寺社奉行に出す上下の藩士及農工微賤に至る迄悉く然らさるなし在方人別改めは郡宰大庄屋にて改むると雖も必す此寺手形を要すれは寺院亦其一部分に關するの任務ありたり寺手形の文例左の如し往時推考の一助に揭く

宗旨證文之事

一何の誰と申仁幷妻女兄弟姉妹共代々何宗にて拙寺爲旦那事紛無御座候爲後日依て一札如件

年號何年支三月　　所書　何　寺　印

寺社奉行連名殿

一幕府の世法律と云には非れ共従來の慣例人死すれは必す且那寺の僧侶を請して讀經を受く僧は棺蓋を開て香剃と云をなすの例なり是暗に異死變死にあらさるやを檢するの意にして若し異狀あれは密かに之を向へ內告すと云元來戸籍の制なく又警察檢事の職なし世外の徒人事の一部に當る時の便法なり

一社寺領御寄附高は諸士知行高とは違ひ御寄附高は其村高を引諸帳簿にも外書に記す故に貢租は勿論二分米糠藁も全く御寄附也山林竹木も同斷

但鄕役米は御藏へ納め池川御普請は外在々と同樣に負擔す

南龍公

蓮心寺 吹上寺町 善曜山 日蓮宗

紀伊國名所圖會に曰く當寺は豆州玉澤妙法華寺の良應日產上人慶長十四酉年　養珠院殿御歸依により駿河府中へ一宇を御建立あらせられしを元和五年　國祖君御入國の時日產上人に命ありて爰に遷しめ給ふ則佛殿諸堂寮舍方丈等悉く造營して當國に移りての開祖なりと云々

一當寺に左の廟墓あり

鮮容院殿玉蓮還儀　南龍公御女　寛永十七辰年八月十六日

益心院妙友日瑩大姉　南龍公御由緒ノ方一野殿　正保四亥年六月十九日

成等院妙惠日了禪尼　清溪公御由緒ノ方　寳永二酉年八月十八日

右御佛供料の事不詳明治二年五月より以來年々左之如く御附屆あるべきに定る

御三靈へ御佛供料金百疋つゝ

一右御墓明治八年八月二日報國寺へ御改葬

一續風土記に曰く慶安元年養珠夫人逆修位牌を安置せらる當寺に左之御親筆ありと

清溪公親筆書　　三幅　　　深覺公親筆色紙　　二枚

有德公親筆色紙

日產上人傳に曰日產俗姓足利氏養珠夫人之族、夫人與俾就學、慶長十四年夫人爲祖父善久光曜居士、營一精舍於駿府、依夫人法諱號蓮心寺、又拾祖父謚、呼善曜山也、師慶長十七年壬子九月九日化、壽四十五、後八年元和五年、第二世日衍、依賴宣卿命、移寺於紀之吹上、とあり

感應寺　車坂　法華宗一致派　當時の地名は嶋崎町と云

一別項佛祖統記に曰く日陽上人、長門人、駿州感應寺第十三代主也養珠夫人落飾之時、師爲之戒師、孝子賴宣卿、被封紀州、元和五己未、賴宣卿及夫人、始入任國師又有命隨之、夫人躬自相地造感應寺、請師爲開山、祖於茲、駿伯紀三州常住山感應寺爲鼎足

一續風土記に曰く元和六年駿州富士山の麓下方村感應寺の現住日陽上人　南龍公の命に應して當國に移り新町に住す新通二丁目といふ明年辛酉　養珠夫人親しく勝地を察て限界を定め本堂坊舍を建立せられ感應寺と號す寺產十石を賜ふ近年　一位老公親筆の常住此說法といふ五字の額を賜ふ

御廟墓

忠善院殿良恕大童女　南龍公御女　寬永十二卯年六月六日

明治八年八月報恩寺へ御改葬の筈にて御葬穴を驗するに御印一圓無之依て靈牌のみ同寺へ御遷座

本地院殿淸淨守玄日得大居士　源性公廢世子　山城守頼雄君
享保三戌年五月廿九日於田邊卒去

眞如禪尼靈屋

三十番神社幷拜殿　瑤林大夫人御建立

雙雅幷鐘樓　施主瑤林大夫人

寛永四年丁卯大夫人の父君加藤淸正朝臣淨池院日乘大居士十七回忌追薦の爲に御建立と云ふ

慶應三年六月晦日夜當寺本堂より發火本堂建物一切烏有に屬し僅に本尊及本地院殿靈牌と寶物數點を出し得たるのみと云へり

寺領及御祠堂金

一元和御切米終身祿に
寛永元子新規
拾石　漢王寺
寛永五辰より感應寺と認以後不相替當時迄相渡る

一天明四辰年十一月御寄附　御輿込頭丹澤八左衞門取扱にて
本地院殿御牌前へ　御祠堂金百兩
以來御年忌御法事且每月御忌日御諱忌月の節々御靈供朝暮御回向御廟前香華は勿論此度御寄附の御位牌御厨子御道具類都て損傷の修復等一切右金額を以て當寺に於て作略之筈

一天保四巳年二月寄附　御廣敷御用人取扱

芳顔院妙體日儀大姉　　永代佛供料金廿兩
　文政十一年戊子三月廿日逝　十兩二の丸大奥より　十兩西濱大奥より
　　七回忌辰に當り菩提の爲更に石碑を當山内に建設位牌を納む依て毎月忌日年回回向追善勤行の爲

一同年同月同
　松華院妙郁日鶴大姉　　永代祠堂金廿五兩
　　天保四年癸丑正月九日卒當寺に葬　廿兩御内々大奥より　五兩同　女中向より
　　　忌日日課佛供讀經廟所香花年回追福勤行の爲

右芳顔院は女中袖浦事俗姓大屋氏江戸の人松華院は老女花村事江戸の人姓淺香氏共に和歌山在勤中死去なるへし
右の外修善院妙行日證の墓あり老女小山文政八酉年十一月廿六日沒し當寺に葬る亦江戸の人小川氏なり祠堂金の件不詳

一天保五午年七月御内々御寄附
　忠善院殿御寶塔御位牌　　御祠堂金廿五兩
　　毎朝及毎月御忌日正五九月并六月御証忌日七月御施餓鬼御回向勤行の定書差出したり

一當寺什物の内に　清溪公親筆書　養珠大尼公親筆の消息あり
　按に松平山城守賴雄君（西條賴純公廢世子）父君の御勘氣により田邊秋津村に御蟄居之處享保三戌年五月廿九日御卒去六月四日同所本正寺にて御茶毘御遺骨同七日當地に御着寺後の山上に葬り奉る御法號源光院殿と稱せられしか後本地院殿に改め給ふ爾後香花奠供之事もなかりしに香嚴公には痛く其御非運を御追悼ありて安永五年初めて御入國の際感應寺へ御墓參御親ら香花を御手向け御懇に御弔祀遊はされ爾來一年に一度つゝ　君上御親拜處と定めさせられたり

一舜恭公にも厚く御弔祀寛政五年三月十六日より御名代參拜始まり文化三年五月尊靈を邦安社に御勸請毎年國祭を被命養珠寺　源性公御牌前に於て御解告の爲百部以下の御法會御執行以來御嫡子之御取扱に被遊（御位牌は雲蓋院に御安置の處寛政五年四月より養珠寺に御遷座と云ふ）

爾來世々御在國には御參詣又時々の御名代參拜は恒例缺る事なし如何なる故にや本地院殿御參拜に限りては御表出御に無之御供通り都て御廣敷へ廻り御廣敷御用人取扱ひ御廣敷御玄關より出御感應寺に於て右御用人御普請諸掛之御廣敷番御固め等にて御參拜之事の由　當公親しく信に仰事ありき

一本地院君御墓の後に渥美甚五郎勝之及妻於留天（源性公御長女）の墓二基あり甚五郎は頼雄公（本地院殿）を廢せらるゝを極諫して源性公の御手打に逢ひ家斷絶せしか　舜恭公の御時家名被爲立しより後裔の者請願して御廟側に建碑す蓋甚五郎の遺志を奉したるなるへし事は甚五郎の傳に詳なり

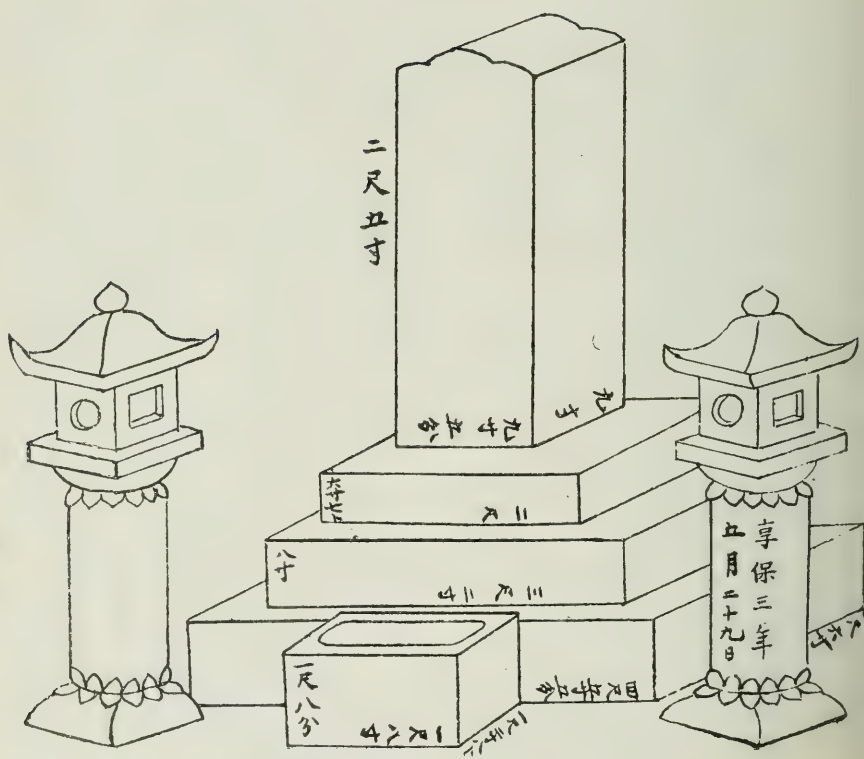
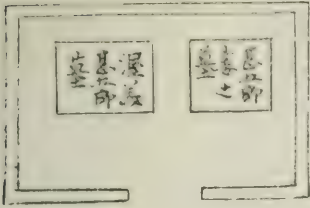
一明治三年迄の寺領

御切米　拾　石　　感　應　寺

本地院殿御廟圖

御廟門

惣土塀

土塀

和歌東照宮　和歌浦

按に　當宮御造立の事は　龍祖御入國之時より深く御心に被爲掛地を四方に御搜索曾て和歌浦御巡覧遂に雜賀山を御卜定元和六年七月起工を被命安藤直次彦坂光正竹林坊賢盛之を奉行し宮殿の結構一に久能山に則らせらる　龍祖御躬自も御臨場指揮せらる諸臣亦奮て經營を賛し翌元和七年十一月に至て竣功於是天海大僧正來て勸請し奉り　勅使參向正遷宮の典を擧けらる又和歌天滿宮を修營して地主神に御崇め續て天曜寺（后雲蓋院の號を賜ふ）を創立天海僧正開祖となりて御宮別當に被補神田寺地山林金玉寶器を御寄附ありて祭儀典禮細大完備御崇敬無二の國廟たる恰も　日光に於ると一般莊嚴威を極め煥美盛を盡す又天曜寺は　公家の御菩提所に定められ院内に　幕府歷世上野方の靈牌を安置するために御靈屋の創立あり其制粗江戸兩山の靈廟に倣はせられ叡山日光院圓空天海に代て二世の主となり圓空入滅上野眞如院豪倪入て第三世となり共に神事佛會を奉して諸般の規範を定制す爾后世々の靈廟となりて一品法親王より雲蓋院の稱を賜はるされは歲時の御親拜追遠愼終の法會皆此雲蓋院に於て擧行あり齊明盛服の嚴肅奉承洋々の典儀筆紙の及ふ所に非す實に万世不易の宗廟と二百七十年來上下擧て尊奉啻ならさりしも豈圖らん哉時世の變數に制せられ明治二年國政一變に隨伴して　御宗家之御靈牌は御邸内（若山なり）へ御尊牌は長保寺へ御遷座續て　東照宮祭典を御改め雲蓋院の奉仕を免し社領支配を解き僅に廩米を給與せられしが間もなく天下社寺領一般上地の太政官令出て停止となる依て雲蓋院の衆徒は悉く大相院に退き佛閣僧坊は縣官に納付したり爾來或は兵營に供し又は外客待遇所に充る等幾多の變轉を經て終に　東照宮山下の寺院は悉

皆廢毀せられ斯る巨刹も地を拂て又一物を留めす今や昔時の盛況を知らんと欲するも唯一紙の圖書を見て其皮想を追懷するの外なく舊記寺錄も隨て散逸に歸せり唯僅に大相院に存する殘餘の物及ひ二三散見の記を拾集す故に概略に止るのみ續風土記に載する處は爰に略すと云爾

和歌宮御造營來由略記 寺院來由社家之事 天滿宮鎭座略記

一和歌御宮御造營元和六庚申年始御社地形御繩曳竹林坊賢盛僧正御奉行安藤帶刀直次彥坂九兵衞光正御大工中邨讃岐宗次中村織部久長七月御釿初九月御柱立

元和七辛酉年秋　御造畢

御本社幷其外所々略之

華表一柱　元和七年以後

南北左右井垣　寬政十三丙子年御起立

一元和七年十一月廿三日假殿御遷宮同廿四日正遷宮廿五日御法事

御導師大僧正天海中御門大納言資胤卿廣橋參議兼賢卿着座禁裏下役人數輩下向記錄にあり

御鎭座之砌關東幷山(川)門カ之衆徒三百七十余下向三ヶ日法華千部讀誦

御棟札有太政官符一通有御緣起五卷々末に御祭禮之行列相加御言葉書は靑蓮院尊純法親王繪は土佐將監光起筆

御祭禮は元和八年四月十七日御營始

一寛永十三丙子正月十七日御社領御寄附御黑印三通りあり內一通りは御直筆右之外御神領限界記一
通安藤飛驒守水野淡路守名書御神領總繪圖一枚有
宮號宣下　正保二乙酉年十一月十七日
御位記一卷外記寫之當御代御奉納
樓門御額　元和七年之御額は竹內二品親王良恕御筆
宮號御改　延寶二年當御代に御打被遊候御額　日光御門主一品親王守澄御筆
御境內殺生禁斷繪圖兩通あり內一通は御當代御改先寺社奉行裏書
一元和七年天曜寺起立寺院不殘從先御代破損修繕被　仰付
寬文十二年壬子御造替
一山號和歌山寺號天曜寺院號雲蓋院代々日光御門跡院室
一當寺開祖大僧正天海元和七年十一月より十二月迄住職二代目日光院僧正圓空元和七年十二月より
寛永十七年迄三代豪俔僧正寛永十八年より承應三年迄上野雙嚴院と兼帶圓成院千海留守相務四代
圓空弟子憲海僧正明曆元年より寛文十二年迄五代豪俔弟子宗海僧正寛文十二年十月より元祿八
年迄
一寺領高二百石　御神領之內
一玄米　百二十石　御燈明以下諸用自古每月拾石つゝ入用
一玄米　二石　正月御飾料

所々略之

一玄米　八石　　長日護摩料

四石は護摩料四石は六ヶ坊布施

一玄米　二十七石二斗　　御祭禮料

四月御神事之節代官衆其外相定候通方々へ相渡

一玄米　五石　　八講料

九月臨時御祭禮之節八講料僧賄并布施料

一高百四十一石三斗七升二合　修理料

内高四十石正法院へ御寄附

殘る百一石三斗七升二合

右は故大納言様御直に憲海へ被　仰聞憲海住持之砌より勝手に相用來憲海口上書あり

寺中　（御黒印之面は五ヶ坊正保四年正法院相加へ六ヶ坊さす）

一和合院は元和八年安藤帯刀直次起立元祖別所和合院仙榮最初之名を御用ひ御黒印に御載せ元和八年より以下在住不知第二代越前大谷寺玄海寛永九年より明暦二年迄以下略之

承應四年　大猷院様御靈屋御建立以來破損所從　公儀被　仰付

一寶藏院は元和九年水野淡路守重良起立元祖駿州寶藏坊慶順元和九年より寛永年中迄在住是亦最初之名を御用爲院號以下略之修復等は水野家より被申付

一大相院は寛永五年彦坂九兵衛光正起立元祖山門常光坊弟子圓移寛永八年より延寶七年迄在住以下
略之修復等從　公儀被　仰付
下け紙に　常光院は今南光坊之事
一玉泉院は寛永三年以后御起立と相見へ候へ共年序不詳元祖粉川御池坊天英在住年數不相知二代粉
川玉泉坊在住年數不相知以下略之
修復等右に同し
一圓成院は寛永三年以后御起立と相見ゆれ共年數不詳元祖上野柳生坊亮盛在住年數不知二代住吉東
惣坊千海寛永十八年より在住已下略之
修復等右に同し享保十四年十如院と改る
一正法院は寛永二十年之比水野平右衛門義重起立年歷不相知元祖吉野山慶海正保四年より寛文二年
迄在住以下畧之
但修理料之内四拾石正保四年新に御寄附延寶八年より破損修繕等上より被　仰付
一御宮神主之初は安田左馬允祝部吉正元和七年より寛永十三年迄二代兵部少輔正輿寛永十三年より
延寶三年迄第三代兵部少輔正親延寶三年より元祿八年迄
一神職料六ヶ坊同前但本家共外從上御起立被遊候へ共年號不相知破損修繕等被　仰付官位昇進之節
官物共外入用被下置候
一禰宜の初めは安田右衛門正久元和七年より萬治元年迄二代正久之養子安田介之亟萬治元年より元

祿六年迄三代介之丞聟安田織部已下略之

禰宜料高十四石但本家當社御建立の小屋木を以御起立之由年號不相知破損修繕等被　仰付

殘る禰宜二人代々兵部一家勤來然共只今斷絶故古例を以矢宮神主相兼勤之殘米高二十八石内高

十二石古より兵部總領に渡し來る高十石矢宮神主高六石當分織部加增

一高六石神子高廿四石宮仕三人高十四石御神領樂人三人町樂人十七人

右相加都合二十八

和歌山天曜寺法式十二ヶ條之内五ヶ條左に記す

一社役祭禮不可怠慢附式日之出仕衆僧勤行無懈怠可沙汰之事

一物忌觸穢可令欽愼事

一公事無偏頗可裁斷之　附雖修道業於不守律義之僧は可放逐之幷學問鑽仰之外往來他國闕法式之輩

從其輕重可加嚴令事

一和合院大相院寶藏院圓成院玉泉院回其相應擇才器可令住持事

一坊舍幷領者爲質物而借地財寶或令沽却之儀停止之事

右十二ヶ條の内要用之五ヶ條也

一慈眼大師堂　正保四年御起立

一一切經藏　寛文九年御起立

一南龍院殿御位牌　寛文十二年御安置高八十石年中諸用長保寺領五百石之内

一高岳院殿御位牌　延寶七年御安置玄米拾石

一大猷院殿御靈屋　承應四年御建立玄米二百石

一嚴有院殿御靈屋　延寶九年御建立玄米二十石

一常憲院殿御靈屋

一御宮御境內廻り凡五十丁程山林一ヶ所廻り凡六丁四十間程堂社十九宇

一雲蓋院の事　輪王寺宮御支配に成候事延享二年九月天台一宗本末の儀從　公儀被　仰出候節相極候事

和歌天神後撰集作者天曆以前之人也延喜之比歟

一草創時代不詳　一說橘直幹自宰府歸京之時過此浦始崇奉

本社一宇唐門拜殿樓門額近衞信基公之筆末社神名略之本地堂十一面觀音慶長十年淺野紀伊守幸長再興翌年吉田左兵衞佐卜部兼治遷宮棟札有末三社者起立の來由不知本地堂は慶長四年治部卿法印宗榮建立三寶荒神社は天正十六年桑山修理重晴造立

一御宮御鎭座の砌より地主神御崇被遊社領高十石同郡和歌村に左京大夫幸長寄附あり　御先代御增加被遊神領地御改名草郡馬場村にて御寄附都合廿五石

一山林往古より附來候由　御宮御鎭座以后限界御定新に御寄附あり殺生禁斷御証文あり社頭不殘修覆

一延寶五年御修覆の節初て御納之棟札あり例年二月廿五日御代參有之

一安田兵部勤役の儀幷年頭御禮天滿宮神主名代の儀は委細有之以下略之

紀伊國東照社

一元和七辛酉年十一月廿四日

和歌御宮正遷宮　宣旨左之通

左辨官下

權大納言藤原朝臣資胤

參議藤原朝臣兼賢

右史生宗岡孝昌

權大納言藤原朝臣資胤

宣奉　勅爲令勤行當社

遷宮事差件等人發遣者

社宜承知使者經被之間

依例借給官府追下

元和七年十一月廿四日　左大史小槻宿禰孝　書判

權左少辨藤原朝臣經廣

和歌御宮御緣起

元和辛酉紀伊大守源大納言賴宣卿和歌山の城南にをゐて　東照大權現鎭座の地を求められしに和

歌浦の山頭に祥瑞ありしかは則其所を點して締構をくはたて神祠を經營す百工心を碎き丹青手をつくしぬれはすみやかに成風をゝへしむ既にして大僧正天海を導師とし同年仲冬十七日に遷宮をとけ奉らる此日雨いたく降しかとも刻限に至りて天氣晴朗たり偏に是靈神の冥助なりけんかし今宵戌刻はかりに遷宮の作法行ひ侍しに伎樂の伶倫は曲調を階下に奏し歌讃の僧侶は音律を堂上に發す其聲雲井にすみのほりてをのつから心肝に銘す此事かねてより　天聽に達しぬれはいともかしこき　勅をうけて中御門の大納言資胤卿廣橋の宰相兼賢卿着坐有て神殿のかさり會場のよそひ最儼然なりかゝる孝敬のいたりをはあきらかに見そなはし給ふらめと神の御心そらにをしはかる今かはかりの志願ことゆゑなくとけをこなひ神をうやまひ君をいのらしむる悦ひいかはかりそやされは此地にもとよりありし玉津島菅原神もともに光りをそへて擁護をはせん事にやといよ〳〵たのみふかしさすかゆゑある斯のさまなれは物色動情觸境催感者也浦わはるかに見渡せは波も空もひとつにて千里の外まて眼の前につきぬこゝかしこ海山のたゝすまひさなから繪にかゝまほしまことに色をゑたる勝地意にかなふ風景なり玉津島よくみていませとよみけんもことはりにをほゆ濱邊を見れは枝さしおいかゝまりつくろへるやうなる奇樹あり布引の松といふ又頭を廻らせは入江をへたてたる紀三井寺もいと興ありすへて此わたりは指のさすところ足のふむところ佳境ならすといふ事なしむへもかゝる所に宮居を卜給ふ事よと皆人いひあへり就中翌年卯月中の七日にはしめて祭禮執行はれける依之神輿臨幸の儀式は先弓矢を携へ旗旄をたて騎馬介冑の士僧侶社司以下の供奉人まて美麗をつくしいかめしき有樣見ところありてめつらかなり扨假殿にわたら

せ給へは神供歌舞鄭重の法式ことおはりて還御なし奉ることにこの神幸を拜せんとて人群をなしけるに隣村の農夫喪穢にふれたる者此所にまうてきたらんと數艘舟に乘ていてしかはいまた到り着すして海上一里許にして逆風波を捲き暴雨舟を覆せは穢氣の族まのあたり沒溺すといへともたま〳〵潔齋の者五六輩ありて恙なく死をのかれしも不思儀なり夫より後觸穢のともから白地にも廟前に徘徊すれは必咎めあること度々なりと云々殊更太守和歌山を當社に附納し膏腴の田を以て永代不朽の神領によせおかれ例年式日の祭典其外臨時の祭祀怠る事なし加之圓宗の法味をさゝけ不退の薫修なほ嚴重なれは兒孫の餘裔に至りても武運に武運をそへ万歳とあふきたうとみたまはんにおゐては求願なんそむなしからんや當社の來由ほゝこれをしるし侍るのみ

右青蓮院宮高純親王御筆土佐將監光規畫といふ

和歌御宮年中行事

御黒印之寫

一御神領支配目錄付山境幷山木事　一通

一和歌山天曜寺法式　一通

右兩通は御黒印にて御座候

一御領分記錄

右は安藤飛驒守水野淡路守連名

右之外御神領如寄附之本体之御判物は御自筆御直判にて一通御座候

一御直筆御制物の儀甚大切之御品故代々僧正直封致置古來より一切不許他見候

和歌浦

東照大權現御領支配目錄付山境并山木事

一高五百八十六石二斗六升五合　紀州海士郡小南村

一高二百十七石五斗九升四合　同郡　黑田村

一高百九十七石九斗一升三合　仝郡　小松原村

都合一千一石七斗七升二合

右之内

百二十石　御廟燈明以下諸用　二石　正月御飾料

八石　護摩料　二十七石二斗　御祭禮料

五石　法華八講料

都合百六十二石二斗者以定米可收納之

高二百石　雲蓋院　同四十石　圓成院

同四十石　和合院　同四十石　玉泉院

同四十石　大相院　同四十石　寶藏院

同四十石　神職左馬允　同四十二石　禰宜　三人

同六石　神子　同廿四石　宮仕　三人

同廿四石　樂人　三人　同百四十一石三斗七升二合修理料

都合六百七十七石三斗七升二合

下け紙に

正法院一坊は追て御建立被遊候故修理料之内高四十石正法院へ配當殘て百一石三斗七升二合は本坊内證不勝手と被聞召及候間本坊勝手へ相用候樣と御直之御意一陰へ被　仰候以后本坊内證へ相用候右　御意の趣は別紙に有之

右之定米者不拘年之豐凶に以元所相定之米穀可納之所殘之米大豆僧坊社人領幷修理料之事相共無高下平量之可收納之雲蓋院幷五箇房及會合從其時之高下賣之於其價銀者固封押印可收藏之後日加修理之時は雲蓋院及五箇房又令評議可用之

山境幷山木

權現御山　自河津谷山之南之尾崎限大峯通之水落至鳥打山燒山之大道之上爲　權現御山幷燒山者皆權現御山也

天神御山　自河津谷山之南之尾崎限大峯之水落至鳥打山之南方爲　天神御山

和歌浦山創建　權現御廟自爾以降神威靈瑞感應不虛是故與　天神御山御分定限界者也且又爲替地以別山新寄附天神而記其處如左

自高井谷山之南之尾崎限水落也自多古辻山之麓之道通至大浦山之北之尾崎限水落也東北者至燒山之麓之大道之下爲新寄附

天神御山

右伐採山木加修理之者　權現御山與天神御山隨其限界各別可伐而用之

從二位行權大納言　源　朝　臣

寛永丙子十三年正月十七日

和歌山天曜寺法式

一社役祭禮不可怠慢付式日之出仕衆僧勤行無懈怠可沙汰之事

一日次月次之御供嚴重可備薦之事

一社頭之番付洒掃不可有懈怠事

一物忌觸穢可令欽愼事

一公事無偏頗可裁斷之付雖修道業於不守律儀之僧者可放逐之幷學問鑚仰之外往來他國闕法式之輩隨其輕重可加嚴令事

一和合院大相院寶藏院圓成院玉泉院因其相應擇才器可令住持事

下け紙に　正法院者后に出來候故此御書付に載り不申候

一知行所務可致廉直之沙汰事

一坊舍幷領知爲質物而借地財寶或令沽却之儀停止之事

一修補領米者雲蓋院幷右五箇房及會合隨其高之高下賣之於其價銀者固封押印可收藏之后日加修補之時者雲蓋院暨五箇房又令評議可用之事

下け紙に　修補料米之內元米二十石正法院坊料に仕其餘本坊入に仕候樣に　南龍院樣御代被
仰付候其後修補料米と申候一向無御座候
一天曜寺之山木者　天曜寺修補之外不可伐用之事
一神領三村之竹木本爲　天曜寺之修補料奉寄附之三村之竹木不足之時者可伐用天曜寺之山木也且又
雲蓋院曁五箇房神職禰宜神子宮仕樂人之寺屋破損之時雲蓋院五箇房相談而隨其支配之高下可伐用
之假令雖有所有不可一時截盡而荒廢山林事付三村之山境如前代相定今以不可有相違事
下け紙に　總て御修覆は從　上被遊候旨　南龍院樣被　仰出候に付其后修覆御神領之竹木截
取候事無御座候
一社僧社人之事　天曜寺與天神御廟混同而可調諸役事
右條々可相守此趣者也
從二位行權大納言　源　朝　臣
寛永十三年丙子正月十七日
雲　蓋　院
東照大權現御領分記錄
小松原村
一限志保宇山之水落西爲小松原村東爲橋本村
一限白草山之水落南爲小松原村東爲橋本村

一限飯盛山之水落東爲小松原村西爲梅田村
一自天狗岩限石本迄之路東爲小松原村西爲中村
一自入佐山限立石迄之路西爲小松原村東爲橘本村
一限峯山之水落北爲小松原村東爲橘本村一之坪村
一自志太尾崎限火打之廉迄之水落東爲小松原村西爲青枝村

小南村

一限土山之水落北爲小南村南爲小畑村東北爲中村
一限平松山之水落西爲小南村東爲中村
一限蟻本之峯形之水落北爲小南村西爲黑田村南爲小畑村
一限物天寺山水落北爲小南村南爲黑田村
一限妻夫石之水落爲東爲小南村西爲黑田村
一限多伊之岡之水落東爲小南村西爲下村

黑田村

一限蟻本之峯形之水落西爲黑田村北爲小南村南爲小畑村
一限物天寺山之水落南爲黑田村北爲小畑村
一限動搖峯孝子三辻宮頸八幡山經塚崎迄之水落北爲黑田村南爲下村
一屋畑岡之峯路上之南爲黑田村路下之屋敷際爲下村

一限多伊乃岡水落西爲下村東爲小南村
一屋畑岡之峯路下之屋敷際爲下村路上之南爲黒田村
一自藤原峯限岩崎迄之水落東爲下村西爲丸田村
一自藤原峯限八幡山保宇志峯迄之水落南爲下村北爲盬津村
一自平山限高尾迄之水落南爲下村北爲盬津村淸水村

梅田村

一限白草山飯盛山之水落西爲梅田村南爲小松原村北爲淸水村
一自天狗岩根捧畑聢山宇波目崎之水落北爲梅田村南爲中村
一限柳谷南爲梅田村北爲下村

右記境界如古來之定制聊不可有擾亂於竹木等者堂墻破損幷寺屋社家傾倒之時社僧社人相互令評議可代而用之猥不可被荒廢山林者也仍如件

寛永十三年丙子正月十七日

安藤飛驒守

水野淡路守

重良判

日光院御房

下け紙に

日光院は山門東塔西谷放光院之舊號にて御座候當院第二世圓空當時兼任此節未雲蓋院之號を

名乘不申候に付如此御認被成候事

和歌山天曜寺末門條目掟書

一大地小地に不拘總て支配末門僧侶柔和慈悲を根本として同心堅固に學業相勵法義與隆堂社營造專一に可心掛事

一本末之規式不可亂之者寛文五年從　公儀被　仰出候憲法に候急度不可有違戾候事

一東照宮御祭禮之節は勿論御尊靈樣方御法事等都て銘々冥加を存し神妙に御威儀相整猥に高笑雜談等相愼如法如實之心得可爲專要事

一總て支配末門之僧徒阿闍梨受者并竪葉に付山門登山之節は勿論其外他國へ通行之輩は前廣に本寺へ相願都て本寺之差圖次第下知可相守事

一天曜寺は　東照宮御別當　御家父樣方御菩提所にて法義之御役所に候末門之僧徒等閑に相心得自己之鄙懷を存し不相憚傍若無人之働有之間敷儀は勿論之事向來彌右御場所柄之儀に候得は銘々相愼不法不律之振舞幷我慢强法申募間敷候若不相守は急度可申付候事

一前段御場所之儀に付御法事等之節は御導師は雲蓋院僧正雖職務萬一病氣差支之節は濱中陽照院可爲代勤事

附代勤之寺院者導師之節者侍者一人可召連候尤重き御場所に候得者雲蓋院之外中小姓先引等之儀者可被相愼候事

一此度大地格表色衣　御免被　仰出候得共粉川御池坊同樣相心得申間敷御池坊儀者天曜寺末寺と申

にても無之所品も有之御支配被仰出猶又一山頭坊にて根來寺へも張合候事故通例之大地格より一等御取扱振宜く候此度三箇寺之大地格表色衣者元來雲蓋院末寺にて万事本寺之可爲取計次第勿論之條に候事依之御法事等之節は衆僧一等之可爲裝束侍者隨從等は堅く可爲無用勿論御布施被下振等者雲蓋院へ相渡候間雲蓋院にて可申請候然る上者爲御禮別段不及登城候事

一法席之儀は本堂にて東横坐者僧正坐西横坐は陽照院御池坊ミ古來より相定有之候此以后大地格寺院は大相院は法﨟に不拘上座道成寺明王院は戒﨟次第に衆僧之可爲上座其外總て差定之認振等古來之式可相守事

一所色衣之內戒﨟にては上坐之黒衣も有之候に付是迄之通法﨟にて座組可有之也尤色衣の所以を以て法﨟相亂申間敷事

一天曜寺者法義之御役所末門者都て支配下に候儀送迎無之通式也依之大地格にても不及其沙汰候事

但陽照院御池坊者可爲制外事

一世議座之事陽照院御池坊者是迄之通大地格之內大相院﨟に不拘上座道成寺明王院者御目見之順を以衆僧之可爲上座事

但本末之式法相心得本寺ミ同席無之樣急度可相愼事

一色衣被　仰出候事者　東照宮御威德倍增之御爲に法義興隆之外無他事然上は人々我情を相離法義を重し世議に相拘爭論ヶ間敷儀堅不可申募事

一御法事之節被下置候御齋非時是迄陽照院御池坊者御取扱者格別に候事前段之趣に候此度大地格三

箇寺者末門之筋に付格別に御取扱振無之是迄之通に相心得可申候事
一諸寺院住職之儀者大地小地に不相拘撰其才器年齢相應學業神妙之僧を寺社役所へ相達候上住職可申候事
一本末之式法者不輕事に候依之從本寺相觸候事共是迄之通一列相認候事
一公儀御觸等之儀も從雲蓋院可被觸候事
一大地小地に不拘法用世用共可願寺社役所之儀者先本寺へ願出候上以添簡可達寺社役所不依何事不歷本寺直達役所輩は可爲越度事
一諸寺院官位昇進色衣願上候節者從本寺其旨達寺社役所其上可及取計事
一諸寺院若者死亡跡若者他寺へ移住又は隱居候輩者是迄致住職候寺院之什物等組合にて相改若紛失有之者可令全備猶又假令後住之僧雖爲弟子以他借寺附に致申間敷候事
一右之外者是迄每度被　仰渡候條目等に不違背樣復讀之上今般被　仰出候條々堅可相守者也

寛政十一己未年九月

渡邊主水　印判
三井孫十郎　印判
村上與兵衞　印判
久野遠江守　印判
水野飛驒守　印判

和歌山天曜寺雲蓋院緣起

一當山之御草創者元和七年辛酉　南龍院殿頼宣卿御建立

一當院開基は慈眼大師天海大僧正住職以來至于今迄御宮御別當幷大守御代々御菩提所也宗門天台宗
日光宮一品法親王之御支配にて三山同樣之御場所也

一東照宮本社一宇拜殿一宇奉勸請　東照大權現其左りには山王權現其右には摩多羅神三社
一合て　東照宮と稱し奉る右勸請は元和六年より七年に至り御造營にて同年十一月廿五日正遷宮
御法樂御導師者慈眼大師其日之　勅使は中御門大納言資胤卿廣橋參議兼賢卿其外官人數輩參向法
會之僧侶者山門衆徒其外衆僧總計三百七十人餘參勤

一唐門四方瑞籬其内に兩家三大夫之石燈有之

一三重浮圖塔一基本尊は金之大日其左りには八幡大菩薩其右には愛染明王此二尊像は多田滿仲出陣
之守本尊銅鑄之鰐口徑二寸五分許一口華表高さ五寸程徑四寸許一柱右は新田大炊助源義重之二尊
像へ奉納處之器也號は文治四年戊申九月

一御本地堂一宇本尊藥師如來脇立は日光菩薩月光菩薩幷四大天王十二神將　東照大權現御本地佛之
故に御本地堂と稱す

一鐘樓一宇

一護摩堂一宇本尊不動明王脇立は矜伽羅制多加之二童也
又釋迦尊彌陀佛は昔は御城天守之本尊今此堂に安置

一御供所一宇其軒に邦内名家之繪馬有之
一御寶藏一ヶ所
一竹臺一ヶ所日本國中三千餘座之諸神勸請
一樓門御額は　日光宮守澄親王之御筆東西廻廊は神樂雅樂奏曲之處
一石　築　社檀之下幷樓門石階之左右より華表之處に至る迄大凡百有餘柱
一御　橋　日光之山菅之橋に擬す
一御　池　江州竹生嶋に類す
一辨天社　同竹生嶋之天女勸請之處也
一華表一柱東西左右幷井垣
一御鎭座官府　一通有之
一御棟札有之
一元和八年壬戌より春秋二季御祭禮
一御緣記五卷右五卷共書は　青蓮院宮高純親王御筆繪は土佐將監光起每歲八月十七日爲虫干御老中
一人寺社奉行一人御用役一人僧正六坊神主立合封印之事
一御社領一千一石七斗二升二合寛永十三丙子　南龍院殿賴宣卿御手自御筆被爲染御黑印三通御神領
限界記三通安藤飛驒守水野淡路守名前幷總繪圖一枚
一殺生禁斷御境內八丁四方從　公儀御印之限界石被爲立之繪圖面兩通有之

一御宮其外不殘　御代々御修覆所

一山號寺號は　天朝より下賜る所雲蓋院印寶は　大猷院殿賜之則第三世豪俔代也

御令旨者　日光宮尊敬法親王御直筆

一慈眼堂本堂一宇拜殿一宇樓門非垣有之

一南龍院殿へ御寄附之寶物種々有之不能具記

一御靈屋三ヶ所御唐門二ヶ所南西御瑞籬東北塗塀其內之　御靈屋は

大猷院殿大相國其御相殿には　「御佛供料　五　枚」

俊明院殿大相國其御中間には　「同」

嚴有院殿大相國其御相殿には　「五　枚」

孝恭院殿內府公其奥東には　「三　枚」

常憲院殿大相國其御相殿には　「五　枚」

有德院殿大相國右三御靈屋之御供處寛政四子年迄は　御靈屋料

大猷院殿　嚴有院殿　常憲院殿

御三方樣廿石つゝ

有德院殿　俊明院殿

右御二方樣十石つゝ　「五枚つゝ」

孝恭院殿へ八石にて有之候處寛政五丑年御直にて廿石之處白銀五枚十石之處御同斷八石之處白銀

三枚に御定之事
「都合三十八枚此一貫六百三十四匁となる」
一當院は元和七年辛酉御造營其節客殿をも相兼候て庫裏幷臺所御建立其後寛政十二年壬子第四世憲海代本堂御建立御客殿と稱し且又　南龍院殿御位牌御安置御佛供料百石
一御裝束處一ヶ所右は　南龍院殿御代駿河より被爲御引取と申傳小書院一ヶ所御同斷是又申傳也
一西御堂一ヶ所御供所一ヶ所供待一ヶ所
右供待は寛政年中御取置に相成候て當時は無之右は　大樹有德院殿御實父　淸溪院殿御位牌殿寛政四年迄は御佛供料現米七十五石被爲附置候當時は五十俵に御直之事
一御唐門幷瑞籬有之候
一中御堂右は　大樹有德院殿大相國御舍兄　高林院殿幷　深覺院殿御位牌殿右寛政四子年迄は現米十六石之處寛政五丑年現米廿石に御直し　深覺院殿御相殿には　香嚴院殿御位牌御佛供料前段之通
一奧御堂は　大慧院殿御位牌殿其御相殿には　菩提心院殿御位牌御佛供料前段之通
一大奧御堂は　貞恭院殿御位牌殿其御相殿には　俊岳院殿御位牌御納被爲在　貞恭院殿御佛供料は現米三十俵寛政六年被爲附之　俊岳院殿御佛供料白銀三枚被爲附之
一裏御堂右　淨眼院殿　明脫院殿御正面東西に御安置御二方樣共御佛供料十五石つゝ之處寛政五年より現米四石つゝに御直し

淨眼院殿御左りの御方には
永隆院殿　　清信院殿　　澄清院殿
御三方樣御相殿御佛供料銀三枚充
明脫院殿御右の御方に
寶池院殿　　一生院殿　　觀達院殿
御三方樣御相殿御佛供料銀三枚充
一新御堂　御方々樣　御位牌御十九方樣御安置御佛供料之御沙汰無之
一表御玄關內御玄關有之
一御寢殿一ヶ所新御裝束之間
一御宮御山大凡廻り五十丁餘山繪圖有之
一境外山林一ヶ所大凡廻り六丁四十間程　南龍院殿より當院へ隱居所に被下之其外宗海僧正加茂谷
　一陰之庵室を引取則號梅田寺
一住寺住職　日光御門主　公儀へ被　仰窺　御聞添之上被　仰付極官同斷右に付　公儀へ繼目御禮
勤之　御目見有之御暇之節時服二重上京之時任官御禮奉拜　天顏猶又紫衣　御許容之事
一代々山門東塔之內寺院一ヶ寺兼帶之事
一寺中六ヶ寺大相院寶藏院十如院和合院正法院玉泉院各四十石宛其中大相院は近來大地格被　仰付
候事

一神職　　安田能登守是又四十石
一社家　　安田刑部是又二十石
一同　　　青葉内記是又十四石
一神子　　吉頭是又六石
一樂人　　三人是又八石宛
右之通御座候以上
文化九年申三月

雲蓋院

右寺社司へ書出たる扣留なり雲蓋院は宮山の麓にありて本堂大書院小書院（御裝束所と云元和中駿府より移さる新御裝束所松蔭の額あり　舜恭老公親翰を染給へり）新書院內佛殿方丈庫裏內庫裏表玄關內玄關四足門通用門等ありたり又外六ヶ坊と稱し明王院圓珠院了法寺淨福寺上願寺功德寺の六寺內六ヶ坊と共に雲蓋院に屬して　東照宮の神事に給仕し兼て御靈屋の事にも預る

天曜寺緣起追加

天曜寺第五代宗海　　寬文十二子年住職延寶六午年十月權僧正拜任元祿十四巳年隱居在住三十年
一第六代亮海　　元祿十五午年閏八月住職幷權僧正拜任享保四亥年十一月隱居號祥雲院在住十八年
一第七代廣惠　　享保四亥年十一月住職幷權僧正拜任同十六年亥五月博正寬保三亥年二月隱居號唯默院在住廿五年

一第八代智峯　寛保三亥年八月住職幷權僧正拜任延享四卯年七月遷化在住五年
一第九代覺忍　寛延元辰年二月住職幷權僧正拜任寶暦三酉年九月博正同年十月山門法華會新題者に昇進同六子年三月大僧正拜任同九年山門正覺院へ移轉在住十三年
一第十代貫春　寶暦十辰四月住職年齡未滿に付院家大僧都にて督住寶暦十三未年十月江戸下向十二月權僧正拜任翌申年二月上京參内在住廿二年天明元年隱居號一地院寛政四年霜月廿九日永昇生年七十二才圓珠院境内に退去松江舜光院に葬
一第十一代堯鎭　天明元丑年閏五月江戸下向住職幷權僧正拜任八月參内御禮九月入院
一第十二代昌宗　寛政八年丙辰七月江戸下向八月四日住職幷山門觀喜院兼帶被　仰付同月十日權僧正拜任十月十七日に京着霜月廿七日參内極月九日入院十五日　登城繼目翌々年三月御年寄移請六月廿三日　殿樣御成

寺中

和合院第三代長海　明暦二年より
一第四代
一第五代亮俔（先住弟子）　享保四年亥七月梅田吉祥院より移轉延享三寅年隱居在任廿九年
一第六代俔周（先住亮俔弟子）　延享三寅年十二月住職寶暦九卯年不屆之品有之隱居申付
一第七代惠淨　寶暦十一年巳十二月坂田了法寺より移轉安永五年申何月隱居在住十七年

下け紙

一第八代惠深（先住惠淨弟子詮妙房）　安永五申年何月住職
　寶藏院第四代圓相　寛文三年より
一第五代
一第六代亮桓（亮海僧正弟子）　享保五子年十二月廣瀨上願寺より移轉寛延三午年六月隱居在住廿七年
一第七代亮賢（先住亮桓弟子）　寛延三午年六月住職寶曆四戌年四月死去在住五年
一第八代（先住亮賢弟子）　寛曆五亥年六月より同八年寅七月迄看坊同七月住職明和二酉年九月死去看坊
住職共に十一年
一第九代義忍（第六世亮桓弟子）　明和三戌年二月住職安永元辰年十二月大相院へ轉任
一第十代貫空（貫春僧正弟子）　安永元辰年十二月住職天明二寅年十二月御追放
一第十一代主信　天明三卯年六月野上神宮寺より轉住
一第十二代覺觀
　大相院辨海　延寶七年より享保五年迄四十二年住職
一第三代蓮海　享保五子年十一月吹上明王院より移轉寛延三年午九月隱居在住三十一年
一第四代榮觀（但し後改遷榮先住蓮海弟子）　寛延三年午九月住職寶曆九卯年九月隱居在住十年
一第五代眞榮（先住遷榮弟子）　寶曆九卯年四月住職明和八卯年退院御追放
一第六代義忍（先住眞榮弟子）　安永元辰年十二月住職寶藏院より轉任天明七未年八月病死
一第七代惠順　天明八申年九月玉泉院より轉住

玉泉院第四代光憲延　寶元年住職正德五未年九月圓珠院へ移轉在住四十三年

一第五代應本　先住光憲弟子　正德五未年十月別所願成寺より移轉享保元年申二月死去在住二年

一第六代豐隆　當院第六世亮海弟子　享保元申年六月住職同三戌年正月依願住職御免在住三年

一第七代亮實　亮海僧正弟子　寶曆三戌年三月廣瀨上願寺より移轉寶曆八年寅七月病死在住四十一年

一第八代覺徧　寶曆八寅年十月北新町淨福寺より移轉安永元辰年十二月病死在住十五年

一第九代惠順　覺徧　安永元辰年十二月藤白地藏寶寺より移轉

一第十代範道　天明九酉年正月上願寺より轉住

十如院　元圓成院事後號照國院　第三代憲斈　寶文十二年より

一第四代

一第五代惠承　廣惠僧正弟子　寬保元酉年十月住職延享元子年隱居住職四年

一第六代幸純　延享元子年四月北新町淨福寺より移轉寶曆十一巳年九月退院在住十八年

一第七代惠充　廣惠僧正弟子　寶曆十二午年四月藤白峠地藏峯寺より移任安永七戌年十二月隱居在住十六年

一第八代惠雄　先住惠充弟子大行房　安永七戌年十二月住職

正法院第四代憲英　元祿二年より

一第五代憲州

一第六代智貞　享保十六亥年十一月住職寬延三午年五月病死住職廿年

一第七代賢通 亮海僧正弟子 寛延三午年五月泉州泉福寺より移住明和九辰年隠居在住廿二年
一第八代賢忍 先住賢通弟子 明和九辰年十二月住職
一第九代秀海 天明二寅年十二月藤白實樂院より轉住
神主安田兵庫頭家系之事
一第三代兵部少輔正親 延寶三年より
禰宜安田介之亟第三代織部有信 元祿七年より
一第四代介之亟
禰宜青葉内記家系之事
一元祖青葉内記 享保元申年七月より寶暦六子年八月迄在職
一第二代左内規次 先内記悴 寶暦六子年八月より同十一巳年八月迄在職六年
一第三代内記春俊 左内の弟 寶暦十一巳年十月より今年迄在職十四年
一第四代左内知郁 寛政三亥年十二月より
禰宜料高十四石
御靈屋追加
一常憲院殿 御靈屋一宇 寶暦六巳年御建立
現米廿石 御靈供料幷年中雜用供僧一人下男一人扶持給
一其外御法事六坊布施料配當目錄有之

一有德院殿　　御位牌一基
寶暦二壬申年
常憲院殿御靈屋へ御相殿に御安置
現米十石　　御靈供料等配當目錄有之
以　上
本坊　　御位牌前方追加
一清溪院殿　　御靈屋一宇
御供所　　御靈屋迄廊下有之總疊數七十餘疊
唐　門　　兩方瑞籬後石垣
屛重門　　一　　御供所所入口門　一　　車　門　一　　番　所　一
人溜り　　一ヶ所
寶永三戌年御建立
現米八十五石　　内十石は濱中　御廟御靈供料也
殘て七十五石　　御靈供料幷年中雜用供僧下男扶持給
御法事六ヶ坊町在六ヶ寺御勤出勤布施料配當目錄有之
一高林院殿　　御位牌　　一基
一深覺院殿　　御位牌　　一基

右　御兩方様　　御靈宇　　一宇　　寶永三戌年御建立
現米七十石宛　內十石宛濱中　御廟御靈供料也　　諸入用配當目錄有之
一大慧院殿　　　御靈屋　　一宇
御供所　　一ヶ所　　役僧部屋　　一ヶ所　　總　門　一　　屏重門　一
寶暦七巳年御建立
現米六十石　　御寄附　　　諸入用配當目錄有之
一菩提心院殿　　御位牌　　一基　　明和二酉年　大慧院殿御靈屋へ御相殿に御安置
現米六十石　　御寄附　　　諸入用目錄有之
一寶池院殿　　御位牌　　一基　　延享四卯年御安置
現米十石　　御寄附　　　諸入用目錄有之
一淨眼院殿　　御靈屋　　一宇　　寶暦七丑年御建立有之に付寶池院殿御位牌御相殿に御安置
現米廿石　　御寄附　　　諸入用目錄有之
一孝順院殿　　御位牌　　一基　　寶暦八寅年御安置
一本地院殿　　御位牌　　一基　　元來御城下感應寺に御安置有之候處　中納言様思召を以て
寶暦八寅年當院へ御遷座御安置あり
現米二俵　　左京大夫様より每年被遣
一寵岳院殿　　御位牌　　一基　　寶暦九卯年御安置

一圓妙院殿　　御位牌　一基　寶暦十一巳年御安置
右御四方御位牌本堂本尊兩脇に御安置御靈供料無之
一寶篋印塔　二基　内一基本堂一基内佛　寶暦十四申年御安置
一恭良院殿　御位牌　一基
一慈泉院殿　右同斷　　明和六丑年御安置御靈供料無之
一本堂　東方新靈壇　一間
同年右兩靈御安置に付御修理同八卯年僧正直に申上是迄本堂御安置之御位牌不殘新靈壇へ奉移
一一生院殿　御位牌　一基
明和八卯年寶池院殿御靈殿へ御合殿に御安置翌辰年御佛供料十石御寄附諸入用目錄在別
一妙恭院殿　御位牌　一基
一知幻院殿　右同斷
右御二方御位牌明和七寅年御安置御靈供料無之
一春窓院殿　御位牌　一基　明和九辰年御安置御靈供料無之
一空如院殿　右同斷　安永三午年右同斷
一普明院殿　右同斷　寶暦八寅年内佛壇へ御安置爲日牌月牌金五十兩御寄附
一保福院殿　御位牌　一基　明和六丑年内佛壇へ御安置御料物右同斷
一御宮御假神輿一つ并御長持二棹

右同年爲非常御用意出來

一御靈屋幷　御家父方御位牌幷　御方々樣御位牌箱御長持寶篋印塔外箱

自明和六年至九年爲非常御用意出來

以上

右之外　御宮へ御代々御奉納物有之　公方樣より御進納之御道具　御家御代々御寄附御道具御代々御遺物御納之品御書物等幷御內々御取扱之品も數多御座候也

以上

按に　御靈屋初雲蓋院等へ御寄附も尠からさりしならんも今詳ならす唯　三代將軍家より御寄附といふ天海僧正之書入ある一切經及ひ駿河御物の由なる蠻船攝州堺港へ入津の繪屛風一双は今に大相院（當時雲蓋院と稱す）にあり共に貴重の名品と察せらる

東照宮

一本社三坐　前殿　東西五間 南北二間半　三重塔　方二間本尊大日如來 左右八幡宮愛染明王

本地堂　方四間本尊藥師如來脇立 日光月光四天王十二神將　護摩堂　方四間本尊 不動明王

鐘樓　御供所　東西四間 南北七間

神輿舍　東西二間 南北四間　竹臺

寶藏　樓門 東西廻廊　神樂雅 樂の所

唐門

樓　門　隨身門とも云　東照宮三字の額あり日光宮守澄法親王筆　　慈眼堂　方三間

拜　殿　東西五間南北二間　　經　藏

御　橋　日光山管の橋に擬す　　御　池　竹生島辨才天勧請の社あり

石　檠　社壇の下より樓門石階の左右鳥居に至るまで總て百餘基あり

石鳥居　銘文東照揭日華表劉石維明維堅万世垂跡とあり儒臣那波道圓撰にして祇園玩瑜の書也

境内方八町　宮山周廻五十町餘

三重塔八幡宮愛染明王は多田滿仲朝臣出陣の守り本尊にして新田大炊助義重朝寄附の鰐口と鋲の小き鳥居あり今皆塔中に藏む八幡宮の神像御長二寸五分許幞頭冠に狩衣樣の物を召に似たり左手弓を執しめ右手兩矢を持て上に擧しめ左足を前に進め給ふ御容也神彩生る如く古色ありと云り又鉄の鳥居高さ五寸許横四寸許銘文内に新田大炊助源義重とあり外に文治四戊申歳九月吉日とあり額を揭る處八幡宮の三字あり皆陽文凸出せり

○按に　明治維新神佛混淆禁止の令出したを以て同五年七月に至り本地堂三重塔鐘樓護摩堂（神輿舍と一棟なり）慈眼堂拜殿即下圖朱色の分取毀となる尤縣廳の取計ひ也

境内も僅に一町二畝十七歩を殘し余は皆上地官林と成れり三重塔中安置の愛染明王は寺院の部分なるを以て雲蓋院に納め今に同院に存し八幡宮の神像及ひ附屬の鰐口小華表は今尙　東照宮社の重寶たりと云ふ

一一說に境內各堂佛躰を何れへか廻送せんとて船に積み出さんとする際和歌浦不老橋邊にて高野山天德院の住僧見受け遺憾の餘り金五兩にて不殘買取り高野山へ持歸り今に同院境內に安置せりと又開山堂の慈眼大師の像は三浦家關係あるを以て同家より大相院（當時雲蓋院）へ長く預けたる由傳聞すと云ふ

東照宮寶器

一明治維新後祠官松平管兄遊佐保より屆書に

一劍　銘紀州住文珠重國造之長八寸九分半直刄　一口

　一鈕金着　一柄唐金　一鞘蠟色　一袋錦　但桐箱に入

右寄附年月不詳

一冠　壹頭　二重箱に入（內箱梨子地蓋に雁高蒔繪付 外箱桐纓副二重箱に入）

一笏　一握　二重箱に入（內箱青貝 外箱桐）

一石帶　一筋　桐箱に入

一黑袍　一領　地古米織時代破損　二重箱に入（內箱蠟色金粉蒔繪葵紋付 外箱桐）

一小袖　一枚　地羽二重皮色唐草絞り

一白小袖　一枚　地羽二重　二重桐箱に入（內箱蠟色金蒔繪葵紋付 右小袖共に入組元包に添）

一小袖　一枚　籃地羽二重葵紋付寶盡し小紋

一小袴　一具　赤地絹黃縞

一表袴　一具　白地生純子
一冬裾　一條　黑地古米織時代破損上黑袍箱に入組
一夏單　一枚　地綾柿色
一冬胴服　一枚　地生綾柿色
一夏半臂　一領　黑地古米織
一冬下襲　一枚　白地浮織
一襪　一双　白地浮織
　以上藍地小袖より此迄共に二重箱に入組
一皮沓　一双　但箱入
以上東照大神着用物十六種從二位權大納言德川賴宣殿寄附の由年月不詳
一南蠻鉄甲冑　銃丸の跡ある由　一副　無銘　二重箱に入　内箱蠟色金粉蒔繪葵紋付 外箱桐
一甲冑　桐紋付秀吉公より進せられしか　一副
　甲茂右衛門作威毛糸五色 冑十六間桐紋付前立物金燒付鍬形　但甲桐箱に入冑桐箱二重に入
一鉄冑　蒸し關ヶ原御陣に召させられし者　一頭　無銘　二重箱に入　内箱蠟色金粉蒔繪葵紋付 外箱桐
一東照大神自用鞍　一脊
　葵紋付　天正十七年月日於駿州井關作　但二重箱に入　内箱蠟色金粉にて銘あり 外箱黑
一仝上　一脊

金覆輪金銀切入　天正十六年二月日井關作　但二重箱に入　内箱蠟色金粉にて銘あり 外箱黑

一仝鐙　一雙　無銘　三葉葵紋付　内箱蠟色 外箱黑

一仝上　一雙　無銘金銀切入二重箱に入　内箱蠟色金粉にて銘あり 外箱黑

一寶螺　一羽　萠黄緞子袋に入　二重箱に入

一弓　九張　二重箱に入内箱金梨子地

一矢　二百十六本　二重箱に入内箱金梨子地

以上武器十種從二位權大納言德川賴宣殿寄附の由年月不詳

一太刀　一口

銘表左近將監景依裏正應二十一月　日　長二尺四寸七分反九分直刄裏表棒樋あり

一總金所赤銅色繪桐塔目貫桐塔　二双　一鉏金着

一切羽金燒付赤銅さゝら　一鞘梨地菊桐々蒔繪

一柄鞘卷糸茶卷下紺地金襴　一袋紺地錦

但桐箱に入

一太刀　一口

銘光忠　長二尺四寸三分半反一寸直刄

一總金所赤銅色繪桐塔目貫桐塔　三双　一鉏金着

一切羽金無垢赤銅さゝら　一鞘梨子地桐塔蒔繪

一柄鞘巻糸茶巻下金襴　　一袋紺地錦
　　但桐箱に入
一太刀　　一口
　銘表伯耆大原眞守裏腰樋梵字彫あり　長二尺四寸七分反八分直双
一總金所赤銅無紋目貫丸に梶葉二双　　一鈕四分一
一切羽二枚金無垢緣下二枚燒付赤銅さゝら　　一鞘梨子地無紋
一柄鞘巻糸茶巻下黒地金襴　　一袋紺地錦
　　但桐箱に入
一太刀　　一口
　銘守家　長二尺三寸七分半反一寸直双表腰樋あり
一總金所赤銅色繪葵紋目貫葵紋三双　　一鈕金着
一切羽金着赤銅さゝら　　一鞘梨子地葵紋蒔繪金具
一柄鞘巻糸茶巻下紺地金襴　　一袋紺地錦
　　但桐箱に入
一太刀　　一口
　銘安綱　長二尺六寸四分反八分半直双裏表樋あり
一總金所赤銅色繪葵紋目貫葵紋三双　　一鈕金着

一切羽金無垢赤銅さゝら　一鞘梨子地葵紋蒔繪
一柄鞘卷糸茶卷下黒地金襴　一袋紺地錦
但桐箱に入
以上景依太刀より安綱太刀迄寄附年月不詳
一太刀　一口
銘信國　長二尺三寸九分半反七分直刄
一總金所赤銅色繪葵紋目貫葵紋三双　一鉏金無垢
一切羽金無垢赤銅さゝら　一鞘梨子地葵紋蒔繪金具
一柄鞘卷糸紫卷下白地金入　一袋茶地金襴
但二重箱に入　内箱蠟色金粉蒔繪葵紋付裏梨子地 外箱桐
右元祿十二卯年十二月従三位中納言徳川綱敎殿寄附
一太刀　一口
銘信國　長二尺三寸五分反三分餘直刄裏表棒樋あり　但桐箱に入
右正徳五未年四月贈正一位太政大臣徳川吉宗殿寄附
一太刀　一口
銘國時　長二尺一寸三分反六分直刄　但二重箱に入　内箱蠟色金粉蒔繪葵紋付 外箱桐
右享保六丑年三月贈正一位太政大臣徳川吉宗殿寄附

以上信國太刀より國時太刀迄四振分總金具併合壹箱に入　但赤銅色繪葵紋付　但切羽鉏左の件に付缺く

右明治十五年八月九日盜難に罹り該盜捕縛の後御下け渡し相成筋

一太刀　　一口

銘備前國眞長　　長二尺六寸一分反一寸一分半直双

一總金所赤銅色繪葵紋目貫葵紋三双　　一鉏金無垢

一切羽金無垢赤銅さゝら　　一鞘梨子地葵紋蒔繪

一柄鞘卷糸紫卷下白地金襴　　一袋紫金襴

但二重箱に入　內箱蠟色金粉蒔繪葵紋付　外箱桐

右享保六丑年十月十七日將軍吉宗公より淺野壹岐守を以て御進納此時馬代も御進納あり

一太刀　　一口

銘備前州長船守行　　長二尺三寸六分反七分直双

一總金所赤銅色繪葵紋目貫葵紋三双　　一鉏金無垢

一切羽金無垢赤銅さゝら　　一鞘梨子地葵紋蒔繪金具

一柄鞘卷糸紫卷下白地金入　　一袋金襴

但二重箱に入　內箱蠟色金粉蒔繪紋付裏梨子地　外箱桐

右享保三戌年四月從二位大納言德川宗直殿寄附

一太刀　　一口

銘肥前國源宗次　　長二尺三寸反四分半直刄

一總金所赤銅色繪葵紋目貫葵紋三双　　一鈕金無垢

一切羽金無垢赤銅さゝら　　一鞘梨子地葵紋蒔繪金具

一柄鞘卷糸紫卷下白地金入　　一袋紺地金襴

但二重箱に入　内箱蠟色金粉蒔繪紋付裏梨子地 外箱桐

右寶暦八寅年八月從三位中納言徳川宗將殿寄附

一太刀

銘表肥前國住武藏大椽藤原忠廣裏寛永八年八月日　　長二尺五寸四分反七分直刄

一總金所赤銅色繪葵紋目貫葵紋三双　　一鈕金無垢

一切羽金無垢赤銅さゝら　　一鞘梨子地葵紋蒔繪金具

一柄鞘卷糸茶卷下紺地金入　　一袋錦

但桐箱に入

右明和三戌年四月從三位中納言徳川重倫殿寄附

一太刀

銘平鎮高　　長二尺三寸五分反八分直刄裏表樋あり　但二重箱に入　内箱蠟色金粉蒔繪葵紋付 裏梨子地外箱桐

右明和三戌年四月從三位中納言徳川重倫殿寄附

一太刀

銘平安城住正俊　長二尺四寸九分反八分亂双

一總金所赤銅色繪葵紋目貫葵紋三双　一鈕金無垢

一切羽金無垢赤銅さゝら　一鞘梨子地葵蒔繪金具

一柄鞘卷糸紫卷下白地金入　一袋紺地金襴

但二重箱に入　内箱蠟色金粉蒔繪葵紋付裏梨子地　外箱桐

右寛政二戌年十一月從一位大納言德川治寶殿寄附

一太刀　一口

銘備前長船祐定　長二尺二寸五分反五分亂双

一總金所赤銅色繪葵紋目貫葵紋三双　一鈕金無垢

一切羽金無垢赤銅さゝら　一鞘梨子地葵紋蒔繪

一柄鞘卷糸茶卷下紺地金入　一袋錦

但二重箱に入　内箱蠟色金粉蒔繪葵紋付　外箱桐

右文化十一戌年十一月從一位大納言德川治寶殿寄附

一太刀

銘肥前國住播磨大椽藤原國忠　長二尺三寸二分反六分亂双

一總金所赤銅色繪葵紋目貫葵紋三双　一鈕金

一切羽金赤銅さゝら　一鞘梨子地葵紋蒔繪金具

一柄鞘卷糸紫卷下金襴　一袋金襴

但二重箱に入（内箱蠟色金粉蒔繪葵紋付裏梨子地 外箱桐）

右文政八酉年四月從二位大納言德川齋順殿寄附

一太刀　一口

銘筑前住源信國吉貞　長二尺二寸八分反五分亂刃

一總金所赤銅色繪葵紋目貫葵紋三双（紀州住金原直貞作）　一鉏金着

一切羽金着赤銅さゝら　一鞘梨子地葵紋蒔繪金具

一柄鞘卷糸紫卷下金襴　一袋金襴

但二重桐箱入

右嘉永元申年四月從二位大納言德川齊彊殿寄附

一太刀　一口

銘丹波守吉道　長二尺二寸四分餘反四分餘

一總金所赤銅色繪葵紋目貫葵紋三双（紀州住金原直道作）　一鉏金着

一切羽金着赤銅さゝら　一鞘梨子地葵紋蒔繪金具

一柄鞘卷糸紫卷下白地金襴　一袋金襴

但二重桐箱に入

右文久三亥年四月正二位德川茂承殿寄附

一太刀　一口
銘表一閑亭龍子裏文政九年十一月　長二尺三分反五分直刄
一總金所赤銅色繪葵紋目貫葵紋三双　紀州住金原直道作　一鈕金着
一切羽金着赤銅さゝら　一鞘梨子地葵紋蒔繪金具
一柄鞘卷糸茶卷下紺地金襴　一裂錦
但二重箱に入
右慶應元丑年四月正二位德川茂承殿寄附
一甲冑　無銘　甲威糸茶色　冑六間前立物金燒付裏白　一副　但二重桐箱に入　前立物蠟色葵紋付箱に入
一十六間冑　一頭　無銘黑箱に入
一桑鞍　一脊　無銘葵紋付二重桐箱に入
一海老蒔繪鞍　一脊　燕笄花押彫あり二重箱に入
一海老蒔繪鐙　無銘二重箱に入
一矢　一手　白木箱に入
一寶螺　一羽　三重箱に入　內箱引出し錠前付　中箱蠟色金粉蒔繪葵紋付外箱桐
以上武器七種明治四年五月正二位德川茂承殿寄附
一小袖　一枚　白綾地葵紋付箱に入
一能狩衣　一領

萠黄繻子金糸葵紋織入二重箱に入　内箱蠟色外箱桐以下二品入組

一半臂　一枚　唐織

一腰帶　一筋　白綾地葵紋付

一花山茶壺　一口

口徑り四寸三分燒唐物口覆輪金桐箱に入　但二重箱に入

一楊柳茶壺　一口

口徑り三寸八分燒朝鮮口覆輪金桐箱に入　但二重籍に入

一小面茶壺　一口

口徑り三寸八分燒朝鮮口覆縷金桐箱に入　但同上

一佐藤茶壺　一口

口徑り四寸三分燒唐物口覆縷金桐箱に入　但右同斷

以上八種明治四年五月正二位德川茂承殿寄附

一黑珊瑚置物　一盃　鉢瑠璃色銀岩添白木箱に入寄附幷年月不詳

右之通

右は維新後縣社に歸し百事減略無人神事保管も屆きかたく度々盜災に罹りしを以て當分德義社に保管之事請願之際提出したる者也之に由て觀れは祖公外記々する處の御品なし疇昔は他人敢て窺ひ得難きの寶器なれは記中の云々或は誤り傳へしにもあるへきか

一明治八年四月　當公より御藏本の內左の書籍を　御宮へ御奉納ありたり併て爰に記し參考に備ふ

一祖公外記附錄に曰く　御宮の神庫には　神祖之御着具二領納め有之內一領は秀吉公より被進にて桐紋付一領は御召領にて鉄砲丸痕有之由御胄二領有之內棠之御胄は關ヶ原御陣に被爲召候由御髪毛は御葛籠に納め御櫛道具は幾品も滿紙に包み有之又二條の御城にて被爲召御晴着の御小袖は裏表共加賀絹裏淺黃表淺黃返し御紋付（社司遊佐保に質すに御髪毛御櫛具等更になしと云ふ

書籍目錄

續古事談	四冊	江談抄	三冊
藤葉集	六冊	倭姬世記	一冊
瀧尻王子和歌會	一冊	藤白王子和歌會	一冊
文德實錄	五冊	續日本記	四十冊
西宮記	廿二冊	宵栢集	十冊
下官抄	九冊	西公談抄	一冊
梁塵秘抄	一冊	云々集	一冊
陸奥話記	一冊二部	新宮歌合	一冊
後鳥羽院御口傳	一冊	長門住吉社和歌	一冊
雜題百首	一冊	雲客補任	五冊
楓葉集	十冊	安古繭輔口傳	二冊
室町殿日記（猶〔楢カ〕）村長敎撰	十五冊	日次記	五十冊

園太暦	三十七冊	元就集	一冊
俊成女集	一冊	麗花集	四冊
濱中々納言	四冊	七玉集	一冊
更科之記	二冊	李花集	十冊
閑谷集	五冊	古今大歌所抄	十冊
二條院讃岐集	一冊	將軍家常德院歌合	一冊
菅家万葉	二冊	式子内親王集	一冊
一字抄	三冊	散木奇歌集	三冊
梅花無盡藏	五冊	朝野群載	廿一冊
台記	十三冊	台別記	八冊

右は明治之初　當公より御寄附也

徳川家系圖　　當代記

武德大成記　　紅葉山八講記

右四部も明治六年十月御寄附之由也

神領及御靈屋料

按に　神領一千石御寄附は雲蓋院舊記の如く寛永十三年にして元和御切米終身錄記する處は其前則御宮御建立翌年より寛政元年迄の事と知らる而て同年以後寛永十二年迄は如何の事なりしや詳ならず且天曜寺社僧坊も元和七年より追々造立其所領なかるへからさるも元和御切米終身錄所見なし數百年の往事今知るに由なし唯舊記の存するを揭け沿革の一端を示す

當時存在の大相院（今雲蓋院と號す）に就て質すに寛永十三年以前の事詳ならす

一元和御切米終身鎌に

元和八戌より 和歌 神主

一八石

元和九亥より左馬と名前出る寛永元子より上り死失不知 和歌 禰宜二人

一六石

寛永元子より上る死失不知 同 神子

一三石

仝上

元和九亥新規 三池坊

一四石

仝上

承應二巳新規

一二人扶持 御蔵屋掃除 和合院預り 出家一人

天和二戌より上る

一四石 和合院預り 出家一人

天和元酉より御佛供料廿石の内より相渡候筈に付上る

紀勢御領分村名帳に
高千〇三十〇石六斗〇三合　御神領
内　高二百廿石一斗六升九合　海士郡黒田村
仝二百八十五石九斗一升二合　仝　小南村
仝二百九石二斗七合　仝　小松原村
仝百廿六石八升二合　仝　梅田村
仝百八十九石二斗三升三合　仝　下村
一明治三年調書に
一高千二石　雲蓋院
御代々樣方
一米五十俵　清溪院樣御靈屋料
一仝上　高林院樣同斷
一仝上　深覺院樣同斷
一仝上　大慧院樣同斷
一仝上　菩提心院樣同斷
一仝上　觀自在院樣同斷
一仝上　香嚴院樣同斷

一仝上　舜恭院樣同斷

一仝上　顯龍院樣同斷

一仝上　憲章院樣同斷

御簾中樣方

一米十俵　淨眼院樣御靈屋料

一仝上　明脫院樣同斷

一仝上　貞恭院樣同斷

一仝十五俵　鶴樹院樣同斷

一仝十俵　觀如院樣同斷

一銀三枚　寶池院樣同斷

一仝上　一生院樣同斷

一銀三枚　觀達院樣同斷

一仝上　俊岳院樣同斷

一仝上　芳權院樣御佛供

一仝上　永隆院樣同斷

一仝上　清信院樣同斷

一仝上　澄清院樣同斷

一仝上　榮恭院様同斷

●一銀廿枚　南龍院様同斷

●一仝五枚　御靈屋之儀重立相勤候に付　壽門院へ被下

●一同百五拾目　御靈屋銅籠常夜燈料

一同十六兩　銀二枚ミ二歩減し　大相院へ被下

●一同六枚　和歌浦六ヶ坊勤行料

一米十二石　南龍院様御靈屋付僧二人飯料給米

一銀十八枚　和歌浦六ヶ坊勤行料

一同五枚　壽門院勤行料

公儀御代々様

一銀五枚　大猷院様御靈屋料

一仝上　嚴有院様同斷

一仝上　常憲院様同斷

一仝上　俊明院様同斷

一仝上　温恭院様同斷

一仝三枚　孝恭院様同斷

高千石
米十二石
米五百五十五俵
銀五貫三百十五匁八分
合

按に 南龍公御佛供料銀廿枚初点印の四項は天保二卯年二月同御靈屋落成之時 舜恭公御召を以て御内々御寄附出銀の儀は御仕入方へ命せられ年々盆暮兩度に雲蓋院へ渡したる旨御仕入方大帳に記載あり後天保十一子年三月該御靈屋御修繕及ひ右四項共爾後御勘定奉行負担に改め御靈屋地圖宮殿彩色數卷共御仕入方より引渡す

御祠堂金

妙操院様御牌前

一白銀百枚 金五十兩
先達て銀四貫目御寄附之處文化八未年十月銀三百目増合銀百枚及ひ金五十兩御寄附

法成院殿祠堂金

一金五十兩
文化九申年十月位牌御安置に付御寄附 法成院殿は菩提心公之御部屋也

如電院殿同斷 觀自在公御子

一金百兩
先達て金八十兩御寄附文化十酉年十二月金廿兩下附合金百兩御寄附

聖聰院様 菩提心公御女 尾張中將治行卿御簾中
壽光院殿 同上 松平加賀守室
光安院殿 同上 松平越前守室
壽德院殿 菩提心公御子 松平左京大夫賴謙君

一金三百五十兩

厚德院殿 同 阿部豐後守正由
遊心院殿 同 松平下總守忠和
嚴淨土院 同 三浦長門守爲脩

右文化十一戌年六月永代御祠堂金として五十兩つゝ御寄附

一金二百兩

覺明院殿 觀自在公御女實左近將監樣御子 松平左京大夫樣へ御許嫁
緣覺院殿 同御子 御流產
青樹院殿 同
幼壽院殿 同

右文化十三亥年二月永代御祠堂金として五十兩つゝ御寄附

一金五百兩

妙泰院殿 觀自在公御女 錯姬君
知幼院殿 同同 鐵姬君
春窓院殿 同同 銈姬君
空如院殿 同御子 雅之助君
心蓮院殿 同御女 松平加賀守嫡敎千代室

右文化十二亥年二月永代御祠堂金として百兩つゝ御寄附

一金百兩

葆光院殿 菩提心公御子 修理大夫賴興

右文政八酉年五月御位牌御安置に付御祠堂金として五十兩文政十亥年三月五十兩都合百兩御寄附

一金五十兩　　　　觀妙院 同同安藤順輔

右文政八酉年二月位牌御納に付祠堂金として御寄附

一金百兩　　　　轉心院殿 觀自在公御女 松平相模守治道室

右文政九戌年十月右同斷

一金五十兩　　　　勇心院殿 菩提心公御子 安藤右近將監學文殿

右文政十亥年三月御牌前永代祠堂金として御寄附

雲蓋院御靈屋

從前之事詳ならされ共　顯龍公の時文政十三寅年三月の比より大に造營を加へられ天保二卯年正月落成左之通り布達せらる是　舜恭老公特に旨ありて工事皆御仕入方にて擔任すといふ

天保二卯年正月廿日布達

和歌　南龍院樣御靈屋思召にて此度新規御造營被仰付　高林院樣御初　御家父樣方御靈屋并御裏方御靈屋等夫々御修復被仰付候御安置御場所御相殿之儀は是又思召にて左之通御改被遊候事

南龍院樣

右御靈屋新規御造營被　仰付候事

大慧院樣　　　菩提心院樣

右御靈屋是迄之通候事

是迄　貞恭院樣　俊岳院樣御靈屋へ

高林院様　觀自在院様　深覺院様　香嚴院様

右之通御安置御相殿之事

是迄　高林院様　觀自在院様御靈屋へ

貞恭院様　俊岳院様　寶池院様　一生院様　觀達院様

右御順之儀は

御中央貞恭院様　御左之方俊岳院様

御右之方　寶池院様　一生院様　觀達院様

是迄深覺院様　香嚴院様御靈屋へ

淨眼院様　明脱院様　永隆院様　淸信院様　澄淸院様

右御順之儀は

御中央（淨眼院様 明脱院様）　御左之方（永隆院様 淸信院様）　御右之方澄淸院様

右之通御安置御相殿右二ヶ所御靈屋を向後御裏方御靈屋と唱可申事

是迄淨眼院様明脱院様初御位牌御安置の御場所へ

高岳院様　靜證院様　孝順院様　庵岳院様　靈光院様

圓妙院様　泰良院様　光安院様　慈泉院様　妙泰院様

轉心院様　知幼院様　春窓院様　空如院様　心蓮院様

靈應院様　示幻院様　智境院様　如幻院様　妙智院様

右之通御安置御相殿向後　御方々樣御位牌所と唱可申候事

一續風土記に曰く　右御靈屋は南面西上にして本堂の西にあり「南龍公を西の端とし其東は高林公又其東は大慧公とす」總門あり（四足門也）　南龍公御靈屋本は長保寺に在すを以て雲蓋院にては御廟制簡易なりしに近年今の　亞相老公規畫を改め別に新廟を造營し給ひ總門の內別に唐門瑞籬を作り殿宇墻壁彫鏤刻畫華彩丹漆壯麗を極めさせられ銅葉石葉廚庭に相列れり他公は又別に一唐門の內に在して其廚制は舊に從ひ給ふ

清溪公御靈屋

南龍公御靈屋の西に在して別に一區域をなし其間菅神社の境內を隔たり唐門瑞籬御供所等あり廚中銅花瓶一對幷に銅藥一對は　有德大君獻し給ふ所也又牡丹花を作る銅の角瓫あり　香嚴公作らせ給ふ所也瓫の外面に御自撰文を刻むと云々

一右以後御安置の尊牌左の如し

弘化二巳年八月廿六日

一鶴樹院樣雲蓋院御靈屋は　明脫院樣御次へ御位牌御安置の筈候事

同三午年七月五日

一顯龍院樣御靈屋は　大慧院樣と御相殿之筈被　仰出候　御尊牌御安置振は　高林院樣御初御四方樣御靈屋の御振に　御內陣少々出張　大慧院樣御宮殿を御修復取計　御二方樣御安置之御積に候事

嘉永二酉年三月晦日

一憲章院樣雲蓋院御靈屋は　菩提心院樣と御相殿之筈候事

同三戌年正月十八日
一榮恭院様御位牌雲蓋院　澄清院様御次へ御安置被遊候事
一嘉永六丑年　舜恭公薨逝雲蓋院御靈屋之事公文傳らされ共　清溪公と御合殿なり
一嘉永六丑年三月十六日
一觀如院様雲蓋院御靈屋は　鶴樹院様御次へ御位牌御安置の筈候事

和合院御靈屋

雲蓋院寺中和合院には　幕府上野方の御靈屋ありて大智寺には芝方御靈屋を御造營恰も江戸兩山に擬せられたり當院御靈屋の事前記縁起にも詳記なく他に筆記存せされは詳なるを知り難し續風土記々載する處左の如し

大猷大君　俊明大君　御相殿
嚴有大君　孝恭大君　御相殿
常憲大君　有德大君　御相殿

右　東照宮御鳥居の東にあり總門唐門瑞籬御供所等あり

大相院廟墓

一雲蓋院和合院には御靈屋御靈牌のみにて御廟墓なし唯大相院に左の御廟墓あり
妙智院殿鮮顔法爾大童子　觀自在公御四男　天明二寅年九月廿七日
如幻院殿性眞覺明大童子　御同公御子　寛政八辰年四月廿二日
靈應院殿寶鑒妙恵大童子　舜恭公御子　寛政十二申年七月十四日
示幻院殿如空電光大童子　同上　文化十一戌年正月八日

清凉院殿約如明容善童子　憲章公御子御遺腹　嘉永二酉年五月廿五日

一右從前の御佛供料不詳明治三午年五月以來左の如く定る

妙智院殿
如幻院殿　御佛供料年々金百疋つゝ
清凉院殿

靈應院殿示幻院殿は御祠堂金七十三兩御納め有之を以て別段年々御附屆無之

一妙智院殿初五廟明治八年七月に至り從來廟墓諸方に分散の處營繕及ひ掃除等行屆かせられす追々荒廢に歸するの旨を以て報恩寺一寺へ御取集めとの事にて外寺々の分と共に八月二日より報恩寺へ御改葬あり同寺の條に詳なり

東照宮御祭禮

御祭禮は毎歲四月十七日九月十七日にして四月十七日最大祭なり早朝神前にて舞樂あり田樂あり御在國には一の御行列にて御參拜被遊畢て神輿遊觀所に渡御あり遊觀所俗に御旅さいふは御本社の南六丁許出島浦の洲嶼にあり此所に假御殿を設け其左右に　君上の御棧敷より有司の棧敷諸士一統の棧敷百間を延連ね松葉を以て飾りをなす依て松葉棧敷と唱ふ（貞享五辰年二月より和歌御祭禮の棧敷初る）渡御ありて遊覽所にて相撲畢りて還御なり還御の時所作ある役々藝盡しをして還る又其時和歌浦に樓船御關と稱す則御座船なりを泛へて船歌を發し皷を打て操とる海陸調を合せて響き滄溟に渡り龍神も感應すへくやあらん是四月十七日の事にして此日城中諸局初總体休務唯御留守居番頭御留守居番一同當直城中を守り市在の農商皆業を廢し我劣らしと和歌浦に蝟集す和歌祭の名は古く四方

に轟きあれは近國遠在より參觀群集亦夥しく實に立錐の地なき迄に雜沓を極む然共　君上親臨の國祭なれは紀律嚴肅毫も紛擾を見す唯々踊躍歡喜を盡して萬民終歲の辛苦を洗滌するものゝ如く思はれたり神輿渡御の式左の如しといへり

●根來頭　●根來百人者　●榊　棒振
●獅子頭　●田樂　●御旗鉾七本　●神巫
長柄槍五十本人數合百五十人　●長刀振　●赤母衣七人　●白母衣七人
牙僧五人　●蓮尺五人　警固廿四人々數合百五十人　●雜賀踊五十人
●棒振六人　●貝吹二人　笛吹三人　●太皷四人
●鉦三人　受棒四人　警固三十一人々數合百八十人　●唐船人數合七十人
●山伏三十五人　織鉾八人　●塩汲五十人囃方あり人數合百五十人　高砂屋臺
山路草刈人數合百五十人　餅花踊臼引手合餅搗囃方あり人數合百人　唐人五十人
鷺山　雪山順禮踊囃方あり人數合百五十人　福祿壽　花籠人數合三十三人
立花踊人數合四十二人　女人形人數廿四人　石引五十二人　沈香焚
土俵空穗　矢籠　鉄砲人數合三十五人　●猿舞九疋
蜘蛛舞七人囃方あり　若衆十三人　女形十六人　傀儡師囃方あり人數五十人
●假面被七十九人　●鎧武者三十人　●町大年寄　●神馬三疋

●御鉾三本　●御長柄三筋　御長刀三振　●御弓三張
●御鉄砲三丁　●道樂樂人二十人 人數合四十八人　●小童子四人　●中童子六人
●大童子十六人　●神職數人神寶持　●神主騎馬　●御輿白丁三十人
●御輿白丁三十人　●御輿白丁三十人　●雲蓋院僧正轅　●僧衆十人騎馬
●町奉行　●與力同心　●三道具

右御祭禮元和年中より始り右の如くの式なりしに　神幸の道路に餘り人數混雜して式の如く諸事行はれかたかりけれは寛文六年命ありて人數を減省せらる夫より株にて省くあり又株のまゝにて唯人數を省くもあり

又九月十七日の御神事の時御鳥居前にて散樂（サルガク）あり此事　御當家に限たる御式にて能太夫佛原を舞しなり其初は　君侯親く舞せ給ひしとも云るか慥ならす散樂の事も諸式減少の時より罷しとなん佛原を舞せ給ふ御由緒は　東照宮駿府御在城の時織田侯有樂齋江戸參勤の途次　東照宮の　御機嫌を伺ひしに御酒讌あり　龍祖御幼年にて侍座し給ひしかは舞を以て酒を勸めよとの仰ありて　龍祖舞せ給ふ時織田侯佛原を所望ありしに未た習ひ給はすと仰ありしに　東照公御殘念に思召直ちに習ひ給ふへきよし仰せて頓て御狩に成らせ給ひぬ御跡にて佛原を頻りに習はせ給ひしか此時、東照公は御途より御不例にて歸御まし〳〵御平癒の上御舞の熟させ給ふを御覽せらるへしと仰られしに終に薨去ありしかは常に此事を御殘多く思召けるより御祭禮に此能を御催し遊はされし也とそ

一渡御の式寛文六年減省せられしとは何れを減省にや詳ならされとも寶庫に藏せらるゝ和歌御祭禮の圖に據れは前記中◉印の他と見ゑす凡て人數の如きも節約に至りしならんか信元治元子年若山に在て四月十七日に親しく拜觀を得たり三十五六年前の事朧氣なから記憶の概略を記して時の景狀を示さんとす

棧敷は御達道より御假殿迄七八町許の兩側へ寸地もなく建列ね間日一間より二三間つゝ葭簀にて內仕切りをなし上に笘を葺き下に筵を敷前に低き竹矢來を結ひ其上下一面に松の折枝を結ひつけたり役々の棧敷は夫々幕引廻しぬ在町他國の者は各親戚知因にたより一間何分との料を投して借受るよし其因みなき者は彼處此處に立見群集せり

一渡御前には兩側四五間每に警固の同心廡上下着にて出往來を止む唯順禮のみは通行を許せりされは態々順禮風を裝ひ赤白剝いれ文字書たる袖なし單衣を被り徘徊の者多きを見たり或斯なせは其年の惡事災厄を免るとも言合へりと此順禮衣を損料もて貸渡すを其日の業となすも有と云

一根來者百人は總髮帶刀筋骨逞しく見ゆ中には幼年い者も見ゑたり

一乙女といふは神子池に住する巫女也片はづしに髮を結ひ萌黃の總模樣の上に薄絹の長きを被れり歸途には白綸子の模樣に着替へたり

一長刀振は四五人にて夫々手代りあり研澄したる刄先を手際に振り廻すは江戸祭りの長柄振に均し

一赤母衣は十二三歲許の小童也色とりたる丸巾の縮緬四五筋を襷にかけ美麗に着飾り前に角力の廻しの如く天鵞絨猩々緋の地へ金糸の高縫したるを垂たり附き從ふ床机持は五六歲の兒に同しく美麗の衣裳を着飾らせ江戸山王祭の如し餅花踊り餅搗抔の衣裳皆同し

一白母衣は竹にて母衣形の枠に白縮緬を覆ひ其巨大いふ計なし目方十四五貫もあるへく身を折敷て橫さまに左右に振廻す也大

力にて手馴に非れは行ひかたしと此者十人許也
一連尺は女装の如く白粉をつけ巻物織物等を連尺に脊負ひ呉服商の如く出立し者也
一棒振は六名より多し鬼面を被り拍子を揃へて振行さま珍らし腰には勝れて太き丸くけ帯を廻し三尺許の烟草入に引臼の根付
抔さけたり
一愛棒亦同し出立にて唯舞さま手繁く委曲なり
一龍頭鷁首船には御水主舟歌謡ひつゝ引ゆく
一餅花踊は十二三歳い少女踊の手眞似いみ手合せ二人は女装したる男子にて江戸の拙踊に類す此一段は　舜恭老公の時より始
りしといへり
一百面被りは和戴村の隈り家筋の者より出役の由男女老幼天龍夜叉鬼神雑多の假面を着け杖をつき歡喜戯舞の体を装ふ蓋し四
夷百蠻帰化来服い意を表したるならん
一雑賀踊は交る〳〵片足を擧け竹のさゝらを摺りゆくなり鷺の森合戰に雑賀孫市の踊りに擬したるならん
一甲兵十人より多し雑賀崎より出役するといふ折々背旗を水車の如く振り廻すを務とす
一相撲は五六十人許なり多くは素人の如し黒縮緬の長羽織を着し美麗の廻しをしたる
一樂人は御宮にて奏樂せしまゝ供奉す道々も奏樂し一人毎に緋傘をかざゝしむ
一神主は束帯黒袍赤衛也　舜恭公より下賜のよし乗馬所の馬皮ひ馬具供に奴皆二千石以上無役の士より出役を例とす奴は全尻
頭よるゝ迄す板衣をかゝけ前に染分模様ある燕尾襟いものをたらし両手を振り足を揃へ掛聲をなしきほひ行なり
一騎馬い備業は内六坊外六坊の内也此馬奴亦千石以上無役の士より出役す若し僧誤て落馬の時は出役主より銀一枚の過料を徴
せらるゝよし
一根來頭二人町奉行一人御目付二人（以上布衣着）御代官地方手代町與力三人大年寄（以上麻上下着）供奉す
一歸御の節は都て逆に後列先に立て繰り出す所作の者渡御には粛々供奉すれとも歸御には各自其業を行しつゝ普く拝観の者に
示す
一御船紋彩丸は和歌浦に泛ひ渡御行列い太鼓の音調に合せ天下取た〳〵の囃子をなし御舟歌を謡て舞ひ廻くる也
一神輿渡御は四つ半比にして還御は八つ半時を過たり是日午時前より風強吹たれとも快晴なりしかは殊に賑はへり
一市中町々の木戸打切り戸々表を清め手水桶を飾り御先手物頭は同心を引率し打廻り御使番は火事具にて終日非常を警戒せり

一君上には大坂御守衞にて浪華に御在城なれは　御名代を遣はされ　御籬中の君一の御行列五時御供揃にて和歌御棧敷へ成らせ給ふ旨仰出されしが當曉に至り少しく御頭痛氣にて御延引さ仰出されたり

四月九月御祭典式

一每年四月御祭禮に付御祈禱之次第

四月朔日より十六日迄

御本地供修行次第

每日正午八つ時鳴鐘　雲蓋院僧正初六ヶ坊幷役僧總出勤

四智讃　　着座讃　　散花　　對揚　　諸天讃

此間僧正は御本地供修法之

十六日に至り御祈禱畢て　神輿移あり僧正と安田神主の兩名に限る

神職は僧侶に先立ち登山社人は獻供の擧をなし兼て準備畢て御石の間右座西側に扣居神主は左座東側に僧侶勤行中伺候讀經畢て神輿へ　神靈を奉遷す濟て退出暫時休憩五つ時　君上御參拜の觸込あり再ひ僧侶登山　御宮拜殿にて御待受け　御拜神酒御頂戴の式あり神主勤之次に田樂舞樂の式右畢て御退出引續き神職僧侶下山夫より　渡御

一每年九月十七日秋季御祭禮の次第

法華八講　　莊嚴等如例年

九月十六日午八時鳴鐘にて　本坊僧正初六ヶ坊幷役僧總出仕

入　堂　　　　　　磬賦堂達前
　　　　　　　　　講讀師登高座
磬二打　　唄師發音　　花籠を出す　　散花師
發　音　　同音にて行道匝
　　　講師表白神分勸請發願等
　　　　讀師揚經題　　講師卷釋
問答如常畢て講讀師降高座復本
右一の座より四の座まて內六ヶ坊の內勤之　五の座より六の座まて外六ヶ坊の內勤之
　七の座より八の座まて內六ヶ坊之內勤之
問者引字は　役僧交番勤之
十七日前四時
　　社人祭式
三日前より潔齋前日神前を裝飾し淸祓當日早朝祭主以下祭場參列
用意　手水の儀あり
　伶人參進の樂を奏す
先　祭主以下神殿に進み着座　座揖
次　祓詞　一統同音　再拜拍手　次　神饌を傳供す　此時奏樂

次　奉幣　　　次　祭主祝詞 兩段再拜拍子 一統平伏

次　巫女奏樂　　　次　退出 伶人退出の樂を奏す

暫くありて御拜 此時奏樂

次　田樂舞　　　次　舞樂 畢　　是より渡御式執行

正遷宮式

三日前宮殿を清潔に掃除し清水にて洗ひ拭ひ潮にて清むる事

關係の神職三日前より潔齋

祓戶神の籬を設く

正遷宮當日清祓執行式

先　手水の行事

次　本殿前にて祓所の前に着座

次　笏に玉串を持添立拜二段拍手蹲踞して謦蹕

祓戶神の御名を唱へて奉降畢て拍手立拜二段

次　祓詞　　　次　器物の祓 一切成就祓 三度　　玉串を持祓ふ

次　獻供　　　次　祝詞　　兩段再拜拍手

次　三種の祓　　次　中臣の祓　　次　一切成就祓

次　笏に玉串を持添立拜二段拍手蹲踞して謦蹕祓戶神奉送 立拜拍手

次　撤供　次　二拜　畢

維新後雲蓋院瓦解し記錄散逸傳はらす　御宮の方には固より記錄なし本記は當時關係せる古老より僅に聽得たる分なれは恐らく遺漏を免かれさるへし社人祭式は蓋し神道の式なるへし

一従來の祭儀大略前記の如くありしか維新改革にて明治二年九月の御祭典には左の旨　仰出されて爾來　御名代にて勤むる事となれり

今日　御社參不被遊　御名代被遣候に付御太刀御馬代目錄御献備の儀向後　御名代之仁相勤候筈雲蓋院へ申合置候事　九月十七日

又神佛混淆禁止の太政官令出しかは明治三年四月九日に至り左の旨雲蓋院初へ達せしめられ同年五月遂に雲蓋院の　御宮奉仕を免せられたり

一御祭禮に付　御參詣の節向後雲蓋院にて御休息無之事

一御祭禮に付雲蓋院僧正奉仕候へ共向後不及其儀同日僧体の者隨身御門内立入不相成候事

一御宮祭器是迄佛具取交相用候へ共當御祭禮より佛具不相用筈候事

右に付唯一の御祭式に改り來る十六日より安田能登へ當分祭主勤へく旨達せられたり

御神忌

一東照宮御遠忌御法會は國の大事將た其都度造營ありしならんも典儀初め記の存する者なし蓋し悉く恒例に依て大典擧行ありしか今其年度のみを揭く

五十回御忌　南龍公御代寛文六午年

百回御忌　有德公御代正德五未年五月十一日
百五十回御忌　觀自在公御代明和二酉年四月
二百回御忌　舜恭公御代文化十一戌年於雲蓋院御取越御法會あり御正當は來年也
二百五十回御忌　當公御代慶應元丑年四月六日正遷宮七日八日御法會十七日於神前御經開闔
此時　將軍征長の御進發　公には御後備にて江戸御發艦なり是天下騷擾の際なりき

御宮御靈屋御繕

御宮初御靈屋向時々御修造有之たる者と雖も記錄具らされは詳にするを得す唯筆記の存するに依れは左の如し

一元文二巳年四月三日和歌御宮木の華表を石の華表に御再建二月より御普請始る銘は祇園餘一書之
一文政十三寅閏三月廿四日　舜恭公顯龍公特旨により和歌　南龍公御靈屋御造營御仕入方へ被命翌天保二卯年正月落成
一天保四巳年正月　淸溪公御靈屋御修覆被　仰出二月二日御靈屋御安鎭同三日御開眼御供養あり去年御贈位に付てなり
一嘉永三戌年十月　舜恭公思召を以和歌御旅所々替被　仰付御道筋等營繕着手翌年四月九日落成同夕地鎭祭の式典擧行同年の御祭禮より右へ渡御有之是迄御召御關船始め出島浦へ廻りたる處同年より布引下へ相廻る
御旅所裏道へ石橋出來不老橋と唱ふ

一左の記は參考に不足なれ共偶々存するを以て附記す

文化の度二百回御神事の節

和歌御宮御上棟諸事覺

御本社御棟　三備

仝　御柱元　三備

王　女　三備

御拜殿御棟　三備

御唐門御棟　三備

塔之御堂　三備

一五十四　水形餅　一ッ三升取

一百六十二　九ッ居丸餅　一ッ五合取

一一石五斗　蒔餅　一升三十取

一五十四　柳樽　一樽に付二升五合入

一六ッ　瓶子　深さ二尺五寸大さ指渡し二尺一寸　金銀紙包口包錦紐

一五十四把　昆布　一五十四把　大根

一五貫四百目　干瓢　一十八膳　三方

一百六十二枚　三度土器　一十八對　銚子提子

一百九十五枚　銀紙
一五百八十五枚　色奉書
一五帖　高野紙
一五百七十目　眞綿
一三本　末廣扇
一廿三本　中啓
一一斗九升　幣玉米
一三反　清拭布
一五つ　大半切桶
一三つ　手桶
一五枚　地漉紙
一九十枚　薄縁
一廿五足　藺草履

一百九十五枚　金紙
一十八筋　下け帶
一五束　水引
一仝上　眞苧
一五十四本　上扇子
一三斗五升　散米
一二反　弓弦さらし
一十反　日の繩布
一二荷　荷桶
一三本　搔器
一三疊　疊
一百枚　筵

右
小買物方御出來筋
一十八　沓形餅臺　板兩面削長二尺巾一尺二寸側板せい二寸足高さ三寸
一十八　九つ居餅臺　一尺四寸四方其外右同斷

一十八　柳樽臺　長二尺巾一尺五寸其外右同斷

一六つ　瓶子臺　一尺四寸四方其外右同斷

一十八　昆布臺　長二尺巾一尺二寸其外右同斷

一十八　干瓢臺　右同斷

一十八　銚子提子臺　右同斷

一二張　弓矢　長一丈　二寸角　内弓二張　かぶら矢一本　かりまた矢一本

一一本　振幣串　長四尺三寸　一寸二分角

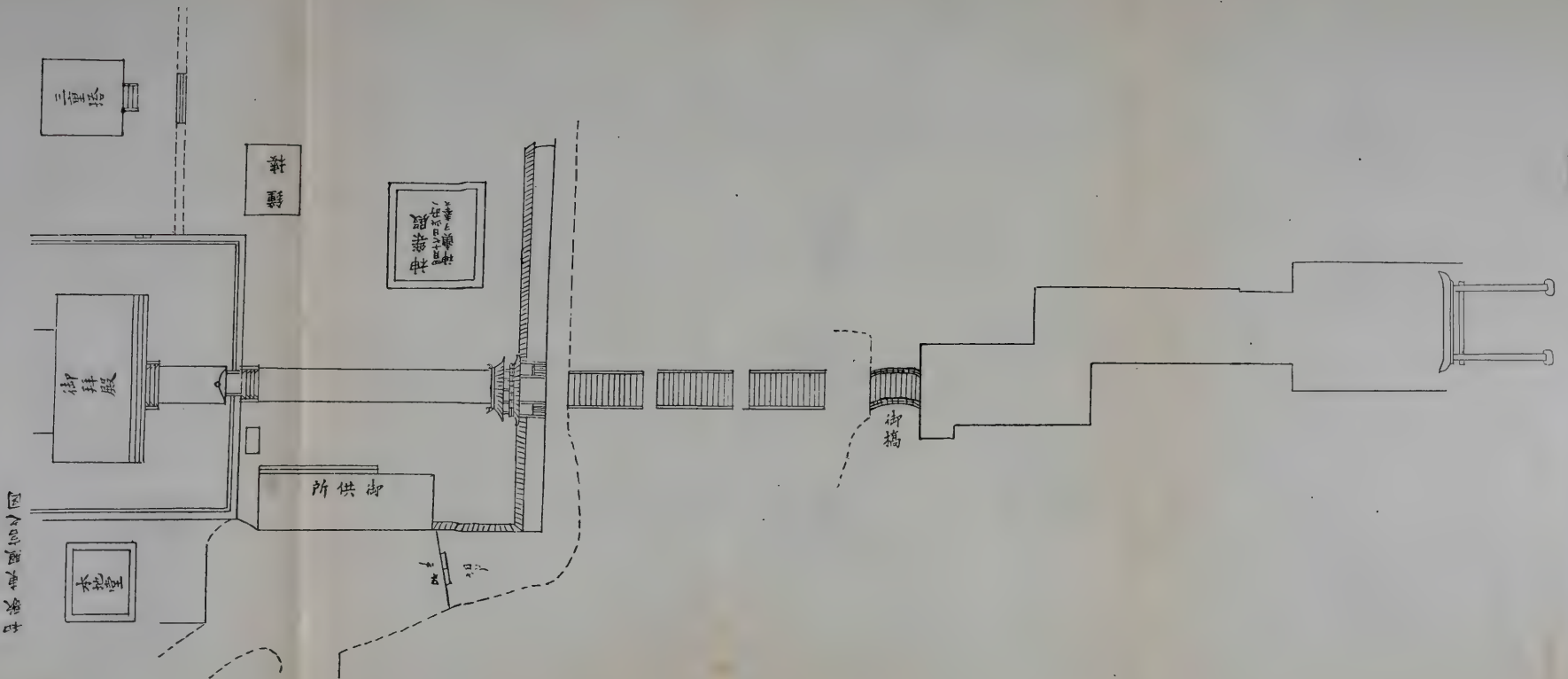
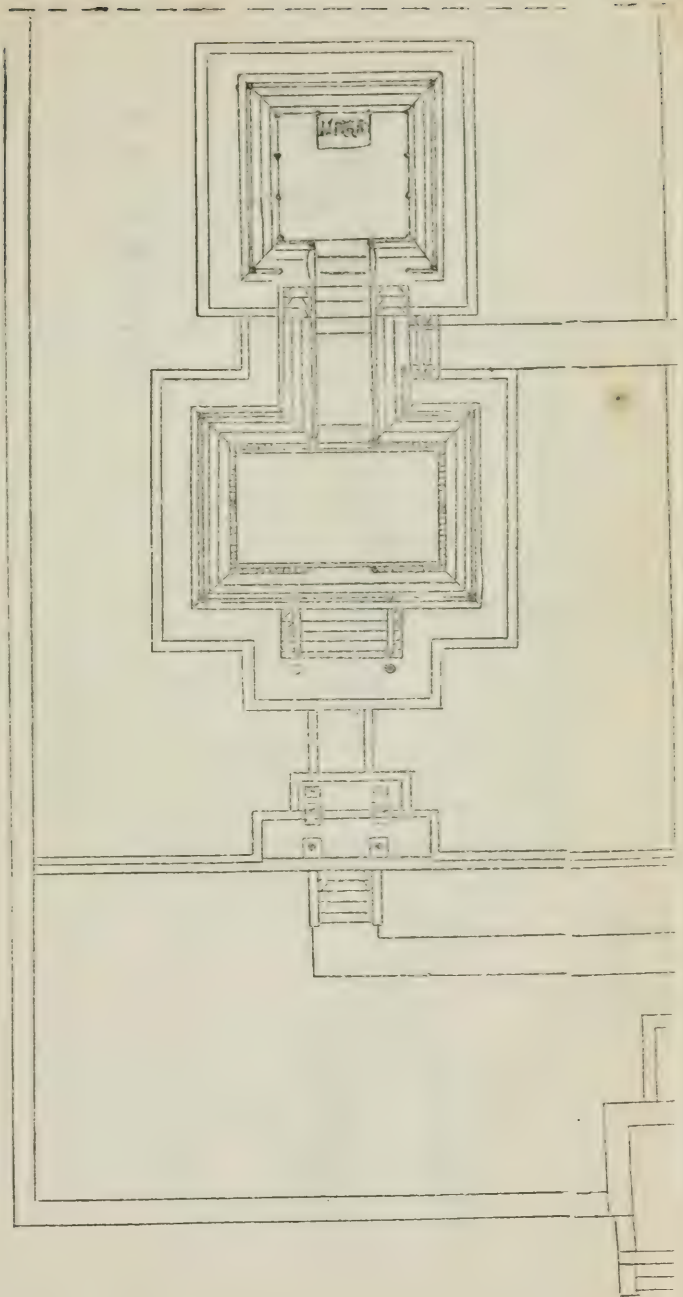
一十八本　幣串　内十二本長六尺　六本長八尺　一寸五分角

一一つ　散米箱　長内法二尺横内法一尺一寸高内法一尺一寸足高五寸丈夫にして張折
二本つゝ入兩端五寸つゝ延し

一六つ　槌　一六枚　音之板

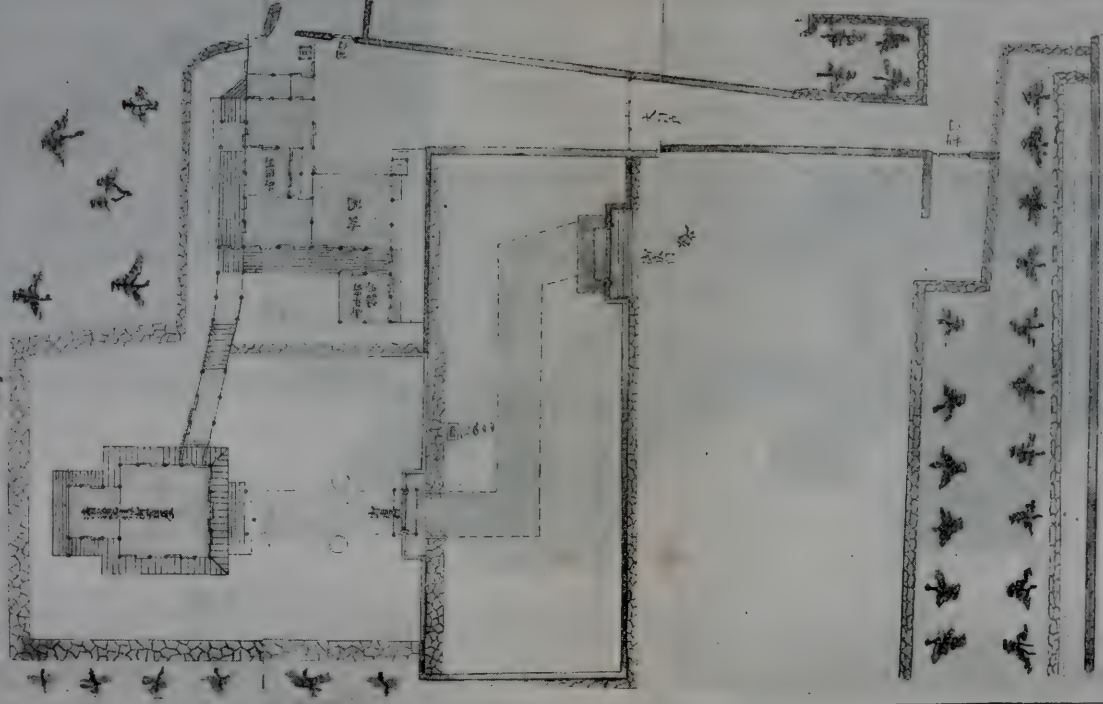
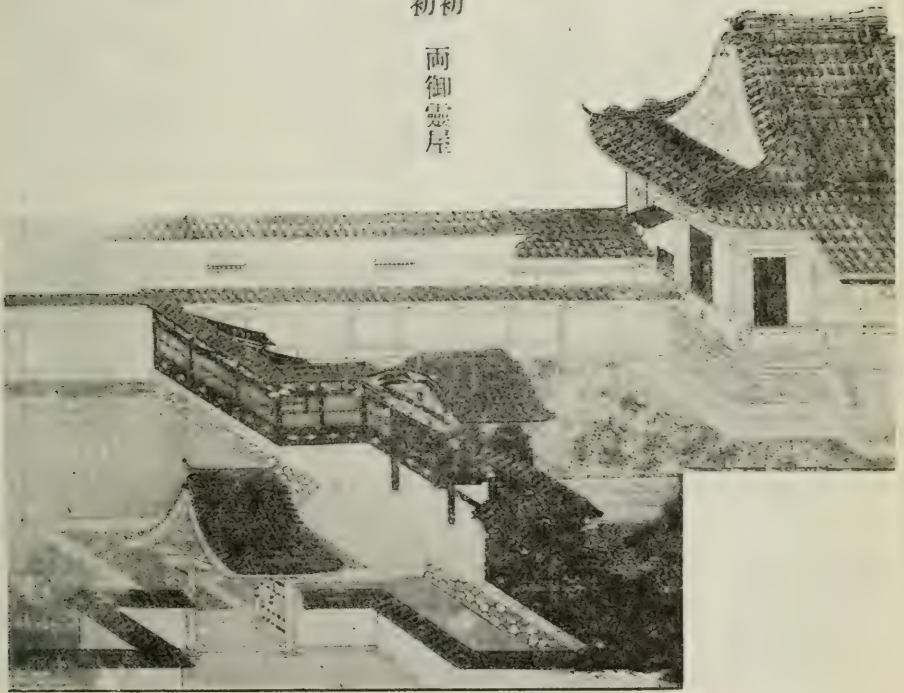
一二枚　裁板　一二本　定木

一三つ　御備棚長二間巾五尺

右十七口御上棟御入用に御座候御作事方御出來筋

和歌浦
東照宮
畧図
西
鐘楼
御手洗
朱色の部分ハ明治維新後
取毀チとなりたり

中禅東照宮之図

轉心院殿　観自在公御女松平相模守室
如幻院殿　同　御子
妙智院殿　御同断
右霊屋院殿御初御合殿ナレバ観自在公ノ御内ニ御安置ニテ表向ニ無之

和歌
北

雲蓋院
高林公御初
大慧公御初　両御霊屋

雲蓋院改革

一明治二巳年十二月朔日左之通命せらる明治政躰一變に依也

雲　蓋　院

此度藩知事御拜命御家祿十分の一と被　仰出候付万般適宜之御改革無之候はては何分御家算難相立候付甚御不快には　思召候へ共不被爲得止　御宗家御靈牌は御邸内へ御安置御手前　御靈牌は　御廟所有之御寺へ　御遷座可被遊旨被　仰出之

件之通に付其御寺に御安置之　御靈牌等　御遷座振等は追て可相達事

一同年十二月廿日和歌　南龍院樣御初御靈牌濱中長保寺へ　御遷座

一同三午年五月十六日和合院の御宗家御靈牌御邸内へ御安置依て左之通下賜

雲　蓋　院

金百兩

此度　御宗家且　御手前御代々樣御初　御靈牌御遷座相成候處是迄數年來無滯勤行被致候付被遣之

和　合　院

金二千疋

此度　御宗家御代々樣御靈牌御遷座相成候處是迄數年來右御用筋無滯相勤候付被遣之

雲蓋院々代　壽　門　院

金七兩二分

此度　御代々樣御初御靈牌御遷座相成候處是迄數年來右御用筋無滯相勤候付被遣之

一明治三午年五月廿三日左之通達す

雲　蓋　院

東照宮御祭典御改相成候付奉仕被成御免之
　御社領支配不及其儀事
　　十如院　　和合院　　王泉院　　寶藏院　　正法院　　大相院
　右同文
一雲蓋院初　御宮奉仕御免に相成候付ては追て御處置被　仰出候迄左頭書之通御藏米被下候事
　　三十俵　　　　　　　　　　　雲　蓋　院
　　十俵つゝ　　　　　　　　　　十如院初六ヶ坊へ
一明治三年年八月八日雲蓋院より左之通願出候付於家令所差支無之哉と民政局より談に付料簡無之
旨及答
　　　　　　　　　　　　　　　　雲　蓋　院
先般長保寺へ　御靈牌御遷座相成　御宮唯一之御祭典被　仰出御用一切無之御合力米被下置候
段誠に以難有依之大相院は　御廟幷御靈牌御安置有之候に付追て御處置被　仰出候迄（抜 拙カ）僧初
六ヶ坊一同右寺院へ引移御奉仕御回向申上度奉存候就ては跡寺院之儀不殘　御上へ差上度心得
に御座候間何卒御聞濟被成下候樣御評議奉願上候已上
　八　月
一明治三年年十二月太政官令により社寺領一般上地に付雲蓋院へ三十俵十如院初六ヶ坊へ十俵つゝ
廩米被下分二ヶ年一時に被下來未年より上け切の旨布達の事第五に記載す

南紀徳川史巻之百五十二

臣　堀内信編

社寺制第二

南龍公

和歌天満宮

名所圖會に曰く元和七年　國祖君當山に於て　東照宮の靈廟を創建なし給ふ砌り當社を以て地主とし更に神田を増加し給ふ

一元和御切米終身錄に

元和九亥新規

三　石　　　　　　　　　　　　　天神の神主

寛永元子より上る死失不知

一享保五子年五月廿日

後陽成院宸翰天満宮の神號御奉納となし御納めあり

按に天神社領は御宮由來畧記の如く高二十五石にして紀勢御領分高帳にも高廿五石馬場村天神領とあり明治四年社領上け切の記には高廿八石六升壹合和歌天神社領とす然らは元和御切米帳の三石は全く神主の領にして合て二十八石餘從來御寄附の事と察せられぬ

按に御仕入方大帳に天保八酉年十一月金三拾壹兩貳歩と銀百八貫二百十四匁六分二厘　一位様思召を以和歌天神社御修復總

御入用に差出云々の記あり此時大修ありしと見ゆ其他詳ならす

光　恩　寺　那賀郡小倉村　淨土宗鎭西派　懐岳山正清院と号す

續風土記に曰く元和七年　南龍公の命を以て　正清夫人を那賀郡吐前村小倉光恩寺に改葬なさしめ其法號を以て當寺の院號となし正清院と號て本の院号を以て寺號となし光恩寺と號し懐岳山と號し山林田畑等を寄らる

正清夫人は　南龍公の御妹君にて蒲生飛騨守秀行の室後淺野但馬守長晟へ再嫁し給ひ元和三年薨せらる其荼毘の跡若山吹上寺の境内にありその遺骨若山大泉寺に葬りしを此院に改葬ありし也

一光恩寺由緒書に曰く（前文信譽上人の傳を記すと雖も高僧傳に詳なるを以て略す）元和五年未八月　南龍院樣　御入國之後元和七年　正清院樣　御廟光恩寺へ御改葬之後前段開基之來歷をも被　聞召院號は正清院と相唱光恩院は光恩寺と相改候樣　御意有之從夫懐岳山正清院光恩寺と申候前件監物寄附之山林田畑等追て御証文に相成光恩寺へ被下置候　南龍院樣御入國之砌一派之大寺方は御目見仕候得共信譽は平日之風義故御目見も不奉願候處信義小倉之庄に居住候との義江戸表にて增上寺國師より被爲聞召候に付當寺へ被爲　成御前近く被召出種々　御懇の御意御座候其後は不時に御前へ被　召出　御成前之御殿にて御齋抔被下候義も每度御座候由

一正清院樣　元和三年丁巳八月晦日御逝去　御戒名は

　正清院殿泰譽果悅善芳大姉

元和七年四月當寺へ御改葬被　仰付候此御儀に付記錄左之通御座候

按に續風土記には正淸夫人は湊道場町海善寺に葬らる荼毘の處今吹上寺境內となる元和五年藝州に改葬ありと云々いつれか是なるや

一正淸院殿は　家康公御息女蒲生飛驒守秀行室宰相忠卿之御母堂なり秀行御逝去之後紀伊大主淺野但馬守殿へ被爲入於和歌山御逝去則大泉寺奉葬　御廟有之候處如何被爲思召候哉南龍院樣御入國之後以御使者右御回向之義被　仰付其後元和七年四月御廟當寺へ御移し被遊此御儀に付申傳候は常念佛之音聲之及候所へ奉葬候樣との　御意にて則從本堂五六間西の方に御廟堂被　仰付候御普請之義は岡部小左衞門へ被　仰付候

寺領　高拾三石五斗四升五合

內　高八石三斗二升五合　那賀郡　大垣內村
　　高五石二斗二升　同郡　吐前村

圓珠院　和歌道 瑞雲寺　愛宕山 天台宗

寺說に曰く當寺は元市內御代官敷地の小高き地にありしを　東照宮御造營の殘木を以元和八年龍祖より京都叡山の愛宕社の風に倣ひ山頂に御建立あらせられ寺領三十石を御寄付あるべきを辭して紀州口六郡の勸化を願ひ允許ありたり後當寺第三世亮海僧都の時再建して頗る結構を極む當山の佛具は一切　有德公の時改めて御寄附に相成り山林九町四方をも賜り庫裏は西濱御殿よりの御改造也と云々

寺領　現米　貳石

松生院　岡の谷 向陽山　眞言宗古義 芦邊寺

續風土記に曰く　南龍公入國せられ元和八年寺領六十石を賜ふ（按に淺野家之時も八十石を寄附す）寛永三寅年岡の宮別當職兼帶を命せらる寛文三年岡宮唯一に復し因て別當職を止らる寺產六十石を除かる什物屏風一双（洛中洛外神社佛閣の圖布袋畫土佐光信筆）の二品は　南龍公寄附せらる　清溪公山水の畫もあり

寺說に門の扁額護邦殿の三字は　舜恭公御染筆を賜りしと云

淨心寺（宇須村 法華宗）

名所圖會に曰く元和九年　國君御違例御危篤の時　養珠院殿直に東武より御歸國之折御使をはせ甲州大野本遠寺日遠上人に護持の僧を請せ給ふこゝに於て其徒弟忠桂撰に應し王駕に陪し當府に至り丹誠をこらし祈念せしかは幾日ならすして御違例常に復し所托慮しからさりしかは此隨緣にかねて一宇の淨刹を建立し長く國家の安全をいのらせ給はんとの御事也しか一日　養珠院殿宇須村の地に御遊望の時此地を卜し給ひ國君に請して忠桂をして基跡を開かせ梵宇を營ましめ日遠を請して開山導師とし衣鉢の料として若干の寺產を賜ふ

一續風土記に堂中安置する處の釋伽迦葉阿難の三像は　南龍公寄附せらるゝとあり（一說に南龍公御持佛堂の本尊と云中正院僧都の作）

一元和御切米終身錄に左之記あり忠桂病死後三年目後住へ引續き賜りし也

寛永三寅新規

一貳拾五石　　　忠　　桂

慶安四卯十一月病死跡目不知

一貳拾五石
以來無相違當時迄相渡る

浄心寺

一當寺廟墓

了心院殿妙幻童女 南龍公御長女 寛永七年八月廿一日

當公子の事御系譜初廟祭名錄にも記載なし然るに維新之頃御廣敷御用人江馬源右衛門於當寺發見之由也御早世等にて御廣敷限りにもありしならんか明治八年八月二日報恩寺へ御改葬なりたり

一御祠堂金左之通　觀自在公より御位牌料として御寄付

金貳拾兩

一明治三年年五月廿五日以來御佛供料年々金百疋つゝ御備への旨定る從前の額不詳

一明治三年十二月寺領上り切の達には左の二た口あり紀勢御領分高帳宇須村之部寺社領八石五斗とのみ記し名稱を揭けす思ふに六石八斗三升四合は屋敷地高ならん

御切米廿五石　浄心寺

高六石八斗三升四合　浄心寺

根來山

根來山 那賀郡一乘山 今畑村大傳法院　眞言宗新義

續風土記に曰く天正の頃豊太閤天下を統一して海內風靡すといへとも根嶺の徒猶倔强にして暴掠止ます是時根來諸國におゐて地を領する事數十萬石に至る豊公眞田幸村を使として舊領の地は悉く沒收して新に二万石を賜ふへきとの事を諭さしむ衆徒肯せす豊公大に怒て兵を擧て是を討つ兵

士寺内に亂入して火を放ち堂塔伽藍一炬に焦土となる唯大塔大傳法院大師堂の三宇其災を免るといふ是より先織田氏難波石山を攻るの時根來の僧軍二百人を招きて軍中に加へらる又天正十二年小牧長久手の役に　東照神君井上主計頭を當國に遣はされ根來寺總分弁に雜賀の士を招き給ふ根來寺命に應して軍を出す右の由緒あるを以て根來破却の後　東照神君根來の僧軍二百人を撰はせられ内百人を幕下に召して俸米を賜ひ殘り百人は後命あるへきとの事なりしに元和封初　南龍公其由緒によらせられ百人を召して稟米八石つゝを賜ふこれを根來同心といふ皆院號坊號を名乘り總髮にて世々相續せり根來寺これより僧軍なし新義を奉するの僧徒稍々山内に還り集り餘燼を收めて堂宇を再興し佛殿より神祠に至る迄古の舊址に因りて大抵其髣髴たるを學ひ子院二十七宇を造立し再ひ法燈を挑くといふ寛延年間國命を以て蓮華院律乘院を以て檀林學頭地とし俸米三十石を賜りて寺領とし外に二百石を以て寺產とす新義本山和州小池坊京都智積院より迭に兩院に住職し權僧正に拜任せらる

一名所圖會に曰く元和九年　國祖彥坂氏に命して法度を定め東西の坂口に制札をかけ下馬下乘の木牌を立させ給ふされと割據血腥の固執未た除かす數年山中穩ならさりけれは寶曆元年　國君（大慧公）大夫岡野日向守に命して行人等を逐ひ拂ひて蓮華律乘兩院をもつて兩學頭と定められ六十石を寄せて僧厨を資け給ふ誠に根來再興は此君に依れり副君（菩提心公）先考の御志を續て衆僧をして國君の安全を祈らしむ又常光明會は大夫人淸信院尼公の御願なり

一寛政十の年前の小池坊僧正法住師大傳法院再建之事を　國君へ啓　前黃門大眞公隨喜褒賞して資

貨若干を賜ふ法嗣蓮華院清恕僧正先師の遺命を續て常光明眞言堂を再建あり　黄門閣下常光明眞言殿の扁額を手書して給ふ又清信尼公の椒房蘭室を移し庫裏厨屋をならへ建

國祖より御寄付品

兩界大漫荼羅　二鋪　弘法大師筆

同　二鋪　開山大師筆

同　種子（ほんじ）　二鋪　開山大師筆

佛舍利

不動明王大御劔　長七尺三寸 廣三寸五分　文殊金助重國作　一振

大眞公より御寄付品

散樂假面　二百餘面

一舜恭公より光明眞言殿及三大龍王社の御額を給りて寺の重寶とす

一明治三年迄寺領

現米　根來　蓮華院

同斷　律乘院

光明院　湊才賀屋町

當寺は高野山遍照光院頼慶弟子良惠相續一に遍照光明院と稱したる如し頼慶は　神祖於駿河　龍祖之御祈禱坊主に被命　龍祖御歸依の僧也良惠俸祿を賜りて御由緒淺からす後翁嶋代に至て才賀

屋町　龍興御隠殿之舊地を替地に賜り御終焉之處へ　靈牌堂を建設尊牌を安置し奉祀す詳なるは
元祿三年同寺より寺社奉行へ提出したる由緒書之如し
一元和御切米終身祿
元和九亥新規
拾　石　　　　　　　　　　　　遍　照　光　院
承應元辰八月病死
由緒書には貳拾石と成り御扶持方賜ることあれ共詳ならす承應元年病死後上り切たるや明治三年
寺領上り切之際伺等之記なし
光明院由緒書之事
一當寺開山快慶法印元龜三年壬申光明院建立仕候寛永三年秀傳迄相續七代に被成候
一先年淺野但馬守殿御代御城山に御座候八幡宮預り鬼門に移し御祈禱申御國代之時分光明院秀傳安
藝國へ御供申候
一私伯父坊主秀傳安藝國へ參り候時分遍照光院良惠に光明院相續仕候
一光明院元寺町に御座候諸寺々地引申に付私師匠遍照光院翁照其以後替地に唯今の地拜領仕候
一慶長九甲辰遍照光院九代以前賴慶駿河の於御城　權現樣爲御上意大納言樣御祈禱坊主に被爲　仰
付候に付賴慶弟子良惠翁照迄三代御祈禱申每月御札指上候
一遍照光院良惠に御切米拾石御扶持方貳拾人分被爲下置候中納言樣御胞衣御城に納候節山下茂兵衛

へ御使にて遍照光院良惠に被爲　仰付御祈禱申奉納候
一大納言樣御在國の節は每年伊勢御代參幷に多賀御代參被爲　仰付候道中上下御傳馬五疋人足八人
の御證文　但多賀へは松坂より人馬共通し申候
　爲替銀　　銀子拾枚宛
御紋付の御服御羽織是れは伊勢御代參に付衣袈裟不成に付右の御紋付着け申候
淺間へ黃金壹枚御初穗
大神宮へ大御供右の領に銀子壹貫貳百目
多賀へ大御湯此領物爾こ覺へ不申候
一熊野御代參御座候節道中人馬右同斷
尤も本宮より新宮迄川舟村繼遣銀も同斷
一七日の間三山にて御祈禱の護摩御座候本宮より那智迄上下尤も逗留七日の內同心衆附居諸色賄
は御公儀樣被爲遊候
一正五九月大般若御座候此時御公儀樣より諸色賄被下候
一每月三日御天守にて御祈禱に登城仕候又は京橋櫓にても御祈禱御座候
一御在江戶の時　御扶持方拾六人分外に金子壹兩貳步銀三兩宛每月渡候是れは小遣銀しき代として被下候
　油七升薪九駄炭七俵白餠米壹斗貳升　醬油　味噌　酒貳斗三升
右之通每月渡り申候

一正五九月には江戸御仲屋敷にて大般若御座候此時諸色　御公儀様より賄御馳走人添居被成候
御菊なつめ一つ并忍冬酒一樽拝領仕候
一御在江戸の節は大山江島鎌倉八幡宮御代參御座候
此道中上下御屋敷小荷駄御扶持人足出申候右三ヶ所にて御祈禱申上候
一江戸御中屋敷に御座候護摩堂良惠に被下候其留主居に德壽院と申弟子指置候其以後御當地へ參御
切米貳拾石御扶持三人分被爲下置候
一德壽院紀三井寺無住に付被爲仰付入院仕候故右被爲下置候御扶持切米指上候
右ヶ樣の依由緒唯今に至遍照光院へ御氷餅每年被爲仰付候銀子壹枚宛每年遍照光院へ被下候以上

元祿三年庚午九月　　遍照光院翁照弟子　光明院良海

寺社奉行樣

一南龍院樣御臨終之地九尺四方に垣を結有之候處に爲御厚恩御佛殿建立仕度と寺社奉行衆迄遍照光
院翁照申進候處天和三亥年願の通被爲仰付被下候故九尺四方に建立仕　御位牌奉納候
一南龍院樣御法名高野山御石塔之通御位牌の書付可仕旨被　迎出候故其通仕候
一右御佛殿の御材木遍照光院寺領より取下し申節岩手御口銀之義奉願候處に御赦免被下口銀右申出
候以上

八月　　遍照光院弟子　光明院

寺社奉行所

西本願寺御坊

一寺說に境內之歡喜天堂は　舜恭公の御寄附也と世俗千兩の御普請といひ傳ふるよし構造之壯觀によるなるへし

西本願寺御坊北町西鷺森京都本願寺輪番所　鷺森御坊と稱す　淨土眞宗

續風土記に曰く慶長六年淺野家より寺內敷地六十四石の所寄附あり元和の制これに襲用らる　中略

近年一位老公親筆の功德聚といふ三字の額を賜ふ

明治三年迄

一高六十四石五合　　鷺之森　鷺之森御坊屋敷成

惠美須社

惠美須社　湊小野町二丁目

續風土記に曰く慶長六年淺野家三石寄附せり元和の制これを襲用らる

同

一高三石　　湊　領　蛭子社領

珊瑚寺

珊瑚寺　岡の谷仙境山　禪宗曹洞派

續風土記に曰く天正十三桑山法印開基寺領十五石を寄附せり寺產今猶同し桑山法印の墓碑あり

右之如く寺產今猶同しとあれは元和御初封之時先蹤御襲用の事知るへく現に紀勢御領分高帳明治調書等左の如し

高拾五石　　岡町　珊瑚寺

般若院

般若院　一里山町永久山　覺林寺

續風土記に曰く本國駿河より元和封初　命によりて此に移り紀勢修驗の支配を命せらる廩米五口を賜ふ大先達法印號を唱ふ

一五人扶持　　般若院

右明治二年一般社寺領上け切之布達中に見へされ其社寺御寄附高調帳及ひ寺社局直支配帳等本記之如くなれば從來賜り來りしを知るへし

常住院　南新地柳町　金剛山遍照寺　眞宗

續風土記に曰く元和年中　南龍公邦内の故事を尋給ふに荒川郷植村右衛門といふ者陳述すること詳にして旨に稱ひしかは其姪高野山遍照光院の弟子僧永胤を召て仕しむ永胤官途に在といへとも生涯清僧の志操ありけれは持佛堂開闢諸國神寺奉る所の神符呪牘等の事を執しめて他事に與からす祈念必驗ありけれは成就院と呼けるとなり後今の名に改む又旧符牘當院に下して護摩木に用ひしめらる世依て護摩堂と呼ひ來れり永胤正保四年歿してより後は尋常の寺となれり

志摩神社　中之島村

續風土記に曰く社殿は天正之亂に烏有となり社領は慶長檢地の時に沒收せらる元和の後名祠の廢絕を起され新に社殿を再創し漸々舊觀に復し給へり

伊久比賣神社　名草郡市小路村

續風土記に曰く土人は市姫大明神といふ封初伊久比賣神社式内の遺跡を尋させ給ひ當社を其神社と考定し土人の稱號を改められ享保十一年に至り境内四至に禁殺生の牓を立られ漸く古祠の姿に

高三所大明神社　歡喜寺　藥德寺　濱宮

復し給ふ

　高三所大明神社　名草郡禰宜村 東和山の嶺に在り高御前と云

續風土記に曰く天正兵亂の後神事祭禮皆廢せり元和以來廢を起し別當歡喜寺を罷て唯一に復せられ漸く今の姿となれり

　歡喜寺　名草郡禰宜村 禪宗臨濟派

續風土記に曰く慶長六年淺野家より寺領二石の地を寄附す
當代此に襲り用られ又境內を免許の地と定めらる

一高二石　禰宜村　歡喜寺領

　藥德寺　名草郡津秦村 瑠璃光山普照院　淨土宗鎭西派

續風土記に曰く慶長年中寺地三石免許あり元和の時是に襲用らる什物六字名號　高林公親筆幷祐天和尙筆の壽緣起無量壽經葵章の幕等　菩提心公寄附せらる

一寺領　高三石　津秦　藥德寺

　濱宮　名草郡　毛見村

續風土記に曰く天正の兵燹に罹り社殿神領まで亡失せしに元和中國命ありて再興せられ享保以後伊勢の宮殿を模せられしかは往古の遺風宛然としていと崇き神境とはなれり

一按に　大慧公享保年中に當村小名硲子(ハサコ)の西羽鳥橋の側に石牌を建　天照大神三箇年御鎭座舊跡の字を鐫らしめ給へり

一天保元寅年岡田甚太夫本にて當宮へ國家安穩五穀豐饒之御祈禱料して金貳拾兩御寄附
一同七申年四月毛見浦濱之宮預村老總代琴浦要人初十八人より右御寄附金を以左之畑地買上け御年貢之外作德米を以年々供料に宛御祈禱無怠慢執行仕度旨願により許可御證文下付相成

畑地四ヶ所

限四方

東は万右衛門屋敷　西は土堤
南は長四郎小三郎類地　北は万右衛門類地

北新畑
九十七一七畑壹畝拾貳步　高九升八合　御帳　十兵衛
外に十五步　堀一つ引

同所
九十八一七畑壹畝貳拾壹步　高壹斗壹升九合　御帳　傳兵衛
外に拾五步　堀一つ引

同所
百一八畑貳畝拾壹步　高貳斗壹升六合　御帳　仁兵衛

同所
一八畑四畝九步　高三斗四升四合　御帳　仁兵衛
外に五拾貳步　堀二つ引

畝高合壹反三步七斗七升七合

此代金貳拾兩

滿願寺　名艸郡寺内村弘誓山大天王院　眞言律宗古義

續風土記に曰く天正年中豊太閤南征之兵火に堂舍地を拂て燒失せり慶長六年淺野氏燈明料二石を寄附す元和封初の時これを襲用ひられ又境內を免許の地とし殺生の禁札を給はる

一高　二石　　寺內村　觀音領

金剛寶寺　名艸郡紀三井寺村 紀三井山　護國院　眞言宗古義

續風土記に曰く中世山名家より新開の地四十九町寄進あり天正の亂皆沒收せらる慶長六年淺野幸長寺領十三石を寄附あり　南龍公新に八石を加へて合せて二十一石を寄附せられ境內の地子を免許せらる外に一石六斗六升燈明料を寄附あり什物　國君より寄附の佛經數種あり近年　一位老公親筆の落霞といふ二字の額及親筆の雲龍の書幅を賜ふ

一當寺に左之墓標あり何れも大奧より祠堂金を附せらる

妙幻院空山慈照大姉　江戶四谷森某母俗稱喜多大奧女中 寬政十午年十二月八日於若山卒葬于當寺

一同月廿九日御內々より同牌料金貳拾兩御寄附

賢了院超譽勝運大姉　老女芳村なり享保元年辛酉年二月十九日於若山卒當寺に葬る　文化三寅年六月十九日菩提の爲め御內々より金百兩御寄付芳村は　舜恭公の乳母にして　同公の御危難を救ひ奉る事は烈女傳に詳なり

蔡蓉院英譽妙喜大姉　清水殿家中嶋崎久五郎女大奧若年寄を勤仕嶋崎と稱す　文化十一戌年八月十四日若山に於て卒す當寺に葬る 同年十二月十一日御內々より同牌料金貳拾兩御寄付

一高二十一石五斗三升　紀三井寺村　紀三井寺領

永正寺　名艸郡日方浦 辨財天山　淨土宗鎮西派

續風土記に曰く古は寺領免田寄進田等八十餘石ありしと天正檢地に沒收せらる淺野氏の時十石寄附あり今も又其まゝ賜わりたり境内に　菩提心公寶塔あり近年　一位公親筆の廿露殿と云三字の額を賜ふ

按に長保寺へ御參詣の時は御往來當寺に御休憩を例とす

一高拾石　日方浦　永正寺領

藤白權現社

藤白權現社　名艸郡藤白浦 若一王子

續風土記に曰く寛文記に戰國の兵亂に社殿悉く衰替し昇平の世となり漸く今の姿となれりと古は社領も多くありしといふ淺野家より六石を寄附せらる元和以後これに襲用ひらる云々

一高六石　藤白浦　權現領

海雲寺

海雲寺　名艸郡冷水浦 楞伽山　禪宗臨濟派

續風土記に曰く天正十二年三田村久兵衞正久山林竹木諸役免許狀慶長三年桑山法印山林竹木諸役免狀あり元和の後又當寺持山の雜木口銀を免さる當寺の庭園は　南龍公數此寺に遊覽ありて假山等を作らせ賜へりとそ寺より西山上に御殿跡とて周五十四間程の平坦の地あり

願成寺

願成寺　名艸郡別所村 衣笠山三瀧院　天台宗

續風土記に曰く往古は伽藍甍をならへ子院僧坊二十四舍あり　南龍公當寺の舊地なるを以て坊之内和合院を和歌浦　東照宮の境内に移し和歌六坊の内に列せらる右の寺領は扱澤別所二ヶ村なり山名氏別所村年貢捌貫伍百文を寄附す豐臣氏の時沒收せらる淺野家三石を寄附す元和の制此によ

らる當寺舊眞言宗なり和合院を和歌に移し給ふ頃より天台宗となり雲蓋院末となる

高三石　別所村　願成寺領

郷役米免許高百石　同　同寺

明治三年社寺一般上地布達書に右之如くなれ共從來高三石之外尙免許地を賜りしものと見ゆ

玉津嶋神社

玉津嶋神社　海部郡和歌村

御譜畧寛文五年の記に曰く玉津嶋は近古より漸く形はかり殘りたりしを元和年中に社領御寄附万治年中に御再興寛文四年御增領あり其上照高院法親王に就て祭奠の儀式御尋之處新院上皇　叡聞に達し吉田兼蓮に　詔ありて祭式勘文を書せしめて賜之

一祖公外記附錄に曰く　玉津嶋神社　万治年中玉津嶋神社御修造拜殿神庫なとも御建立此社頽敗歲久祭祀も斷へ候に付寛文四年二品法親王道晃を以て新院へ奏候神祇官祭奠之式幷國史所載の當社之古事を撰認被差越以來毎年三月九月中卯日祭祀執行被　仰付同年新院御製之和歌三首宸翰幷親王公卿之和歌四十七首御奉納有之翌年社司某正六位下に叙任右社司之居宅なとも御造營有之社領三十石鳴谷にて被下聖護院門跡御入峰之時は例此神職之宅にて御休息有之候御再興の時狩野興甫畫三十六歌仙の額を寄附し給ひしか　大慧公の時此額は納め置へし平素掲くるものは別に寫した綰わるへき旨にて以來眞物は　神庫に納むと云

一享保五子年五月二十日　後奈良院宸翰玉津島明神の神號を下し賜ふ

一續風土記に曰く　明和年間神龜の故事の廢れたるを起させ給ひ春秋二時官人を遣され神事を行はしめ給ふ今に至りて年々これを例とし給へり近年又奠供山の廢れたるを聞き古の故事を復し給へり

一寛政九巳年十二月三日和歌玉津嶋社へ　禁裏より御奉納物有之

玉津嶋社

一社領高三十二石六升二合

紀勢御領分高帳寺社局直支配帳には社領高三拾石とあれ共明治二年社領上け切之布達面本記の如し

稱　念　寺　海部郡加太浦

續風土記に慶長六年淺野幸長粟嶋詣之道次當寺の衰頽を憐み寺領一石山林一所を寄附せりと記して公家寄附の事なし然れ共明治二年年調書に左之如くありて太政官令により社寺領一般上地之時同しく上地之發令あれは淺野家の制を御襲用し給ひし事知るへし

高壹石　加太浦　稱　念　寺

紀勢御領分高帳には加太浦寺社領高六石と合記す内一石は稱念寺五石は淡嶋社領なり

淡　嶋　社　海部郡加太浦

按に續風土記紀州名所圖會共に御當家より社領御寄附之事を記さす然れとも紀勢御領高帳等左記の如く明治維新太政官令により上地の命ありたれは從來御寄附之事知るへし蓋し元和御初封よりの事ならんか

一社領高五石　加太浦　淡　嶋　社

地　藏　峰　寺　海部郡橋本村　藤白山　延命院　天台宗

續風土記に曰く境内凡方八町免許地なり淺野氏の時寺領八石を賜わり封初以後襲り用ひらる寛文二年元祿十一年命ありて堂舍修造あり享保七年禁殺生の地となる

一高八石　橋本村　地　藏　峰　寺　領

福勝寺　海部郡橘本村 金剛壽院　眞言宗古義

續風土記に曰く淺野氏之時より今に寺領高三石を賜わる寺内求聞持堂の本尊は虚空藏也虚空藏は南龍公の御守本尊と云（厨子の見付御紋あり）御紋付幡七流佛天蓋等御寄附あり又鎮守六社あり各寛文二年命ありて修復し正保四年境内四至を定められ慶安元年八月十七日禁殺生を賜はる座敷は　祖君の御寄附にて聖護院三寶院門跡入峰之節被爲入と云

一高三石　橘本村　福勝寺領

興國寺　南海部郡門前村 鷲峰山　禪宗臨濟派

按に風土記に天正十三年豊太閤南征に諸堂兵燼に罹る慶長中淺野氏中興し寺領十三石を寄附すとのみ記して藩より寺領給賜の事を掲けす然れとも明治三年迄現に給與しつゝあれは國初の時淺野氏之制を襲用し給ひし事知るへし

舜恭公より親筆靈山會といふ三字の額を賜りしといふ

高拾三石　門前村　興國寺領

國分寺　那賀郡東國分村 八光山 醫王院　眞言宗新義

續風土記に古の堂塔伽藍は天正の兵火に罹りて烏有となり其後造建して形を殘せり淺野家の時に至りて四石五斗の田を寄て寺領とせらる今は三石二斗を領すとあり蓋し國初之時淺野氏の制に斟酌を加へられしならん

一高三石貳斗　東國分村　國分寺領

野上八幡社　那賀郡　野上組小畑村

社司藪信四郎曰く　龍祖は野上邊へ度々被爲成當八幡社へも毎々御參拜有之當社は永延二年岩清水八幡宮之御別宮と被定候に付御神像の如きも御木像にて淺野家より社領三石を寄附せられし處淺野家藝州へ移られ續て　龍祖よりも三石御寄附相成總て社頭御營繕等をも不殘被　仰付今に殘りたるは御神前の靑簾之鍵唐草に葵御紋付の毛彫り金滅金にて房は不殘絹房也神前へ石燈一對御奉納其銘左の如しと

一石燈　一對

光明萬歲

慶安三年四月十五日建于那賀郡野上莊八幡宮

此府君之所命

那波元成識

一續風土記に曰く　天正十三年豊臣氏古の社領を盡く沒收せらる淺野家社領三石を寄せ鳥居幷神輿等を再建す我先君元和の制社領は之を襲用せられ種々の神具を寄附せられ今に至て社殿雜舍堂塔の規制大抵古制を備ふると云

社領高三石　野上組　小　畑　村

福　琳　寺　那賀郡豊田村金岡山後一條院　眞言宗古義

續風土記に曰く堂塔皆天正之兵火に灰燼となり寛永以后再建して今の形となれり慶長年中淺野家より莊田八石九斗を寄附あり元和の後舊に仍りてこれを寄せらる寛永以後　國君より寄附せらる

ゝ品物多し

一高八石九斗　　　　豊田村　福琳寺領

法　然　寺　那賀郡沖野々村 月光山勢止院　淨土宗鎭西派

續風土記に曰く天正中大和大納言寺地方一町を免許せらる淺野氏これを沒收して別に高三石を許さる元和の初これに襲り用ひらる

寺領高三石　　沖野々村　法然寺

須　佐　神　社　在田郡千田村

名所圖會に曰く天正の亂に神祠毀壞の處元和年中新に神殿を造營し御供料の地を寄附し給ふ

續風土記是に同し

一社務岩橋出羽守より請願書に私先祖岩橋大膳儀明歷二申年六月十六日依　御意御城下へ罷出十七日和歌入口堤の北にて　御目見仕候神主參りたるかと　御意被爲下　權現樣へ參白砂をふみ城へ參待居よと　御意被下則登　城仕御玄關にて私は須佐の神主にて御座候先頭有田へ被爲成候節和歌へ參候樣にと　御意被爲下候に付罷出和歌にて　御目見仕候處　御城にて　御歸城奉待候樣　御意被下候何方に罷居候て可然哉此段原田市十郎殿へ申上度旨申入候處本間五太夫殿御出にてはや御目見被成候由然らは是へ御通り候得と被申聞御玄關之上之御間に罷居候處無程御歸城被遊其后　御前へ先刻より須佐之神主罷出御座候と被申上候由　御意に其者惣火給不申候別火にて料理給させ候樣被　仰付候由五太夫殿被申聞候扨貴殿忌物有哉と御尋に付私五辛を

忌中候左樣之品は御墓所に有御座間敷奉存候何にても被　仰付被下候は難有仕合に奉存候旨五太夫殿へ申達候其後五太夫殿是へ通り候樣被申聞候に付罷出御役人衆へ難有段御禮申上候ちそうせよと　御意に候間難有奉存候へと市十郎殿被　仰聞候御料理戴候とも罷歸候儀は無用に候御用之儀有之候と被　仰付候其后惣社宮内へ爲逢候樣被　仰出朝沼友助殿御添へ被成下參候樣加納數馬殿被　仰渡友助殿同道にて惣社氏へ參宮内殿へ對面仕其後宮内殿同道にて三人共　御城へ參上二の丸にて神祇道次第　御尋被遊候原田殿承にて須佐之神主申上候樣神者唯一にて神道者伊勢流にて御座候と申上候又　御尋に文字は誰に習ひ神道者何れに學そと　御意被下候文字は一陽に學ひ神道者源兵衛へ承候と奉申上候宮内へ爲逢候も神道之儀可申附思へとも伊勢流習ひ候儀に候者一向源兵衛へ學ひ候樣にと　御意被爲下候

御遺命幷御遺書寫

一明暦二申六月十七日夜

御城御奥へ罷出候樣原田市十郎殿被　仰聞市十郎殿同道にて罷出候處　殿樣御意被爲下候左之通をれ死して遠忌過候は時の國之守へ申出神に祀れよくるしからすは社内に祀れ此事宮内市十郎へ申付あれは書付受取子孫へ傳へ能々申聞置け

右　御意被下難有奉存候と原田殿宮内殿へ御禮申上候　殿樣被　仰付候節は市十郎殿宮内殿御次之間にならひ居被申候其外に御人一人も見不申候原田殿宮内殿御渡被下候御書付寫

一殿樣御逝去被成御遠忌被爲濟候は時之　御代へ申上神明に可奉祀候不苦候は社内に奉崇候樣依

御意如此に候其旨可存候

明暦二申年六月

原田市十郎印

惣社宮内印

須佐明神社　神主へ

右御書付御渡し被下受取申候原田殿宮内殿誠に難有御事に奉存候得共被申聞候又唯今之御書付大切に仕社内又は寶藏へ成とも納置申せよと被申聞候に付御内陣へ相納申候神慮にも無御歡と存し難有奉存候

一同十八日　御城へ御禮に罷出候

別副

一本文に御本紙は御内陣に納有之との文言に御座候得共御陣内には相見へ不申候平生社内に鼠多御座候得は自然鼠のために亡失仕候儀哉と私家申傳へに御座候然れ共　御厨櫃に納有之候儀も難計奉存候得共私にひらき候事恐不少奉存候得は難相分奉存候

一御本紙寫に下條彌右衛門殿より李梅溪殿あての書狀添へ御座候原田殿暫く物くるはしく被相成候て本文　御意之趣被申候由右書面にも相見へ申候

一岩橋出羽守亡父同苗大膳存生之内從來預懇意候池端林左衛門殿柴田利久右衛門殿松尾三七殿なとへ右御書付寫を以て及内談候處何れも容易ならぬ御事に候得は御支配へ窺見候樣被申聞候に付寺社御奉行三宅兵右衛門殿へ直に內窺仕候處御本紙無之候ては如何に付難及取扱旨兵右衛門殿被申

聞候に付大膳大に恐怖仕奉對　御元祖樣御神靈御申譯無之に付爲申披安永八年內々私に御神像を御內陣へ奉鎮以來日々供御獻備仕候大膳儀天明六年午三月十七日相果候節忰出羽守へ申遺候には我生涯　御遺命之趣不相果恐怖不少候に付爲申披　御神像を奉鎮以來日々供御獻備仕候間此以後必勿怠猶御時節を相窺候て　御遺命之通表立　御祀被遊候樣訟出可申旨遺言仕候儀に御座候

一亡父大膳滅後　御遺命之趣何卒表立　御祀被遊候樣御取扱被下度段出羽守申出候旁姓名左之通に御座候

村岡八藏殿へ

右に宇留野玄門兎を以て申入候

堀江平藏殿　岡田忠左衛門殿　森　玄蕃　殿

右は松尾塊翁殿より申入候

由比楠左衛門殿

右は岩橋出羽守直に申入候

加納大隅守殿

右は同家用人尾崎權右衛門を以て申入候

右何卒以出格之　思召　御遺命之通被　仰付候樣仕度奉願上候亡父大膳存命之節內談仕候三人之內松尾塊翁殿今に被致存命先達も　御表樣へ內存書被差上候由被申聞候

右御本紙寫并下條殿書狀共加納殿へ差出御座候幾重にも宜御取扱之儀奉願候以上

亥　月

一千田村小賀安諦雄書面

須佐神社の式典は慶長元和之頃廢絶之處　南龍大君御入國彼之闕典を補はせられ忝くも梅溪李氏に命せられ緣起を書せしめ御奉納被遊曰く

前略　中至天正年中社式未廢每歲春正月初卯日伊駄祁曾社官十二人來而參社吾神蓋以伊駄祁曾之父又秋九月初卯日從山東庄伊駄祁曾社進騎十二疋是乃六十六州各國所奉一疋馬於伊駄祁曾之先進之者也　下畧

然れ共　大君御在世之頃は只甲冑刀劍を帶し弓箭を携へて　神輿を供奉し旅の宮にて的矢を射て祭典を修し候事今の如く盛なる事には非す今の如きは漸く元祿寶永の頃に兆し正德享保に成り明和安永に全備仕候よし走馬の濫觴はいとく古き事と云々

一享保六丑年十月十七日　將軍有德公より淺野壹岐守を以て眞御太刀壹腰御馬代金御進納　大慧公よりも御太刀御奉納

一御供米　五石　明治三年迄

淨　妙　寺　在田郡　小豆嶋村　禪宗臨濟派

名所圖會に曰く當寺は湯淺氏の兵亂に堂舍及緣起記錄等殘らす燼焚し纔に藥師堂多寶塔其災厄を免る元和年中國君深く其頹廢を歎かせ給ひ若山吹上寺開山圭瑞和尙に此寺を賜ひ境內を除地とし新田を寄附し給ひ（續風土記には新田一町二反餘とあり）殺生を禁止し堂塔を修復し給ふ

一寺領高八斗四升九合　有田郡小豆嶋村

廣八幡宮　有田郡廣中野村

名所圖會に曰く慶長六年淺野氏社領拾石を寄せらる元和以降是に襲用せらる更に金燈籠石燈籠弓劔畵馬戸帳の數品を寄附し給へり

一社領　高拾石　有田郡廣中野村

福藏寺　有田郡龍門山　湯淺村　淨土眞宗西派

續風土記に曰く永祿年中湯川直春海部郡衣奈浦にて寺地を免許し一寺を建立天正年中當村に移し候時須金右衞門家次より諸役を免許す慶長年中淺野氏及　南龍公の御時に至ても先規のまゝ免許し給ふ近年一位老公親筆の應信といふ二字の額を賜はる

一寺領高　壹石八斗六升　有田郡湯淺村

禪長寺　在田郡靈寶山　土生村　淨土宗西山派

續風土記に曰く淺野家の時寺領七石を寄附せらる元和以後も此に襲用せらる

一寺領　高七石　有田郡土生村

星尾寺　在田郡　星の尾村

續風土記に曰く當寺は古の星尾寺六坊の其一七堂伽藍の寺なり天正の兵火に坊舍皆焚滅し唯一宇のみ殘れり淺野氏寺領三石を寄附す當代此による

一寺領　高三石　星尾村　星尾寺

深專寺　久米崎王子社　法藏寺　八幡宮　國主大明神社

深　專　寺　在田郡湯淺村 玉光山　淨土宗西山派

續風土記に曰く慶長六年淺野氏より寺領三石を寄附す元和以後これに襲る

一高三石　湯淺村　深　專　寺　領

久米崎王子社　在田郡　別所村

續風土記に曰く後世破壞して築地のみなりしに　南龍公命ありて小社を建させ給へり

法　藏　寺　在田郡中野村 池靈山　淨土宗西山派

續風土記に曰く慶長十二年淺野侯寺產七石を寄せらる元和の後も襲用らる什物沈香枕　南龍公賜ふ所といふ近年一位老公親筆の無爲樂といふ三字の額を賜はる

一高七石　法藏寺領　內三石 中野村 四石 名嶋村

八　幡　宮　在田郡　中野村

續風土記に曰く天正十三年豐臣氏南伐の時兵燹に罹りて皆灰燼し社領も亦沒收せらる慶長六年淺野侯社領十石を寄附せらる元和の初此れを襲用られ猶又金燈籠弓劍書馬戸帳の類數品を寄附せらる

一高拾石　中野村　八　幡　社　領

國主大明神社　在田郡　田村

續風土記に曰く社領高四石八斗淺野氏の時寄附す元和以後此によらる

一高四石八斗　田　村　國　主　明　神　社

圓滿寺　在田郡東村 藏嚴山　禪宗臨濟派

續風土記に曰く古は七堂伽藍にして塔頭十二坊ありしに炎上すといふ慶長中淺野家より寺領高二石山林凡二町を寄進す元和封初これに襲給へり

紀勢御領分高帳寺局帳

一高二石　瀧川原村　圓滿寺領

道成寺　日高郡鐘卷村 天音山千手院　天台宗

續風土記に曰く古は寺領十三町あり何れの時沒收せらるゝを知らす慶長六年寺領五石淺野家より寄附す當代是に襲る承應年中天台宗元眞言宗となり雲蓋院末となる

一高五石　土生村　道成寺領

那智山　口熊野 市野々村

續風土記に曰く天下擾亂の時に至て神領多く土豪强族に掠奪せられて三山共に是より衰ふ更豐太閤南征の時悉く神領を沒收し殆廢絶の姿となりしを慶長六年淺野氏新に三百石を寄せて社領とす元和の封初其定に襲り用ひらる是より神職社僧稍々衰を興し廢を繼く事を謀れとも全く旧制を振起する事能さりしに享保以來　官命を奉して神殿雜舍規制古に復する事を得たり是今の(宮)建也

一寛永二丑年十二月別墅橋御寄附擬寶珠の銘左の如し

日本第一熊野那智山瀧本別墅橋　大檀那源朝臣　賴宣公寛永二年乙丑十二月吉日奉行中村四郎左衛門尉一成

一寛永十三子年正月寶劔御修裝

劔の銘

紀州那智山元有神劔一旦罹欝攸之厄有若無者久國主亞相源頼宣公視其煨燼餘之在庿中命工製鐔鋏及鞘室而彫繕修以寄附

銘　曰

紫電雖隱　精靈豈衰　茲加修飾　遺芳萬斯

寛永十三歳宿丙子春正月　後藤琢乘 銘長田道慶

右神劔は上古瀧の上に天降りしといふ

一華山法皇當山御參籠の時御所持の御茶器を入れし石櫃は　南龍公の御寄附なり

一那智山七院の一米良實方院は仁平元年源義國卿より祈禱料として美作國稲岡南莊を高坊範助法印（實方院の事）に寄附す是より代々源家の師職となり足利尊氏よりも師職事於當家一門者可爲高坊法眼御房稲岡南莊の内御師職名可令領掌といふ御敎書あり是より將軍家代々の師職たり故に淺野家幷に御當家にも同樣師職たり

一塩崎龍壽院は大和大納言秀長卿より三口を賜ふ元和の封初以來二口を賜ふ

一享保六丑年十一月　將軍有德公より淺野壹岐守を以熊野三山へ眞御太刀御馬代御奉納當社へは備前助宗之御太刀一振御奉納なり

一右同時に金貳千兩御寄附且天下勸化御免被　仰出其狀左之如し

熊野三所權現は日本國昔より于今至る迄貴賤貴ひ崇ふ事他に異り今度修行の事有に依り　公儀よりも御寄附之品有之信仰之輩は其分限に應し物の多少を論せす寄進すへき旨被　仰出畢猥にすゝめこふへからす右之趣万民宜しく承知すへきもの也

享保六年辛丑年十一月

酒井修理大夫　印
牧野因幡守　印
松平對馬守　印
土井伊豫守　印

按に　此時三山共に大修繕を加へられしならん其事詳ならされとも奉行井關彌五助を係員に被命同人享保九年閏四月御用役へ轉職に依り跡淺井忠八へ御修復吟味の儀元に成可勤と被命たり

一享保十八年　將軍有徳公より社殿諸佛閣等御修補且諸國勸化を免せらる其記左之如し

紀伊國牟婁郡熊野
那智山諸殿末社并觀音堂諸堂及鳥居神樂屋樓門等其外妙法山濱宮潮御崎社等漸破壞自　將軍家被修補之且課勸化於諸國

享保十八年至十九年畢功

紀伊國主權中納言從三位源宗直監議

奉行　家臣　水野大炊頭

安藤帯刀

紀伊國牟婁郡熊野

那智山禮殿久廢絕唯基址自　將軍家被構建之且課勸化於諸國

享保十八年至十九年畢功

紀伊國主權中納言從三位源朝臣宗直監議

奉　　家臣　水野大炊頭

安藤帯刀

一社領

高三百貳拾五石五斗四升七合　　那智山

高百五拾石　　太田組　二河村にて

内　同百五拾石　　那智組　市野々村にて

同廿石五斗四升七合　　同　寺家屋敷

明治三年上地之節社領之外に如此顯しあれは從來社領之外に賜りしなるへし

一貳人扶持　　社家　汐崎稜威雄

新宮　奧熊野　新宮

續風土記に曰く當社は本宮那智と鼎立して三山と稱す豐太閤南伐の時社地悉く沒收せられて廢頽極まれり其大概那智の條に出す如し社殿造營の事中よりは五畿七道の内にて或は二ヶ國に命して

其國出す處を以て用度に充て造らしめ給ひ又國司等重任の成功を募りても造りしにや後には造營料として國々にて領地を寄附し給へるさまに見へたり其奉行中古は三公後には征夷大將軍又は執權職等にて實に國家の重事とせり則左の如し

天正十八年　關白秀吉公名代大納言秀長卿再興

慶長年中　東照宮御再興御奉行　淺野左京大夫　藤堂與左衛門

享保七子年　有德大君御再興同十九寅年御成就

一社領

大野莊大里村高三百五十石

慶長六年十二月六日淺野家より寄附す元和封初是に襲用ひらる此外に万治二年安藝國よりの寄附の地もありしか今は廢せり

新宮神領

一社領

高三百五十石

內	高貳石二斗九升	相野谷組	鮒田村
	高三石六斗三升	相野谷組	高岡村
	同百十七石二斗	同	大里村
	同二百十七石六斗八升	新宮	新宮社家屋敷
	同九石二斗	成川組	鵜殿村

寺社局直支配寺社帳に社家鳥居源兵衛二人扶持とあれとも明治上地面に無之蓋し社領之内より
の給與なるへし
一神倉社　境内神倉山にあり權現山の南端
神寶之内擬寶珠十　南龍公の御寄附なり
本　　宮　奥熊野　本宮組本宮村
續風土記に曰く當社は新宮那智と鼎立して三山と稱す文明年中回祿ありて神庫燒失せしかは古文
書神寶等の類皆灰燼となりて古の事一に傳はる所なく明和年中又々火災ありて社殿雜舍一宇も殘
らす燒亡せり
一神領　豐太閤南伐の後慶長六年淺野氏三山の原書此間落行これにより用ひらる淺野氏の制に襲り三百石御寄附の事なるへし又竹坊に
金十五兩二階堂宮内に稟米二口を與へらる
一造營　古代の造營を書せし物なし大抵那智新宮と同かるへし
慶長十八年　豐臣秀吉公再興奉行淺野紀伊守幸長
享保年中　有德大君御再興
天明元年　當宮造營　幕府より金千兩御寄附ありて又天下勸化あり
享和二戌年本宮御再建坂西又六に御用掛被命寛政十三酉年三月新初文化八未年十二月にも御普請あり
嘉永三戌年十二月十四日熊野三山宮社御修復被　仰出御家老御勘定奉行奥御右筆組頭御勘定吟
味役御普請奉行御作事奉行寺社吟味役熊野三山御寄附金貸付方頭取等之役々御用掛り被　仰付

たり

一神寶之内

南龍公御寄附　御幸巻略記　權中納言藤原爲景輯錄 正二位源通村卿執筆

有德大君御奉納寶劔　備前爲清

大慧公御寄附　群書治要

一一位老公親筆の掛幅を社家尾崎又八に賜ふ

是は家に　白河院熊野御幸の時樂を奏せし横笛を傳へたりしか先年　官に奉れるによりて也

一社家竹坊兵竹と稱するもの淺野家の頃北山蜂起の時討手に加はり功あり其時社家梅之坊等大坂に一味して家斷絕す淺野家より右梅之坊の跡式を竹坊に與ふ北山討手の功によりて　台德大君に上謁し時服を賜ふその緣により代々將軍家の御宿坊となり七年に一度江戶に上謁し時服を拜領す封初より年々金拾五兩を與へらる

一社家二階堂宮內家系詳ならす稟米二石を與へらる　以上續風土記

一社領

本宮村　本宮神領

高三百石

一明治社寺御寄附高調書に

竹坊大藏

金拾五兩

右之如くにて二階堂へ賜りし二人扶持は社寺領上け切之布達面になし思ふに從來社領の內よ

り給與せられたるなるへし

按に　有徳公には御在藩中三山の如き大社にして永世尊嚴を保持敬神を表せられん事藩力實に容易ならす既に三公將軍奉行の古制ある等御所感もありしならん幕府御繼承間もなく三山へ御大刀馬代御奉納各社度々御再建又再々日本國中總勸化を免せられ　淨圓大尼公（有徳公御生母）御初めよりも御寄附金ありといふ（幕府より　御寄附金發端之事等は元政事府享保二十一年五月之附込帳といふに記載ありて信等知る處也し維新後和歌山縣廳へ引渡し火災之際燒失之よし也）又後來京大坂に於て富闔興行の事をも　公許を得たり如斯特遇の庇蔭に因み社家輩頻に醵金利潤を計り以て三山維持修繕之費に充んとし即ち金質を左之四種に區分し積金となす

御寄附金　勸化金　再勸化金　富益金

然るに文政天保年間に至り右四種積金之内壹万兩を引分け他に九万兩をさし加へられ拾万兩の貸金となし江戸府内に於て貸付利殖の方法を組織以て　幕府へ出願公許を得たり於是本町へ貸付役所を設置廣く貸付事務を創業都て執政府に直轄せられ貸付方頭取手代等の事務員を置き一切を管理統治す又京坂奈良堺等へ其出張所を設置次第に貸出し旺盛に至れり江戸の如きは大小の諸侯初め一般之を至便とし續々利用金融大に開達恰も今の一大銀行然たるか如し元來　將軍家より御寄附金を利倍之主義なるゆへ熊野三山御寄附金貸付所と稱し私ならさるか爲め負債者返金違約の時は直に　幕府に訴へ寺社奉行の裁決を受くの特權を有し毫も損失の患なけれは大に世の信憑を博し何人を不問爭て預け金を依賴し來り苟も確たる紹介によらされは拒絶せられんを恐るゝの勢となれりされは貸付の利潤少からすして是を以て三山營繕の方策を規定し社人救護に至るまて大小の事皆辨理せられたり是其大略にして最初貸付所設立に付ては本宮の社人玉置縫殿大に盡力する

處ありしといふ貸付所后築地の藩邸に移轉同邸堀田家へ御相對替の後は芝今の芝離宮其跡也殿内に設置す依て芝熊野三山御寄附金貸付所と稱せり然るに慶應三四年の頃は天下騷擾幕威振はす諸侯東西に奔走負債顧るの暇なき形勢と成り業務頓挫を來し未曾有至難の厄に陷り續て維新に及ひ遂に全然瓦解に歸し公私莫大の損害を負荷す時勢の大變又如何ともなすへからす詳なるは財制の部を參觀すへし

幕府の時有名之大社寺再建等には諸國勸化寄進を被免其節天下に公布せらるゝ制なれとも多くは十五國乃至三五ヶ國又は江戶京大坂等に限り日本國中總勸化と云はたとへは出雲大社の如きを然りさし大小皆資格嚴重の制ありし也三山の如きは偏へに德廟の御遺德によるか故なり

一德廟より三山へ御奉納の御太刀は奧熊野郡宰御太刀見分と稱し每歲十月三山へ出頭於神前鞘を放ち監查をなすを恒例とす信亦嘗て事に預りたり

一慶應四年辰年正月三日參與方より左之通被相達

如別紙　御沙汰候間爲心得申達候事

熊野三山社家

別紙

自今可爲參與支配候事

但過日御達書少々行違有之候間更本文御沙汰候事

右一通

自今不爲檢校宮御扱御支配事

一明治三午年十二月左之通御屆

熊野三山社田高并管轄等之儀先達て神祇官より御尋に付去る六月中取調候節新宮那智兩社は新宮藩管轄に候旨御屆申上御座候處右は其砌相混し有之候儀にて全く三山共當藩管轄に有之候依て別紙取添改て御屆申上候以上

庚午十二月

辨官御中

別紙

一本宮社田三百石　和歌山藩管轄　本宮村

一新宮社田三百五拾石　同　新宮初五ヶ村

一那智社田三百石　同　二河村等

右三山社田合九百五拾石

一明治三午年十二月廿六日神祇官直支配神社熊野三山願伺屆等自今辨官名宛にて和歌山藩廳へ爲差出同廳より辨官へ可相廻旨太政官より被　仰出日前國懸社の部に記す

一明治四未年六月廿九日於神祇官左の達書北小路大佑被相渡仍て本宮總代へ達す

熊野座神社

水崎大明神社
妙法山阿彌陀寺

國幣中社列別紙之通相達候事
但御改正向追々　御沙汰有之候迄は先從前之通相心得可申候尤爵位有之分は早々返上可致候事

辛未六月　　神祇官

熊野座神社（紀伊國牟婁郡本宮村鎭座）
國幣中社列自今官祭被　仰出候事

辛未六月　　太政官

一同日於同官千葉少史を以被相渡
熊野座神社今般御改正に付　國幣中社列被　仰出候間從前直支配之廉地方官へ被附候事

辛未六月　　神祇官

熊野新宮社
熊野那智社
今般御改正に付以來地方官支配と可相心得候事

辛未六月　　神祇官

右前項は本宮總代後項は那智新宮總代へ達す
水崎大明神社（口熊野上野浦）
妙法山阿彌陀寺（同郡那智山上生院）

補陀洛寺　同　濱宮村

紀勢御領分高帳記する處左の如くにして明治三年上地布達面亦同し續風土記水崎明神社領の事あれ共年次を掲けす補陀洛寺へは今新宮より佛供料として高五石を寄附云々とし其他記する所なし思ふに　龍祖の時那智山領御寄附の時共に御寄附爾來繼續し來れるならん續風土記補陀洛寺の五石水野家よりとするは誤なり

高貳石七斗四升七合　上野浦　水崎大明神社領

高四石壹斗八升　色川組平野村　妙法山領

高五石　那智組濱の宮村　補陀洛寺領

一明治二巳年八月廿日左之書付外務省より被渡

紀州汐岬明神社地へ燈明臺取建相成候に付右社舊地へ遷社之儀氏子村々之者申立之趣も有之旨に付神祇官へ引合候處舊地へ遷社にて神職共希望致候はゝ移轉可致旨に付其旨可申付尤入費は燈明臺掛りより可相渡事

一按に　觀自在公妙操院殿の御法号を妙法山阿彌陀寺へ御納により天保三壬辰年十二月廿九日御祠堂金三拾兩御廣敷御用人奉にて御寄付ありたり

無量壽寺　奥熊野尼寺　新宮町　禪宗臨濟派

續風土記に曰く堀内安房守の時寺領十五石となる慶長七年淺野右近の時八石となる當代是による

高八石　新宮　無量壽寺領

安樂寺　奥熊野長生山　有馬村　禪宗曹洞派

風土記に曰く熊野五ヶ寺の一にして近鄕の大寺也堀內安房守の時迄は寺領も百石寄せたりしに天正年中梵宇盡く兵火に罹り後纔に茅屋を造る慶長七年淺野氏に愁訴して高十石を寄す封初是によりて賜ふ　寺地は其高の中にあり

高拾石　口有馬村　安樂寺領

產田神社　奥熊野　奥有馬村

續風土記に曰く社領は堀內氏の時までは猶田地五町ありしに淺野氏の時收公せらる其頃淺野右近に愁訴して高五石を免さる元和封初も舊に依りて寄附せらる又寛文年中花の窟(イハヤ)と共に殺生禁札を給へり享保十七年　公より燈籠を寄附し給ひ御修覆所となる

高五石　有馬村　產田社領

大馬權現社　奥熊野　井土村

續風土記に曰く天正三年堀內安房守社領九石を寄附す慶長六年淺野家五石を寄附せり封初これを襲用ひらる

高五石　井土村　大馬權現社領

若一王子權現社　奥熊野木本組木本浦

續風土記に曰く淺野家社領三石七斗餘を寄附す元和封初此による

高三石七斗五合　木本浦　王子社領

極樂寺

極樂寺　奥熊野瑞光山　木本組　木本浦　禪宗曹洞派

續風土記に曰く熊野五ヶ寺の一なり淺野家寺領十三石五斗三升二合を寄附す元和の封初此に依らる

高拾三石五斗三升二合　木本浦　極樂寺領

長德寺

長德寺　奥熊野寶珠山　尾呂志組　上野村　禪宗曹洞派

續風土記に曰く堀内安房守改めて高二十石を寄附す淺野氏慶長檢地の時寺領を沒收し高五石五斗を寄附す元和封初是に依り給へり

高五石五斗　尾呂志組　上野村　長德寺領

光福寺

光福寺　奥熊野寶鏡山　北山組神山村　禪宗曹洞派

續風土記に平維盛建立にて大和大納言の時高五十貫の地を寺領に寄せらる其後淺野家の時改めて米五俵を附すとあり國初增して五石を賜ふ

高五石　神山村　光福寺領

東光寺

東光寺　奥熊野藥王山　本宮組湯峰村　眞言宗古義

湯峰藥師堂の別當也續風土記には王子權現の社領五石社堂共に宮の修造といふとあれ共紀勢御領分高帳湯の峯村の條に外高五石藥師寺領とし明治三年上地布達書にも左の如くにして別に本宮社領三百石上地の事あり風土記誤れる也

高五石　湯峰村　東光寺領

右御寄附の年代不明蓋し亦國初の時なるへし

一當寺に就て一奇談あり明治の初年信奥熊野に奉職湯の峯村は管內にして東光寺の二重多寶塔は後鳥羽帝の御建立なるに折柄神佛混合不成旨太政官令出つ境內王子權現社（少彦名命を祀る）あるものから俄に多寶塔存置しかたき場合に至り工匠種々に苦辛村民打かゝり綱もて引倒さんとすれ共堅牢無比小動きもせす衆村あくみ果たりと報し來りし故時々綱を引居つゝ時機に從ふへしと諭旨せしに終に破却の難を免れ今に存するといふ無情の塔堂時によつて幸不幸ある奇といふへし

金剛寺　奥熊野護國山　尾鷲組　中井浦　禪宗曹洞派

續風土記に曰く堀內安房守の時迄は寺領高四十石ありしに淺野家の時沒收せらる元和の後今の寺地高三石六斗餘を免許ありて熊野五箇寺の一と定めらる

金剛寺領

高三石六斗　中井浦

紀勢御領分高帳には三石六斗九升五合とあり

總持寺　名艸郡受陽山　梶取村知足院　淨土宗西山派

續風土記に曰く　南龍公總持寺二十二世南楚上人を歸依し給ひ屢城中に召て佛理を問はせられ稟米十石を加へ賜ふ

一元和御切米終身錄に

梶取寺

寛永元子新規

拾石

以來不相替當時迄渡る

一續風土記に近年　一位老公親筆の廣開淨土門といふ五字の額を賜ふと

寺領　御切米拾石　　梶取村　總持寺

禪　林　寺　原見坂 南嶽山　車坂とも云　禪宗臨濟派

續風土記に曰く開山は夾山禪師舊駿州寶泰寺第四世也　南龍公當國に遷らせられ禪師を召されて冷水浦海雲寺に居しめ和歌浦に移る寛永八年當寺を建立して（此地は大泉寺の舊地）禪師を以て住職として寺產八十石を賜ふに至る又香合一口を賜ふ

按に　大泉寺は淺野家の菩提所にて初甲州にありしを移したる由淺野家國替後燒失外に且下もなく無住同前に至れりと也同寺の下町家の後に灰塚と云あり幸長を茶毘の所と云傳ふ

按に　紀伊國名所圖會の說是と異なり今續風土記に從ふ

紀伊國人物誌に曰く　府南禪林寺開祖夾山和尙藩祖時最蒙禮遇後築室於貴志村山中居爲名碧巖院

一元和御切米終身錄に

寛永元子新規

貳拾石　　夾山和尙

寛永二丑より四十石に成る同十酉より八拾石に成る正保元申年より禪林寺と認候樣以來不相替當時迄渡る

貳石　　くわつ道

寛永二丑より上る死失不知

拾四石　　　　　　　　　　　　　　　　所化衆　十四人

寛永二丑より上る成行不知

按に　くわつ道は夾道か所化亦其徒弟ならん雲水料として別に賜りしを寛永二丑年より夾山之貳拾石を増して四拾石となし
くわつ道所化の分上りしならん

一寺説に曰く　龍祖夾山に參禪被遊開祖の代には別に寺祿もなく一切御賄ひを賜りしに嘗て寺祿の事御沙汰ありたれ共夾山固辭し代りに海草二郡の托鉢を請ひ奉りたり夾山遷化の時遺言に當寺は一切君公の御建立なれは死後には清淨に灑掃し速に返上すへしと弟子南谷其意を奉し返上に及ひたるに誰にてもよく夾山の遺旨を繼くものは續て住職すへしとの下命ありて此時初て寺祿貳百石を賜りたり云々と然らは八拾石は夾山其人に賜りしを死て後に寺祿となりしなるへし

一當寺の什寶に　龍祖御輿中に御手記といふ御道中雜記あり又象牙の御香箱四つ入子にて金蒔畫なるあり又　舜恭公御染筆南嶽といふ二大字の額を賜ふ夾山の事高僧傳に記す

禪林寺

一寺領御切米八拾石

吹上寺

吹上寺　湊道場町天年山と号す　禪宗臨濟派

續風土記に曰く開山圭瑞和尙元和の頃京都韶陽院より來りて重顯寺に住す　南龍公入國の後圭瑞を歸依せられしは〱召て禪理を談せしめ給ふ重顯寺の隘陋なるを以て寛永の初吹上岡山に於て新に一宇創建せらる吹上寺と號し圭瑞に賜ふ吹上寺舊跡今大智寺の境內にありといふ寛永九年今の地に遷さる寺領現米四

拾石寺内に正清夫人茶毘の跡あり土を積て墳をなせり享保年中碑を其上に建らる近年　一位老公親筆の海無量といふ三字の額を賜ふ　清溪公親筆畫二幅をも藏す

一元和御切米終身錄に

寛永元子新規

三拾石　圭瑞和尚

寛永二丑より四十石に成る同五辰より吹上寺と認候樣同十酉より貳拾石圭瑞へ被下候同十二亥より貳拾石圭瑞分上る死失不知以來不相替四拾石吹上寺へ當時迄相渡る

一寺領

御切米四拾石　名艸郡　吹上寺

一當寺へ往古より御祠堂金千百五十兩御納相成有之事

一寛政六寅年十一月左之御方樣御遺骸當寺へ御葬送

緣覺院殿　觀自在公御男 寛政六寅年十一月廿三日御流産

明治二午年五月以來御付屆左之通り相成候旨極る

緣覺院樣　御佛供料　年々金百疋つゝ

一明治八年七月報恩寺へ御改葬相成たり

日前宮國懸社　名艸郡秋月村

續風土記に曰く天正十三年豊太閤當國發向の時國造幷神領の徒多く根來寺と一味なりとて根來寺

を滅して餘怒當社に及ひ宮殿を破却し社木を伐盡し神領悉く沒收せらる國造忠雄神靈を守護して亂を避て高野寺領毛原といふ山里に遁る同十五年國主大和大納言秀長卿若山目代桑山修理大夫に命して假殿を造立して神靈を迎奉り聊其形を存して崇祀れり天正年中國中檢地の時社地僅に除地となる事を得たり

慶長六年に至りて淺野家十五石五斗を以て社領とす元和封初國中の故事を訪問せられ如此大社衰廢せるを嘆かせ給ひ寛永四年四月古の社地に因て其區域を定め樹を植へ溝を穿ち南面に馬場廣芝を作り宮殿雜舍皆古を考へ其宜きに從ひて修造し給ふ社領を增して四十石を寄附せらる未た悉く舊貫に復せすといへとも其規模殆備へり且後世南部習合の祭をなし造立の規制に至るまて其習に流るゝ者多し此時に至て古の神典に依て其弊を一洗せらる實に千載の一時といふへし

又曰く享保六年辛丑十月十六日　有德大君上使淺野壹岐守をして御太刀一振備前盛光を奉納し給ふ

大慧公奉納の繪馬あり

一文化三年　一位老公寛永年間に　南龍公當社を再興し給へる芳躅を追はせ給ひ時の國造三冬の家格を改めて官位の高下に拘らす諸事雲蓋院權僧正と同し格に待遇せらるへき由を被命同五年社領を增して三百石とし國造官位昇進之時舊例に復して武家傳奏の執奏に定め給ひ　禁裏並に　將軍家へ御坂大鵬を獻上する事を命し給ふ是よりして万の事古の規制に循ふ事を得たり以上續風土記

一社領高三百石　內高二百六十石 名草郡 秋月村 高四十石 同 同

一寛政十年年六月　舜恭公より御內々にて日前國懸兩大神宮へ御祈禱料金百拾兩御寄附元金は預

り置月一割の利子下付の處文化元子年十二月國造紀式部より願之上元金下付せらる

維新後

一慶應四辰年八月十二日紀清主神祇官直支配御願立左之通水野十大夫を以て御差出

今度　王政御一新に付諸國大社之分御取調に相成候趣に付日前國懸兩大神宮は社柄の儀に付此度紀清主上京仕別紙之通願書幷舊記略書再取添奉願候儀に御座候右は清主歎願之趣何卒出格之御取扱を以て御許容被成下候様仕度於私も偏に奉願候恐惶謹言

八月　　紀伊中納言

神祇官御中

翌十三日上け紙指令

紀州國造之儀は既に取調に相成候間上京候はゝ當官へ可差出候事

舊記寫一冊留置候事

紀州日前國懸兩大神宮社柄之儀幷國造家等之儀は巨細書認可奉申上筈之處別冊を以乍略儀言上仕候今度國造家歎願之儀は兼々神祇官より御直御支配に相願度奉存居候處當春熊野三山社家等今般　王政御一新に付願之通御直御支配に御許容相成候趣奉伺候就ては兩宮社柄之儀に付何卒御直御支配蒙　仰候様奉希上度候御聞濟に相成候得は國造初社役末々子々孫々に至迄實に家之面目冥加至極難有仕合奉存候此段歎願仕度候間御取成之程偏に奉願上候以上

八月　　紀伊國造清主

神祇官御役人中

十三日上け紙指令

紀伊中納言へ及達候通可承事

右に付八月廿三日於神祇官左之通被　仰付候旨寺社奉行へ申届る

紀州國造　紀伊清主

願之通當官直支配被　仰付候事

慶應四戊辰年八月　神祇官

一明治三年年六月廿四日神祇官より左之通日前宮神官へ可相達旨書付被相渡

日前宮神官

一位階　一家系
一古代造營年限之有無
一今時府藩縣又は産子造營或は勸進等總て造營之先例　附造營料之高
一社領現米高　附地方或は切米雜租等之別
一一社中之職名
一古來より之官位
一今時之格式
一今時之家祿　附社領祭料之分配或は地方切米雜租等收納之實數

一一社中男女人員

右十ヶ條區別之廉書九月限可差出事

庚午六月

神祇官

一明治三午年十二月廿六日太政官より左之通被　仰出

和歌山藩

其管內神祇官直支配神社日前國懸熊野三山之儀願伺屆等是迄京都出張神祇官へ差出候處自今辨官名宛を以て其廳へ爲差出其廳より辨官へ可相廻候事

庚午十二月

太政官

一明治四未年六月六日太政官より被　仰出

和歌山藩

今般御改正日前以下神社以下へ別紙之通被　仰出候條爲心得相達候事

辛未

太政官

日前神社　紀伊國名艸郡秋月村鎭座

御改正官幣大社列自今官祭被　仰出候事

辛未五月

太政官

國懸神社　紀伊國名艸郡秋月村鎭座

同文

明治八年四月廿三日御藏書之内を御寄附あり因に記す

江家次第	廿　冊	王代一覽	七　冊
大祓詞後釋	一　帙	御鳥羽院御集	三　冊
鹿嶋香取兩社勘文	一　冊	宮中秘策	十四冊
東　鑑	廿五冊	大神宮延暦儀式帳	二　冊　本居大平筆
桃華蘂葉	一　冊	有職問答秘錄	一　冊
類聚雜要抄	三　冊	明德記	三　冊
倭姫命世紀鈔	一　冊	服色圖解	一　冊
禁裏政要濫觴追加	一　冊	神名秘書	一　冊
御鎭座傳記	一　冊	寶基本紀	一　冊
管見記	廿　冊	勅撰作者部類	二　冊
本朝文粹	十五冊	職原支流異見抄	二　冊
應仁物語分記	二　冊	應永記	一　冊
年年行事	一　冊	應仁記	二　冊
梁塵愚案鈔	二　冊	善隣國寶記	三　冊
袖中鈔	十　冊	御鎭座本記	一　冊

久昌寺　井原町万年山　禪宗曹洞派

續風土記に曰く當寺開基全超禪師駿府大林寺に住せしに元和五年　南龍公に從ひ來て大泉寺に（一書に大泉寺は淺野家より高廿一石六斗を寄附の處此節明き寺なる故全超を住せしめ給ふ然るに大泉寺本寺甲州大泉寺御國へ出頭寺法の通上申に付暫く鑑司にて御差置後大泉寺後住被仰付右寺領御戻し寛永九年の頃全超へ新寺建立被命）住し寛永九年の頃　命を奉して新に寺を建立す今の地廣野にてありしを被下繩張して堂舍を建立し久昌寺といふ同十二年寺領十石を寄附せらる

一一書に久昌寺の領は名草郡岡島領にて御寄附寛永十二亥年安藤飛驒守より後藤彌次兵衞へ申渡有之全超毎々御城へ被召法問被　仰付寛永十三年子冬江湖興行被　仰付右江湖の節當寺へ被　爲成問法御聽の上白銀三拾枚を賜る

一元祿八亥年正月御改に付東西百六拾間南北六十間四方四尺通り砂留石垣被　仰付

一寺領高拾壹石四斗六升三合

宇須村　久昌寺

大恩寺　吹上寺町

名所圖會に曰く寛永中　國祖君の顧命によりて玄恕上人を遠州横須賀撰要寺よりこゝにうつす之を以て人稱して横須賀寺ともいふ（續風土記に曰く寛文五年横須賀黨相謀て舊君大須賀出羽守忠吉の石塔を當寺に建事を銅板に彫て寺に藏め不朽を謀る）淨土傳燈總系譜に曰く玄恕上人初住撰要寺適依紀府請到紀之和歌山開大恩寺大智寺

一書に曰く玄恕上人芳名四方に高く法德天下に普し其頃　亞相公（賴宣公）上人を歸依し給ふこと淺からす終に南紀に請して大恩寺を再建してこれに中興たらしむ

一元和御切米終身錄に

寛永十酉新規

四拾石　　大恩寺

寛永十四丑より上る

一同寺什物に　清溪公舜恭公の御染筆を藏す又殺生禁制の制札をも下付せらる檀下に横須賀大御番之人々多し寛永十四年寺祿上りし後別に下賜なかりしとみへ明治三年太政官令により諸寺社領上り切之時何等なし

大智寺　吹上寺町東の丘の上則岡山也 紀隼山　浄土宗

御譜畧に曰く是歳寛永九年紀府に大智寺を御創建あり　台徳公之御靈牌所とし給ふ翌酉年御靈屋造畢戌年寺造畢

名所圖會に曰く寛永年間　國祖君の御發願によつて開山聖譽玄恕上人の艸創也

一書に曰く亞相公（賴宣公）玄恕上人に歸依し給ふこと淺からす南紀に請して大恩寺を再興せしめ尋て寛永九年大智寺を創立して開基とす

一元和御切米終身祿に

寛永十二亥新規

四拾石　　大智寺

寛永十七辰七拾石に成る明曆元未年百石に成る以來不相替當時迄渡る

按に寛永九年正月廿四日　將軍秀忠公薨去　台德院殿と諡し尊廟は芝增上寺に在り　龍祖之御哀悼一方ならす爲に大智寺を御創立同宗之玄恕上人を開基として奉祀し給へる也巨刹之結構宏麗は

雲蓋院に伯仲す爾來　幕府之御歴世增上寺方之　御靈屋を造營御年忌之法會歳時之御參拜等齊明正服之典莊嚴尊具之儀肅々崇敬を盡させらるされは雲蓋院の和合院は上野方大智寺は芝方と恰も幕府の兩山に於けるの姿なりし御靈屋及御寄附之金穀左の如し

台德院殿　方五間拜殿廊唐門瑞籬御供所あり　御切米　百　石

文照院殿　　御靈屋料　銀　五枚

有章院殿　御靈屋御合殿方四間　同　銀　五枚

惇信院殿　唐門瑞籬あり　同　銀　五枚

愼德院殿　　同　銀　五枚

明信院殿靈牌殿　四間半三間　同　米　拾俵

常憲公姬君　高林公御簾中鶴姬君御事芝增上寺へ御送葬御廟同寺　御靈屋圖卷末に附す

信恭院殿　　御佛供料　銀　三枚

舜恭公御女堦姬君松平陸奥守齊宗仙臺大年寺へ御葬送文政十年十二月　顯龍公特旨を以て御靈牌を大智寺明信院殿御牌殿内右の方へ御安置

普明院殿　　御祠堂　金貳拾兩

菩提心公御由緒の方上野護國院に葬る靈牌當寺に安置先きに祠堂金七兩御寄附の處文化八未年閏二月更に拾三兩を增し合金貳拾兩御廣敷取扱にて御寄付

圓妙院殿　　同　金四拾兩　文化十酉年九月改て金廿五兩白銀廿五枚に御增

菩提心公御女松平相模守へ許嫁御廟護國院靈牌當寺に安置先に永代祠堂金七兩御寄附の處文化八未年閏二月更に三十三兩を增し合金四拾兩御寄附 御廣敷より

惇信院殿　永代御祠堂　金五拾兩

文化八未年十二月御廣敷取扱にて御寄附

法成院殿　同　金貳拾兩

菩提心公御由緖の方千駄ヶ谷仙壽院に葬靈牌當寺に安置文化九申年十二月御廣敷取扱にて御寄附

保福院殿　同　金貳拾兩

菩提心公御由緖の方護國院に葬靈牌當寺に安置文化九申年十二月御廣敷取扱にて御寄附

孝順院殿　同　金五拾兩

大慧公御三男松平織部正賴央君御廟護國院靈牌當寺に安置文化十一戌年九月御廣敷取扱にて御寄附

凉心院殿　同　金五拾兩

大慧公御由緖の方護國院に葬靈牌當寺に安置文化十一戌年九月御廣敷取扱にて御寄附

阿彌陀尊　東　同　金四拾兩

波切地藏尊

右慈讓院殿御部屋 觀自在公御所持當寺へ納付文化十一戌年九月御廣敷取扱にて御寄附

一文政十三寅年閏三月廿六日大智寺　台德公御靈屋御修復同年十二月落成同廿五日御假殿より正遷
座

一明治二年十二月朔日左之通達す

大　智　寺

此度藩知事御拜命御家祿十分一と被　仰出候に付万緒適宜之御改革無之候半ては何分御家算難
相立候に付甚御不快には思召候得共不被爲得止　御宗家御靈牌は御邸內へ御安置　御手前　御
靈牌は　御廟所有之御寺へ御遷座可被遊旨被　仰出之
件之通に付其御寺に御安置の　御靈牌等御遷座振等は追て可相達事

一同三午年五月十六日大智寺　御靈牌御邸內へ御遷座依て左之通下附

金五拾兩　　　大　智　寺

此度　御宗家且　御手前御方々樣御靈牌御遷座相成候處是迄數年來無滯勤行被致候に付被遣之

金千疋　　　大智寺　役　僧

此度　御宗家且　御手前御方々樣御靈牌御遷座相成候處是迄數年來右御用筋無滯相勤候に付被
遣之

一寺領御切米百石　　　大　智　寺

右明治三年一般に上地となる於是住僧等は田中大立寺へ立退たるよし佛閣は一時兵隊寄留所等
と成り種々變轉之末遂に廢毀せられ全く空地と成る今岡山師範學校境內其跡なり

若宮八幡宮　有本村小名栗林

續風土記に曰く寛文記に寛永十二年　南龍公山本甫齊に當社の來由を尋給ひ社を今の地に造り神躰を移して國城艮位の守護神とす其後御再建ありて祠宇美麗を加へ同二十年六月七日遷宮あり祭禮三月十五日八月十五日也兩度共に流鏑馬あり寛文中祭祀料三石六斗を寄附せられ享保十五年御供料十石を寄附せらる末社御香宮は　南龍公伏見城にて誕生し給ひければ其地の座神なるを以て當地に勸請せらる

一祖公外記に曰く　栗林八幡　寛永二十年丹波守へ被　仰付八幡宮（鎌倉鶴岡八幡宮御神体也此以前に宇治郷前嶋今の二十五本松に社頭有之又今の疊屋町下之川原に鶴岡山大道寺有之處天正十三年秀吉公討入之節大道寺も宇治村も兵火に燒失八幡宮は殘る）栗林へ御遷座御神躰十一面觀音は御先祖伊豫守源頼義朝臣之御建立にて烏籠様之厨子え安置候頼義公義家公は此宮へ御旗を被納候御例を以て同年御旗を被納候然る處御逝去後御城へ被納候

一享保六丑年十月十七日　將軍有德公より淺野壹岐守を以て眞御太刀一腰御馬代金御進納

御太刀は備前國秀光勝色糸柄赤銅金具武田菱色繪七子鞘金梨子地

一社領高十五石三斗三升二合　　名艸郡有本村　八幡宮屋敷馬場成

外に

祭料米三石六斗

御祈禱料金二十兩

伊太祈曾社　名艸郡伊太祈曾村

續風土記に曰く天正年中豐太閤の南征に社領悉く沒收す然れとも羽柴秀長卿の領となりしより社

殿を再建し神田及境内社人の居地迄寄附せられ淺野氏の時に村中にて高五石を寄進し且文安の文書に載する所の山東莊五町八反の地課役を免許す元和以後の制も亦これに因らる中世　鳥羽上皇根來へ當莊を寄せ給ひしより覺鑁上人伽藍を建伊太祈曾社の奥院と稱し祭禮專ら佛家の式に變したりしか後貞享四年復古して佛家の祭典を退け所謂奥の院を廢して唯一に歸せるより今は正月十五日管粥の神祭九月十五日流鏑馬等あり

一元和御切米終身錄に

伊太祈曾祭禮料

寛永十四丑新規

四　石

以來不相替當時迄相渡る

一享保六丑年十月十七日　將軍有德公より淺野壹岐守を以眞御太刀御馬代御奉納あり

一社領

名草郡寺内村　伊太祈曾社

高貳拾石

外に

御供米　拾　俵

右貳十石に增額且御供米を付せられし事いつ頃よりか不詳

粉　川　寺　那賀郡　粉川村　補陀洛山　願成就院　天台宗

續風土記に曰く天正十三年豐太閤の大擧に至りて五百有餘の堂塔雜舍本坊子院皆一時の焦土とな

り世に傳ふる處の綸旨院宣御教書の類寺寶旧記皆焼亡散乱慶長以後天下治平に屬し廢せるを起し絶たるを繼き稍古爾に復するを得たり淺野家國主たる時新に寺領高四拾六石七斗餘を寄せらる南龍公の御時これに依り用ひられ又新に祭禮料五石を賜ふ其餘御寄附田幷新開田祠堂金等種々あるを以て此等を合せて今時寺產總高七百石に應すといふ

一名所圖會に曰く粉川觀音境內御池坊は當寺の頭坊にして寳曆四年高百石を寄附せられたり

一元和御切米終身錄に

寛永十四丑新規

五石　　　　粉川祭祀料

以來不相替當時迄相渡る

按に　御池坊は當山四所靈地の一觀音出現地にして　華山法皇西國御巡禮の時仙驛をこゝに駐め給ひ後しば〳〵　臨幸あり因て　勅して寺号御池坊と賜ふとあり名所圖會には寳曆四年より高百石御寄附とす然れとも濱中陽照院粉川御池坊は往昔より和歌雲蓋院御法會等には必す參列勤行の制規にて此兩院は格別の待遇を受け御齋非時被下も格別之旨雲蓋院舊記にも記する如くなれは或は　龍祖の御時より賜りしに非すや義詳ならす

一當寺境內の奥に十禪律院あり亦四所靈地の一寳鐸地也本堂薦福殿の額塗上門寳鐸塵の額は共に舜恭老公賜ふ處の親筆也土豪兒玉仲兒の談に此院は御池坊惠長　舜恭公へ請願に依り內資を以て御建立あらせらる此時仲兒の父某內命を奉し大坂に到りて木材購入せしに代銀三十貫目にて悉皆を辨せり當今の五百圓許に當る物價の低廉思ふへしと語れり佛殿皆葵章の屋瓦なり

一寺領

高四十六石七斗二升五合　粉川村　粉川寺
米五石　辰祭料
高百石　粉河　御池坊

誠證寺　那賀郡西坂本村 智光山　法華宗

續風土記に曰く此村は養珠大夫人膏沐の邑なりし故寛永十五年大夫人兩親の爲に當村に一寺を創立して位牌所にせらる其父君の法號を采りて寺號とし母君の法號を取りて山號とし知光山誠證寺と名く寺領十六石五斗弁山林一ヶ所を寄附せらる正德二年淨圓大夫人法華經一部佛具數品を寄附せらる 別項佛祖統紀に日存上人を請して開山祖とすとあり

寺領高十六石五斗　西坂本村　誠證寺

崇賢寺　北新金屋町 中島山　淨土眞宗高田派

安藤家舊記に曰く寛永十三乙亥年五月十三日直次江戸一つ橋外代官町上邸に於て逝去藤巖院崇賢居士と謚す直次遺言にて市ヶ谷左內坂下邸にて火葬遺骨は參州桑子明源寺先塋の地に葬る後に紀州和歌山城北に一宇を創立有て崇賢寺と號す 崇賢寺は三代義門の世に建立と云

一續風土記に曰く 寛永十六年國老安藤氏義門其祖父直次法謚藤巖院崇賢居士の爲に當寺を創建す其法謚を取て崇賢寺と号け尾州星崎海隣寺の僧教誓を請して開祖として寺產百石を寄附し代々の菩提寺とせり

按に 野史武臣傳に賴宣爲造立崇賢寺於和歌山追墓祭祀と記し上田貞亦後公思其積勞爲建崇賢寺於府下と記す信之を安藤家に質すに全く前記の如くにして　龍祖爲めに崇賢寺建立には非す唯寺領屋敷地を賜ひし也二代直治は直次死するの翌年寛永十三年卒す故に三代義門造立の由なり

崇賢寺屋敷成　中の島村

紀勢御領分高帳

高八石五斗二升壹合

護念寺　吹上寺町　浄土宗西山派

當寺記錄に曰く寛永十七庚辰年春三月依御國主從二位大納言頼宣公之尊命爽仙境山之西麓結界四至恩賜此境内東西七十八間南北五十六間也當寺九世念譽拜領之

一紀伊國名所圖會に曰く　寛永十七年　國君の命によつて仙境山の西なるふもとの地を平けて四至結界を給り永く國家鎮護の大道場となれり

續風土記に曰く　當寺に清溪公親筆器書其他若干ありと云々

矢の宮　海部郡關戸村

天保六未年當社脈行の書に曰く當社往古は社檀嚴重に境内も廣大にして社領の地面も五町餘附有しを淺野殿御領地之時縮めて今の境内の如くになれり中略國(社)祖カ南龍院様御入國被爲在御鷹野として御城下近在　御巡見被爲遊候節此邊御狩被遊候處白鷺二羽當社のほとりに餌はみ有しを幾度も御鷹あはし給ひしか御鷹は中程より戻りて鷺を得つかます不思議に思召され弓矢と仰られて御矢を放ち給ふ事再三正しく鷺の只中と覺へても御矢は跡へ戻り一つも中らす鷺は猶ゆう／＼と餌はみ居けれは御近習に手取にせよと仰られて手取にするに心よくとらへさせなけれは　君にも不思議に思召され兩の翼をあけ御覽ありけれは矢宮神祕の矢よけ御守翼のうちにありこれ神の御つかひならんと仰られ其儘鷺を放ち給ひて神威の程御感得まし／＼夫より直に御參詣遊されける折

ふし御社破損し有けるを御覽ありて其後寛永年中御社を御造營仰付られ且氏下は御城下過半鄕村廿一ヶ村御寄付遊され殊に尊敬ましましける云々

一祖公外記附錄に曰く　矢之宮は雜賀乱に燒失跡は小社にて社地も社領も無之處寛永十四年正殿一宇末社二宇拜殿瑞籬內外鳥居等御再興有之古社は吹上明王院山王社に用候又寛文年中神厨齋館等新規に御造營有之候當社は七ヶ所の内にて御祈禱之節海士郡は矢の宮紀三井寺へ被　仰付一社一寺つゝ有之候

一當社は　南龍公の御時より社領高三石御寄附と云殺生禁斷之御證文延寶五年四月御修復の棟札あり九月十三日祭禮には　兩君上より御名代被遣流鏑馬執行に付御馬三疋出役尤駈馬も執行元文年中より例年右之如し

殺生禁斷之御證文

雜賀庄矢大明神社頭殺生禁斷之事依爲　東照宮御境内一圓先年御證文不被遣之條神主此旨可承知者也仍如件

寛文九己酉年九月　日

下條彌右衛門

大澤善右衛門

神主　矢田主膳

棟札

紀伊國海士郡雜賀庄關戶村矢宮大明神者弓矢軍陣鎭守護持之神靈也庄内二十一村崇奉之　國君源二品寛永十四年再興正殿一宇末社二宇幷拜殿瑞籬內外鳥居至寛文年中新建神厨及齋館隨破損修葺無闕漏　君今茲命有司修繕焉

延寳五年丁巳夏四月九日

奉　行　喜多村大之丞正丘　九鬼半右衛門藤原篤俊

副奉行　岡本五郎兵衛平重興　菅野久太夫藤原利昌

匠　頭　中村新平光幸

神　主　矢田主膳藤原吉弘

裏書

雜賀庄跨海部名草越紀河所統二十一村也今記焉

關戸（本雜賀村也）　和歌　西濱　小雜賀　塩屋　宇須（附打越）　岡（附廣瀬）　中之島　國有本（偽河水所論今無之）

湊（附吹上）　宇治七日市　宇治六日市　同鷺森（在河南）　粟村　福島　梶取　延時　西土入　狐島

野崎　北島（在河北）

自寛永年中所闢官第民宅新屬本庄者

出島（隷和歌）　雜賀崎　田之浦　小浦　今福　江西　新濱（等隷西濱）　井原町　新吹屋（隷宇津）　以上

社領　高三石　　關戸村　矢之宮社領

正福寺　（那賀郡多多山）　曾屋村　法華宗一致派

續風土記に曰く本尊毘砂門天は元和州郡山の城内に在りしを慶長五年増田長盛改易郡山を立退の時携へ來りて當寺に納む當村並尼辻西坂本の三ヶ村は　養珠大夫人膏沐の地なりければ信仰せられ寛永中田若干を寄せて供物料とし又佛像數軀を納められ眞言宗を法華に改宗する事を命せらる

承徳三年高七石を寄附せらる　按に承徳は承應又は正徳の誤寫なるへし

名所圖會には日遠上人を請ふて中興の開祖とすとあり

一寺領

高七石

曾屋村　正福寺

大野山本遠寺　甲斐國巨摩郡川内大野村一本寺　日蓮法華宗

按に當寺は甲州身延山久遠寺二十二世日遠上人慶長十四年十月開基す本遠寺舊記に棟札には慶長十六年仲夏とあり何れか是なるや上人當寺建立に當り村中の郷士大野丹波後又左衞門と改む信胤所持の田地を割き其半を寺地に寄附す

信胤子孫于今同村に居住當代を片田愛次郎と云其家譜に曰く信胤田地を割き寄付したるを以て上人喜悅不斜記念の爲姓を片田と改めしむ後正保三年紀州家御願により　幕府より大野梅平兩村にて高二百六十餘石の御朱印地を本遠寺に賜ふの際祖先より之由緒を以て紀州家より苗字帶刀を許され本遠寺所領の山奉行を被命爾來代々郷士にて如前々山奉行相續以て維新に至れりと云々

我　養珠尼公は慶長三年御實父蔭山長門守氏廣卒去以來深く佛門に御歸依日遠上人を師として御崇信淺からす度々當山へ御參籠又堂塔御建立遂に　御家御一手の御菩提寺に被定たり依て　養珠尼公以來御由緒の事歷を年序に隨て畧述す

一寛永三年十月　養珠尼公より佛殿御建立

棟札

大日本國甲州河内大野山本遠寺佛殿安泰守護也

寛永第三龍集丙寅應鐘如意珠日浩畢

大工棟梁山田佐兵衛尉依池上新蒸指圖造之

伴番匠

山田杢助

河西右兵衛

池上猪兵衛

青木久右衛門

山田五左衛門

河西杢右衛門

裏に

當御堂　養珠院殿御建立也

日近　書判

一寛永十七辰年四月十七日　尼公於本遠寺　神祖廿五回忌御冥福御追善又七面山へ御參詣
是より先元和五年八月　神君三回御忌の時尼公身延山へ御登山万部經御修行右滿願の日八月廿四日七面山へ御參詣あり是初て御蹈分け之御登山にして本記は第二回之御登山とす

按に

七面山は身延山より四里半の深山なり身延より峻嶺嶮坂を昇降三里白糸の瀧に至る是より直立五十町を登り頂上に達す寺僧曰く尼公御登山を思召立給ふや寺僧等大に危懼該山は往古より女人禁制の靈場若し之を犯さは神罰覿面と堅く留め參らするに出家は在家を善道に導くを本意と爲すへきに信心の爲の參詣を止むるは何そや正法の山に女の登れぬ處ありては法華經の山に非すいつれにも命を捨て分け登り諸人の爲に女の登り初めせんと更に肯はせ給はす白糸の瀧迄御駕に召され此瀧に

て水行御身を清めさせられ夫より御徒歩杖に御すがり五十町の嶮難を不惜身命の御勢ひいさましく御登り七面大明神に法味を備へ給ふに不思儀や何の御障りなきのみならず此時より明神は反て女人の守護神となり以來女人登山を守らせ給ふに至る是偏に尼公の御功力と今に至るまで宗門信徒誰一人仰ぎ奉らざるはなしと云々爾來瀧の邊りに小堂を建立神力坊と唱へ尼公の御像と御蹈分けの御駕籠とを安置しありて登山の男女は此堂に籠り水行をなすの例となれり然るに明治廿九年の秋大風雨にて突然山津波噴出堂後の絶崖一時に崩壞して堂は二丈餘の谷底に押埋められ籠り居たる十三人の者悉く壓死の慘に逢ふ時の堂守熊谷辰向といふは山の鳴動を聞くや否我知らず繻袢一着のまゝ七面山登り口の石階に飛出たるが不思儀にも助命したり此者常々淨行の大信者なるが斯る奇德骨髓に徹し身命を忘れ寢食を捨崩壞の土砂を掘り岩石を除き千辛萬苦辛ふして祖師及尼公の尊像を探り出したるに厨子は未塵となりしも尊像は毫も毀損なきにぞ彌信心肝に銘し百方經營假りに舊所へ茅廬を結び安置を遂く御駕籠は大石の下に敷かれて出しかたく僅に餘材を拾收共に保存せり一見するに通常ござ包み駕籠に見受らるゝ麁品也と該辰向は常時身延山に名物と稱せらるゝ三人の一人にて年六十五六一丁字を解せず幽谷無人の境に孤獨閑棲唯題目三昧を勤行し法衣一枚よりなく食糟糠に飽かず而して日夜神力坊再建の事のみ一心不乱に丹精をこらし無量の辛楚を甞め漸く柱梁其他の諸材を自營準備し得たれとも貳百金の資なければ建築し能はざるに痛心慨歎の躰篤志の至り實に可憐也と頃日公用を帶ひ登山の金原米楠實見の旨談あり十三人壓死の碑を身延山より其他に建設于今歷然たりといふ是等餘談に渉るといへとも尼公御登山の尊像及ひ御駕籠等の來由に關するを以て爰に贅言を付す

一正保二巳年五月廿一日　將軍大猷公より二百六十餘石の寺領を賜ふ御朱印初寺領に關する書類當時保存のもの左の如し

大猷院樣御朱印寫

一甲斐國巨摩郡川內大野山本遠寺領同郡梅平村貳百拾石八斗大野村之內四十九石貳斗餘都合貳百六拾石一斗餘事依爲養珠院禪尼菩提所新寄附之訖全可收納並寺中境內山林竹木等免除之永不可有相違者也仍如件

正保三年十月十三日

御朱印
嚴有院樣御朱印寫
一甲斐國巨摩郡川内大野山本遠寺領梅平村貳百拾石八斗餘大野村之内四十九石餘合貳百六十石一斗
餘事並寺中境内山林竹木諸役等免除任正保三年十月十三日先判之旨進山永不可有相違者者仍如件
寛文五年七月十一日
御朱印
以後　常憲公より　照德公御代替之節々御朱印拜領いつれも同文言但　有德公御朱印よりは免除
依當家先判之例永不可有相違云々とあり畧す
覺
一貳百拾石八斗七升　甲州河内　梅　平　村
一四拾九石貳斗八升九合　同　大野村之内
高合貳百六拾石壹斗五升九合
右之所去酉物成より甲州河内爲本遠寺領御寄附候間可被相渡者也
正保三丙戌年正月十六日
源左衞門
内　藏　允
順　　齊
紀　伊　守

伊　豆
對　馬

御勘定所

右之御證文請取本遠寺領取物成より引渡申候以來爲覺御證文之寫進置候以上

戌三月十三日

平岡勘三郎　印

秋山市之丞　印

本　遠　寺

甲州河内大野山本遠寺境内之事

一北境は北澤南境は鷹之木澤西境は大野山峯切（本〔東カ〕）境は富士川可限

右之分境内之地引渡如此候以上

正保三年丙戌三月十三日

平岡勘三郎　印

秋山市之丞　印

大野山本遠寺

大野山本遠寺境内牓示之事

一西之山境は峯限

一東は藤川限

一北は北澤限天狗松之峯川原之境は角打村之内くわから澤之見通

一南は鷹之木澤限おいのくほの峯川原之境は和田村之内かのこ澤之見通
右寺内之境平岡勘三郎殿秋山市之丞殿御見分之上總百姓立合相渡申所實正也永代爲無違亂一筆指上申候仍如件

正保三丙戌三月十三日　大野村名主　治左衛門　印
已下十九人百姓
連名連印

本遠寺様

此外御朱印地物成六ヶ年平均高境内新開物成平均帳等あり略

一御家よりも制札下付御親書を賜佛閣僧舍御建立等之事左之如しいつれも本遠寺舊記を抄錄す

制札寫

定　本遠寺

一從公儀如御定諸事御法度之趣堅相守之違背仕間鋪事
一山林竹木猥に不可剪採事
附田畑賣買之儀可停止之事
一當寺領之内殺生之儀可停止之事
一總而不依僧俗不審成者は宗門不知(之)[本のまゝ]有之者納所へ可相達事
右之條々堅相守此旨者也仍如件

慶安二年八月　日

一南龍院樣御書

今度寺領之御朱印頂戴之由誠以忝仕合滿足之段察入此方にても大慶之事候爲其如此候不宣

八月廿八日

紀伊大納言　賴　宣　御書判

一御朱印地等境內

境內　南北貳百三十間餘東西百五拾間餘

山林　境內續裏通三百間餘巓嶮岨にて道法難決凡登拾五町程奉存候

一慶安三寅年八月　龍祖尼公の爲本堂御再建佛閣僧舍悉皆落成時恰も　神祖三十五年の御遠忌に當らせらるゝを以て　尼公十月下旬當山へ御參詣御修法あり御逗留二ヶ月に及ひ又七面山に登り玉ふ是を第三回の御登山とす同閏十月下旬富士川御乘船御下向當山日近熱海温泉迄御供なし歸山す

御再建棟札

表

于時慶安第三庚寅年八月上浣三日擧棟次奉圖史（虫喰欠字）

當堂建立大願主　紀州大守大納言源賴宣卿

裏

大日本國內甲州巨摩郡大野山本遠寺者延山二十二祖池上十六嗣法心性院日遠聖人開闢勝地累年修行靈窟也　東照宮大權現御息紀伊　亞相源賴宣卿　水戶黃門源賴房右兩卿之母堂　養珠

院日心大禪尼爲宗門相續外護而歸依彼師年久
故以當山爲菩提道場依之長子　賴宣公欲應賢母志念曾訴
家光大將軍寄附田園以備萬代寺供今亦投産財新建立當堂至孝絕類良奇哉
于時慶安第三庚寅(太歲)天中秋上澣三日
工匠棟梁　中村藤吉郎藤原宗久
奉　　行　桑嶋又兵衞藤原重利
川上小左衞門尉重時
田中甚左衞門尉忠次
住持沙門(前住眞松後住當山)　常寂院日近愼誌(行年三十七歲)

右御建立之佛閣僧舍本遠寺の記錄左の如し

一佛閣僧舍
一本　堂　家根檜皮葺　梁間九間桁行土間葺下し向拜二間に三間
一鐘樓堂　同　同　二階造三間に四間
一仁王門　同　同　「慶長二卯年三月九日燒失」　四間に七間中三間通り
一七面堂　家根苫良　「同」　三間に五間向拜七尺五寸四方
一鳥　居　「同」　明き八尺高さ一丈二尺
一庫　裡　家根苫良　「同」　九間に十一間

一玄關の間　同　同　「同」　四間に五間
一玄　關　同　同　「同」　二間に三間
一書　院　同　檜皮葺　「同」　七間半に拾間
一居　間　同　同　「同」　六間に八間
一廊　下　家根瓦葺　「同」　本堂より書院迄渡り折廻し九尺に四十間なり
一寶　藏　同　同　「同」　三間に四間半
一位牌堂　家根檜皮葺　「同」　四間に六間
一開山堂　同　同　「同」　三間に四間
一祈禱堂　同　同　「同」　三間に三間半
一座　舗　同　苫良　「同」　二間に五間
一同　同　同　「同」　二間に三間
一廊　下　同　同　「同」　庫裡より居間迄渡り三間に拾三間
右廊下に所化侍部屋等有之幅一間通
一腰　掛　家根板葺　「同」　三間に四間
一木小屋　同　同　「同」　二間に三間
一風呂屋　同　同　「同」　二間に四間
一土　藏　瓦　葺　三間に六間

一長板藏　家根板葺　「前同日燒失」　三間に拾三間

一大工小家　同　同　「同」　三間に四間

一中門　同　檜皮葺　「同」　明き一丈扉附左右に腰板塀

一用部屋宅　同　板葺　「同」　三間に七間

一裏門　同　瓦葺　「同」　明き九尺扉潜り附

一坊舍　六間半 十間　茅葺　塔中良圓庵

一冠木門　明き八尺

一坊舍　五間に 八間　同斷　同　玄妙庵

一坊舍　右同　同斷　同　了樹庵

一坊舍　四間 七間　同斷　同　隆性庵

一坊舍　五間 九間　同斷　「前同日燒失」　同　宏善庵

一坊舍　同　同斷　「同」　同　要玄庵

一坊舍　同　同斷　「同」　同　貞性庵

一坊舍　七間 十三間　同斷　「同」　同　淨清庵

一冠木門　「同」　明き八尺扉附

一坊舍　五間 九間　同斷　「同」　同　太仲庵

一坊舍　四間半 八間　同斷　「同」　同　圓性庵

一坊舎　右同　同斷　「同」　同　覺心庵

一坊舎　右同　同斷　「同」　同　長信庵

一山内惣内　二尺五寸に一尺八寸角高さ一丈五尺
柱計無家根明き三間左右矢來

一下馬札

本遠寺之圖別にあり書中享保十四酉年鐘樓堂を移し寶暦十辰年建續き文政十三寅年御修覆云々を記す猶此外修補ありしならんか右圖中には前記之佛閣等悉くはなし其故知るへからす畧圖は卷末に掲く

山外塔中

一坊舎　三間半
六間　茅葺　御役所大野村　玄收庵

一坊舎　四間
八間　茅葺　領内梅平村　長圓坊

一坊舎　五間
七間半　同斷　右村　宮本坊

慶安三年從紀伊家御建其後度々御建替御座候

右佛閣僧舎

紀伊大納言頼宣卿之御建立慶安三年二月本堂之釿始承應三年十二月悉出來舊記御證文御座候

原書本堂初坊舎安置の佛像悉く記載あり今略す

一本遠寺記錄に曰く慶安三年十月　養珠尼公七面山より御歸山の節徒跣して普請場中を回り玉ふ今に本堂拜殿の天井に夫人の足跡を印するは此時の遺物なりと云々于今本堂拜殿正面の天井賽

錢箱安置邊の上に當る天井板に兩足跡を了々分明に顯し黑色を呈す之を寺僧に質すに夫人御下山のまゝ直ちに工場御巡視の際有り合ふ板を踏ませられしに不思議や御蹈跡存し削れとも滅せす是偏に御法力の感德ならんといひ傳ふとなり後尼公二百回忌御法會に際し本堂修繕を命られし便により出張員正しく之を臨寫せしめたる圖左の如し唯御右足のみ印するは其故知るへからすといふ

慶應三年三月九日仁王門より出火前記朱註之分悉く烏有に屬し今古樣を存するは本堂と鐘樓あるのみ寺僧曰く近年社寺局官吏出張本堂鐘樓堂を審査し構造の殊殊なるを頻りに賞賛せりと鐘は俗に御土産の鐘樓堂といふ其故詳ならす仁王門　瑤林大夫人の御建立にて仁王の像は御父君清正公の肖像を象り玉ふと傳ふ火災の時辛くも救ひ出したり七面堂は　有德公御建立の由されは慶安三年の御建立に非す仁王門の側にありしを以て最も早く延燒せしと云々

當寺の古圖傳らす唯文政十三年及ひ現時の總圖を卷末に掲く

一承應二巳年八月廿一日　養珠尼公江戸御舘にて御逝去　龍祖御見送當寺へ御送葬

本遠寺舊記に曰く

御尊骸は御遺志に因て八月廿五日江戸御發館廿九日當山に御參着御見送は　前大納言頼宣公及ひ日近上人なり廿九日夜堂前河原に於て荼毘す其御棺の前は日近上人御後は　頼宣公御擔竟夜御經讀誦して遂に御火葬し奉る　頼公宣當山に二夜三日之御逗留にて一七日分之御法事御燒香御勤め九月三日江戸へ御發車さ云々

同三年九月中　養珠院樣常の御殿江戸より廻り九月下旬より普請取付け十二月下旬取付普請落す

御火葬地之遺跡詳ならす村中古老の談に本堂の前楠大樹の處也といひ傳ふるよし夫等の故にや村中檀下葬送には本堂前敷石の處に柩をすへ式を行ひ讀經しつゝ該楠樹を巡る事數十回而して

埋葬地に迸る近時一旦之を制禁したるに往昔より之先例也若し楠樹を巡る事能はされは淨土の往生叶ふへからすと中々に肯はさるゆへ其邊に任せ置けりと寺僧語る

元來雨中と雖も柩を堂上に登すを禁したるか近時は晴雨共拜殿賽錢箱の前に据る事を許す然れとも梵鐘等の佛具を使用せす又檀徒の位牌も皆寺中の寺院に安置本堂に列せさるの例也尼公を敬する爲めといふ

一石楠樹の腋に井あり御符水と唱ふ維新前迄は江戸邸より年々一度つヽ御水汲といふを派遣該水を汲來て殿房の屋上へ撒布を例とす防火の祈禱といひ傳へり御符水道中は肩より肩へ運搬寸刻も地に置かしめす尊嚴を極めたりとなり

養珠院殿尼公御寶塔

一御廟　五輪之石塔

高さ一丈五尺但三間二尺四方石垣高さ四尺右上に高さ三尺石玉垣石門扉三尺同所前高さ八尺五寸一つ石截拔門扉付左右に高右同斷の石垣玉垣右外設五間十間石垣四方に廻る高不定同所前五下り石阪左右共朱矢來也

御廟前

紀府內君

同　光貞卿

因伯兩國大守源光仲

紀府長女

石燈籠各一對つヽ

但し高さ八尺

安藤帶刀先生

石燈籠一對つゝ

水野淡路守
渡邊若狹守
三浦長門守
外七對　名前不分明
（加納五郎左衞門（一本ナシ）
伊達源左衞門）

（外（一本ナシ）に五對名前不分明）

按に本堂に三十六歌仙の畫額を掲く毎額の裏面如左記載す

奉寄進歌仙三十六枚
養珠院殿　御寳前
承應三年三月廿一日
因伯兩州大守從四位下左近衞權少將　源朝臣光仲

御廟石は尼公嘗て身延山へ御參詣の途次甲州石森と云道の側にありし大石を御覽せられ此石を吾か石碑に用ひ度との御遺言ありしとの事にて　龍祖該石を御牽かせ御寳塔初瑞垣石階御廟門等悉く一石を以て御造營然るに御寳塔御謚號を彫るへき處に黑き痣浮ひ出たり痣なれは深くはあるまし母の見立し石なれは小さくなるとも苦しからす堀り取るへしとの命により石工痣を彫り取たるに不思儀にも一個の玉顯れ出たり日近上人法義に取りての因緣を言上しけれは深く御尊信御忌日には御自身にて御奠供御拜遊されしされは御玉と稱し當山無二の寶物とす尼公御落

飾蓮華院と唱へ給ひしか御逝去前に養珠院と改め給ふ偶然に非る由本遠寺靈寶解釋書にあり詳には養珠大夫人に記す

按に右御寶塔に向ひ左側上段に左の御寶塔あり　天心院殿は御本廟其他は御分塔なるへし

理眞院妙尊日覺大姉

清溪公御實母紀州二の丸万治元十月とあり

天眞院殿妙仁日雅

清溪公御簾中安宮寶永四年二月廿六日

天心院了智日然

清溪公御女なゝ姬君慶安五年八月廿五日御卒去當山に葬る

長壽院妙勇日意

眞空院惠性日了

南龍公御子修理君寛永十三年十一月十八日御卒去長壽院殿は御實母武藤氏なり万治二年十二月九日死去

一下段の敎碁は女中等也下圖に記する如し

一承應三午年九月中　養珠院樣常之御殿江戸より廻り九月下旬より普請取付け十二月下旬普請落成す本遠寺舊記

當年は　尼公の一周御忌に被爲當を以て亦佛閣修營の事ありし如し棟札の記及　龍祖の御書等

によつて察せらる

棟札　表　本遠寺保存

大野山本遠寺寂靜院常住息災安泰之守護也新造立之節書之

于時慶長萬年第十六龍集辛亥仲夏如意珠日

大工棟梁　　山田佐兵衛尉久次

裏

維時承應三年歳次甲午夏以養珠院日心公生平住居之殿移于當山爲客殿者也

同下段に

自慶長十六年辛亥至承應三甲午經四十四年而再興也

此年當于日遠上人十三同幷日心禪尼之一周忌也

功德主紀州大守

從二位行權大納言源朝臣頼宣　又天和二壬戌年正月本遠寺第四世常寂院日近書判　茅葺之者也

四十一歳　　日寛書判

按に　右棟札は日遠上人初て當寺建立の時のものにて其裏面空白なるを以て常御殿移築及び佛殿再興の事を併記さ見へたり又天和二年云々は後二十九年日當屋修葺の時追記さ察せらる

南龍公御書　當寺に存す

甲州大野山本遠寺建立事

當山以爲養珠院之葬地佛閣僧舍等從前年悉建造之其上又申　建大猷院殿寺領高貳百六十石餘自
官府充行訖矣祭祀供役等不可令有闕畧世々住持僧此旨可愼守者也仍如件

承應三年八月廿一日　　　　大納言源御判

一當寺一本寺に確定

當寺は日遠上人創造の當時より獨立一本寺に無相違既に　將軍家より巨多之御朱印地を賜り殊
特之寺格たる處身延山久遠寺は其末寺に屬せしめんと企頗る紛擾を來し論爭不決より裁を江戸
社寺奉行に訴ふ　遂に勝訴となり愈本寺無紛旨の判決を得たり巨細の事及ひ年次不詳なれとも
龍祖の御書以て大意を了すへし

南龍公御書當寺保存

一今度爰許逗留中不能閑談殘念に候然者本遠寺之儀日遠上人從開基之節被相定一箇之本寺之段讓
狀雖明白內々從身延爲末寺候由依申懸今度與彼地之住持日境於寺社奉行所被遂對辨彌日遠本意
評議相定其以後右之通本寺無紛旨松平出雲守被申渡喜悅之段最候然る上者猶以本寺之作法無懈
怠宗儀相續之勤簡要候不備

八月十七日　　　　大納言源御判

本遠寺日近上人

此一通年代不明蓋し承應已後之事なるへし

一什寶

當寺の佛像佛具幷寶物什器は一切　國祖及尼公御初の御寄附に係り其數枚擧に堪へさりし處慶應三年の火災にて烏有に屬せしも不尠且維新の變寺領上地となり維持に窮し或は不法の住僧恣に賣却棄流を逞して散逸を免れさる者多しさ明治十二年內務省官吏を派出諸寺の寶物を審査せしむるの際當寺亦其調査を受け二十七点を國寶に認定せらる當時保存の現品一切を糺審するに當住職山田日偉左の目錄書を提出す

明治十二年書上寶物

一兆典司筆涅槃像畫　一幅　紀伊安宮樣御寄付
一聖武天皇光明皇后御翰　一幅　紀伊家御寄付
一三大師合筆　一幅　同
一後陽成帝八の宮二品親王宸翰古今集　二冊　養珠夫人御遺物
一本阿彌光悦筆十如是御書　一軸　寄付人安藤帶刀
一金岡筆彩色畫三十二神　一幅　同
一土佐家古筆鬼子母十女彩色畫　一軸　紀伊家御寄付
一土佐大內藏筆宗祖教を說く圖　一幅　養珠夫人御寄付
一狩野元信筆三師生身彩色畫　三幅　開山日遠遺物
一傳教大師眞筆一行九字　一幅　同
一宗祖眞筆極細字法華經　同

一藕糸茶羅　二幅　安藤帶刀母堂寄付

一伏見尊純親王御筆　一卷　開山所持之品

一狩野法眼筆天台大師　一幅　同

一同人筆傳教大師　一幅　同

一閻浮陀金虚空藏金像　厨司入　一躰

紀伊大納言賴宣卿守本尊印土傳來の金像にして日近拜領

一佛舍利　輪塔入　四粒

二粒は開山遺物二粒は養珠夫人御遺物

一肉牙　御玉と稱す　二重箱入

養珠夫人の墓石より不思議に出たるもの

一御綸旨二通口宣案二通

万治二年七月及同三年日近參內して任官せられしもの

一東照宮御腰辨當筥　筥入　一組

金梨子地葵御紋付養珠夫人より日近に賜ふ

一樂器　笙　篳篥　龍笛　筥入　三個　紀伊大納言賴宣卿御寄付

一古金襴打敷　二枚

右は加藤清正公息女瑤林院殿親ら縫り玉ひて開山に寄付せられたるもの即ち清正公朝鮮より持

參の古代織物なり

一古金襴袈裟　破損半分　養珠夫人御寄付

一阿育院錦幡　二流　紀伊中納言宗直卿御寄付

一蜀草盆桐製牡丹蒔繪　一個　養珠夫人御遺品

一見臺梨地金蒔繪　一個　同

一金高蒔繪瓢形提重　一組　同

以上二十七品は明治十二年上書分にして國寶と認められしもの

寶物繪物書冊類

一宗祖眞筆本尊　一幅　養珠院殿御遺物

一宗祖眞筆本尊　一幅　大久保石見守寄付

一同　文書　五幅　開山所持品

一同　文書　一幅　養珠院殿御寄付

一天海僧正書翰　一軸

東照宮台命の書翰

一光貞卿之筆　六幅

觀音梅竹三幅對　維摩山水三幅對

一宗祖眞筆大本尊　紺紙金泥一幅　開山所持

一重師本尊　三幅
一乾師同　三幅
一同　文章　四幅
一開山本尊　三幅
一同　文章　七巻
一松平相模守殿軸物　一幅
一東都三井親和筆　三幅
一薩州大守軸物　一幅
一墨畫釋尊　筆者開山　一幅
一開山詠歌　一幅
一紺紙金泥妙經　唐桑透彫箱入　桂香院殿自筆　一部
一紺紙金泥妙經　一部
一紺紙提婆品　大恵院殿御自筆　一巻
一紺紙畧法華圓頓章　松平左京大夫頼純公御自筆　一巻
一紺紙寶塔偈圓頓章　細川靜證院殿御自筆　二巻
一紺紙一返首題　妙莊嚴院自筆　一幅
一養珠院殿御書　十二通

寄附人前川玄德法眼

一同　掛物　一幅

一頼宣卿御筆圓額章　金泥紺紙　一巻

寶物佛像及遺物蒔繪錦類

一子安鬼子母神木像　厨司入　一体

養珠院殿守本尊夫人此像に禱りて二公子を儲く因て子安の尊像と稱す作者不詳

一金銅誕生佛　鑄造者及年月不詳

一宗祖眞骨　輪塔入　二個

一開山眞骨　六角厨司入　全分

一同四十二才の肉牙　水晶塔入　一個

一叡難除厄宗祖靈像　一体

一古代湯呑　一個

一養珠院殿御遺品

一高蒔繪三寶膳　三面　一同手掛　二個

一同飯櫃　一個　一唐桑机　二個

一菊形蒔繪沙金入香箱　一個　一葵御紋附重箱　一組

一同　長棹　一棹　一銅製吸筒　一個

一七面山蹈分杖　一本　一赤地蝦夷綿　一枚

一高蒔繪湯桶　二個
一同重箱　三個
一白練絹袴　一枚
一唐金風呂　一個
一銀柄香爐　目方百八十二匁五分　一個
一養珠院殿御立像　一体
一同　座像　二体
一文珠彌勒木像　高山の作　厨司入　二体
一開山湯香茶碗箱入　一個
一唐古代盆　一枚
一古代伊摩利燒茶碗大皿猪口三人前　六個

寶物古文書緣記類

一聖護院宮御綸紙　七通
一同宮永代紫衣着用御免狀　一通
一同宮鳥居小路法眼書狀　一通
一寶鏡寺宮御綸紙　二通
一青蓮院宮同　一通

一同　箱　二個
一唐木硯筥　一個
一葵御紋付文箱　一個
一青地錦幡　二流

御本丸御部屋寄附

一紀伊大納言頼宣卿御證文　三通
一松平出雲守殿書狀　一通
一同公より管沼久兵衞へ遣す狀　一通
一水戶公書翰　五通
一南龍院殿淸溪院殿書翰　三通
一本遠寺由來記　一卷
一開山御遺言書　一卷
一水野志摩守書狀　四通
一本遠寺什物帳　日近筆　一冊
一本遠寺末寺帳　同　一冊
右從來上書の分に御座候也

遺漏寶物

一烏丸光廣卿筆　一幅
一略法華經　開山作　一冊
一白牛通轍錄　一冊
一毫春筆　一卷
一開山聲明品　一冊

一養珠院殿御鏡　一面
一玄義序乾師筆　一卷
一暹師本尊　一幅
一龍女木像　七面天女本地 養珠院殿本地　厨司入　一体
一五番善神木像　厨司入　十五体
八代將軍御寄付
一七面大明神木像　厨司入　一体
八代將軍四十二才除厄の靈像
一祖書四十冊　開山筆　一箱
一管原長壽筆妙經　一部
一開山駿府法難衣七條珠數
一同白袴　一個
養珠院殿親ら御仕立なされし品なり
一開山紫七條　一枚
一同藤紋織五條　一個
一宗門綱格　乾師筆　三卷
一富士蒔繪隅切盃　二枚
一朱塗大盃　二個

以　上

御預所支配幷寺格等之事

一御預所大野村之内六拾五石餘當山にて支配仕來候者寺領入組有之狩人共殺生仕候故從　養珠院樣甲府御城主　右馬頭樣へ御斷有之其後引續寛文度　左馬頭樣寶永度松平美濃守樣享保度御代官龜田三郎兵衞樣御支配御替度に先例書を以御屆申上支配仕來最御年貢隣郷並取立上納仕候處年々取立難儀に付寛文七年より直納相願候諸役當山へ爲相勤申候悉細は市川御役所へ去七月御更代之砌先例書奉差上置候

一本遠寺格式之儀は從　寶鏡寺宮樣緋　御紋箔袈裟地幷御召古之綱代御輿享保十九年六月拜領仕候最後に至迄踈畧無之樣代々可相用之旨御免許所持仕候從　靑蓮院宮樣寛政九年六月紫衣御免狀頂戴仕鳥居小路法眼經親殿奉役御同所紫衣代々御許容之書面共に二通所持仕候右に付例年年頭八朔之御祝儀献上仕候

一本遠寺繼目從　紀伊家御使者同道而寺社奉行所へ相願登城之節　乘輿獨禮壹束壹本献上於御白書院御禮申上候總て御祝儀事年頭共同斷御座候

一從　紀州安宮樣七世日堯代日傘被降置格式之節爲持來候右は專ら同寺舊記を調査且同寺より御家及ひ管轄廳へ提出之書類に據て抄錄す

一明治四未年二月廿九日甲斐市川廳に於て本遠寺御朱印世上一般に上知追て相當之祿御定之上廩米を以賜下候事と申渡たる旨同年六月八日同寺より屆出たり

久　成　寺　裡町吹屋町 寶珠山　法華宗勝劣派

寺說に當寺は　有德公の御寄附也と稱す然れ共續風土記には正保三年今の地に移るとのみにて有德公云々の事なし暫く正保度に附す

一寺領高三石三斗八升二合　名草郡新內村　久成寺

圓　滿　院　那賀郡宮村 不動山神宮寺　眞言宗新義

續風土記に曰く當寺は熱田明神總社權現兩社の別當也天正の兵火に神祠佛宇寶物等皆煨燼となる今の社は　南龍公御修造と云々

一元和御切米終身錄に
正保四亥新規
三人扶持　圓滿院
正德五未より肩書に岩出村と認以來不相替當時迄渡る

一寺領　三人扶持　圓滿院

千　陽　寺　湊吹上寺の南 長春山　禪宗曹洞派

續風土記に曰く開基は正保年中桂岩禪尼といふ尼は播州本多家の家老松下將監の妻也出家の志ありて夫に離別を乞ひ名師を求めて諸國を巡回し越前永平寺に至て尊海禪師に參して心安を叩竭す師感稱して色衣を免許す　後當國に來り　惠運寺二世大洲を歸依して參禪し湊二本松に　小庵を結ふ二本松は吹上寺の境內にありしと云正保年中　南龍公其志操を嘉し方五十間の地を賜て寺を建しめ境內町家を造て地子

を以て衣粮修復の料に充しむ後寶永二年和尙寺となる

蓮經寺　那賀郡 西坂本村 勸妙山　法經宗

續風土記に曰く此寺舊と直言宗根來寺の末にて蓮華谷にあり天正の兵火に烏有となりしを正保年中養珠大夫人此地に再建せられ法華に改宗して大夫人の父君誠澄院蓮經の法號を取て寺號とし畑及山林を寄附せらる（別項佛祖續紀に日存上人を請して開山の祖とすとあり）

紀勢御領分高帳明治調書に御寄附地の事なしいつしか上地となりしや詳ならす

地藏寺　伊都郡 菖蒲谷村 易產山 護國院　眞言宗古義

續風土記に曰く堂舍天正の兵火に罹りて寺寶悉く燒失す正保五年　南龍公御再興ありて御紋の幕並に水引佛前の器物等御寄附あり

寺領高五石四斗六升四合　　菖蒲谷村

妙臺寺　名艸郡 多田村 南照山　法華宗一致派

續風土記に曰く豐太閤の時寺田も（昔は寺領八十石山林も多かりしと）沒收せらる慶安二年　南龍公の御母堂　養珠大夫人寺地を免許せられ寺領米十俵を寄附せらると寬文記にあり又　有德大君の御親母淨圓尊夫人の尊敬ありて絕へたるを繼き廢れたるを興して苟くも全を得たり寺格も進み上人號を免されたり第二世は日延上人也（按に日延上人傳には師振力再興法具亦整人崇之爲中興祖文安元年甲子九月八日化未詳世壽とあり）

寺領の事紀勢御領分高帳及ひ明治社寺上地の際にも何等の記なし

妹脊御寶塔　和歌浦 妹脊

蓮經寺
地藏寺
妙臺寺
妹脊御寶塔

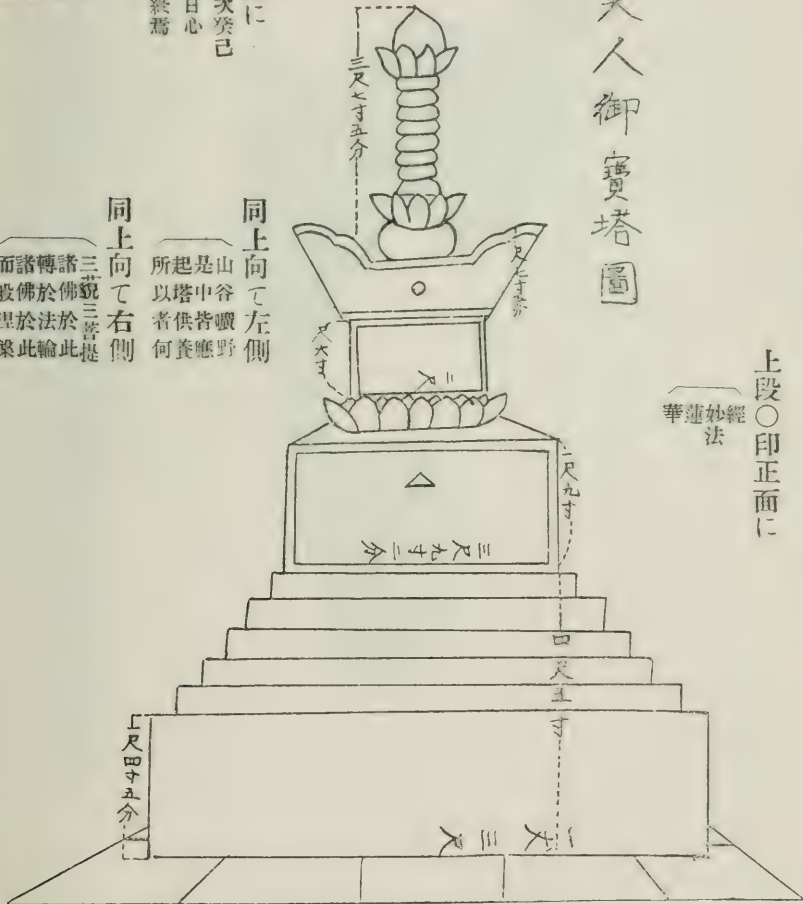
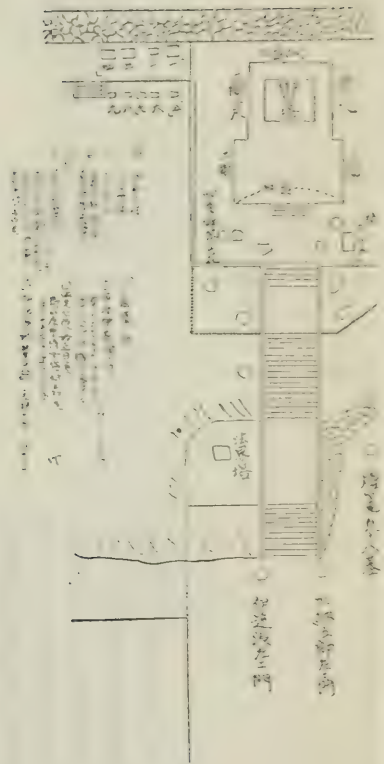
此事紀伊國續風土記及ひ紀伊名所圖會にも詳記す 續風土記に曰く　宸筆の片石は石函に盛て中央にありと云四方石を疊み高く築き其上一大石を建て題目石の事を記し（此大石夫婦石の雄也）文は儒臣那波元成永田道慶命を奉して記す小堂を其上に作らせ給ふ後承應二年八月　大夫人掩粧の後を改て二重の寶塔を作り釋伽如來を以て塔中の本尊とし（大夫人の御分骨を釋尊の腹内に納るこ云）ある所の大石に就て大夫人の法號を刻み給へり寶塔の前に拜殿あり拜殿の前唐門あり唐門より石階降りて水閣あり寶塔守護の寺其北にあり海禪院こ云ふ養珠寺に屬す寺產五口餘を賜ふこ云々

按に　風土記雄石の文は那波元成永田道慶命を奉し記する處こ云然れこも信該寶塔修補の公事により親しく塔中に入て碑石を拜するを得たり裏面左の文を刻す字或は磨滅且つ讀得かたき所ありこ雖も現に日護謹誌こあれは風土記の說誤りなり慶安二己丑仲春こあれは小堂建築に先ち既設の事知るへし日護は大夫人尊信し給ふ所此僧にして此撰文は蓋し大夫人の尊旨ならんか

琢石通題書寫之發願者爲
東照大權現三十三回忌追尊及使桑域所郡品等之作字者滅罪生善壇殺者拔苦與也是以國主普門一品（不了一字）筆而返號數千返親子全眞翰以貢鑒紳信界信姬不耐思慕與翼修善寫數万之亦俾書八軸與開結倘教歷人書無緇無白競進模焉于茲任運密（不了一字）蕆續而自　仙院后宮以至妃嬪媵嬙磨石（不了一字）筆九万九千八百九十返其功用善際無云爲乎聞之者合爪白睿慮映石典是前代未聞奇異耳凡二百五十万返書寫既成矣終於妹背山穿巖洞深納石經厥德大哉至哉銘曰
　丕發志願　博書經王　報恩祖廟　施利存亡
　衆人護福　誰爲壽量　功名有盡　妙用無疆

願主紀州大納言源賴宣卿御母堂
尊氏十四代裔蔭山長門守息女法號
養珠院殿妙紹日心尼大姉
慶安第二己丑仲春十七日
權大僧都法印仲正院日護謹誌

右御寶塔石は雌雄石にして雌石は妙法蓮華經の梵語を刻し山下にあり事は慶安二年の世記に詳なれは爰に畧す
海禪寺へ五口餘を賜ふ御寶塔等の圖卷末に記す
一元和御切米終身錄に
慶安四卯新規
壹人扶持　妹背山　小　僧
明歷二申より二人扶持に成る寶永四亥より唯心院に成る同六丑年より正覺院に成る享保十巳より海善寺に成る以來より無相違當時迄相渡る
右海禪寺二人扶持は明治三年十二月太政官令により上切となり隨て廢寺となる寶塔の拜殿唐門も毀たれ今はなし
一明治十年五月五日妹背御寶塔并　養珠院尼公の肖像靈牌是迄　養珠寺保管の處都合により報恩寺へ移し支配なさしむる旨縣廳へ達せられたり

本遠寺
養珠大夫人御寶塔圖
上段○印正面に
經
妙法
蓮華
中段△印正面に
承應二年歲次癸巳
養珠院妙紹日心
八月廿一日終焉
同　後面
當知是處
即是道場
諸佛於此
得阿耨多羅
同上向て左側
山谷曠野
是中皆應
起塔供養
所以者何
同上向て右側
三藐三菩提
諸佛於此
轉於法輪
諸佛於此
而般涅槃
三尺七寸五分
二尺九寸
三尺九寸二分
四尺五寸
一丈三尺

大智寺御靈屋圖

一本圖には明信院殿御合殿に左の如くあり

雲松院殿

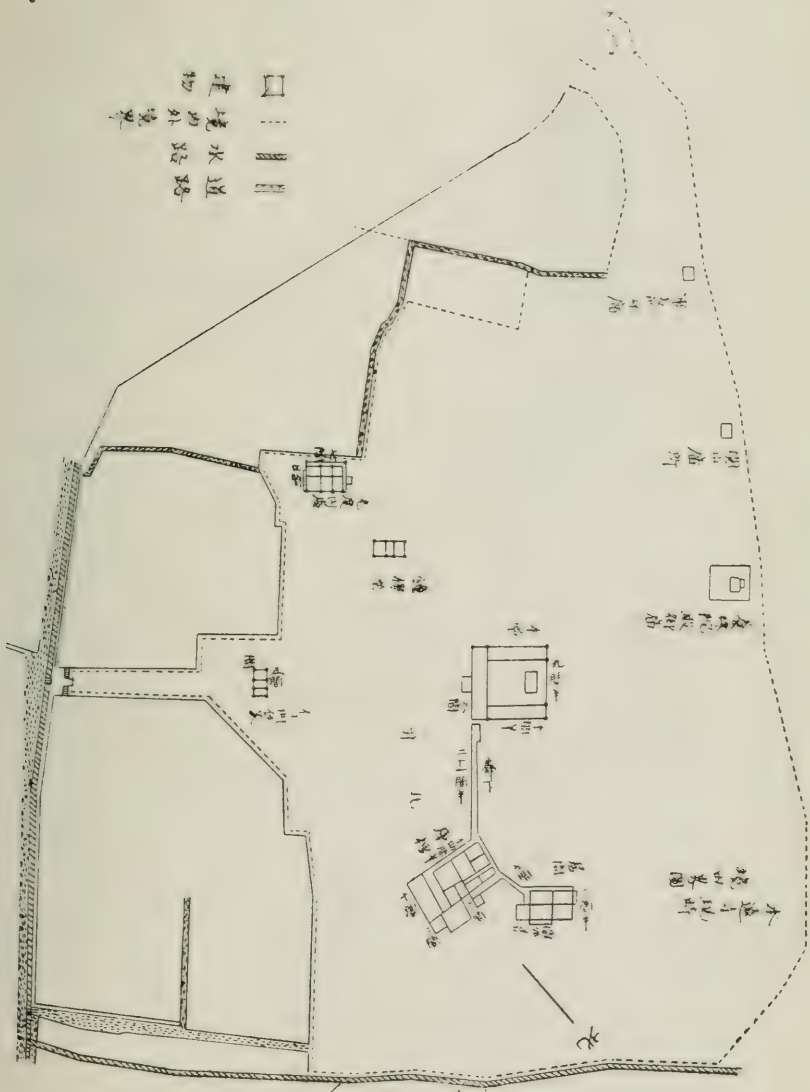
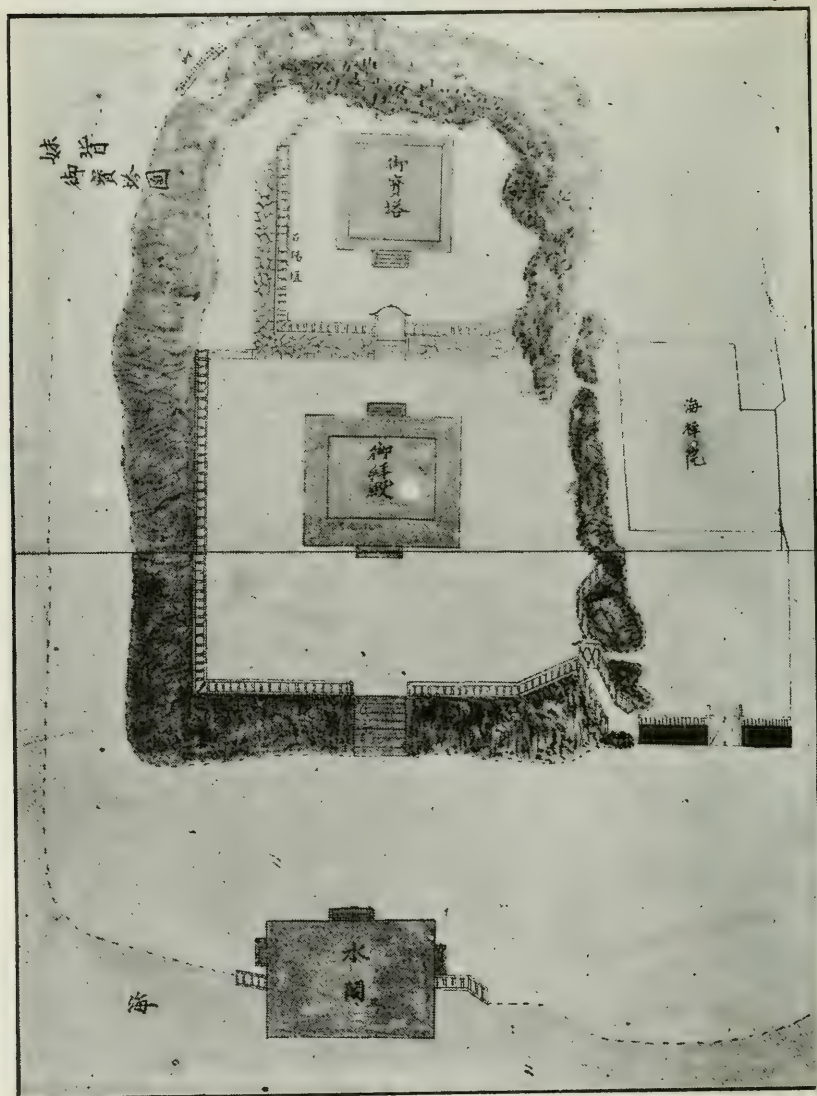
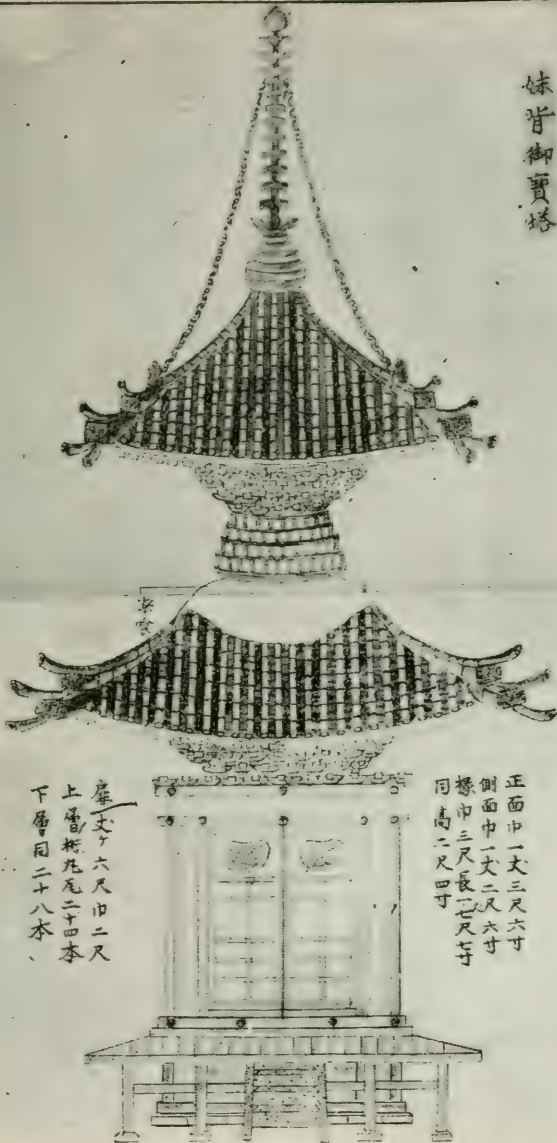
明信院殿

信恭院殿

雲松院殿は　大慧公御女にて將軍有德公の御養女に被爲成松平陸奧守宗村へ御緣組信恭院殿は　舜恭公御女松平陸奧守齊宗室文政十亥年八月八日卒去本圖は蓋し文政十年以前のもの故に信恭院殿を記さゞるならん雲松院殿を本堂の方に安置さするは誤りなるへし

鐘楼堂
此鐘楼堂此度南方より四十間程此処へ引直し
享保十四己酉年十月廿四日迄に出来
本堂ノ正面
仁王門
文政十三寅年御修復之旨圖面にあり
一 別圖に
境内 東西 百十三間
南北 二百廿六間
林
林

本遠寺現時
境内界図
開山廟所
北
道路
水路
境内外境界
建物

妹背
御寶塔圖
御寶塔
御拜殿
海禪院
水閣
海

妹背御寶塔

正面巾一丈三尺六寸
側面巾一丈二尺六寸
椽巾三尺長一七尺七寸
同高二尺四寸

扉丈ヶ六尺巾二尺
上層椽尨尾二十四本
下層同二十八本、

南紀徳川史巻之百五十三

社寺制第三

龍祖時代

海神社　那賀郡神領村

名所圖會に曰く當社世の亂れ打續き社地さへ荒わたりしを慶安二年に至りて境内殺生禁札を給はり更に大社のかたち備はれりといへり續風土記に天正の兵火に燒亡し有來りし神事祭禮も皆廢絶す慶安年間　官命ありて兩部を改めて唯一に復すと云々

鳴武神社　中鄕鳴神村の東

名所圖會に曰く當社は天正の亂に荒廢して遺跡も絶へたりしを慶安三年に至りて　國君より右祠を建給ひて今に修理を加へ給ふとそ

三社明神社　那賀郡北志野村

續風土記に曰く古の社殿天正の兵火に燒亡して痛く衰廢に及しを慶安三庚寅の春村中に櫻池を穿せられし時明神の社殿より夜々奇異の靈光を發し近邊地動の狀ありて土人驚駭せさる者なし土功を掌りし有賀喜兵衛木村五郎大夫即ち其事を注進す　國君聞し召れ即時に本社末社瑞籬鳥居等御造營あらせられ尚又万治元年境内山林等を寄附せられて著き神社とはなれり

按に櫻池は慶安三寅年春起工三年にして成る地方古老の談に　龍祖は屢々實地へ御親臨普請を

御指揮或る時は池塘の無事竣功御祈禱之爲志野明神（東屋神社と云 池の側に鎭座す）の社頭に通夜し給ふ御普請御取掛りの御夜々御普請所へ志野明神の社殿より奇靈の光明を放ち近邊地動のよし御普請奉行より直に　龍祖へ言上せしかは志野四社明神本社末社瑞籬鳥居本地堂御進營あらせられ其後万治元年明神山林遠藤兵右衛門へ被　仰付修復料に山林御寄附被遊たり故に于今木印入らすと語れり名所圖會に元和年中櫻池を作ると記せしは誤なり

多門院（一里山町 松尾山）大講寺　山伏三寶院派

丹生院（西大工町 八葉山）善應寺

續風土記に曰く多門院其祖を清水多門院祐定といふ美濃安八郡北方村の人也軍功ありて元和中本藩に仕を求め故ありて苗字を根來と改めて紀勢修驗の支配を命せらる廩米十口を賜ふ大先達法印號を唱ふ

一又曰く丹生院舊は名草郡山東莊黑谷村に在り寛永二年此地に移る廩米三口を賜ふ

一元和御切米終身錄に

承應二巳新規

一七人扶持　多門院

明曆二申より根來の苗字附延寶三卯より上る同五巳年より五人扶持被下候代替と相見申候

一寺社御寄附高調帳

拾人扶持　多門院

三人扶持　　　　　　丹生院
銀三枚つゝ　　　　　假山伏組頭二人
金二兩つゝ　　　　　同　　平八人
金一兩つゝ　　　　　同　　五人
寺社奉行直支配帳にも拾人扶持多門院とあり増給之年次不詳多門院初明治三年社寺領一般上り切之布達面になし然れとも外同樣上り切りしならん

養珠寺　和歌村　法華宗一本寺

續風土記に曰く承應三年　南龍公眞母養珠大夫人の靈牌所に新に當寺を建立せられ身延山久遠寺二世權大僧都中正院日護上人を以て開基とし寺領二百石を寄附し給ふ書院中の櫻の間は大夫人駿府に在し時の寢室を引移せるなり寺地海に近きを以て井水鹹くして遠く外に汲む事多年也一日南龍公寺に遊ひ給ひ巖下より淸泉の湧出る所あるを視出させ給ひ疏してこれを導きて井を作らしめ汲て大夫人の靈牌に薦め給ふ是より後御代々之を常となし給へり又万治三年境内南の山上に妙見堂を建立し給ふ本尊は久遠寺日護上人　南龍公の命を奉して彫刻する所也腹內に兩軸の法華經公親筆の意願文等を藏むと云々

一寶曆二申年八月廿一日　養珠院樣百回忌に付　大慧公御參詣前記之淸水御手自被爲汲御茶御奠具御署名之諷誦文一章を御捧け被遊

一安永五申年八月　香嚴公和歌御靈屋へ御參詣之次　養珠寺へも御參拜被遊しに住職日喜舊き水柄

杓を持參し御覽に入れ是は昔年より庭前にある閼伽井の水を　大惠院樣御在世に御參詣の度每に御手つから御香水を汲せられ御備へありし御手澤の御遺物のよし申上しかは頻りに御感情の御樣子にて一首の和歌を被遊て日喜へ被下

たらちねを慕ふ心の手向水むかしを今に見るそなつかし

公又備臣竹内太冲に命し該井水を思齋井と名つけしめ給ふ　養珠寺第十三世天行其事を記し石に刻み側に立つ事は續風土記に詳なり鎭守妙見は万治三年吹上岩手兩所御殿の妙見を御納めのよし

御廟墓

養珠院殿妙紹日心大姉　南龍公御生母　御本廟甲州大野本遠寺　承應二巳年八月廿一日

理眞院殿妙脩日覺院禪尼　清溪公御生母　万治元戌年十月九日

瑞應院殿妙圓日珠大禪尼　高林公御生母　元祿六酉年十一月十日

眞性院殿妙惠日善　大惠公御女　享保七寅年正月八日

白道院殿澄累示幻大童女　御同斷　享保十九寅年七月九日

妙操院殿性月良仁大姉　顯龍公御生母　御本廟江戸小石川傳通院

受光院月鏡日淨大姉　高林公御生母瑞應院殿御實母　元祿十一寅年六月六日

雲紹院現夢日清大姉　大惠公御由緒方白道院殿御生母　享保廿卯年六月十二日

御靈牌御安置

寬耀院殿　香嚴公御簾中御本廟身延

觀樹院殿　大惠公御生母　同

善修院殿　香嚴公御生母　同

御靈屋料等

養珠院樣　高貳百石　内高五十石　那賀郡西坂本村
　　　　　　　　　　　高百五十石　名艸郡明王寺村

寛耀院樣　米　五俵

理眞院樣　御佛供料銀三枚

瑞應院樣　同　同

鄒樹院樣　同　同

善修院樣　同　同二枚

妙操院樣　同　同三枚

合　高　二百石
　　米　五俵
　　銀六百貳匁

御祠堂金

眞性院樣　金五十兩

本地院樣　御靈牌　源性公御子山城守賴雄君　金五十兩

靈光院樣　同　大慧公御女相姫君京極上總宮御息所　金百　兩

天理院樣　同　源性公御嫡豐後守賴路君　金五十兩

白道院樣　同　大惠公御女　金貳拾兩
圓妙院樣　同　菩提心公御女定姬君 松平相模守室　金廿五兩 銀廿五枚
初金七兩御寄附文化八未年閏二月三十三兩增合四十兩御寄付の處文化十酉年五月更に本記の如く御增寄付
妙泰院樣　同　觀自在公御女錯姬君
春容院樣　同　同　御女鋒姬君　金百　兩
大嚴院殿　靈牌　菩提心公御孫 阿部飛騨守正篤　金廿五兩
妙操院樣　御靈牌　銀三十枚
天保四巳年十月御寶塔御取建に付御內々御寄附

一當寺什寶の內左の親筆を藏む
南龍公大慧公香嚴公三公親筆經卷
養珠大夫人書簡　大慧公御畫數幅
一本に清溪公御繪三幅對二同屛風　養珠大夫人御手道具　理眞院樣御手道具ありと

養　珠　寺

一明治二巳年十二月朔日左之通達す
此度藩知事御拜　命御家祿十分一と被　仰出候に付万緒適宜之御改革無之候半而者何分御家算
難相立候付其御不快には　思召候得共不被爲得止　御靈牌は　御廟所有之御寺へ御遷座可被遊
旨被　仰出之

件之通に付其御寺に御安置之　御靈牌等御遷座等は追て可相達事

一明治三午年五月欠日左之通達す

養珠院様御初　御惣容様へ御佛供料御莊嚴料御道具御修復料御掃除向等爲御入用一ヶ年米拾俵と金貳兩御附被遊候

件之通に付御佛供料等初廉々御寺にて引受可被取計事

一明治三午年十二月寺領上地となる一般社寺領上地之部に記す

一同八年七月三十日理眞院様瑞應院様眞性院様白道院様御遺骨報恩寺へ御改葬相成報恩寺之部に詳なり

演光寺　和歌道 收心山　法華宗一致派

續風土記に曰く養珠寺の第三世日演上人隱栖の地なり年々金二十兩を賜ふ

一書に貞享中より山林境内御免許地廻り三百八十間

紀勢御領分高帳は和歌村寺社領合併にて區別不了明治社寺御寄付高調帳左之如し

金貳拾兩　和歌演光寺

高二石六斗四升六合　同演光寺領

法紹寺　名艸郡 養心山 神前村　法華宗一致派

別項佛祖統記に曰く法師道榮は南紀之家臣俗稱忍穗彌五右衛門也名艸郡宇須村に茅を結ひ歸休髻を拂ひ群を避け晝夜を捨すして讀誦書寫多年を怠らす遂に　國君の聽に達し明暦元年乙未　國君

命を下し地を同郡山の堂千手舊界に易へしめ本尊觀音像佛具併せて之を賜ふ
養珠夫人聞て隨喜し給ひ呼て養心山法紹寺となす
一續風土記に寺地一石九升の所を免除せられ　養珠院妙紹日心尊尼の法號の文字を採て山號寺號とすとあり
一紀勢御領分高帳
高壹石九升　　神前村　法紹寺屋敷成

五體王子社　日高郡　西野地村

續風土記に曰く天正十三年兵燹に罹りて社殿神寶悉焼亡す後比丘尼ありて社殿を再興すといふ
南龍公寛文二年御戸帳香爐繪馬等を寄付せられ神殿中修飾を加へらる又梛の木紅葉の木を境內に樹させ給ふ

觀音寺　那賀郡　別所村　如意輪山　蓮華院　眞言宗古義

續風土記に曰く俗に長田の厄除觀音といひ毎年二月初の午の日遠近殊に群參して道路數里の間肩を摩し袖を連るに至る古への堂塔坊舍天正の兵燹に罹りて焦土となり本尊は火災を免る元和年中薩州の沙門道譽此地に來り小堂を營み僧坊を建て再興の志を勵ます寛文の初　南龍公中村に巡遊し給ふ其地佛地に宜しからすとの　命ありてそれより南三町許今の地を賜り寺を移し水田等を寄せて修造の功をなさしめ給ふ是より再ひ興隆して堂塔坊舍粗備はり一伽藍場となれり什物　國君より御寄附の品數種あり

名所圖會には　國君此地に巡遊し輿を寺門に寄せ給ひ民屋の間に倚する事不可也と命し給ひて今の靈地に移させ水田を若干寄せて厄難消除の御祈願所として猶再興之志を勵し給ひしと記せり

一寺領　　長田觀音寺領

高五石

内　高二石 長田中村にて
　　高三石 深田村にて

藏王寺　那賀郡　山崎村　眞言宗古義

續風土記に曰く寛文五年　南龍公御不例の時寺主寂源に命して祈禱なさしめ靈驗ありしより報賽の爲め境内山林方二町を寄附せられ本堂修補ありしといふ

追て右寺地上りたるか紀勢御領分高及ひ社寺領一般上け切之際に何等なし

窓譽寺　吹上寺町 龍門山と號す　禪宗曹洞派

續風土記に曰く寛文五年　南龍公本山永平寺光韶禪師を請して法要を説しめ給ふ其時當寺を以て宿所とし書院を造營せらる今猶存せり

寺に火車の記を藏む開祖瓢外禪師禪座の側に猫兒常に閑睡す一夜禪師丈室に靜座す窓外群猫相聚て人語す少頃して猫亦來りて側に在り師の曰く曩に人語する者は誰そ猫顧すして逃れ終に形影を失ふ月余夜方に四更の比猫枕頭に在て語て曰く恩惠久しく報ひす明日新葬あり其時必す怪變あるへし師を駭さん事を恐れ來りて語と言訖て殆と夢覺る如し明且戸塚氏果して老母の死を

告け夜を以て葬期とす葬に臨むや天俄に風雨雷鳴火車空中に顯る恰も死體を掠め去らんとする如し會葬者驚怖離散して影なし禪師神色變せす空中に向て大喝一聲唱へて曰く來也既乘宿願去必脱蓋纏十方廓爾一念洞然たりと鐶を以て棺を打て云く水流元入海月落不離天唱へ畢て念珠を摩して合掌す時に空中聲有て師之徳力犯すへからすと須臾に雷收り雲散し月色清朗觀る者驚嘆す實に天和七年九月十一日也世人相傳へて以て談柄とす事　公廳に達す　公の曰く是譽となすへしと乃ち宗養寺を改めて宗譽寺となす其念珠袈裟傳へて寺寶となす云々是禪師の徒弟玄宗か元和七年の記する處のよし續風土記に詳也

長保寺　海部郡慶徳山　上村　天台宗

當寺は我　公家万世兆域の地なり當寺の舊記棟札等に據て考ふれは　龍祖普く管内の名刹靈區を御回覽此地山巒環抱山甚だ深からすして欝蒼幽寂を極め數百年の古刹能く兵燹狼藉の患を免れ永代亂劇寇火の及ふへき處に非す而かも都城を距る僅に五六里眞に無双の靈域たるを察し給ひ寛文二年壬寅九月初めて權僧正憲海に登山卜相を命せられ同六年丙午佛殿一宇を御建立親しく石窟に入らせられて豫しめ塋域御撰定廟墓亦成る後五年を經寛文十一年辛亥の春薨逝御遺令により此地に葬り奉る此時　清溪公拜殿唐門寶藏等御建立又佛殿を以て御位牌殿とし新に陽照院を造營院主に命せらる同十二年壬子寺領五百石（舊領を合五百五石）境内六町四方を御寄附ありたり爾後元祿四辛未年御改造又一百五十五年を過き文政三庚辰年　舜恭公大に葺理あらせられ世雄殿といへる三字親筆の額を賜ふ抑當寺は　一條院の勅願所長保二年の草創にして現存の釋迦堂撞鐘堂は延慶

四年の再建即ち五百九十年前の物たり　公家塋域に定め給ひしより七堂亦修繕を加へられ淨域の體悉く備はる明治維新之變革且大政官令により寺領沒收に至ると雖も　公家よりは金に替へて給賜奉祀崇敬は今に依然たり唯各塋の拜殿唐門等取毀れしは時勢の止むを得さるによる今同寺の古記錄及ひ關係之書類を抄錄して大略を揭く尊塋の位置等は其圖に讓れり

一長保寺舊記

南龍院様御在世寺僧へ御尋之砌書上條々

海部郡濱中庄上村慶德山長保寺は一條院帝御建立也本尊は釋迦如來七堂伽藍融勝仙人本家二品法親王沙彌性空法印大和尚位御住山被遊候但古の綸旨院宣薄墨之御判緣起其外寶物等亂世に亂失仕候

一長保寺宗門初天台宗其後法相宗其後天台宗應永之時より眞言宗去年より天台宗歸入仕候

一慶長六年十二月淺野左京大夫幸長殿より寄附狀有之則寫し左に

為當寺領於海部郡に濱中上村五石之所令寄附者也依如件

慶長六年十二月六日　　左京大夫　在判

長　保　寺

一古は湯川阿波守殿より為先考伊賀守法諱天用源公大禪定門追善千部料田於方村免田貳町被附候得共料田は錯亂之節致亂失候

一大門額は堯仁一品親王御筆表面に慶德山長保寺裏面に應永廿四年六月一日妙法院宮御筆

尭仁親王は後光嚴院帝御弟後小松帝之皇子なり

一當寺式に言時慈覺大師之舊跡移根本叡山之作法并魚之尾を東陽と號す是則山門の東陽の峯を移すと見たり辨才天宮有り第二代豪珍法印時今の本坊南前へ引勸請あり一覽に言一條院皇居の御時豐の御節會の日辨才天の供御等の御祭ありと言へり東陽弁天年中行事條々大帳に有り

一御山之峯東に閼伽井有此井水を取て長保寺之牛玉并弁才天之牛玉を磨ると言へり御黒印御書物に言ふ閼伽水谷小屋の壇を限ると是則上の閼伽水は谷之流れなる故に言原此水炎天旱魃にも斷る事無之と云々

一一條院御廟有之由申傳ると云とも所不憾

一大原は魚山を移すの所歟と申傳たり

一那智の浦は往昔熊野權現慶德山を那智と定んと思召す依之那智の浦と號すとかや

一賀茂明神是皇居之御時鎮護の神明なる故なりと

一丸田黒田梅田とて坪名有り是則　禁裏之御膳米上るの所なりと言へり

一丁村は仕丁等之栖たる故に言今之黒鍬足輕之類なり

一里坊と申所は長保寺之里坊有之所之由

一二品法親王性空宮居之所も不知又何れの王(寺)と言事も不知天正十三乙酉之年寶物縁起亂失之後諸事憾に不知其外所司箱大帳に粗記之

賴宣卿御在世の御時仰之趣并

光貞卿御在世同斷

一當山大門額は後小松院御宇妙法院一品堯仁親王之御筆也　賴宣卿當山へ被爲　成候砌憲海僧正へ被　仰出候趣は個樣之　勅筆同前之額を直に不懸ものに候間李梅溪に寫させ常に掛け正筆は寶藏へ納置へく旨　仰有て下ろし能々見候得者二重額也是爲後代云々今所懸の額は梅溪所摸寫也

一當山は　公儀御寺に被　仰付候迄は中古密宗にて高野山善集院より諸事取計有之候處　先公憲海僧正へ御內談遊し高野へ往復有之台宗に改宗被　仰出候又或時僧正へ仰て言一山台宗に歸し我又台宗なれとも村人なとの內に台宗もなけれは徒然歎心地なれは貴僧計ひとして村人を勸め台門に歸依あれかし我國守の權威を以て改宗せしめては佛法の意に叶はすと仰らるゝ間此旨を僧正御請被成當山へ有緣の道俗改宗せしめ僧正計にて旦那を五ヶ坊へ配當せしめ候

一當山改宗之後諸堂及び破損之間御修理被遊尙又諸堂本尊等御再興も　御在世之砌被遊候

一先公寺僧へ仰て言於釋迦堂千部讀經可被致哉との御事寺僧之言張出被　仰付候得者執行可被致由申上候との事

一先公御成之節釋迦堂階にて寺僧へ仰て言此階自然石にて舊跡殊勝なり必々誤て切石なとに願ふ事なかれと仰と云々

一當村人台宗に改宗之後　御成遊し當村之若き女共を召させられ釋迦堂之庭に於て扇踊りを仰付られ上覽　御前において赤飯御酒總中へ下され候よし踊子へは帷子一扇子二本つゝ被下候よし

一聖靈會之濫觴幷古式を　光貞卿聞しめされ　久遠壽院御門跡へ御賴被遊候て　宮樣方御寄合書の

式一巻出來釋迦堂へ御納被遊候事

一當山御寄合書之法華經筆蹟不極ら之處　光貞卿御在江戸（三年庚午と別記にあり蓋し元祿三年ならん）之節於江戸（古筆所に仲（本のまゝ）へ）被　仰付御極被遊其節修覆も被　仰付候

一當山山杉之事　賴宣卿御在世之砌杉之生立山門之景氣又は那智山之山并似たるの間隨分杉を生立山深く見へ候樣にと役人衆へ被　仰付候由承り候

一或時先公仰に言大門前の橋侗樣の舊跡には自然石なと今相應之間相應之橋石立候樣にと加納五郎左衛門殿飯嶋五郎右衛門殿へ被　仰出候處相應之石無御座由にて打過き候處　光貞卿御代に相應之橋石を見出し注進申上則御懸させ被遊候處天和中酉の年洪水に右石橋流落有之候處享保十五庚戌四月二十七日洪水出假土橋流落候節　宗直卿御代右之石を再ひ御懸させ被遊候事其石橋も落て今は土橋なり

按に憲海僧正は　東照宮の七周忌に當て十僧を（尹）（一本手）度せし内の一人也承應三年上野直如院第二世の主となり明暦元年和歌雲蓋院に轉住眞如院を敬海に附す後雲蓋院を退て紀州梅田に隱居一隱と號す元祿五年四月和歌山に寂す壽八十九

寺領御寄附其他之事

慶德山長保寺長保中所創建也

去歳安葬

先考南龍院於此山且於當院內在世日所預設堂安置　靈牌倶遺命也因茲新附五百石田土并山林於當

寺以爲香華之資合舊領五石總計五百零五石也領地疆界幷各村田租各料所充載在別紙自今而後旦暮法務遵守規矩永遠不可怠廢者也

寛文壬子九月十日

権中納言源朝臣

光貞 御花押

陽照院

慶德山長保寺　南龍院府君靈牌墓地領田租幷山林竹木記錄

各村田租數目

二百玖拾斛參斗漆升捌合　海部郡濱中莊 上村内

貳佰玖斛陸斗貳升貳合　同郡加茂莊 中村

伍斛但係舊領　濱中莊 上村内

總計伍佰零伍斛

各件支配數目

佰斛　靈牌所墓地年中諸用幷七月施餓鬼及修理等料

拾貳斛　齋會料

捌拾斛　和歌靈牌料　以遺命別奉安靈牌於雲蓋院同分田租以充其料

年中靈供香華燈明幷法會之日六ヶ坊布施承仕俸給等料也

貳百石　陽照院

貳拾斛　地藏院

貳拾斛　福藏院　貳拾斛　景勝院
貳拾斛　本行院　貳拾斛　專光院
捌斛　鐘樓役料　伍斛　釋迦堂佛供燈明料

右田租、量歲豐凶斂之、除諸用料外、各件所充定、以什之五支之、不足于五、則取補於諸用料、有贏亦寓加諸用料、其租米應時價糶之、其價銀封包印記、具錄薄帳、出納之日須陽照院及五箇坊相議之者也

竹木斫採事式

當寺山內、　塋域側近竹木者、自非枯朽傾倒、遮路掩屋、雖修理之用、不得斫採、自外當山、幷上村中村竹木者、堂塔幷本坊修營之時、聽其採用、五ヶ坊修營之時、止聽、上村中村竹木、然亦不得浪伐、而損其暢茂之美、又八幡宮山林者、除社用外、僧房民戶不得浪伐之、凡伐材之事、須經陽照院及五ヶ坊衆議也　依　命所述如件

寛文十二年壬子九月十日　　安藤帶刀長

直清　花押

陽照院

慶德山長保寺　南龍院靈牌所墓地法式

一靈前、日次月次、供薦須致精誠、日暮勤行香華、幷修理掃除等、勿敢怠慢、不可將穢物入境內事、
一僧徒儀規、當恪守事、

一寺內諸事、處置須要公正事、

右若有違犯者、當隨其科論之、自外寛文五年　公府所領下諸州寺院法令、當彌遵守之者也、

寛文十二年九月十日　　　　　　權中納言

陽照院　　　　　　　　　　　　源朝臣（御判）

慶德山長保寺、　先考靈牌所墓地領幷法式、去歲已所定附也、而今　輪王寺一品法親王、賜令旨以本坊、號陽照院永補院室、因茲寄附帖法式格改書附者也、

寛文十二年九月十日　　　　　　權中納言

陽照院　　　　　　　　　　　　源朝臣（御判）

輪王寺宮令旨

紀州海士郡、慶德山長保寺陽照院者、前當國刺史、亞相源賴宣卿、法諱　南龍院殿墳墓之地也、因茲嗣英黃門源光貞卿、爲先嬖追孝、以陽照院欲爲定院室、對余頻懇望也、粤不獲默止、永相定院屹、且爲後證染紫毫而已

寛文十二年六月十三日

陽照院　　　　　　　　　　　　（書判）

執當中より之書物

紀州海士郡、慶德山長保寺陽照院者、前當國主、從二位大納言源賴宣卿、法諱　南龍院殿顕永天晃之墳墓地也、當寺者、長保年中、慈覺大師之門人所創立也、門人等信嚮大師之遺訓、移叡山根本之作法、毎年二七日夜勤修常行三昧、開自他往生之因之道場也、詳見于舊記、然　近代攫奪于眞言門、　賴宣卿同類管内之諸寺、覺駐駕此所、思念山林相繆轕乎、蒼々離城下五六里、寂寥靈區也、以故創建堂宇、堅權存于今、維至永代非亂劇火之可及地矣、吾取滅後、爲墳墓之地、其志確乎不息、故召寺僧詢當寺之權輿、僧曰往昔台門弘通之地也、中古混雜、今爲密宗、寧乞復先規　賴宣卿悵意喔喚住僧訴旨再歸台宗、預爲墓於此山、　賴宣卿入石室、四望曰、此處夷彼處滑矣　作其巧已成、寛文十一稔孟春、十萬病逝矣、　賴宣卿、當恩爲本詞　東照宮神恩嗣慈眼大師脈譜發明一心之觀、一念三千之玄妙、吾死可心以天台宗葬焉、　嗣英黄門光貞卿、任遺告奉歛長保寺石窟、屈請　毘沙門堂前大僧正公海、修七々中陰之冥福、且使諸宗緇侶諷經燒香、嗚呼尊靈爲人也、忠孝溢内、仁惠彰外、篤敬之實、普撫庶民、可謂賢達君子也、訃音所及、天下緇素無不潸然而涙下、　光貞卿爲尊靈追孝、納封内租五百石、爲御靈供料、且欲以陽照院爲定院室、頃訴于　輪王寺宮一品法親王尊敬因不獲已、而染紫毫以被補定院室焉、又依　法親王之命、記其始末附之庶幾主於此寺者、盡未來際、挑法燈、奉廻向于彼尊靈、勿違戾之而已

寛文十二年六月十七日

觀理院　舜盛　花押

圓覺院　詵泰　花押

陽照院現住

大僧都法印憲空

一佛殿鬼尾之銘

寺嶋甚兵衞藤原茂慶

寛文六年丙午八月　日

一寛文七年棟札　竪四尺五寸　巾六寸　檜

表

聖主大中天　紀伊太主從二位行權大納言源朝臣

迦陵頻伽聲　賴宣公

哀愍衆生者

奉新造　御佛殿一宇令法久住所

我等今敬禮

御道師　和歌雲蓋院權僧正
大和尚位憲海

寛文七年丁未
十一月吉日

御奉行　內藤七郎右衞門尉藤原利忠
原田權六藤原乘春

御大工　中村新平平久光
中村藤十平宗廣

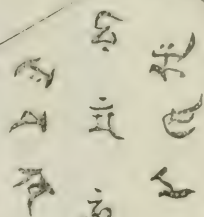
裏

喼喼如律令

文政三辰年棟札　竪三尺　巾八寸

表

聖主天中天迦陵頻伽聲御願主　當太守從二位行權大納言源

治寶卿

卍南龍院尊位御靈殿葺理令法久住奉祈所

哀愍衆生者我等今敬禮御造營成就文政三年庚辰秋七月五日

喼喼如律令

御作事奉行　三宅久藏橘恒路

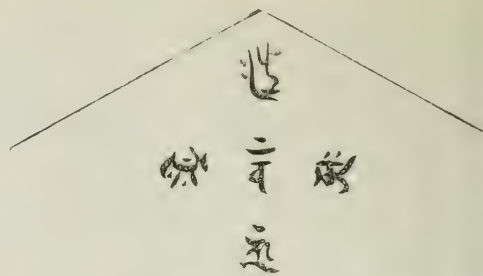
同　林淺右衞門源正平

御大工頭　中村市左衞門平常方

見廻役　原權四郎平直幸

同　西岡楠右衞門大江當等

裏

御靈殿幷寺院者　南龍院相公御在世中、依　尊命所創建也、謹考事實、寬文二年壬寅九月、始　命權僧正憲海大僧都重順、使登當山相攸、同六年丙午七月十二日柱立始之、同七年丁未十一月落慶、御安鎮法憲海修之、同

八年戊申四月廿二日、請　毘門主公海大僧正、有御堂供養、同年十二月七日、承　命安置釋迦地藏二尊于内佛殿、同十一年辛亥正月十日、　相公御逝去、同月廿六日　御葬送、御導師毘門主、公海大僧正、山門衆十口及國中台徒參勤、同年三月廿六日、　尊牌御安置、開光導師權僧正憲海、此歳　御拜殿御唐門御寶藏起立、元祿四年辛未五月、　御宮殿御改造、其餘大小事不遑枚擧焉、始自興起歳、至于今歷一百五十五年、屋宇漸朽敗、今春正當御遠忌廣作佛事、後　大守大檀相公、殊　命有司、令葺理之、經營不日成功如新也、於是勤修八字文殊鎭家秘法、奉祈　靈殿長久法燈永傳、伏願　尊靈内鑒二嚴圓滿、威光增益、　大檀尊君、御願成就高運榮昌、國家安隱、万姓快樂、乃至沙界平等利益、今爲後鑑、聊記歳月云、

文政三年庚辰七月

陽照院十一世法印昌覺　敬白

陽照院

高五百石

御佛供料

米貳拾俵　清溪院樣御佛供料
同拾五俵　深覺院樣　同
同貳拾俵　菩提心院樣同
同拾五俵　高林院樣　同
同貳拾俵　大惠院樣　同
同貳拾俵　觀自在院樣同

同貳拾俵　香嚴院樣　同　　同貳拾俵　舜恭院樣　同
同貳拾俵　[illegible]龍院樣　同　　同貳拾俵　憲章院樣　同
同　五俵　淨眼院樣　同　　同　五俵　明脱院樣　同
同　五俵　貞恭院樣　同　　同　五俵　鶴樹院樣　同
同　五俵　觀如院樣　同　　銀　貳枚　寶池院樣　同
同　貳枚　一生院樣　同　　同　貳枚　清信院樣　同
同　貳枚　證清院樣　同　　同　貳枚　榮恭院樣　同

小以　高五百石　米[illegible]百拾五俵　銀四百三拾匁

紀勢御領分高帳記する所左の如し

高二百十六石九斗二升九合　海部郡　上村

高二百十九石七斗二升三合　中村

總御廟御寶塔并御廟料　長保寺

南龍院殿二品前亞相顯永天晃大居士

清溪院殿贈一品前亞相源泉　「觀自在院樣より　金五十兩　思召にて御寄付永代御祥月并毎月御忌日別段御回向料」

高林院殿三品黄門雲峯淨空　「觀自在院樣より　金五十兩　右御同斷」

深覺院殿贈亞相三品圓[illegible]貞常　「觀自在院樣より　金五十兩　右御同斷」

大慧院殿二品前亞相普觀徹性

菩提心院殿黄門三品智願慇生

「觀自在院樣より 金百兩 思召にて御寄付御証月別段 供會料」

觀自在院殿前黄門三品大眞

香嚴院殿清齊圓通

舜恭院殿一品前亞相大光正受源恭公

顯龍院殿二品前亞相恭讓圓輝大居士

憲章院殿二品前亞相至德道光

御簾中樣方

淨眼院殿　菩提心公御簾中富宮　寶曆七丑年五月廿四日

明脱院殿　御同公再御簾中愛君　安永八亥年七月十九日

貞恭院殿芳蘭慈室大姉　舜恭公御簾中　寬政六寅年正月八日

鶴樹院殿瑤光心明大姉　顯龍公御簾中　弘化二巳年八月十日

觀如院殿智光圓照大姉　憲章公御簾中　嘉永六丑年二月十日

御子樣方

高岳院殿玉信上士　清溪公御子治郎吉君　延寶七未年十月十八日

「御廟料無御座御証月御名代等無御座候

一金五十兩　觀自在院樣　思召にて御寄付御証月每月御忌日七月御施餓鬼幷兩彼岸其外式日御回向幷香華燈明料御年回之節

御法事等一切無御座候」

菩提心院公御嫡直松君
延享四卯年六月十四日

寶池院殿

「御廟料銀五枚之處去寅年より御減銀貳枚に相成御証月御名代金貳兩御備

一金貳百兩

一銀五十枚　觀自在院樣　思召にて御寄付永代御証月御忌日七月御施餓鬼　兩彼岸共外式日御回向幷香華燈明料」

觀自在院公御嫡彌之助君
明治八卯年六月十八日

一生院殿夢幻心性大童子

「御廟料銀三枚之處去寅年より御減銀二枚に相成御証月御名代金貳兩御備

一金百兩　觀自在院樣　思召にて御寄付御回向等都而右御同斷

一銀四十枚　御年回之節　御法事等一切無御座候」

御同公姫君備姫（ノブ）
寛政八辰年十二月十七日

心蓮院殿深密智到大姉

「御廟料無御座御証月御備金貳兩　御年回之節御法事等一切無御座候

一金百兩　觀自在院樣　思召にて御寄付御回向等都而右御同斷」

當公御長男長福丸君
明治三午年六月廿日

妙幻院殿法山玉英大童子

御部屋方

觀自在院公御實母
寛政十二申年二月三日

清信院殿靈惠妙覺大禪尼

「御廟料銀貳枚　御年回之節御法事等一切無御座候別段御寄付金等無御座候」

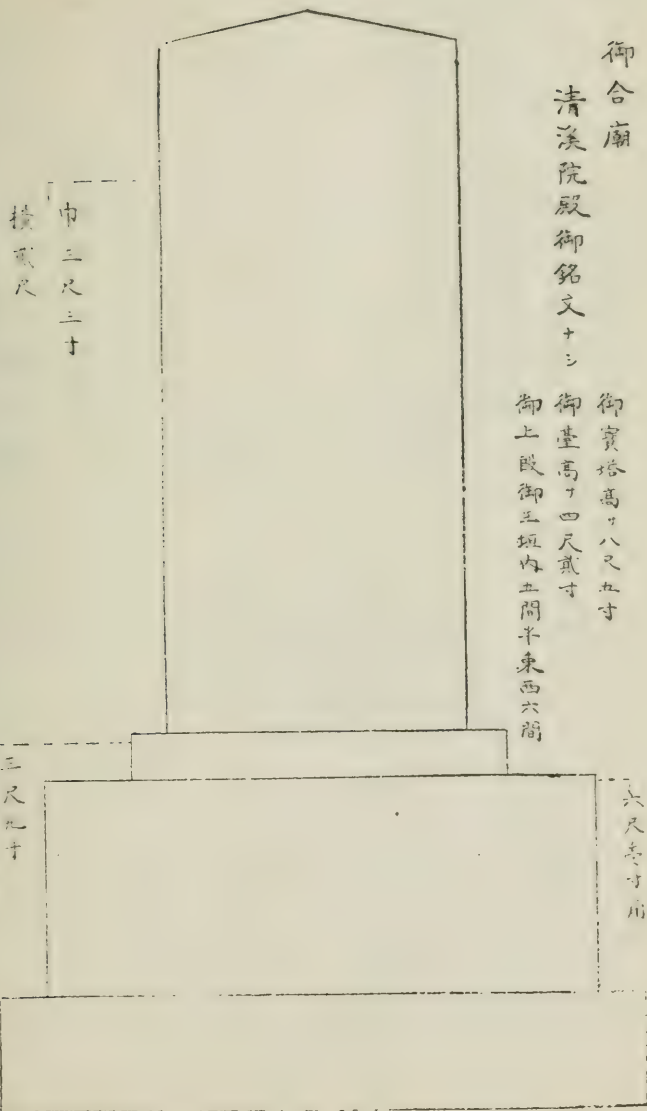
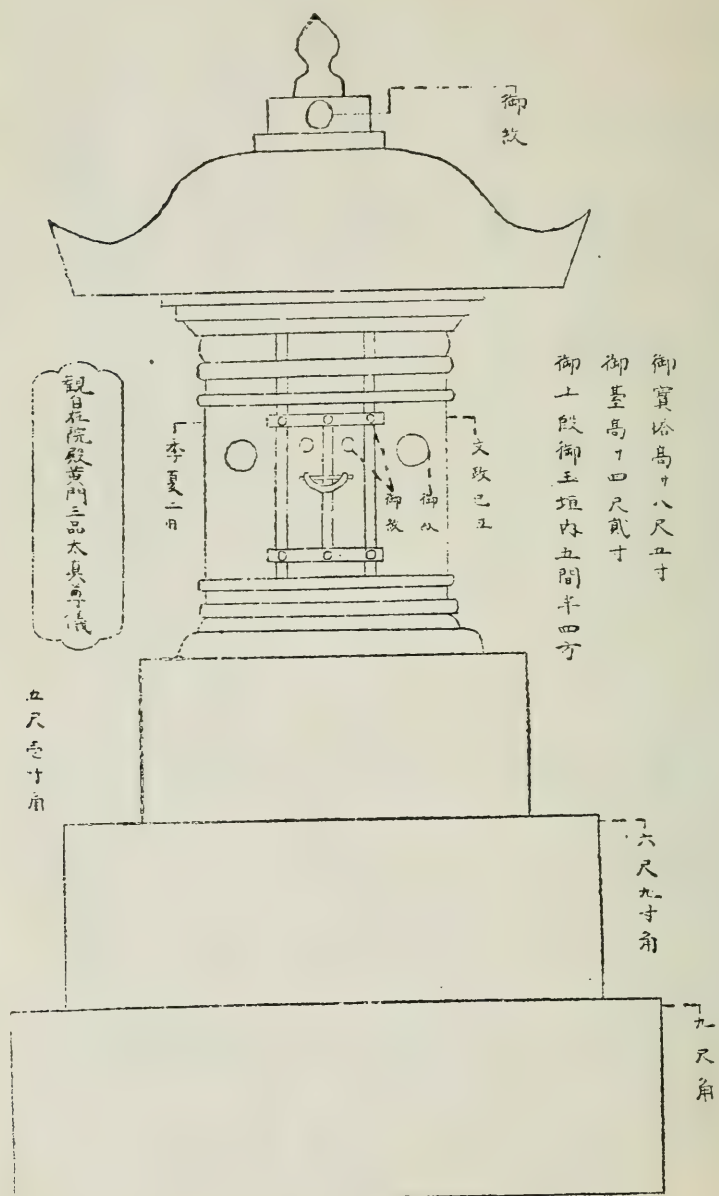
舜恭院公御實母
明和八卯年十一月十日

澄清院殿寒月臨池大姉

「御廟料銀貳枚　御年回之節御法事一切無之候別段御寄付等無御座候」

慈讓院殿志覺順恕大姉　　觀自在院公御部屋
文化二丑年十二月十一日
一御廟料無御座候御証月御備銀貳兩　御年回之節御法事等一切無御座候
一金百兩
觀自在院樣思召にて御寄付御証月毎月御忌日七月御施餓鬼　并兩彼岸御回向并香華燈明料一
一銀四十枚
榮恭院殿德信妙源大姉　　舜恭院公御部屋
嘉永二酉年十一月廿五日
一御廟料銀二枚　御年回之節御法事等無御座候別段御寄付金等無御座候一
讓恭院殿專心妙節大姉　　御同公御部屋分
嘉永七寅年四月十日
一一金五十兩　御寄付毎月御忌日御回向料御年回之節御法事等無御座候一
右御尊骸當山へ御納被遊御座候
表御内佛
普明院殿雪操妙山大姉　　菩提心公御部屋金十郎君御實母
保福院殿乘如妙道大姉　　御同公御部屋
法成院殿妙實日性大禪尼　　御同公御部屋
「右御三方樣御位牌料金百五十兩
觀自在院樣より御寄附　但法成院殿へ金五十兩は文化九申年十月也
奥御内佛
瑤林院殿淨秀日芳大姉　　南龍公御簾中

理眞院殿妙尊日覺大姉　清溪公御實母
瑞應院殿妙圓日珠大姉　高林公御實母
眞如院殿妙圓日教大禪尼　深覺公御實母
一右御四方樣御位牌料金百七拾兩つゝ
知幻院殿空華了薫大童女　觀自在公御女鐵姫
恭岳院殿瑞譽瑛智貞樹大姉　御同公御妹方姫 水戸治起卿御簾中
空如院殿法山淨林大童子　御同公御二男雅之助君
一右御三方御位牌料金百兩つゝ　觀自在院樣より御寄附
廣德院殿羽林英山元高大居士　舜恭公御聟君
信恭院殿淨相眞壽大姉　御同公姫君 廣德院殿室
一右御二方樣御位牌料金五拾兩　舜恭院樣より御寄付
右御位牌被遊御納御座候
一觀自在院樣御火葬之御場所釋迦堂上西山手に御石塔御建御座候
一右御祠堂金貸附置利子を以年中毎日勤行飯食香華燈明御證月毎月式日五節句其外兩彼岸七月御施餓鬼等御盛物御膳献備御回向御布施御齋料幷年中役僧飯料給料等諸入用に相成申候

長保寺
御寶塔圖
南龍院殿御寶塔御銘文無シ
六尺八寸廻り
御寶塔高サ六尺五寸
御臺高サ六尺
御上段御玉垣内
東西六間
南北五間四尺
貳尺五寸六角
三尺六寸六角
八尺六寸

御合廟
清渓院殿御銘文ナシ
御實塔高サ八尺五寸
御臺高サ四尺貳寸
御上段御玉垣内五間半東西六間
巾三尺三寸
横貳尺
三尺九寸
横貳尺七寸
六尺壹寸角
尺角

御紋
御寶塔高サ八尺五寸
御臺高サ四尺貳寸
御土段御玉垣内五間半四方
觀自在院殿黄門三品太真尊儀
季夏二日
文政己丑
御紋
五尺壹寸角
六尺九寸角
九尺角

御合廟

高林院殿御銘文ナシ

御寶塔高サ六尺

御臺高サ四尺五寸

御上段御玉垣内四間半貳尺四寸

巾貳尺三寸

横壹尺六寸

貳尺八寸

四尺五寸角

七尺角

香嚴院
壱尺三寸
御寶塔高サ六尺
御臺高サ四尺五寸
御上段御玉垣内三間四方
貳尺八寸
四尺五寸角
七尺角

深覚院殿御銘文ナシ

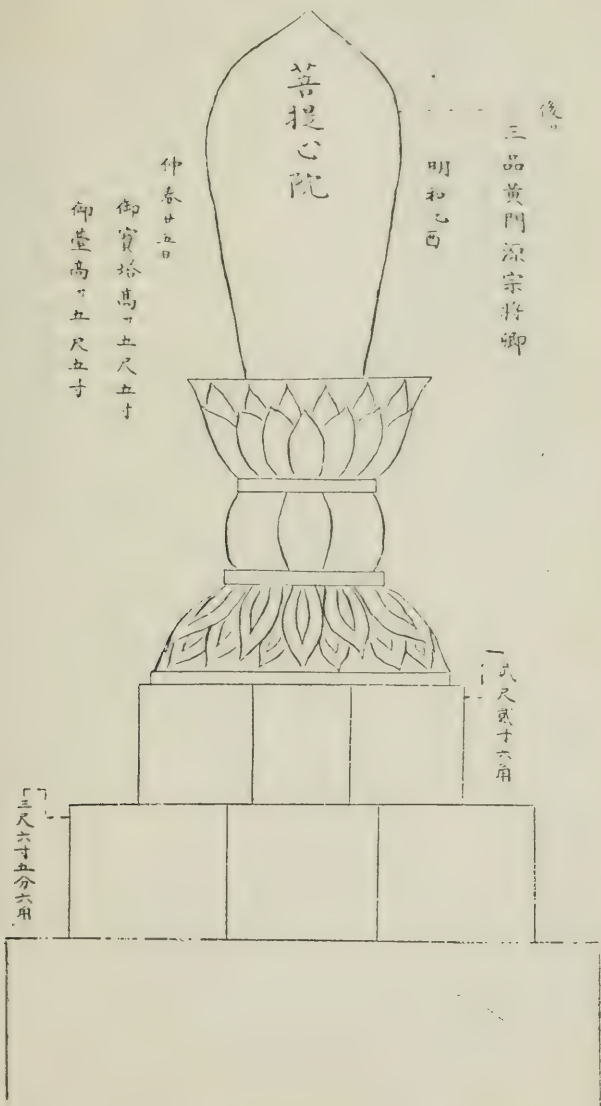
御寳塔高サ五尺八寸
御臺高サ三尺八寸
御上段三間四方

巾弐尺三寸
横壱尺六寸

弐尺五寸
（一本横一尺九寸）

四尺五寸角

大慧院殿御寶塔御銘文無之
六尺壱寸五分廻り
貳尺三寸六角
三尺貳寸六角
七尺八寸四方
御寶塔高サ壱間
御臺高サ五尺五寸
御玉段御玉垣際 東西五間 南北四間

後ハ
三品黄門源宗将卿
明和乙酉
菩提心院
仲春廿五日
御寶塔高サ五尺五寸
御臺高サ五尺五寸

貳尺貳寸六角
三尺六寸五分六角
三尺貳寸五分四角

御寶塔高サ壹間半
御臺高サ壹間
嘉永癸丑
春八日
五尺
七尺
壹間半

右御同様
弘化丙午
閏五月八日

右御同様
憲章院殿一品前亜相至徳道光

御寶塔高サ壱間半

御臺高サ壱間

御上段内東西五間
南北四間半

寛政六甲寅歳

四尺七寸

五尺壱寸

正月初八日

壱尺貳寸六角

南無阿彌陀佛
貞恭院

一位様御筆

六尺九寸

八尺八寸

貞恭院様御同様
鶴樹院殿瑤光心明大姉尊儀
弘化二乙巳歳
八月十日

御寳塔高サ六尺三寸
御臺高サ貮尺五寸
御玉垣内貮間四方

淨眼院

寳暦七丁丑歳

五月廿四日

三尺貮寸五分角

四尺壱寸角

御寶塔高サ六尺三寸
御臺高サ貳尺五寸
御上段御玉垣外貳間四方

明脱院

安永八巳亥歳
七月十九日

壱尺五寸角

三尺貳寸五分角

四尺壱寸角

御寳塔高サ五尺
御棠高サ三尺八寸
御上段内法間四方
嘉永六己丑
三月十日
七寸七分角
観知院殿智光圓照大姉尊儀
弐尺七寸五分
三尺壱寸
四尺弐寸五分
五尺四寸五分

寶池院殿

御銘文無シ

御寶塔高サ三尺五寸

御臺高サ貳尺八寸

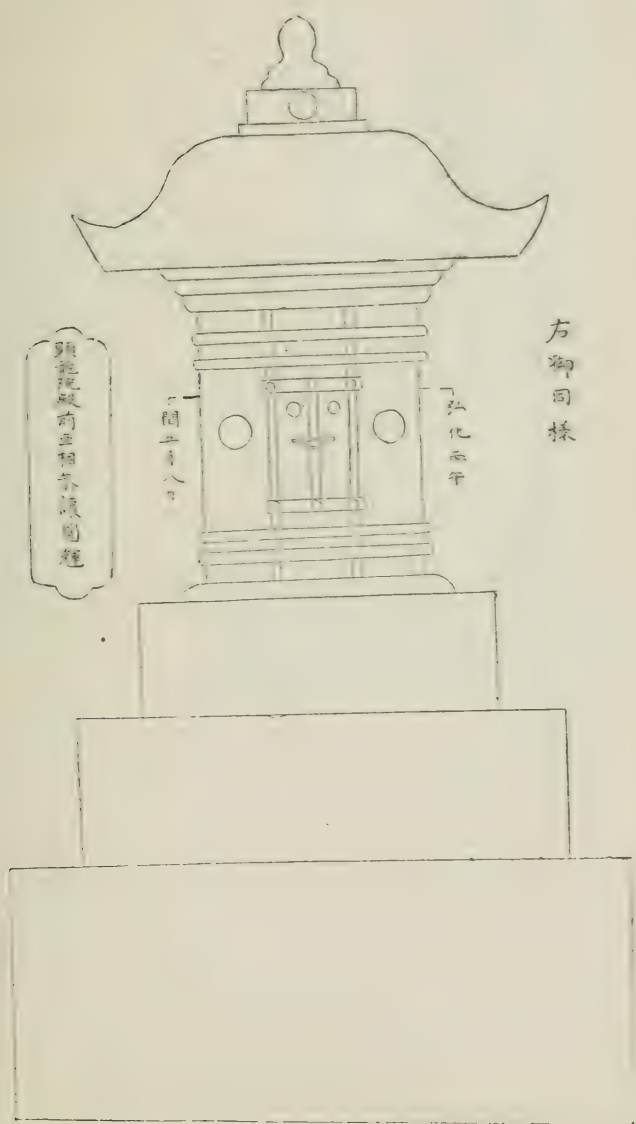
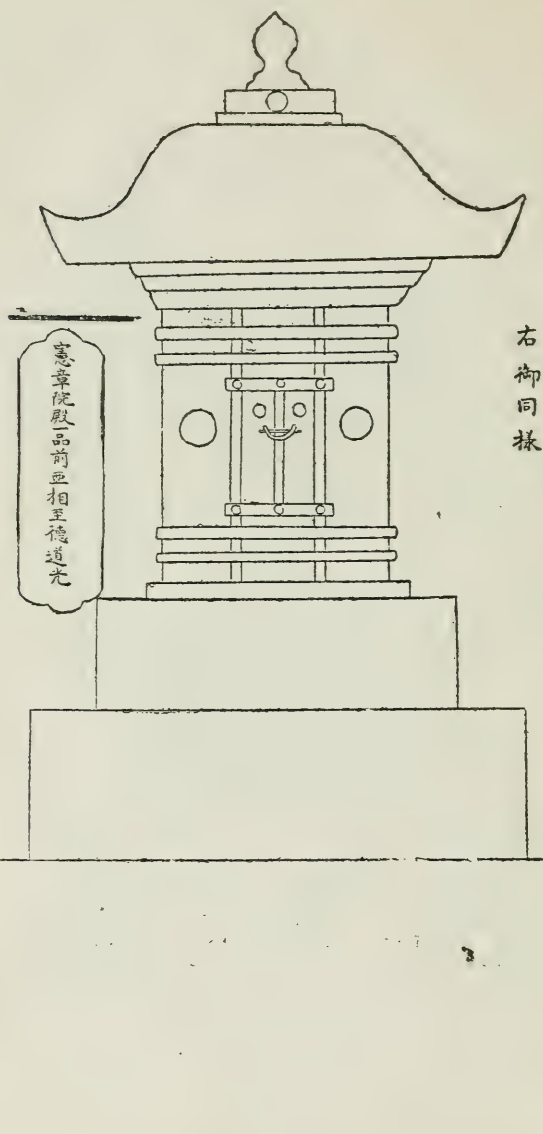
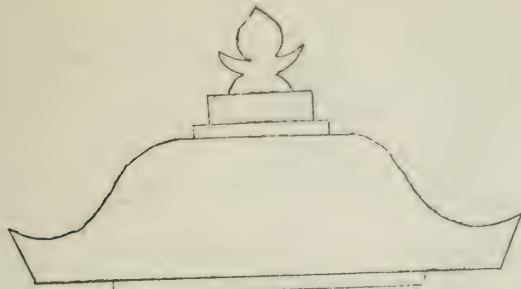
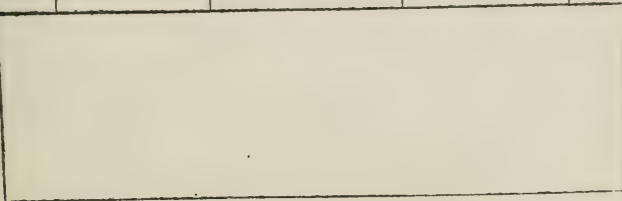
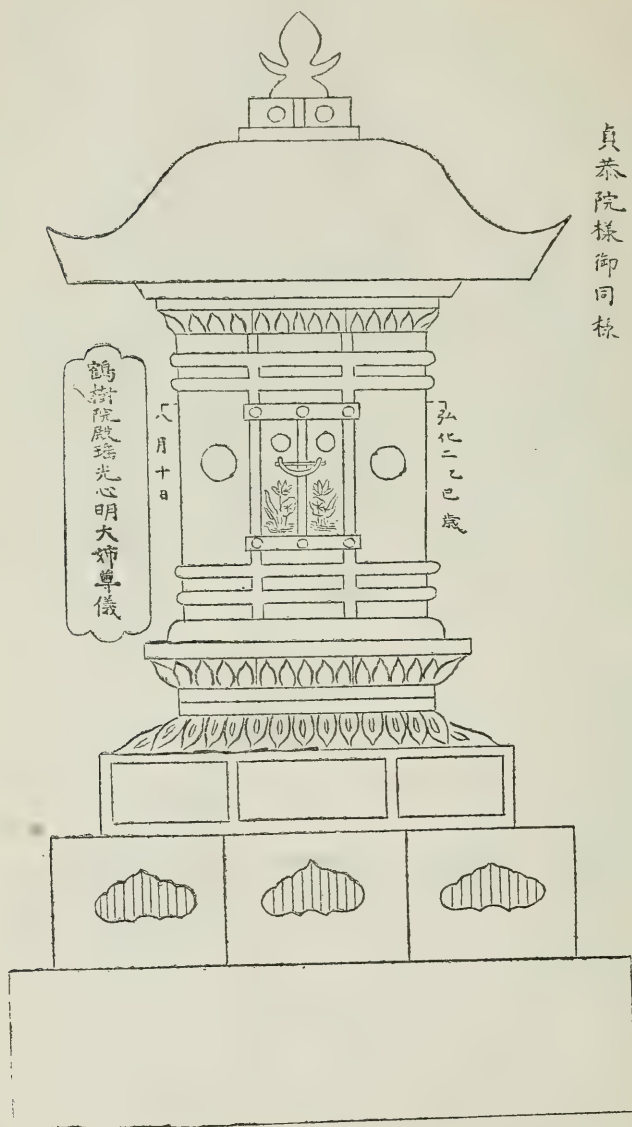
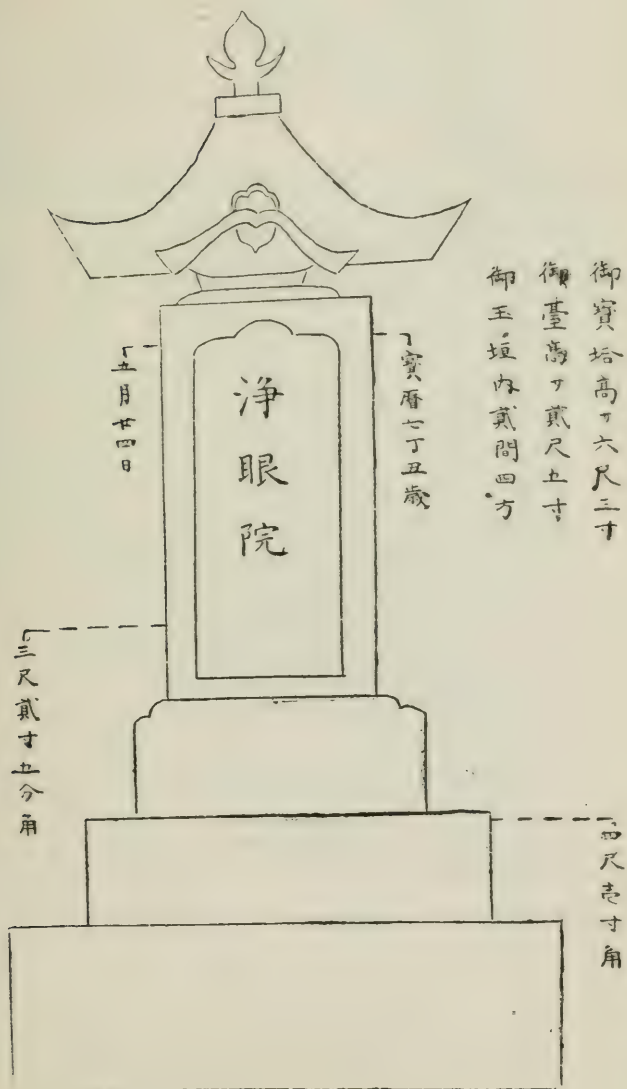
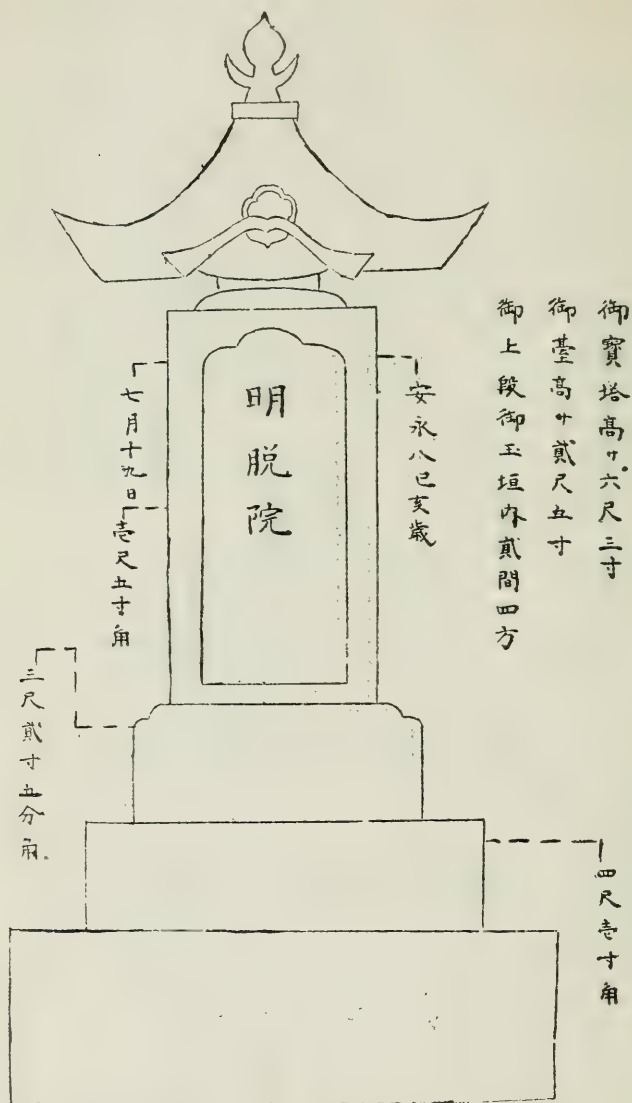
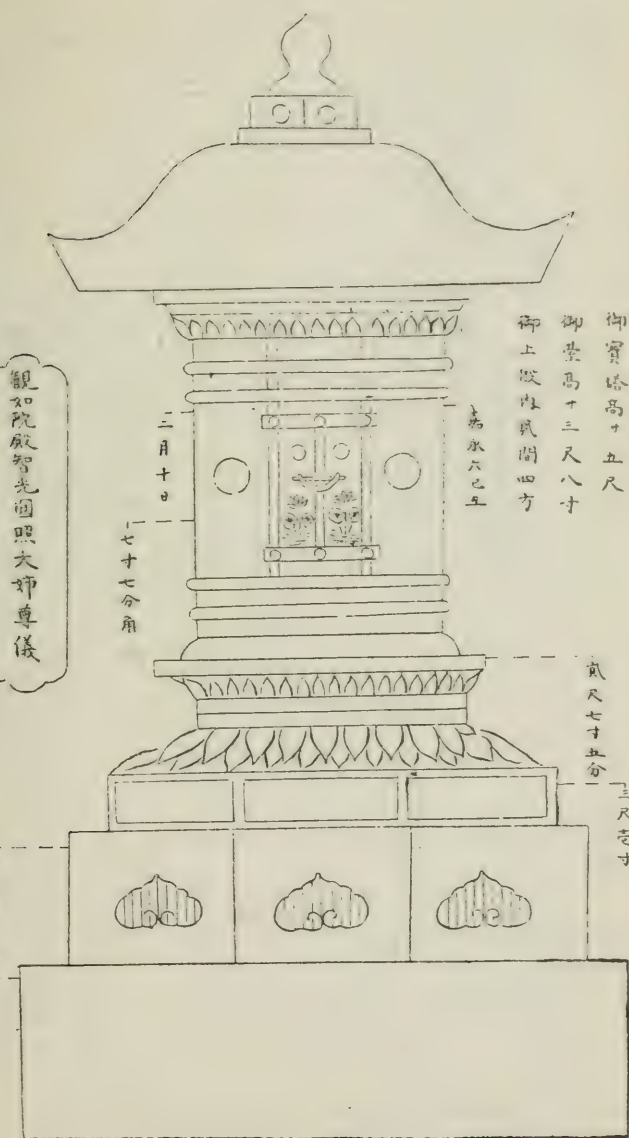
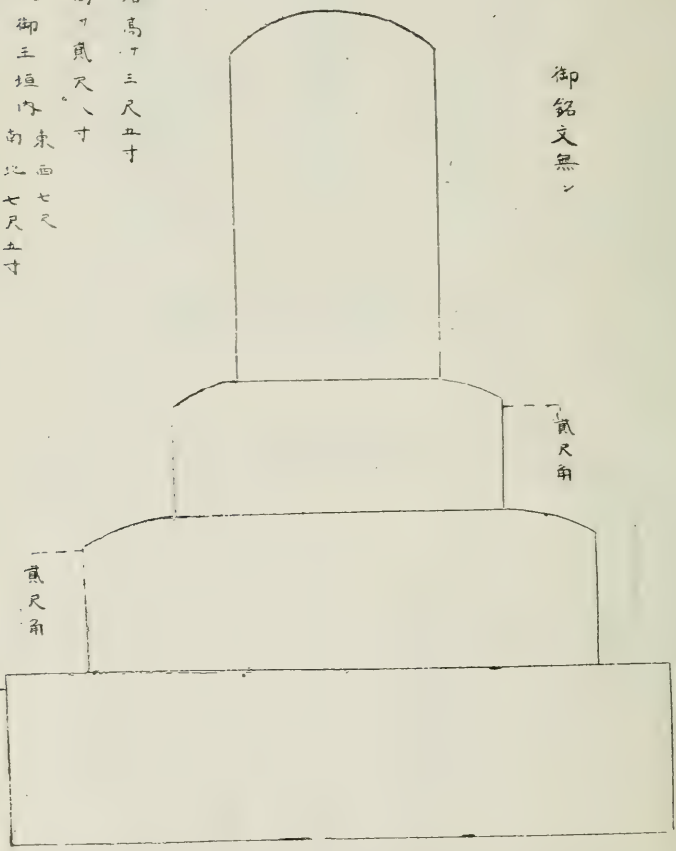
御上段御玉垣内 東西七尺 南北七尺五寸

貳尺角

貳尺角

四尺五寸角

右御同様

明和八辛卯歳

一生院

六月十八日

右御同様

延寶七己未歳

高岳院殿玉信上士

十月十八日

御寶塔高廿三尺五寸

御臺高廿貳尺壱寸

御上段 東西壱間壱尺五寸
南北壱間壱尺七寸

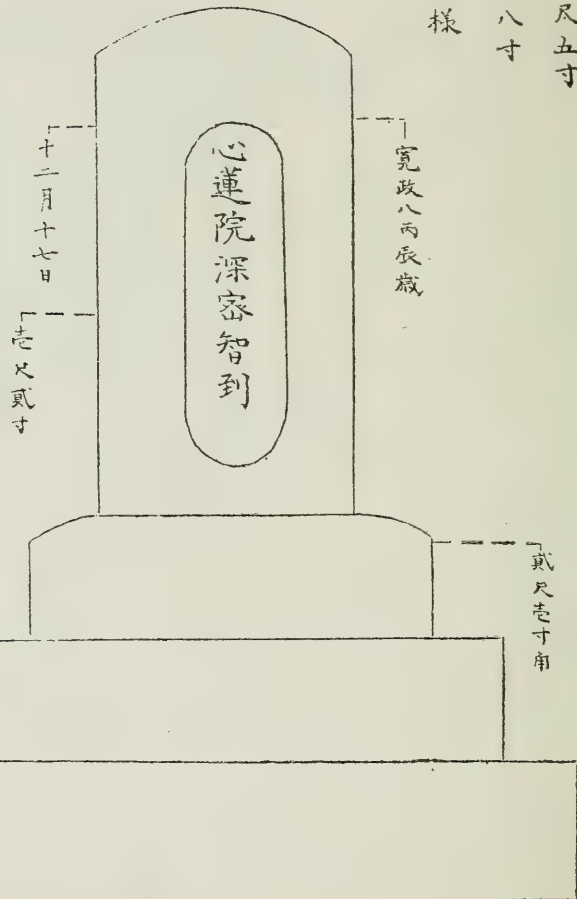
文化二乙丑歳

慈譲院志覚順恕

十一月十一日

貳尺九寸角

四尺六寸角

御寶塔高廿三尺五寸
御臺高廿貳尺八寸
御上段右御同樣
心蓮院深容智到
寛政八丙辰歳
十二月十七日
壱尺貳寸
貳尺壱寸角
三尺角
四尺五寸角

御寶塔高廿五尺
御臺高廿三尺
御上ノ段御玉垣内 東西貳間 南北貳間

明和八年辛卯

澄清院寒月臨池大姉

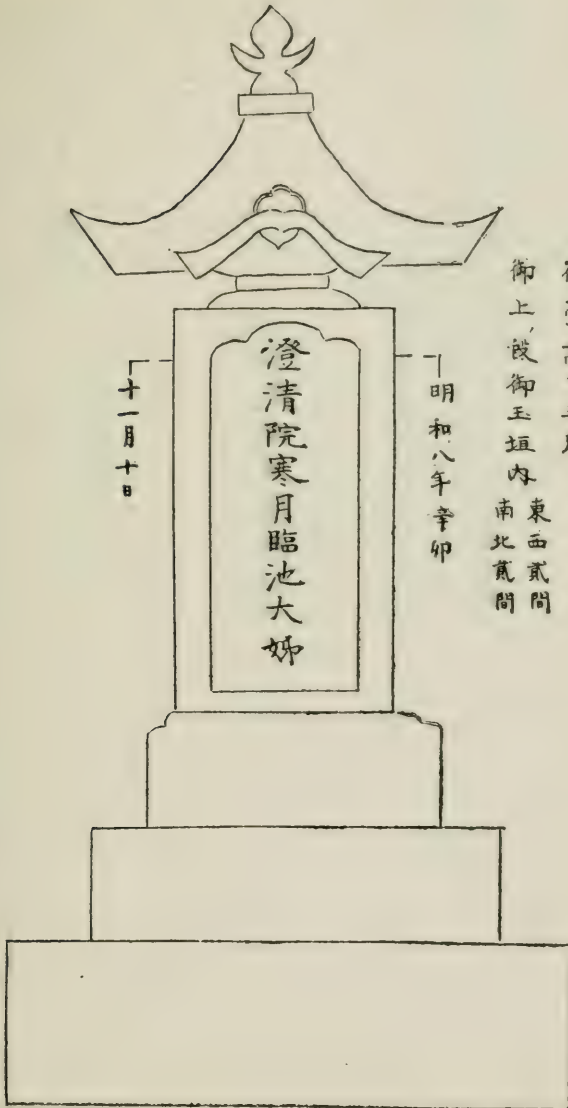
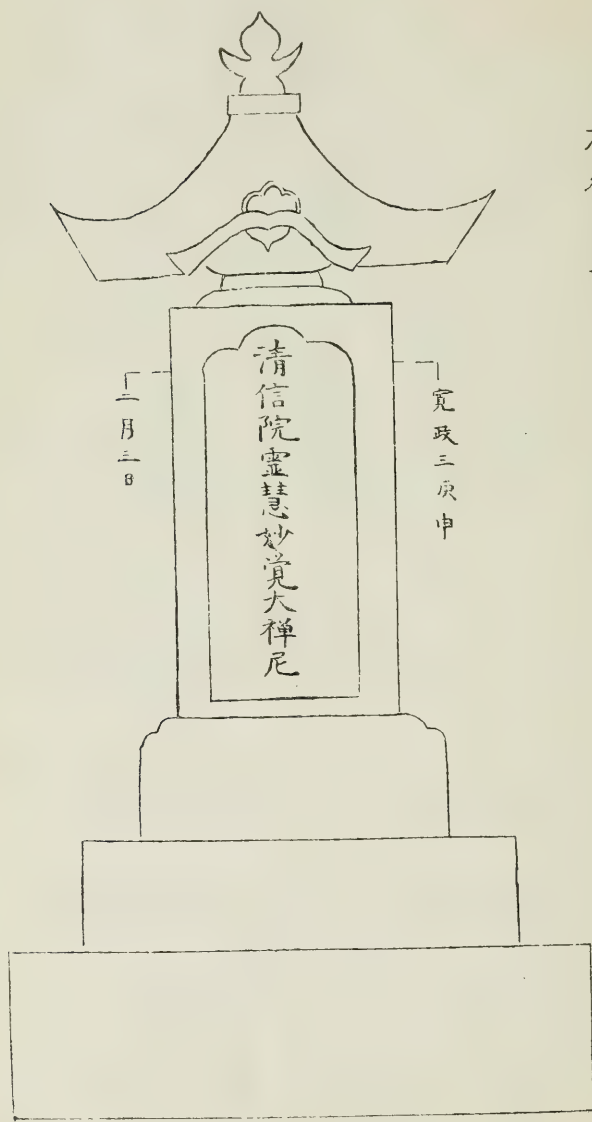
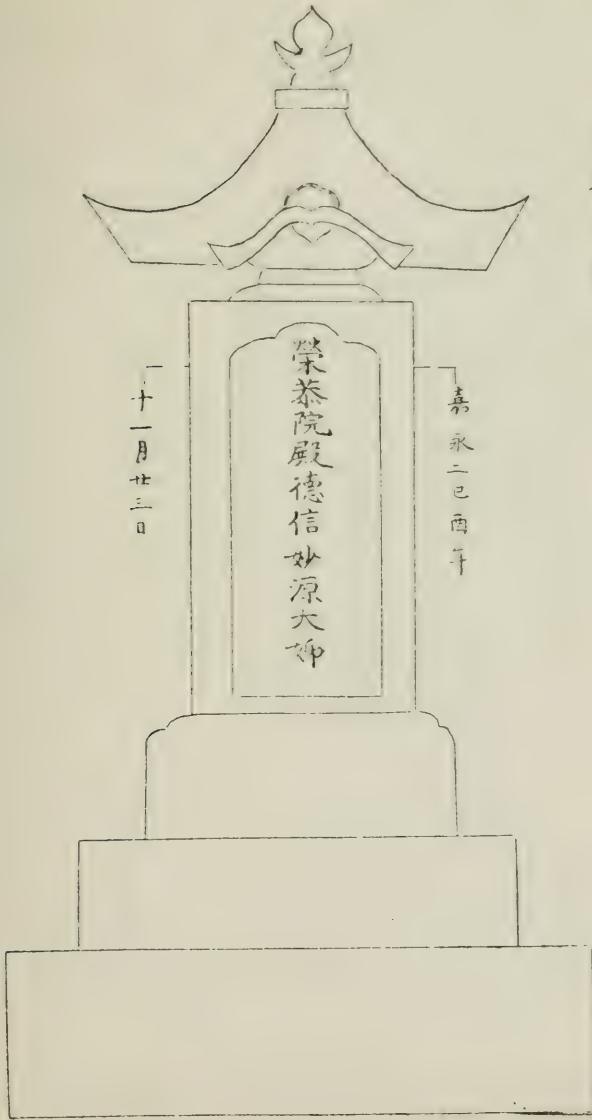
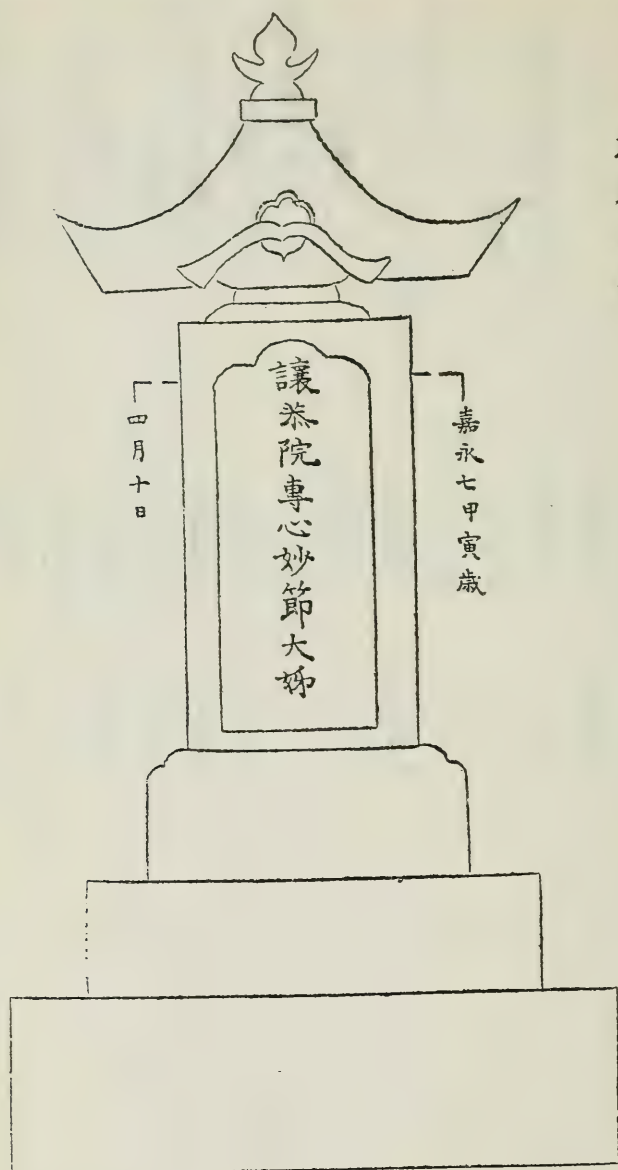
十一月十日

惣而
右御同様
寛政三庚申
清信院霊慧妙覚大禅尼
二月三日

右御同様

嘉永二己酉年

榮恭院殿徳信妙源大姉

十一月廿三日

右御同様

總御廟庭献備御燈籠

南龍院樣御廟御中段　御銅檠　四　基
　　御石檠　六　基
下段　同　斷　十四基
御唐門下　同　斷　六　基
淸溪院樣御廟御中段　御銅檠　二　基
下段　御銅檠　十二基
高林院樣御廟
御中段　御銅檠　二　基
下段　御石檠　十二基
深覺院樣御廟
右御同斷
大慧院樣御廟御中段　御銅檠　三　對
　　御石檠　十五基
下段　御石檠　十二基
菩提心院樣御廟御中段　御銅檠　四　基
　　御石檠　廿四基

下段　御石檠　十二基
香嚴院様御廟御中段　御銅檠　六基
御石檠　二基
下段　御石檠　十三基
觀自在院様御廟御中段　御銅檠　二基
御石檠　二基
下段　御石檠　十基
舜恭院様御廟御中段　御銅檠　二基
御石檠　二基
下段　御石檠　十基
顯龍院様御廟御中段　御銅檠　二基
御石檠　二基
下段　御石檠　十基
憲章院様御廟御中段　右御同斷
下段　右御同斷
貞恭院様御廟御中段　御石檠　六基
下段　同斷　十四基

鶴樹院様御廟御中段　御石築　五　基
下段　同断　九　基
浄眼院様御廟御中段　同断　六　基
下段　同断　十四基
明脱院様御廟御中段　御石築　十五基
下段　同断　十二基
観如院様御廟御中段　二　基
寶池院様御廟前　御石築　二　基
一生院様御廟前　右同断
高岳院様御廟前　右同断
心蓮院様御廟前　右同断
慈譲院様御廟前　右同断
澄清院様御廟前　右同断
清信院様御廟前　右同断
但御下段に二基
榮恭院様御廟前　右同断
讓恭様院御廟前　右同断

一御寄附品

一御家祖御靈牌所　　六間半四面

一玄關　　三間四面

一役僧部屋　　桁行四間梁三間

右寛文六丙午年　南龍公御營造

一唐銅香爐　　一朱塗卓付

右享保十巳年八月七日　將軍有德公より御寄附

一紺紙金泥法華經壽量品　　一卷

右享保九辰年五月　大慧公御直筆に而御奉納

大慧公

一千首御詠草十卷　　冷泉爲村卿朱添削入

一同　清　書　　冷泉爲村卿筆

右寶曆五亥年十一月御成就にて御奉納

一法華經　　八卷

一無量義經　　一卷　　合十卷　　紺紙金泥塔に入

一觀普賢經　　一卷

右寶曆十辰六月十六日　大慧公御書寫御奉納塔は菩提心公より御寄附

一銅燈籠　一對

右松平左京大夫頼純卿より御寄付

一佛像畫　五幅

一銅燈籠　一對

一眞鍮佛具　二面

一同香爐　七

一磬　一臺

一半鐘　一口

一打敷　二枚

一廡幕　一張

一密壇　二組

一法華經　七部

一法華世講四條論議　二卷

一燒香机　五脚

一翠簾　六枚

一燒香器　五

一鐃鈸　一組

一法華經　一部

一唐銅燈籠　一對

一眞鍮三具足　二對（本組）

一唐銅花瓶　二

一鏧　一臺

一幡　十六流

一水引　二組

一天蓋　二掛

一八脚机　二脚

一例時懺法　二卷

一經机　六脚

一過去帳　一帖

一木魚　一

一銅花鬘　十

一燭臺　一對

一密檀　二組　一眞鍮佛具　二面
一眞鍮三つ具足　二組　一磬　一臺
一佛飯器　五つ　一銅燈籠　一對
一木魚　一　一法花懺法　一卷
一幡　三流　一銅花籠　十五枚
一幢幡　一對　一打敷　三枚
一麻幕　二張　一翠簾　九枚
一法華八講檀　一對　一額従一位徳川治定公御筆　一面

右御家より御寄附

此外院主他院より之寄附若干及ひ本堂阿彌陀堂大日塔鐘樓護摩堂附屬品等略す

維　新　後

一明治二巳年十二月朔日　御菩提所向後陽照院一ヶ所に御制定左之通被達

陽　照　院

此度藩知事御拜命御家祿十分一と被　仰出候に付萬緒適宜之御改革無之候半而は何分御家算難相立候に付甚御不快には　思召候得共不被爲得止　御宗家御靈牌は御邸內へ御安置　御手前御靈牌は　御廟所有之御寺へ　御遷座可被遊旨被　仰出之

件之通に付雲蓋院に御安置之　御靈牌は其御寺へ御遷座振等は追て可相達事

一明治二巳年十二月廿日和歌　南龍院様御初御靈牌長保寺へ御遷座相濟

一明治三午年正月七日陽照院へ左之通指令「陽照院より内存書付を以て願出に依てなり」

御靈牌御遷座に付御入用も可有之付爲冥加錢四千貫文差上度旨内存之趣達　御聽候處奇特成儀

御喜色に思召候得共此度は差上るに不及候此段可相達との御事候

一明治三午年三月二日左之通達せらる

陽　照　院

御家父様方御初　御總容様へ御佛供料且御莊嚴品爲御入用向後年々米貳百俵被遊御附候

一ヶ年米貳百俵を以

御佛供料

御道具類御修復等

御靈前幷　御廟所向御障子張替御掃除向

右之廉々御寺にて相凌候筈

一御堂幷　御廟所等營繕は其節々御申立候様

一御代々様御初御年囘之節御法事料御齋非時被下料等其外巨細御入用料金其節々別紙之通御納相

成候事

下け紙

万一此後　御廟御增相成候共本文之高御增は無之筈之事

別紙

南龍院様御初御方々様御年回御法事御回向料左之員数にて御膳御盛物御莊嚴品且御齋非時被下等其外巨細之儀迄も悉皆御寺にて相賄候筈右事

一御家父様方　御一周忌より十七回御忌迄　金三拾両
　　　　　　　二十一回御忌より　金貳拾両
一御簾中様方　御一周忌より十七回御忌迄　金貳拾両
　　　　　　　廿一回御忌より　金拾五両
一（御嫡子様　御一周忌より十七回御忌迄　金拾五両
　（御實母様　廿一回御忌より　金拾　両
一御方々様　御一周忌より十七回御忌迄　金拾　両
　　　　　　廿一回御忌より　金五　両
一七歳未満之御方々様御嫡子様共　御一周忌より　金壹両貳歩
一其御寺に御納相成候　御代々様御初御女儀様御官服幷御道具類夫々御入置之御藏共御寺へ被下候事

一同月十九日陽照院へ達
御家父様方御初御佛供料且御莊嚴品御入用年々米貳百俵御附被遊候處猶内存被申立之趣も有之候に付　御廟向御掃除料として別段年々現米九石被下候事

一明治年月日欠内願之品も有之以來米三百俵御附被遊年々御掃除料は上り候事之旨達す
明治三年年十二月寺領上地となる一般社寺領上地之部に記す

本久寺 塩道万部山 法華宗

一一書に曰く開山は日玄也法華万部の時 瑤林院樣御施主に被爲成則御持佛堂の祖師の像を御寄附
御祈禱之本尊とす
境内の鬼子母神は傳敎大師の作 高林院樣御座胎の内瑞應院樣一本ナシ 御生母 妙見を御寄附ありて此寶前
にて變成男子の御祈禱被 仰付御嫡子御出生被成候
一寬文十三年女中於中殿臨終之砌 公命にて當寺へ納り墓所に五間四方御免地に相成年頭御禮相勤

明王院 湊領吹上山藥師寺 天台宗

續風土記に曰く 南龍公より境内の外に東西百八十間南北百四十三間の地を賜ひて寺產とせらる
又稟米二石を賜ふ寺庫藏むる處 君公幷夫人諸公子より寄附せられし品數種あり近年 一位老公
親筆の瀟灑といふ二字の額を賜ふ
境内
辨財天社 池の中央に祀る舊辨天山にありしを寬永中南龍公命して此に移さしむ瑞籬鳥居あり
山王社 此社は舊久野大夫の邸中にあり寬文七年 南龍公此に遷し國城の守護神とせられ繪馬鳥居燈籠等奉納あり
元山大師堂 元祿十二年 明信夫人建立せらる像は元山大師の自作といふ堂中に普賢像あり 高林公の奉納也辨財天像あり 明信夫人の奉納なり

熊野權現社　二社は有徳大君藩にいましゝ時の御建立
稻荷社
稻荷社　寛延二年大慧公國城守護のため江戸飛鳥王子より勸請せらる拜殿鳥居石燈籠あり
疱瘡神社　菩提心公の公子雅之丞君建立

一紀伊國名所圖會に辨財天は當國三弁天の一也万治年間爰にうつすとあり
紀勢御領分高帳に湊村高十八石二斗二升五合寺社領と合記せり内三石は蛭子社領にして十五石二斗二升五合は明王院領と察す明治二年之調書左之如し十五石余御寄附の事明記之ものなしと雖も世ゝの君及ひ諸公子より追々御建立等の事あれは夫等の時增額ありしなるへし

現米貳石　吹上明王院
高拾五石二斗二升五合　湊村明王院
田畑五町二反九畝六歩五厘　同　明王院

妙宣寺　新堀覺王山と云　養珠寺末

當寺舊記に曰く元那賀郡粉川村に在て一乘傳通法華の事の古跡也寛文七丁未年　龍祖の命に依り陽山に移轉和歌村妹脊山養珠寺の末寺となる然るに僻地の幽居檀緣に踈く次第に衰微此時本山の六世蓋四世日禪上人之を歎き正徳二壬辰初秋　大守公に請願和歌山今福領新堀今の地に於て千三百坪の地を拜領再興す此時より日々說法怠らさりしかは世人名けて常說法寺と唱へたりと云々
風土記載する處粗是に同し然れとも寺地拜領の事なし紀勢御領分高帳に見へす

重顯寺 東坂雲蓋山 禪宗臨濟派

續風土記に曰く南海光明院の西北にあり元和の末圭瑞和尚京都韶陽より來て此寺に住す寛永年中吹上寺を創立せられ圭瑞和尚に賜ひて移住せしむ寛文七年當寺の地を除かれ延寶五年替地を西濱村に賜ふ元祿十六年今の地に移さる西濱の舊に仍て賜ひて寺產となさしむ 此地一町三段

寺領

高九石二斗五升七合 西濱村 重顯寺領

了法寺 名草郡坂田村日正山大雲院 天台宗

三浦長門守家譜に曰く三浦觀齋邦時元和八壬戌年八月十九日於紀州死す那賀郡貴志庄上野山に葬る了法院日正と諡す寛文七年丁未三月 南龍院樣より了法寺寺領高三十石之御黑印被下置

御黑印寫

名草郡坂田村之內高三拾石幷當山丈六山二箇所爲了法寺宛行訖全不可有相違也

寛文七年三月二日 御黑印

一了法寺記錄に曰く當寺草創は大同三年天台宗開基は行禪上人丈六山坂田寺と云 中略 天文の初に至り回祿に罹り本堂其他燒亡し同十一年假に房舍造營せしに雜賀神宮鄕を侵掠の時堂塔房舍燒亡せられ是より大に衰廢小地となれり時の國老從五位下三浦長門守平爲春其先考正木左近大夫邦時薙髮して觀齋雄芳玄英と號す 元和八年戌八月十九日當國那賀郡貴志の領內上野山村にて卒す諡號了法院日正大居士と右爲追善作福同九年死去の地へ一字精舍を建立則日正山了法寺と號す法華宗

たりしを慶安三庚寅年貴志の庄より當了法寺を悉皆此地に移轉再興美麗に造立し而して往古より
の淨土寺殆んと廢絶に及たる古刹を三浦爲春殿大に歎き今の了法寺を建立したり寛文六年十二月
元來淨土寺の舊宗は天台宗旨なり三浦家は法華宗門なれ共　國主德川賴宣卿殿より天台宗に改宗
の御沙汰に依て　寛文七年東叡山慈眼大師を名義の住職として天台宗と相成り御弟子比叡山無動
寺谷正繕院成純大阿闍梨を以本住職として了法寺に代目なりとす同七年德川家より了法寺領高三
十石被下置寄附黑印幷古刹靈地釋迦堂より四至限界殺生禁往古之通黑印書有之　元和九年那賀郡
上野山村より移轉爾來三浦家の菩提所として代々尊崇し保存再建罷在り　明治維新に至り全國一
般社寺領地皆上地と相成り　明治三年十二月限り寺領高三十石は被下置來未年より上り切と被仰
渡候なり外に現米二石あり是は　南龍院殿御忌日御逮夜幷兩度の彼岸會の中日に和歌御靈屋へ出
勤に付別段被下置候右二石米も同年濱中長保寺へ御遷座に相成同時に上り切となる

續風土記に曰く什物中　南龍公親筆一幅を藏むと云々

寺領高三拾石　　坂田村　了　法　寺

外に　現米二石

按に　邦時は爲春之父にて爲春と共に紀州に住奉仕はせさりしも　養珠尼公の御異父同母之御續きを以て御崇敬寺領等御寄
附ありしならん明治二巳年御國政改革三浦家知行奉還之際同年九月十五日同家より左之書面を名艸民政局へ提出之處
同十月五日先づ當年は御藏內を以て被下候筈取扱濟之旨同副知局事より答ありたる趣也

權五郎菩提所名艸郡坂田村了法寺寺領之儀は從　南龍院樣同村之內高三拾石爲了法寺領被下置候　御黑印有之候右は同村
元權五郎知行之儀に付納之儀は從來手前にて爲取計來候儀に御座候然るに當年知行所差上候に付而者向後寺納之儀村役人
共へ取計候樣宜御取扱有之樣致度候此段御達申上候

件之如く寺領上け切無祿と成りたるを以て同寺より維持法之儀三浦家へ出願之處燈供料及扶持方として現米廿八俵つゝ同家より附與三浦家改革に付半減となし尚又拾貳俵に減し爾來今に至迄同樣付與本堂初房舍等修營は慶安三年再建之當時より今日に至る迄數百年來變らす三浦家より保存修營を差加ふるといふ

若一王寺社　那賀郡東野村

續風土記に曰く社地の西に續きて陽山と唱ふる地あり寛文中　南龍公陽山を以て鬼裘の地となし別舘を築かせられ暫く移らせ給ふ其時當社は産土神なれは御崇敬有らせ給ふと也寛文九年御參府あるへき由にて八月廿六日若山を御發駕ありて陽山の御殿へいらせ給ひ加茂の葵を社内に納め給ひ又御杖をも納めさせられ十一月陽山を立せ給ふ時其御杖を社内より受けて携へさせ給ふと也又御遺言ありて御逝去の後寛文十一亥年四月十三日御靈代の神鏡を納め給へり

信常て其地に就き陽山御殿舊蹟の事を粉川の人兒玉仲兒に質せし時仲兒曰く此社東野を初め井田城田池田垣内西之芝丘ヶ村の氏神若一王子權現と稱し陽山に在りしか陽山御殿御造營に際し龍祖の思召にて陽山より東谷を隔て丹生岡即ち今の地に移し給ひ宮居拜殿は更也別當小松院を御建築宮殿壯麗を極め總して葵章を用て莊嚴せしめ給ふ故に後世氏子より修補尚舊に依り葵御紋を用ひ其痕跡を窺ふを得る也と語れり事は那賀志に詳記す

丹生明神社　那賀郡　上丹生谷村

續風土記に曰く古は社殿宏壯なりしに天正の兵火に罹りて悉烏有となれり神寶太刀三振幷尖刀寛文中　龍公より御寄附の品葵御紋附湯立釜鉾幷に御紋附鋒絹　有德公より御寄附御太刀の類尚

多し

毘沙門寺　那賀郡森村 寶峰山遍明院　眞言宗新義

續風土記に當寺は村內荒田社之境內にありて荒田社の別當寺たりしを寛文年中命ありて荒田社を唯一に復し當寺を村中に移さしむ云々とありて寺地を賜りし事なし然れ共紀勢御領分高及ひ明治調帳にも左の如くあれは寺敷地を賜りて移轉を命せられたる事知るへし

高六斗六升　森村　毘沙門寺屋敷新田

顯國社　在田郡湯淺村

續風土記に曰く寛文中　南龍公命ありて顯國社と稱し李梅溪をして鳥居の額をかゝせ給ふ延享四年禁殺生とす

遍照寺　柳町　古義眞言宗

紀伊國名所圖會に曰く當寺は　國祖君の芳命によつて高野山無量光院春盛坊之を開基す本尊不動明王は御城中御櫓に安し給へるをこゝに移させ給ふ處也

廣泰寺　伊勢國度會郡宮古村 神照山　禪宗曹洞派

當時は寺領二十三石を賜り　龍祖之御由緒淺からす堂宇御建立もありたるの由傳ふる處といへとも筆記缺逸詳ならす嘗て同寺に就き質したるに現住職前川岷山なる者より左之由緒書を送附せり記中頗る疑ふへきものあり然れ共舊時より傳來の寺記述事明確漫に荒唐の說とも斷しかたし暫く記して後の考査を待んとす

由緒略記

右廣泰寺は曹洞宗にて幕府時代は紀州樣御目見地直支配勢州御領內曹洞一宗の觸頭に御座候
南龍院樣御入國以來山林境內幷地方二十三石御免許被仰付候　大猷院樣御他界の節當寺住職英利慶安四卯年江戶表へ御諷經に罷下り候留守中火災に罹り伽藍燒失仕右之報知に因り英利江戶表に於て　南龍院樣へ御目見へ仕り伽藍再建の儀を御願申上候處勢州御領內大杉山にて檜木三千本被下候旨御直々仰せを蒙り明曆三酉年本堂再建仕候
南龍院樣當寺へ兩度被爲成御建立の本堂へ御止宿被爲遊住職英利へ御遣金として金五百兩被下置候右金は御預け金に相成五百兩の御利子金として每年御下けに相成候
南龍院樣當寺へ子安地藏菩薩の尊像を御寄附被遊當寺の御牌殿へ安置仕今に朝暮御供養致し居候
元祿十四年公儀へ御達し勢州御領內一宗僧錄被　仰付年々金拾兩つゝ被下候享保年中に殺生禁斷の御制札被下御證文制札は當寺に保存仕候　當寺記錄に英利和尙は　南龍院樣の御落胤の由を記載有之候

紀勢御領分高帳に

高貳拾三石　度會郡宮古村　廣泰寺領

駿州蓮永寺　安倍郡貞松山　千代田村沓谷　法華宗一致派

同寺略緣起に當寺は蓮華阿闍梨日持上人の開創にして實に本宗六門家本山の一靈場たり元和元年紀州賴宣卿の母堂養珠院夫人開基檀越となり庵原郡松野村より現地に移す境內に養珠夫人の

廟を安すと云々
是に依て見れは駿河御在國中　養珠大尼公の爲めに御建立とみへたり于今堂塔壯嚴を極め尼公の廟亦嚴然たりと云ふ

駿州海藏寺　益津郡寶城山　小川村　時宗

當寺舊記に　南龍公駿河御在城中元和年中當寺本尊海中より出現の地藏尊御信仰每々當寺へ被爲成後和歌山へ御入國之處該尊像を紀州へ御移し被遊度思召之處時の住僧其阿彌陀佛は當寺に有緣之佛體故辭し奉りしにより遂に御兜に納め之御（一本ナシ）守本尊を當寺へ御讓り被遊たり嘗て當寺へ御來遊之節本堂の前へ御手自紅樹の苗木を被爲栽に根葉大に繁茂盛觀今に替らす之を御手植之梅と稱し尤貴重す又御親筆竹の畫幅をも賜りたりと云々
如此御由緒あるを以て安永二巳年本堂再建費として金二百兩御寄附御參暇御道中之際御立寄御參詣もあり又天保四巳年四月　舜恭公は宮崎藤五郎淺枝仁左衞門を御使して海藏寺へ被遣地藏尊を和歌山へ御請待住僧登龍和尙守護若山へ參着同月十日西濱御殿御座之間に於て御拜禮十八十九之兩日には御家老初御使番頭以上奥中奥頭役平士迄於安養寺參拜を被命たり此時　公御親筆寶城山の三大字の額を賜はる今本堂に揭るもの是なり
當公明治廿六年十一月駿州志太温泉御入浴之節同寺へ御參詣ありて本尊初　神祖御親筆梅の畫　龍祖御奉納の御守本尊（地藏尊丈一寸三分壯嚴美麗堂形の厨子に安置す）　同御親筆の竹畫御拜覽其他の寶物をも御展覽ありて信亦扈從拜觀を得たり

御寄附品

一前記の外　龍祖より各寺院へ御寄附品左之如し勢州の分は筆記存せす知りかたし
光永寺　名峠郡杭瀬村　御茶碗一口
西本願寺御坊　名峠郡黒江村　青磁香爐
無量壽院　高野山　御書簡
遍照光院　同　御書畫
勝專寺　日高郡西岩代村　猩々の畫　一節切の笛
熊野御參詣の時御立寄あらせられ下し賜ふ
淨明寺　小雜賀村　白絹襟卷　申九月四日火災之時燒失
光永寺　杭瀨村　御紋付の御茶碗
右記する處は　龍祖御在世中社寺に係る御事歷にして苟も筆記の存する分を年序に從て列叙したる也此他幾多の尊旨ありて社殿堂塔御建立乃至御再建修補金米什寶等御寄附ありしや知るへからす就中勢州の如き社寺領御寄付之分數多なれはいつれも分々の御由緒ありしは無論ならんも勢州之事は全然資料皆無にして如何とも編述之術なし止むなく唯社寺領と其社寺號を末に掲く

南龍神社

南龍公は寛文十一辛亥歲正月十日薨逝あらせらる無知之賤民匹夫も猶考妣に喪する如く恩に感し德を慕ひ報恩謝德之至誠止み難くや私に祠を立神に祭らんと競ふもの所在續々相續けり而して奉

祀二百三十年間今に至て毫も退轉なく益不朽に傳へ万世鴻恩を忘れさらんとす德政の深く民心に入る如此もの世多く其比を見す誰れか感戴せさるへけんや類に從ひ此卷末に別記す世説既に詳なれは唯其要を記するのみ

矢櫃

南龍神社

矢櫃は在田郡小豆島(アヅ)村中の小名にて地海面に突出三方絶壁懸崖一方陸に通す而して峻坂嶮路人到る能はす殆と無人之境たりしか元和年中　龍祖熊野御巡遊之次海上より地形御覽ありて牟婁郡口熊野津智村の漁夫茂兵衞茂大夫なるもの御舟の水主にてありけるか兩人共に妻を召具し此地に移住漁業を試むへしと命せられ海老船鮑取船等を賜ひ諸役を免除業を營しめ給ふに四人之者は岩窟の曲灣を索て僅に雨露を凌く茅廬を結ひ海老網といふ漁業を始めしに屢風浪の爲に其廬を襲害せられ右移左轉辛ふして營業怠らさる多年漸次家族增殖各自産を分て人烟繁衍交互巖崖を開き居を構へ終に一村落を成すに至る　公薨去の後村民高恩に感泣尊容を刻み私に祠を建て安置し產土神に崇め奉り祭祀今に至て怠らすといふ

按に　龍祖の祠社不少も神像を安するは此地及ひ在田郡千田村の須佐神社のみ同社の神像は安永八年社司岩橋大膳私に納むる處なれは御在世を去る甚遠し矢櫃の神像は薨去其當座たるよし信一たひ拜し奉らん事年來の素願也しか明治三十二年四月　和歌山に祇役長保寺參拜より直ちに矢櫃村に赴き村老長谷川靱負に就き開龕敬拜するを得たり感慨禁しかたく竊かに摸し奉る所圖の如し

時に村民甲乙集ひ來り語て曰く當村の戸數今九十有余悉く茂兵衛茂大夫兩夫婦の孫裔にして他の一姓を交へす（土人は茂太夫妻ちよなちよめと唱へり兩夫婦の像も其家に在りと云）維新迄一切無税故を以如此繁盛に至る是偏に　南龍大君の御仁恩なれは當村は　南龍神社あるを知て他を知らすされは毎年正月九日御逮夜には村中總休業隣村大箱の醫王山淨明寺を請して終日終夜念佛勤行回向し奉り左衛門淨瑠璃語り等興行して法樂を行ひ御當日十日の曉七つ時に至れは村中總代の者三人出立濱中長保寺御廟へ參拜御禮として小豆一升を奠供其歸來を待て今度は箕嶋村粟社の神主を請し神祭を勤む是より精進落ちをなして魚類を用ゆるを恒例とし寛文以來今日に至る迄更に退轉なしと各自喃々不止或は漁具を持來て昔の海老網は如斯今は改良を加へて是を用ゆ茂兵衛茂大夫初めは彼處に居し後此處に轉せり等舊事を推問すれは喜悦面に顯れ競て相答ふる爲體朴質愛すへき風あり地形は圖に示す如く殆と孤島の崖澗寸歩の坦地なく家居疊々階段の間に櫛比す僅に一逕の山路尤嶮惡の處近事當村より出身の田中文七（大阪安堂寺町に商業す）なる者助成により協力新道を開きて箕嶋に通すと歸途先たち誘導すれ共車輿尙通しかたし

龍神村

南龍神社

龍神村は日高郡の山分山地組に在り元和の比に至りて溫泉の功驗顯れしかは　龍祖浴室を造らしめ家を建させ給ひて龍神の内殿垣内の百姓に賜ふ其他此地に家居する者皆家地を免許せらる於是來り住する者漸く多く終に一村落をなし溫泉の名大に顯れ居民以て產を營むを得たり依て後人

公恩を徳とし祠を建て産土神と崇め歳時奉祀すといふ

一明治間和歌山縣廳神社明細帳に記する處左の如し

無格社　南龍神社

一祭神　源頼宣

一由緒

大納言頼宣寛永年中當地へ來りし時湯本旅舍地の租を免せし故を以て爰に祭祀すと云ふ

一社殿　四尺四面

一境内　四坪　民有地第一種大字龍神中十九人持

一信徒　七八十人

布引村

阿彌陀寺尊牌

海士郡布引村素砂磧荒廢修らさりしか寛文元年　龍祖此地を巡覽あらせられ駕を古松の木に駐め給ひ此地を開墾せは必良田となるへしとて三葛村に命して開發せしめられ同三月再ひ巡覽あり西瓜胡瓜を植て可然との命あり明年西瓜の熟する時又駕を寄せられ西瓜を御賞味あり其後次第に開發して遂に繁昌の地となる西瓜の甘美他に異にして我國の名産となれり今に至まて村民　祖公の遺徳を仰き私に尊牌を營み村中阿彌陀寺に納め毎年正月十日集會して百万遍の念佛を唱ふ又西瓜初めて熟すれは村老四人　祖公の廟前へ備へ奉る其後始めて他にひさくといふ遺徳民心に入るの

深きを見るに足るへし　紀伊國續風土記

野村

南龍神社

伊勢國奄藝郡野町新田總代坂崎庄之助より捧呈之由緒書に曰く當郡野町野村は元高賀野と申曠漠たる原野之處寛永七年午十二月　南龍院様御鷹野に被爲成候節廣き野原にして往來之旅人不用心なる間此地を開墾して百姓を出し村役爲致候て往來之者共之助に可成と御意被遊其節白子村御代官松下助左衞門へ御直筆にて御鳥見稲生村今村久兵衞宛にて高賀野へ罷出百姓致者有之候はゝ田畑何程にても開起爲致家造り等勝手に爲造可申依て右開墾地之儀永代無年貢被　仰付依て漸々開起正保元申年正月塩屋村古里より拾三戸出屋敷をなして彌切開きに從事正保四亥年正月諸役御免之御証文被下置寛文十一年　南龍院様薨去被遊候際御高恩之程一同難有奉存爲冥加御位牌を安置永世奉祀仕度旨願上け御國より御位牌御差送り相成候付村内字西宮東西五十間南北九十間の場所へ御靈屋を設け奉納仕御命日正月十日八月十日右兩日を祭日とし御紋付の幟を立戸毎に挑灯を燈し村中一同祭典執行于今退轉不仕常夜燈も從前より一夜も無怠惰戸毎に持廻り燈明差上け來候事右之通り二百五十年來無税にして安堵農作戸數人口繁殖開墾反別試作畑等數十町歩に至りし處維新後有税地となり明治八年檢地を受け一般之税法賦課せらる以來大に疲弊に陷りたる處有志之者奮勵飽迄　龍祖の御遺志を繼述せんと更に水利を開き盡力により終に殘余之空原迄悉く開拓六十有余町之耕田となり戸數は六十余軒に及ひ窮民一人もなし是偏に　國祖之御恩澤村内神

社之祭典は無論怠らされ共尚東京御邸の　南龍神社へ年々新穀之御初穗を冥加之爲め献備致し度旨村民共より明治三十一年請願し來る事は郡制歴世郡治大概の部に詳也

廣　浦

南　龍　神　社

在田郡廣浦は屢風浪之害を蒙り民生を安せす寛文年中　龍祖命して百餘間の波塘を築しめ給ふ人民始て其患を免るゝを得たり依て其恩德を感戴し神廟を建設以て祭祀怠らすと云

後寶永四年十月波戸及ひ民屋逆浪之爲に崩壞寛政五年修築復た神廟を再建齋日海藻を刈て尊供奉祀すと云々

小黑田村

南　龍　神　社

伊勢國飯高郡小黑田村亦　龍祖開墾を被命士民高恩を德とし小祠を建て產土神に崇め祭祀怠らす今尚村社たりといふ當時の社堂宮崎以德より報告する處左の如し

村　社

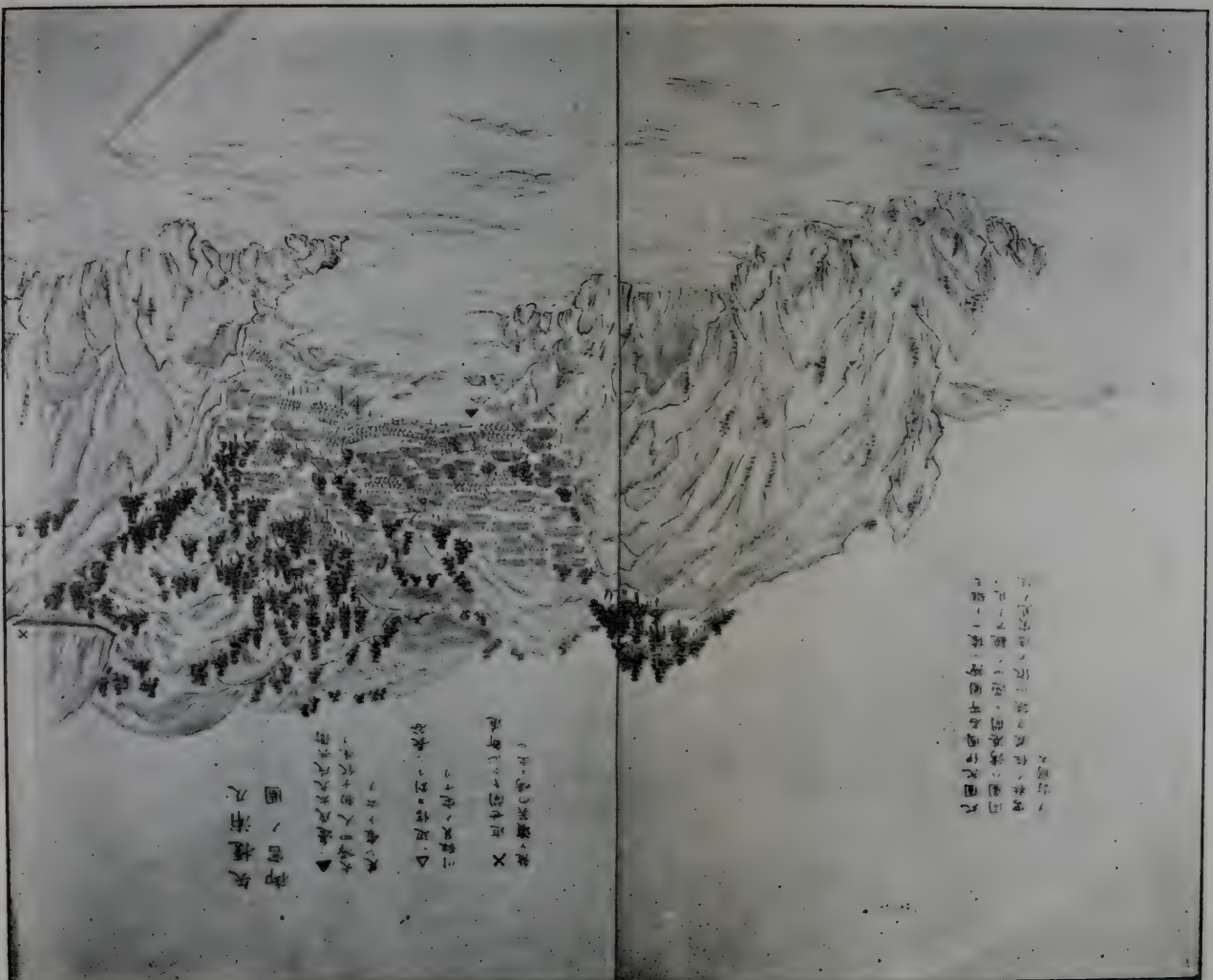
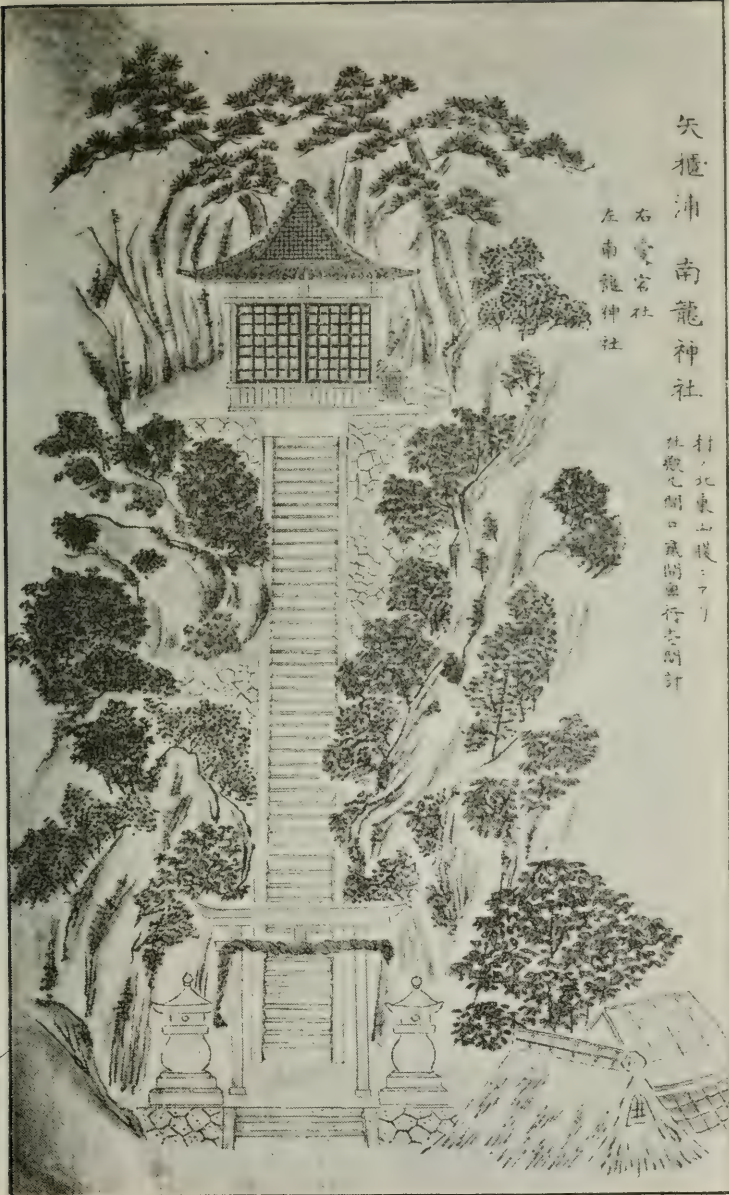
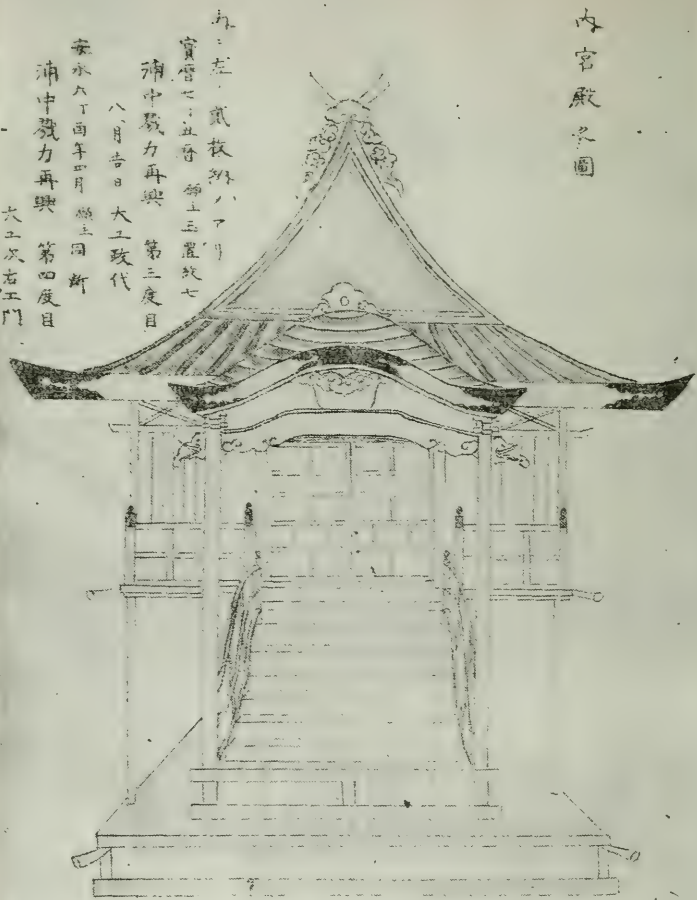
南　龍　神　社　　祭神　源賴宣朝臣

所在　伊勢國飯高郡花岡村大字大黑田字新田町

地種　官有地壹畝貳步民有地五畝步

石票　建設　寛永元年甲子十一月十五日

社殿　建設　延寶二年乙卯正月十日
桁行三尺五寸梁行二尺五寸高四尺二寸千木鰹魚木神明造式年二十一年毎に氏子にて造營
拜殿　瓦葺　桁行四間五尺梁行二間高一丈三尺
圍垣　周廻二間四方高三尺
鳥居　二基　木造
石燈籠　二基
祭日　一月十日　四月五日　六月十日　十一月十五日
氏子　三十二戸
信徒　十三戸

社記云當地は往古より村内大黑田小黑田入組の荒蕪地に有之處元和五己未年德川賴宣公御領域となる時御家臣大藪新左衞門出會古田の家臣太田助左衞門より松坂城請取相濟其年の冬大藪新左衞門と長野九郎左衞門淸貞と交代以來藩祖勢州へ御鷹野に被爲入候節每々御休憩相成る個所にして其當時經伺の上石祟を設建し龍殿と名稱し來り候處にて前條勢州奉行長野九郎左衞門御取次を以右荒蕪地開拓可致旨御直命を蒙り且開拓者四十四人に各金一兩と宅地として永世二町二反歩を賜り從事致居候處後慶安三年庚寅四月事業漸く落成田畑宅地總計四十五町八反歩其內曩に開拓者四十四人へ永世宅地無稅下賜相成候內二十三町七反歩戸數三十二戸大黑田に屬し拾二町一反歩戸數十二戸小黑田に屬し其外神社地官私合せて六畝二歩也自來前記御祭日には氏子幷信徒の者共各一同打揃祭典執行仕り候

矢櫃浦及
御宮ノ圖

▲ハ遠茂太夫茂兵衛
夫婦四人初テ代リ
建シ處ト云フ

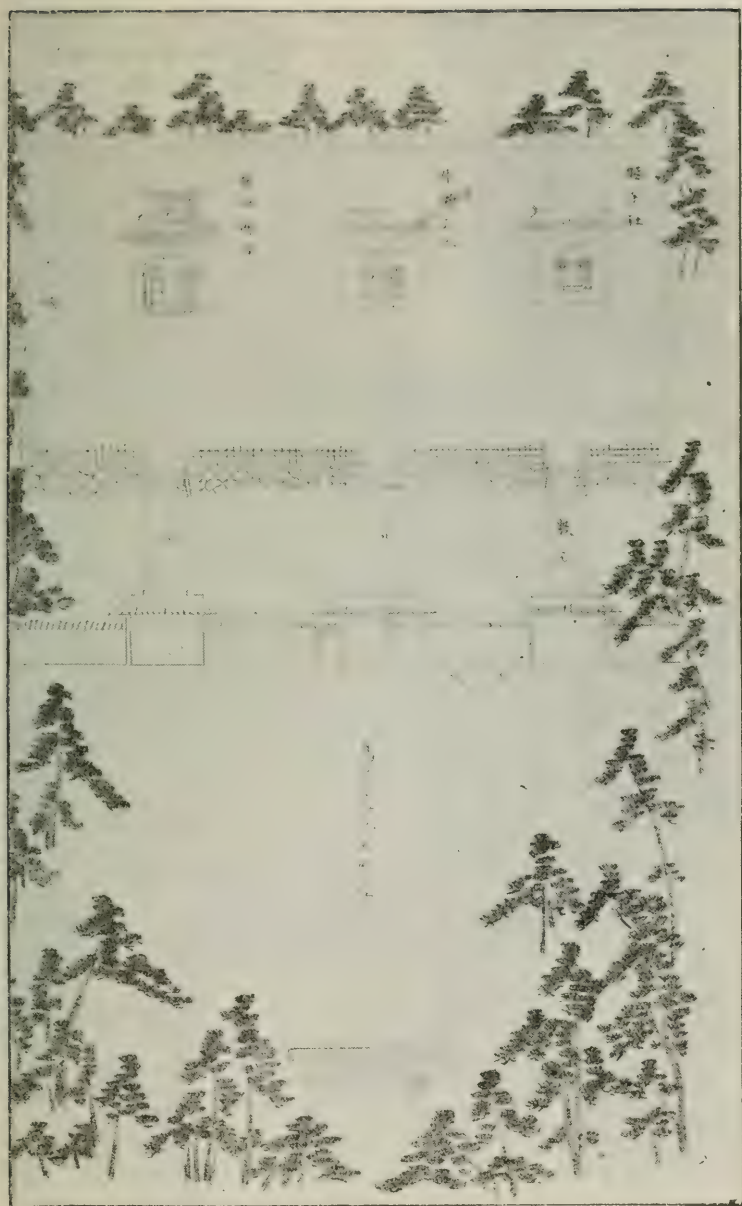
△ハ迎信ガ到リシ長谷
川叙貝ノ宅ナリ

×近世開キシ新道
能ク濱笑の鳴ニ立ル

此圖紀伊國名所圖繪ノ後ニ十ト編セ
同圖ハ湾港間ニ遠リノ觀アリ且ツ
當社ノ位置ヲ誤ルニ依リ實見ノ儘
ノ訂ス

矢櫃浦 南龍神社
左 南龍神社
村ノ北東山腹ニアリ

内宮殿之圖
寳暦七丁丑年　願主玉置紋七
浦中幾力再興　第三度目
八月吉日　大工政代
安永六丁酉年四月　願主同断
浦中幾力再興　第四度目
大工次右エ門

野村
南龍公御宮
八幡宮
土塀
石階
長屋門
木鳥居

南紀德川史卷之百五十四

臣 堀内信 編

社寺制第四

清溪公

報恩寺 吹上白雲山 法華宗一致派獨立一本寺

當寺元要行寺と稱す寛文六年年正月 瑤林大夫人於東武甍逝池上本門寺にて御火葬御尊骨二月廿三日要行寺へ御埋葬同年十二月十五日同寺を御菩提所に御取建之儀 公儀へ御願立法華精舍一宇を御創立大野本遠寺日性上人の弟子日順和尙を請して開山之祖に被命後寛文十戌年五月 公儀へ御願之上要行寺を白雲山報恩寺と改め一箇の本山と定めさせられ寺領貳百五十石を御寄附御定書は 清溪公の御親筆といへり日順和尙は藩士石野昌良か子幼にして穎悟大夫人の眷顧を辱ふし盂衣の資を賜りて學業二十余年大に芳德を輝すと云ふ 清溪公御追孝により當寺最も殊特の恩遇を蒙りたるは元祿七年同寺より寺社奉行へ屆出たる由緒書に詳也左に之を揭け併て二三の筆記を附記す

由緒書 採要

一報恩寺 白雲山

一法華宗一致派受不施一本寺に而御座候

一寺內塔頭無御座候

一開基者某權大僧都日順上人

當寺草創之由來者　　從二位權大納言源朝臣光貞公御賢母大御前樣と奉申候寛文六丙午歲正月廿四日御逝去御法名　瑤林院殿淨秀日芳大姉と奉申候御尊體武州池上本門寺にて御葬送御座候御尊骨當國只今之報恩寺其節は要行寺と申候て大野之末寺に而御座候其寺へ被爲入其後御廟所等段々御造立被遊候其以後寛文十庚戌歲　公儀へ御達被遊唯今迄之要行寺を白雲山報恩寺と御改一ヶ之本寺に相定申候右之趣江戶より申參候狀之寫爲心得其節之寺社奉行下條彌右衛門持參にて相渡し被申候

寫

一筆令啓達候然者內々　大殿樣御事南龍院樣へ被　仰上候通要行寺を日芳樣御位牌所に被遊大野末寺新地一ヶ所右要行寺爲代御取立被遊度旨御願之段加々爪甲斐守殿へ水野對馬守を以被　仰達候處甲斐守殿御申候は要行寺之爲代一ヶ寺御取立被遊度との御願に而如何敷御座候間日芳樣御菩提所新地御取立被成度との御願に御座候は御三人樣之御事は各別之儀に御座候間早速相調可申樣に被存候其上甲州大野も身延も末寺に御座候得共　大殿樣御願を以一本寺に罷成當宗に而身延池上大野右三ヶ寺より外は年頭御目見も獨禮無御座程之儀に御座候間右之御願之通可然由被申聞候に付則對馬守を以去る朔日加々爪甲斐守殿小笠原山城守殿御願御老中へ被　仰達候處同日早速相濟御願之通新地に被　仰付輕く御取立被遊候樣にと寺社奉行衆より御城付に被　仰越候に付　殿樣不大形御機嫌之御事に御座候此旨各迄可申達由依　仰如此に候恐惶謹言

五月二日　　渡邊一學

久野丹波守

原田市十郎殿

加納平次右衛門殿

一筆申入候然者先書に申達候也

瑤林院樣御菩提所新地御願相叶候に付只今迄之要行寺之地則彌御菩提所に被遊候間此旨堯辰へ可

申渡旨被　仰出候

一要行寺代地可被遣候間右之代地に可被　仰付所其元に而致吟味可申上旨是亦被　仰出候間左樣可

被心得候恐々謹言

五月六日

渡邊一學

久野丹波守

安藤帶刀殿

水野平右衛門殿

一寺領貳百五拾石御附被遊候寺領御定書者　殿樣御自筆にて御座候

右寫

白雲山報恩寺爲　先妣瑤林院墓地所創建也日蓮宗旨而一寺特立不係他寺末派因附二百五十石田土

并山林以爲香華之資領地各村租數并山林疆界載在別紙自今而後　靈前供給之務永遠不可怠廢者也

寛文庚戌五月廿四日

權中納言源朝臣
光貞 在御判

海部郡濱中莊 方村内
那賀郡山崎莊 西坂本村内

報恩寺住持上人

一山林當寺内其外寺領地に御座候
御寄附目錄寫

白雲山報恩寺領地田租幷山林記錄
各村田租數目
佰斛
佰伍拾斛
總計貳百伍拾斛
山林壹處疆界
名湯山在濱中莊方村地
東則自大崎村地界邊一巖循山半腹東南經飈口南轉抵于中尾南則循中尾而上抵于加子嶺
西則循嶺而北抵于大崎村地界路北則循界路東下又循谷而抵于一巖
四面皆處々植石以著界
右各處領地西坂本村田土係寛文十年所附内其餘者令改地所附也其山林須使方村寺領民戸護之自非
寺用不可浪伐之者也依命所述如上件

元祿三年庚午五月廿四日　　安藤帶刀長
直清　在判

報恩寺住持上人

一當住持某日順大野第三祖日性聖人弟子六歳に出家十三歳にて下總國飯高學室妙雲山法輪寺へ行五ヶ年在檀其以後十八歳にて上總國小西學校(於(妙カ))高山正法寺へ行十六年住檀都合學業貳十一年也寛文九己酉年七月十四日に三十三歳にて當寺へ入院同十一年三十五歳にて致上京權律師上人に任官此節官物并裝束入用路銀等に至る迄被下置候在京中者三條柳水御屋敷之御殿に罷在朝夕之儀片岡藤兵衞より被相渡御臺所賄にて御座候十月六日參内院參之節御所方へ捧申進物之儀は茶屋方にて相調拵長持に入手代共上下にて先々へ爲持廻り片岡藤兵衞指圖次第に仕候

禁裏御所向關白上卿其他へ杉原銀子等献上且附屆等之品書あり略す

宣旨并口宣寫

上卿　東園大納言

寛文十一年九月廿九日　宣旨

日順

宜任權律師

藏人左少辨藤原意光　奉

日順

左少辨藤原朝臣意光傳宣
權大納言藤原朝臣基賢宣　奉
勅件人宜任權律師者
寛文十一年九月廿九日
修理東大寺大佛長官殿主頭兼左大史小槻宿禰在判　奉

六日に參　內院參相濟其晩京都罷立七日に歸寺仕候京都にて片岡藤兵衞より請取申候裝束之品々
一素絹　羽二重生衣
一五條　紫地紋白沈織
一衣貳　壹紗
壹戻子
一袴　羽二重生衣

一十月八日四つ時分登城仕候處於御座之間此度任官之樣子御尋被遊委細申上候此御序に彌三左平太へ對し此度任官被　仰付難有仕合奉存候旨其外路銀在京中御臺所賄獻上之官物幷に官位裝束等迄被下置重々忝仕合奉存候趣御禮申上候
以切紙令啓上候然者來る十一日朝　殿樣御手前被召連日芳樣御位牌前にて官位之儀可被　仰上との御事に候左樣候へは貴僧今度之裝束之答に候間左樣御心得可被成候以上
十月九日
志賀彌三左衞門
岡野平大夫

報恩寺樣

今般之任官に付從　殿樣爲御禮御使者京都へ被遣候大澤文左衞門九日に和歌山發足

右御口上幷に御進物之覺

小袖四
忍冬酒

御口上

鷹司關白殿へ

今度報恩寺律師成之儀願之通相調大慶に存候爲其以使申入候驗に右之通進入申候

小袖三　日野大納言殿へ

小袖三　中院大納言殿へ

小袖貳　裏松弁殿へ

御口上同斷

小袖二
忍冬酒　出納伴擶へ

小袖二
銀拾枚　同大藏へ

御口上

今度報恩寺律師成る之儀に付色々肝煎被申相調滿足申候使差越候驗に右通り相送候

同十一日五つ時　殿樣當寺へ被爲　成擶僧儀此度任官之裝束にて罷出於　日芳樣御佛前に法事相務其後今般之口宣宣旨兩通共奉讀其以後於　御城に　御對面所に御三獻被下御盃頂戴其後三汁九

業之御料理被下於御座之間御手前にて御茶頂戴仕候其以後延寶二甲寅年三十八歳之時二月十七日寺社奉行喜多村大之丞へ致伺公律師より僧都に昇進仕度旨願申達候同月廿六日に大之丞當寺出被申今般官位昇進願之儀御序之刻達御耳候處致上京願之趣申込候樣にと御意御座候旨將又官位諸色入用之儀者久野八郎兵衞肝煎筈に有之間諸事內證之儀八郎兵衞方へ可申談旨被申渡候依之其御禮に同廿九日に御城へ罷出於　御座之間御目見申上候處杉田一郎左衞門於御前被申聞候者此度報恩寺京都へ罷越候に付官物之入用其外裝束等迄被下置筈に有之旨御禮申上候驗候此節御前へ被出候衆中番頭杉田市郎左衞門御用役久野八郎兵衞御用達松澤六郎兵衞相見へ申候

同廿一日當地發足仕同廿三日致上京如先規三條御屋敷御殿に罷在在京中御臺所賄にて御座候路銀も出立前被下候

一權大僧都官位昇進願之儀首尾能相調五月六日勅許相成候由にて同十一日清閑寺辨殿へ伺公辨殿同中納言殿御裝束にて御出被成辨殿　口宣宣旨兩通御渡し被成候頂戴仕直さま御禮參內廻勤等相濟

同夕京都出發十二日歸寺仕候

原書京都にて兩傳奏へ內願交涉官物獻上其他種々手入音物贈答之次第等詳記あり畧す

宣旨并口宣之寫

上卿　勸修寺中納言

延寶二年五月七日　　宣旨

權律師日順

宣任權大僧都

藏人右少辨藤原熈定　奉

權律師日順

右少辨藤原朝臣熈定傳宣

權中納言藤原朝臣經慶宣　奉

勅件人宣任權大僧都者

延寶二年五月七日

修理東大寺大佛長官殿主頭兼左大史小槻宿禰在判　奉

中納言殿御母公御菩提所爲一本寺白雲山報恩寺權律師日順上京首尾能權大僧都　勅許候而歸寺忝被存候旨芳翰之趣披閲尤存事に候日順參會之事に候者宜賴入申候謹言

十二月朔日　　日野大納言 在判

渡邊若狹守殿

右官位相濟候に付　殿樣へ御禮爲可申上同年八月江戸へ罷下候得は其節　思召を以　公方樣（嚴有院樣御事）へ御目見仕候樣に被遊度との御事にて江戸寺社御奉行小笠原山城守殿戸田伊賀守殿迄御達被遊候處御願之通相濟九月朔日於　御城御白書院に御目見申上同八日御城へ被召出戸田伊賀守殿御取持にて稻葉美濃守殿被　仰渡御暇被下置時服頂戴仕候

當寺鎭守三十番神社之儀　御子樣方爲御祈禱從　安宮樣延寶五年丁巳九月に御建立にて番神御神

體三十二軀御鏡御幣本社幷に拜殿戸帳翠簾鰐口金燈籠獅子高麗犬鳥居等迄御寄附被遊候

元祿七甲戌年十二月　報恩寺　印

丹羽彌四郎殿

柴田才右衛門殿

由緒書追加

一開山已來十七代日禎迄　公方樣へ繼目之御禮登城之節は御白書院にて御目見柳之間にて御暇總て別冊由緒之通相勤候東海道荒井箱根御關所共任先規乘輿仕候と相屆候はゝ聞濟有之候

一五代日(從)[明カ]　實鏡寺宮樣より御祈禱被　仰付御祈願圓滿に付享保十九年正月緋紋白袈裟拜領幷に鷲尾大納言家より亡母法光院殿爲追善享保十七年子十二月八日緋紋白袈裟拜領及於御國御差支無之に付所望に依り綱代輿差許され被遣候書付御座候

一十六代日映へ　實相院宮より末寺法紹寺御祈願所被　仰付由緣を以て嘉永三戌年九月御召古之緋紋白袈裟衣御寄附有之右令旨御座候

一右日映十七代日禎へ村雲御所より寺格正敷靈場殊に御所へ御由緒有之を以て御召下紫衣一服下賜之旨弘化三年午八月の令旨御座候

一日禎入寺に付　村雲御所より如先規御召下紫衣一服下賜之旨元治二丑年正月の令旨御座候

一清溪院御息女一條右大將殿簾中光姬樣御法號台嶺院樣御尊骨幷御位牌當寺へ被納供糧十石御附被遊每年御證月命日御代參御座候事

一同御息女佐竹修理太夫殿御室育姫樣御法號靈岳院樣御尊牌當寺へ御納め供糧米十石御附被遊候事

一大殿樣重倫公　御子丁之助樣御實母春臺院樣高松寺へ御納りに候得共御生前中法華宗御歸依に付大殿樣以思召御位牌當寺被爲建爲祠堂金四拾兩御寄附被遊候事

一大殿樣御子如幻院樣青樹院樣幻壽院樣御三方御位牌　大殿樣以思召當寺へ被爲建爲祠堂金四拾兩御寄附被遊候事

一水淺黃縮緬袷御帛紗二十七枚御寄附被遊非常之節御尊牌相包御靈牌箱へ納非常長持へ入組候事

一元祿十一年八月開山日順隱居願書差出し同十一月三日於會所御年寄衆列座三浦長門守殿より願之通隱居　被仰付後任之儀は追て可被　仰付旨江戶より被　仰越候段御申聞相濟御用役衆松澤次右衞門殿川井善太夫殿より爲隱居料金子二十兩つゝ每年被下置候旨被申聞候以來代々總て同し事に御座候

一御尊靈樣方御証月忌日には金何兩或は銀何枚等爲御回向料御納被遊海部郡加茂谷に於て薪山御寄附被遊開山已來維新迄本堂は不及申庫裏座敷等御作事にて御營繕相成疊建具其外井戶釣瓶及釣瓶繩に至る迄御取替有之由に御座候

境內及堂塔

境　內　　千九百二十三坪四合七勺

墓　地　　三千四百七坪五合八勺

本　堂　　桁行十二間梁行八間　圖別にあり

瑤林院樣靈牌堂　即本堂也

天眞院樣
寬德院樣　靈牌堂　位牌堂ゝ東にあり

位牌堂　姫方及局方　本堂ゝ東

三十番神堂　天眞大夫人延寶五年御建
立拜所鳥居あり

右之外別圖の如く御佛具置處御裝束之間集來場二た間裝束場小座敷數ヶ所納戸湯殿倉庫物置出家部屋小姓部屋若黨部屋門番所等備具廣大之坊舍也しか維新改革之際　瑤林院殿尊牌及姫君方靈牌を天眞院殿等之方へ御遷座之を總御靈殿となし本堂初一切を報恩寺に下付なりたり同寺に於ても維持成り難きを以て後僅に本堂集來場且自功住室を殘し余は悉く取り毀ち三十番神堂も今はなし

御廟墓　明治八年八月總御改葬の處によつて記御改葬前は次圖の如し

瑤林院殿淨秀日芳大姉　南龍公御簾中
寬文六午年正月廿四日逝去

天眞院殿妙仁日雅大姉　清溪公御簾中
寶永四亥年二月廿六日同

寬德院殿玄眞日中　有德公御簾中
寶永七寅年六月四日　同

理眞院殿妙尊日覺大禪尼　清溪公御生母万治元戌年十月九日卒去
明治八年八月養珠寺より御改葬

瑞應院殿妙圓日珠大禪尼　吉林公御生母元祿六酉年十一月十日卒去
明治八年八月養珠寺より御改葬

眞如院殿妙圓日敎大禪尼　深覺公御生母
享保二十卯年六月廿四日卒去

台嶺院殿照高日長大姉
清溪公御女　一條關白兼輝公簾中
寛文十一亥年二月八日逝去

了心院殿妙幻童女
南龍公御長女　寛永七年八月廿一日御逝去
明治八年八月淨心寺より御改葬

鮮容院殿玉蓮尊儀
南龍公御女　寛永十七辰年八月十六日逝去
明治八年八月蓮心寺より御改葬

清心院殿妙信日敬大姉
清溪公御女
元祿六酉年八月十九日逝去

緣覺院殿光因大童子
觀自在公御男　寛政六寅年十一月廿三日死体出生
明治八年八月吹上寺より御改葬

白道院殿澄景示幻大童女
大慧公御女　享保十九寅年七月九日逝去
明治八年八月養珠寺より御改葬

如幻院殿性眞覺明大童子
觀自在公御子　寛政八辰年四月廿二日逝去
明治八年八月大相院より御改葬

如雷院殿玉光示幻禪童子
同　明治四亥年正月五日逝去
右同年月高松寺より御改葬

幻壽院殿棟質智梁禪童子
同　寛政十一未年十一月廿九日流產
右同年月同斷

青樹院殿幻相猶夢禪童子
同　寛政十午年九月廿五日同
右同年月同斷

靈應院殿寶鑒妙惠大童女
舜恭公御女　寛政十二申年七月十七日逝去
明治八年八月大相院より御改葬

種幻童子
大慧公御子
享保二十乙卯年六月四日逝去

眞性院殿妙惠日善大童女
大慧公御女　享保七寅年正月八日逝去
明治八年八月養珠寺より御改葬

妙智院殿鮮顔法爾大童子
觀自在公御四男　天明二寅年九月廿七日逝去
同斷大相院より御改葬

示幻院殿如空電光大童子
舜恭公御女　文化十一戌年正月八日逝去
同斷大相院より御改葬

清凉院殿約如明空善童子　憲章公御遺腹　嘉永二酉五月廿五日逝去
同斷大相院より御改葬

益心院妙友日瑩大姉　南龍公御由緒方一野殿万姫君生母正保四亥年六月十九日卒
明治八年八月蓮心寺より改葬

春章院變成玉容禪尼　觀自在公御由緒方　寛政十二申年正月十一日卒
右同年月高松寺より改葬

開是院妙重日達禪尼　清溪公御由緒方
正徳二辰年正月十四日卒

忠善院殿良恕大童女　南龍公御女　寛永十二卯年六月六日　感應寺に御廟有之明治八年八月當寺へ御改葬の筈に
て御葬穴を檢するに御印一円無之依て評議の上御靈牌のみ同寺へ御遷座故に御廟なし

圓　住　院　南龍公御部屋　貞享五辰年三月廿二日
當寺に御埋葬されとも當時御墓無之

神智院妙性日賢大禪尼　清溪公御由緒方　台嶺院殿御生母當時御墓無之
延寶六午年十二月十日

成等院妙惠日了禪尼　御同公御由緒方　明治八年八月蓮心
寺より御改葬の旨なれとも御墓無之

貞松院妙秀日嚴禪尼　瑞應院殿妹
寶永五子年十月十一日御墓無之

「右圓住院殿以下尙不審の處あるを以て明治三十二年十一月報恩寺住職辻井日敎出京の際質疑したるに左の如く申出たり

圓住院殿

右御廟報恩寺と有之由に候得共當寺には御廟御位牌は勿論過去帳其他記錄一切見へす

神智院殿

右御廟御位牌共維新前より當寺に有之候處御廟は維新後一切御構無之御位牌は從前之通安置す

成等院殿
右明治八年蓮心寺より御改葬とあれ共維新前より御廟御位牌共當寺にある事は過去帳及記録にも明瞭にて現に御廟御位牌共今猶存しあり併し御廟は當時御構ひ無之
貞松院殿
右維新前より御廟御位牌共當寺に安置過去帳記録にも記載あり併し御廟は維新後御構ひ無之當時石碑の中身は存し臺座石は散失
林光院妙嚴日眼（一本幽出）儀　靈岳院殿御實母延寶六午九月十三日
右維新前より御廟御位牌共當寺安置の處當時御廟は現存なれとも御構ひなく御位牌はなし
前記の如く維新后御廟は一切御構無之如何樣共勝手に可致旨先年澁谷在寛氏より達により神智院殿の分は本年境內へ埋納の一字一石の寶塔に用ひ候併し御法號は御追福の爲め裏面に彫刻し有之候
報恩寺」

天英院様
瑞林院様
本堂

報恩寺御廟圖　御改築前

台嶺院殿

御拜殿

御拜殿

天眞院殿

御拜殿

松山

イ

（次頁イにつゞく）

イ
敷石
土塀四十九間程
土塀三十一間程
下馬石
表門
南

東

北

琮林院殿

天真院殿

寶徳院殿

西

南

御門

御廟坂道

桂林院殿御石碑

高六寸
ヨコ二尺八寸
タテ仝

高一尺二寸
ヨコ一尺九寸七分
タテ一尺五寸

前面

右面

左面

宣示顕説
若経巻所
住之處
是中皆應
起塔供養

以要言之
如来一切
所有之法
如来一切
自在神力

後面

如来一切
秘要之蔵
如来一切
甚深之事
皆應此経

天真院殿御石碑
丸 高三尺
丸 高四寸五分
丸 高四寸五分
高二寸 ヨコ一尺四寸三分 タテ仝
高二寸 ヨコ一尺七寸三分 タテ仝
高二寸
一尺一寸五分
高二寸
高二寸
高二寸
高三寸五分 ヨコ三尺四寸 タテ仝
高二寸五分 ヨコ二尺九寸四分 タテ仝
高二寸二分 ヨコ二尺四寸八分 タテ仝
高一尺五寸三分 ヨコ巾二尺 タテ巾仝
高四寸五分 ヨコ二尺八寸 タテ仝
高一尺九寸三分 ヨコ巾三尺六寸五分 タテ仝
高七寸 ヨコ五尺七寸 タテ仝
高五寸五分 ヨコ四尺九寸 タテ巾仝
丸 高一尺八寸
高七寸 ヨコ六尺七寸 タテ仝
高四寸 ヨコ一尺六寸 タテ仝
高七寸 ヨコ七尺七寸 タテ仝
高九寸五分 ヨコ一丈二尺五寸 タテ仝
高一尺三寸 ヨコ二尺一寸三分 タテ一尺六寸
高七寸 ヨコ八尺七寸 タテ仝

前面
左面
右面
蓮
妙法
経
後面
華
前面
左面
右面
如来如實知見三界之相無有生死若退若出
爲天眞院妙仁日雅菩提建爲
當知是處即是道場
宝永第四亥年仲春二十六日
後面
銘曰
擇地築壙墓浮圖彫石固蓮開擎玉盃常滿天甘露

寛徳院殿御石碑
丸 高三寸七分
高一尺一寸
高一寸九分 ヨコ一尺一寸五分 タテ仝
高一寸九分 ヨコ一尺四寸五分 タテ仝
高三寸 ヨコ二尺八寸六分 タテ仝
高一寸九分 ヨコ二尺四寸七分 タテ仝
高一寸九分 ヨコ二尺七分 タテ仝
高一寸九分
高一寸九分
高一寸九分
高二寸一分
高一尺三寸二分 ヨコ一尺六寸 タテ仝
高二寸三分 ヨコ二尺三寸二分 タテ仝
高一尺七寸 ヨコ三尺一寸 タテ仝
高五寸五分 ヨコ四尺八寸 タテ仝
高四寸六分 ヨコ四尺七寸八分 タテ仝
高六寸 ヨコ五尺六寸三分 タテ仝
丸 高一尺六寸
高六寸 ヨコ六尺四寸八分 タテ仝
高九寸 ヨコ一尺六寸二分 タテ仝
高六寸 ヨコ七尺三寸二分 タテ仝
高一尺一寸五分 ヨコ三尺五分 タテ一尺三寸八分
高三寸八分 ヨコ一尺四寸 タテ仝

前面

右面

左面

經曰
微妙浄法身
具相三十二
寶永第七庚寅年

恭惟地擇乎白
雲山塔銘乎白
淨石磨妙法蓮
華之金文耀第
一義天之碧霄
因而述讃偈擬

後面

其銘曰
精石彫靈塔
金文耀義天
法身元白淨
更見紫磨鮮

理真院殿御石碑
丸 高一尺五寸
高三寸
ヨコ六寸七分
タテ仝
径一尺七寸
高二寸
ヨコ三尺
タテ仝
丸 高一尺六寸
直径一尺五寸三分
丸 高三寸二分
直径一尺六寸四分
高一尺六寸
ヨコ一尺三寸三分
タテ仝
高三寸
ヨコ二尺九寸
タテ仝
丸 高一尺五寸
高五寸
ヨコ三尺六寸五分
タテ仝
高七寸五分
ヨコ五尺四寸
タテ仝
高五寸五分
ヨコ四尺三寸二分
タテ仝
高四寸七分
ヨコ四尺五寸五分
タテ一尺七寸五分
高一尺三寸五分
ヨコ二尺三寸五分
タテ一尺五寸七分

前面
左面
南無釋迦文佛
右面
南無多宝善逝
後面
南無日蓮大士
前面
左面
微妙浄法身
其相三十二
右面
深達罪福相
徧照於十方
後面
萬治元戊戌年
十月上旬九日

瑞應院殿御石碑

丸 高二尺

高三寸
ヨコ六寸七分
タテ仝

径一尺七寸

高二寸
ヨコ三尺
タテ仝

丸 高一尺六寸
直径一尺五寸三分

丸 高二寸二分
直径一尺六寸四分

高一尺六寸
ヨコ二尺三寸三分
タテ仝

高二寸
ヨコ二尺九寸
タテ仝

丸 高一尺五寸

高五寸
ヨコ三尺四寸五分
タテ仝

高五寸五分
ヨコ四尺三寸三分
タテ仝

高七寸五分
ヨコ五尺四寸
タテ仝

高一尺二寸五分
ヨコ二尺三寸五分
タテ一尺五寸七分

高四寸七分
ヨコ四尺五寸五分
タテ一尺七寸五分

前面
左面
南無釋迦牟尼佛
右面
南無多宝善逝
後面
南無普賢大菩薩
前面
右面
深達罪福相
編照於十方
左面
微妙浄法身
具相三十二
後面
元禄六癸酉年
霜月上旬十日

真如院殿御石碑
丸 高二尺
高三寸
ヨコ六寸七分
タテ仝
径一尺七寸
厚二寸
ヨコ三尺
タテ仝
丸 高一尺六寸
直径一尺六寸三分
丸 高二寸二分
直径一尺六寸四分
高一尺六寸
ヨコ二尺三寸三分
タテ仝
高三寸
ヨコ三尺九寸
タテ仝
丸 高一尺五寸
高五寸
ヨコ三尺四寸五分
タテ仝
高五寸五分
ヨコ四尺三寸三分
タテ仝
高七寸五分
ヨコ五尺四寸
タテ仝
高四寸七分
ヨコ四尺五寸五分
タテ仝
高一尺二寸五分
ヨコ二尺二寸五分
タテ一尺五寸七分

前面

為真如院
妙圓日教
菩提建焉

右面

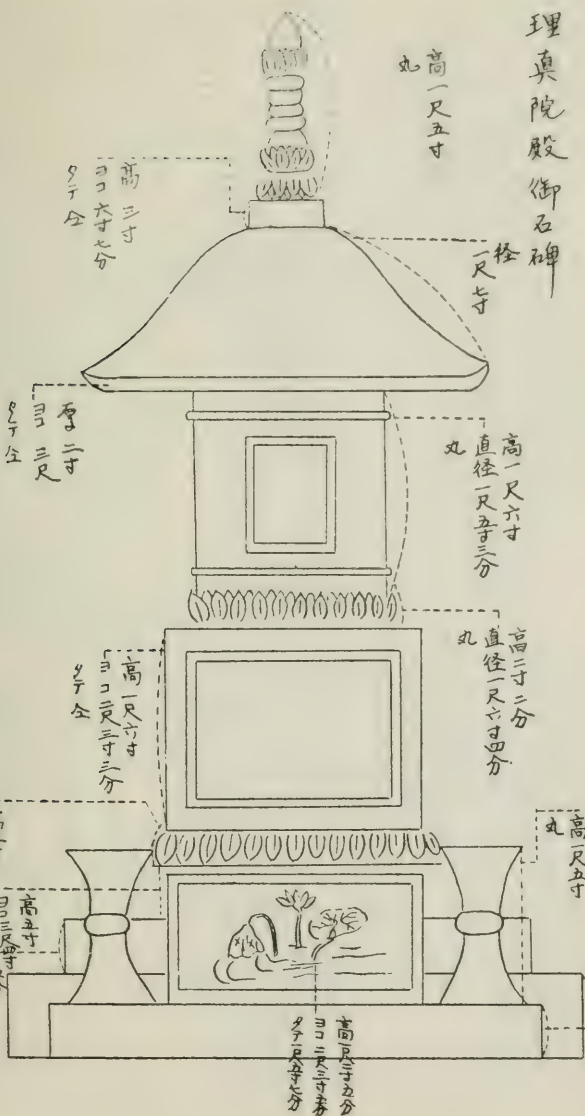
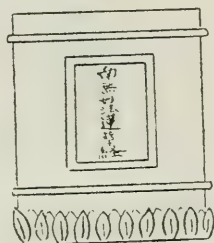
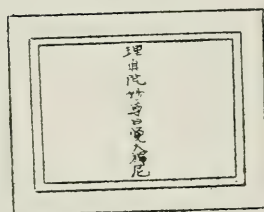
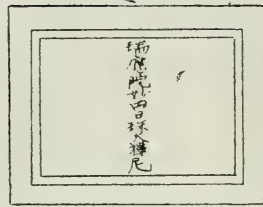
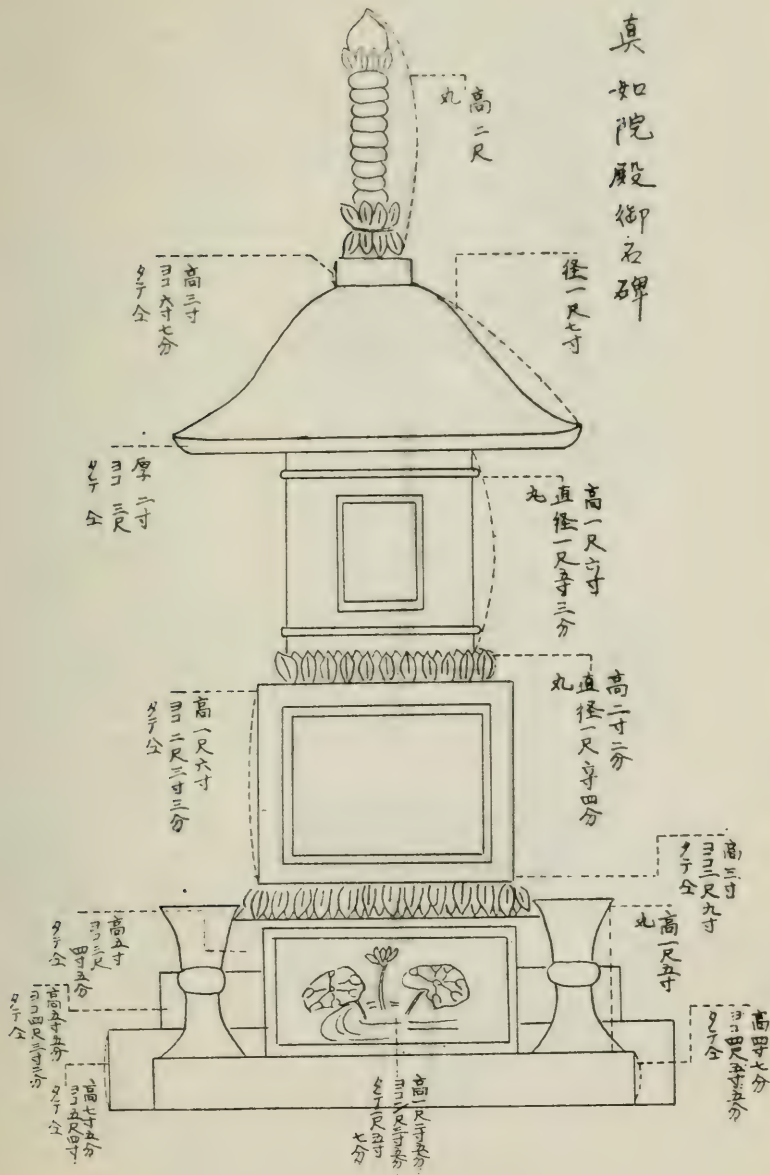
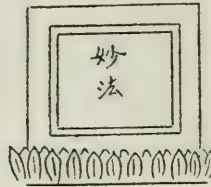
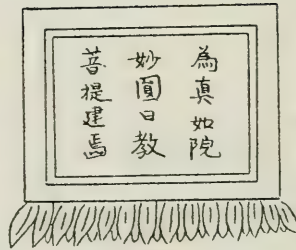
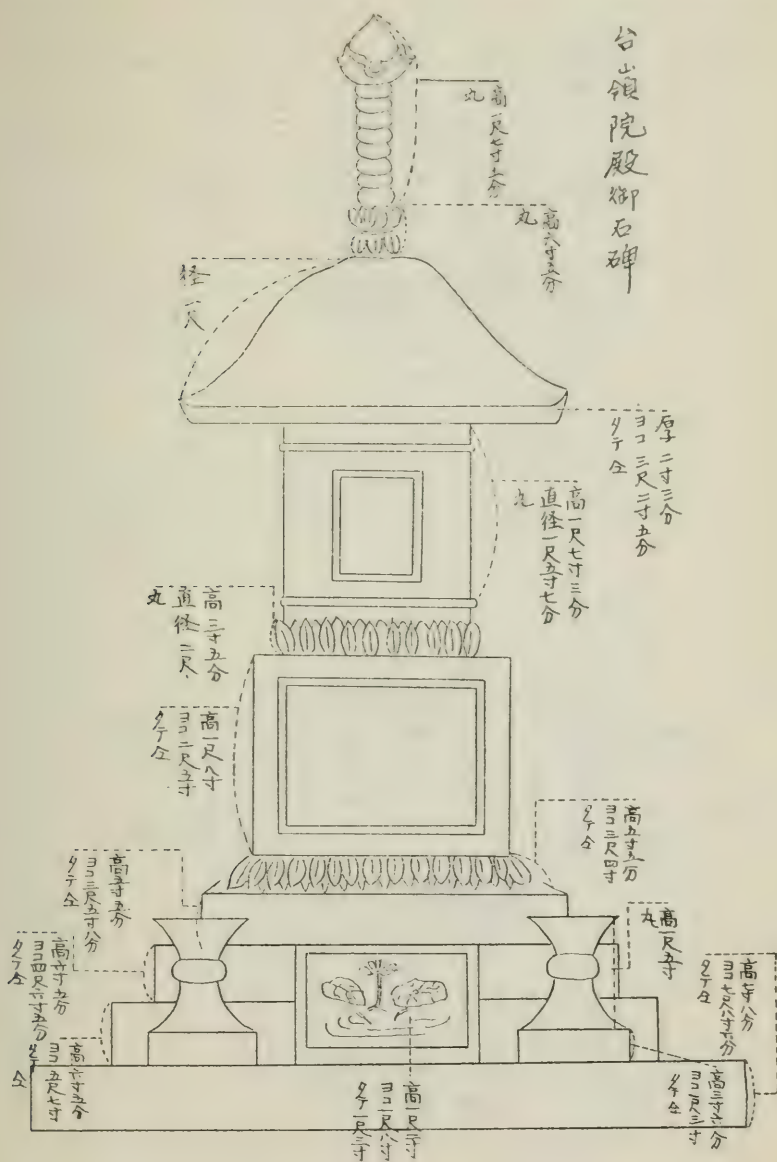
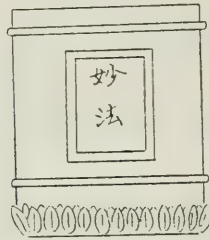
如来一切
秘要之蔵
如来一切
甚深之事
皆應此経

左面

以要言之
如来一切
所有之法
如来一切
自在神力

後面

當示顯說
是中皆應
起塔供養
享保二十乙卯
歳六月二十四
日

台嶺院殿御石碑
丸 高一尺七寸二分
丸 高六寸二分
径一尺
厚二寸三分 ヨコ三尺二寸五分 タテ仝
丸 高一尺七寸三分 直径一尺五寸七分
丸 高三寸五分 直径二尺
高一尺八寸 ヨコ二尺五寸 タテ仝
高五寸五分 ヨコ三尺四寸 タテ仝
高五寸五分 ヨコ三尺五寸八分 タテ仝
丸 高一尺五寸
高六寸五分 ヨコ四尺六寸五分 タテ仝
高五寸八分 ヨコ七尺八寸六分 タテ仝
高六寸五分 ヨコ五尺七寸 タテ仝
高一尺六寸 ヨコ一尺八寸 タテ一尺三寸
高三寸六分 ヨコ一尺三寸 タテ仝

前面

左右後面洪無文字

前面

了心院殿初御石碑
以下總而左右後面共無字

高二尺

了心院
鮮容院
清心院
縁覚院

高一尺八寸
ヨコ一尺九寸二分
タテ一尺八寸

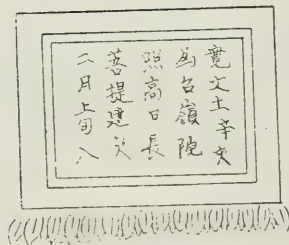
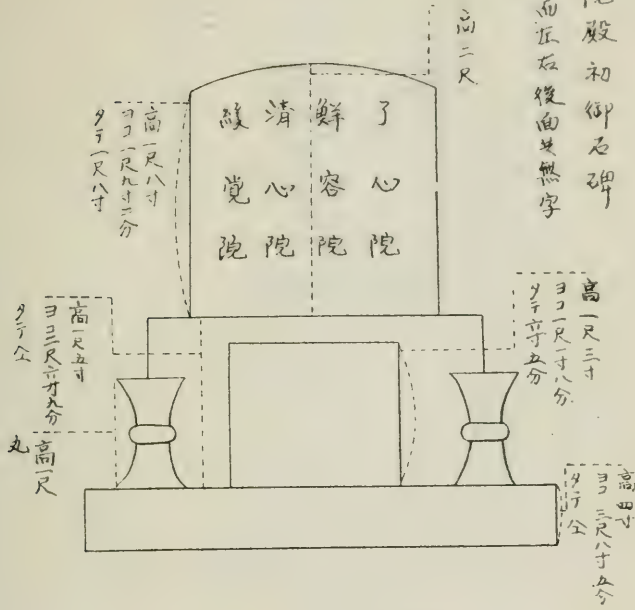
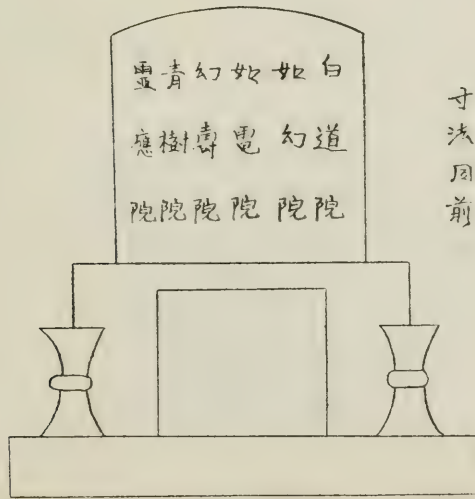
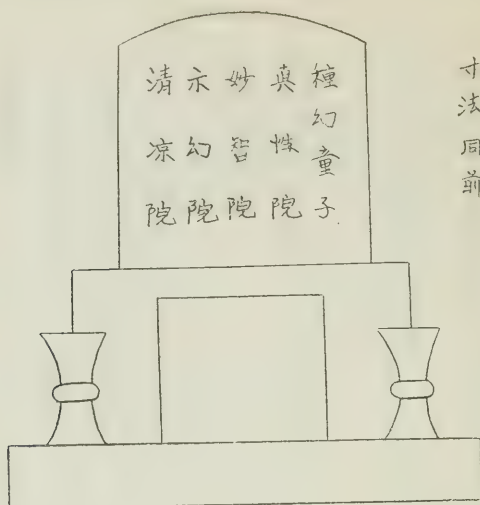
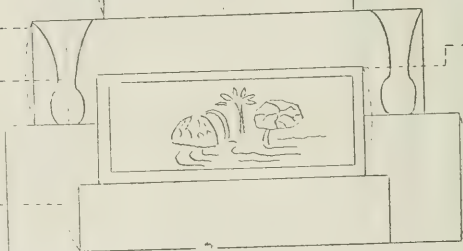
高一尺三寸
ヨコ一尺一寸八分
タテ一尺五分

高一尺五寸
ヨコ二尺六寸九分
タテ仝

丸 高一尺

高四寸
ヨコ二尺八寸五分
タテ仝

寸法同前

白道院
如幻院
如電院
幻壽院
青樹院
靈應院

寸法同前
種幻童子
真性院
妙智院
示幻院
清凉院
益心院
春臺院
聞是院
高二尺六寸
高二尺四寸
ヨコ一尺七寸三分
タテ一尺四寸八分
高一尺〇五分
ヨコ一尺八寸
タテ一尺一寸
高八寸
ヨコ三尺〇五分
高八寸九
高一尺一寸四分
ヨコ三尺五寸四分
タテ四尺一寸
高五寸
ヨコ二尺四寸
タテ八寸

寺領御佛供料等

寺領高貳百五拾石　内（高百五十石　那賀郡西坂本村／高　百　石　海部郡方村）

天眞院樣御靈屋料　米拾俵

台嶺院樣　供糧米拾俵

眞如院樣御佛供料　銀三枚

靈岳院殿日觀淨鏡大姉（清溪公御女／佐竹修理大夫室）　供糧米拾石（御廟武州池上本門寺）

清心院樣御佛供料　銀五百目（元祿六酉年より）

神智院樣同

林光院樣同　銀七百目（正德二辰年より）

成等院樣同

開是院樣同

圓妙院樣（菩提心公御女／御廟江戸上野護國院）　金四拾兩（文化八未年御納閏二月／永代御祠堂料）

一但此四十兩は文化十酉年九月金廿五兩と銀廿五枚に改る一

妙泰院樣（觀自在公御女／右同斷）　金五拾兩（文化十五年同／年々利子金貳百疋）

春窓院樣（御同公御女／右同斷）　金五拾兩（右同斷／同斷）

如幻院樣　金四拾兩（享和四子年文化十酉年／御納利分年々六匁つゝ）

幻壽院樣　金四拾兩（右同斷／同斷）

春臺院様　金四拾兩（右同斷／同斷）
青樹院様　金四拾兩（右同斷／同斷）
本性院様（憲章公御生母弘化四未十一月思召にて安置　御廟江戶上野凌雲院）　銀三枚
右御廟無之御位牌計りの分は明治二巳年十二月御廟所有之御寺へ御遷座の旨布達有之爾後御靈牌無之
寺領は明治四未年より社寺領一般上地と共に上り切り御佛供料等は同九年一月改正に成る
御位牌斗御安置の分
淨地院日乘大居士（瑤林院様御父加藤肥後守清正公　慶長十六年亥六月廿四日）
淸淨院妙忠日壽大姉（御同所様御母加藤清正公室　明曆三年申九月十七日）
圓光院殿榮壽日仙大姉（淸溪公御女上杉彈正大弼室　御廟池上本門寺）
松壽院殿法榮日經大姉（南龍公御女松平左兵衞督信平室　御廟池上本門寺）
芳心院殿妙英日春大姉（御同公御女松平相模守光仲室　御廟池上本門寺）
遠紹院殿妙道日養大姉（大憲公御女松平播磨守賴濟室　御廟池上本門寺）
永昌院殿妙壽日量大姉（御同公御女松平讃岐守賴眞室　御廟池上本門寺）
右各御靈牌明治二巳年御廟所有之御寺へ御遷座已後無之
御在國の節御參詣御名代

瑤林院様

正月　思召にて御參詣

御家父様方へ御參詣の御序思召にて御參詣被遊筈
御參府前迄に御參詣不被遊候共御名代に不及

正月廿四日　御名代御年寄
金二百疋

御忌月に付廿三日の晩より廿四日朝
迄出家へ御非時御齋被下料金三歩
今日年頭に付御參詣被遊候得は右御忌日の御名代に不及

五月廿四日
九月廿四日
歳暮
御名代大御番頭

歳暮御家父様御初へ御參詣
被遊候御同日に御名代被遣之

七月十三日　御燈籠二

七月十四日　御名代大御番頭
御燒香生花一桶

瑤林院様大眞院様眞如院様御施餓鬼相東
今日一座に執行有之出家へ御非時
御齋被下料金相京壹兩壹歩

御口切御茶　中奥を以

御家父様御初へ御手向御備之
御同日御使を以て御備被遣

極月御茶　但し元日の御茶中奥を以て被遣之

一新焼米御備中奥を以て

以下尊靈方大同小異御座候

御參府御留守年之節御代拜

瑤林院様へ

正月朔日　白銀二枚　御代參御年寄
長袴

同廿四日　白銀二枚　御代參御年寄
御燒香　長袴

御忌月に付出家衆へ廿三日の
晩より廿四日朝迄御非時御齋
被下但し料銀にて被遣之

五月　夏切御壺

同廿四日　御代參御年寄　出家衆へ御齋被下
長袴　但料銀にて被遣之

七月十三日　御燈籠二

同十四日　白銀二枚　御代參御年寄
御燒香　長袴

御施餓鬼有之に付出家衆へ御
齋被下但料銀にて被遣之

九月廿四日　御代参御年寄（一本番頭）長袴　出家衆へ御齋被下但し料銀にて被遣之

極月　一月末　御代参番頭長袴　毎月　御代参番頭長袴　年中初物之御菓子二種　瓜　新焼米　奥頭役を以

天眞院様寛徳院様共右に同し

芳心院様へ

正月廿八日　御代参奥頭役半袴

七月八日　御施餓鬼有之に付出家衆へ御齋被下但料銀にて被遣之　同十三日　御燈籠一

十一月廿八日　白銀二枚　御代参奥頭役半袴　出家衆へ御齋被下但し料銀にて被遣之　御忌月故也

以下尊靈方同し

御寄附品

一瑤林院様御親筆色紙詩歌　御寄付年月不詳　二幅

「晴夜獨行明
月地入間布
踏白雲天

金銀泥雲形色紙に三行表装中鼠地金襴梅模様天地茶しけ絹牙軸」

「よろ川代をみこのさ
乃山にはよはふなは
あめかしさおきゐ
のしかるらし

金梅書色紙に四行表装右に同し」

一清溪公御筆提婆品　一卷

一琵琶　一面

清溪公御寄附年月不詳撥面黒地桐鳳凰月銀丈け三尺二寸巾一尺二寸五分裏カリン

一琴 同柱　一面

御同公御寄附年月不詳兼青貝入頭金龍丈け六尺一寸　巾八寸五分

一蜀江錦七條袈裟　一服

御同公御寄附丈け三尺七寸二分　巾七尺二寸五分

箱蓋裏書付左の如し

蜀江錦七條者加藤淸正公より賴宣公へ被獻之品也

光貞公當山御建立之砌開基日順へ給之當山不易專一之寶物也後職之上人大切可守護者也

第二祖 日永代

又　蜀江錦御七條裏地大（破）〔一本切〕に付拙僧參府登城之砌持參致し助檀谷八左衛門より御錠口筒井殿へ相賴　公方樣御實母　實成院樣へ則御覽に入候而別紙之通裏地御納被爲遊候事

慶應二丙寅年八月　日

白雲山十七世日禎

右赤地金襴にして大模樣大略左の如し間に葵御紋散し

實成院殿より御寄付裏地白地紋精好の如し

一清溪公御筆釋迦文珠普賢墨畫御寄附年月不祥　三幅對

一大涅槃像清溪公御寄付丈ケ二丈一尺二寸五分 巾一丈〇四寸三分一幅

裏書付に涅槃像　一軸

元祿五壬申年加納與益筆

御寄付主　　光貞卿

報恩寺　權大僧都　日順 花押

一瑤林院樣御打掛け衣裂地

葵御紋桔梗桐紋花鳥織出し地色紅の退色の如し純子御婚禮之節のもの〻よし

一清溪公御筆鐘馗畵平井助左衞門寄付　御同公より拜領の處寛政元年

一瑤林院樣　天眞院樣　寛德院樣　御長刀　三振

金銀御紋幷金銀切羽　但し御紋金銀は延金

右御長刀維新に際し紛失の由にて當時無之

一鎗 御寄附年月不詳筑前下坂作　四筋

一大慧公御筆法華經　一卷

一赤旃檀釋迦佛 立像　一躰

觀自在公御寄附右御腹內に　天眞院樣　瑞應院樣　眞如院樣　御位牌を奉納爲御回向料金五拾兩御寄附但し右御位牌は御長刀同樣當時相見不申

一舜恭公御筆除厄火防題目

文政三辰年五月御寄附表裝裂地は　信恭院夫人仙臺家へ御緣組の節之御帶地切れ之よし

右之外佛具諸什器御寄附品多し略す

首題署名の位置略圖

南無妙法蓮華經

加茂肥後守清云

裏書　白雲山報恩寺
傳燈嗣法
十三
感得　日逞　花押
巨西學室百八十八世

維新後

一明治二巳年十二月朔日左之通告達

報恩寺

此度藩知事御拜　命御家祿十分一と被　仰出候に付万緒適宜之御改革無之候半而者何分御家算難相立候に付甚御不快には　思召候得共不被爲得止　御宗家樣御靈牌は御邸内に御安置　御手前御靈牌は　御廟所有之御寺へ御遷座可被遊旨被　仰出之

件之通に付其御寺に御廟所無之　御靈牌御遷座振等は追而可相達事

十二月朔日

一後明治八年七月に至り外寺院へ御埋葬之御方報恩寺へ御改葬に付七月三十一日を以て左之如く和歌山縣令神山郡廉へ和歌山濃谷在寛を以御届させ八月二日より四日迄に御改葬家扶上田章擔任取計候事

累代家族從來別紙之寺々へ埋葬有之候處諸方分散仕居候ては營繕幷掃除等難行届追々及荒廢候に付此節報恩寺一寺へ取集め改葬仕度且同寺分散之埋葬も一ヶ所へ取集改葬仕度則寺々より之別紙七通相添此段御届申上候也

別紙略抄

諸寺院へ分散御埋葬之御家族方當寺へ御取集且寺中分散之御埋葬も一ヶ所へ御改葬之趣請書

報恩寺住職岩村日轟留守中
代　柳瀬環善　より

（理眞院殿始三尊靈御遺躰報恩寺へ御改葬之旨承諾の請書

蓮心寺境内へ御埋葬有之　鮮容院殿等是又御改葬承知致し候旨

養珠寺事務預り
蓮心寺住職
荻生日穆　より

（私寺に相納り御方々樣報恩寺へ御改葬相成候趣委細奉畏候旨

高松寺住職
曹中良中　より

（私寺に御埋葬御座候了心院尊靈報恩寺へ御改葬相成候段奉畏候旨

淨心寺住職
河野日久　より

（忠善院殿尊靈報恩寺へ御改葬之儀於私寺は聊差支之廉無之との旨

感應寺住職
貫名日心　より

外二通は缺逸す

一明治十年五月五日和歌村妹背山に有之養珠院樣御寳塔幷御肖像御位牌等是迄　養珠寺に御預け有之處此度御都合により報恩寺へ御預け支配申付候との旨和歌山湊詰澁谷在寛を以同縣廳へ御屆相成たり

一元祿七戌年紀勢封内之社寺改をなす

此比寺社奉行に於て紀勢御領分之社寺總改を施行したるものとみへ名草郡吉原組大庄屋より提出したる同組各村之社寺改書一卷を發見せり才賀屋町光明院の條由緒書には元祿三年とあり思ふに此前後に各部の社寺調をなしたるならんか全部之分完備しあらは一般社寺の事明確を得へ

しこ雖も僅に一組に止り參照となすに足らす然れ共社寺に於ける一事歴なれは一二の書式を抄錄し社寺改方の體裁を示す爾後も時々此事ありしは必然こ察すれ共記錄存せさるなり

元祿七年
戌の九月
寺社御改帳　　　名草郡　吉　原　組

一西方寺　山號院號無御座候　　　名草郡　吉　原　組

一淨土宗鎭西派名草郡日方村永正寺末寺

一寺内に塔頭無御座候

一寺之開基由來不相知候得共古跡にて御座候往古は阿彌陀寺こ申候へ共七十年以前寛永元寅年寺建直し西方寺こ寺號改申由中興開山は傳譽順應こ申由此代々日方永正寺末寺罷成申候此外緣起舊記等も無御座候

一寺領無御座御年貢地にて御座候

一山林無御座候

一御年禮幷御目見不仕候

一當住三譽秀隨こ申候僧官長老名艸郡日方村永正寺十一代屋譽珊覺弟子にて御座候

一殺生禁斷之御制札幷御證文無御座候

一氏神中言大明神　　　吉原村
　　　　　　　　　　　廣原村
右兩村之氏神にて御座候

一社僧無御座候
一社之勸請由來相知不申候へ共古跡に而御座候
一社領無之御年貢地而御座候
一少之森之内に社御座候
一御年禮幷御目見不仕候
一神主吉原村林重大夫と申候
一殺生禁斷之御制札幷御證文無御座候

吉原村

一藥師堂
是は吉原村之内に少之芝に御座候故古より無高地に而御座候同村林重大夫代々支配に仕來申候

草郡名　相坂村

一應供寺　補陀洛山 院號無御座候
一法華宗一致受布施當國白雲山報恩寺末寺
一寺内に塔頭二宇御座候　佛眼院 正統庵
一開基之儀は人皇七十五代　崇德院之御宇保延元年草創之寺にて其砌六ヶ之僧坊御座候由且又人皇百六代　後奈良院御宇に畠山紀伊守高政より免田壹町八反寄付之由其以後天正十三年正月廿二日爲亂妨佛閣僧房燒失仕候其節靈寶記錄悉紛失仕申候に付開基之僧幷歷代之品委細に難知御座候乍然本尊千手觀音脇立勝軍地藏毘沙門天三躰共に于今相傳漸三間四面之堂計御座候中興開山は大僧都日順上人にて御座候

一寺領無御座御免許地にても無御座候
一山林御座候觀音山と申ならはし來候
一年頭御禮相勤不申候
一常住持官位無御座候正住寺歷代眞善院日有聖人弟子佛眼院日護と申候
一殺生禁斷之御制札御證文等も無御座候乍去自往古至于今迄殺生之儀無御座候
外略す都而此躰裁にて各村之社寺瑣細之分迄悉く記載す
以上
元祿十年戌の九月　　吉原組大莊屋　林　茂右衛門
右一巻を閲するに社寺領有之分と御目見地之分は除きたる如し是等は寺社奉行直支配にて直接寺社局へ差出せしものなるへし

應供寺　海士郡相坂村 補陀落山　法華宗一致派

名所圖會に曰く報恩寺日順上人貞享二年城東安原莊相坂村の古刹に退隱し自らこれを中興して應供寺と號す
別項佛祖統紀に曰く
應供寺は建保中艸創す本尊千手地藏多門は春日の作也天正之亂に僧堂法宝悉く灰燼となり三軀之木像唯火場に存す爾来眞言宗となり又淨土宗となる師之を求て一新伽藍備る
一續風土記に曰く
元祿十四年より毎年金二十四兩を寄進し給ふ　本堂觀音堂神堂三十番は寺より半町許り山上にありて別に一區をなして除地なり
按に　日順上人は　清溪公御歸依厚く報恩寺開山の祖となし給へり之か退隱の料として御寄附ありしならん

善福寺

光明寺

清溪公御寄附品

明治三年迄　　金貳拾兩　　應供寺

善福寺　湊道場町万松山　禪宗曹洞派

續風土記に曰く元祿十四年　淨圓尊夫人祇園社再建せらる其餘寄納し給ひし物數種書簡數通ありと云々

光明寺　鹽屋村　禪宗黄蘗派

當寺は圓通禪師三大誓願を發し其願滿し此寺を剏創す元祿十五年秋閏八月　清溪公命によつて城中に往て陞座問答を勤む委敷は圓通語錄に在りといふ

三大誓願とは一は閫外に出さるもの五年一は諸國に遍歷するもの十年一は一切藏經を閱する事十年爰に於て居を禪林寺に移して打座是事とす時に　龍祖其芳德を聞し召され之を城中に致さんとて近臣をして迎へしめ給ふに一句の偈を口占して辭せりといふ事は高僧傳に詳なり寺說に本堂は　清溪公御建立御切米八十石を賜りたりと傳ふれ共記載之ものなし

御寄附品

一清溪公より各所に御寄附のもの亦尠からさるへし殊に御能畫に涉らせられ御旅中等にて賜りしも多く既に泉州貝塚卜半の如き今に珍藏す此類悉く知るに由なし唯記の存するものを揭く

三光寺　吹上寺町　鷹の御畫幅　二

寶珠寺　名草郡中村　山水の御畫幅

八幡宮　海部郡本脇村　御太刀

報恩講寺　同　郡大川村　山水の御畫

清淨心院　高野山　佛像

眞乘寺　小雜賀村　鷹の畫十二枚

覺深公御寄附

一深覺公より御寄附　他に記事なきを以て爰に附す

木本八幡宮　海部郡西莊村　反り橋

同社へ　御湯釜

右は御生母眞如夫人より御寄附

熊野權現社　大山權現社

有德公

熊野權現社　日高郡熊野浦

大山權現社　同　入野村

紀伊國名所圖會に曰く兩社は疱瘡の守護神にして寶永年中　有德大君本藩に在し時痘を患ひ給ひ兩社に御祈願ありて全癒を得させ給ひしかは社領十二石つゝを寄附し給へり

續風土記熊野社の條に　享保中より境内殺生を禁せられ社殿御造營ありしとあり

御供米十二石　熊野浦　熊野社

御供米十二石　入野村　大山神社

養源寺

養源寺　在田郡　廣浦

名所圖會に曰く當寺の什物に大藏尉某の畫ける大黑天の像に祖師日蓮の讃する處の一軸あり其由

來は二百年許已前にや肥前の國の廻船難風に逢ひて覆んとせし時船中に大黑天の像を持る者ありて祈念せしに難なく廣浦に着せしより水主共當寺に來りて此事を語り大黑天の此地に留らんとする意あるを知りて當寺に納むといふ寶永四年　有德公此大黑天の像を御覽あり翌年御實母淨圓院夫人も御覽ありて更に表裝を加へ給へりと云々

一當寺記錄に曰く　南龍院樣當寺へ被爲　成大黑天御拜被遊候

一有德院樣兩度被爲　成大黑天御拜被遊住寺を被召出繪讃之儀具に御尋被遊候

一正德元年廣村御殿跡五十間四方程之處不殘寺地に被下候

一同五年貧寺に付爲助力新田場所見立候樣との御事にて則廣村海端荒地御座候に付奉願候處願之通相濟享保元申年御普請初同酉年出來仕新田一町二反の處無年貢地にて被下置候右御普請中諸事掛り物入用等不殘　殿樣より被下置候右新田之儀は永々御供米に被下置候旨被　仰渡候

一享保九辰年正月より　公方樣御厄年之御祈禱　淨圓院樣より被　仰付每月御卷數御洗米差上申候依之同年極月に御金四十三兩壹歩つゝ被下置候

一享保南誌補に曰く　有德公は貞享甲子年御誕生故摩伽羅神を御尊崇あり御本家御相續の後御心願にて一寸八分の大黑天を模刻被爲成小片紙三千枚御摺せ諸士信心の輩へ被下置享保年　公儀へ被爲入候後此御本尊は有田郡廣浦養源寺へ御納め祠堂料御寄附年々六十金つゝ　公儀より御備也

寺領　高九石四斗三升三合　廣村　養　源　寺

按に　此大黑天の事田中大立寺の一說ありて世史に揭る如く頗る諸說區々たり更に角　德廟御尊信には相違なく御本宗を被爲繼遂に　將軍に迄成らせ給ふものから世に出世大黑と唱へ年々正月初の甲子には和歌山近鄕はいふ迄もなく近國よりも

參詣群集之由名所圖會に其圖を示せり大黑天の奇瑞其いわれなきにあらさるへく　淨圓夫人の御信仰も御理りにやあらん御祈禱料の事は左の記錄存せり之を正さす

享保十巳年十二月　淨圓院樣思召を以金千四百拾六兩三歩御下け御廣敷より京金御藏へ預に相成右利子金百七十兩と銀五分内百兩は松林寺六十六兩は養源寺へ御祈禱料其外被下に相成來たる處寛延二巳年より外御祈禱幷に被下筋共相止松林寺養源寺兩寺へ相渡候處嘉永六丑年改革利分一ヶ年八拾五兩銀三匁に減額明治二巳年十二月より家令所に引受年々十二月左の如く下付今に至て變はらす

金五拾一兩貳朱と銀四匁九分三厘　　松江　松林寺
金三拾三兩三歩　銀貳匁八分五厘　　廣　養源寺

松林寺　海士郡　東松江村

古老の談に曰く松江松林寺は元湊祇園の住職に有之　有德公吹上寺の邊御遊歩之節祇園へ御立寄相成候處住職の僧御人相を奉感天下御相續に相違無御座旨申上候よし果して其通り之御儀に付右僧御呼出に相成二百石被下置候其后祇園を後住に讓り自分は松林寺を建立其處へ引移候て後々迄松林寺へ御寄附の如く相成知行有之よしと云々

一又一說に曰く　松林寺の開祖は人相を見て前途を預言する事適應せさるなし　有德公御遊獵の途次寺邊御遊歩の折から寺内群集しあるを御覽し何事をなすやと問はせられ行て見んと寺へ詣らせらる僧は尊顏を拜し驚きて下に飛ひ下り殿には近き内高位に登らせ給ふ事御顏容に顯れ候と申上る間もなく御兄君御逝去御相續あり正德六年には遂に　將軍に成らせ給ひけれは寺御建立ありて四丁四面の地所賜りしと聞及ひぬと云々

一續風土記に曰く　寳永三丙戌年　有德大君の眞母淨圓齊夫人の建立にて祠堂金を寄せ給ふ因て年々百金を賜ふ是を寺產とす

右古老の說は口碑に傳ふる處異同自つから免れす二百石御寄附とは誤傳なり祠堂金の事は前記養源寺の條に記する如し

東松江村　松林寺屋敷

紀勢御領分高帳に

高五石五斗六升七合

刺田比古神社

刺田比古神社　岡の谷　岡の宮と稱す

續風土記に曰く天正十三年社領悉く沒收せられ神事座配等是より絕へたり中世兩部となり別當寺あり封初以來國城の地主神なれは殊に崇敬を極められ延寳元年　命ありて唯一に復し祠官を社地に移すと云々

一正德二辰年五月神田御寄附

紀州名草郡雜賀莊刺田比古神社領事

當社者式內所載而專爲府城鎭護之社也因玆以名草郡岡町之內拾石之地永寄附之宜收納者也仍如件

正德二年五月　御名御判

一享保六丑年十月十七日　將軍吉宗公より淺野壹岐守を以眞御太刀馬代御進納ありたり

一享保十四酉年十月朔日刺田彥神主岡本民部少輔　公儀より御呼出に付參府之處御老中列座水野和泉守より御朱印拜領す此代地は勢州渡會郡の內にて被進たりと云ふ

剌田比古社領紀伊國名草郡田尻村之内貳百石事今度寄附之訖全收納永不可有相違者抽國家安泰之悃祈之狀如件

享保十四九月廿八日　御朱印　神主

右に付差圖の上爲御禮手助三掛つゝ兩御所様へ獻上御白書院にて御目見被　仰付年頭爲御禮五年に一度三月中參府獻上物之儀は手助三掛つゝ兩御丸へ可差出旨被　仰渡以來五年目毎參府御目見時服二つ拜領繼續せり

一按するに　剌田比古社は　有德公の御産神也　公御誕生遊敷にて御誕生之時　清溪公御差圖により同の宮神主岡本周防守抱き来りて一旦屆之芝へすて參らせ直ちに拾ひて加納五郎左衛門へ御供仕り同人家にて御養育奉る是等の御由緒を以て再應之御寄附ありさいふ

一明治元辰年九月十四日舊幕より受封之判物等取調可差出旨に付剌田彦社神主岡本左馬助より御朱印八通差出させ辨事御役所へ差出す

社領　高拾石　海部郡岡町　剌田彦社

高貳百石　御朱印地

慈光寺　名草郡下和佐村 清凉山觀音院　眞言律

續風土記に曰く舊は和佐山觀音さ號す天和中今の號に改む高野山の僧快圓さいふもの當寺の衰微を中興す快圓高德の僧にて　有德大君の寵遇を蒙り江戸へも被召しさいふ什物に寬德夫人御寄附の品あり近年　一位老公親筆の淸凉山さいふ三字の額を賜ふ

一當公より御寄附品

慈光寺

當公より御寄附品

御親筆の書

御親筆の書幅

小雜賀村 淨明寺

高野山 寶性院

淨明寺の御親筆は先年村中火災の時燒失のよし

一當公最も神佛御崇敬又佛道御尊信なり社寺に係る被　仰出事左の如し即ち正德四年四月十ヶ年間嚴しく節儉　仰出されの時なり

一儉約といへとも祈禱料幷法事料諸祝儀等の義は格段重き事故任先規之例是迄の通たるへし右三ヶ條の略しは甚不吉の至り也

一神事祭禮等の諸入方是迄の通任先規之例可申付事

一領內の神社佛閣及破損候はゝ修復又は造立無斷絕樣に可取計事

一領內之諸寺院諸社家勤行等別て無懈怠出精候樣向々支配頭より可申達候且又年禮請候義二ヶ年は格別三ヶ年病氣にて出仕無之候はゝ退院可申付候間其旨可申達置候事

一領內之者寺院諸社家社領當家御先祖より被御附置候ても平日勤行等懈怠不行跡之段相聞候はゝ吟味之上於相違無之は其輕重によりて或は退院可申付候雖寺社領と其節の依子細可減者也少しも遠慮不可有事なり

一當家代替の節家中の朱印是迄先規の通にて相濟來候得共當年より改て家中の領地寺社領朱印共に書き替可遣候又小高帳にて遣し置候分は以先例家老共印形にて書替可遣候此末子孫代々共代替之節書替定法と相心得へし

一領内諸寺院之もの金銭貸付是迄有來候得共此末貸付は無用に申付候間此旨領内中の寺院へ可申渡候子細は佛法を以現在未來諸人佛を勸候出家爲金銭諸人を責候儀は法外の事に候金銭無躰に貯無之共諸旦家を以可致相續事なり此末代々無用に可申付候尤無出世之僧は出世之心掛貯可有事なれは夫は其寺院相應の出世は無躰之義無之共成就すへき事なり

一領内の諸寺院毎年盆中有緣無緣施餓鬼可致候得共當年より改めて春彼岸に有緣無緣の爲に一夜二日の施餓鬼供養相勤可申候依て乍些少茶湯料金百疋つゝ在々小寺迄一ヶ寺切に遣候間寺社奉行より相渡供養可爲致候此末毎年寺役と心得供物相備勤行可致候右茶湯料は納戸金之内より毎年二月朔日定日相渡可申候秋彼岸は茶湯料遣不申候寺役と心得春彼岸同様相勤可申候此義當家代々祈禱の爲也

一高野山根來熊野其外之諸山是迄の通諸付屆不相略念頃に可致事なり尤先例之外取扱決定無用に候江戸表諸寺院尤大切にあひしらひ可致事也

一領内中五穀成就祈禱は城下於神明來る四月朔日より三夜三晝可爲致勤行候右祈禱料金子五兩つゝ毎年三月朔日に差出可申候其節祈禱爲奉行と目付役一人寺社奉行一人上下にて晝夜相詰可申候尤忌服相改可申候寺社奉行忌服差合候はゝ目付役へ假役可申付候此末代々定法に定置候て社家へも可申渡置に付雖儉約中畢竟五穀成就豊年にて万民無事息災を得せしめん爲之事也万一領内凶作にて飢饉等にて及飢渴候時は儉約筋も破に及ひ候事故兼て左様無之に申付る事に候是迄共に五穀成就祈禱有之候得共定日も見得不申候間以來は右定日相心得可申候右にて年中相濟候

事の様心得申間敷候雨乞日和乞風祭等其時々の祈禱可致候且又在々百姓共も其村方に於て相應の出銅時々の祭可致旨向々役人共より兼て可申付候

一自分在國之節於祈禱所護摩を燒祈禱之節自分出座可申候三月廿一日御影供之節同様出座可申候年頭於城大般若轉讀之節同様出座可申候是等の内大躰之不快押て罷出候事に候ヶ様の儀國本の勤に候別て現在之祈禱第一に候必以略し申間敷義なり

一昔亂世には貴賤共に神佛を致信心に一七日二七日と斷食にて參籠の者間々有之曾て利賞も有し事なり治世には榮花安樂を専願ふ事なれは斷食は扨置毎月之參詣も致者少しに有之由相聞へ候時節故佛神も無感應別當社僧も及迷惑近代は秘佛の開帳抔と號し商賣物同様相成事故尚信心薄く不信心ゆへ利賞も有間敷事なり治世には人心疎末に相成佛神を頼にも不及事と心得我儘に云散すもの多し是を人非人と言人にて人てなしと言事なり左様の人諸事に付及困窮時は急に佛參社參思ひ立事なり是を無切時の神頼と言總て日本は神國なれは平生神佛可致信心事也物知顔にて鄙下すは以ての外法外の事にて結句無智文盲にも劣たる事なり

一城下幷領内中神社佛閣廢壞致し候はゝ無油斷造立修復いたし候様可申付候義なり

一中古有大名家中幷領内中變なる珍事計度々有之上下不心成万事落付事なく次第々々に領内衰微に及ふ其時主人も心付清水の觀音へ立願を掛けるは自分領内近年打續變成事計にて万民納事なく候觀音大士の御利賞にて靜に納候様守り給へと祈誓を懸候處七日に滿る丑三つの比夢相には家中幷領内の政事惡敷佛神納受無之變成る事有之也是を能治には先一心を正直にして政事正敷

時は寸善へ尺魔人事不能故變なく能可納なり全く疑事なかれ善哉々々と夢は覺たり夫より夢相の如く信心政事正しく一心を愼み候得は自然と領內ゆたかに納り目出度榮しと言事古書に見へたり

一當代の若者共銘々發明を以て古き事抔を鄙下して不用時節に成來り依て佛神信心も薄き故利賞もなき事也とみへたり神國にて神をひけすは法外の至りなり

大慧公

堅眞音神社　名草郡鳴神村

享保八卯年當社地へ石之寶殿御建立田畠の障りに不成樣に境內牓示御極め後殺生禁斷の被　仰出あり鳴神神主へ御預也

續風土記に曰く　鳴武香都知堅眞音三神國命を以て碑を立て遺跡を標し鳴神社の神主をして主祭せしむ

麻爲姫神社　名草郡津秦村

享保八卯年當社祠の前へ平石に社號を記し御建立是ははやの森と申少の畔の內にあり外は田畠に付森限りに境內牓示御極の後殺生禁斷被　仰出あり日前宮國造へ御預け也

續風土記に曰く　命ありて石を建て麻爲比賣神享保甲辰の九字を鐫むこれ延喜式載する處の麻爲比賣神社なり

靜火明神　名草郡 和田村 天霧山

和田村に靜火と申田地あり其畔の傍に靜火明神と申傳へたる小き社跡有りて所の者も何社の舊地とも爾々辨へさる樣成行有之により右舊跡絕へ不申樣にとの御事にて田地の妨に不成樣に享保八

卯年石碑御建立靜火社舊地と銘し天霧山へは右社御再建神躰として八角之鏡御寄付其外境内造作あり後境内牓示御極め殺生禁斷の制札建させられ竈山神主へ御預け被遊たり

明見寺　中の島村

名所圖會に曰く享保十四年長胤上人　國君の命を奉し中興し當所に堂宇を建立す　國君より本尊五大尊の靈像を御寄附祈願所に命せらる

一風土記に　一位老公より護法殿といふ三字の額を賜ふと

鳴神社　名草郡鳴神村

續風土記に曰く一村の氏神也慶長之比より社僧の如き者兩部習合の祭をなし來れるに享保年中官命ありて兩部を一洗して古典に復し本殿雜舍に至る迄悉く修造せられ神領五石を寄附し新に神職を命せらる是より日前國懸伊太祈曾神と相列りていと尊き御神なること再ひ世に知られたり

御供米五石　鳴神社

武内宿禰誕生の井

享保十五戌年紀州名艸郡安原莊松原村武内宿禰誕生の井を修繕建碑武内宿禰誕生の井と題せしめらる

誕生井建碑之記

紀伊國阿備柏原者往昔武内大臣誕生之地也事載在日本書記　景行帝卷焉大臣者人皇第八世　孝元天皇之後也父曰屋主男武雄心命母曰山下影媛是紀伊國造第六世紀直祖兎道彦之女也今時當國名艸

郡安原莊有柏原村當時曰松原村此地有古井之存焉土俗相傳此處即武内之舊宅而大臣降誕之時浴此井水世人不知其故享保十五年庚戌　國君源公歎遺址之絶乃命有司浚井砌石設石韓以避汚穢禁闌入因茲人僉汲之以爲浴兒之水蓋慕武内之壽考也嗚呼繼絶興廢　國君之志實可敬已　國融院天元年中國造第三十八世奉世無男子故子養行義讓國造職行義則武内二十一世之後而予家三十三世之祖也是故予亦聞之以喜焉因記事之始終以與以八幡宮祠官芝崎氏云

享保十六年辛亥二月

紀伊國造右京大夫從五位下紀伊朝臣俊範識

有人來曰紀伊國名草郡安原者　武内大臣之遺址即日本紀所載阿備柏原是也今竹林中存舊井者傳云大臣降誕日所浴之井也距之數百步而有八幡神祠其社司某兼護此井不闕祀奠乃井祭也國主賢公志在興廢爰蒇治井砌石以甃焉以韓焉禁穢物穢不祥出敬神之餘又收勿慕之澤廣及民庶皆得洗兒祈遐福者神之聽之萬壽所稠必無疆也或請以祐清在大臣之裔記此事附彼社司於呼日新之功豈待湯之盤乎今在井渫不停汙故喜此舉欽題一語以添贊祝云

享保辛亥冬十月

石清水祠官大僧都祐清識

紀之名艸郡安原地有　武内大臣誕浴水井之蹤頃就修甃治韓略加莊飾以致井祭之誠且渫衆物之穢可謂懃矣尋有由予之處於其裔遠來告而請一言以記興廢之嘉者遂應其需云

紀姓大臣生紀伊地餘浴井壽嬰兒照々

德澤愧遐裔聊薦蕪辭充永思

享保辛亥仲冬之望

石淸水別當權僧正久淸拜書

七　面　堂　砂山 正住寺取次支配

續風土記に曰く　有德大君痘を患給ふに眞母淨圓尊夫人七面明神を祈り給ひ神驗ありければ七面の像を刻みて湊の屋形の庭内に安置せらる享保二年七面社を此地に移し善應といふ僧を社守とせらる同五年　夫人より金を賜ひて堂幷に庵室を作らしめ神鏡一面を寄附せらる今に年々金若干を賜ふと

一御廣敷記錄に

享保十九年寅三月江戸　御城比丘尼妙致より金貳拾兩七面堂へ寄附致候由にて右之金子外山殿（御城女中なるべし）より江戸にて此御方老女へ被相渡他へ貸金に取計年々利銀を以右堂永々破損修復料に致度由妙致願之趣を被述候右之品に付御内々達御耳候處不致斷絶樣に如何樣共致作略候樣にと爰許御藥込頭共へ申せとの御事に付右之金子丹澤茂右衛門當四月江戸より罷歸候に付致持參爰元にて御用役中へ申談候上奉行中へ申遣し京金御藏預けに致置年利金取立右庵主へ相渡し申筈候事

享保十九年寅四月

一年々利金貳兩壹歩と銀八匁七分閏年之儀は金貳兩貳歩銀五匁八分京金御藏預りより來候事

圓如寺

増上寺黒本尊へ御寄附

光林寺御寄附

一嘉永六丑年より年六朱之利分に相成閏月共押平し金壹兩貳朱銀四匁五分つゝ御勝手方より受取七面堂へ相渡維新後元金御廣敷へ受取利金は同様同寺へ下付す

圓如寺 吹上妙見山 仙境山の麓 法華宗一致派

續風土記に曰く當寺は　深覺公眞母眞如院禪尼終焉の地也寺後禪尼の寶塔あり禪尼嘗て法華を信し一寺建立の志あり享保二十年禪尼捐館の后　大慧公其志を追成し給ひ那賀郡倉屋村に妙見山觀音寺といへる廢寺を此地に移して圓如寺と改められ寺領三十石を寄せらる又禪尼寄附する所の祠堂金あり之を官庫に納め年々息若干を賜ふ書院は即眞如院禪尼便座也といふ

紀伊國名所圖會に 享保二十三年報恩寺の末頭僧都日從上人に命して開山として御殿の地を其まゝに寺院となし給ふと云々

寺領　米三拾石　圓如寺

菩提心公

一延享年中芝増上寺黒本尊へ碼碯石釋迦如來文殊普賢二大士及十六羅漢像厨子入御寄附

増上寺記錄に延享二丑年より寛延二巳年迄之間 月日不詳 増上寺第四十三世走譽達察代に御寄附とあり

一寛延三庚午年七月江戸鮫ヶ橋林光寺へ御染筆の佛畫四幅を御寄附

御奉納目錄

奉納　淨土眞宗　林光寺

淨土眞宗開祖
一親鸞大聖人尊像　一幅
一聖德太子尊像　同
一七高僧尊像　同
一蓮如上人尊像　同
以上　右箱入
寛延三庚午年七月吉日
施主　紀伊宰相　宗將　〇（御黑印龍の字の如し）

願以此功德
平等施一切
同發菩提心
往生安樂國

右奉書半切に御親書

林光寺由緒書を閲するに同寺開基は葛西三郎淸永の男淸重と稱し親鸞上人の弟子となり法善と云ふ舊領に艸庵を結ひ本尊を上人に乞ひけれは上人自から其像を圖して與ふ然るに寛永三年菩提心公此本尊の靈告度々御感得に依て殿内に御請招御禮拜夫より佛法の大道理御發得當來出離解脱は偏に此本尊の加被力ならんことを謝し給はんとて四幅の影像を圖畵あらせられて御寄

贈ありしと云々
一本尊靈告奇瑞の事寺僧口碑に傳ふる由は　公嘗て江戸にて御眼疾を惱まさせられて御醫藥爾々のしるしもなき所或夜阿彌陀如來御枕邊に出現我を信し給はゝ御平癒あるへしと告け給ふと御夢見被遊しより四つ谷赤坂青山等近邊の寺々隈なく取しらへ御夢に適ふ處之尊像を索めさせ給ひこゝかしこの影像を借り來て御覽に供すれ共是はと思召すもの絶へてなし然るに風と鮫ヶ橋なる林光寺草庵の本尊を御覽に入れたるに正しく御夢御感得之尊像に寸分之差なく不思議に思召御隨喜不斜深く御信仰ましまし〳〵けるに果して御平癒遊されけり何かな御報ひを可賜望之趣申上よとの御沙汰ありしに固より草庵の事とて親鸞蓮如兩上人七高僧の幅なし宗規に於て此幅なければ一寺の躰をなす能はす願くは是等之御寄附を仰き本山に請ひて一寺たるを得候はんには幸ひ之に過きすと願ひ奉りしに速に該四幅を御染筆賜はりし然るに蓮如上人を朱衣に被遊し故當宗に於ては親鸞上人を初黑衣に限り候へ嚴な御寄附の事なれは本山へ稟請允許を經されは草庵に揭けかたし仰き願くは黑衣に替へ給はらん由を請ひ奉りしに委細本山へ御使者を以仰入らるへし不苦との御沙汰なり依て林光寺より有躰を本山へ具申せしに重き御由緒の御寄附特別の義也と御染筆の幅每へ本願寺法如上人裏書捺印して特許す是に於て林光寺赤衣の眞影と稱して眞宗門中無類の名物となり天下數万の宗徒誰一人知らさるものなしと云々信林光寺に到り該四幅を拜するに絹地金泥極彩色精妙の御密畫高雅驚くへく名工殆と及ふへからす詳なるは世記に載する如し

一寶曆七丑年十月八日諸公子方向後日蓮守御制禁被　仰出
上野覺王院御使を以左之通
上野日光御門跡幷隨自意院樣へ被　仰上御口上書は　殿樣御直筆に被遊
但此御口上書直に日門樣御方々御留置被遊
一只今迄女儀共幷幼年之者共には日蓮宗も有之候得共自今は女儀共其外幼年之者等にても總て不殘本家之宗旨天台宗に相成申候勿論永々少も違變無御座樣に申付置可申候右之段　日門樣幷隨自意院樣へ宜可被申上候賴み入存候以上
寶曆七巳年十月八日　紀伊宰相
徳川常陸介
東叡山
執當衆
一女儀共緣付候以後先き之家之宗旨に相成候類之事
一男子共他家へ養子等に相成其家本之宗旨に相成候儀等之事
一松平左京大夫家之事
右等之儀は格別其外は本文之通男女共違變無御座候樣に夫々へ申付置可申候右之段も　日門樣隨自意院樣へ宜可被申上候
右之通被仰上候處同月十一日　日門樣　隨自意院樣より爲御答覺王院御使にて左之通被　仰進候

一去る八日覺王院を以て被　仰上候趣一々御承知被遊被爲入御念候御儀御滿足被遊候被　仰上候通總して不殘樣共天台御宗旨に御成被成候儀後々迄も永々違變無御座候樣に最於上野も御記錄等にも御記させ被遊置候此段宜申上候樣にとの御口上也

常陸介樣へも右御同斷

一右之通に付自今永々後々迄も日蓮宗固く相止候事

按に　此時江戸日蓮宗寺院に御安置の靈牌なも悉く上野眞如院へ移し給へり仙壽院に御安置の深入院殿（孝順院殿奥方）靈牌も此時上野護國院へ御遷座也則眞如院第十世權僧正覺深の傳に記する處左の如し

寶曆七年丁丑紀伊侯改宗移祠先靈牌于當院云々

夫れ　當公は世子の御時深く感し給ふ處ありしにや是年八月　大慧公御遺領御繼承　公の御世となり首に此制を發せられ爾來　公家の諸公子方日蓮宗寺院へ御葬儀を停止唯本行院殿容光院殿（共に榮光院公子に御子）且御流產の御方は仙壽院へ御葬送ありたれ共是れ御資格別ありての事ならん明治后に至り再ひ本門寺を塋域に定められしは上野戰亂の後眞如院は廢滅護國院は餘地なく他に適當の塋域なきを以て事實止むを得させられさるに依るもの也

一右日蓮宗御禁止の事由は　當公には夙に佛理御發得あらせられしか嘗て御不豫の時（或は御藤中の君共云）密かに內侍の妹尾正悅に內命甲州（一本久）遠寺へ登山御快全の御祈禱の事を傳へしめ給ふに時の院主曰く領掌は仕りたれ共如何に祈願丹精を抽するも御命數の事は保しかたし万一の御時には當院へ御葬儀の事切に願ひ奉ると聞きけるに正悅歸りて斯の爲躰を復命しけれは扨こそ痛く激怒に觸れ遂に

挫日蓮を御自著本年に至りて日蓮宗停止なりたるよし傳へり不法不禮を極むるも程こそあれ實に言語同斷の次第とやいはん

按に　妹尾正悦は御部屋方小僧役にて御月代御用御庭方をも兼務常に伺公御手許の御内命を奉す此時俸米十二石の處寶暦七年八月廿九日御針醫並に昇進二十石に御加増を賜ふ後宇平次毎則と稱し安永四年に沒す今の妹尾彬は其後也(久)遠寺の件は密々子孫にいひ傳ふるよし

挫日蓮

挫日蓮序　　三略曰横者挫之

子曰惡紫之奪朱也惡鄭聲之亂雅樂也惡利口之覆邦家者誠哉この言は是に似たる非正に似たる邪辨せすんは有へからす今此書を著逆徒を責挫日蓮と題すと云爾

寛延四年辛未殿春念八日書于東都城西養勇軒

挫日蓮

一抑惡心をいたき天下にあたすへき邪法と謂は日蓮徒にあり彼外道か王舍城抄に云日蓮をそしる法師原か日本國を祈らは彌此國亡へし結句責の重からん時上一人より下萬民までもとゝりのわかつやつことなり、ほそをくうためしあるへし後生はさてをきぬ今生に法華の敵となりし人をは梵天帝釋日月四天罸し給いて皆人にみこりさせ給へと申つけて候云々又撰時抄阿佛房抄幷に諫曉八幡抄等にも　天子國王を咒咀惡口せり然を中正論に惡遠伍子胥の古事をひきて　帝王將軍を奉諫なり咒咀調伏するにはあらすと記せりこれ大なるいつはりなり古より義臣の諫め釋氏の敎化にも天子將軍をほろほし給へ國家も亂れよと祈願することと今古に二人と無き奸曲邪佞の大惡人なり今

たとへを以ていはん仁義の賢臣あつて　君を諫るにその主君諫をもちいたまはされはとていきとをりを發し其君を弑逆せはこれ忠臣とせんや惡人とせんや如何日蓮已か邪法を用給はさる　天子將軍を早滅亡し給へと願しもこれ諫とせんや朝敵とせんや有道の君子日蓮黨か邪書を一覽あつて不日に彼邪宗門を追却し給へ

一我朝は神國として　天子より以て下民に至るまで　伊勢太神宮及六十余州の神々を誰か尊信せさらんやしかるに日蓮か間註抄諫曉八幡抄等に　伊勢太神宮八幡其外日本國の諸社は皆惡鬼邪神也と普く說謗せり我朝に生れ神恩をかうむる人々いかて惡まさらんや

一平城天皇より已來歷代の　帝王を大惡無道の大罪人也と報恩抄本尊門答抄諫曉八幡抄等に分明に記せり又弘法慈覺智證二大師より已後の國王等を悉く無間地獄にをち給へりと處々に記せり中正論に爾前無得道の法門治定せは八宗十宗あに邪法にあらさらんやと記し又同書に縱令ひ　天子諸侯たりとも邪師を歸依し邪法を信受し給はゝ豈に邪人にあらさらんや（此邪師邪法とは八宗十宗をさすなれは今の世の人かきせん共に悉邪人なるへきや如何々々）又日蓮鈔內の書に我宗にあらさる人々は貴賤悉く大罪人也一人なりとも命をとりたるか至極の大善こんなりと數かしよに記又法蓮抄云禪宗念佛宗等の法師原か頸身を切て鎌倉の由比の濱に捨すんは國まさに亡ふへしと云々又撰時抄云一切の念佛者禪僧等か寺塔をは急燒はらひて彼等か頸を由井のはまにてきらすは日本國必すほろふへし云々

高橋抄秋元抄等に同文あり中興抄種々振舞書等に建長寺壽福寺極樂寺長樂寺大佛殿等を燒拂へし道隆大覺禪師良觀忍性律師等を頸をはねよと文（諸國に火災の絕さるはこの教あるか故なり悉く下に記せん）

一當國法雲山の日如より日馨比丘尼にをくる書に我宗にあらさる　天子將軍は畜類禽獸にをとりうやまうにたらす人倫とおもふへからすと上卷に記し又下卷に他宗の人々を上下と無一人なり共命をとりくるかよし他宗の寺院及在家を燒はらいたるか題目唱るよりも大善根なりと書せり如何そ外道朝敵にあらさらんや

日如より日馨尼になくれる書は寛保二年壬戌の秋八月一覽せり其外謀計たひ〳〵にて彼日馨惡比丘は余か門内に一足も不入

五常を破亂國を願凶徒惡てもなをあまりあり古より　帝王將軍日蓮邪宗に成たまう事をきかすしかれは汝か徒にてはうやまわさるか如何畜類すら恩をしる天下泰平の　君恩を忘寺領を貪愚人をまとはすまことに我朝の天主教なり古島ばら天草大村等においてをこるところの者はみなをもては日蓮宗なり王いをかろんし徒黨をなす事今に不受不施等は御せい禁にあらすや邪法のゆゑに禁しられて不惜身命といふこと大なるあやまりなり施物につきて大我まんを生すること世わたるための貪心なりしかるを中正論に世間なを一殺多生の道理あり況や佛法に於て何條か軌則なからさらんや謗法の法師を殺諸人の墮獄を濟ふは一殺多生の理に順せり又同書に國家安全のために邪見の法師等を殺害せんは殺罪なきのみにあらす逾善利を護なりあにこれを惡心無慈悲と云んや凡そ爾前無得道の道理決定して諸宗邪法に治定せはかやうの小節は論するに及はす云々これらの記文を一々きんみあつて日蓮黨の惡心をしるへし我宗にあらさる上下の人々を邪人惡人と惡口し一殺多生とのゝしることいかなる外道そや日蓮徒にあらさる人々は　天子將軍を奉初諸侯大夫其以下までもいく万人といふかきり量へからすその人々にあたせんと惡義を談しなから殺罪なきのみに

あらす逸善利を獲なりとのゝしる事大惡邪心の朝敵なることを日蓮黨の贋僧らを一々殺害せはこれこそ一殺多生の理に順し殺罪なきのみにあらす逸善利を獲なり傳聞す天主教のをしえには磔梟首にかゝるを以て成佛なりと云てよろこふとか日蓮外道か教に遠島又は斬罪等にあふを以法華の行者なりと教て愚俗をまとわせり道源德母抄に我祖の在世より已來中古近代に至るまて堅此重禁を持か故に或は流罪を蒙他國遠島に吟ひ深く謗法罪を恐か故に自嚴命に背き遠國謫居に困む此等の罪過は芥子許も世間不義の罪にあらす已上嚴命にしたかはす遠島斬罪にあふを以たい一とよろこふ者天主教同類なること明なり伴天蓮日蓮同一派か

一王舍城抄云燒亡事委く承て候事悅入て候又つきに是は國王已ニ燒ぬ知ぬ日本國の果報の盡るしるし也已上王城燒るをよろこひぬ日本國の果報盡しるし也と云ていさみすゝむ日蓮朝敵にまきれなし國々にて火災盜賊たえさるは日蓮徒の説法に如是き惡事を敎ゆるか故なり彼徒の邪説惡談不止うちは火災盜賊絶へからす一刻も早く彼徒を滅無せんにはしかす

一日蓮はもと至極下賤の者の子なれは土民たり共歸依すへき者にあらす外道か佐渡書云日蓮今生には貧窮下賤の者と生旃陀羅の家より出たり又うたかうところなく穢多の子なる事をしかるを金山鈔に我祖の世姓は三國氏父は遠州の刺史貫名の重實子重忠母は淸原氏也文これ大なるつくりことなり東鑑保元平治等にも遠州の大守に貫名となのれる者一人も無しあとかたもなき僞なり日題か閑邪陳善記にも日蓮か旃陀羅の子なることは閉口してあらそわす可笑秋元抄云身延四山四河中結庵乃至自死鹿皮衣とし文けだものゝ皮をはく日蓮穢多の子のしるしなりしかるに撰時抄云されは

日蓮は　當帝の父母乃至漢土月支にも一閻浮提の内にも肩ならふる者あるへからす又云日蓮は日本國の棟梁なり文これもつたい無き惡口なり日本の棟梁なとゝ云て愚人をたまし朝敵の大將とならん志なるへし穢多の子にてかゝるそう言を吐く　天子將軍をかろしめ奉こと言語につくしかたき大惡人なり

一代々の　天子將軍外道を惡せ給いて追罸度々に及へり

延慶年中依院宣天下日蓮黨被追却事

人王九十一代　伏見院の御宇正應永仁の比より　公家武家一同の評判にて日蓮黨は天下國家の大敵なるか故に日本國中禁制すへき旨を度々下知し給へりといへとも彼魔黨等興盛して制伏し難きか故に九十四代　華園院の御宇延慶年中に至て專ら天下に於て日蓮黨を追却すへき由の院宣を下され畢ぬ其文に云く

日蓮黨追却院宣案

被院宣曰近日有一類之僧徒爲諸宗之讐敵禁誡之趣嚴制先畢而無憚憲章不恐　勅命乍居於洛陽結黨於道場引率弟子同朋妄稱法華持者號之自宗飽破佛法天台之所説月氏之敎相豈如斯乎雖似展轉隨喜之功德忽犯誹謗正法之罪障以外道之行儀偏表邪惡案本朝之比附爭遁科坐爲國爲法不可不禁宜仰廳衙追却京都旨　院宣如斯仍執達如件

延慶三年三月八日　　權中納言定資　奉

謹上　中御門中納言別當殿

同別當宣

法華宗門事　院宣如此任被仰下之旨彼一類僧徒早可被追却洛陽之由別當殿所仰候也仍執達如件

延慶三年三月十一日　前土佐守榮業　奉

謹上　高倉博士大夫判官殿　已上是に依て洛中洛外悉く日蓮黨を追放し畢ぬ此事は　公家の日記にしるすのみに非す法華弘通抄の中にも記せり

天文年中被下勅宣追罰日蓮凶徒事

一百六代　後奈良院　御宇日蓮徒黨追罰の　勅宣を下され猶又　禁裏に於て百首の和歌を御興行ありて日吉の社へ納めらるる卷頭に當今御製なり其和歌別紙にあり其奥書に云く天文五年丙申十月二十六日就日蓮凶徒追罰爲日吉社法樂於禁裏百首和歌也于時樹下當官祝部成延宿禰令參内依天氣則大宮内陣奉納之畢吾神納受給故歟新神前白蛇影現云々誠奇特之嘉瑞天下泰平社頭繁昌之基者也焉已上是彼徒黨滅したきか故に　宸襟を惱ましかやうに　御祈念ありつるなり是に依て其比叛逆の日蓮黨滅亡せり又大永四年七月廿三日にも悉く日徒を追放あり天正三年乙亥十月廿五日被下　勅宣以日徒號宗外なり

明暦年中　勅命以日蓮黨名未施行號宗外事

一明暦元年乙未京洛本國寺に支提妙塔を建立し其供養を遂んとす時の住持の親類ら執持塔供養の法事に公家の著座を望めりされとも仙洞　勅許なき故に再三此事を懇望せり爾時の　叡慮の趣きは日本佛法の十宗は已に施行の法也日蓮義は未施行なれは宗の内にいらす先例なきことを何そ望や

とて終に　勅許なし實に是れ明君の賢勅なり以て永代の軌模とすへし日蓮義は未施行にして宗外なること決定也少も異論することなかれ其外万治三年子の十月幷に延寶二年寅五月にも日徒斬罪度々なり古へよりの記錄等如此

一古名將勇士彼惡徒を惡すといふことなし　後柏原院の御宇文龜元年辛酉五月廿四日細川左京大夫政元の下知に依て藥師寺備後守宿所において宗論あり初番は淨土宗の京本覺寺騰蓮社と日蓮義本國寺の住僧正覺院と二番に淨土宗の妙光院と日蓮義賢大房と二番の問合あり共に日蓮義まけて衣袈裟を剝れぬ　代々の記錄及七十二卷〆六十丁和漢三才圖繪等に出

天正七年己卯五月廿七日織田信長の命に依て江州安土に於て淨土宗と對論之時淨家の大德貞安上人に難破せられ日珖初め邪宗の贋僧等悉く閉口して張本皆刑罰せられ剩へ彼の一派を破滅せらるへき旨を信長の下知し給へる間彼徒黨强て詫言を申し漸く誓狀を捧てゆるされたり其誓紙は今正く京都大雲院にあり其文に曰く

敬白起請文事

一今度於江州淨嚴院淨土宗與宗論仕り當宗負申事

一向後對他宗一切不可致法難事

一法華一分之儀可被召置之旨忝奉存候事

右條々僞於在之者日本國中大小神儀幷に大乘妙典殊者三十番神可罷蒙御罰者也仍起請文如件

天正七年五月二十七日

妙覺寺代日諦　判
頂妙寺前住日珖　判
久遠院代日雄　判
本國寺代日佐　判
要法寺代日周　判
妙滿寺代日淳　判
本能寺代日幸　判
立本寺代日仙　判
妙顯寺代日体　判
妙蓮寺代日衆　判
本隆寺代日傳　判
本禪寺代日衛　判
妙傳寺代日請　判

菅屋九右門殿
堀　久太郎殿
長谷川御竹殿

又一通有狀

今度當宗被立置之儀忝存候就其向後他宗と法難之儀聊以異儀不可有御座候若猶自今以後不屆之儀於申出者以此一行之旨當宗悉可被成御成敗候其時毛頭御恨不可申上候此旨可預御披露候恐々謹言

五月二十七日

妙覺寺日諦 判
頂妙寺前住日珖 判
久遠寺代日雄 判

菅屋九右衞門殿
堀久太郎殿 後に藤五郎と云
長谷川御竹殿

平信長の奉書

今度淨土宗與法華宗宗論之儀申付下知相果候樣體定而可被聞及候就其法華宗誓紙知恩院相觸候猶矢部善七針阿彌可申之由也

五月二十八日

信長 判

村井長門守殿 已上

抑此起りは建部紹智大脇傳助か所爲なりしか剩へ無事のあつかひをも承引せす其罪あさからさるとて二人共に頸を刎らる不傳も此度に限らす常々つくり賢人仕りたる佞僧なりとてひつはり切にそし給ひける小氣味よき事共也其比誰か作せしそや

日珖かみけん眞實うちわられ四十餘年の耻をかきけり
又同年七月八日甲州大遠寺にて淨土宗と日蓮徒と問答ありこの時も日黨悉まけて數十人刑罰に行はれし又慶長十三年戊申十一月十五日　東照神君の嚴命に依て武州御城にて淨土宗と日蓮黨と宗論あり日徒の常樂院日經及弟子共廓山上人の一言にいゝつめられ啞の如く閉口して宗論に負るのみならす日經初師弟六人京江戸の町々を引まわされ翌年己酉二月廿日不殘耳鼻をそかれしなり
日蓮か惡言の出しよ　家康公より御たつねあつて身延池上その外彼徒の寺々閉口せり
又元祿年中當國谷中感應寺碑文谷法華寺四谷自證寺千駄ヶ谷寂光寺等遠島刑罰又は死罪に行れ寺院は天台宗に改宗せり其後享保十四酉の八月同國音羽町八丁目に日妙と云惡僧邪宗をすゝめ磔にかゝれり
一享保四己亥年日徒の惡僧邪道ををしへ三長派と號して程もなく彼徒黨生田五郎兵衞等のこらす斬罪磔等におこなはれことことく滅亡せり
又元文三戊午年下總の國一の袋村にて邪法ひろめ彼の日徒僧俗三千人ほと悉く遠島追放等になれり日蓮黨の天下にあたとなること如是かれ天主敎のしるしなりしかるに外道らか口くせに織田信長我宗を罸し給か故に程なく本能寺にて明智日向守か爲に殺されたりとのゝしれり是大なる邪説なりしからは　神君台淨の兩宗を御歸依あつて常樂院か如き外道を刑罸し給へともいよ〳〵天下太平に治り今日に至まて四海豐なるは如何々々難有神恩ならすや汝らか徒にてはさそ殘念に思ふらんもつたいなき國賊に非すや疑ふことなき天主敎なり

一安土論に日徒の負たるを金山鈔愍喩繫珠錄邪正問答書なとに日蓮黨勝たりと記し太閤秀吉前の誓狀を取反して京本國寺に賜ると大なるいつわりを記しおけり今このいつわりを糺は彼徒の日題か閑邪陳善記及斷邪顯正論等に安土論に蓮黨か負たることは少もあらそはす大にかなしめり是一又安土論にまけしより以來今に至まて京都本國寺より大雲院（貞安上人の寺）の緣の板をはること代々のおきてなり秀吉の代に前の起請文とりかへし給はるほとならは如何そ此事止まさらん今の代まておきてのかはらさる是負たる證據也いわんや本國寺の靈寶目錄にも見えす僞なることあきらかなり是二又元文五庚申の年大雲院開帳之時所司代へ願ひ安土論の時はきさるところの日徒の袈裟衣退狀出しをき諸人に見せしむ退狀とりかゑしたると云は大なるつくりことなり是三又彼の謀書に貞安上人との問答に頂妙寺日珖妙覺寺の常光院に人を出す然るに對論の時二番に書たる常光院相手になりて一番に書たる日珖相手にならさるは如何扨逼塞の處に至て常光院見へすして日珖はかりへのゆるし狀あり前田德善院玄以の奉書のをもむきを見るに全く相手と見へたり勿論仰の狀も日珖か寺に在と云法問に負たる常光院は沙汰なしにして座にはかり列りたる日珖わけて逼塞しあまつさへ寺を退き田舍へ逼塞したること何とも合點ゆかぬ事ともなり是四顯正論には日珖問答してまけたるをもむきをたしかに記せるに金山繫珠邪正等の書には常光院問答しあまつさへ勝たるなとゝ僞を云日題日存日達淵海詞らん〳〵すること謀書のしるしなり是五又金山には秀吉退狀を本國寺へ賜はると書し繫珠邪正の兩書には退狀を頂妙寺へ賜はると記す同し日徒のうちにても口々に相違すること天地雲泥なりあたかも亂心者か狐附のもの云か如し是皆僞なるか故也是六略して六ケ條評

論する事如此委く記するに不及日徒にも人心あらは早々彼謀書を滅板するか書なをすかせよ惡黨らいつはりのあらわれしことは積惡の天罰なり慶長十三年十一月御城にて宗論に日徒のまけたることを金叢邪の三書に增上寺の廓山上人土宗の檀那を頼て出仕已前に常樂院を棒にて半死半生に打擲せり天下の武士自他宗共に能知れることなり何ぞ常樂院閉口といはんや其時の人々の口すさみ法問にてはなく棒問なりと非して曰　東照大權現は古今無雙の明君にして賢知英才他に秀させ給ふ事諸人の知ところ也然るに常樂院師弟を半死半生に打擲し御前へ出すならは　明知の　神君何ぞ察し給はさらんやいはんや英雄の老中諸奉行默することと有らんや其上謀書に天下の武士自他宗共能知れりと記せり老中諸奉行は天下の武士の外なりや如何天下の武士の能知れる程の事ならは仁義の近臣等高聞に達せさることあるへきやよし又高聞に達せすとても半生に打擲にあいたる日經顔色等を一見せはいかなる愚人もさとるへしまして深智の名將察し給はさることあらんや己れか邪法をひろめん爲にかゝる謀書をたくみて　家康公　秀吉公を奉初大名方の先祖まて愚將愚臣とすることもつたいなき外道也日徒の内に人心有は一人もなし悉く人面獸心也過則勿憚改とこれ諸人の則とする處也彼徒にても國恩をしる人は眞道眞陽連昇等の如し摠て日蓮黨救に君忠を盡し父母に至孝に朋友に信あつて五常を守る人をは大惡人なりといゝ不忠不孝無慈悲大欲不道不義の人にても題目唱ふなれは至極の大善人なりとすゝめて愚人を惑はすか故に無智の男女をして惡心を發し正直なる人も邪人となるまことに朝敵國敵天主教の本人也古より日徒の惡心邪欲謀計非道數百度に滿てり寛延二年巳の三月余か出板せる新著聞集に粗記しをけり熟覽あつて蓮黨の不仁惡

心をさとるへし

一邪徒宗かうを法華と名のれとも是又大なるいつわりなり法華宗とは天台宗のことなりしかるをいつとなしに盗とつて己が宗かうとすることと大盜賊なり

一阿佛房抄云父母を殺す人は其肉身を破れとも父母を後生に無間地獄にはおとさす念佛は父母を無間地獄におとす法也文邪見の甚きことと如是諸人に不孝を第一にすゝめて念佛を無理に惡口す五刑之屬三千而辜莫大於不孝まことに冠五刑大罪人は日蓮也

一身延山久遠寺に根本堂と名付て天狗堂あり（方三間天狗名を日妙太郎妙二郎、）これ魔法をおこなつて天下國家をくつかへさんとの欠字なり朝敵にきわまれるせうこなり

一一谷入道書云　上一人より下萬民に至まて日本國皆こぞりて無一人三逆罪の者也間註書云日本國には日蓮一人計こそ世間出世正直の者にて候へと文我慢のかたき事大山なをひくし天子將軍の御政道をもときまけたるを以て僞て勝たるといゝ或は棒間なりとて惡口雜言し名君をは無理非法の暗君とし近臣奉行等を暴逆臣とす誠に天下大敵逆臣也國恩をいたゝく人誰か是を憤らさらんまして數代の臣いかてか是をよそに見ん此上いかなる事をかたくみ出して愚人をすゝめ天下國家に大なるあだとならん事眼前にあり誠に日本の地に一日もおくましき者は日蓮黨なり前にも記す如く代々の　帝王源家の良將をも大罪人なとゝ惡口雜言し國家をみたし武門にまて害するか故に此事をゑす一々に難破して安民治國のたよりにそのうるのみ神田白龍子か武門劇談に日徒の僧は徒黨を結んて天下に怨すへき邪宗なり已上　此語宜なる哉

挫日蓮終

跋

此書既成日徒の暴悪を略記すること如此悉く議せはこゝにつくすへからす以一察万豈勸善懲悪の一助にあらさらんや

高野寺へ御寄附

一當公高野山諸寺院へ左の如く御寄附被遊たり

佛像　櫻池院へ
物品數點　正學院へ
佛畫及御靈牌　無量壽院へ
物品　蓮金院へ
同　寶性院へ
佛畫（寶暦年間御盃號を當寺の院號に賜り以來菩提心院と稱す御在世中より御盃號御撰定ありしならん）　親王院へ
物品　青巖寺へ
佛像　金光院へ
同及物品　清淨心院へ
佛畫　如意輪寺へ
佛像　善集院へ

南紀徳川史巻之百五十五

臣　堀内信編

社寺制第五

觀自在公

徳本行者御引見

寛政十二丑年僧徳本行者に御生母清信尼公の御遺殿を賜ひ有田郡須ヶ谷の山に移させられ其御菩提を修し兼て國内化益を命し給ふ

文化九年五月再ひ徳本行者を召し那賀郡和佐山に庵室を賜ひ國内を化益せしめらる此時行者疾痰を患ふ依て侍醫薬餌を給ひ御慰問懇篤御崇敬至れり同月廿七日には强て御薬種畑の御隱殿へ御招待師弟の禮節をもて御受戒十念を受給ふ事七度一枚起請文の講義をも御聽聞士女皆合掌すへきの直命ありて送迎の御禮儀は元より御饗具等都て清淨なるへしとて一切新調を命せられ御尊信啻ならさりしと其後も度々召させられしと也事は世記及ひ高僧傳に詳なり

按に公には御癇癖にて荒々敷御振舞もありしか御孝心深くましく寛政十二年二月御生母清信院様かくれさせ給ひしかは行者は名僧高徳の譽れ高きを以て御母公の御追福を思召遂に御自ら無二に御歸依御随喜不斜是よりは次第に御心も和かせ給ひて上下幸福を蒙りしといふ

高野山御登山

某年〔年號欠〕九月十三日高野山へ御登山大徳院へ被爲入御裝束御改御靈屋等御拜夫より　權現様御拜

（頭注）徳本行者御引見

（頭注）高野山御登山

與山寺へ御入直に青巖寺へ御入法印へ御對顔暫く御咄有之同寺　權現樣菩提心院樣等の御位牌御拜被遊金堂御影堂大塔へ御詣安立院に鎭座の熊手八幡宮御參拜淸淨心院廿日大師へ御參詣奥院御廟　南龍院樣御初御代々御石塔御拜夫より金光院へ御入近年　淸信院樣より御建立の御位牌御拜南院へ御入不動尊幷御建立の御位牌へ御拜御膳被召上七つ時過御立嶽幷辨才天御參にて御下山神谷大黒屋へ夜五つ時過御泊十四日又々御登山御參詣广庇村御泊被遊（右九月十九日 某氏筆記）

金光院へ　當公より御寄附品あり　淸信尼公御位牌御安置に付てなるへし

西福寺（海部郡加太村 無量山）　禪宗黄檗派

續風土記に曰く境内辨財天社は安永四年　官より新に造立せらるゝ所なり其初山上に存す辨財天社當寺の支配なりしに村中迎之坊と爭訟の事あり　官命ありて山上の社は迎之坊の支配を許し當寺には新に此地を與へ給ひ且祠堂金二百兩を賜ひて社領となさしむ

右祠堂金の事明治の調書に見ゑす事由詳ならす

延命院（岡町領 遍照山普賢寺）　眞言宗新義

寺說に曰く文化二年に至り大和長谷寺の僧正來て此寺に宿す嘗て　觀自在公に謁す　公上人に汝何寺に宿するやと上人延命院に宿する由答へ奉り同院の貧寺小字の現況を申上たるに然らは寄進し遣すへしとありて同年直ちに本堂を除き書院門樓庫裏等悉皆御建立を賜りたり其結構知るへし故に　觀自在公の靈牌を安置す

此說續風土記紀州名所圖會にも記する處なし尙調ふへし

高　松　寺　吹上高松鶴林山　禪宗曹洞派

當寺は左之御遺骸御埋葬地とす

如電院殿　觀自在公御子　明和四丁亥年正月五日御早世

如幻院殿　同　十之助君　寬政八丙辰年四月廿二日

靑樹院殿　同　御男子　同十戊午年九月廿五日御流產

幻壽院殿　同　同　同十一己未年十一月廿九日同

春臺院殿　同　御由緖方　同十二庚申年正月十一日

右御五方明治八年七月二十日に至り報恩寺へ御改葬

一當寺保存之舊記中に左之書面あり葢其筋より寺社奉行へ之訓令書なるへし

先年　鶴樹院樣思召を以て高松寺境內へ勢州住にて御廣敷へ御出入致し候智鏡と申比丘尼笆印塔致建立有之處此度御內々　御沙汰の品有之右塔御廣敷持にいたし是迄般若經等執行致し來り候通り爲取計候樣且是迄右塔建立有之事各方へ不申進有之處此度右塔致建立有之且つ年々大般若經執行之儀も各方へ心得させ置候樣存候事

七月二日

西濱御殿より御寄附品

大般若經六百卷　天保十一年御寄附

般若理趣分經一卷　同　斷

水晶の置物水引打敷等五種之品々　同　斷

地藏尊像　重倫卿御菩提の爲め御寄附

梵字般若心經　同　斷　紺紙金泥

寶塔之圖

高さ二丈五寸

願主伊勢松坂鍛冶町

智鏡尼　さあり

一鶴樹院様思召を以高松寺へ金百五十兩御寄附被遊右金子封所吉右衛門へ預け置年々同寺へ被差遣候事　御廣敷方記錄

此利足一ヶ年金九兩　月五朱　閏月有之年は金九兩三分

內

二兩　每年五月十日大般若執行爲入用寺へ御下け

二兩一分　同日　舜恭院様御菩提御水施餓鬼御供養料

此銀二枚代 米二俵

二兩一步　同日　鶴樹院様御菩提　右同斷

此銀二枚代 米二俵

一步　御寶塔御場所御掃除料
二兩一步　右塔御修覆其外臨時御入用當
右明治七年六月元金渡し切之由
一明治二年年五月以來年々左之通御附屆相成筈相定ㇾ
如電院樣　御佛供養　金百疋御備
青樹院樣　同　同
幻壽院樣　同　同
春臺院樣　同　同

一觀自在公には御氣猛々しくはおはせしかと佛道にはいと御志し厚く長保寺各尊靈御追福として特旨を以尠からさる祠堂金を御寄附殊に　淸信御生母　慈讓の方御部屋　兩夫人庶公子の御冥福を修し給ふに慨篤を盡させられ獨御國內のみならす地方有名の大寺勝刹へは其尊牌を安置物品を御寄贈大金の祠堂料を納め給ふもの多し左に之を揭く慈讓夫人御菩提の爲には頗る尊慮もおはせし由抔いひ傳へたり

當麻寺

文化八未年五月左之御靈前へ永代御祠堂金御寄附元金同九申年三月二日下付竹之坊奥院不動院護念院西南院念佛院連署請書を出す
一生院殿　恭岳院殿

知幻院殿　空如院殿
心蓮院殿　普香院殿
容顏院殿　幼雲院殿
御祠堂金五十兩つゝ　合金四百兩

一文化九申年三月二日右御八方へ是迄年々七月に付白銀一枚宛慈讓院樣御寶塔前へ七月に付銀二枚つゝ御供の處今般祠堂金に御改め元金下附右六ヶ院より連署請書出すいつれも御廣敷取扱也
一生院殿御初御八方へ　永年盆中御供養　御祠堂銀廿五枚つゝ
慈讓院殿へ　同同　同　五十枚
合白銀二百五十枚

黃檗山萬福寺

一文化十一戌年二月　觀自在公より御内々にて　慈讓院樣御所持の千手尊童男尊幷經卷珠數等當寺へ御奉納永代祠堂金として金百七十兩御寄附

忉利天上寺　攝州摩耶山

一文化十一戌年十二月　觀自在公より御内々　慈讓院樣御在世中御所持之地藏尊畫像掛地一幅香爐一具花瓶一瓶御寄附永世御祠堂金五十兩御納附

高天寺

一文化十三子年十月　觀自在公より御内々　慈讓院樣靈牌を當寺に御納め永代御祠堂金五拾兩御

道明寺三之室

多武峯慈門院

寂光院慈讓夫人寶塔

寄附

一 年號欠 八月三日　觀自在公より御内々當寺へ般若心經永代資糧として金五十兩御寄附

道明寺三之室

一 文政七申年十二月廿六日　觀自在公より御内々當院内佛御安置の　淸心院殿　心蓮院殿　慈讓院殿　御牌前へ永代御祠堂金百兩

多武峯慈門院　和州

右之通御寄附

寂光院慈讓夫人寶塔之事

按に　慈讓夫人は　觀自在公の御愛妾にして一條大政所君（芳壽院殿）の御生母也 文化二丑年十一月十一日御卒去の際長保寺へ御埋葬ありと傳へいふ 御卒去の當時海部郡松江村寂光院にて御荼毘此時　公御親臨最終迄御監督あらせられて長保寺へ御本葬御分骨をは所々の名刹へ御分付厚く御冥福を御弔祠あらせられたりと蓋し澄淸夫人の御關係もありし故にやと聞へたりされは寂光院にも尊嚴なる御寶塔ありて御靈牌をも安置す然るに明治廿五年の比寂光院より貧困に迫り堂塔破壞寶塔の周垣等修補の資なく願くは修繕を給へとの歎願し止まず依て(信)明治廿六年四月和歌山へ祗役の次檢閲すへしとの命を拜し同月十四日見分の處本堂は取毀ちて跡方もなく御寶塔の周垣土塀も破却し空々たる禿丘に唯寶塔一基の露立するを見るのみにて荒廢名狀すへからす最不敬を極めたり爰に於て法類雲蓋院乃至檀下總代等に糺すに全く當住職不如法にして亂行を恣にし堂を毀ち垣を破り樹を伐り其土石林材を販賣す如何に忠告戒責するも毫も用ひす殆狂人の如しと斯る爲体なれは假令修補を加ふるとも到底覺束なく且御分骨の事寧ろ御本廟へ移し奉らんこそ將來不逕の患を免るへしと東京へ伺ひを經て遂に御本廟へ御改葬を行ふ事に決す其手續に及ひ警察署の允可を得て同月廿日雲蓋院及ひ愛宕圓住院貫中を具し寂光院に至り住職と檀下總代共へ事由を達し雲蓋院圓住院をして發遣の修法を行はしめて後發掘せしむる事丈餘に及ふも御印と覺しきを見す(信)は深く穴底に入り謹て黑色の土塊を捧けて瓶に納め再ひ該兩院は回向し奉り畢りぬ同廿二日雲蓋院と共に御分骨を奉して長保寺に至り御本廟碑

の下へ移し奉りて御法會等首尾障りなくそ行ひける

一寂光院には左の靈牌をも安置せられ且御寄附品も數々ありし由なれとも一も存せすして唯靈牌のみ也本堂は毀ち盡し殘院の体甚しき淺間なるかたに塵埃に埋れあるさま言語に絶へたり依て雲益院の請ひを容れ同院へ附屬し畢りぬ爰に事の次第を附記する者也

觀自在院殿靈牌　黒厨子入　　舜恭院殿　同　同上
慈讓院殿　同　　幼雲院殿　同
榮恭院殿　同　　慈泉院殿　同
明脫院殿　同　　容顏院殿　同
恭悟院殿　同　　淨眼院殿　同
普光院殿　同　　阿彌陀佛像一躰　大形箔

舜恭公

本正寺　牟婁郡田邊 安立山　法華宗像門派

續風土記に曰く寺內に本地院の御灰塚あり御逝去之時當寺にて御火葬ありし也其比寺僧御位牌を造りて佛前に安置せしに近年　公命ありて新に御位牌を納めさせ給ひ寺を修營し給へり

本地院殿は西條賴世子山城守賴雄君の御事にて御遺骨は感應寺に御送葬也寬政四年養珠寺に於て御解告の御法會御執行御位牌を同院へ御遷座とあれは本記も其比の事なるへし

攝州多田院

寛政七卯年四月十三日當院神影寶物等御取寄御覧あり

藤澤遊行上人

寛政十二申年五月九日上人紀州へ巡行に付登城拜謁大奥へ召さる

江戸永田馬場山王社

寛政七卯年十二月村岡八藏奉納にて御內々御金五十兩御寄附永々御祈禱料なり
右元金預り置年々一割の利子下付の處寛永十三酉年より五歩利に引下文化二丑年十一月社家小川齋宮より依賴元金不殘下付

邦安社　秋月村日前宮境內

當社は文化三丙寅年五月御創建西條廢世子賴雄君を祭り給ふ也尊靈の事寛政五年四月養珠寺に於て御解告の御法會御執行御位牌を同院へ御遷座以來世子の御取扱に御改正遂に神に崇め御寃魂を慰め給ふ社殿拜所瑞垣等壯麗祭禮は毎年五月廿八日也文化十一年社領高三十石御寄附十三年祭日を三日に定められ廿六日駈馬あり廿七日廿八日相撲あり又文化四巳年より車樂あり其他神樂投餅等中々の盛典にして遠近群集參拜雜沓を極む　舜恭公御親筆の祭文御詠歌等御奉納と云（御祭禮料銀十枚御納附）
或人の記に文政四巳年五月邦安社へ市中より壇尻を献備せり官命あるによる　大納言樣御覽夕刻より官女も來觀浪華より俳優も來り可驚賑ひにて騷動いふへからす何人か戲に

百敷や古き社は神さひてなほ餘りあるさわきなりけり

社領　高三十三石　木枕村　邦安社領

維新之際從來の社殿を御改造（桁行一尺八寸七分高さ四尺八寸五分梁間二尺二寸五分前拜二尺二寸五分餘梁間一尺一寸）御改革の時從來祭典之營繕費として一時金圓御奉納相成たるよし當社の事は　舜恭公世紀に詳也（一時金圓御奉納は明治四未年十二月永世社頭營繕年中供料の爲金五十圓を御寄附日前宮社役へ下付ありしなり）

一文化九申年五月廿九日德本行者を城中へ召し御座之間を道場に定め御正服御袴をも用ひ給はす十念を受させ給ふ翌日御先塋にて念佛會を御回向種々の御布施を賜はる後屢城中に召させらる

文化十四年六月江戸赤坂邸へ行者を召し　豐姫樣轉心院殿の御方初内外の男女日課誓受せしもの三百九十八人に及へりといふ天保十一子年江戸小石川一行院本殿御再建を命せられ一行三昧院の扁額御染筆を賜ふ事は　當公の御世記に詳なり一行院の事次卷に揭く

無　量　光　寺（吹上寺町 里宮山壽經院）　淨土宗鎭西派

續風土記に曰く德本行者滅後徒弟本辨といふ僧　内命を得て一寺建立の志あり文政十二年遂に官許を得て神宮下郷中島村の廢無量寺の號を讓り受け新に堂宇を此地に建立し無量寺を改めて無量光寺とす　一位老公金若干を給はり又新筆の無量光といふ三字の額を賜はり其餘寄附し給ふ品多し

寺説に曰く　舜恭公には當寺へ十二ヶ度御參詣あり　榮恭院殿讓恭院殿（共に御部屋樣と稱す）の方々よりは時々御代參ありて正月七月の十二日には缺たる事なし文政十二年十一月　舜恭公より中將姫手製縫の三尊佛梵字の幅川合甚右衛門を以傳來書を添へ賜はる傳來書の全文左の如し

中將姫梵字掛物一幅伊都郡川上澁田村勢右衛門後家先祖代々所持にて有之處由緒有之御城下湊町醫小林健道と申者へ讓り年來所持仕候へ共靈物之儀乍恐差上度旨從弟小林新八へ申出村岡八藏へ差出候付奉入　御覽候處至而古物眞正之儀可爲靈物に候間差上候間差上候樣被　仰出今年今月藏物相成候事

寛政十年午六月

直川村寶塔　名草郡直川村　玉井作太夫所有山

芳樹院樣（觀自在公御女懿姫君一條内大臣輝　公室大政所と稱す）思召にて名號の寶塔御建立其中へ多年御染筆の名號入大箱一個外に御大切の品等御納め被成度場所等差支無之樣取扱之儀は御家へ御依賴被遊度趣天保九戌年　舜恭公へ御願被仰進之處御許容被遊建築に付ては直川山に罷在る念佛行者眞阿と申者に謀るへき旨被　仰出仍て地所見分の處右眞阿庵室近邊直川村農玉井作太夫持山適當之地にて且同人より内願の品有之然るに同所は水野土佐守領分たるを以て同家へ紹介之處差支無之旨答により同年八月建築に着手同十亥年二月落成三月七日開眼御名代御廣敷御用人相勤入費は政府より下付相成る而して眞阿之を守護すといふ

一天保十三寅年五月眞阿後住連端世話人玉井作太夫より願により芳樹院樣より祠堂金五十兩御下付に付御廣敷より玉井作太夫へ貸付其利子月八朱一ヶ年銀二百五十目八分を納めさせ之を供養料守護僧宛行として庵主へ下付せらる

庵主眞阿品有之天保十亥年六月御國立去らせ連端後住に申付同人病氣に付弘化四未年四月隱居弟

子忍興織き爾來法頴徳成得受寶香等交代慶應二寅年正月より法類忍隨守護申付られたり　徳成の時酉年酉濱御殿御廣敷より金三十兩御寄附徳成より玉井作太夫へ預置の處作太夫死去男恒太郎の時丑年九月一時引上之儀御廣敷より指令に對し朱分年々庵主へ可渡元金完納猶豫歎願の旨也成行不詳

舜恭公御染筆の扁額

一舜恭公御染筆の扁額等諸社寺へ賜ふ者最多し既に列記之外左の社寺院へも下し給へり

妙慶寺へ　大信海の三字　養專寺へ湊　淨花臺の三字
住吉社へ城北住吉町　瑠璃殿の三字　長覺寺へ湊　本願力の三字
西要寺へ東長町　莊嚴閣の三字　本弘寺へ住吉町　瑞泉院の三字
江[illegible]寺へ北新町　金毘羅大權現の六字　法泉寺へ吹上　圓通殿の三字
眞光寺へ新中通四丁目　法泉寺の三字　龍源寺へ鈴丸町　瑞雲の二字
西岸寺へ御小人町　常行殿の三字　万福寺へ西松江村　清淨勳の三字
願立寺へ名草郡黑田村　龍昇殿の三字　西本願寺へ同郡小手穗村　普佛乘の三字
法輪寺へ和歌村　光曉閣の三字　報恩講寺へ海郡大川村　普照海の三字
八幡宮へ同郡衣奈浦　玄遠の二字　立神社へ有田郡野村　天壤無窮の四大字
藥師堂へ同郡辻堂村塞神社境内　護念山の三字　南院へ高野山　降魔場の三大字
金光院へ同山　法界宮の三字　御崎大明神へ日高郡和田浦　山幸舟守の四字
八幡宮へ同郡廣浦　小竹八幡宮の五字　光照寺へ同郡西岩代村　攝取の二字

覺應寺へ 宮郷田尻村　十六羅漢釋伽阿難の像

一左之分紀州御領分高帳及ひ社寺上地布達書に記載あり然れ共御寄附の由緒幷年代共不明續風土記名所圖會にも所記なし依て歴世の部に掲けす

高十石四斗二升三合　伊都郡垂井村　隅田八幡宮

同二十石　同郡下兵庫村　護國寺

同二　石　名草郡里村　日吉山王

封内社寺

一紀勢封内總社寺及社家僧尼等の巨細は寺社局乃至郡宰の名籍に據らされは詳ならす而て今共に存せされは紀州神社錄續風土記名所圖會等に依れは其大概を知るへき也故に煩を略して掲けす唯其大數を示さんか爲維新後府藩縣の制度となり差圖により明治三午年三月十三日辨官へ御届面管內の社寺數社人僧尼の人口等を抄錄す是當時所官民政局の調査に係り實際のものとす蓋時々の小異同は免れさりしも從來とさして大差なきものと判すへし

一神　社　三千二百四十七　紀伊 伊勢之內 大和

一社　家　三百二十六軒

一寺　院　二千三百三ヶ寺

一修　驗　百十一軒

一社寺山伏僧尼男女共

人數合五千七百廿一人

內

百八十七人　社人
四十六人　修驗
二千八百九十九人　僧
七百六十一人　俗
百九十二人　尼
千六百三十六人　女

右の如しと雖も在方覺帳には神社三千七百三十寺院二千軒庵二百堂六百九十と記せり蓋和歌山府下を除き郡の部分のみなるや差違の事由詳ならす

一右社寺中に於て社寺領ある分亦寺社局郡宰等の簿冊なきを以て或は遺漏なきを必し難しと雖も結局前記歷世に於て寄附せられし者に外ならす（勢州記缺）之を紀州御領分高帳に照し合算（勢州の分共）すれは左の如し元來社寺領に於て大故なき以上は永年世々繼承し來て變更のことなきなり

高四千四百五十三石一斗一升四合

內

高八十七石六斗一升二合　伊都郡寺社領
同二百五十五石八斗五合　那賀郡同

同三百十一石三斗三升　名艸郡同
同千八百九十八石四斗二升二合　海部郡同
同四十八石二斗二升二合　有田郡同
同十八石　日高郡同
同四石七斗四升七合　牟婁郡口熊野同
同三百三十石九斗三升二合　同郡奥熊野同
同七百十三石二斗二升七合　同　同　同
同三百石五斗二升二合　勢州松坂領同
同三百七石九合　同　田丸領同
同百七十七石二斗八升六合　同　白子領同

一社寺領の他に御供米御佛供料乃至御扶持方と稱し廩米現穀を以て御寄附の分は紀勢御領分高の外也又祠堂金として一時金銀寄附のものあり其數合計左の如しとす

凡金一萬二千二百六十九兩三分餘
銀六百六十八枚餘

一勢州三領の社寺中社寺領等御寄附之もの頗る多し其由緒來歷を詳にせんと欲すれ共官府之簿冊散逸勢州地誌なきに非れ共他領入會の地特に我藩地の爲に編するものなけれは考査の便なし各社寺に就て推究考査せんとするも今や力及はす故に末記明治三年太政官令により社寺領一般上地の布

達面且寺社役所直支配寺社帳に照し以て勢地に於ける社寺領の制規を察知すへきものなり

一封内之社寺中寺社奉行直支配の寺社と稱するあり内御目見地と左なきとあり餘は通して町奉行郡宰の支配に屬す是從來之社格寺格乃至其大小由緒等に依て差別齊肅なり御目見地とは　君上に謁見を得るの謂にて寺社奉行直支配中資格優等に位す謁見に種々あり住職繼目入院輪番代りの御禮あり着府御暇の御禮あり年頭の御禮あり（社寺年頭の謁見は正月四日を定日とす）皆一束一卷一束一本等の贄幣を舊規により捧呈す又御參府御歸國途中送迎の謁見ありいつれも各自の資格によつて區別錯雜悉く記すへからす左に掲くるは寺社局簿冊中僅に遺存のものにて同局直支配の社寺の大概を見るに足るへく又甲乙參照の料に供すへし

寺社役所直支配寺社　但紀勢共

天台宗

御社領高二千石之内二百石　輪王寺宮御支配　雲蓋院
外に新田高廿八石六斗三合

和歌山寺中幷社家
正法院
玉泉院
和合院
十如院
大相院

御社領之内　高四十石つゝ

寶藏院
安田兵庫頭
輪王寺宮御支配 陽照院

御寺領高五百石之内高二百石
外に新田高十七石九斗三升三合

長保寺中
地藏院
專光院
最勝院
福藏院
本行院

御寺領之内　高二十石つゝ

御目見地
寺領高四十六石七斗二升五合
祭領現米五石
上那賀
江州比叡山末寺 粉川寺

同
寺領高百石
粉河寺頭坊 御池坊

粉川寺一山之衆徒數多故此所へ右院號等出さす御目見の節は衆徒の內より總代にて一人罷出

同以下省て書せす
寺領高百石
日高郡鐘卷村
雲蓋院末寺 道成寺

和歌出勤料現米五石
海士郡西濱領吹上 同 明王院

右同斷　同郡愛宕　京都愛宕山長床坊末寺　圓珠院

西名草郡藤白浦　雲蓋院末寺　實乘院

名草郡六十谷村　輪王寺宮御末寺　藥王院

北新町　雲蓋院末寺　淨福寺

廣瀬　同斷　功德寺

東紺屋町　同斷　上願寺

西名草松江村　律　輪王寺宮御末寺　寂光院

寺領高三石　西名草別所村　雲蓋院末寺　願成寺

勢州

天台宗

白子領上野村　律　江州西行寺末寺　成願寺

寺領高六石五升一合　松坂領船江村　雲蓋院末寺　藥師寺

寺領高二十一石二斗八升五合　松坂領朝田村　江州比叡山末寺　朝田寺

寺領高三石　勢州丹生村　律　鳥羽領蓮生寺末寺　智禪寺

淨土宗鎭西派

御寺領御藏米百石　京都智恩院末寺　大智寺

湊　同斷　西要寺

吹上 同 大恩寺

西名草郡日方浦 同 永正寺 寺領高十石

名草郡津秦村 同 藥德寺 寺領高三石

日高郡小松原村 九品寺

新堀 万性寺

湊 西岸寺

廣瀬 大立寺

那賀郡野上沖野々村 法然寺 高三石

有田郡石垣德田村 京都黑谷光明寺末寺 大乘寺

同郡保田辻堂村 京都智恩院末寺 稱名寺

日高郡小松原村 法林寺

那賀郡小倉 捨世寺 光恩寺 高十三石五斗四升五合

勢州丹生村 西導寺 高三石

淨土宗西山派

西名草梶取村 本山西山光明寺 東山禪林寺 總持寺 寺領御藏米十石

名草郡中之島村 梶取總持寺末寺 阿彌陀寺

吹上 三光寺

名草中之島村 觀音寺
吹上 護念寺
有田郡箕島村 常樂寺
湊 海善寺
高七石 有田郡藤並土生村 禪長寺
名草郡木枕村 西應寺
同 大野中村 寶珠寺

法華宗一致派

御寺領高二百五十石 一本寺 報恩寺
同 高二百石 一本寺 養珠寺
現米拾石 塩道 甲州久遠寺末寺 感應寺
吹上 豆州妙法華經寺末寺 蓮心寺
御切米二十五石 海士郡宇津村 甲州本遠寺末寺 淨心寺
西名草郡多田村 京都妙覺寺末寺 妙臺寺
湊 正住寺
現米三十石 吹上 報恩寺末寺 圓如寺
吹上 京都妙覺寺末寺 本光寺

御合力金廿兩

御合力金二十兩

法華宗勝劣派

眞言宗新義派

寺領現米三十石

根來寺一山の寺僧數多に付此處へ右院號は出さす御目見仕候節は一山の內名跡集訳(ホノマヽ)役者總代にて一人つゝ罷出申候

現米三拾石

吹上 下總法華經寺末寺 妙法寺

西名草相坂村 報恩寺末寺 應供寺

海士郡和歌浦 養珠寺末寺 演光寺

有田郡廣村 京都妙覺寺末寺 養源寺

新堀 養珠寺末寺 妙宣寺

塩道 塩道感應寺末寺 本久寺

毛革町 吹上蓮心寺末寺 宣經寺

廣瀨一里山 越後本成寺末寺 久成寺

數寄屋町 駿州本門寺末寺 本覺寺

那賀郡 本山 根來寺

根來寺學頭 蓮花院

同上 律乘院

車坂 京都智積院末寺 延壽院

高三石二斗
三人扶持

眞言宗古義派

高二十一石五斗三升

鹽道 根來蓮花院末寺 延命院
那賀郡東國分村 同上 國分寺
同郡岩出宮村總社々僧 同上 圓滿院
名草郡山東矢田明王寺村 同上 傳法院
那賀郡水栖村 根來寺律乘院末寺 大日寺
名草郡山東黑岩村 同上 寶光寺
同郡山口谷村 律 同上 寶瀧寺
西名草紀三井山 勸修寺宮御法末 護國院
名草郡有本村栗林 同上 明王院
同郡中之島村 勸修寺宮御末寺 明見寺
住吉町 同上 利益院
鈴丸 高野山丹生院末寺 万精院
新魚町 勸修寺宮御末寺 照光院
岡の谷 同上 松生院
欠作り丁 高野山南院末寺 觀音寺
出口 勸修寺宮御末寺 圓藏院

高二十石

高八石九斗

高五　石

高二　石

高五石四斗六升四合

以下御目見無之

柳　町　高野山善集院末寺　常住院

元博勞町　勸修寺宮御末寺　正壽院

伊都郡下兵庫村律　南都西大寺末寺　護國寺

那賀郡豐田村　勸修寺宮御法末　福琳寺

上那賀長田別所村　同斷　觀音寺

有田郡栖原村　京都高山寺末寺　施無畏寺

名草郡岡崎幸內村律　勸修寺御宮御法末　滿願寺

伊都郡菖蒲谷村　高野山高室院末寺　地藏寺

同郡寺脇村　律　南都西大寺末寺　妙藥院

東宇治　高野山興山寺兼帶所　覺樹院

名草郡中之島村律　勸修寺宮御法末　大聖寺

有田郡小川村律　同御末寺　神宮寺

名草郡上野村律　同斷　觀音寺

那賀郡野上之村律　同斷　西方寺

名草郡中島村　同上　養光院一本寺

同郡山東口須佐村　河州野中寺末寺　普門寺

在田郡垣倉村律　同上　醫王院

名草郡下和佐村律 泉州神鳳寺末寺 慈光寺
海士郡椒濱村律 河州野中寺末寺 極樂寺
名草郡吉田村律 有田郡垣倉村醫王院末寺 法輪寺
有田屋町 高野山遍照光院末寺 光明院
坊主町 同惣持院末寺 栗源院
金屋町 栗林明王院末寺 圓福院
矢作り丁 同上 千手院

御目見地

伊都郡隅田垂井村 仁和寺宮御末寺 大高能寺
那賀郡池田新村 同上 傳法寺
名草郡中の島村 勸修寺宮御末寺 法隆寺

御目見地に非す

海士郡岡町領車坂下 同上 普門寺

御目見地

名草郡太田村 同上 總光寺

以下御目見無之

有田郡本堂村 同上 興善寺
伊都郡境原村 京都仁和寺宮御末寺 小峯寺
名草郡太田村 勸修寺宮御末寺 平等寺
同郡栗栖村 同上 觀音寺

勢州同宗

御目見地下同 高五石

同上下同 高五石

高九石四斗

御朱印地高三十石 寺領高四石五斗

禪宗濟家派

御目見地下同 御切米八十石

同四十石

高三十石

高二石

御目見に非す

御目見に非す

田丸領長谷村 仁和寺宮御末寺 近長谷寺

松坂領丹生村 勸修寺宮御法末 神宮寺

愛宕町 京都大覺寺末寺 龍泉寺

白子領寺家村 高野山遍照光院末寺 觀音寺

車坂 京都妙心寺末寺 禪林寺

湊 同上 吹上寺

出口 金龍寺

新境町 同上 龍源寺

南海士郡由良門前村 同上 興國寺

名草郡和佐禰宜村 由良興國寺末寺 歡喜寺

有田郡小豆島村 京都妙心寺末寺 淨妙寺

西名草貴志中村 同上 碧岩院

南海士畑村 由良興國寺末寺 長谷寺

名草郡秋月村 京都妙心寺末寺 耕月寺

同郡園部村 新境町龍源寺末寺 圓明寺

新内 京都妙心寺末寺 江西寺

有田郡藤並中野村 由良興國寺末寺 長樂寺

塩道 京都妙心寺末寺 重顯寺

有田郡宮原東村 由良興國寺末寺 圓滿寺　高二石

以上御目見地

禪宗黄檗派

海士郡塩屋村 無本寺 光明寺　御目見地

湊下の町 同上 濟臨寺　同上

海士郡關戸領新堀 同上 慈福寺

同郡宇須村 同上 天正寺

同村 同上 國瑞寺

西名草本渡村 同上 大井寺

勢州松坂領垣鼻村 同上 海（會）（一本念）寺

禪宗洞家派

井原町 駿州大林寺末寺 久昌寺　御目見地下井同 高十石

吹上 遠州龍巣寺末寺 法泉寺

高松 房州延命寺末寺 高松寺

岡丁領　遠州龍巣寺末寺　林泉寺

上鷹匠町　尾州正眼寺末寺　珊瑚寺

高十五石

吹上　下總永昌寺末寺　惠運寺

同　遠州宗泉寺末寺　窓譽寺

同　甲州大泉寺末寺　大泉寺

海士郡和歌村　越前永平寺末寺　羅漢寺

御目見地に非す

奥熊野有馬村　防州龍文寺末寺　安樂寺

高十　石

同長島浦　武州淸泉寺末寺　佛光寺

同尾鷲中井浦　相州功雲寺末寺　金剛寺

高三石六斗九升五合

勢　州

大阿坂村　遠州石雲寺末寺　淨眼寺

松坂領松崎浦　同可睡齊末寺　海禪寺

以上御目見地

時　宗

湊　相州淸淨寺末寺　安養寺

御目見地

淨土眞宗西派

京都西本願寺兼帶末寺　鷺森御坊

御目見地

西名草冷水浦　鷺森御坊兼帶所　了賢寺

西名草黒江村　同上　淨國寺
日高郡御坊村　同上　薗御坊
御目見地　住吉町　京都西本願寺末寺　本弘寺
同　新魚町　同　專養寺
同　海士郡和歌浦　同興正寺末寺　性應寺
同　新中通り　同上　眞光寺
同　有田郡湯淺村　同西本願寺末寺　福藏寺
同　湊　和歌性應寺末寺　善能寺
北町　同上　西光寺
鷺森　同上　專光寺
御目見地　湊　京都端之坊末寺　淨專寺
同　同　同斷　養專寺
同　廣瀬　大坂淨光寺末寺　念誓寺
中の店　廣瀬念誓寺末寺　念誓寺
同　北新町　京都西本願寺末寺　法林寺
同　新内　同興正寺末寺　專念寺
海士郡關戸　和歌性應寺末寺　圓明寺

同　鷺森　同　敎應寺

同　西名草狐島村　新中通り眞光寺末寺　覺圓寺

桶屋町　京都西本願寺末寺　善稱寺

新町　同上　西法寺

新道　同上　稱名寺

新内　大坂淨光寺末寺　西念寺

西名草北島村　新中通り眞光寺末寺　淨源寺

有田郡箕島村　和歌性應寺末寺　淨應寺

日高郡野島村　京都西本願寺末寺　安樂寺

南海士阿戸村の內網代浦　有田郡湯淺福藏寺末寺　念興寺

御目見地　名草郡岩橋村　京都西本願寺末寺　法照寺

同中の嶋村　和歌性應寺末寺　西覺寺

同山東南畑村　京都西本願寺末寺　願成寺

勢州田丸領富岡村　同上　光德寺

御目見地　有田郡湯淺村　新町眞光寺末寺　仙光寺

名草郡鳴神村　大坂淨光寺末寺　玄妙寺

有田郡田口村　和歌性應寺末寺　西方寺

那賀郡新在家村　京都西本願寺末寺　信樂寺

岡崎西村　同上　西敎寺

寺內村　和歌性應寺末寺　敎明寺

淨土眞宗東派

御目見地　湊御坊　京都東本願寺末寺　長覺寺

海士郡小雜賀村　同上　眞乘寺

御目見地　湊　同上　妙慶寺

關戶領新堀　湊妙慶寺通寺　妙慶寺

紺屋町　京都(西)本願寺末寺（東カ）　源光寺

廣瀨　同上　光秀寺

淨土眞宗高田派

御目見地　金屋町　勢州一身田御門跡御末寺　崇賢寺

白子領大別保村　同上　信光寺

山伏修驗宗

御目見仕候 十人扶持　南一里山　三寶院派　多門院

同 五人扶持　裏町　般若院

加太浦　無宗旨無本寺　伽陀寺

此伽陀寺古より迎之坊持寺にて住持は無御座候右迎之坊儀俗名代々向井加左衞門と申候

寺社役所直支配神社

一日前宮國懸宮 二社　名草郡秋月村　國造　紀式部
　社領高　御目見地
一竈爲比賣社　同郡津秦村　預り　右同人
一刺田比古社　岡の谷　神主　岡本兵衞
　社領高拾石　御目見地
　御朱印高二百石
一天滿宮　海士郡和歌浦　神主　安田能登守
　社領高廿五石　御目見地
一伊太祈大神社　名草郡伊太祈曾村　神主　奥主計
　社領高二十石　御目見地
　祭領現米四石
一鳴神社　同郡鳴神村　神主　武川右近
　御供領現米五石　御目見地
一鳴武明神　同村　神主　右同人
一香都智神社　同村　神主　右同人

一堅眞音社　同村　神主　右同人

一須佐大社　有田郡千田村　神主　岩橋出羽守
　御供料現米五石　御目見地

一玉津嶋社　海士郡和歌浦　神主　高松將曹
　社領高三十石　御目見地

一矢　宮　同郡關戸村　神主　矢田主殿
　社領高三石　御目見地

一淡島大明神　同郡加太村　神主　前田備後守
　社領高五石　御目見地

一志摩社　御目見地　名草郡中之島村　神主　嶋石見守

一伊達社蛭子社二社　小野町　神主　秋津志摩守
　社領高三石　御目見地

一竈山大明神　御目見地　名草郡和田村　神主　鵜飼織部

一静火社　同村　預り　右同人

一天霧明神　同村　預り　右同人

一朝椋社　御目見地　鷺森　神主　杉原要人

一八王子大明神　御目見地　那賀郡畑毛村　神主　幡井筑前

一立神社　御目見地　有田郡野村　神主　中山内膳

一八幡宮　御目見地　海士郡木の本村　神主　山本河内守

一丹生大明神　御目見地　有田郡出村　神主　島田要人

一吉備名方濱宮　同郡長田村　神主　右同人

一國主大明神　同村　同　右同人

一王子權現　同郡中島村　同　右同人

一高野大明神　同郡井口村　同　右同人

一藤並天神社　御目見地　同郡天滿村　神主　堀舍人

一宇佐八幡宮　南海士郡横濱浦　神主　坂上大和

一神明社　御目見地　海士郡今福村　神主　河野大膳

一總社大明神 十五社大明神　名草郡田井北村　神主　島田若狹

一神明社　東鍛治町　神主　高松右膳

一大屋大明神　御目見地　名草郡宇田森村　神主　森豐後守

一妙見社　西名草三葛村　神主　濱田信濃

右妙見社は郡奉行支配にて候得共神主濱田信濃儀和歌御宮御用相勤候に付信濃計直支配にて御座候

一八幡宮　御目見地　海士郡本脇村　神主　中村賴母

一若王子現権 牛頭天王 二社　日高郡小中村　神主　白井織衛
一若宮八幡宮　同　村　同　右　同　人
一八幡宮　日高郡薗浦　同　小竹、、
一藏王權現　那賀郡小倉金屋村　同　明樂治郎
一隅田八幡宮　御目見地　伊都郡垂井村　別當　大高能寺
社領高十石四斗二升三合
但し社僧六人幷神主猪西左内は郡奉行支配にて御座候
社僧は總代一人つゝ罷出申候
一井原大明神　井原町　神主　三浦玉吉
一稻荷明神社　有田郡糸我中番村　同　林　信濃
一丹生大明神　上那賀丹生谷村　同　藤井庄司
一立神大明神社　西名草郡加茂引尾村　同　船橋越前
一顯國社　御目見地　有田郡湯淺村　同　長尾主鈴
一八幡宮　御目見地　同郡宮原道村　同　宮本大和
一四五百森八幡宮 稻荷社　御目見地　勢州御曲輪内　同　笠円上總介
一雨龍森牛頭天王　新座町　同　右　同　人
一丹生大明神 高野大明神 二社　丹生村　同　檜垣大司

社領高三十石　　　　　　　　　御目見地

一榜手大明神
　福徳大王　　　　　白子村　　　　　　　　同　　　板倉大和守

　　社僧はかりにて神主無之神社

一若宮八幡宮　　　名草郡有本村栗林　　　社僧　　明王院

　　御供料現米十石　　御目見地

　　祭料現米三石六斗

一山王社　御目見地　海士郡西濱領吹上　　社僧　　明王院

一愛宕社　御目見地　同郡和歌浦　　　　　別當　　圓珠院

一住吉社　御目見地　住吉町　　　　　　　社僧　　利益院

一三部大明神　御目見地　新魚町　　　　　社僧　　照光院

一天神社　御目見地　湊　　　　　　　　　支配　　安養院（一本寺）

　熊野本宮　　　　　　　　　　　　　　　　　社家

一十二社權現

　　社領高三百石

　例年頭御禮には三山より總代一人罷出申候初て　御入國御禮之節は一山より一人御目見仕候

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　御宿坊

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　社家一﨟　竹坊大藏

例年頭幷初て　御入國御禮之節御目見仕候　社家　尾崎織部

二人扶持
初て　御入國御禮之節計　御目見仕候　社家　二階堂西市

同斷
織部西市儀例年頭御禮之節は社家之内へ加り申候

熊野新宮

一十二社權現　御宿坊　三方社中
社領高三百五十石
例年頭御禮には三山より總代一人罷出申候初て　御入國之御禮之節は一山より一人御目見仕候

二人扶持　社家　鳥居源兵衛
初て　御入國御禮之節はかり　御目見仕候

同斷　神藏　社家總代

同斷　天台宗本領　庵主

熊野那智山

一十二社權現　社家

社領高三百石

例年頭御禮には三山より總代一人罷出申候初て　御入國御禮之節は一山より壹人　御目見仕候

御宿坊

社家一﨟　實　方　院

社家　龍　壽　院

例年頭幷初て　御入國御禮之節　御目見仕候

二人扶持

御目見之儀は社家之内へ加り申候

天台宗本領　御　前　庵　主

初て　御入國之節計　御目見仕候

伊勢兩宮

由來詳ならされ共勢州封内村々に於て御寄附之神領左の如し蓋し　國祖の御時より之事なるへし

高一石二斗	松坂領釜生田村	大神宮領
高二石二斗二升	同　下の庄村同	同
高三石二斗五升	同　岡本村	同
高三石	同　八重田村	同
高二石	同　大河内村	同

高三石　同　朝田村　同
高二石四斗　同　久保田村　同御供料
高四石七斗六合　同　立野村　同
高三石一斗五升　同　大津村　同
高二石三斗四合　同　坂内村　同
高五石　同　殿　村　同
高四石　同　下　村　同
高八石四升四合　同　山寺井村　同
高三石　同　大足村　內宮御供料
高十石　田丸領東宮村　兩大神宮社領
高三石　同　河內村　遷宮社領
合高六十石〇〇〇四合
兩宮御祈禱料黃金一枚つゝ　春木大夫
　山本大夫
朝熊岳同上一枚　明王院
右明治二巳年分迄年々御奉納之處明治三午年（十）〔一本ナシ〕二月十八日爾來御斷相成候段松坂民政局より
及通達候處承認請書差出たり

神領

高百五十石　　　　　　　　　田丸領相可村にて　　　山田　春木大夫

右年々御宛行

右御寄附根元の記錄紀勢御領分高帳に明記ありて維新迄連綿御寄附に相違なし尙手筋を以て元春木大夫家に就き舊記を調査せしめたるに神領取調と題する簿冊に左の如く記載ありと云ふ即ち　龍祖御代より御寄附たる事明かなり

紀伊大納言樣

神領百五十石　　　　　　　　　　　　御師　春木大夫

寛文元年安藤帶刀殿彥坂九兵衛殿水野淡路守殿を以て被仰渡候事

御書面等無之候以上

午十二月　　　　　　　　　　　　　　春木隼人

一外神領御供料等御寄附記錄の如何をも調査の處往昔は總して神宮廳の如きもの無之御師家々の記錄に止り夫以て甚杜撰全く私記に類し舊御師孰れの家にも更に見當らす唯舊御師山本由緖書と云に左の記載ありしとなり附記して參考に供ふ

御公儀師職之儀は寛文五年周貞慶光院入代　參府之節私親山本大夫へ被仰付被下候得は難有可奉存旨御老中樣方へ廻り大奥にても御年寄樣方へ段々御願奉申上寛文六年四月師職被　仰付五月御祈禱御祓山本大夫奉獻上候　中略

御三家樣方御祈禱迄奉執行向後山本大夫より御祓可差上旨奉申上是迄慶光院御師檀の分不殘廻

り御寄附の御神領も山本大夫へ可被遣旨にて奉頂戴候紀州様より百石久知野村　水戸様より正五九月
御祈禱料白銀三百六十匁毎年被爲遣候下略

奥書に此一帖表題慶光院山本由緒并山本神職叙爵の次第親類の事山本新之丞末辰筆記とあり
末辰は山本氏世代の内にて享保年中死亡の人也と云ふ

又御師方諸大名國分師職名記寳暦比編集と云に

國	藩主	石高	御師
尾張	尾張中納言殿 名古屋	六十一万九千石	山本大夫 内宮 春木大夫 外宮
常陸	水戸鶴千代殿	三十五万石	中林鋼屋大夫 内宮 春木大夫 外宮
紀伊	紀伊中納言殿 和歌山	五十五万五千石	山本大夫 内宮 春木大夫 外宮

「右の如くにて水戸家御師の事目下の山本家に就き質問するに水戸家は師檀の關係なしとそ然らは山本家旧記に御三家様云々とあるは如何と云に幕府と尾紀に對するのみとの答の由以上勢州松坂星合政輔より調査報告の次第なり」

一兩宮正遷　宮には玉垣荒垣先前より尾州家と交番に御普請御手傳に付來々年正遷　宮には御普請御手傳之儀明治元辰年十一月御願立之品當公之部に記載之如くなれは往昔より是等之制定ありしを可察然れ共筆記具はらす事由詳かならす此他　兩宮に對する歳時の典儀等今詳悉しかたし

當　公

當公の時維新に際し社寺制改革の件多し各社寺に係る者は皆其部既に記載の如し江戸の分は次卷に掲く

御朱印還納
一明治元辰年九月十四日刺田彦社神主岡本左馬助勢州白子觀音寺之御朱印還納維新に付旧幕府より受封之判物取調可差出旨辨官より達に付御加恩知取之面々の分と共に刺田彦社及ひ觀音寺之御朱印不殘本日辨事御役所へ差出す

切支丹宗門改方
一明治元辰年十月廿五日切支丹宗門改方被　仰出
切支丹宗門改方追て御規則相立候迄旧幕之所置に相從ひ不審成者有無調來十一月限辨事傳達所へ可屆出事
十　月　　　　　　　　　　行　政　官

伊勢正遷宮玉垣荒垣御普請御願
一同年十一月廿日伊勢正遷　宮玉垣荒垣御普請御願立
左之通公用人を以御差出之處十二月二日上け紙之通差圖有之
來々年伊勢兩宮正遷　宮有之趣に御座候然る處玉垣荒垣御普請之儀は前々より德川三位中將幷弊藩にて交番に右御用相勤來有之儀に御座候間此度御普請之儀弊藩へ御手傳被　仰付被下候樣仕度此段(御段)(本のまゝ)御聞濟之程偏に奉願候以上
上け紙
願之趣奇特に候得共御手傳之儀は難被及御差許材木可致獻納事
右荒垣と云は玉垣外之垣にて此儀永年中絕之處此回御願立再興に至る御仕入方にて擔當木材買入貿額は壹万餘圓の由也

寺院下馬下乘札取拂
一明治二巳年八月諸寺院下馬下乘札取拂被　仰出
從前諸寺院に揭示有之候下馬下乘等之札向後取拂候樣被　仰出候事

但格別由緒有之寺院は其所部之府藩縣にて取調可伺出事

八　月　　太　政　官

有位神職取扱振

一明治二巳年十月有位之神職取扱振御屆

今般從來之百官被廢候付諸社神職之向職號無之筋は位階を以相稱候樣被　仰出候付ては當藩管轄中にも從五位を以て可相稱者十三人許有之候事に御座候然る處右神職叙位之輩藩士役人應對振之儀從前は全官位に不拘取扱來候得共今日正名之御時節に當り苟も奏聞を遂　勅許叙位之輩に有之付ては從前仕來之通り無位之者同樣にては不都合に可有之去迚少參事權少參事等に至候ては却て相當下位に有之殊に當時大參事初藩政に相掛り居候者何れも無位之輩のみに有之候付ては事務取扱差支彌以不都合に可有之と存候元來神職僧徒共　朝參不仕候限りは位階無之候共可然神職は神祇官にて其職務之甲乙等級の稱呼を御定式内外大小社之別御立被遊着服も官服を禁し祭服淨衣着用の筈被　仰出候儀其宜を得候歟と奉存候尤も僧徒は尋常の官位は不賜候得共僧正僧都法印法橋等尚其准階を被定候得は貴賤之別有之も同斷何れも中古來の弊習故右等必御改正被　仰出候樣仕度奉存候先差當り即今藩政改革之際右神職有位の輩輕重之取扱振に寄大に藩治之差支にも相成候付右否御差圖被成下候迄は從前の通接待仕居候間此儀伺旁御屆申上置候誠恐謹言

十　月　　和歌山藩知事

辨事御中

御菩提所一ヶ所に御定

一明治二巳年十一月晦日　御菩提所向後海部郡濱中村　陽照院一ヶ寺に御定　權大參事より　名草參事へ達す

藩知事樣御菩提所は向後陽照院壹ヶ寺と御定相成　御宗家樣御靈牌は御邸內へ御安置可被遊との御事に付右之趣口達にて此表御寺々へ達之儀宜被取計候事

從來御菩提所は和歌雲蓋院吹上大智寺にして御廟所は陽照院報恩寺養珠寺大相院淨心寺高松寺感應寺吹上寺蓮心寺等之諸寺にありし處版籍御奉還政体一變候付本記之如しとす雲蓋院大智寺陽照院報恩寺等への布達面其他詳なるは各寺之部に記す

一右により十二月廿日和歌　南龍院樣初御靈牌を長保寺へ御遷座大智寺和合院御靈牌は明治三年五月十六日御邸內若山なりへ御安置に成たり

諷經廢止

一同年十二月廿四日御法事之節御寺方諷經廢止

名草民政局へ申合諸寺院へ達せしむ

是迄　御家父樣御法事之節御寺方諸寺院諷經拜に罷出候へ共以來罷出に不及筈に候間其段雲蓋院初夫々相達之儀宜被取計候樣

江戶御寺方改革

一同月江戶御寺方改革

參政へ申合江戶御寺方幷日光護光院等へ達せしむ

御廟有之御寺方は是迄の御宛行十分の一被遣候事

一御靈牌計御安置の御寺方は御靈牌御引取御宛行御斷之事

一香蓮寺林光寺等は　御靈牌有之候得共御宛行別段無之と存候右樣之筋は　御靈牌御引取之事
一右之外御由緒にて旧來被下來之御宛行等有之筋は總て十分之一被遣に可取計之事
件之通之處御廟無之寺院より御靈牌翌年七月迄に不殘納め切りたるを以て同月十七日赤坂邸御庭御堂へ御安置香花を奠供玉泉院（眞如院事）弟子召連參拜御回向之上御撥遣修法を行ひ御堂前空地にて御火中取計之

社寺御名代之制を定

一明治三年年四月新たに諸社寺　御名代等之制を定めらる
諸社寺へ年中御名代御代參御供へ金等亦從前の如くには行はせられ難きを以て更に新制を規定せられ年中行事と題す紙數頗る多きにより別に揭く

諸社寺御守札差上御斷

一御由緒有之諸社寺より年中正五九月御祈禱之御札守等差上或は御目見被　仰付候之類不少いつれも旧來之慣例に從ひ履行之處御体裁一變により前記年中行事之外は都て廢止其旨諸社寺へ心得通達之儀公用局へ家令所より申達す
本記從來之制令詳ならす變革之際一二筆記の存する分のみ左に列序す

明治三年年正月十三日
一勢州專修寺御門跡より年始爲御祝儀御使僧常念寺を以左之御口上書携へ松坂藩廳迄被　仰進
春陽之御慶目出度　思召候　正二位樣彌御勇健可被爲御超歲珍重　思召候年始之御祝儀爲可被申進御使僧被申入候已上
正　月

右体之儀は御一新後諸向共都て御斷之筈に候へ共此度は御先方より御仕向有之上は　正三位様より御挨拶被　仰進無之ては不都合に付御挨拶旁々に御祝儀被　仰進之御使相勤向後之處は年頭初暑寒等都て御斷之儀御先方へ可申入旨松坂藩廳へ通達候様公用局へ申通す

同年三月廿三日

一遠州平尾八幡より献上之御札公用局より送付依て金二兩被下尤去年分被下無之により束ねて右の如く被下

但御札差上御斷之儀東京にて取計有之處右之通故尙改て御斷取計候様申合す

其後同神主栗田主膳より是迄通御祈禱御札差上度との願書差出候由公用局より差越に付同社に限り手始め致し候はゝ外々へ差支に付願書返却候様にと同年四月廿九日申通す

明治三年六月十日

一江州多賀社中觀音院より如從前五月分御札守差上に付跡々の如く金三百疋被下向後差上に不及旨達す

同月廿八日

一矢田釧前田備中松島大和より大祓に付例之通御形代差上候付晒麻二疋添御手許へ差上候處御息吹御濟御下けに付右へ東金三百疋添神主へ渡す

同年八月六日

一粟林八幡來る十五日祭禮に付　御名代は御定めの通被遣御奉納馬は無之旨達す

同年九月十日

一廣八幡社千田村須佐神社祭禮之節左之通從前之御供に付如前々取かへ御備取計置候旨所轄民政局より申越に付右金員送付以來御供金相止候旨申遣す

金百疋　八月十五日　廣八幡社
金廿五疋　九月十四日　須佐社

同日

一熊野本宮當四月十五日祭禮同那智山同六月十四日祭禮に付跡々之通金百疋つゝ御供金取計御供致し候旨牟婁下郡民政局より申來仍て金二百疋送付以來御供金相止候旨申遣す

一山東伊太祈曾社幷矢宮社祭禮に付跡々之通御名代且御奉納馬有之度旨右神主より願出候へ共以來御名代及御奉納馬無之旨達す

明治四未年三月晦日

一武州寺尾神主向後廉々御目見等之儀左之通取極む

繼目之節は爲御禮献上物差上　御目見可被　仰付事

一年頭初其他　御目見之儀願出候共　御目見等は不被　仰付御祝儀申上は家令家扶之内へ可申上事

一御靈屋方へ　御參詣之節　御目見願出候はゝ其節之依御都合御目見被　仰付之儀取扱可申事

一明治三午年十二月社寺領一般上地布告

諸國社寺由緒之有無に不拘朱印地除地等從前之通被下置候處各藩版籍奉還之末社寺のみ土地人民私有之姿に相成不相當之事に付今度社寺領現在之境内を除之外一般上地被　仰付追て相當祿制被相定更に廩米を以て可下賜事

但し當午年收納は從前之通被下候事

一領地の外に旧政府幷旧領主等より米金寄附の分依旧慣當午年迄被下候向も有之候處來未年より被止候事

右之通被　仰出候條府藩縣に於て管内之社寺へ可相達事

庚午十二月　　太　政　官

右に付同年十二月十九日に至り大參事より各郡民政局參事へ各通之通指令各社司各寺院へ布達せしむ

雲蓋院始左之寺々追て御處置被　仰出候迄頭書之通御藏米被下候處今般諸寺々へ御寄附地且被下米等上切り候付ては右雲蓋院始へ被下米之儀此節二ヶ年分一時に被下來未年より上り切候筈に付宜取計事

三十俵　　雲　蓋　院

拾俵つゝ　十　如　院
和　合　院
玉　泉　院

寶藏院
正法院
大相院

右一通

一左之寺々御寄附地等當年年分は半高被下來未年より悉皆上り候事

名草郡

高二百五十石　報恩寺
御切米百石　大智寺
同　八十石　禪林寺

海士郡

高二百石　養珠寺
外に高五斗八升引高

高五百五石　陽照院
外に高二十一石六斗五升二合 新田畑御寄附等引高

右一通

一左之寺々御寄附地幷金米共當年年分は其儘被下來未年より悉皆上り切候筈に候事

名草郡

御切米十石　感應寺

同　四十石　吹上寺

同　三十石　圓如寺

海士郡

御切米廿五石　宇須村　淨心寺

金二十兩　和歌村　演光寺

同　斷　相坂村　應供寺

現米二石　愛宕山　圓珠院

同　斷　吹上　明王院

同　斷　坂田村　了法寺

御切米十石　梶取村　総持寺

二人扶持　妹脊山　海禪寺

那賀郡

現米三十石　根來　蓮花院

同　斷　同　律乘院

三人扶持　岩出宮村　圓滿院

右一通

一御池坊へ御寄附之高百石當午年分は其儘被下來未年より悉皆上り切候筈候事

一田丸宮古村廣泰寺へ被下之金十兩當年分は其儘被下來未年より同斷

右兩通

一左之寺々御寄附地等當年年分は其儘被下來未年より悉皆上切り候筈に付夫々宜取計事

名草郡

禰宜村 觀喜寺　高二石

鷺森 御坊　高六十四石五合

海士郡

日方浦 永正寺　高十石

別所村 願成寺　鄕役米免許 高百石

岡町 珊瑚寺　高十五石

紀三井寺村 護國院　高廿一石五斗三升

湊村 明王院　見取場 田畑五町二反九畝六歩五厘

宇須村 久昌寺　高十一石四斗六升三合

加太浦 稱念寺　高一石

西濱村 重顯寺　高九石二斗五升七合

橋本村 地藏峰寺　高八石

那賀郡

村	寺	高
沖野々村	法然寺	高三石
豊田村	福琳寺	高八石九斗
東國分村	國分寺	高三石二斗
曾屋村	正福寺	高七石
西坂本村	誠證寺	高十六石五斗
森村	毘沙門寺	高六斗六升

伊都郡 上那賀共

村	寺	高
葛蒲谷村	地藏寺	高五石四斗六升四合
下兵庫村之内	護國寺	高二十石
粉川村之内	粉川寺	高四十六石七斗二升五合
長田	觀音寺	高五石

有田郡

村	寺	高
廣中野村	法藏寺	高七石
湯淺村	深專寺	高三石
同村	福藏寺	高一石八斗六升
廣村	養源寺	高九石四斗三升三合

東村 圓滿寺 高二石
土生村 禪長寺 高七石
栖原村 施無畏寺 鄕役米免許 高九拾石三斗七升八合

日高郡 南海士

土生村 道成寺 高五石
門前村 興國寺 高十三石

牟婁郡

神山村 光福寺 高五石
湯峰村 東光寺 高五石
新宮 無量壽寺 高八石
妙法山寺 高四石一斗八升
濱の宮村 補陀洛寺 高五石
有馬村 安樂寺 高十石
尾呂志組上野村 長德寺 高五石五斗

松坂

松坂町 龍泉寺 高九石四斗
船江村 藥師寺 高六石五升一合

高五石
高三石
高三石
高五十石
高七石
高五石
高一石一斗二升
高二石二斗二合
高一石六斗四合
高一石四斗八合
高一石五斗四升六合
高二石四斗二升
高一石八斗五升四合
高一石二斗五升四合
高二石四斗一升五合
高十石

白子

丹生村 神宮寺
西導寺
知禪寺
山田 世儀寺
伊勢寺村 横瀧寺
國分寺
加波村 東演寺
深野村 加福寺
猿山村 圓照寺
七日市村 碧雲寺
瀧野村 慶法寺
野々口村 祥願寺
田引村 禪源寺
下瀧野村 正順寺
藥王寺村 毘沙門
朝田村 朝田寺

高一石　大別保村　圓應寺
高四石三斗　上野村　光勝寺
高廿四石三斗五升六合　圓光寺
高三石　三行村　長壽院
高二石　龍腹寺
高百石　久知野村　慶光寺
高四石八斗五升　山田井村　千福寺
高二石五斗　今井村　觀音寺
高一石五斗一升五合　甚目村　善導寺
高一石　一色村　泉福寺
高二石三斗二升五合　一志村　藥師寺
高九斗五升　肥留村　金剛寺
高五斗二升　岡村　稱名寺
高四石四斗　寺家村　觀音寺

田丸

高二十石　朝熊岳　金剛證寺
高二十三石　宮古村　廣泰寺

野篠村　國東寺　高二十石
田丸村　西光寺　高十石
長谷村　近長谷寺　高五石
神坂村　金剛座寺　高三石
切原村　飯盛寺　高三石
下有爾村　能滿寺　高一石二斗
向彌見村　醫王寺　高一石三斗八升

一同日名草民政局參事へ告達
今般寺々御寄附地上り切に相成候筋幷其外共敷地又は境内に相成候分各郡申合右石高巨細取調可申出事

一明治四未年三月八日各郡民政局參事へ布達
別紙之通被　仰出候付現在の境内を除之外御寄附地等當年より悉皆上り切候筈候間左之社寺へ達之儀宜取計候事
別紙は前記太政官令なり略す

名草郡
日前宮社領　高三百石
邦安社領　高三十三石

高十五石三斗三升二合

御供米十石祭料米三石六斗　有本村　若宮八幡宮社領

御祈禱料金二十兩

高廿石御供米十俵　伊太祈曾村　伊太祈曾社領

高二石　里　村　日吉社領

御供米五石　鳴神社

高八石五斗二升一合　中の島村　崇賢寺領

高一石九斗　神前村　法紹寺領

高二石　寺内村　滿願寺領

高三石三斗八升二合　新内村　久成寺領

高三石　津秦村　藥德寺領

海士郡　西名草

高十石朱印地二百石　刺田彦社領

高三十二石六升二合　玉津嶋社領

高廿八石六升一合　和歌天神社領

高十石六斗三升三合　和歌村　東照宮神主屋敷

高二斗一合　湊　領　東照宮神子屋敷

	東照宮神子吉頭	二人扶持
闘戸村	矢之宮社領	高三石
湊 領	蛭子社領	高三石
加太浦	淡嶋社領	高五石
藤白浦	藤白社領	高六石
梶取村	總持寺領	高八石
別所村	願成寺領	高三石
岡町	林泉寺領	高二石九斗九升二合
東松江村	松林寺領	高五石五斗六升七合
中島村	總福寺領	高一石九斗七升六合
湊村	明王院領	高十五石二斗二升五合
宇須村	淨心寺領	高六石八斗三升四合
和歌村	性應寺領	高二石二斗五升
同村	演光寺領	高二石六斗四升六合
同村	御靈屋敷地	高二石二升一合
岡町	万性寺領	高一石八斗七升四合
橋本村	福勝寺領	高三石

宇須村　眞光寺領　高二石一斗四升五合

那賀郡

小畑村　八幡社領　高三石

小倉　光恩寺領　高十三石五斗四升五合

伊都郡

別紙之通被　仰出候付隅田八幡社へ御寄附高十石四斗二升三合現在之境内を除く之外當年より上切り候筈候間此段同社へ達之儀宜取計事

有田郡

廣中野村　八幡社領　高十石

田村　國主明神社領　同四石八升

須佐社　御供米五石

星尾村　星尾寺領　高三石

小豆嶋村　淨妙寺領　同八斗四升九合

日高郡

熊野浦　熊野社　御供米十二石

入野村　大山神社　同　十二石

牟婁郡

串本浦　本之宮社領　高二石

上野浦　水崎明神社領　同二石七斗四升七合

新宮　同三百五十石

那智山　同三百廿石五斗四升七合

本宮　同三百石

木本浦　王子社領　同三石七斗五合

有馬村　產田社領　同五石

井土村　大馬社領　同五石

那智社　汐崎稜威雄　二人扶持

本宮社家　竹坊大藏　金十五兩

木本浦　極樂寺領　高十三石五斗三升二合

中井浦　金剛寺領

松坂

船江浦　八幡社領　高一石

廣瀬村大明神　天忍穗耳尊社領　同三石

大石村　同　上　同一石五斗

下茅原田村　八幡社領　同三石

村	社領	高
上茅原田村	同上	同一石五斗
小片野村	素盞嗚尊社領	同二石四斗
六呂木村	八幡社領	高一石
深野村	素盞嗚尊社領	同二石
鍬形村	天神社領	同二石
大河村	太神宮社領	同二石
矢津村	素盞嗚尊社領	同一石
垣内辻原村	太神宮御供料	同二石三斗四合
山寺井村	同上	同八石四升四合
井村	八幡社領	同一石三斗九升
八重田村	太神宮社領	同三石
丹生村	丹生高野両大明神社領	同二十石
丹生寺村	白山社領	同一石二斗
殿村	太神宮御供料	同五石
深長村	明神社領	同五石九斗七升
大足村	内宮御供料	同三石
立野村	太神宮御供料	同四石七斗六合

同一石五斗
同一石二斗
同六石八斗三升
同二石一斗七升四合
同三石三斗三升三合
同二石八升二合
同三石二斗五升
同四石
同三石一斗五升
高二石四斗
同五石
同一石
同六石三斗五升二合
同一石二合
同一石八斗八升八合
同六升四合
同四斗九升二合

大黒田村　素盞嗚尊天忍穂耳尊社領
小黒田村　右同社領
山室村　明神社領
桂瀬村　八幡社領
田村　明神社領
勢津村　天神社領
岡本村　太神宮社領
下村　同御供料
大津村　同上
久保村　太神宮社御供料
下出江村　八幡宮社領
上出江村　素盞嗚尊社領
作瀧村　瀧野神社領
深野村　天神社領
波瀬村　右同社領
桑原村　素盞嗚尊社領
青田村　天神社領

同九斗一升六合　七日市村　右同社領
同一石八斗六升　有馬野村　天忍穂耳尊社領
同六石一斗　西黒部村　明神社領
同三石　朝田村　大神宮社領
同一石五斗　庄田村　八幡宮社領
同二石　竹原村　白山社領
同三斗五升　家城村　同　山
同一石　權現前村　須賀社領
同二石二斗二升　下の庄村　太神宮社領
同一石二斗　釜生田村　同　上
同二石一斗二升七合　奥津村　八幡宮社領
同二石　嶋田村　大明神 天忍穂耳尊社領
同五石二斗六升二合　美濃田村　八幡宮社領
同八斗　大石村　瀧不動領
同上　大河内村　西蓮寺領
同五斗　同村　吉祥寺領
同七斗五升　下茅原田村　歸命寺領

同七斗五升
同一斗三升八合
同六斗一升二合
同三斗六升
同一斗九升二合
同五斗三升四合
同八升四合
同二斗六升八合
同一石一斗四合
同七斗六升六合
同五斗二升八合
同二斗八升八合
同六斗四升二合
同一斗五升六合
同二斗
同六斗六升二合
同九斗二合

同村 清光院領
木梶村 雲林寺領
桑原村 桑源寺領
乙栗須村 洞源寺領
家野村 福箱寺領
大俣村 東漸寺領
蓮村 蓮生寺領
青田村 藥師寺領
七日市村 法泉寺領
同村 洞谷寺領
同村 西方寺領
谷野村 長樂寺領
富永村 直心寺領
同村 福田庵領
同村 阿彌陀堂領
同村 貴龍庵領
栗野村 仙瑞寺領

同一斗八升
同九斗九升二合
同三斗一升二合
同七斗五升
同九斗一升六合
同四斗九升六合
同四斗四升四合
同二石
同二石一斗七升四合
同二石八斗五升二合
同一石二斗一升八合
同三石五斗九升二合
同一石八斗四合
同一石八斗二升四合
同一石一斗四升
同一石三斗四升

白子

同村　退藏寺領
同村　薬師堂領
神殿村　正法寺領
神原村　淨源寺領
有馬野村　極樂寺領
下栃川村　稱念寺領
下瀧野村　良泉寺領
西黒部村　西蓮寺領
寺井村　九蓮寺領
波瀬村　地藏寺領
犬飼村　雲林寺領
青田村　盛傳寺領
七日市村　十五堂領
栃川村　長昌寺領
赤桶村　心光寺領
同村　西岸寺領

高一石三斗　中瀨古村　愛宕社領
高五石　郡山村　郡山大明神社領
同一石　南黒田村　天忍穗耳尊社領
同一石　町屋村　素盞嗚尊社領
同一石　中山村　右同社領
同五石　上野村　八幡宮社領
同一石　稗田村　右同社領
同三斗二升　御園村　右同社領
同五石　大別保村　土地大明神社領
同二石　木造村　宇治中川神主領
朱印地高三十石　寺家村　觀音寺領

紀勢御領分高帳には高四石五斗白子領寺家村觀音領とあり御朱印地は御寄附高とは別段なれは高四石五斗とすへきを本記の如く誤りしならん

田丸

高百五十石　相可村　山田春木大夫宛行
同五石　大杉谷　定古清宮社領
同三石　岩出村　若宮八幡宮社領

同二石四斗五升	船越村	土宮社領
同二石八升三合	齊田村	大歳宮領
同六石七斗九升	小俣村	八王子社領
同十石	東宮村	兩太神宮社領
同三石	河内村	遷宮社領
同廿三石四斗	小俣村	離宮社領
同二斗七升六合	向彌見村	正樂寺領
同二斗二升八合	同村	春谷寺領
同二斗四升	同村	地藏寺領

右各郡出廳へ申開會計掛へも書付渡す

右合計
　高四千〇六拾九石〇三升六合
　現米四百〇八石六斗
　米拾俵
　九人扶持
　金七拾五兩
　田畑五町二反九畝六歩五厘

右現米以下は大智寺初御切米御供米等廩米渡之分にて紀勢御領分高帳之外也而て高之分前記紀勢御領分高帳の合計と不喰合なるは該帳は恐らく天保比の調なるへく本記と年代懸隔あれは多少の差違は免れかたし其事由詳にするを得さる也

南紀徳川史巻之百五十六

臣 堀内 信 編

社寺制第六

江戸之部 及他國

眞如院 上野山内四軒寺 天台宗

眞如院は寛永二年十一月天海僧正忍ヶ岡の地を賜り寛永寺（寛永寺の勅號を賜りしは後慶安年中なり）を創建の翌年則寛永三丙午年　龍祖御建立ありて僧豪倪（後紀州雲蓋院の住職となる）を住職に命し給へり後世々の御菩提所として歴世初の靈牌を安置せられ兼て御宿坊に宛らる（上野芝兩山には三親藩初大小諸侯悉く宿坊といふを置き　將軍家御參詣豫參の時の休憩所裝束着替等の便に供するは幕府時代の慣例なり）即ち東叡山内四軒寺町に在て悉皆公家の營繕に係り元祿安政年間兩度の火災に罹りしも其時々皆公家より再建せられたり（安政間の火災は蓋し安政七年即万延元申年なるへし而して文久三亥年再建經費五千七百廿九兩一歩銀百三匁四分八厘と錢二百廿三文を要し内三千五百十八兩三歩二朱と銀六十三匁一歩を眞如院より出金せる由此時御作事役人詰切營繕佛具類初勝手道具向迄悉皆新調ありし由他記に見へたり山内の寺院は年々大師の佛會興行の爲日光の宮臨御ありて式典の作法定規あるを以て皆一樣の構造なりしといふ）　殿房僧舍の構造如何ありしか圖面傳わらされは詳ならす且つ戊辰五月彰義隊の亂兵燹に罹りて悉く灰燼に屬し今や其舊跡さへ那邊にありしか殆と辨しかたき迄に替れり唯地坪等は左の如くなりしといふ

地坪千六百五拾二坪

奥向建家坪四百九十坪

表長屋土藏向内長屋向馬建腰かけ其外共

此坪八十四坪七合五勺

合建家坪數五百七十四坪七合五勺

一大慧公以降は　公子孫の御葬儀は重もに當院に於て行わせらる然れ共慈眼大師の遺制として東叡山坊中は各寺院共墓地を置かす唯護國院を以一山之總墓地と定たるよし（中古藤堂家にて其宿坊に葬埋を行ひし事ありてよりいつとなく他寺院も是に倣ひ或は墓地あるもありとなり）故に眞如院に墓地なく地亦狹隘なるを以て護國院に御埋葬御廟墓皆同院に在り奉仕供養は固より眞如院の擔任なれは寺領且御佛供料は同院に宛行われ護國院へは唯若干金之掃除料を下付せられしのみ詳なるは次記の如し

一眞如院時としては住心院玉泉院覺王院と稱し護國院も龍王院惠恩院等稱する事あり是　上野御門主の御隱殿號を下賜により其一世之を通稱とす元來　御門主御退隱之節は京師より來て奉仕すへきを便法を以て山内之坊中より寺格により給仕を被命其御院殿號を賜わる然るに寺院は定數ありて容易には賜わらすたとへは幕府に在りて松平の稱號を賜るに同し意味也しといへり世記中御隱殿號を記するものあれは略解說す

一眞如院に關するに非され共寛永寺建立之時　龍祖より法華堂を御建立あり釋伽堂と相對して世々之を二つ堂と唱へ莊觀を極めたるか亦戊辰官軍の爲め中堂と共に煨燼に付せられ一を止めす因によつて附記す

寛永寺は寛永三年冬起工同五年落成す此時尾州家よりは常行堂水戸家よりは輪藏御建立なり老中等にも各伽藍建立ありたり

眞如院

寛永三年丙寅紀伊侯源賴宣卿所建元祿十一年羅菑紀伊侯源綱教卿重建

第一世　權僧正豪俔俗姓藤氏雲州人也依州之鰐淵寺豪村（伯州大山西樂院僧正豪圓弟子住持和田坊）脫白及長登台山主雙嚴院（東谷）既而來當山依慈眼大師大師開當山也紀州亞相賴宣卿建法華堂又寛永三年丙寅紀伊侯賴宣卿創建於一院名曰眞如使俔主之茲時大師方統天下台宗之事擢俔及晃海二人掌綱紀元和七年辛酉賴宣卿於紀州和歌浦建　東照宮劍天曜寺十一月大師往彼勸請歸（一本令）(令)圓空掌神事（此依俔推擧）寛永十七年庚申二月圓空入滅十八辛巳命兼主紀之天曜寺二十年癸未四月十七日任權大僧都慶安三年丙戌八月　本照院大王錫號雲蓋院四年丁亥轉任大僧都承應二年癸巳轉任權僧正先是三河鳳來寺及因幡國府新建　東照宮俔皆代　大師往修奉請儀俔爲性身正希言語多才能善筆墨　大師入滅第三年　大猷公入山親致奠祭遂枉駕於當院俔猶在影堂元老酒井讚岐守途馳使報俔俔走還入見賜白銀二百兩時服五以其輔　大師有功也三年甲午俔患口疾　公命國醫進藥紀伊侯親問疾者再每日使侍臣問安否俔自知不起將當院及天曜寺付憲海（海天曜寺三世四空房）而寂乃是年三月十一日也壽六十八

第二世　釋憲海姓小野氏讚州阿野郡林田村人生駒壹岐守高俊之家臣林田高次子幼不慧九歲　伯父圓空慈眼大師當　東照宮七周忌手度十僧其一人也年十八登台山力勞多年受法實憲兼受法性寺圓頓戒遂主西谷放光院轉主北谷蓮華院正保元年七月任權大僧都承應三年來主當院兼主江州柏原成菩提院明曆元年轉住紀之天曜寺　本照院大王錫號雲蓋院奏請任大僧都萬治三年八月又奏請任權僧正晚稟大王以當院付敬海自住天曜寺後建長保寺又退天曜隱居州之梅田自號一隱元祿五年壬申四月二十一

日寢於紀之和歌山壽八十九資性英敏尤長論義　本照院大王嘗每夜深潛就其房咨禀請益如此月餘先達授受法門盡極其蘊出于其門者覺林坊幸憲日嚴院堯憲雙嚴院宗海咸一時英才云

第三世　釋敬海姓中川紀州人也爲紀伊大納言光綱卿猶子禮久遠壽院准后薙髮爲憲海弟子承應三年甲午主台山慧光院重建一新某年轉任大僧都曁憲海退當院來嗣席無何染疾擧宗海嗣主寬文十三年癸丑自還和歌山元祿七年十二月二十六日寂す

以下第十世に至る院主の略傳あれ共必要なきを以て省く唯歷世繼承の畧左の如し

第四世　權僧正宗海依豪俔脫白す寬文七年雙嚴院より遷て當院の主となる同十二年天曜寺を兼主す延寶三年當院を以て宗順に付し自ら天曜寺に住す

第五世　權大僧都宗順　延寶三年宗海に嗣て院主となり不幾遁院

第六世　大僧都慧順　元祿七年養壽院より遷て當院の主となる寶永五年護國院に遷る

第七世　權僧正慧潤　寶永五年修禪院より當院に遷る正德五年八月辭院隱居す

第八世　僧正廣慧　正德五年八月山門地福院より當院へ轉住享保四年十一月轉住紀州雲蓋院

第九世　大僧都靈如　享保四年十二月自修禪院轉住當院同十四年三月谷中感應寺に轉住す

第十世　權僧正覺深　享保十四年三月泉龍寺より當院に轉住寶曆七年紀伊公宗を改め祖先の靈牌を當院に移す同十三年四月院を辭して隱居す

以下世々相續き第十六世王泉院義賛（覺王院義觀の弟子なり其當時手替り勤務す）に至り彰義隊の變ありて瓦解す

眞如院寺領及御佛供料

一元和御切米終身錄

慶安二丑新規　　　雙　嚴　院

一八拾石

明曆二申より雲蓋院と認候樣御證文廻る寬文七未六月双嚴院と認江戸にて相渡候樣延寶元丑より御切米百石に成る元祿十一寅暮より眞如院と認候樣以來當時迄無相違渡る

按するに　龍祖寬永三年に眞如院を御創立釋豪倪をして主たらしめ給ふ豪倪元叡山双嚴院の主たりし故其儘双嚴院と通稱したるか而して寬永十八年より和歌天曜寺（慶安三年より雲蓋院と稱す）を兼務紀州に在住二世憲海亦雲蓋院兼職三世敬海は單に當院に主たり依て寬文七未年より江戸渡しになりしならん本記に據れは元祿十一年迄は双嚴院と稱せしものと察せらる

一近世御宛行御佛供料等　　　上　野　眞　如　院

一米百石

一御靈屋料銀七枚　觀達院樣

一同　三枚　葆光院樣

一同　三枚　瓊淳院樣

一同　三枚　鬘珠院樣

一同　三枚　神光院樣

一同　三枚　珂月院樣

一同　三枚　麗如院樣

一御佛供料銀三枚　法緣院樣

一同　三枚　清泰院樣

一同　三枚　心淨院樣

一同　三枚　普現院樣

一同　七枚　資成院樣

一同　七枚　本性院樣

一同　三枚　琮玉院樣

一同　三枚　令光院様・　一同　三枚　蕙岑院様

合（米百石／銀六十枚）　但御廟は護國院に有之も眞如院にて御供養故に本記の如し

此外年中御供具

貴成院様　金百疋　正月御定之通御靈前へ

泰良院／芳樹院　様　金百疋つゝ　御證忌日に付御牌前へ

本性院様　金二百疋　同斷御牌前へ

東照宮　銀五枚　十二月に御膳料して

覺明院様　同三枚　同月御佛具料して

御祠堂金　御廣敷より御寄附

一文化八未年五月御寄附

圓妙院様

金八十兩　泰良院様　御牌前永代御回向料　御一方金二十兩つゝ

慈泉院様

慈緣妙智様

一弘化元辰年十二月御寄附

金三十兩　神光院様　永代御日牌御施餓鬼料

一同四未年八月同

金三十兩　琮玉院樣　右同斷

一嘉永二酉年七月同

金三十兩　令孝院樣　右同斷

一同三戌年四月同

銀五十枚　憲章院樣　永代御祠堂料

金三十兩　御同所樣　永代御施餓鬼料

但奥向比丘尼初廿五人より納付之よし

一同五子年七月同

金三十兩　蕙岑院樣　永代御日牌御施餓鬼料

一安政三辰年十二月同

銀三十枚　觀如院樣　永代御祠堂料

同五十枚　舜恭院樣　右同斷

戊辰兎解

一慶應四辰年五月上野彰義隊の事あり十五日拂曉官軍四方より火を放て亂擊一山修羅の街となり焰炎天に漲り彈丸雨注す其最中玉泉院義賛は身命を抛ち各靈牌を火炎中より救ひ出し奉り辛ふして兩大師堂境內輪王寺宮御歷代御廟御構內へ遷座此に一晝一夜を明かし頓て湯島喜見院輪王寺宮の直末にて大寺と稱し湯島天神の別當府下廿八ケ寺の一上野執當持の寺也維新後廢寺となるへ護送同年七月赤坂御本邸へ奉送御庭御堂へ安置し奉る則左の如し

東照宮御神像　御一躰　假箱入

外に{御神酒瓶子　一双 / 御茶湯器　一組}添

南龍院様　清溪院様　深覺院様　高林院様

大惠院様　菩提心院様　觀自在院様　香嚴院様

舜恭院様　顯龍院様　憲章院様　寶池院様

一生院様　觀達院様　孝順院様　葆光院様

空如院様　命孝院様　源生院様

御十九方　假箱に入　御茶湯器　一組添

一木瓜御厨子　一躰

内　御牌銘　十枚　無地板廿枚

御代々様御牌銘

御先祖代々無地板　二十枚

阿彌陀尊之畫像折表具　一枚

一木瓜御厨子　一躰

顯龍院様　御尊牌

一木瓜御厨子　一躰

憲章院様　御尊牌
右へ御茶湯器　三組添
一舜恭院様御染筆　一幅箱入
一蓮糸之曼陀羅　二幅箱入
外に　紺紙金泥之陀羅尼　一幅添
右之通御長持一棹に入
大奥御清之間へ御安置之筋
一木瓜御厨子大小　拾四躰
舜恭院様　貞恭院様　顯龍院様　鶴樹院様
憲章院様　觀如院様　本地院様　葆光院様
知德院様
公邊之御筋
俊明院様　心觀院様　文恭院様　廣大院様
外に　阿彌陀尊像　二躰
右へ御茶湯器　一組添
右之通長持一棹に入都合長持二棹に入此外御膳具等は追て還付のよし
一右御靈牌同年七月十八日御用人古田紋兵衛守護紀州へ出發す御道中出家御供に不及旨達したるに

も不拘玉泉院義贇は遮て願出弟子一人召連れ御供なしたり

一明治二巳年十一月十日左之通り東京御留守居より眞如院手代の玉泉院へ達す

今般御一新に付從　朝廷被　仰出之品も有之藩政に被致改革自今藩知高二十分の一を以正三位樣用途宛に被相定　朝廷奉職幷治民に付ての用度の外は總て二十分之一を以て被取計候筈に付ては是迄之十分一被相贈候旨紀州より被申付越候此段可得御意如斯御座候

右一通

今般御藩政御改革に付東京諸寺院へ御安置之御位牌不殘靑山御殿へ御安置相成候筈に付御位牌御佛器類共有之向は御差出有之樣致し度就ては是迄御備之御佛供料は以來不被遣筈候此段可得御意如此御座候

件之趣各寺院及甲州身延久遠寺へも達したる也各寺の部には全文を畧す

一同年十二月東京に　御廟有之御寺方へは向後御一方之御廟に對し年中金壹兩御二方に候はゝ金二兩右割之通御幾方にても是に准し御佛供料御宛行之筈と若山御家令より東京御留守居方へ達す

一同三年年五月廿九日玉泉院へ左之通達す

是迄　永隆院樣幷　舜恭院樣御初之　御子樣方へは御佛供料御寄附有之　大惠院樣御初之　御子樣方へは御寄附無之候得共向後護國院境内に御納り之　御方々樣へは左之通御寄附之筈

右之通に付御寄附之銀六十枚は已來不被遣候事

一貫成院樣麗如院樣圓月院樣御位牌是迄貴院に御安置之處御一新に付御廟有之淩雲院へ御安置之

筈候間同院へ御遷座之儀御取計候樣
一本性院樣御位牌も貴院に御安置之處右は若山表に御靈屋御寶塔有之於同所御供養有之候事に付於貴院は御供養に不及候間右御位牌御佛具共御差出有之候樣
一深入院樣御位牌是迄護國院に御安置之處御廟は仙壽院に有之事故已來同院へ御安置相成候筈に付其段護國院へ御達御位牌御差出候樣
一御一新に付御廟無之御寺へ御位牌御安置は無之筈に付貴院芳林院樣泰良院樣御位牌御差出候樣

上野眞如院代　玉　泉　院

一明治三午年四月左之通定る
御切米　拾石
御佛供料金廿三兩
内
永隆院樣　孝順院樣大惠院樣御子　圓妙院樣　葆光院樣
慈泉院樣　妙泰院樣　知幻院樣　春窓院樣
空如院樣　覺明院樣　觀達院樣　法緣院樣
普現院樣　清泰院樣　心淨院樣　鬘珠院樣
瓊淳院樣　神光院樣　琮玉院樣　蕙岑院樣
仚孝院樣
右金壹兩つゝ
智境院樣　圓心院樣　唯心院樣

右金二百疋つゝ

金百疋つゝ　　　　　　　　　方々様御實母　涼心院殿

信受院殿

一同年六月左之趣玉泉院より願出之處御廟無之寺院に御靈牌御安置不相成義は御確定之事にて外寺院へも差支難及取扱旨を達す

凌雲院境内に有之　御内方様御廟之儀は眞如院由緒書之内別紙之通奉申上候次第に付凌雲院に有之候とは乍申万事眞如院持護國院境内に御座候　御方々様御廟御同様之事故是迄之通眞如院へ御安置に被成下置候様との趣

右一通

一當眞如院儀は東京にて　公儀へ通り表向之御菩提所厚御由緒之廉も有之且是迄御宿坊をも兼勤被　仰付依之　御嫡子様御實母様御子様御廟有之儀に付御方々様御尊牌御安置之御儀は勿論御代々様御尊牌不殘　御簾中様御尊牌同斷御安置に相成是迄　御參府中は御參詣有之　御代々様御初御總躰へ御直に御燒香御拜被遊御證忌月には御表より　御名代御奥より御代參等有之且又　御方々様御在世御附衆并御比丘尼衆は月々御忌日并御内證日等には御參詣被成候儀に付ては向後乍恐　御尊牌之御形容其外御佛具類等は如何様御改變被遊候共何卒御代々様御初　御方々様御尊牌是迄之通御安置に被成下置候様此段奉願候との趣

一同年同月玉泉院より左之通申出る

先般　御廟無之　御尊牌樣方幷御佛具類不殘差出候樣御達奉敬承候右は一昨年事件之節夫々身力及候丈け御守護御立退申上　御神像幷御代々樣御尊牌不殘　御嫡子樣御子樣方御尊牌事件后御國へ御假移申上置候に付御殘之分御尊牌樣方此度其儘不殘奉差上候
一御道具可奉差上候處事件之節平日御入用之御品は不殘燒失土藏へ仕廻置之分は土藏打破り候者有之不殘紛失仕奉差上兼候
一當眞如院に御廟有之　御尊牌且此度凌雲院へ御移之分御三方御尊牌共事件之砌危急之場合一先慈眼堂へ御立退申上御殘之分戰爭濟早速御立退申上度心得にて翌日より數日手を盡し候得共其跡は引續き嚴重に取締六ヶ敷無餘義其儘に有之其後段々折合相立慈眼堂之儀一山學頭へ御引渡に付御殘之御尊牌急き取調追々御立退申上候處御損し且御大破御形無之紛失同樣之御分も有之右等戰爭とは乍申不行屆之段深く奉恐入候右に付別紙に御修復御新調等奉願上候との趣

觀達 院樣　孝順 院樣　葆光 院樣　空如 院樣
令孝 院樣
右一昨辰年御國へ　御代々樣御尊牌と御一所に假御移し申上置候
春窓 院樣　覺明 院樣　法緣 院樣　淸泰 院樣
心淨 院樣　鬘珠 院樣　瓊淳 院樣　信受 院樣
右御破損仕候
永隆 院樣　圓妙 院樣　慈泉 院樣　妙泰 院樣

知幻院様　　普現院様　　神光院様　　琮玉院様
慧岑院様　　智境院様　　圓心院様　　唯心院様
貫成院様　　麗如院様　　珂月院様　　涼心院様

右御大破御形無之紛失仕候不殘御見分之上御修復御新調奉願上度右之内凌雲院へ御移可申上
御三方様御尊牌之儀も御一所に御新調被成下同院へ御移し方御達之通御取計申上度心得に御座
候との趣

右一通

御方々様御宮殿幷御佛具類共都て去る辰年五月中事件之砌御燒失に付ては永隆院様御初御廿一
方智境院様御初御九方御宮殿幷御厨子御佛具類無之邊も先々之御品に隨ひ御新調願上候儀は御
時節柄難相成且向後は御寺院向總て先々之十分一に相成候儀に付ては是迄御庭御堂へ御安置之
御宮殿幷御佛具類其外御膳具等都て御道具類不殘追て御庭　御堂御再行迄當院御納之御尊牌様
方へ其儘御用申上度左候は御宮殿御道具類は一と通り不殘御揃に相成居申候間直様御間に合候
間此段御移用被　仰付候様奉願候との趣

按に　戊辰の變上野一山無極之慘狀に陷りたるは言語同斷之始末にて眞如院(即玉泉院)の如きは靈廟殿客殿書院初一物も不殘
灰燼となり僅に殘りし二ヶ所の倉庫も打破られ舊記什器悉皆奪掠に逢ひ漸く一身恙なきを得領て　日光宮初一山僧侶は
謹愼を被命玉泉院は身を措く處なく不取敢法縁三田實相寺へ潜居稍々法務を維持せしか明治二年十一月に至り山内僧侶謹愼を
被免隨て燒失跡の舊地を各寺院へ下付との事にて法脉の折合も立往々歸住之者あれは玉泉院にも歸山致し度更に如故地所下付
を懇願付ては時節柄如先規官より再建を願わす先師志願にて先年來御勘定所へ預け利殖を願ひ置たる二千五百金の內を以何樣

にも假建築を賜り度尙勝手道具も官費を願わす自辨すへきに付該金の內三百兩を付與ありたしとの請願書を提出せり仍て司農府へ紹介之處該金は熊野三山貸付所へ托し利倍せしめ置たるも同局は江戶瓦解と共に金融一切杜絕是一般之事如何共術なしとの事然るに明治三年六月上野山內へ大學東校病院建築に付眞如院外十四ヶ院境內用地に可成由東京府より之達に接し果して然らは代地も可出由なから爾後何等の沙汰もなく何分三田居住にては一山法用等不便を極むる旨にて更に法類壽昌院といへるへ轉居戊辰後懸空無一物の困厄に千辛万苦經營しつゝ假靈牌を安置法務勤行不怠れ共如何共見留付難く且壽昌院も時勢柄不用の場所取疊み手狹ゆへ護國院境內御廟守と唱ふる地所幾分を借り受僅の草庵を營み假御靈牌を安置御菩提を勤務いたし度先師御預け金之內千四百金下付相成度云々又は御庭御堂御不用に被爲在候はゝ其儘護國院境內へ御引移し眞如院となし賜り度抔種々再々哀願の品ありたれ共國家非常の時運御家產經營に汲々一寺院之上固より顧るへき場合に非されは採用に不至荏苒經過之內遂に山內春性院に謀り同寺亦特に配意を加へ不用の佛間を讓り其寺地を割與へ明治六年に至て假小刹を構へたり如斯百方辛苦の程深く御愍恕同年十二月廿九日遂に金七百圓を下賜せらる是今の眞如院にして下記東京府廳へ屆書の如し後明治七年貞淑大夫人の薨せらるゝや昔時の眞如院と違ひ微々たる草庵加之御塋域の地なきを以　菩提心公御遺命ありと雖も事實止むを得させられされは再ひ池上本門寺を御塋域に定め給へり然れ共尙万一に備へ給ふの議ありて明治十四年六月眞如院裏隣地に於て一墓地を購入せらるゝもの左の如し

北豐嶋郡谷中村乙第四號二の側

墓地二百四坪八合　　中等地價二百四圓八拾錢

代金二百〇六圓三十錢

一明治十八年六月眞如院より東京府廳へ屆出之趣

東京府下谷區上野櫻木町四十番地

同町寛永寺末寺

天台宗　眞　如　院

一本堂　間口四間半　奥行二間半

一庫裏　三十四坪

一境內　九百五十二坪九合七勺　民有地

一什　器　地藏尊木像　一軀　法華經　一部

例時懺法　五部　當院歷代位牌　十六基

一寄附物　密(柤)〔櫃カ〕　一具　但滅金佛具付　一同　滅金香爐　三個　但木造臺付

一同　唐銅燈籠　一對　一同　滅金花鬘　一具

一同　金襴法被水引　一具　一同　同　打敷　一枚

一同　靈膳　四通　一同　靈札　一脚

右明治五年九月正二位德川茂承寄付

一永續金　年金三十圓

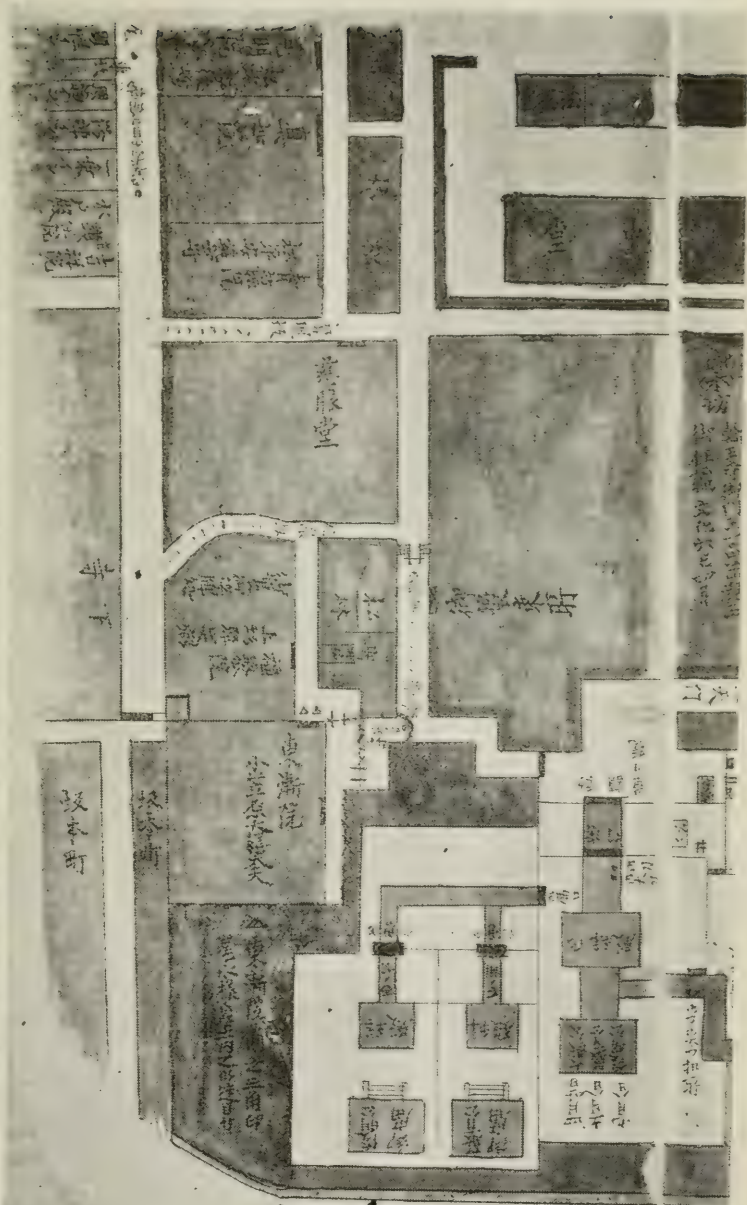
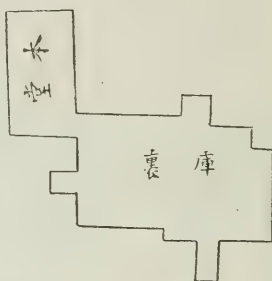
明治十三年寛永寺一山へ對し下賜公債利子の內每歲受納

一檀家　一戶

右之通　右院住職　奈良義深

一眞如院殿房靈牌堂等之圖面は戊辰の時燒失して存せす爾後上野山內は公園地となりて悉皆變革其所在地さへ今は知りかたし故に江戶舊圖を掲けて其位置を示す

維新前
真如院 護国院
凌雲院位置図

右圖は奥御供方上野御參詣の時の覺圖也故に御刀御手水の符號ある也眞如院旧時の位置を示さん爲に掲ぐ

護國院　上野山内　天台宗

護國院は上野一山の總墓地にして亦眞如院之墓地たる事同院之部に記する如し當院之御廟墓は

慈緣明智大童女　菩提心公御女　寛延三午年八月十七日御卒去

慈泉院殿了空妙眞大童女　同　寶暦七丑年二月廿八日同

孝順院殿性覺本明大居士　大慧公御子織部正樣　寶曆七丑年六月十七日同

圓妙院殿證心法忍大姉　菩提心公御女　寶曆八寅年四月廿六日同

凉心院全性達修大姉　大慧公御由緒の方　明和六丑年十二月廿四日同

知幻院殿空華了薫大童女　觀自在公御女　同八卯年正月廿六日同

妙泰院殿鐘月惠光大童女　同　同年二月十二日同

春窓院殿自空證信大童女　同　同九辰年三月十七日同

空如院殿法山淨林大童（女）一本子　同御子　安永三午年二月廿三日同

智境院感月即應大姉　大慧公御部屋　安永四未年六月十三日同

永隆院殿慈光圓壽大姉　菩提心公御實母　天明元丑年八月廿一日同

圓心院性慈即生大童子　葆光院樣御嫡子　同六午年四月廿二日同

唯心妙性大童女　同御女　同八申年六月七日同

信受院蓮池妙往大姉　觀自在公御部屋　寛政八辰年五月十七日同

觀達院殿圓融性淨大童子　舜恭公御嫡子　同十一未年六月廿五日同

覺明院殿觀性元眞大姉　觀自在公御養女實葆光院樣御女　享和元酉年三月十七日同

法緣院殿空智普照大童女　舜恭公御女　同二戌年十二月廿三日同

普現院殿了達諸法大童女　同御女　文化二丑年五月十七日同

淸泰院殿彩玉妙臺大童女　同　同十酉年四月十二日同

瓊淳院殿光燦乘誓大童女　顯龍公御女 同十四丑年十月四日同

葆光院殿徹照藏具大居士　菩提心公御子修理大夫樣 文政八酉年正月廿三日同

心淨院殿智證妙諦大童女　顯龍公御女 文政八酉年六月二日同

鬘珠院殿蘭室妙薰大童女　同 同十一子年六月二日同

神光院殿智燈照曜大童女　同 天保十五辰年十月二日同

琮玉院殿貞鎖德馨大童女　憲章公御女 弘化四未年五月九日同追て四月十七日になる

令孝院殿知恩無生大童子　同御子 嘉永元申年十月二日同追て九月十日になる

蕙岑院殿　同御女 同五子年閏二月十六日同追て四月十七日になる

右悉く新墓地の方にあり唯慈緣明智の靈庿のみ總墓地にあり

保福院乘如妙道大姉　菩提心公御由緒の方松平下總守忠和殿生母寶曆九年九月十九日卒

右墓は總墓地慈緣靈庿の側にあり寶曆九年十二月廿九日　菩提心公より日牌料御寄附年回法會は松平家より於上野執行之旨寶鑑に記あり

一右慈緣院殿凉心院殿唯心院殿信受院殿の外諸靈御證忌日毎に金百疋つゝ永隆院殿へは七月施餓鬼料金一兩御證忌日には金二百疋を年々御備へあり但御用人判帳立

外に　深入院殿御證忌日五月廿八日に金百疋十二月に御佛具料銀一枚を御備へあり

深入院殿御廟は千駄ヶ谷仙壽院に有之處中古御靈牌を護國院へ御遷座になりしを以て也

一護國院へ毎年十二月左之通御宛行御用人判帳立

金三拾兩　永隆院様觀達院様御初御方々様御廟有之年中御勤有之候に付被下之

金二兩　永隆院様御廟同斷に付同院念佛堂道心坊主頭取一人へ

金一兩つゝ　右同斷に付道心坊主七人へ

金一歩　觀達院様普現院様清泰院様瓊淳心院様靈珠院様神光院様心淨院様琮玉院様合孝院様惠畀院様御廟同斷に付道心坊主頭取一人へ被下

束金一兩　右同斷に付道心坊主七人へ被下

金一兩二歩二朱　例年之通道心坊主頭取一人へ被下

束金五兩二分　同斷道心坊主七人へ被下

右之外左之通文政七申年永代祠堂金として御廣敷より御寄附

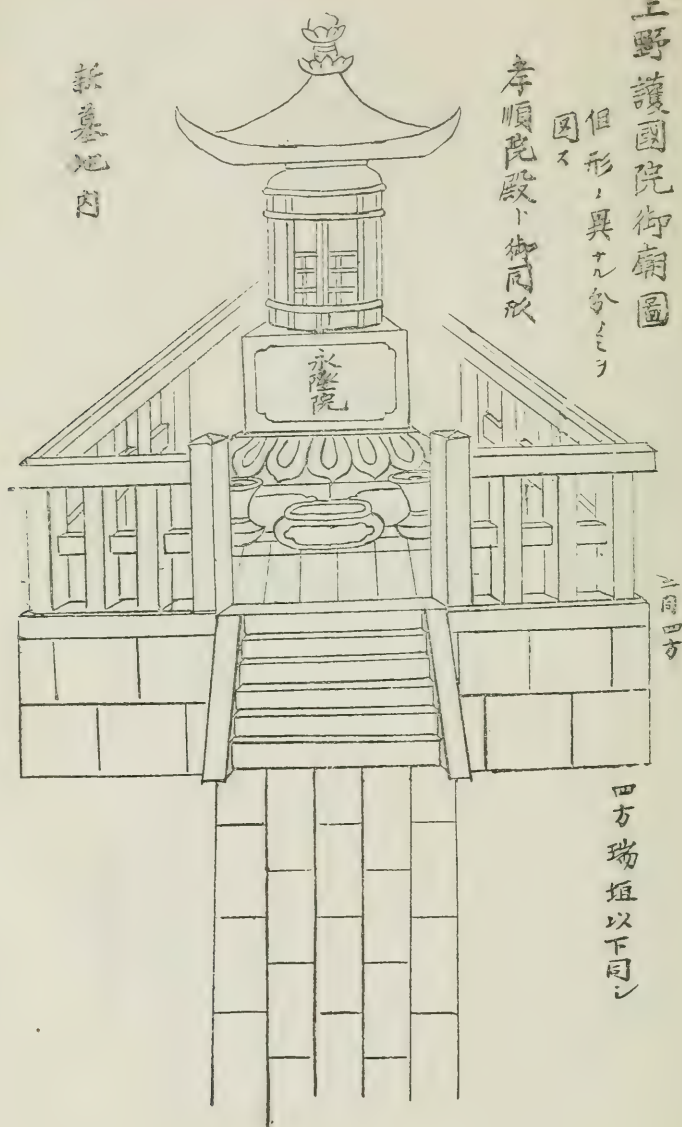
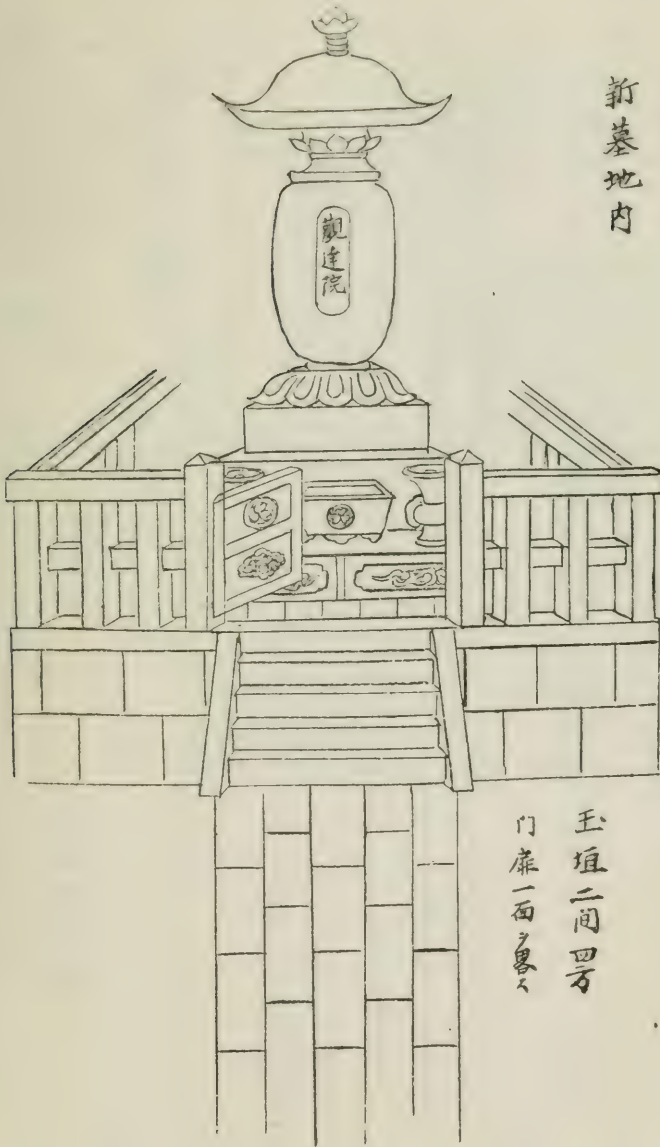
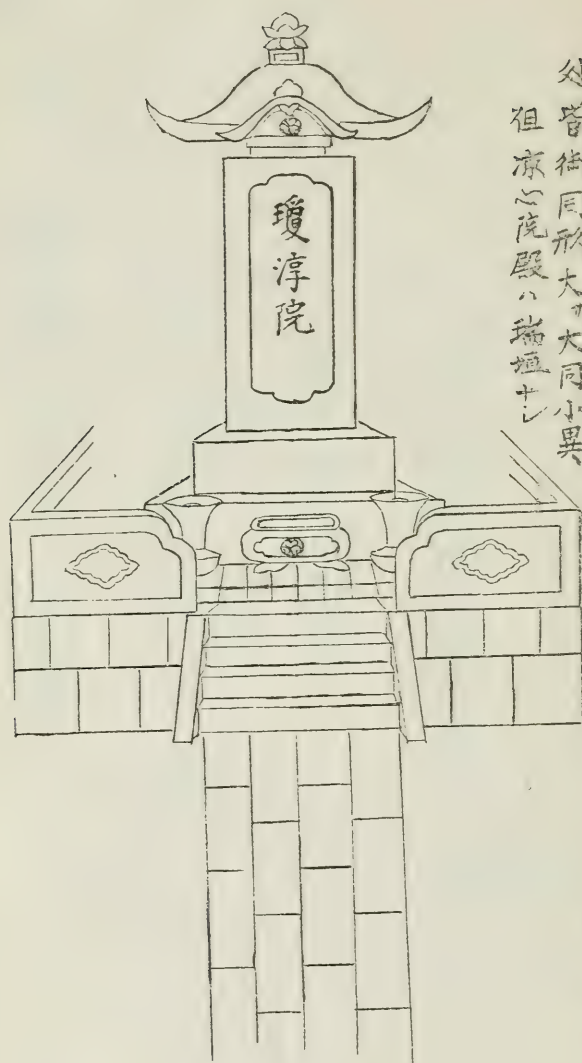
信受院殿御牌前御廟所へ　金五十兩

一明治二巳年十一月十日藩政改革に付御寺方御宛行從來之十分の一に減額及ひ御廟無之靈牌は都て還納との儀眞如院同様之趣を護國院に達す

一同三年年四月以來御宛行左之通り定り道心坊への被下は廢止之旨を達す

御方々様御廟有之付

一金三兩　谷中　護國院

上野護國院御廟圖
但形ノ異ナル分ノミヲ図ス
孝順院殿ト御同所
新墓地内
永隆院
上同四方
四方瑞垣以下同シ

新墓地内
観達院
玉垣二間四方
門扉一面ヲ畧ス

璦淳院
新墓地二十六廟ノ内 孝順院殿 永隆院殿 觀達院殿 唯心院殿ノ
外皆御同所大サ大同小異
但淳心院殿ハ瑞垣ナシ

比[此カ]一霊ハ〻悠[?]墓地ト特ル方ニ御別葬

慈縁妙智大童女霊位

寛延三午年

二尺四寸程

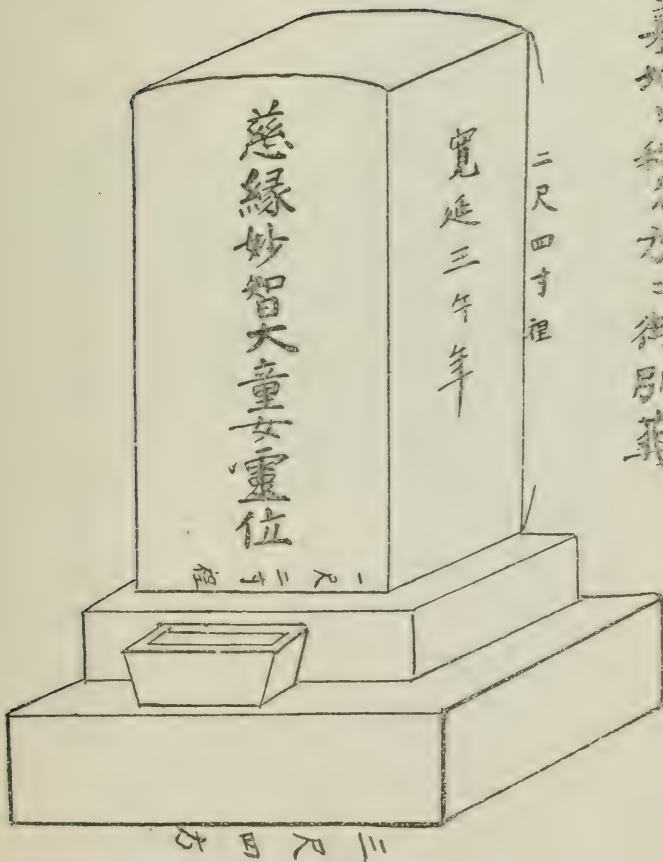
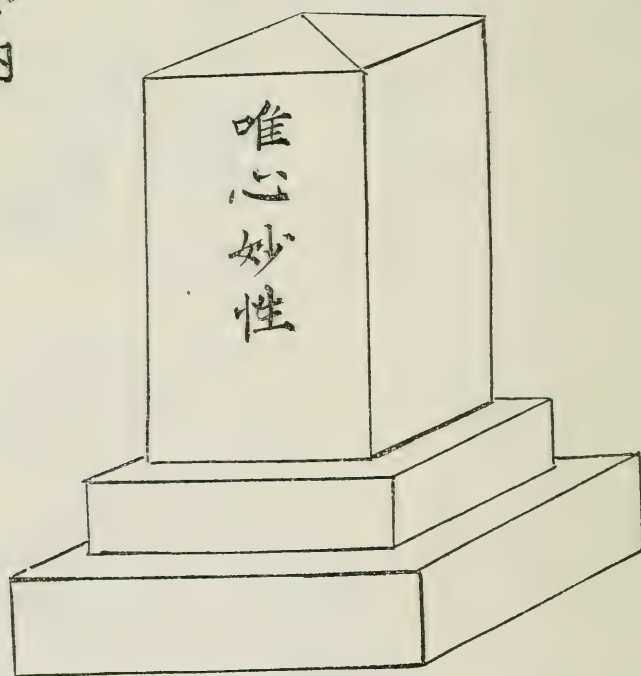
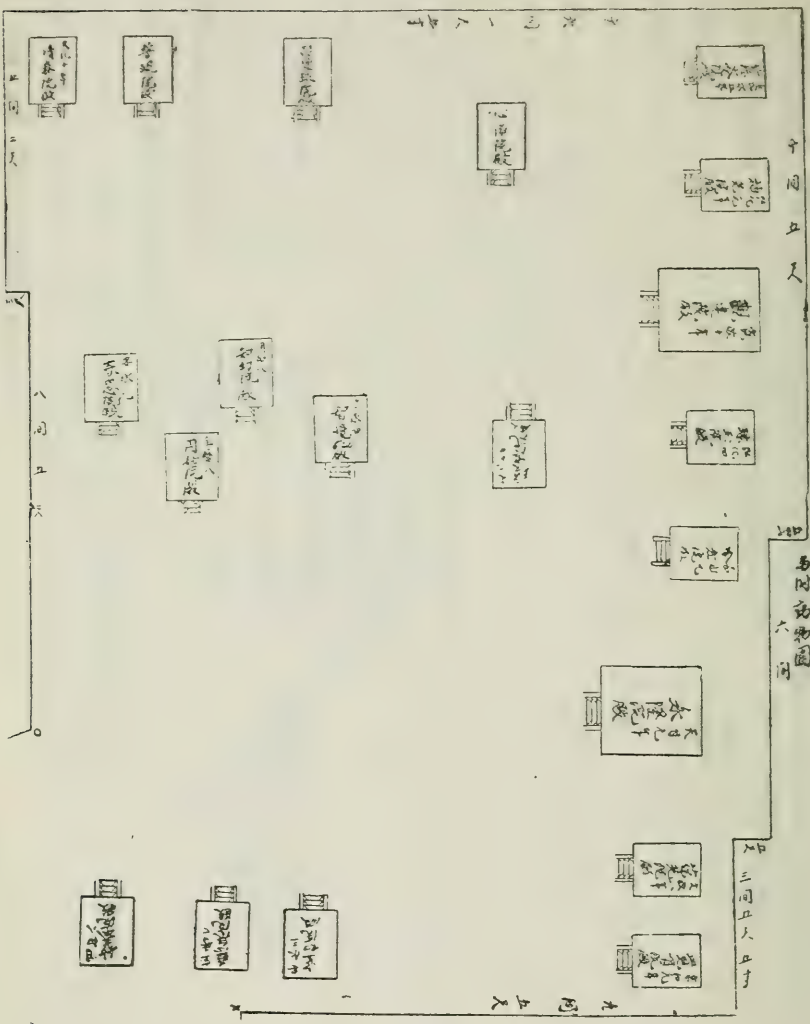
一尺二寸程

三尺四方

新墓地別構ノ内
瑞垣石垣ナシ

護國院新墓地內

永隆院殿

凌雲院　上野山内　天台宗

當院は元來　幕府及ひ三卿方等の御菩提所也弘化三午年八月　憲章公清水家より　御家御相續により元淸水家にて御逝去方左の靈牌を眞如院へ御遷座御供養あらせらる然れとも其廟は當院に在るを以て年々書面之御佛供料を御寄附なり

本性院殿妙諦普光大姉　憲章公御實母 文政十三寅年三月八日死去
資成院殿覺幻發軫大童子　同御子 天保十四卯年六月七日御卒去
麗如院殿夢覺露幻大童女　同御女 天保十三寅年六月五日御卒去
珂月院殿淨璋玉影大童女　同 天保十五辰年八月廿日同
　御佛供料　米十石

外に　御四方御證忌日毎に金二百疋つゝ御廟前へ御備へ

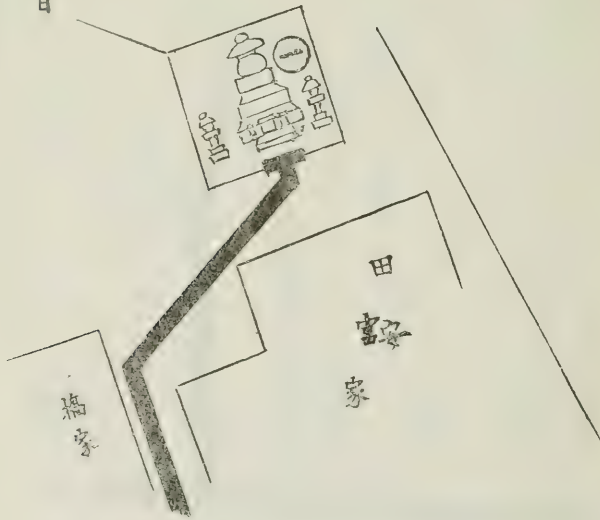
一明治二巳年十一月十日藩政改革に付御寺方御宛行從前之十分の一に減し御廟無之御寺方之靈牌は還納との事眞如院同樣之趣を凌雲院へ達す

一同三午年四月以來御佛供料左之通改正之旨を達す

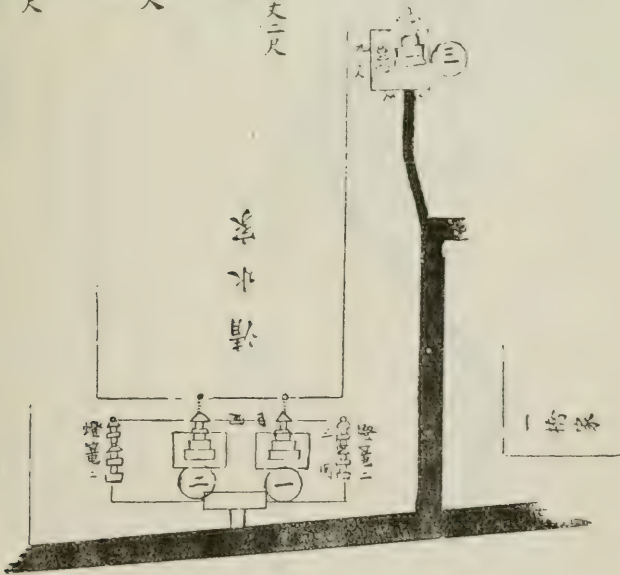
資成院殿　麗如院殿　珂月院殿　御佛供料　米壹石

右御靈牌は弘化三午年八月以來眞如院へ御遷座之處此回之改革により再ひ如舊凌雲院へ御遷座眞如院へ之御佛供料は相止み御廟あるを以て從來之十分の一本記之通り御寄附

一本性院殿には　御宗家女中にて憲章院樣御實母　妙操院樣 顯龍公御實母 と御同資格也　妙操院樣御位牌は今般傳通院より納させ以來御家にて御關係無之事に至りたる故本性院殿迚も同樣之御仕向けに相成可然との事にて當院之御位牌納させ御佛供料は從前之十分の一を束ね御寄付に成たり

東
凌雲院方御墓地図
一 本性院殿 御丈ケ八尺
文政十三庚寅年三月八日
一
田安家
橋家

北

(一) 麗如院殿 御宝塔内丈ケ一丈二尺
天保十三壬寅年六月五日
(二) 資成院殿 同 一丈二尺
天保十四癸卯年五月七日
(三) 珂月院殿 同御丈ケ六尺
天保十五甲辰年八月廿日

溜水
燈籠二
(一)
(二)
(三)

鑑蓮社　芝増上寺山内　淨土宗

當寺は　明信大夫人高林公御簾中の御別當寺にして三蓮社と稱する之一也三蓮社とは岳蓮社松蓮社鑑蓮社にして岳蓮社は　幕府公子靈廟之御別當寺松蓮社は尾州家清堪夫人靈廟の御別當寺とす

寶永元申年四月十二日御逝去明信院澄譽惠鑑光耀大姉と號し奉り芝增上寺境内に御葬送御菩提の爲に　高林公增上寺中に淨刹を御建立御法謚惠鑑の鑑の字を取て鑑蓮社と唱へ靈殿及御別當寺に宛しめ給ふ御簾中の御遺骸はいつれも紀州に御埋葬の例なるに獨り此大夫人のみ不然は何等之所故か詳ならされ共　大夫人は　將軍常憲公の姫君にして　憲廟に先たゝせ給へは御追愛之邊より内旨等ありての事か　尾州公の　清堪夫人源順公御簾中も　將軍文恭公の姫君にして同しく增上寺に御埋葬他の諸侯へ嫁し給ひし幕府の姫君も往々傳通院へ御埋葬の例あり內規ありし事哉不詳甞て增上寺役者より提出したる文化度記錄といふあり　御家より御寄附高は誤りと雖も御由緒の畧粗了知すへし

文化度記錄之寫

増上寺御山内紀州殿御別當　鑑蓮社

一明信院樣

常憲院樣御長女鶴姫君樣　紀伊黄門綱敎卿御簾中寶永元申年四月十二日御逝去高二百石地方にて稻毛領　公儀より御寄附御新葬御法事之儀は萬部之御法事御修行被　仰付候御當山にては　台德院樣　尾州へ御入輿被遊候　靈仙院樣之外万部之御法事之例無之事依て　紀州御屋形より高三百

右御寄附有之御手道具其外御納り之品々有之候事
紀州御屋形より御供養料として御金御寄附有之是は寺社御奉行所へ相届其上御當山役所御聞濟之上諸大名方へ貸出其利金を以て都而御供養申上候事勿論貸出之節は　紀州御館より役人中出席夫々掛り而々列席貸出且受取之節も同斷之事尤返納相滯義は決て無之候得共万一右樣之儀も有之節は御館にて御引請糺度御取立有之候事

一貞恭院樣
俊明院樣御養女種姫君樣　紀州大納言治寶卿御簾中寛政六寅年正月八日御逝去　御遺骸者紀州雲蓋院へ被爲納候得共　大納言樣思召にて尊牌者當院へ　明信院樣御相殿被　仰付候事御法事之儀は　紀州御屋形より其節々被　仰付候從　公儀　御名代御老中方にて御勤被成候事高二百俵　紀州御屋形より御寄附有之候事御手道具御納り之御品々有之候事　公儀より御寄附金御供養料として有之是も　明信院樣御同樣にて諸大名方へ貸出利分を以て御供養申上候事

一俊岳院樣
當公方樣御九男虎千代君文化七午年十月二日御逝去　紀州御屋形御嫡女鐇姫樣へ御言名付有之候に付當院へ御納り有之候事高二十石御藏米　公儀より御寄附有之候事御金御供養料として從　公儀御寄附有之候事貸付之義前件同樣之事
右何れ之金子も　尊靈樣方御供養料之儀に付若相滯候得は全く御供養に差支候事申立候得は　公儀にても不捨置急度返納に相成候事

件之通りにて當寺安置の尊牌左の如し

貞恭院様　舜恭公御簾中　將軍俊明公御養女
寛政六寅年正月七日御逝去御廟長保寺

信恭院様　舜恭公御長女諧姫君松平陸奥守室
文政十亥年八月十日御卒去御廟仙臺大年寺

俊岳院様　舜恭公御聟養子虎千代君
將軍文恭公御子文化七午年十二月二日御逝去

一俊岳公は諧姫君へ御聟養子被　仰出迄にて御引移なく　幕府御住居中御歳五才御逝去之故を以てか御家御菩提寺に御納りなく増上寺本堂の裏に御埋葬依て鑑蓮社御別當となくして守護奉仕すされと別段御佛供料等之事なし

一當寺は元來別圖之所へ御建立之處手狹且裏地坂崖にて時々山崩れ等之患有るを以て安政三辰年四月現今の地に移轉御再建ありたるなり現今の寺地は公園十八號三番地にて元子權現と瘡守稲荷との間に梅林空地ありし所也別圖見合すへし寺説に舜恭公兼て轉地再建之事御配慮被爲在金三千兩を御寄附右を以佛殿初倉庫庫裏に至る迄壯嚴美麗を極め一切御再建あらせられたるよし傳へ承るといへり

一當寺御佛供料等御宛行左之如し

明信院様御佛供料　玄米　百　石

貞恭院様同　同　四十石

信恭院様同　銀　五　枚

右百石則二百五十俵は中古以來増上寺納所役之者へ芝御藏所より渡し内七十俵と三斗四升は方丈初へ配當百七十九俵と六升を鑑蓮社へ下付の由也

駈付人足五人分足留賃
金三兩二歩　鑑蓮社へ渡す
一金二百兩　文化三寅年三月文字通用小判にて御寄附
右明信院様御牌前へ永代常燈幷御日供御菓子永世御供養料として中納言様より御寄附
永々增上寺へ預け利金を以修行之事
一金二百兩　文化四卯年七月御寄附
右貞恭院様御牌前へ前同斷　中納言様より御寄附
但書同斷
一信恭院様御供養料
金百五拾兩　文政十一子年十二月御寄附
右大納言様　一位様　御簾中様御部屋様より御廣敷取扱にて御寄附
右は仕法を以貸付其利潤を以御供養向取賄住職交代之時は一旦御廣敷へ納させ其上後住へ可相渡儀定之趣にて天保六未年十二月願譽天保十五辰年七月十一日彭譽代替之節々其通履行す
一年中御備へ物
正　月
銀二枚　俊岳院様御靈前御備　鑑蓮社へ
銀二枚　貞恭院様御証忌日に付　增上寺へ

銀二枚　貞恭院様御靈前へ

銀一枚　信恭院様御靈前へ御備　鑑蓮社へ

銀二枚　年頭に付明信院様御靈前へ御備　増上寺へ

四月

銀二枚　御証忌日に付明信院様へ御備　増上寺へ

七月

銀五枚　明信院様御施餓鬼料　増上寺へ

東
銀十五枚　所化伴僧 安立院　同二﨟 鑑蓮社　寺家判頭 御供所番僧　所化役者 取次　寺家役者 行者

明信院様御施餓鬼之儀方丈へ被　仰入候に付被遣

銀五枚　増上寺方丈　盆に付貞恭院様御回向之儀安立院を以御賴被仰遣御回向料も同院迄遣し方丈へ宜申述御回向料達候様申遣之

十二月

御鏡餅　六飾　差渡し凡一尺七寸 一備白米三斗宛

右は本尊前　明信院様　俊岳院様　舜恭院様　貞恭院様　信恭院様正月御備として鑑蓮社へ

被遣之

維新後

一明治二巳年十一月十日藩政改革に付御寺方御宛行從來之十分の一に減省及ひ御廟無之靈牌は都て還納との事眞如院へ布達同樣之趣を達す

一同三年年四月以來御宛行左之通に定る

米十石　　明信院樣御佛供料　　從來百石之十分の一

一貞恭院樣信恭院樣は御靈牌計故御靈牌は相納め貞恭院樣御佛供料四十石信恭院樣同銀五枚は相止候事

一駈付人足五人分足留賃金三兩二歩向後相止候事

一同年五月鑑蓮社明信院樣御靈屋を初總躰家根大破及ひ修繕費五百金も可要趣折柄御家令正井壽男出府中評議之上鑑蓮社へ左之通達す

先般相達候通　正三位樣二十分一之御暮方に相成候に付御靈屋御修復向等も不被爲行屆候に付無據　明信院樣御靈牌方丈中可然御場所へ御移し御別當如元御勤御座候樣就ては十分一御仕向之内三石は方丈へ七石は貴院へ御納に相成候等に付其通り御心得有之樣

本文之通に付御靈屋幷御建物總て貴院へ被下候事

右同段之趣增上寺役者へも申通之鑑蓮社より承認之受書差出す（右十石は石代五圓餘の割を以鑑蓮社七石分年々金三十六圓餘不替下付方丈へ配當三石も同石代を以今分配すと云）然るに六月三日增上寺使僧靈海參上堂内へ御遷座可致處手狹に有之方丈内佛も差支之品有之付鑑蓮社へ被下置候御靈殿を當分之内方丈別殿に致し　明信院樣尊牌御安置申上度尤修復向之儀は今度改て御寄贈米之分三分一積立置右を以如何樣にも取繕可仕右之通取計候ては御差支無之哉と書面を以伺出（增上寺役者念達初四人連名）依て若山へ伺之上料簡無之旨及答候事

件之趣增上寺役所より達し受たる旨七月附を以鑑蓮社より屆出たり

一同年六月十一日鑑蓮社より左之通相納る

信恭院樣尊牌　一基　但御厨子入

御厨子臺　一　御香爐　一　御茶湯器　一

御三寶　一對　御供物臺　一對　錫御皿　二枚

貞恭院樣尊牌　一基　但假御厨子入

御茶湯器　一　御三寶　一對

右夫々御案長持入　ゆたん棒共

一同日鑑蓮社より積年之御厚恩爲冥加此度返上之尊牌自分安置御供養申度付御佛具之内〇印之分相納餘は下付相成度旨願出により承屆る

一貞恭院樣御宮殿　總丈六尺五寸　同御臺　高一尺二寸

〇一御手机　一脚　一御前机　一脚　一御香爐臺　一　一御香爐　一

一木蓮花　一對　〇一御供物臺　三對 此内一對相納る　一錫御皿　六枚　〇一御茶湯器　一

一御蠟燭立　一對　一御膳具箱　一 此内一二三懸盤御膳御椀之類皆具

一同年六月鑑蓮社より左之通屆出る

御一新に付御改革之御趣意を以　御靈屋幷御建物總て愚院へ被下置難有奉存候然る處元來手廣之場所向後修理見留等も無御座候に付追々取疊掛紙繪圖面之通取縮め修理仕度と奉存候此段申上置候以上

午六月　御別當　鑑蓮社

鑑蓮社維新後ノ圖

方丈

別殿

床

入シナ

入シナ

口

臥物

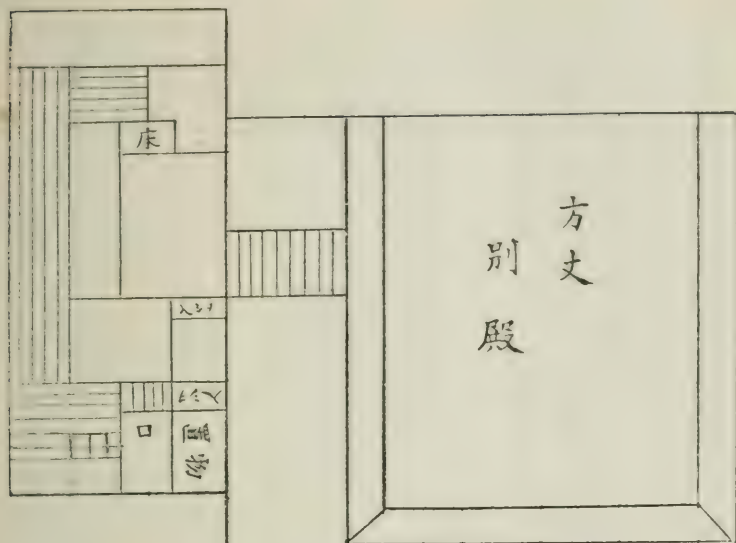
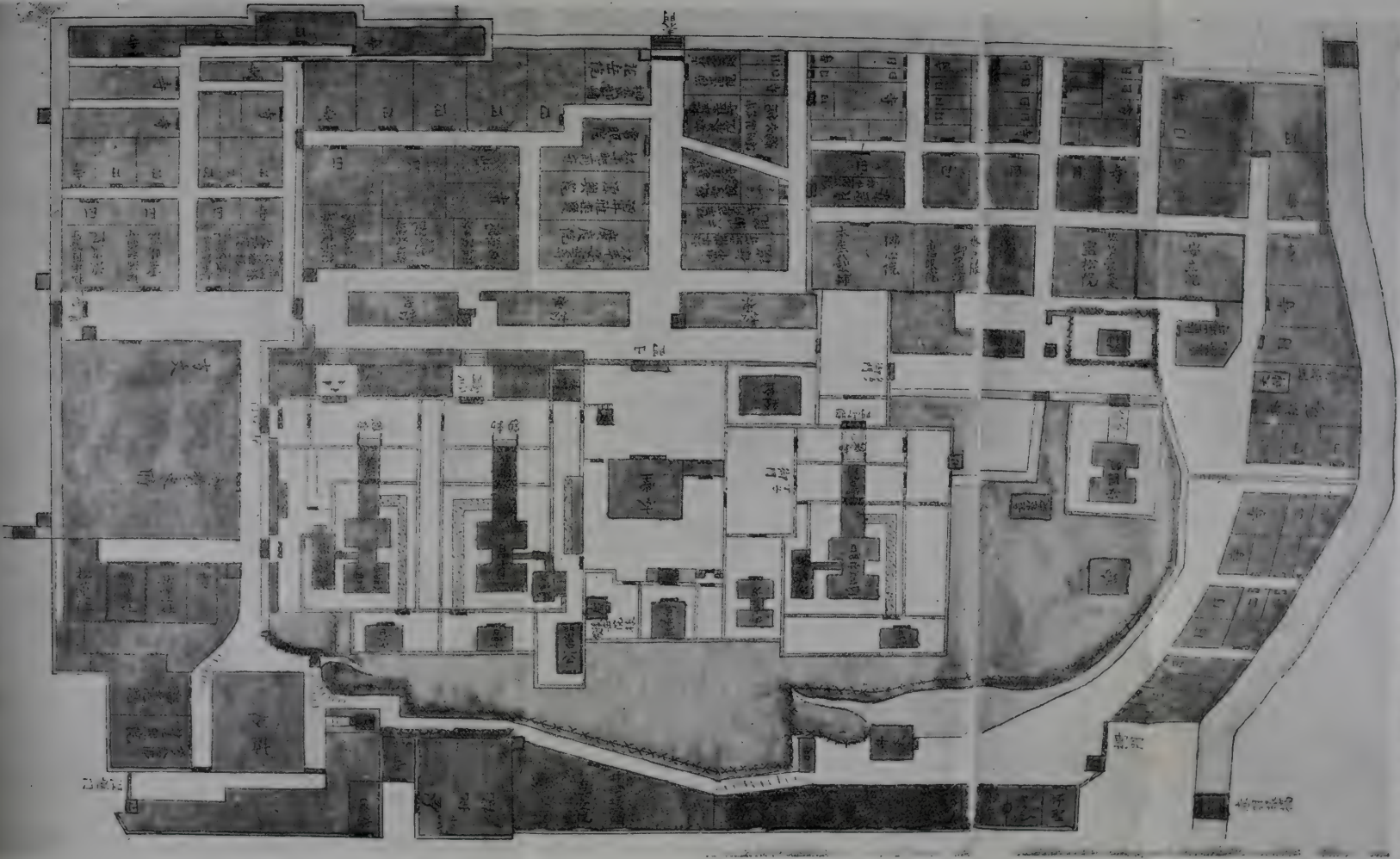
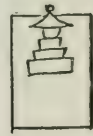
唐門

北

芝増上寺惣繪圖

本堂
經藏
山門
大門

此圖は與御供方増上寺御參詣の時の爲にする圖也明信院殿俊恭院殿の靈廟及ひ鑑蓮社安立院の位置を示さん爲に揭く蓋し文政初年頃の圖なるへし鑑蓮社は安政三年○印の所へ移轉す

千駄ヶ谷樣

瑞春院殿御廟

安立院　芝増上寺山内

當院は山内　安國殿の御別當にして御家の御宿坊たり故に芝　御豫參御參詣には必らす當院に成らせらる依て御宿坊料として年々金四拾兩を給せられ殿坊皆藩より營築修繕せらる

一慶應二寅年同院難澁願により御金藏に於て金百兩翌卯年より五ヶ年賦返納利足年八朱にて貸與す右明治元辰年迄元利返納之處同三午年三月以來御宛行十分之一に改正に付元利共十ヶ年据置を同月十五日願出無據次第により午年より戌年迄五ヶ年居置許可其段同十七日同院へ達す

一明治二巳年十一月十日藩政改革に付御宛行從來之十分之一に減し且御廟無之靈牌は都て還納との事眞如院へ布達同樣之趣を達す

一同三午年四月以來御宛行左之通決定

金四兩

一同年五月同院廿餘年前總御修復後御座所向初數ヶ所雨漏强く悉く荒果自力修復も難成付表門續長屋幷御入用之ヶ所除き餘御修復ヶ所取崩度旨願出に依勝手次第疊み置候樣にと同月廿七日指令す

明治四未年二月十三日本記長屋幷門共次第に大破に付右も取疊み度旨願出により是又聞屆其段

同月廿七日に達す

當院御宿坊となりしはいつ頃なるか詳ならす蓋し往昔よりの事ならん當院へ御靈牌安置なく御廟墓もなし且增上寺變革の頃にか遂に　東照宮（安國殿）の祠官に轉し寺坊いつしか亡滅跡方もなければ調査の術なし

當院は　養珠大尼公の御建立にして元江戸邸内山屋敷に在りし也由緒左の如し

仙　壽　院　青山千駄ヶ谷 法華山東漸寺　日蓮宗

御由緒書　仙　壽　院

養珠院様未展府に被爲　入候節深く御心願之筋被爲在候て元和三巳年身延山へ御參詣之節甲州南部驛に御宿被遊候處其夜御夢に祖師之御告有之不思議に被思召候て翌朝未明より日天子御拜被遊候處御旅宿之庭樹之下より光有之御驚御堀らせ被遊候處鬼子母神之像を得させ給ふ是そ夢の告る處祖師之御授と難有被思召候て御守本尊に被遊身延へ御參詣被爲在候折柄久遠寺へ御尋被遊候には房總の大守里見氏末葉に出家有之哉と御尋被遊候處御尋之通り里見家亡落後次男義功出家致し休遠日遙と申駿州村松邊に修行罷在候旨申上候得は御悦被遊候て御歸府之上駿府御城へ右休遠日遙被爲　召初て　御對顏被遊候て養珠院様には御緣も御座候者に付御滿足に被　思召候て下總國飯高檀林勸學中には別て厚御世話被遊寛永五辰年春赤坂御屋鋪内山屋敷と申御地所へ草菴御造營被遊右御守本尊之鬼子母神之像を御安置被遊右休遠日遙學文成就の上右草菴へ居住被　仰付御祈禱可申上旨被　仰付日々修行申上候同廿未年　賴宣卿様御四十二御厄歳に付除災御安全の御祈禱從養珠院様被　仰付休遠日遙丹誠に御祈禱修行申上御蔵厄脚無御障被爲濟候に付御滿足に被　思召候て正保元申年三月當時仙壽院の地所其比は萱野にて御座候處　養珠院様御直に被爲入候て御繩張迄御差圖被遊地境を開き山屋敷之草菴を御移し法玄山東漸寺仙壽院と申一寺に御建立被遊候御同所様御道修之内仙壽院と申を院號に御附被成下置當時迄通號に相成候右日遙俗姓は清和天皇

廿七代苗裔里見安房守義康次男俗名二郎義功十一歳にて出家仕身延山廿二代大野山開祖日遠之弟子に御座候　天下泰平御屋形御繁榮之御祈禱所に被遊候思召に依て　賴宣卿樣へ被仰入候て地形普請等被成下置候て御守本尊之鬼子母神之像を御建立の證據に御納被遊候て日遙儀御因緣も御座候者に付仙壽院の開祖に被遊候山屋敷居住之節は勿論御建立之上御扶持方幷家來等迄御附置被成下御祈禱所に被　仰付　養珠院樣厚御心願筋御箇條日遙へ御口授被遊師資相承仕永代無怠慢御祈禱修行相勤可申旨日遙御直に蒙　御意師資相承仕御祈禱修行申上候

一寛文二寅年　賴宣卿樣御六十一御本卦に被爲當爲御祈禱三十番神の像を御彫刻御納被遊尙　御心中御願文御筆御納被遊候て仙壽院第一之什物に御座候右御願文鬼子母神宮殿へ納置日々讀經御祈念奉申上候且又　賴宣卿樣御姬君樣御懷妊之砌御安產爲御祈禱手引之鬼子母神幷十羅刹女之像を御彫刻　御同所樣御初御子樣方より御納被遊候

一天和年中新寺御停止之儀從　公邊被　仰出候に付　光貞卿樣若山へ替地被　仰付候て寺地幷普請被成下御扶持方も此地に有之候通り可被下置旨被　仰出候其節仙壽院奉願上候は　養珠院樣厚思召候て御建立之寺に御座候處亡地に相成候儀何共奉恐入候趣申上候處右山屋敷之草菴を移し候とも新寺に候得は如何とも難被遊候趣被　仰渡自分にて　公儀へ相願候樣被　仰渡候故天和二戌年より數度古跡願仕候處十一ヶ年目　將軍綱吉公樣御代元祿五申年　紀州家御由緒も有之候に付嚴有院樣十三回御忌爲御追孝仙壽院義古跡　御免被仰付候

一享保元申年　吉宗公樣御入城之砌善利院を以　養珠院樣より開山日遙へ師資相承御祈禱被　仰

付候御趣意御尋に付其節之住持日淳義人傳にては難申上段申上候に付　御館へ被爲召御目見被
仰付御直に申上候處御滿足に被爲　思召尙無怠慢可相勤旨奉蒙　上意候其後御入城被遊候て　兩
御丸へ初て御祈禱被　仰付以來年中　大奥へ御札守御護符等献上仕　御簾中樣御懷妊之節別段御
祈禱被　仰付御卷數御洗米御護符等献上仕　若君樣御誕生御七夜之節御御祈禱被　仰付御卷數御
洗米御護符等献上仕候

一宗直卿樣にも御趣意御尋に付容易に難申上段申上候得は日淳　御館へ被爲　召御人拂にて直に申
上候得は　御滿足に被　思召別て其後宗門御信仰被爲遊奉蒙　御厚恩候

一有德院樣御年甲子之歳に被爲在大黑天を御守本尊に被遊御入城之後右尊像へ開運之二字を被爲加
御納被遊候右尊像は文永十一年祖師鎌倉に於て御彫刻之靈像に御座候

一延享二丑年　惇信院樣將軍　宣下之節

一元文二巳年　俊明院樣御誕生之節より御祝儀御能拜見被　仰付於大廣間兩度　御目見蒙　上意柳
之間に於て御料理等頂戴之節は寺社奉行衆御會釋御書院番衆御給仕に御座候尤當時迄御祝儀之節
に右同樣拜見被　仰付候

一享保三亥年　上々樣御祈禱且爲御菩提釋迦牟尼佛之大像　御本丸大奥より御納被遊候

一天明元丑年十月廿七日　舜恭院樣千駄ヶ谷筋被爲成候節當院へ被爲　入且御膳所をも被　仰付候

一家茂公樣御誕生前より御祈禱被　仰付候安政三午年六月　御養君被　仰出候節より別て御祈禱被
仰付候

一安政五申年九月　家茂公幷　御屋形樣爲御祈禱釋迦牟尼佛木像御彫刻　南龍院樣御書寫之法華經
一部右尊像之御腹籠に被遊從　實成院樣御納被遊　御本丸於大奥數日御拜被遊御祈禱被　仰付候
一桂香院樣御歸依被遊崇　御厚恩年々御參詣被遊御菩提所に被　仰付候儀に御座候右申上候通り
御由緒候て御建立之節　養珠院樣厚御心願筋尙又從　賴宣卿樣も御心中御願文御筆御納被遊候御
事にて實以草菴を當地所に御移しに相成候義故拙寺儀旅中へ出候節は御繪符幷紀州山屋敷と申荷
札等も頂戴仕候義故御屋敷外住居とは不奉存候
御由緒之儀は前文に申上候通り拙寺交代之儀は開山日遙より當代に至迄於　御屋形隱居後住とも
願之通り弟子讓りに被　仰付來候交代之後　養珠院樣御廟參拜之儀奉願候節御用人衆より本寺大
野本遠寺へ御達しに相成候先格に御座候
一南龍院樣養珠院樣深き　思召を以て御建立被成下　養珠院樣には御自身に被爲　入御繩張御差圖
も被遊候程之御事にて實に不外御由緒にて赤坂　御屋敷內山屋敷居住之節より御普請被成下御扶
持方御合力金頂戴仕家來等迄も御附置被下尤御扶持　大慧院樣御代迄頂戴仕來候得共其後は御扶
持方被下無御座候追々御儉約被　仰出當時は普請等悉く自分にて修覆差加候事
開祖日遙上人は延寶五年閏十二月七日寂すと云
右以下世々御菩提寺にして御埋葬ありたる尊靈は左の如し
深入院殿妙禪日定大姉　孝順院殿(大慧公御子織部正君)の御室 寶暦六子年五月廿八日御卒去
本行院殿妙道日圓大姉　葆光院殿(修理大夫君)御女 寬政五丑年十一月廿二日御卒去

容光院殿妙照日現　同　寛政十三酉年正月十七日卒去

信敬院殿　同　菩提心公御由緒の方廣岳院殿御初御生母　寛政二戌年十二月十九日卒

法成院殿妙實日性大禪尼　御同斷聖聰院殿御初御生母　文化九申年五月廿二日卒

此外桂香院殿大雲公御女久顯君松平相模守室　孝晴院殿桂香院殿御生母廟墓御同斷の右側にありの御墓碑あり共に池田家より奉祀せらる

右之外　養珠院様觀樹院様芳林院様永隆院様御靈牌も安置之處維新後明治二巳年十一月江戸御寺方改革之際御廟無之御靈牌は可相納段を達したるに　當院は全く　養珠院様御開基にして同御靈牌は本尊よりも大切に奉崇する處永世御安置供養し奉り度旨同院より請願尤之次第に付其儘御安置を允許し御廟無之尊牌は納付せしめたり

一寺領

元和御切米終身錄に

承應三年新規　　　千駄木　仙　壽　院

小判五兩
六人扶持

延寶六年極月病死後住千壽院一代三人扶持被下候

承應三年新規とあるは蓋し承應二年迄は　養珠大尼公御手許より御宛行ありし處同年八月　大尼公薨逝により同三年より御切米渡りとなり司農府の簿冊に登錄せしならん日遙は延寶五年寂すといふ爰に同六年とあるは誤記なるへし爾來明治維新迄は左記の如し

（金三兩
（金二兩　　本行院殿容光院殿御佛供料

（正月）金百疋　容光院殿御証忌日に付御廟へ

（同）金百疋　桂香院殿御証忌日に付御廟へ

（七月盂に付）金百疋　容光院殿御茶湯料

（同）金二百疋　七月に付仙壽院へ被遣

御廣敷取扱之分

（正、五、九月）金百疋つゝ　御二所様より鬼子母神へ御初穂

（四月）白銀五枚　御同所様より鬼子母神万巻陀羅尼御祈禱料

金百疋つゝ　右之節同神へ御初穂

（八月廿一日）白銀一枚　中納言様より養珠院様へ御証忌日に付

（同）金百疋　御簾中様より右同斷

（同）金百疋つゝ　御二所様より鬼子母神へ御初穂

（冬至の節）金百疋つゝ　御同所様より同神へ御星祭御祈禱料

（正、五、九月）金百疋つゝ　同巻數洗米差上に付御初穂

（例暮）金二百疋つゝ　御同所様より年中日御符献上に付御初穂

（毎月）金五十疋つゝ　御同斷放生會御祈禱料

一祠堂金御寄附
（深入院殿
（要玄院殿　金百兩　文政七申年十月御廣敷より
本行院殿　金百兩　同　十亥年三月同斷
法成院殿　金十兩　文化十酉年二月同斷
葆光院様御在世中には孝晴院殿へ金二百疋つゝ御供へ其例により近年まで同斷御供へ之處後相止たりとなり法成院殿信敬院殿へは表向より何等御仕向無之との記載あり
一明治二巳年十一月十日藩政改革に付御宛行從來の十分の一に減し且御廟無之靈牌は都て還納との事眞如院同様之書付を達す

千駄ケ谷　仙壽院

一同三午年四月以來左之通定まる
御佛供料金二兩三歩
内
深入院様　金一兩
（本行院様
（容光院様　金二百疋つゝ
（法成院殿
（孝晴院殿
（信敬院殿　金廿五錢つゝ
一同年五月廿九日左之趣家令所より達す

深入院樣御廟仙壽院に有之御位牌も同院に御安置之處先年御位牌は谷中護國院へ御遷座に相成候由右御趣意は年古き事にて難相分候得共何さま御廟有之寺院へ御安置之方至當に付右御位牌護國院より納させ仙壽院へ御安置之事

件之通たる處戊辰年上野戰爭之節右御位牌紛失之旨眞如院代玉泉院より申出たり

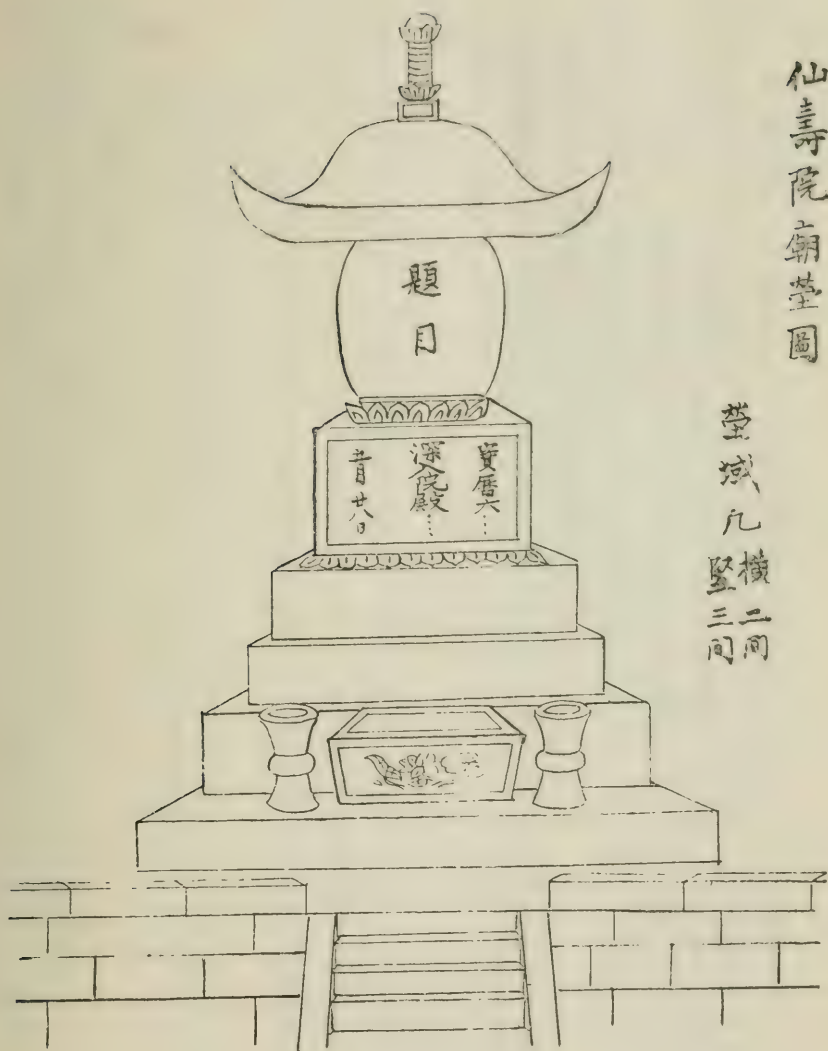
按に　本記御位牌を護國院へ御遷座の御趣意は寶暦七年　菩提心公抯日蓮御自著日蓮宗御改宗之時なるへし事は　御同公之記に詳なり

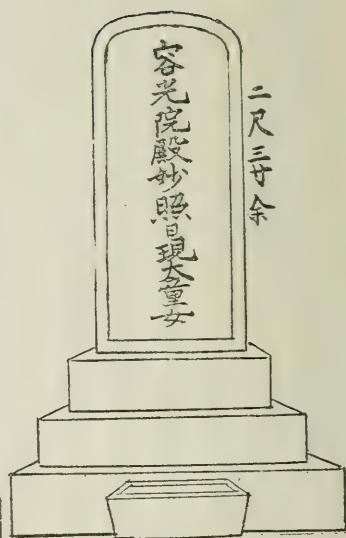
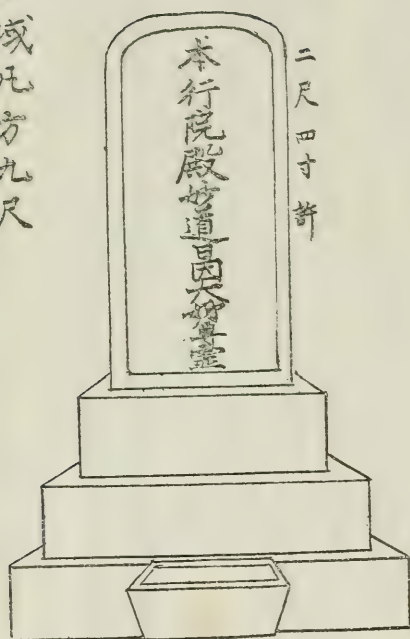
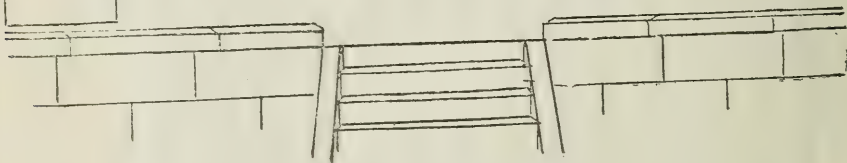
一當院には前記　養珠大尼公御尊信の鬼子母神像及ひ御同公七面山御登山之尊像を安置し元祿の頃火災ありしも幸ひに恙なく當山第一の寶物と崇尊し傳へたるに明治十六年一月六日自坊より出火火急の餘り遂に救ひ奉らすして本堂鬼子母神堂初一物殘す處なく煨燼に付したり今安置する處は其模造也といへり

一因に記す太田南畝が一話一言に

青山仙壽院新日くらしは里見家の庶子の開基也家系の事を石棺の金棺に刻て埋めしと也土中に埋む時に至り一枚石摺にせしを今寺に藏すといふ

此事寺僧に尋ねしに金棺に非す銅板に彫りたる也石摺も又烏有に歸したりと答ふ

一江戶名所圖繪に曰く　仙壽院は紀州公御母室養珠院日心大姉正保元甲申草創あり當寺の鬼子母神は同大姉甲の延嶺にして靈示を感し大野の邊の土中に得られて後當寺開創落成の日安置ありしとなり寺內の庭園を新日暮の里とよへり此邊の地勢及ひ寺院の林泉の趣谷中日暮里に似て頗る美觀たり故に日暮里に相對して假初に新日暮と字せり彌生の頃爛熳たる花の盛りには大に群集せり云々と記し庭園の圖をも載せ東都名所の一に數へられしか維新後維持の方盡き且火災にかゝりし等にて庭園夙に荒廢今は跡形もなし

仙壽院廟塋圖
塋域凡横二間
竪三間
題目
寶暦六……
深入院殿……
二月廿八日

向テ深入院殿ノ右側
塋域凡方九尺
本行院殿妙道日因大姉尊霊
二尺四寸許
容光院殿妙照日現大童女
二尺三寸余

当寺は　養珠大尼公御尊信以來御由緒不淺佛刹也嘗て同寺より提出する處左の如し

本門寺　武州荏原郡池上村　日蓮宗

由緒書　　　池上　本門寺

當山は宗祖日蓮大菩薩文永十一年開闢弘安五年入寂之靈地に候得は信俗渇仰之道場に候然間　養珠院様常々御信仰不淺慶長元和年間學徳兼備之身延久遠寺在住日遠聖人御歸依厚既に甲州大野山御建立開祖に被　仰付寛永七年同聖依　台命當嶺へ入刹在職中　養珠院様御參詣境内へ杉苗壹万本御寄附則御手植有之候相只今盛大に相成候引續瑞林院天眞院様御信仰にて御參詣被　遊候寶永四年二月天眞院様御逝去同七年六月　寛徳院様御逝去正徳三年十月　深徳院様御逝去に付　御三方様共當山へ御葬送有之其外佐竹上杉高松吉井家水府御分知播磨侯へ御縁組被遊候奥方様も御舘之御威光を以當寺へ御埋葬に相成其外御尊靈様御葬送御座候享保元年　吉宗公幕府に被爲成候已後は　天眞院様寛徳院様深徳院様御法事等　公儀より被　仰付就中　深徳院様御儀は家重公之御母堂に被爲在候得は別て御法事向御手厚之御事に候右　御尊靈様之御回向申上候儀に付　寛徳院様天眞院様之御縁由を以て享保十年日等代　伏見親王様之猶子に被命從　公邊御願立に相成參内被仰付永紫衣蒙　勅許山内へ下馬札等被建下寺格結構に御改其後代々之住職　伏見宮之猶子に御座候て　台命奉職御禮登城之砌は都て御白書院埋國之内貳疊目へ被爲　召御懇之蒙　上意尚又御大禮之節は時服拜領御能見物御料理迄頂戴仕候右に付　御三家様方へ住職披露參　殿之節格別之御會釋別て於　御屋形様は御懇々預　御意其上御料理頂戴隨身供方迄も支度被下候享保四年同六年

同十五年　有德院樣御成之節　御目見被　仰付時服白銀等拜領仕候享保十三年　春千代君樣御懷胎中日嶺代御祈禱申上御誕生之砌は御掛守献上仕候延享三年四月　惇信院樣御成之節　御目見被仰付時服白銀等拜領仕候右は全　御屋形樣之御餘光と難有奉存候且又從來御祈禱申上御門札卷數洗米等献上仕來候將又寛政十二年三月日憲代　中納言樣御參詣文政五年八月御簾中樣御參詣御座候節御逢被下種々頂戴物仕候文久二戌年五月日霑御初見御沙汰に付參　殿之節先格御白書院之處格別之御取扱を以於御黒書院御中段　御當君樣御同間にて　御意有之昆布御挾被下退席之上御料理頂戴隨身總供迄支度被下候

右之通由緒相違無御座候以上

池上山内　永壽院

當院儀は寛永七年日遠聖人本山へ被致入院翌八年隱室に取建退去罷在候節前以御歸依厚　養珠院樣御參詣被爲在御懇切に御訊問種々被下物も御座候右依御緣由其後　天眞院樣御初本門寺へ御葬送に相成候に付御宿坊に被成下御廟守被　仰付御手當六人扶持つゝ被下置候處中古三人扶持に被仰出只今以右之御扶持方頂戴罷在以御蔭相續仕御宿坊御用向相勤來候儀難有仕合奉存候住職之砌は參殿御禮御目見被　仰付其上御料理等被下且又年頭御禮之節も右同樣御雜煮等目出度頂戴仕候御屋形樣御參詣被爲在候節は御立寄被爲遊御休息之内御茶菓子等献上仕　御目通被　仰付本堂初御廟所向へ御先立御案内奉申上候右之由緒に相違無御座候以上

一當寺へ御葬送

眞容院殿惠性日了　南龍公御子修理君寛永十三年十一月十八日御卒去　甲州大野本遠寺にも御分塔あり

瑤林院殿淨光日芳大姉　南龍公御簾中寛永六午年正月廿四日御逝去　當寺にて御火葬御遺骨二月廿三日紀州要行寺へ御埋葬

天眞院殿妙仁日雅大姉　清溪公御簾中寶永四亥年十二月廿六日御逝去　當寺にて御火葬御遺骨紀州報恩寺へ御埋葬

寛德院殿玄眞日中　有德公御簾中寶永七寅年六月四日御逝去　當寺にて御火葬御本骨紀州報恩寺へ御埋葬

種緣院殿妙因日悟大童女　有德公御女御流產　寶永七寅年五月廿二日御卒去

體幻院殿覺姓日胎童子　有德公御二男御流產　正德三巳年九月十九日御卒去

深德院殿妙順日喜大禪尼　有德公御内証方　將軍家重公御實母（一本アリ幕府の管理となる）　正德三巳年十月廿四日御死去

妙相院殿深遠日底大姉　大慧公御部屋　享保五子年十月四日御死去

法幻院殿淨起日周大童子　同御子富千代君　享保十九寅年正月五日御卒去

住玄院殿妙巖日躰大童女　同御女　圭姬君　元文五申年三月十四日同

泰良院殿觀達日長大童子　菩提心公御子門之進君　寛文三午年正月廿六日同

此外　芳心院殿　松平相模守殿室　南龍公御女

松壽院殿　松平左兵衞督殿室　同上

圓光院殿　上杉彈正大弼殿室　清溪公御女

遠紹院殿　松平播磨守御室　大慧公御女

靈岳院殿　佐竹修理大夫殿室　清溪公御女

永昌院殿　松平讃岐守樣御室

御廟墓ありいつれも他家御相續且御婚嫁と雖も御里方御菩提寺へ御埋葬は何等か御由緒ありしならん尤御家の御所管にあらす

（一本ナシ深德院殿御廟は五重塔北の方田安家御廟に隣す　惇信公御生母なるを以て都て幕府の管理に

歸す）

一御佛供料等
金三兩　法幻院殿妙相院殿御佛供料　本門寺
金二兩
金一兩二步　同寺御位牌付出家三人へ
御合力三人扶持　山内　永壽院

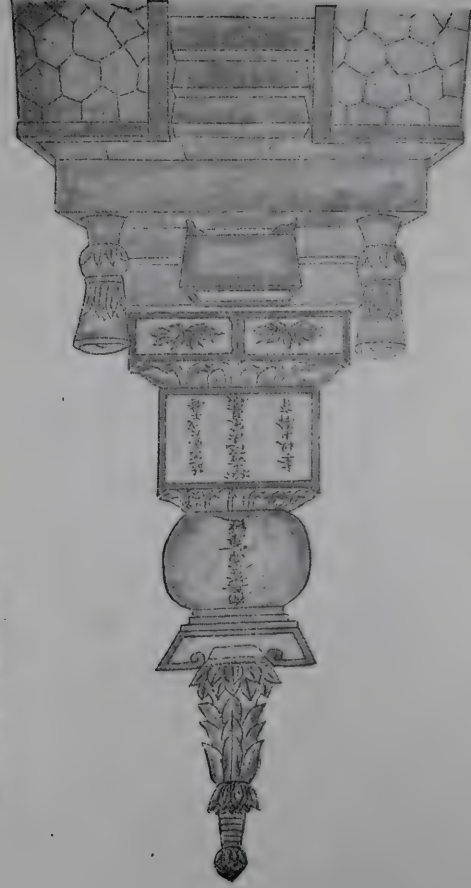
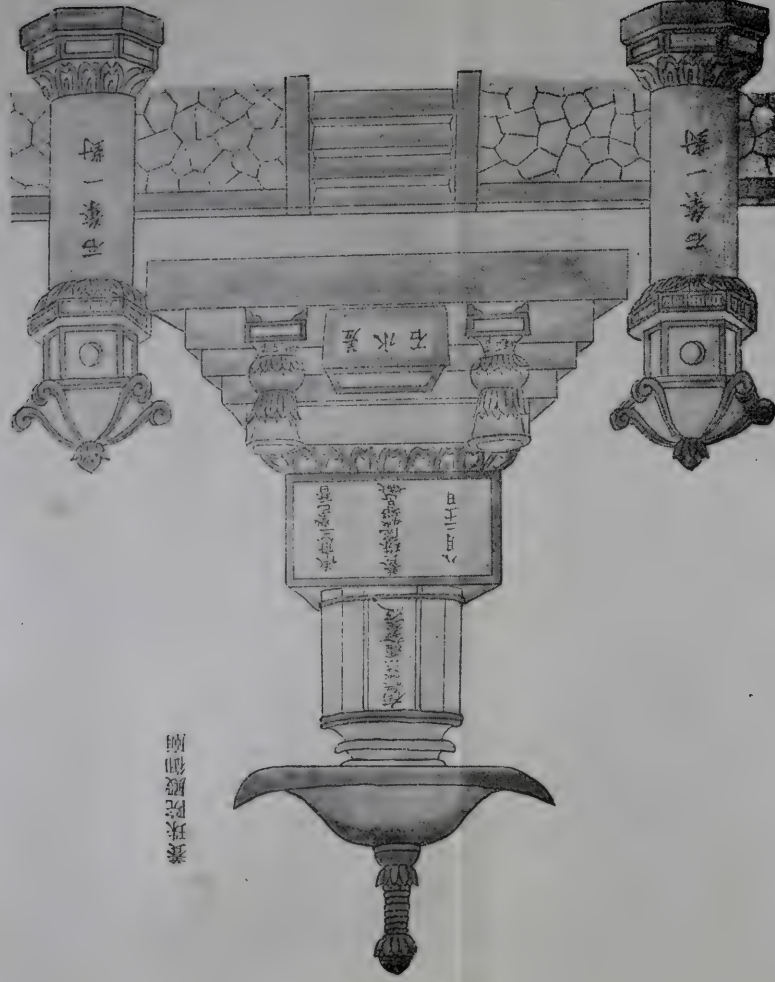
一年中御備
金百疋　法幻院樣正月御証忌日に付御牌前へ
金二百疋　瑤林院樣正月御証忌日に付御靈前へ
金二百疋　天眞院樣二月御同斷に付御牌前へ
金百疋　遠紹院樣五月御証忌日に付御牌前へ
金百疋　靈岳院樣八月同斷に付御牌前へ
金百疋　妙相院樣十月同斷に付御牌前へ
金百疋　永昌院樣同月同斷に付御牌前へ
金一兩　本門寺へ御祈禱料被遣

一御祠堂金
法幻院殿　金五十兩　永世御追善料

泰良院殿	金三十兩	永世御追善料	
	金五十兩	同御回向料	寛政八年
	金三十兩	同斷	文化八年
	金五兩三分さ銀九匁	同斷	同 九年
住玄院殿	金五十兩	永世御追善料	
圓光院殿	金三百兩	同斷	
種縁院殿	金百 兩	同斷	太眞様より
遠紹院殿	金二十兩	同施餓鬼料	
觀樹院殿	金百 兩	同御追善料	大慧公御實母也
妙相院殿	金五十兩	同斷	
源性院殿	金百 兩	同斷	
眞性院殿	金三十兩	同斷	大慧公御女
貞泰院殿	金二十兩	同斷	
桂香院殿	金五十兩	同斷	松平相模守殿室御家より御寄附
妙操院殿	金五十兩	同斷	顯龍公御實母

一明治二巳年十一月十日藩政改革に付御宛行從前の十分の一に減し且御廟無之靈牌は還納之事眞如院へ布達同樣之趣を達したる處翌三年年春觀樹院殿初九方之靈牌を還納す

一同三年年四月御佛供料以來左之通りに定る

金三兩二歩　外に御位牌附出家へ年々金三歩つゝ被下

養珠院殿御廟

眞空院殿南龍公御子修理君御廟

松壽院殿南龍公御三女松平左兵衛督信平室御廟

本門寺御廟全圖

妙操院殿顯龍公御實母御廟

天保三壬辰歳

十月廿五日

觀樹院殿大慧公御實母
直性院殿御本願身延久遠寺
妙相院殿

御廟

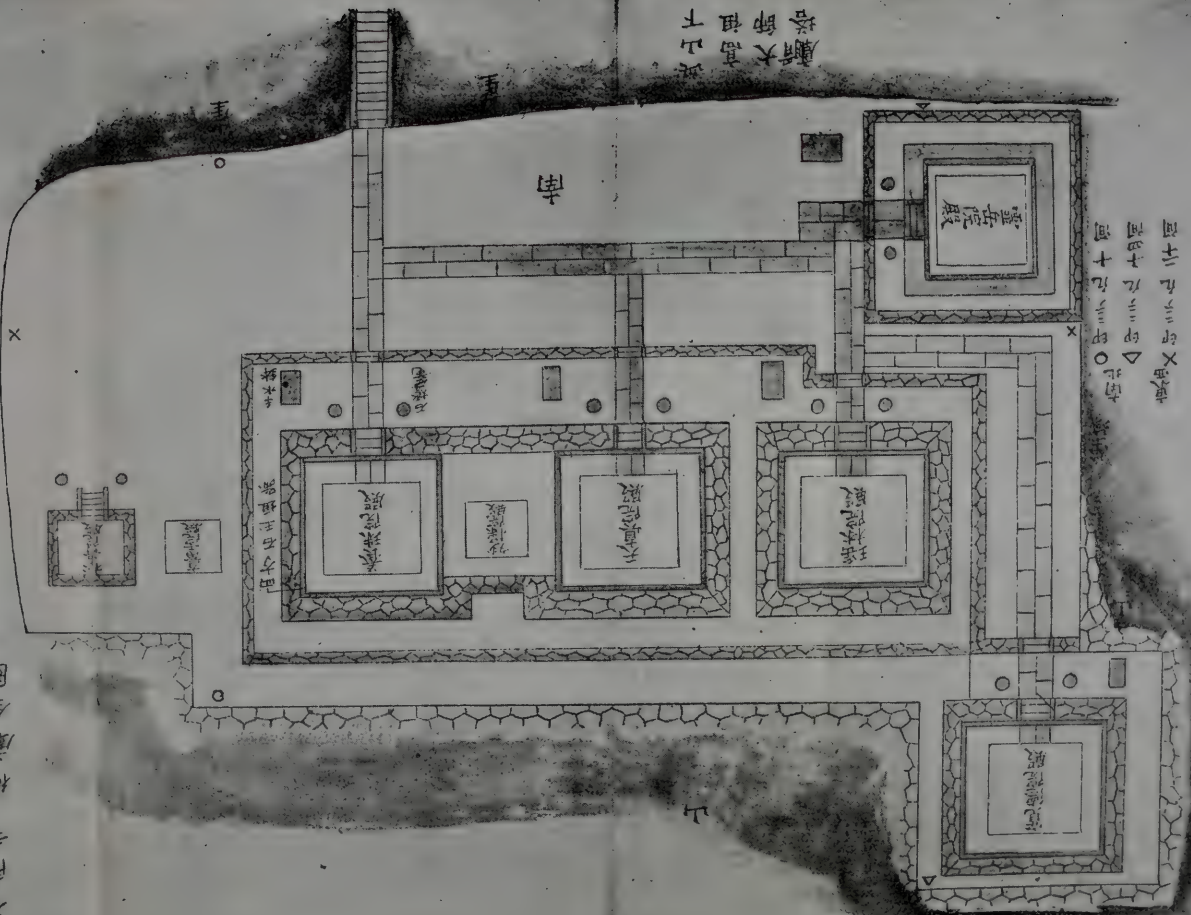
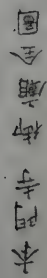
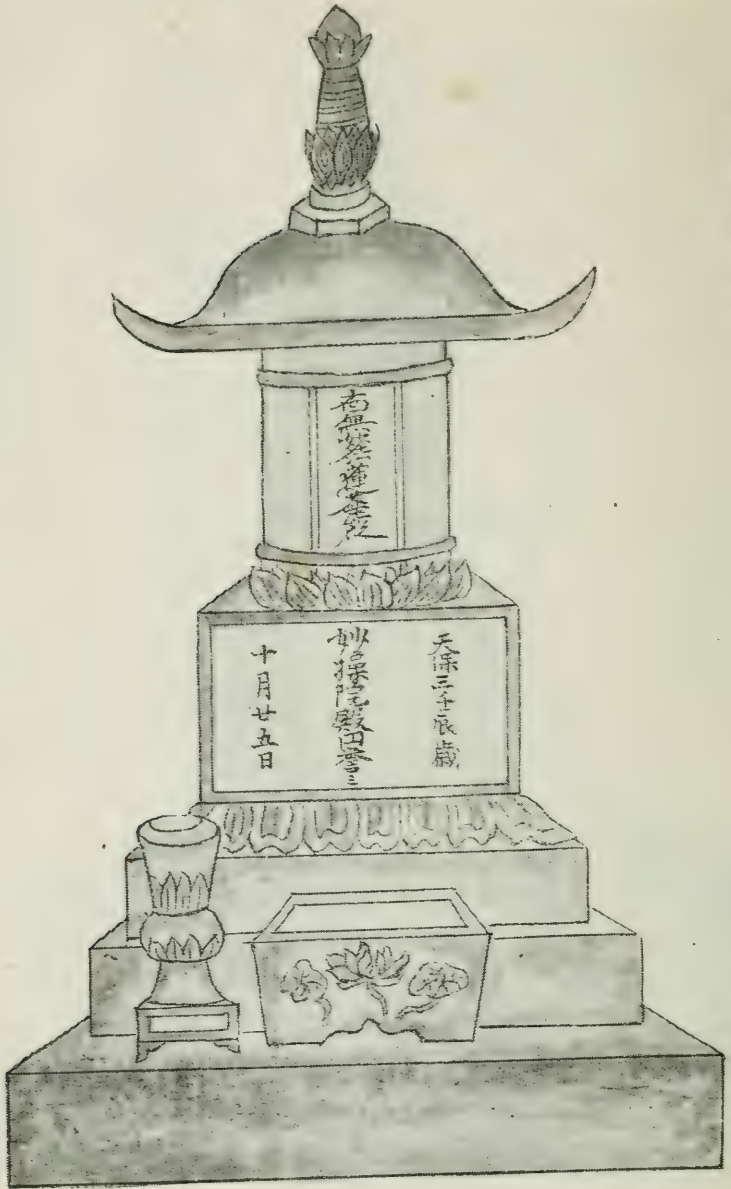
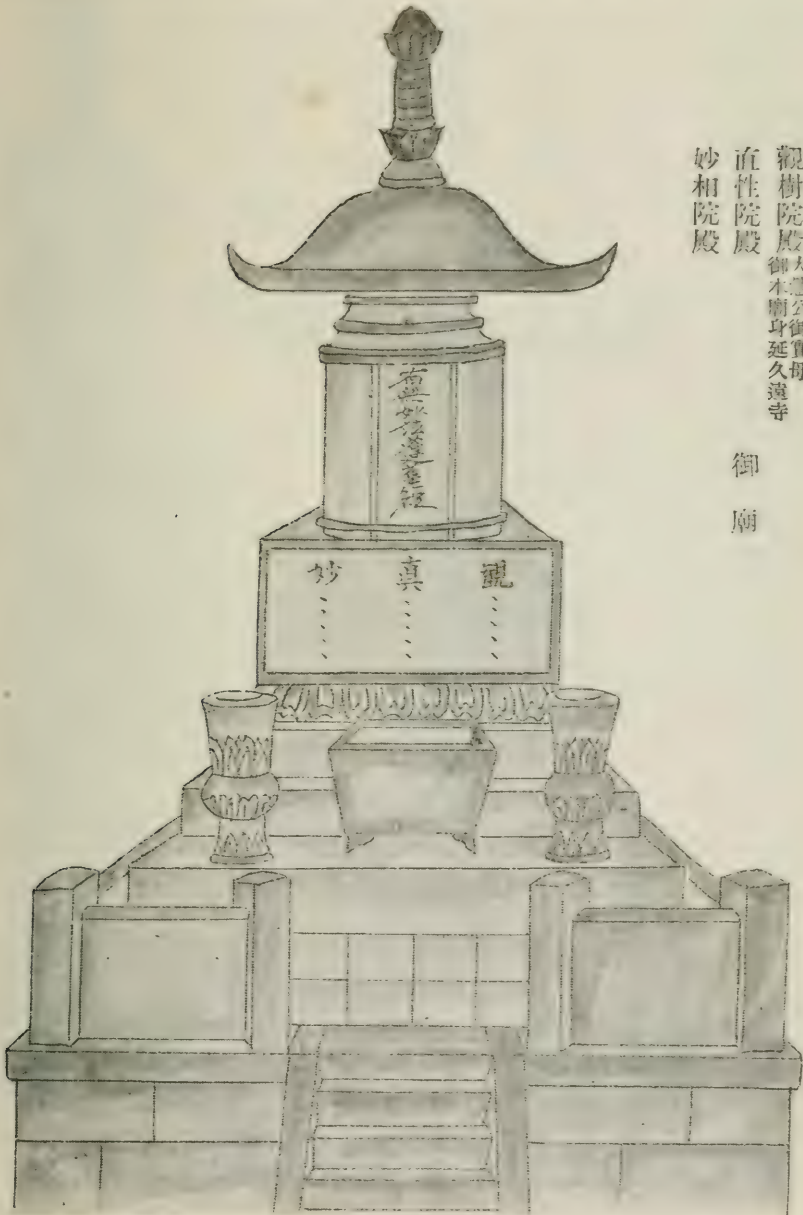
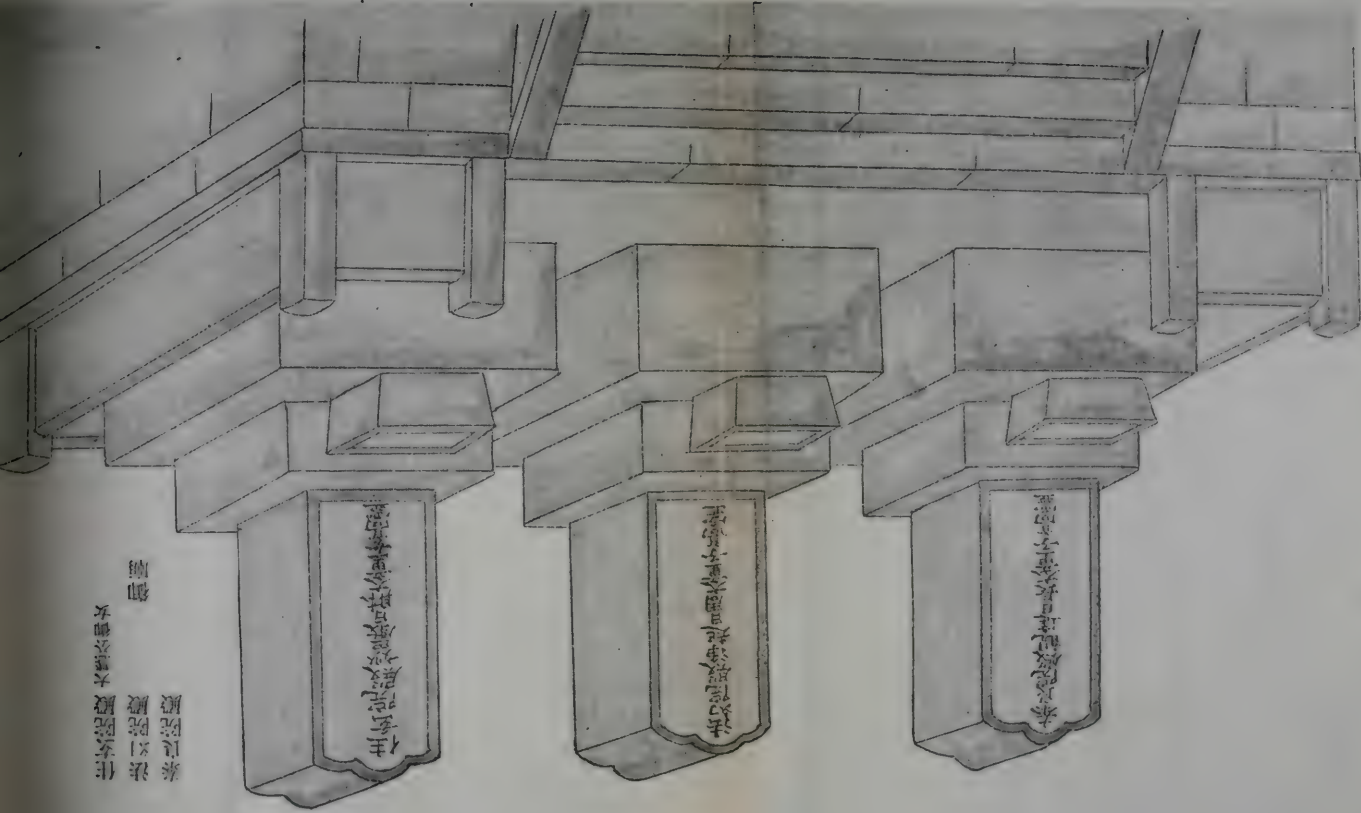
住玄院殿 大慧公御女
法幻院殿
泰良院殿 御廟

舊御廟位置圖

妙相院殿　觀樹院殿 眞性院殿

法幻院殿
住玄院殿
泰良院殿

右御墓は當時の塋域左圖の位置にありし處明治　年貞淑大夫人薨逝御埋葬に際し當時の處へ御改葬ありたり妙相院殿は御本葬故御印し存したれ共觀樹院殿は身延久遠寺眞性院殿は和歌山養珠寺御本葬故全く御供養塔なりしか何等御印見えす依て妙相院殿へ御合併即ち當現在の如し尤從前は三廟共個々巨大にして　養珠院殿御始と同形なりしを當形狀の如くに改修せられしと云ふ

一法幻院殿三靈も右同時に御改葬寶塔石は從前の儘と雖共臺石等は改修縮省の由也

南紀德川史卷之百五十七

臣 堀内 信 編

社寺制第七

江戶及他圖

境妙寺 江戶千駄ヶ谷村 大王山普照院 天台宗

寺說に曰く元麴町善國寺谷に在て寂光寺と稱す元祿年間千駄ヶ谷霞ヶ岡の鄕に移轉 維新後霞ヶ丘町と改稱す舊名に取たる也 今の地是也赤坂邸園の御堂附僧を命せらる 年代不詳 日々朝四時より出勤御靈供を献供 其前御堂附坊主六尺等清掃御靈供を準備す 讀經回向之奉事年中一日も怠る事なし御歷世の御忌日には早めに出頭勤行　君上御參詣には御待受をなし御燒香を奉る又御庭秋葉社祭稻荷社初午の節々法樂を修行せりといふ

一本に御庭御堂へ出勤は安永の度より也とあり

芝御屋敷園中鎭座の山王弁天觀音稻荷社へ正五九月及ひ初午毎に役僧兩人召連出頭法樂修行をなしたりと也 之に付盆暮金一兩つゝ下付

一當寺へ御埋葬之御墓碑左の如し

空生院如夢幻相 舜恭公御子 享和元酉年十二月廿七日御流產

相幻院淨諦一夢 顯龍公御子 文政元寅年五月八日同

乘元院圓空淨榮大童女 舜恭公御子 文化四卯年十二月十五日同

幻成院圓嚴實空大童子　顯龍公御子　文政十二丑年七月十日同

淸影院淨空圓實大童女　同　天保三辰年五月十二日同

明元院香陽淨滿大童女　同　同七申年二月十九日同

外に地藏尊形の碑二基あり西之方弘化三午年閏五月廿四日と題するは　菊千代公 顯龍公御遺腹 後將軍家茂公 御胞衣東之方弘化四未年七月廿三日とは秋姬君同年十一月六日と題するは辰次郎君 共に憲章公御子 の御胞衣を納めたる標墓なり

一從來御宛行

御合力金廿五兩 四人扶持

金五兩　御中間一人分給扶持

千駄ヶ谷　境　妙　寺

一前記御廟墓はいつれも御流産にて表向御弘め無之御廣敷取扱ゆへ表向御佛供料等なし唯御廣敷より御祠堂金御寄附あり左の如し

嘉永三戌年八月

一空生院樣十二月廿七日五十回忌御相當に付爲御菩提

金二十兩

右御內證樣より御寄附被遊

但文化十二亥年十二月十日御同所樣御祠堂金二十五兩御納之分と合四十五兩御勝手方へ預け月三十兩一歩利を以御回向に宛可申との事

嘉永三戌年八月
一來る辰年十二月十五日
乘元院樣五十回御忌に付御回向料として
金五兩
右御內證樣より御寄附御勝手方へ預け置利倍之上御年回當期之節御回向料に可宛筈
金二十兩
同斷御年回に付永代日々香花御茶湯料每月御忌日御靈供料として御內證樣より御寄附去る文化十二年亥十二月中御同方樣御祠堂金として金廿五兩御納之分と合四十五兩御勝手方へ預け月三十兩一步利を以御入用に充可申筈
嘉永五壬子年
一空生院樣
乘元院樣　御菩提料　金廿四兩一步二朱ㇳ
銀五匁五分
右御御內證樣より御寄附
是迄每年盆暮御初穗として金二百疋つゝ十二月御正忌日之節金二百疋且年分御放鳥料として金百疋被下有之處已來右御寄附金御勝手方へ預け三拾兩壹步の利分を以取計餘分は永代御追善經營に備可申筈
嘉永五子年正月十八日
一澄淸院樣御靈牌御祠堂金

金百兩
右先年當寺へ御安置に付爲御菩提御寄附
但御勝手方へ預け月三十兩壹歩利を以年分之御回向料に可充筈
一嘉永六丑年四月
一憲章院樣
一常典善院樣
右御尊牌是迄大奥に御安置之分此節無御據御譯柄に付全當分極御內々にて御預け御回向等精々
給仕可仕尤他言等決て仕間敷旨御廣敷御用人へ之請書差出す
嘉永七寅年七月
一御重　一組
一長手御硯箱
一金五拾兩
右　讓恭院樣御殘品として御寄附
御金は御勝手方へ預け利分を以て　讓恭院樣御回向料に可充旨右同斷
安政五午年十一月
一金二十兩　乘蓮院受正妙樂大姉
右永代祠堂金として御廣敷より寄附

慶應二寅年十一月

一相幻院樣初御流之方々樣御祠堂金

金二十兩

一幻成院樣　御祠堂金

金三十兩

右是迄本金御廣敷預り之處此度下け渡しに成り同寺にて貸出し右利潤を以永代御回向之筈

一明治二巳年十一月十日維新改革に付御廟無之靈牌還納及御合力等減額の事を達す

一明治三午年四月向後左之通り定り方々樣御廟有之と雖も御祠堂金御寄附有之を以已來別段御附屆無之事

御合力

金拾兩　千駄ヶ谷　境妙寺

但御中間一人分給扶持被下も無之事

一當寺住職第一世を權大僧都貞榮と稱す寶永八卯年三月十日寂す已後世々相襲き第六世を順海と云香嚴公の記に曰く順常院と申僧は御堂守にて御庭口之御長屋を御かし被下住居いたし御先考樣方の御忌日御逮夜等御追福御讀經仕罷在候或時御庭へ被爲成右順常院が御長屋へ御立寄如何に御僧何を致候哉經にても讀候哉と御尋被遊候順常院御請申上候はいや御經は讀み不申餘り淋敷退屈仕候に付咄し本抔見候て罷在候段御答申上候已後御座所へ被爲入扨々順常院は直なる奴也

並々の者ならは予か尋候時よし端本を見ているとも經讀み居り候抔とつくらひ可申に扨々直成奴也と繰返し御意有之候

順常院は蓋し順海の誤なるへく順海天明四辰年正月十六日寂す前代五世は可道と稱し明和八年寂す　香巖公御相續前也其比他に順字を稱する者なし

一第九世を賢榮と稱す一奇人也性磊落不覊法衣裂て修めす茅屋漏て葺せす明日雨ならんと察する夜は徒弟枕邊に雨笠木履を備へて寢に就き室内木履を用ゆるを常とす寺參の者は竹杖を携へ荒草を拂されは門に入る能わす餘りの事に檀徒其無懶を責むれは曰く僧尼能く佛に仕へ勤行不怠れは何そ他に圖せんと時として御堂出勤を遲刻する故御用人之を質せは田舍僻地に在て時を知らす遲刻不可なれは時計を下付扱ひ人をも付置かるへし僧等時計のかけ樣を知らす且煩わしきに不堪と答へたり其暴殆と狂の如し酷た酒を嗜しみ二挺の酒樽雨晒しなから備へありしと然れ共寺務勤行は一も怠らす能く其職を盡したり

賢榮に續くを知順といふ荒廢を整治僧房を修築大に振與を謀る依て院内之を中興の師と崇めり弘化三年年八月寂すと云々

一門に入て左側に老松の喬木あり遊女の松と稱す

江戸名所圖繪に曰く　遊女の松は寂光寺之境地にあり當寺昔は麹町の貝塚の地にありしか御城郭御造營の時此地に移さるとなり始は日蓮宗なりしか元祿の頃天台宗に改む相傳ふ此地は往古の奥州街道にして廣谿の原野なりしに此松樹の靑蒼として繁茂し遠く見へ渡りし故に霞の松と號けしか寛永の頃　大樹此地に御放鷹の時御鷹逸て御氣色あしかりしか此松にありて御拳に止る故に御褒賞として其鷹の名を此松に命せられ遊女と唱へしめ給ふとなり

境妙寺廟墓位置略圖

寺門

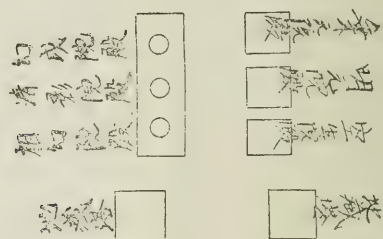
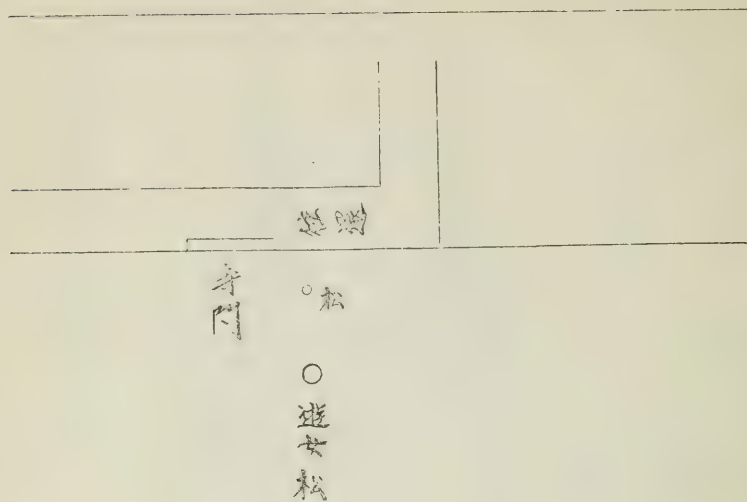
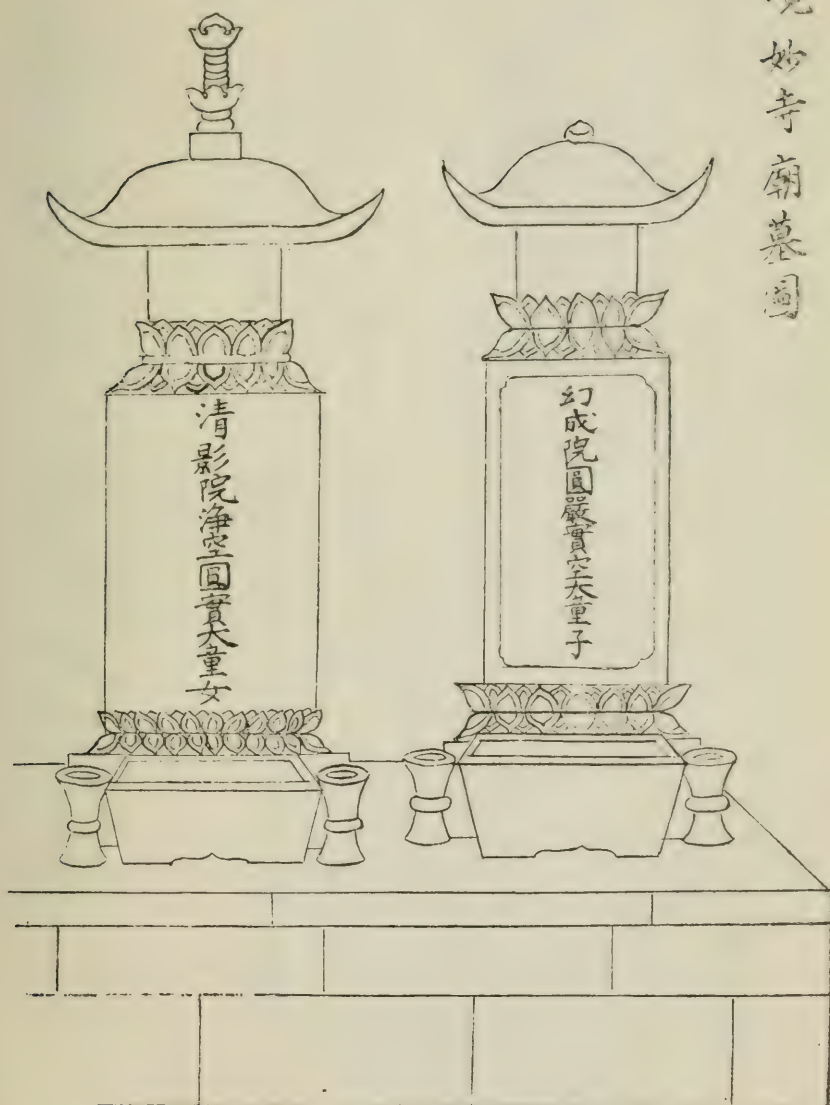
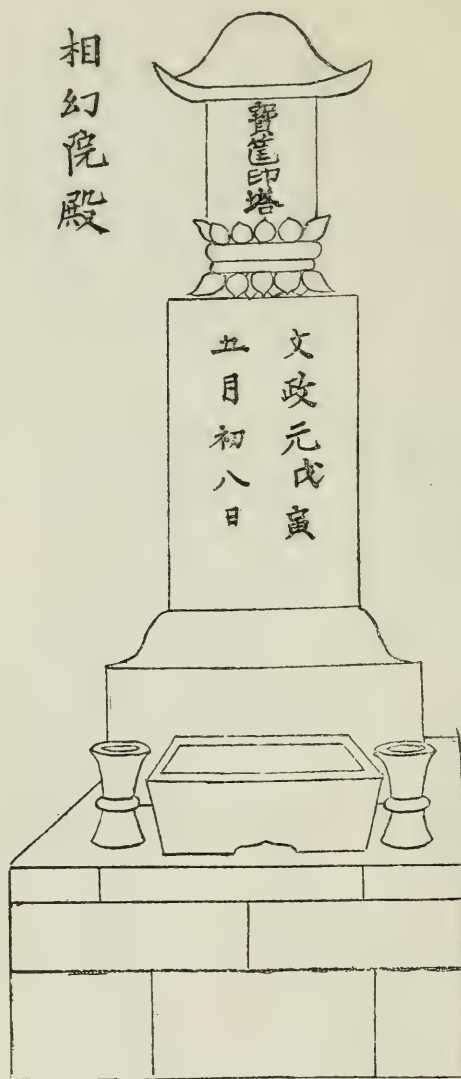
松

遊女松

本堂

境妙寺廟墓圖

寶蓮印塔
文政元戊寅
五月初八日
相幻院殿

秋姫君
長次郎君
胞衣塔

地藏塔

弘化四丁未年
七月廿三日
弘化四丁未年
十一月六日
ト刻ス

菊千代君胞衣塔

地藏塔

弘化三午年
閏五月十四日
ト刻ス

祐天寺　目黒村　浄土宗

當寺に左之御墓標ありいつれも御早世御流產等にて表向き御弘めなく御廣敷取扱にて御埋葬と察せらる御先例によれは池上本門寺へ御葬儀あるへきを　菩提心公公子に限り當寺へ御埋葬は如何

なる御趣意か當寺に就き調査すれとも詳ならす蓋し寛延四未年挫日蓮の御著ありし如く日蓮宗の事豫て尊旨に適はせられす且御弘めもなきゆへ上野眞如院にも及はせられす御内々當寺へ御埋葬の事なるへしされは表立御佛供料御宛行等の事見へす

峯雲院水月如現大童子　菩提心公御子延享二丑年四月十四日御墓の裏面に施主二十八歳女とあり是御生母清信院夫人にて當年廿八歳に當らせらる

即到淨源大童子　菩提心公御子 寛延四未年三月十四日

覺眞春夢大童子　同 寶曆三酉年正月十五日

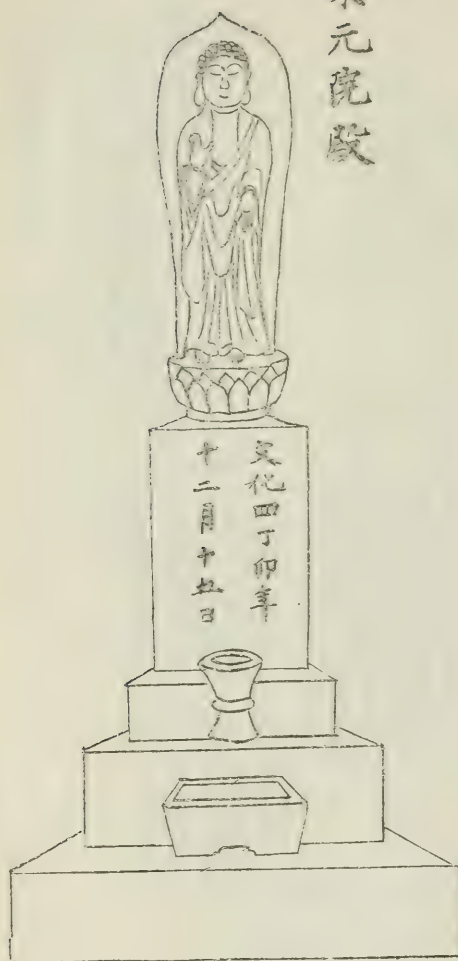
遇光眞流大童子　同 同 五亥年七月十九日

陽雲院本還春光大童女　同 同 十辰年正月十七日

右の外左之尊牌御安置祠堂金二百兩御寄附　元金は預り置利子六兩つゝ毎年六月十二月兩度に下け渡す

貞恭院殿芳蘭慈室大姉　舜恭公御簾中 寛政六寅年正月八日

一維新後明治二巳年十一月都て御廟無之寺院へ御安置之靈牌佛器共還納せしむる筈改正により其旨祐天寺へ達せし處同三午年七月六日使僧を以左之如く還納外に尊牌は無之旨申出たり

貞恭院様御位牌　一基

御茶湯器　一と通り　　御供物臺　一對

御膳具一二　一と通り　　御三つ具　一と通り

空生院殿
享和元辛酉年
十二月廿七日

乗元院殿
文化四丁卯年
十二月十五日
明元院香陽淨鴻

祐天寺御墓之図　位置如図

按ニ此壹基ハ御供養塔ナルベシ正面
瓊淳院初卅三霊ハ御本廟護国院ニアリ
幻成院初三霊ハ千駄ケ谷境妙寺ニ
御本廟アレバナリ

瓊淳院光栄来祇大童女
心浄院智證妙諦大童女
鬘雯珠院蘭室妙薫大童女
幻成院円厳実道大童子
清影院浄室円実大童女
明元院香陽浄満大童女

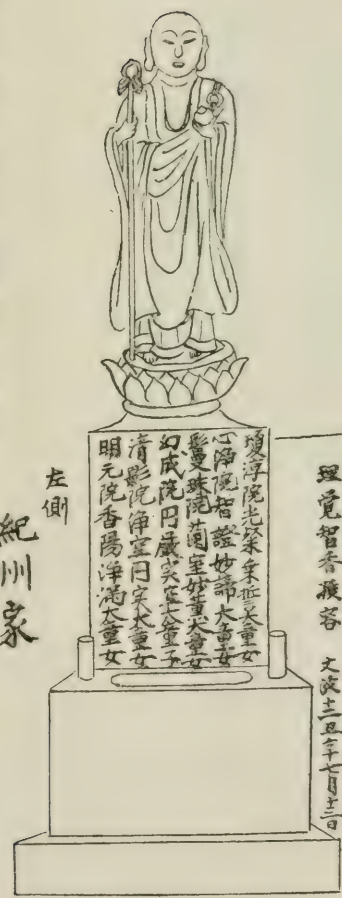
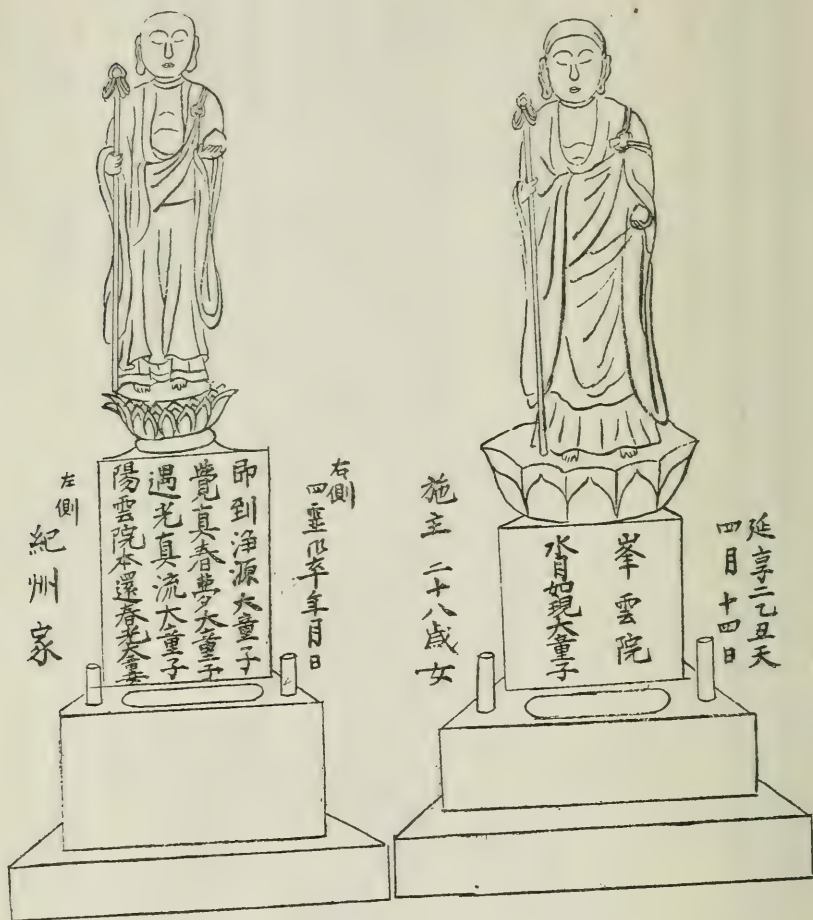
右側

覚性幻夢孩容　文政元寅年五月八日
玉露光英孩容　文政元寅年八月十日
花光春流孩容　文政七申年正月廿四日
春光英輝孩容　文政八酉年三月十三日
理覚智香孩容　文政十二丑年七月十三日

左側

紀州家

右側覚性幻夢初五霊ハ霊廟記ニ載セズ
歴世公子方ノ内記スル所ナシ祐天寺ニ就キ過去帳
等調査スルニ亦記載ナシ察スルニ瓊淳院初六霊
皆顕竜公ノ子又覚性幻夢ト境妙寺ノ相幻院
殿ト同年月日ナレバ養唯院殿ヨリ略記シタルモノカ
之ニ依テミレバ玉露光英以下四霊亦顕竜公ノ子
ニシテ幽テ四早世乃至四流産等ニテ全ク四歳
数限リ四内葬ナリシモノナラン

延享二乙丑天
四月十四日
峯雲院
水月如現大童子
施主 二十八歳女
右側
帰到浄源大童子
覚真春夢大童子
遇光真流大童子
陽雲院本還春光大童子
左側
紀州家

香　蓮　寺　鮫ヶ橋

當寺には　澄清院夫人（觀自在公御部屋舜恭公御生母）御廟墓あり（一本御廟は長保寺）文化四卯年十一月爲御菩提左之通御寄附あり

金二十五兩　　本堂前常燈明二基永代燃料

一御代々樣御位牌も有之處明治一新に付外御寺方同樣御廟無之御寺に御安置之御靈牌は還納可致旨を達したるに明治三午年二月左之如く願出る（但　御代々樣靈牌二基蓮光院殿同一基明治二年十一月十六日香蓮寺より還納す）

拙寺に御安置御座候　御代々樣御位牌先達て御達に付奉納候事に御座候然處　舜恭院樣御實母澄清院樣御廟所拙寺に御座候に付是迄御廣敷より年中左之通御納物御座候處一昨年より何等之御沙汰も無御座候勿論朝夕之御回向等は聊無懈怠從前之通相勤候事に御座候就ては何卒　御家舘樣之御緣不絕樣厚御評議被成下候樣仕度奉願上候以上

明治三午年二月　　鮫ヶ橋　香　蓮　寺

家令所御用御取扱衆中

年中御納物

一金二百疋つゝ　　正月より十二月迄毎月十日に

但御祥月十一月十日は金三百疋

右之通願出東京御留守居方にては　澄清院樣御廟は若山長保寺に有之筈不審之旨にて香蓮寺取糺したるに寺之舊記先年燒失明了ならされ共申傳には一旦同寺へ御埋葬追て紀州へ御改葬相成

最初御埋葬之地へ御石碑御建立有之事之旨申出付ては容易に取除かたくと若山へ紹介に及ひたるに先從前之通り居へ置き可然御佛供料は外御實母方に被准之旨六月廿五日出を以て申來仍て左之如く可被遣旨達し兩年分一兩つゝをも渡したるとの記載あり

一澄清院樣御佛供料

金一兩　　　香　蓮　寺

按に　澄清夫人の事は　舜恭公世記に記する如く明和八卯年十一月十日　觀自在公の爲に不慮に御落命故を以當座不取敢香蓮寺へ御埋葬は事實に於て同寺申立之如くして追〻長保寺へ御改葬ありしなり

附　記

從前之例に江戶御中間之者江戶在勤中死去之時は固より獨身者舊里は遠國故に御中間方にて取片付都て香蓮寺へ埋込に取計ふ是を投け込と稱して別に墓標もなく數十百年來數百人となく一穴同葬に行ひたるなり同寺は赤坂邸田屋敷門外最近の地に在りて自つから藩士中の墓所も多く因緣不少しなり

林　光　寺　鮫ヶ橋　淨土眞宗

當寺は寛延三年年七月　菩提心公本尊の靈告御感得あつて四幅の畫像御染筆を賜りたる事　御同公世紀に詳記の如し尙昔て同寺より提出する處を左に抄錄す彼此參照すへし

御由緖書寫　　鮫ヶ橋　林　光　寺

拙寺儀は往昔但馬國居住仕候處慶長十八年　東照宮御六男忠輝卿御由緖御座候に付御同卿樣思

召を以て御呼寄に相成江戸赤坂へ移住年々御手當被下寺務相續　公儀より境内等拜領仕候處御
同聊棣被蒙御不興候後は境内も召上に相成無據鮫ヶ橋へ轉住仕候處追々困窮零落仕久敷埋沒居
候始末　菩提心院違御聽亘細本申上候處御不便被思召當宗本山規則法式免許之品無御座候ては
一寺不立旨奉申上候に付左之通り御品御自書被遊就中御添狀御文言に付於當宗は拙寺而已不成
廣當宗一班之法則に相成拙寺於本山も格別之儀に御座候猶夫迄は拙者無檀地に御座候處依　君
命御家中小池善右衞門殿檀家に被　仰付夫より追々御家中幷諸方歸依厚檀家多分出來候は御取
立之御高恩と難有奉存候御寄附之御品左之通り

一親鸞聖人尊像　　一軸　　一聖德太子尊像　　一軸

一七高僧尊像　　一軸　　一蓮如上人尊像　　一軸

以上箱入

寛延三庚午年七月吉日　　施主　　紀伊宰相御名乘　御實印

願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國

如此御認被成下外に御寄附之御品々

御紋附御長持　　一棹　　御紋附同御箱　　一つ

同御高張提灯　　二張　　同弓張提灯　　二張

同廐御幕　　一張　　同佛前打敷　　二枚

同佛前戸張　　二枚　　同佛前　机　　一

同五條袈裟　一服　同御香爐　三つ

一右に付左之通御安置

菩提心公尊牌　一基

淨眼院様　菩提心公先御簾中　寶曆七年五月廿四日

寶池院様　御同公御長子直松君　延享四年六月十四日

泰良院様　同御三男門之進君　寛延三年正月廿六日

右御合牌　一基

一寺領及ひ御宛行無之

一明治二巳年十一月都て御廟無之寺院へ御安置之靈牌佛器類共還納せしむる筈改正により其段同月十日林光寺へ達したるに廿八日前記尊牌二基還納之事

潮雲寺　麻布谷町

當寺には信解院（永隆院殿御實母寶曆元年十二月十七日卒）の廟墓あり其御菩提之爲天明元丑年十二月　永隆院殿（菩提心公御實母）より當寺へ經堂御建立其砌宇佐美長右衛門駒木根八兵衛兩人書附にて　永隆院殿より釋迦銅像厨子入一躰外に金百兩爲祠堂料御寄附ありたり

明治三午年二月廿九日同寺より右御兩牌經堂共破損に付御修復願出之處協議之上　永隆院殿靈牌は爲納經堂釋迦銅像は下付之旨同年四月十八日同寺へ達す

信解院位牌は服部氏より安置之趣により其儘に居へ置たるよし

傳通院　小石川

當院は　幕府の御菩提寺也　顯龍公御生母妙操院夫人は　御家へ御引移なく天保三辰年十月廿五日御卒去當院へ御埋葬　幕府より御法事且永々御供料金百五十兩御寄附あり然るに天保四巳年四月十三日鶴樹大夫人の御建言により同院へ御位牌所別段御造營に決し其段五月十七日を以　幕府へ御伺之處繪圖面之通御取建可被成旨指令依て其通御建築爾來御年回御法會且御證忌日等には顯龍公御參詣被爲在たり年中奠供等左の如し

金三兩　御佛供料　金一兩　　　　　傳通院

銀二枚　　十月廿五日御證忌日に付御靈前へ

銀二枚　　　　　妙操院樣　御別當

金二百疋　　　　同　　　伴僧一人

御位牌所別段御取建有之付被下

一明治二巳年十一月維新改革により御位牌は還納すへく靈牌堂は下付せらるゝの旨同月十日同院へ通達以來關係なしと云

圓滿寺　湯島

當寺は和歌山妙王院の如く從來江戶於ての御祈禱所に定められし由にて御合力金年々金二十五兩を宛行れ來る然るに明治二巳年十一月維新改革御廟有之御寺方御宛行は從來之十分一に減省其他

は都て停止之筈に決定仍て其旨同月十一日圓滿寺へ達す

一　行　院　小石川天曉山　當時小石川區原町　淨土宗

當院は德本上人入寂の地也上人は紀州日高郡志賀谷久志村の人にて念佛の行者高德之明師たる世普く知る處とす文化八年の頃　觀自在公藥種畑殿に召して親しく化益を請け給ひ　舜恭公亦本城に請し師弟の禮を執て十念を受させられ爾來御尊信啻ならす文化十一年上人江戶下向の時六月廿二日を以て赤坂殿に御招請　鶴樹大夫人（顯龍公御簾中豐姬君）　轉心院殿（觀自在公御女松平相模守室）　日課念佛を誓受し給ひ同時に內外男女三百九十餘人を化度せらる文化十四年上人江戶を去て攝州勝尾寺に歸錫せんとせしを一橋最樹院公（將軍文恭公の御父從一位儀同三司）には嘗て御尊信三歸戒を受させられ日課六萬稱を誓ひ給ひ又　慈德院の君（文恭公御實母贈一品大夫人）　御異例にて醫藥も及はせられさりしを上人念佛の功德によりて頓に平癒し給ひしほとの御因緣あれは今兩三年の間は是非に江戶に留錫をと一橋公より增上寺大僧正へ因み懇請し給ひけれは大僧正は幕府に請ひ小石川一行院を上人行化の地と定めて抑留す此よし傳へ承る貴賤老若は歡喜踊躍に不堪上人安置の淨刹を構へんと其年の十一月七日より功を興し夜を日に續て力を盡しけれは十二月廿三日には佛殿廚坊を始門塀泉石に至る迄落成し金碧目を輝し鐘聲耳を新にするに至る然るに文化十五寅年九月上旬の頃より上人年來の病ひ增長して起居常ならす遂に十月六日泊然として入寂す上人の事及ひ　觀自在公初御尊信御歸依の事等皆高僧傳に詳なり

一上人法脉相承の高弟十二人の內本佛和尚は當院に留り堅固に法脉を弘通し化益利他盛なりしか後二十二年天保十亥年三月不幸にも類災に罹り當院悉く灰燼に歸す于時上人の遺弟本弁和尚は紀州

和歌山無量光寺（無量光寺の事は社寺制第五に詳にす）に在て變事を聞き驚歎措く能わす如何んかして再建を謀るへきやと憂苦懲傷を極む

舜恭公には上人御尊信に續き本弁にも兼々御歸依　榮恭院（舜恭公御妾鶴樹大夫人御實母）讓恭院（舜恭公御妾御内證樣と稱す共に若山御在住也）の御方は猶更之御事にて爲めに無量光寺を御建立尙上人の舊跡數ヶ寺さへ取建させ給ふ御因みあれは該火災の事聞召　舜恭公御手許より金若干を下し給ひ一行院衆僧當座の袈裟なと調ひ得させよとの事なり本弁尊旨身に餘りたる仕合なから熟ら／＼考へ候に先師遺跡を失ふに當り徒弟たる者たとへ身に纒ふ法衣なく共第一に再建を心掛たく恐多くはあれと暫く御預りを願ひ奉る由を上申せしに殊勝の事也然らは今よりして市街を初め近國遠在等勸化寄進に丹精を凝すへしとの仰に本弁は寢食を忘れ一心不亂東西に奔走しつゝありしか時夏季に至り三伏流金の暑も更に一日も怠らす驅廻ありと聞召し篤志の程不愍に思召し此炎熱に或は病ひなと引起さは詮なし再建の事計ひ遣すへしと御内諭ありて則再建を被命直ちに本町大手外空地へ普請小屋を建設是にて一切伐組をなし翌天保十一子年春海上江戶に運輸御作事奉行監督役人共駐在紀州より派遣之上大工諸職工を指揮して遂に建築落成せしむ則今の本堂坊舍是なり高厦洪麗莊嚴善美を盡し本堂の棟瓦佛殿の格天井長押の釘藏し襖の張付等皆悉く葵章を付したり

一信同院に就き舊記を調査するに多くは散亂連續せす中に就き本藩に係るの記事散見のものを畧抄して參照に付記す

一拙寺開山德本行者從　御國罷出候處修行積功累德之上　上々樣方厚御歸依を蒙り別て　一位樣御儀佛法御仰信之御因緣を以不一方御歸依被爲在度々　御殿へ被爲召乍恐御化導奉申上其後江戶表へ罷越候處彌以化導弘通莫大に相成候事全く　御威光の御影と冥加至極難有仕合其後德本儀終に於拙寺入寂致し開山と稱し候事に御座候然る處去る天保十亥年三月拙寺不殘類燒に相成右之趣達　一位樣御聞再建之儀何哉　御意を被爲掛　御案事遊し厚き　思召を以本堂之儀於御國伐組被　仰付則翌年春中船廻し相成着岸之砌一行院迄引込之道筋武家地之內貢荷車遠慮可致場所も有之付御繪符拜借被　仰付無滯運送再建成就仕全く御建立被成下候御儀と重々難有仕合に奉存候

一天保八酉年十一月　一位樣御染筆一行三昧院御額字頂戴追て本堂へ掛候樣　御內命を蒙り候

信曰此御染筆今は寺庫に秘藏す橫長七尺に餘り字の大さ尺餘御楷書殊に秀逸なり

弘化元辰年三月

一本堂再建結構成就仕候に付兼て奉願上候通本堂へ表向　御尊牌御安置幷頂戴御染筆之御額字奉掛永世御武運長久御祈禱且御菩提御回向奉申上度奉願候然るに內陣向造作極彩色に仕度候得共未た出來不仕何卒於赤坂御殿御世話遊し右內陣向造作極彩色之儀出來相成候樣仕度此段乍恐御部屋樣迄奉願上候

一弘化二巳年四月拙寺永世爲相續格別之　思召を以御寄附金頂戴被　仰付殊に御預り置永く御世話被成下候樣被　仰付候

信曰右金高不明なり

一弘化二巳年八月鶴樹院樣御逝去に付願之上爲冥加御棺前へ罷出燒香御回向仕　一位樣爲伺御機嫌御國へ罷出候處他國は一切不相成候得共格別之　思召を以和歌御法事中御拜香被　仰付

一弘化三午年閏五月　暉龍院樣御逝去に付願之上御棺前御燒香御回向仕御國へも罷出　一位樣御機嫌奉伺

一弘化四未年八月類燒後表門未た再建不致處當十月德本行者法事に付再建仕度材木運送に付先例により御繪符御拜借仕度旨御用人小谷作内殿へ願出候處九月朔日御取扱相濟御繪符御勘定所にて受取尤途中老若多人數集り寄進引躰之儀堅く無之樣被　仰聞

元治二丑年四月本堂屋根替之節も同樣繪符御下け渡被下候事

嘉永二酉年十一月

一一位樣御染筆御額字之儀寺社奉行所へ御屆相濟有之且此度　最樹院樣淨觀院樣慈德院樣御尊牌表向御安置被　仰付候に付右爲規模以來一行三昧院と改め唱へ申度奉願候

嘉永二酉年十二月

一御部屋樣御國に於て御卒去に付奉願御國へ參上　一位樣御機嫌奉伺道中人馬御先觸御出し被成下置候

嘉永三戌年二月

一榮恭院樣御在世中御懸之仰も有之且從來莫大之御高恩を蒙候に付　觀自在院樣御尊牌御安置被

仰付候樣西濱御殿にて渥美源五郎殿へ願出る
一榮恭院樣御卒去之砌　西濱御殿へ爲御悔參上仕御遺物として無量光寺同樣紫色法衣地頂戴被
仰付御庭拜見被　仰付
嘉永五子年壬二月
一顯龍院樣鶴樹院樣榮恭院樣御尊牌御安置之儀願出る尤御供養料等之儀は御寄附金を以永世無退
轉御供養仕度旨
本文之趣同年十一月にも再願す
同年
一年來積置候祠堂金殘り少く候得共取集先達て中金千兩と相成則御役所へ御預け申上右利分年々
二季に御下け相成候處舊冬御書替之節以來利分御減に相成候趣右は諸方一同之事御尤に候得共
拙寺差定り候受納無之年中諸賄向も右利子を以取賄候事に付祠堂金利子之處前々之通頂戴仕度
旨願出る
嘉永六丑年正月
一一位樣御逝去に付願之上爲御棺拜紀州へ罷越同月廿六日西濱御殿御庭にて御棺拜御回向被　仰
付
此節道中八馬御先觸御出し被下
嘉永六丑年

一一位様顯龍院様御尊牌御納之儀於若山大奥へ段々願之上相済四月廿二日出立道中御守護歸寺仕る

此節道中西濱御殿より御内々御納之品御長持一棹駕籠人馬等御先觸御下け被下

同年

一一位御様逝去に付若山にて御中陰中御法事勤務之處　観如院様御逝去之儀奉伺江戸に罷在候得は先例により赤坂御殿大奥へ罷出御棺拜御回向奉申上候處　御國に罷在候事に付願之上日方永正寺へ御着棺之節罷出御棺拜御回向仕

右之如くにて　觀自在公御初め靈牌は今に本堂に安置し回向奉仕怠らす佛具之類御寄附品も多く奇功絶品之打敷等あり

御庭御堂

赤坂邸内に　龍祖初御歴世の尊牌を安置し奉る殿堂あり之を御堂と稱す寶永三戌年　有德公初て御建立世々最も御崇敬嚴か也御堂附坊主同陸尺日々出勤灑掃奉仕し千駄ヶ谷境妙寺御堂守り僧となつて毎朝四つ時より參務御靈供を献備讀經回向し奉り御諱忌日等御在府年には　君上御正服にて御參拜御在國年には御家老御代拜を奉するを恒例とす

御堂　御參詣日

正月八日　舜恭院様	正月十日　南龍院様
三月十日　憲章院様	二月廿五日　菩提心院様

五月八日　顯龍院様　五月十四日　高林院様

五月 月に付　南龍院様御初　六月二日　觀自在院様

七月八日　大慧院様　七月十四日盆に付　御家父様方

八月八日　清溪院様　九月八日　深覺院様

九月 月に付　御家父様方　十月廿三日　香巖院様

十二月十日歳暮に付　御宮殿并 顯龍院様 憲章院様

文化十三子年十二月十六日御庭御堂之儀御靈屋と唱不申御堂　となた様御靈前と唱候事

但他所へは祠堂と唱候事と仰出さる

一慶應四辰年江戸瓦解邸中引拂に付御安置の尊牌は悉く御用人古田叙兵衞守護同年七月十八日陸路紀州へ遷座なし奉れり

此際當五月十五日上野戰亂の時山內眞如院に安置の　東照宮御木像を玉泉院兵燹の中より救護し奉りて當御堂へ假御遷座なしたるをも共に和歌山へ護送し奉る出家御供には及はさる旨の處玉泉院及ひ弟子一人は遮て願ひ供奉發足す此　神像は後和歌浦東照宮殿內に安置し奉ると云ふ

一同年四月江戸開城の時紅葉山御宮の　神像を取あへす御當家へ御遷座を御宗家より御依賴により亦御堂內へ假安置し奉りし處明治三年年六月廿五日に至り久能山へ御遷座あるへき旨にて御宗家公用局東條悅三郎をして迎へしめ給ひ直ちに御發途あらせられたり

一明治三年年七月十四日江戸寺院より還納の靈牌を悉く御堂へ安置玉泉院（眞如院代）茶湯香華を供具回向し奉り御撤遣の修法を行し畢て　御堂前空地に於て火中を遂けたり是藩政大改革を以て御廟無之寺院に御安置の尊牌は還納すへき旨去年十一月諸寺院へ告諭せしに各寺より漸次還納遂に完結したるを以て如斯しといふ

御庭

稲荷社

秋葉社

兩社亦赤坂邸園中に鎮座社殿莊嚴佳麗華表あり瑞垣あり祭神乃至由來詳ならされとも蓋し鎮守神且つ火防神として往昔より御勸請ありしなるへし稲荷社祭典は毎歲二月初午の日秋葉社は十一月十八日に舉行共に境妙寺詣りて法樂を修し御在府には特に御參拜あらせらる兩祭日には御家中子弟上下を問はす十五歲以下の男子に參詣をゆるされ園中普く拜觀する事隨意也　顯龍公の御時には鳳鳴閣の廣芝五里香の御鷹場等にて御放鷹或は伏せ鶉なと御親から遊されて群兒に拜觀せしめ給ひ時としては侍臣に扇上けを命し群童兒の競走爭取を興し給ふ（扇上けとは今の旗取運動の如し）頓て　御前に捧け出せる山積の蜜柑餅菓子なんとを侍臣と共に滿地に投散し給へは群兒は我一人に拾ひ得んと上を下へと入り亂れ蹂躙轉倒狂ひ廻り衣を劈き泥に塗れ泣くあり笑ふありて奇狀万態抱腹に堪へさるを一人の御慰とせさせ給ふ之を御投け物と唱へたり故に數百の小孩は撰寄々々組々（山屋敷組中段連といふ如く遊ひ友達の組）あり隊をなし（無羽織袴着草履に限る）早天より所々の御庭口より入園四方八方を縱覽山林に戲れ池邊に遊ひ鞦を社

頭に弄し團飯を樹下に披き踊躍歡喜餘念なく果ては御投け物の獲物（各網袋を携へ行くを常とす）を鬼の首得し如く脊負ひ意氣揚々歸て父兄に誇る其愉快は又と忘れかたき一大快樂とはなしたる也　御在國には御放鷹御投け物はなきも入園はゆるし給へり爾後　憲章公には御世淺く　照德公には御幼年從前の如くにはあらさりしも折々御投け物等ありしと　當公に至らせられては時勢次第に騷擾唯祭日入園のみ舊に依りし也

護光院　野州日光山內佛岩谷　天台宗

當院は日光山三十六坊の一にして往古より御宿坊に充られ寺領を下付　東照宮御木像及ひ　南龍公御靈牌を安置し奉り殿堂坊舍悉皆官の營繕所たり傳ふる處彥坂九兵衞光正（光正は神祖より御附家老にて三百石を領し寛永九壬申年二月廿九日卒す名臣傳に詳なり）開基といふ嘗て同院より提出之書類左の如し

御由緒覺

一當院之儀は日光山台宗創業以來の舊坊にて舊寺號は圓實坊と唱數年來相續仕候處天正十八年有故て及中絕元和年中彥坂九兵衞光正殿被致中興候事

一彥坂九兵衞光正殿儀は　神君樣思召を以て　南龍院樣御附被　仰付無怠緩精勤之後爲　神恩報謝之當山　御宮奉給之一院致創建自己菩提之志願も被相遂度旨達　君聽被蒙御許容候て慈眼大師之法與に相成奉　台命往古圓實坊之舊跡被致再興則舊寺號を相改め光正殿之法號護光院を以て寺號に被　仰出住職之儀は大師之法嗣圓海法印へ被　仰付候事

一南龍院樣格別之思召を以て光正殿之志願　御隨喜被爲在相續向御扶助被成下置且　神廟御參詣と

して　御登山之節當院　御旅館に相成院主　御宮向御隨從申上候に付則御宿坊に被　仰付爾來
御屋形樣　御登山之節々　御旅館に相成候に付境內へ別段　御座所御出來に相成居候事
但例歲年頭之　御名代且御代替御轉任に付　御名代御差越之節々當院へ御止宿に相成　御宮
御靈屋御勤向御案內申上右　御名代御差越之節々別段拜領銀被　仰付候事
一光正殿遺骸當院境內へ埋葬開基同樣相崇且又二代之住持天英法印儀は御國許粉河寺御池坊より轉
住被　仰付三代空憲法印儀は彥坂光正殿之末子にて比叡山日增院住職中御國表　御宮御別當相勤
候功を以て當院へ移住被　仰付從　御屋形樣永代爲御合力寺領四十石つゝ每歲可被下置旨被　仰
出且又院內向都て當御修復所に被　仰出候事
但空憲迄は每歲玄米五十石つゝ被下置候由尤永代之御定は無之候事に相見へ申候
一當院境內へ　東照宮樣御社頭御造立　御木像御安置御武運御長久之御爲永年不退之御祈禱被　仰
付置日々無怠慢執行仕每歲爲御吉例御札牛王獻上仕候尤御神前日々御祈禱之備物香油等之料并
神饌御供米且御野菜料御神酒御菓子料等別段御仕向は無御座每歲御合力米之內を以弁用仕候事
但御社頭御造立神器并　神饌之御道具類等迄從　御屋形樣御附置に相成不退之御祈願被　仰付
置候上は御供米其外　御祭事料等別段御仕向も可有御座筈之處一躰日光上野兩山之寺院諸家樣
方より御合力と申御趣意は天下安全　神胤御繁榮之御祈禱御相續之儀御力を合せ被下置候との
譯にて世諺に所謂助成合力と相唱候筋とは遙に異なる旨舊記に相見へ申候附ては御合力其儘御
祈禱料之御趣意にて別段御供米等御仕向無之哉と奉存候將又境內　御社頭之儀最初は御手輕之

小殿に御座候て御破損之節は御膳具等迄御修復被成下候儀に候處明和年間改て結構御造營被
仰出　御木像正遷座之節は當山僧正幷衆徒之內七ヶ院所化六口伶人六員出勤　御式執行仕右出
勤之僧正を初樂人に至迄御施物拜領被　仰付候事

一南龍院樣御靈牌當院客殿へ御安置朝暮之御回向且御忌日之御法事修行罷在候事
　但從　御屋形樣御安置之由に御座候得共御安置之年月不分明に御座候

一御代々樣總御靈牌も客殿に奉安置御回向申上候得共是は御報恩之爲當方にて出來之候由申傳候事

一菩提心院樣御筆之阿彌陀如來一幅地藏菩薩一幅御染翰を被爲添御寄附に相成御祈願被　仰付候事

一御宮幷御靈屋へ御獻備之御品幷慈眼堂へ御備之石燈籠等御破損之節御手入取扱野院へ被　仰付右
御用相勤候節は院主幷院代用役迄拜領物被　仰付候事

一院內　御座所を始勝手向幷外圍等迄破損之箇所中か一ヶ年置隔年に御修復被成下置候事

一從來當院相續向收納左之通に御座候

山領配當

百二十石
此物成　米三拾壹俵と七升　但三斗五升入
　　　　金貳拾四兩貳分と錢壹貫四百四拾文

玄米四十石　　御屋形樣御扶助
　內　十三石　夏渡り
　　　廿七石　暮渡り

金二百疋　　松平右京大夫樣御初穗

同二百疋つゝ　大岡主膳正殿
　　　　　　　加納大和守殿　御初穗

年中諸法會御施物當山料物より相渡り候高

金五十兩餘

〆

右之通毎歳收納に相成　御宮御靈屋奉給且諸般之寺役無滯相勤累代法眼相續罷在候處昨今之仕合にて山領配當一切無之料物により相渡り候諸施物是亦昨暮より聊も收納に相成不申外に收納向且檀家等一切無御座候事

巳十二月

日光山　護　光　院

本坊舊記之内拔抄

貫髮嶺總徒列傳中

護光院中興元祖圓海法印は天海公の御弟子にて多年御座下に奉仕す後當院住職を拜任し且羽州立石寺を兼帶す當寺中興とする故は彥坂九兵衞光正は　東照宮御遺言として紀州大納言賴宣卿へ附させ給ふ然るに光正二世安樂の祈願を發し天海公へ會談し西山圓實坊舊跡を建立し護光院と號す是は光正へ天海公の附させ給ふ戒名なり此謂れを以て當院は紀州家の宿坊となる光正後には御家へ歸り奉仕せらる寬永九年二月廿九日卒す石塔當寺の内に建つ圓海は退隱の後寬永十一年三月廿八日東叡山にて寂す

二世天英法印　紀州粉川寺三池坊の住侶也天海公の命を以て當院住職を拜任す寬永八年四月大僧正御名代として中禪寺籠山二百三代の上人也同十七年東山大輪坊を善如寺谷に移し其跡へ當寺を移す引料の金は　將軍家より拜賜す病身たるに因て同十九年職を辭し紀州へ歸り又三池坊に再住

して老年の後寂す

三世空憲法印は彦坂光正の末子にて山門日光院の弟子也嘗て紀州　東照宮の別當たり後當寺住職を拜任す此代に紀州家より寺領五十石寄附し給ひ且此より後は今に至て破損の時は修復を加へ給ふ明暦三年三月瀧尾籠山百七十代の上人也寛文三年九月退隱同十一月六日寂す

日光山本坊幷總徒舊記中

護光院は西山圓實房舊跡也元和年中紀伊中納言賴宣卿の家臣彦坂九兵衛（實名某）爲菩提造立す慈眼大師院號を賜て護光院と號す即九兵衛方沒後の院號也住持は出羽國立石寺兼住禪行房圓海法印也寛永十八年山門の日光院の弟子空憲此寺の住持の時東山の大輪坊を他所に移し此寺を造立す用金は將軍家より賜る紀伊家御代々の宿坊也空憲法印は彦坂丹波か末子也と云々

又維新後日光山總僧坊一新改革の處置被　仰出たる際護光院より維持方歎願書の中に

南龍院樣御靈牌當院客殿へ御安置被爲在候御趣意舊記を失ひ事實不詳候得共當山は　神君樣御遺骸御埋葬被爲在候御事に付右　御墓地之御近傍被爲遊御墓候御孝心之御遺志を以て當院へ御尊牌御納に相成候儀と奉存候既に　大猷院樣御遺骸當山へ御埋葬之御志願幷精忠之御寵臣當山へ墳墓御取建に相成候御趣意等都て前顯同樣之筋に御座候と云々

右之如くありて　御木像御安置御由緒不詳舊記面に據れは光正存生中出家したる如くにもみへ又護光院は光正沒後の戒名ともありて不判然なれ共畢竟するに光正自身出家したるには非す唯生前に天海僧正に就き受戒入道して法號を受け菩提之爲に一寺建立（生前か死後か不判明なれとも光正志願より出たるは明也と云）僧を請し

て住持さし法號を以て寺に名けたるには相違あるましさいへり最初建立は光正自力の如くなれ共何れ維新に至る迄は修繕營造皆官の支給を仰きたるなり

一寺領

元和御切米終身祿に

承應三年新規

一小判　拾兩　　　　　護　光　院

寶永四亥より四十石に成る以來當時迄無相違渡る

以來明治維新迄年々御切米四拾石つゝ御家中御切米渡方之通り夏貸暮兩度に渡し方取計來る

一御豫參之節は大桑村御本陣御旅館となりし如くなれ共山内の御用は一切護光院奉仕之由維新迄は毎年正月十七日　公儀より御名代之節御三家方よりも御名代參宮　御家よりは大御番頭へ被命御太刀馬代（黄金一枚御徒才領罷越す）御獻納あり此時は皆護光院へ止宿の慣例なり

維新後

一明治二巳年十一月六日藩政改革に付從來の十分の一を御宛行且御廟無之靈牌は還納との事眞如院へ布達同樣の書面を達す

一同三午年四月爾來左之通御宛行之筈定る

御宿坊料四十石之十分一　　米四石

一同年同月左之趣護光院より出願により會計局より若山へ掛合御宛行十分の一にも減し返納難行屆

は無據次第に付當分浮置允許其段明治三午年五月廿二日指令す貸與金額且年月共不詳

先々住已來追々拜借金昨年來之仕合にて疲弊必至難澁之折柄に付當分返償上納御免奉願候旨

一明治三午年十一月左之趣同院より願出に付願之通允許翌四未年正月十三日に指令す

當院御座所向を始御修復家根御葺替後年數相立是迄精々自力修補加へ居候へ共最早不及力依て圖面へ掛紙之通り殘し置其餘不殘取毀ち疊み置度との趣　但圖面欠失す

一同四未年正月左之通願出無餘儀次第に付當未年分御切米を以返納之筈にて金十五兩を可貸渡旨同月十三日同院へ達す（願意は昨十一月より出京の處日光山御處置縣廳より申渡の件に付早々歸山の事急使到來の處必至窮迫歸山の旅費も無之御救助懇願候旨也畧す）

一同年三月左之大意同院より出願に付書面之趣難及取扱　御木像は此節東京御邸內へ　御遷座取計可申　南龍院樣御靈牌は於其院御撥遣可仕　御宮殿幷院內御建物は其院へ被下に可相成旨同月廿日指令後四月に至り　御宮御名代山澤與平を被遣の際　御靈牌は御撥遣に取計　神像は守護歸京護光院へは是迄多年奉仕の廉を以金五千疋を賜りたり

今般神佛判然之御趣意を以日光山僧侶　御宮勤仕被爲停　御宮御正躰幷御本地堂御安置之藥師如來其外神庫御秘藏之　宸翰御贈經等佛法に關係之御品は都て山僧へ御渡に相成猶又法燈相續料として稟米百石僧徒へ可被下賜との御事に付則御本地佛等常行三昧堂へ御遷座仕不相替　神君樣御遺願之法儀を以　御同所へ可奉勤仕事に御座候就ては當院境內へ　御安置之　御木像幷御社頭共如何相心得可申哉可相成候はゝ　神號を被爲廢候て其儘當院へ御惠與被成下置候樣只管奉歎願候　御社頭向幸に唯一之神殿にも無之候間院內限之取計を以改て當院之本堂と稱し

御神儀に御靈像と奉唱　南龍院樣御靈牌も　御同所へ奉安置度尤營繕筋其外御供米等決て奉願間敷候從來　御安置被爲在候　御尊牌之儀に付方今御改正之御折柄には候得共何卒其儘御差置被下候樣偏に奉哀願候

一院內　御座所向一棟を殘し御次之間幷御入側邊を以自分住居に仕其餘院內不殘取毀申度奉存候就ては　御座所之儀向後自分修理を以相凌御營繕筋等一切奉願間敷候間其儘當院へ被下置候樣奉願候云々

辛未二月　　日光山御宿坊　護光院

御家令衆中樣

右之外別紙に

日光山滿願寺衆徒幷一坊共本坊一境內へ合併仕候樣官廳より被　仰渡候旨天台管領より達しに御座候處當院は彥坂九兵衛光正菩提之爲御造建被成下則光正之遺骸を境內へ埋葬永く同靈墳墓之地に御定法號を以其段寺號に被　仰出其後　南龍院樣御靈牌も客殿へ御安置被爲在爾來殆と三百年法煙相續罷在候處今般本坊へ合併仕候得は寺跡忽及殄滅不堪痛哭之至候に付合併御免光正菩提寺之廉を以て滿願寺外之別院に建置に相成候樣當山學頭へ願書差出し則縣廳へ申立之處別に舊寺相殘し置候儀は御趣意に背き御聞屆難相成併なから從來諸家由緒有之菩提寺之分滿願寺外之別寺として其儘差置度旨其檀家より縣廳へ被申立候はゝ御聞屆にも可相成旨縣吏より口達有之候段學頭代より申聞候事に御座候當山衆徒中に當院同樣菩提由緒之筋五ヶ院有之右何れ

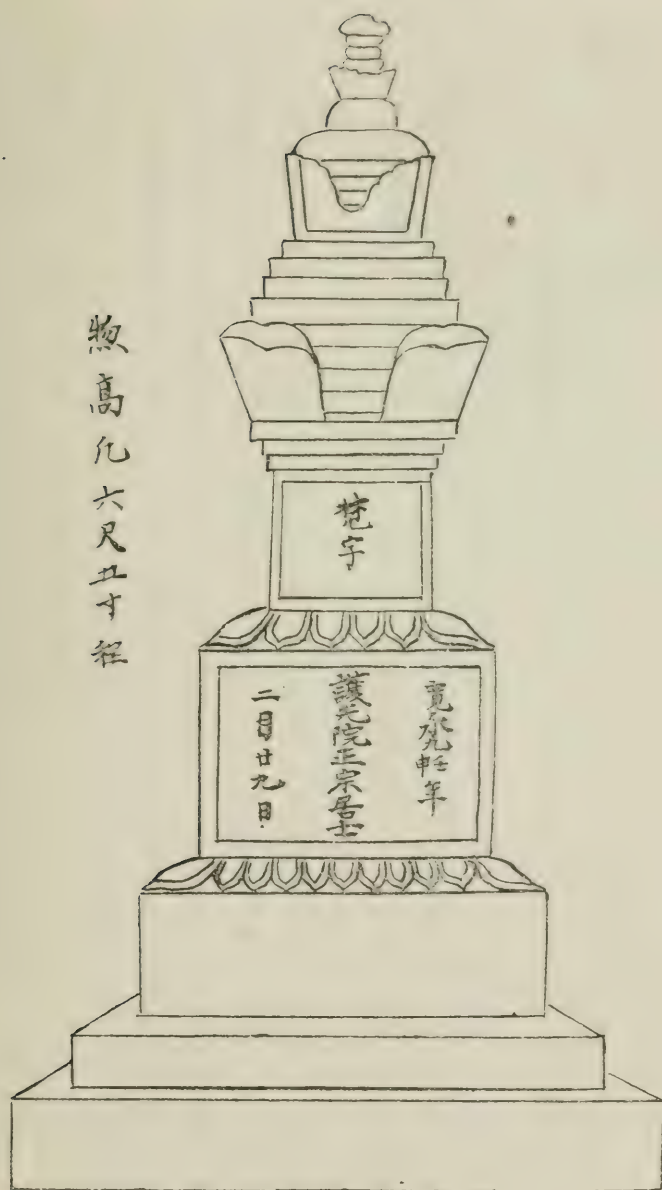
も同樣之運に可相成由其他類例も有之付何卒合併被免滿願寺外之寺に御建置に相成候樣との旨
日光縣廳幷に天台管領執事へ御賴み被　仰入被下候樣一入御仁惠之御厚評奉懇願候との趣
一山僧一統へ下賜候稟米百石之內廿石は堂舍修繕料に備置殘八十石を以て衆徒二十六ヶ院幷一坊
現存廿八人之食料と仕候事に付所詮活計難相立依之何れも從來御由緒之筋へ御救助相願可申哉
に御座候當院義は老師幷弟子共之老介も有之別て當惑罷在候間何卒出格之御垂憐を以て當分之
內更に三人口之御扶助下し賜り候樣方今之窮迫言路難盡苦心罷在候に付因只管奉懇願候との趣
右之數條明細に記載願ひ出たれとも都て前記指令之處を以て採用に至らさりし也
一護光院より納め奉りし　御木像は今飯倉邸　南龍神社御合殿に安置し奉るもの是なり本記の如
く同院請願は採用に至らさりしか後百方苦慮彥坂家後嗣之者より墳墓地たる之故を以て別院に
存置之事歎願之上遂に許可を得徹々僧坊を存したるに明治九年一月不慮之回祿に罹り悉皆烏有
に屬す此際御救與として金三百圓を下し賜ふ明治十年再建に付借用金出願之處金二百圓を賜ひ
以來宿坊を廢し宿坊料を停めらるゝ旨同年五月二十日達せられたり彥坂九兵衞の墓は今尙舊地
にあり因により其圖を左に揭く

惣高凢六尺五寸程

梵字

寛永九壬申年

護光院正宗居士

二月廿九日

附　記

日光一山御助成

維新變革收納皆無に屬し一山殆と飢渇の慘狀を極るを以て一山總代より左の哀願書を東京詰公用局へ提出御場所柄御默止難被成を以て御手許より金五百兩を御助成其旨同局參事をして功德院へ告け金員附與せしめらる即ち明治三年二月十七日也是れ護光院に關せされとも日光の因みにより爰に附記す

奉願口上覺

日光山　御宗廟御祭典筋何卒御廢絕に不相成樣當七月　德川樣幷御蓮枝方其外厚御由緒被爲在候諸侯方へ只管歎願置候處今般德川樣より一山諸給之面々危急切迫之者へ全く當分之飢渴相凌候ため昨今之御場合には候得共出格之御譯柄を以御救助被成下難有仕合に奉存候然る處　御當家樣へも當夏中厚き御由緒邊を以て兼々奉歎願置候儀に付方今實以不容易御時節に候得共猶又右御模樣奉伺候乍然　御宗廟御祭祀向御永續之儀は何國迄も闔給一同之懇願に候處最早追々疲弊相極り朝暮之活計も盡果無余義　御祭典筋御闕如にも立至り候哉と一同晝夜悲歎罷在候前顯之意味合深く御汲察被成下何卒出格之御厚評を以て幾重にも宜御沙汰奉願候以上

巳十一月

日光山總代輪王寺御門室御留守居　功　德　院

御執政衆中

但御宗家初より春來左之如く御助成尾水御兩家へも出願し有之旨申出る

一金百五十兩　田安様

一金百五十兩　一橋様

一金三百兩　靜岡様　五月

右は紅葉山御材木御拂料被下

一金二百兩　宇都宮藩知事　戸田從五位殿　五月

右は日光御門室へ被差上

一金二百兩　彦根藩知事　井伊從四位殿　九月

一金千兩　靜岡様　十一月

右は日光山内僧侶へ被下

一金五兩　伊勢崎藩知事　酒井從五位殿　同

久遠寺　甲州巨摩郡身延　身延山　日蓮宗

養珠大尼公は當寺の日遠上人に厚く御歸依度々御登山七面山へさへ御參拜ありて御由緒殊に淺からすされと御家の御菩提寺といふには非す唯西條御家には　源性公御初世々御埋葬地たる御菩提寺なるを以て左の御廟墓は　大慧公　香嚴公御相續後は御佛供料御供具每歳同州大野本遠寺へ御代拜の次を以て當寺へも御代參を被命の例規なり

觀樹院殿了月日照大姉　大慧公御實母　享保二十卯年七月二日御卒去

芳林院殿妙設日英大姉　同　御女　同年十二月十二日同

寛耀院殿　香嚴公御室　安永二巳年四月廿六日御逝去
善修院殿　同　御實母　同　年十二月御卒去
芳林院殿は　大慧公御家御相續後享保五年御誕生なり此公子のみ久遠寺へ御埋葬は何故との
事詳ならず

一御佛供料　毎年暮に
銀三枚　觀樹院様御佛供料　久遠寺
銀五枚　善修院様同
金一兩二分　御位牌附出家四人へ
毎年六月　金一兩　寛耀院様御施餓鬼料
金一兩　善修院様同　久遠寺
金百疋　芳林院様同

一八月御代拜之節
寛耀院様
觀樹院様　御靈前へ　金貳百匹つゝ
善修院様

一明治二巳年十一月十日藩政改革に付て御寺方御佛供料等都て從來之十分の一に減額との儀眞如院
へ論達同様の趣を久遠寺へ通牒す

一同三午年四月以來御佛供料左之通定る

金四兩壹分つゝ

内譯

金壹兩壹分　寛耀院樣へ

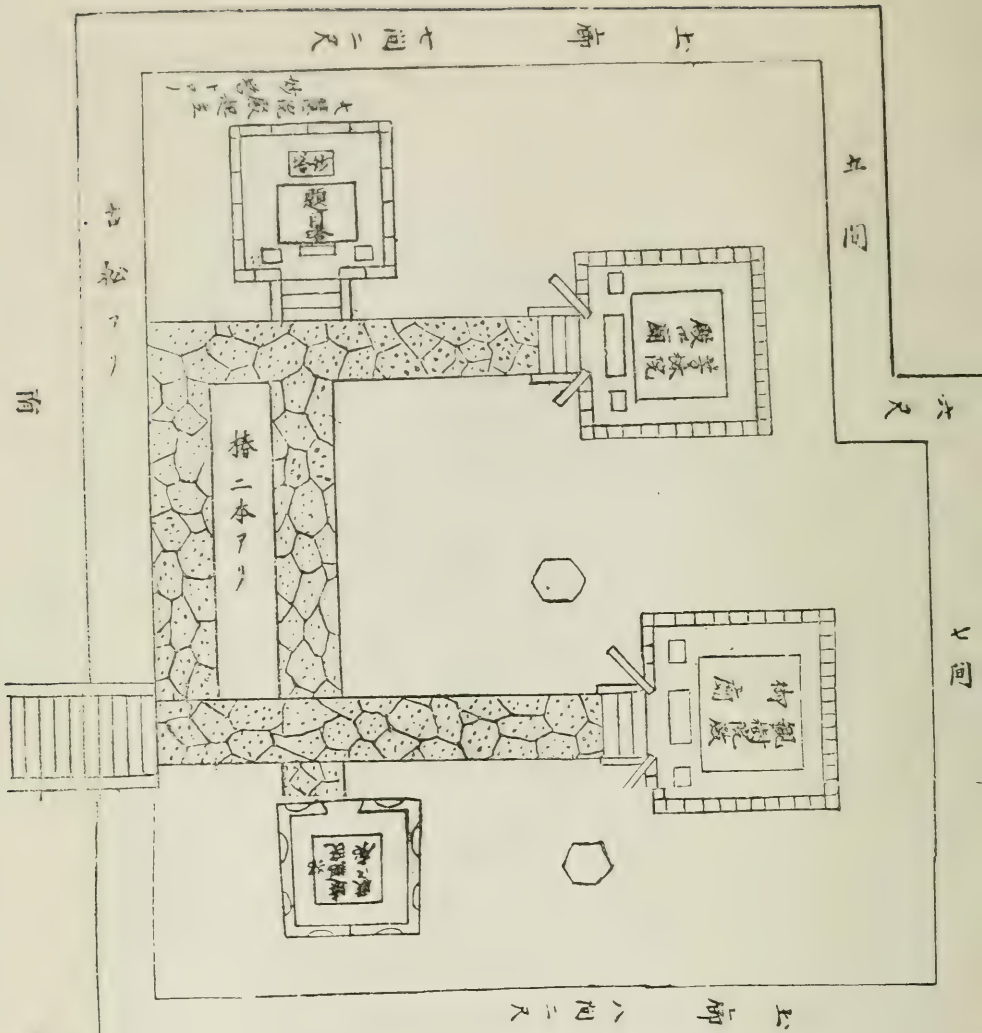
金壹兩つゝ　觀樹院樣
善修院樣
芳林院樣　へ

外に　金二分　御位牌附出家へ被下

一左記御廟圖の遠紹院殿は　大慧公御六女賢姫君にて松平播磨守賴濟君御内室也天明元丑年六月朔日御卒去池上本門寺へ御埋葬也蓋し當御廟は御分骨又は御遺髮等にあらんか

一題目塔御由緒不詳石燈籠銘に寶暦十一年七月謹献とあれは觀樹院殿二十七回御法會に際し　菩提心公より御菩提の爲め御建立ありしか或は石燈籠のみ御献備ありしや知るへからす

一寛耀院殿善修院殿は　香巖公未た西條家に御座の時御卒去ゆへ同御廟は西條家御塋域にあるへし

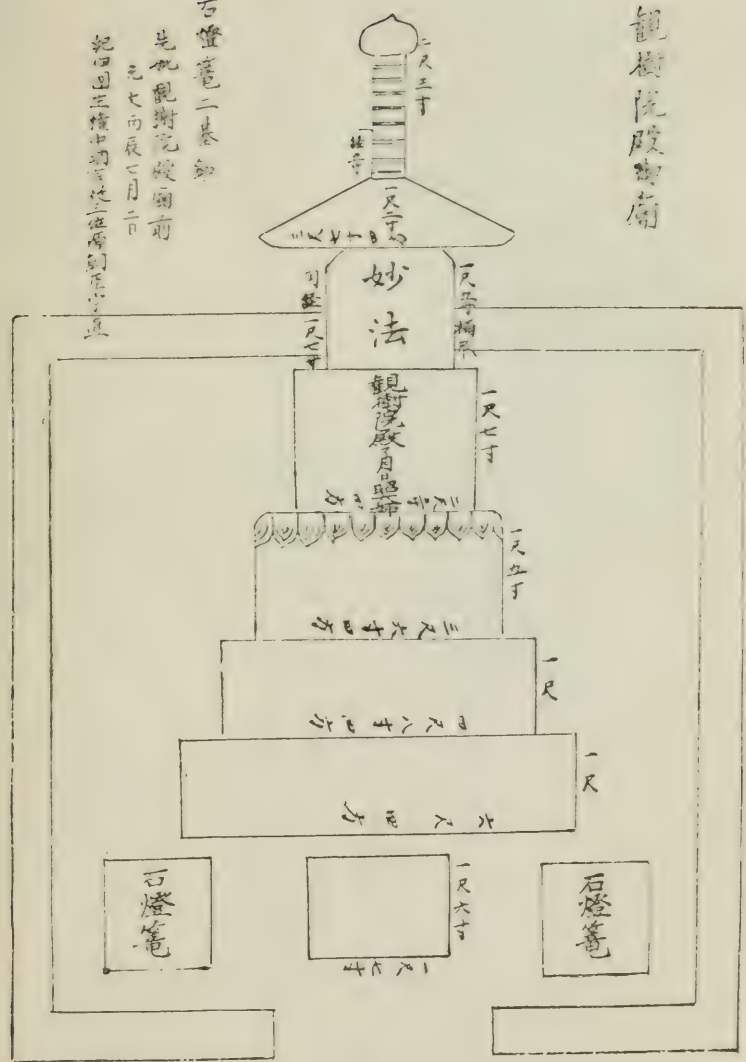
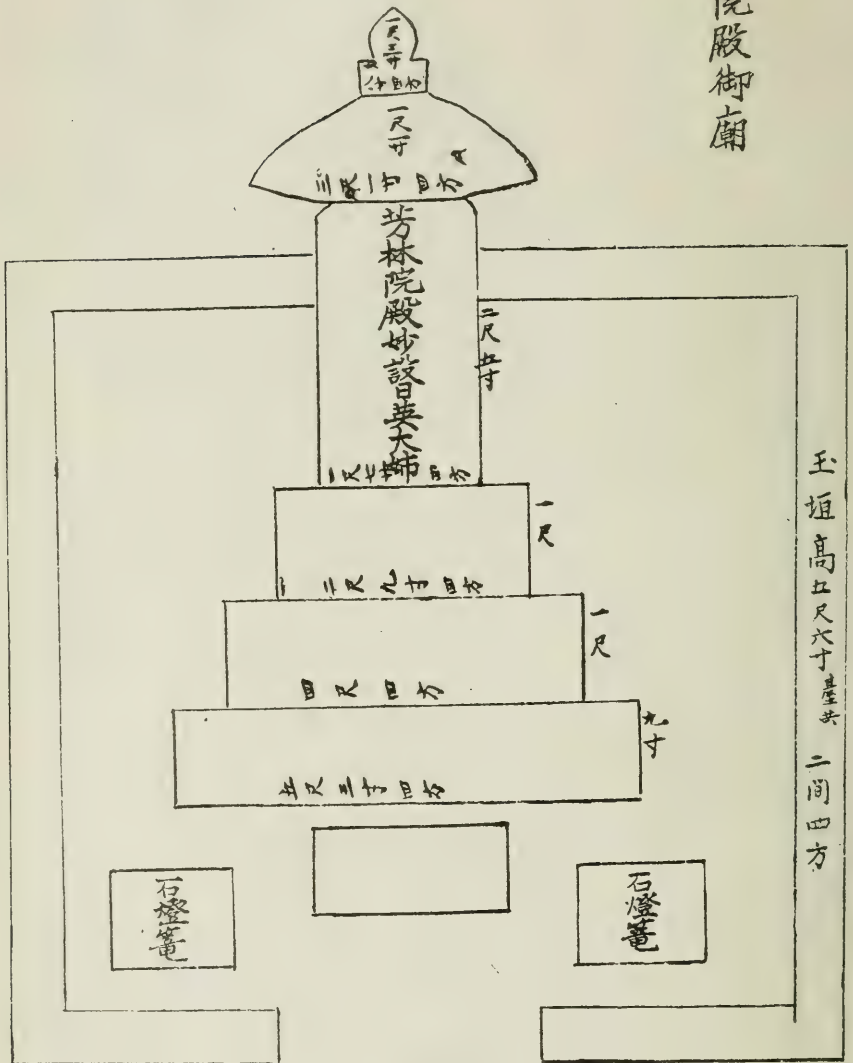
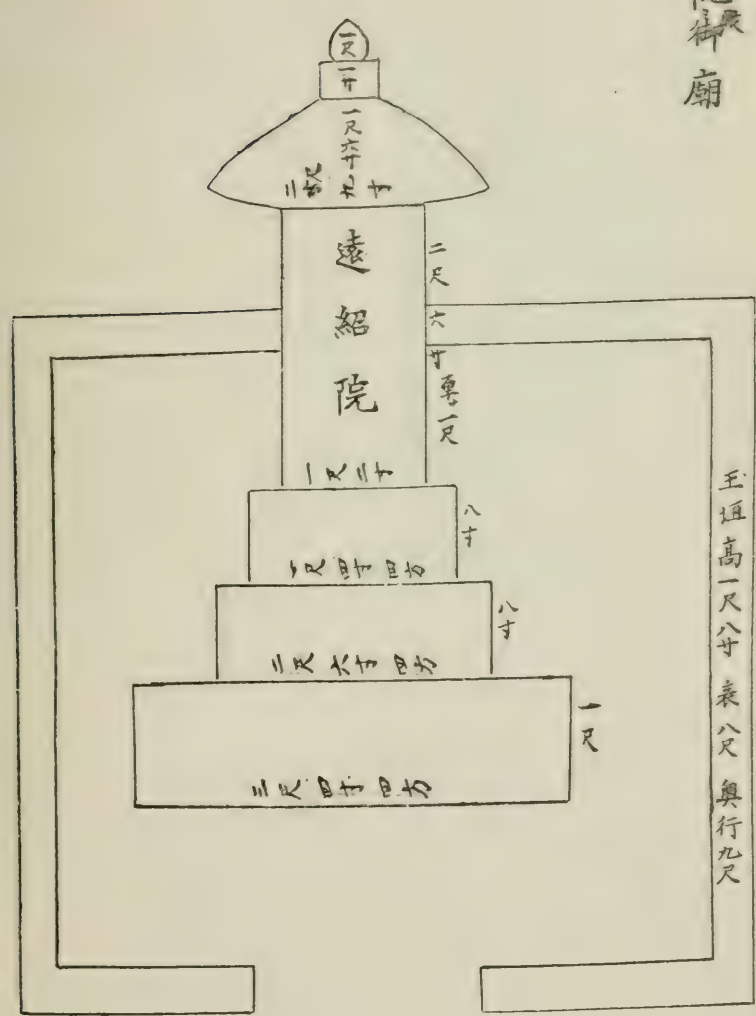
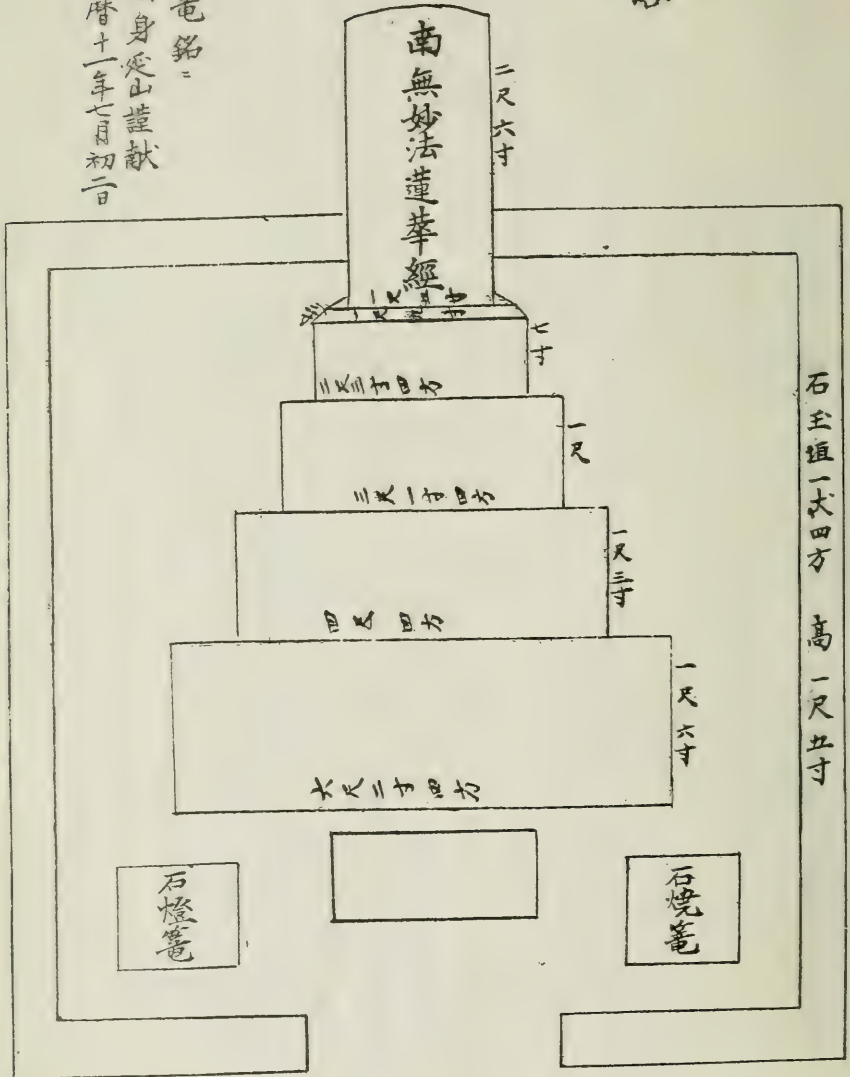
身延山
久遠寺御廟位置圖
御墓地
觀樹院殿御廟
上廊
八間二尺
上廊
七間二尺
六尺
四間
七間
椿二本アリ
古松アリ
南

観樹院殿御廟
石燈籠二基
先妣観樹院殿廟前
妙
法
一尺七寸
一尺
一尺
一尺六寸
石燈籠
石燈籠

芳林院殿御廟

遠紹院長御廟

一尺
一寸
一尺六寸
三尺九寸
遠紹院
二尺六寸
裏一尺
一尺三寸
八寸
一尺四寸四方
八寸
二尺六寸四方
一尺
三尺四寸四方
玉垣高一尺八寸 表八尺 奥行九尺

題目塔
石燈籠銘ニ
甲州身延山謹獻
寶暦十一年七月初二日
南無妙法蓮華經
二尺六寸
七寸
三尺三寸四方
一尺
三尺一寸四方
一尺三寸
四尺四方
一尺六寸
六尺二寸四方
石玉垣一丈四方　高一尺五寸
石燈籠
石燈籠

高野山

大德院 （紀州伊都郡高野山 維新後蓮花院と改稱）

高野山は紀州伊都郡の大伽藍と雖も封内に非す　幕府より寺領を付せられ政令自山にて施行し幕府の直管に屬す同山へは往古より　朝廷初將軍家大小諸侯庶人に至る迄遺骨遺髮等を納付する事天下一般の習ひと成り奥の院には墳塋疊々充滿して殆と寸地を餘さす故に　御家に於ても歷世薨去あれは必す其御墓塋を同山に建營せしめらる又　幕府初諸侯皆宿坊と云ふあつて都てを管理す德川氏御一家の宿坊は即ち此大德院也

歷世同山御登山及ひ大德院御由緒の巨細等筆記傳らす之を同院に質すに明治廿一年三月同山稀代之大火災に遭遇蓮華院（大德院なり）は特に火源に接近僅に尊牌を守護免るゝを得しのみにて舊記佛具共一切灰燼に付し毫も傳らされは調査の便なし唯口碑に傳ふる處と他に一二の發見により筆記したる旨にて當蓮華院住職德守秀宣より送致す

大德院創立の由緒

當院開基は弘法大師弘仁八年當山開創の時惡魔降伏の爲め軍茶利明王の秘法を修して結界せしときの草菴即ち當院なり第二世濟高僧都延喜六年此草庵に住し大師自作の十一面觀世音を安置し觀行を懲らす曾て庵中に素光あり八葉の白蓮其中に現す因て蓮花院と名く

沿革の要領

當院第十八世快仙僧都は波多野筑後守義通の孫義定の七男なり壽永二年當院に住持たり德川家の

御先祖源義重公此僧都に歸依して師檀の契を爲し若干の料を寄て修行の資に充つ是れ當院徳川家と檀契を結へる濫觴なり其後松平太郎左衞門尉親氏公先距を慕ふて更に師檀の契を重ねられ爾來累世の御位牌を建立せらる明應三年十一月和泉守信光公（此時三州岩津の城主）の御末子當院に薙染して唱阿上人と號す當院第三拾世の住持なり永正八年四月次郎三郎長親公（此時三州安祥の城主なり）登山當院に宿する事一七日此時先君の御位牌改造等の事あり天文四年十二月清康公（光徳院殿）の遺骨を當院に送殯して寶塔を建つ弘治元年三月六日廣忠公（贈大納言成烈院殿）七回忌に付き竹千代君（家康公）より靈牌を御建立平素御持念の藥師尊像（寅藥師と稱す今は東京大徳院の本尊となれり）幷に經卷等を御寄附あり當院中興宥雅法印は　家康公の御歸依厚く公の三河より起玉ふ常に陣營に從ひ三軍進退の吉凶を告け且つ勝利を祈禱す天正八年濱松に於て公當院の破壞せしを御聞き坊舍を修覆せしめらる此時隣寺數個を他に移して規模を擴張せり文祿元年征韓の役起るや　公宥雅を召し祈念丹精を抽つへき命あり且近年登山すへき内命あるに依り高野吉野行程記を獻す同三年三月　公吉野より御登山（豐太閤に御隨從）當院に宿し給ふ事三日先君長親公當院改造の時の棟札を御一見且つ親氏公以來御代々の御靈牌を御拜深縁に御感被爲在宗祖大師勅號の一字と徳川の一字を取りて大徳院と改號を命せらる此時御兜中に籠めし香合幷に愛染虚空藏大威徳の三尊を御寄附あり此像は公弱冠の時より御信仰常に鎧櫃に納め御出陣の時は御兜中に秘し給ふに靈感空しからす然るに當院は累世深縁あり誠に唱阿上人住居の古跡なれは永く當院に納むるに依り我武運長久の祈念怠たる事なかれとの懇命を蒙る慶長十九年宥雅駿府に召せられ其寺は當家累代は勿論酒井本多榊原其外古老の面々前より檀家たる事先日登山の節感心せり然れは前

を由緒の家は勿論當家の家門及ひ譜代の列總て其寺に對し永く疎略すへからす爾後は大德院を以て聖榮一派を主宰すへき旨命せらる此台命に因て三家越前家當院に歸依せられ師檀の契あるを以て漸次碑牌を造立して不朽の供養を懇願せられ若干の資料を付して永續の補闕とす同時　家康公より宥雅に命あり大德院始め聖一派へ領地壹万石を賜ふ法印辭して曰く僧侶の大祿は修禪の妨けなれは之に代ふるに天下の貴賤を教化せん爲諸國遍歴の允許を乞ふ　公因て諸國に遍歴して内密諸侯の動靜を探偵すへき内命を以て之を許さる故に聖方は無祿にして諸國を回檀せしなり又江戸神田紺屋町に壹千貳百坪の地を賜りて在番所を置く貞享三年御用地となり本所一つ目に於て替地壹千貳百六拾九坪餘を賜ふて移轉す且門前町家御免となる中間略す明治元年太政官達しに依り　其本山たる大德院青巖寺及ひ興山寺を準別格本山に組入更に一山の總號金剛峯寺を以て一山總轄寺とし舊三派聖方學侶方行人方互入協和盟約成る此時大德院名稱は廢せられしを以て蓮華院の舊號に復して大德院の諸般を受繼ん事を五條縣廳へ出願許可を得同時に大德院の建物は官に沒收により大德院の室下附屬寺也正覺院の名稱及ひ其建物とを合併して蓮花院と改號德守秀宣住職す而して貞享三年江戸本所一つ目に於て更に拜領する地所内に於て建設せる在番所は無石無檀無寺號にして當時の御趣意廢寺に屬するは勿論の事に付き大德院の名稱を是に移し府下の一寺に取立つ即ち東京市本所區元町大德院是也

明治廿一年三月當山稀代の大火蓮華院も類燒す同廿二年より三年に至り再建成就す

御代々樣御登山之事

南龍院樣　觀自在院樣往古御登嶺被爲在大德院（今の蓮花院）御滯泊被　仰付候事に申傳へ候舊記燒失詳ならす

信曰く　觀自在公御登山の事は第五卷に記する如し

御代々樣寶塔御建立之事

舊記類燒之爲詳細難申上但申傳ふる處如左

御三年忌迄に寶塔御建立被爲在候事にて寺社御奉行より寶塔建設之旨大德院（今の蓮花院）へ御達し相成御勘定奉行登山地所見分御取極めの上歸若評議濟にて御勘定奉行寺社御奉行再度御見分之上にて確定の御達し相成候總て兩御奉行擔當にて工事中は御交番に登山御見分相成候常詰は御下役衆三四名滯在相成候工事職人は御墓守奥之坊を頭取として當山住居之職人御用に相成候御寶塔石材其他御調製彫刻等同所にて御取扱相成候

御寶塔御眞石登山前寺社御奉行より大德院（今の蓮花院）御召に相成名代老分の一﨟出若致候

御分骨幷御埋物御渡し相成候（小長持に納め）供奉歸山道中下座觸れ御大切に守護人夫等は總て寺社御奉行より御手當被下候御通行各村及高野領代官衆より村々庄屋へ嚴重御達し相成高野領は其地頭へ御奉行衆より御達し相成候

御分骨御登山大德院に御着一七日間三時練行の御供養奉申上候

御眞石登山　御守護役人其他人夫等總て　御手人道中先觸れ　嚴重に下座觸れす　九度山御一泊式は

（九度山迄舟にて登す）大德院代幷に三十六ヶ院代同所迄御出迎す翌日同供奉登山す直に御墓守奥之坊へ御着

同坊本堂に安置御守護す（御守護は同坊看守に被仰付）

寶塔御眞石御安着大德院より上申す御日柄を以て御勘定奉行寺社御奉行御登山大德院立會ひ場所工事御實見

御分骨幷に御埋物等嚴重に御納埋寶塔臺石据付す（御眞石安置は追て御撰日御奉行所御達しに相成る）

御法會御日取は寺社御奉行より御達しに相成る

寶塔前御開眼供養（辰の上刻）

尊牌前御法會（御逮夜　未の上刻　御當日　辰の具定）

御名代御登山日割等寺社御奉行より御達し相成る

其當日御名代は御政府之内幷に寺社御奉行勘定御奉行吟味役同心衆其外作事掛りに伊都代官等若山未明に出立廡生津峠を經て花坂村御泊り（大德院代參十六ヶ院代）同所へ御見舞す翌日正七つ時御出立大門口へ御登山大門に於て總て御裝束改まる（大德院代參拾六ヶ院代）此處に奉迎す直に寶塔所に御着

金方より御備物（寶塔前へ　大判三枚　尊牌前へ　大判三枚）

寺社御奉行より法用中諸士の座席御燒香の順序定めらる

御眞石御安置寺社御奉行より被命候

寶塔前御開眼供養（御導師大德院　職衆六十六ヶ院）般若理趣三昧修行す

會奉行　三名

承仕　四名
寶塔掛　三名
御燒香第一御名代第二若君御簾中其外御代香第三大德院第四御奉行衆第五三十六ヶ院總代第六當山學侶方總代總分方總代第七登山諸士にして御燒香する格の有方
右無滯被爲濟御名代始め直に御先靈各御廟御參拜了て奥院弘法大師廟所に御參詣夫より　御名代一行は大德院に外御奉行始め御登山の諸士は設けの宿寺へ案内す中飯後大德院に於て御逮夜未の上刻　御導師大德院　職衆參十六ヶ院
光明眞言秘咒三昧修行　御燒香無し
右了て御休息翌日　尊牌前に於て御當日辰の上刻　御導師大德院　職衆參十六ヶ院般若理趣中曲三昧修行會奉行三名　承仕四名　寶塔掛三名
法用了て御燒香第一御名代第二御代香第三御奉行衆第四御登山諸士燒香の格ある方々
右了て　御名代始め御登山諸士へ大德院に於て御齋食呈進す
右齋食後御下向學文路村御一泊翌日御用船にて御歸若兩三日を經て御禮の爲め若山へ下向大德院へ名代參十六ヶ院一﨟を以てす三十六ヶ院代其二﨟を以てす寶塔掛り三ヶ院及御墓守奥之坊學文路村より御用船を申請け下向す若山本町三丁目富士屋源兵衞方へ着直に寺社御奉行へ届け出吟味役衆を以て同家を以て三日間御宿を給ふ御名代幷に御奉行衆及諸士へ御禮回勤す
御禮登城は時刻の御沙汰を待ち登城相濟旅宿に於て御料理を被下掛り御役人衆同席す

御城内歟寺社御奉行歟に於て被下物あり

御布施として大徳院へ御銀弁に（金襴裝御紋付五條袈裟一條）職衆三十六ヶ院及會奉行寶塔掛り等へも御布施として各錦織七條袈裟一條御下賜被下但し（上﨟中﨟淺﨟は色を以て分別す）承仕三名へ絹一反宛奥之坊へ御銀弁に絹一疋下し置る

御遺物として大徳院へ軸物花器屏風等御品三四点拜領す

一御年忌御相當には御名代の一行花坂御泊り（大徳院代 卅六ヶ院代）同地に御見舞す

御當日未明御出立大門御着裝束御改め直に御寶塔所に至る御備物は供奉者御名代より前に登山寶塔前へ（大判一枚）尊牌前へ（大判一枚）御法用（大徳院代卅六ヶ院の一﨟勤）職衆七名讀經了て　御名代御燒香夫より各廟へ御參詣弘法大師寶塔前に御參拜は御氣隨の事に有之候大徳院に御立寄尊牌前に於て御法用（導師大徳院 會奉行一名 職衆十四名 承仕二名）法用了て御燒香夫より齋食被爲濟直に御下向學文路村御一泊翌日御用船にて御歸若の御例なり右申傳へ候也

南龍院殿

裏 贈一品丞相源光貞卿
左 仲秋八日

裏 三品黄門源綱教卿
左 仲夏十四日

高林院殿
宝永二酉

裏 贈相公二品源頼職卿
左 季秋八日

裏 二品亜相源宗直卿

高野山奥之院
字仙臺島
御建立
石門 高九尺
木柵
香嚴院殿
顯龍院殿
弘化四年

高野山奥之院
字仙臺鳥
御建立

舜恭院殿

嘉永六丑

首石 高二尺八寸

碑 高六尺五寸

臺石

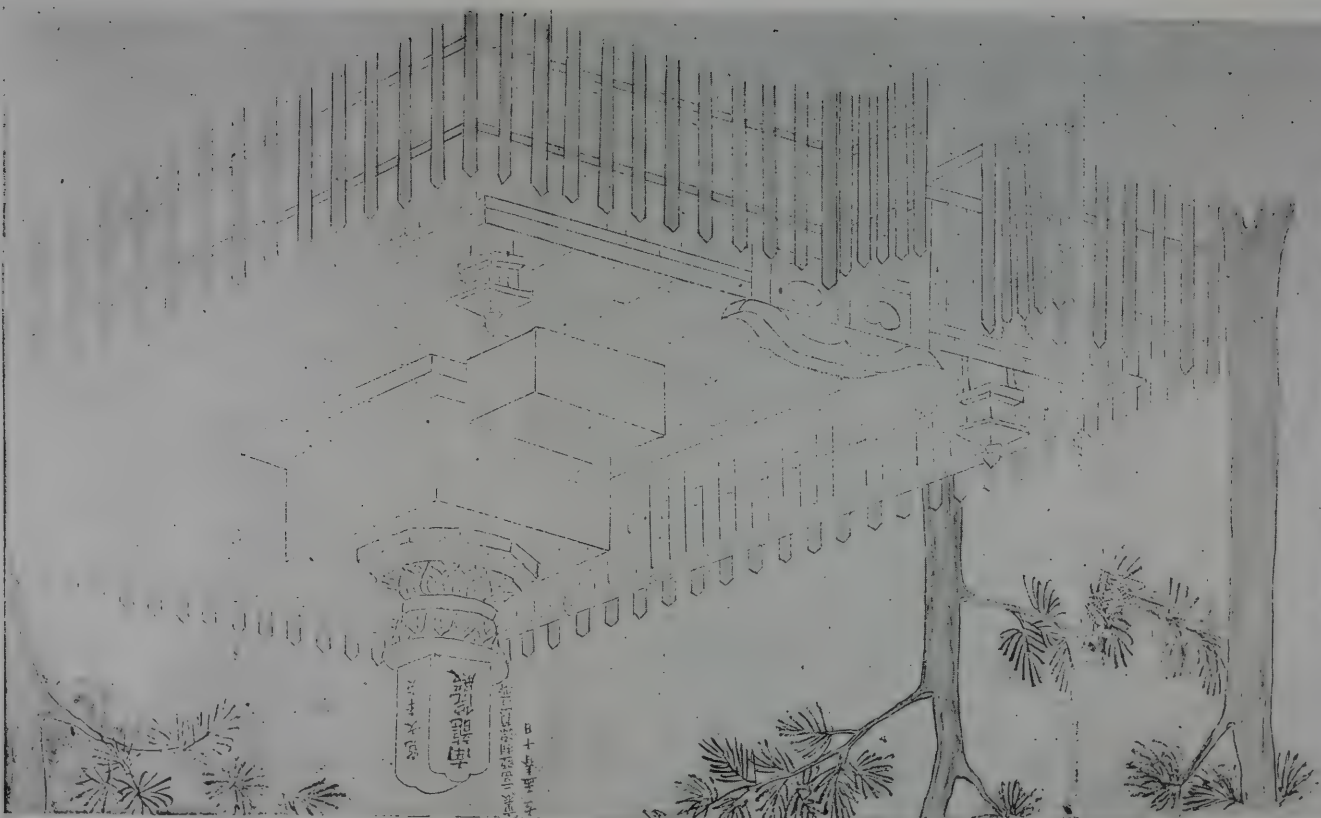
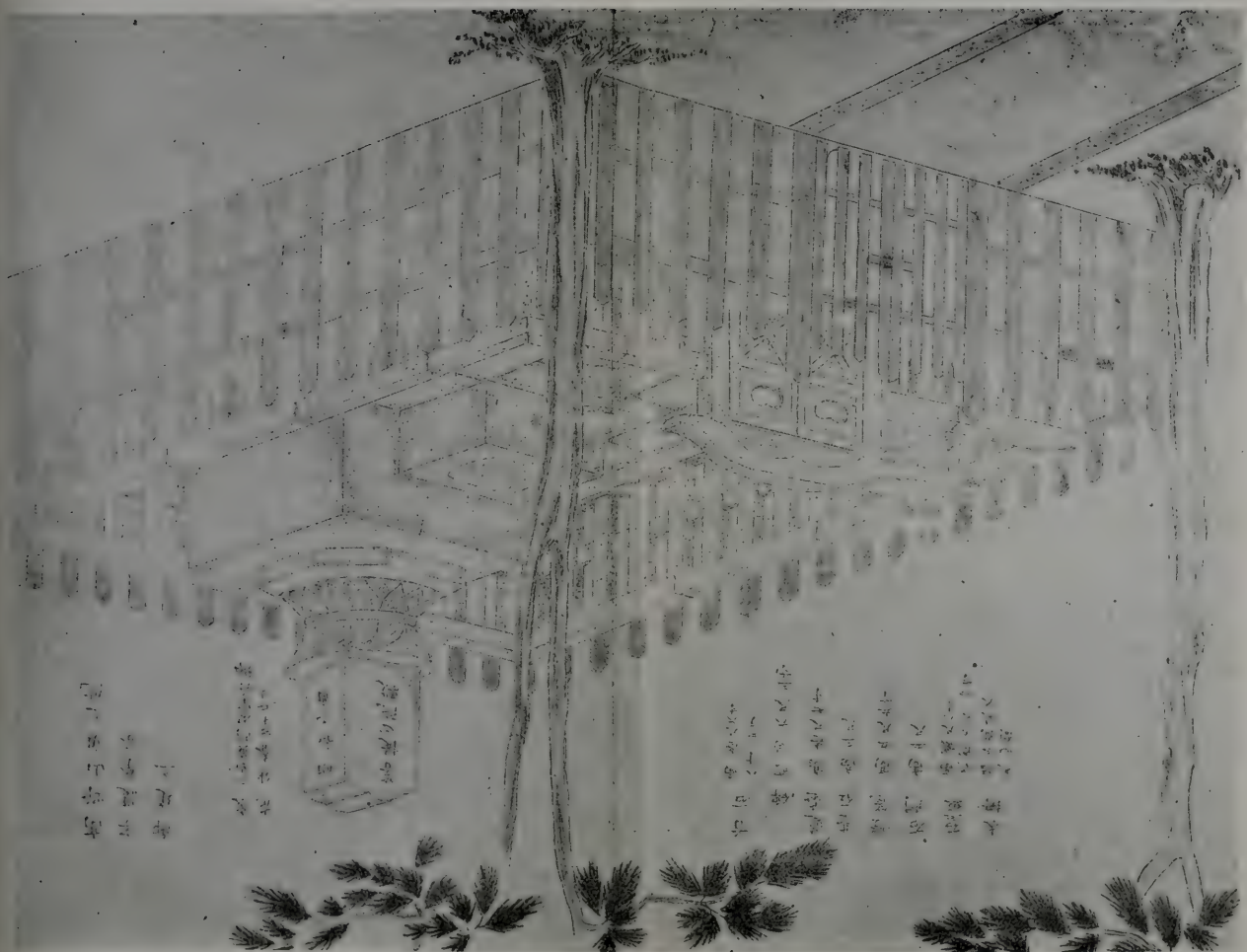
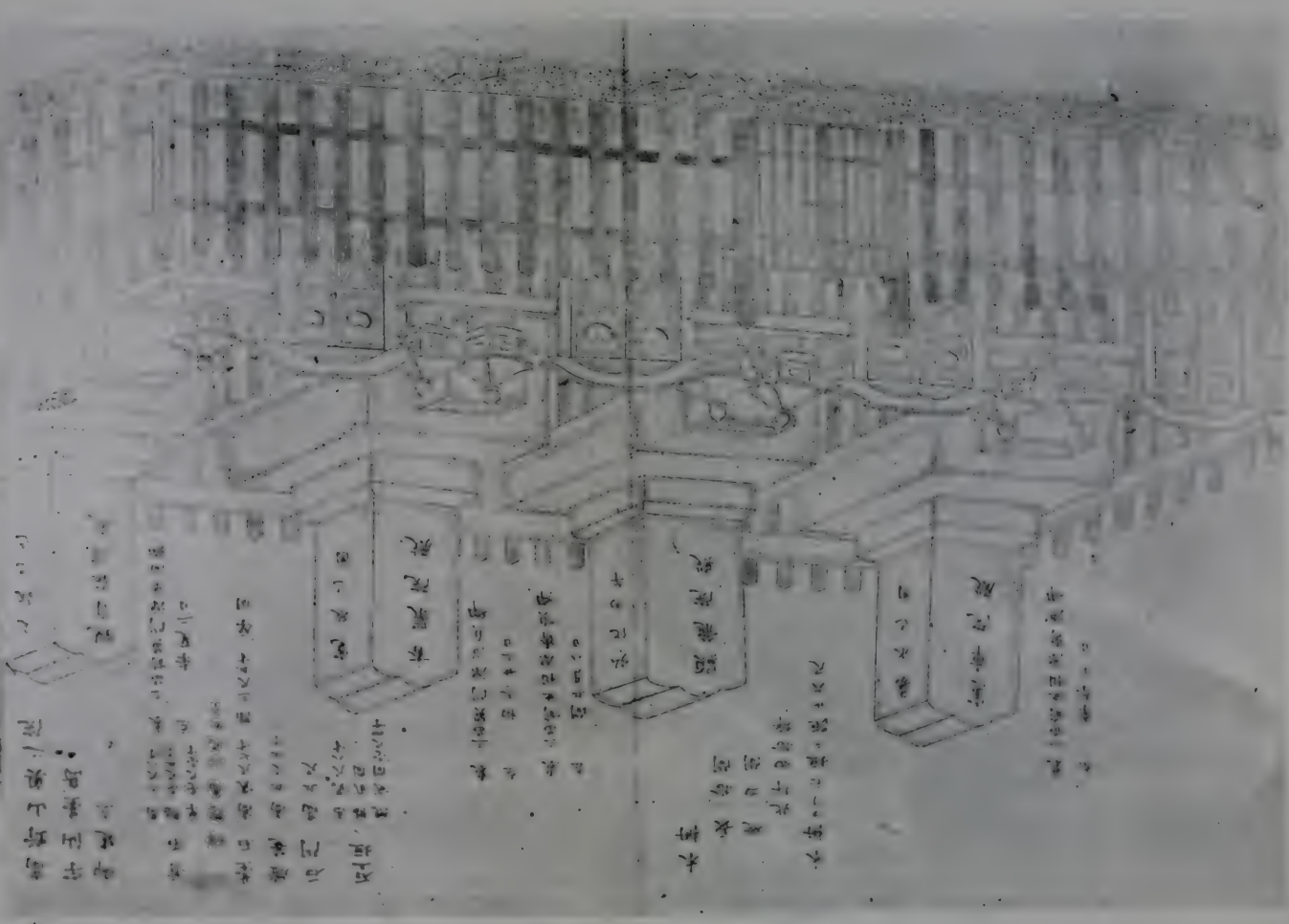
燈籠

石門 高五尺

石燈 高貳尺八寸

境内 七間

高野山奥之院
字中之橋ニ
御建立
首石　高貳尺壱寸　壱尺四寸角
蓮臺　碑惣高五尺
臺石　高壱尺貳寸
燈篭　高貳尺七寸
石門　高五尺七寸
玉垣　高五尺
高貳尺八寸
幅八尺
紀伊國徳川氏家族之墓

本法寺 京都上京區小川通寺之内上る

當寺は從來よりの御菩提寺に非す又何等の御由緒もなかりしか文久[万延カ]三亥年二月　將軍家御上洛により同年三月御上京の時當寺を御旅舘に定められ爾來維新に至る迄數回の御上京皆當寺御旅舘に一定せらる故を以て御宿坊料御宛行の事同寺より出願の記あり因により此編に附記す

慶應四辰年六月本法寺院代より左之通出願之旨にて京都御留守居より添書を以提出の書面

乍恐奉願上候

當山儀間狹之寺院に御座候得共去る万延三亥年より毎々　御旅舘被　仰付其後も度々御人數向御屯所に相成一山之眉目冥加至極難有奉存候右御用邊之廉を以て去る子年より爲御祈禱米年々米百石つゝ二つ物成にて御下渡被成下一山末寺等迄も打寄日々　御武運長久幷御領内安全五穀成就御祈禱奉抽丹誠候儀に御座候就ては宗門之龜鑑一山之重寶に仕度候に付高百石之御墨附拜領仕度幾重にも奉願上候且又以來幾度　御旅舘相勤候共別段御宿料等願出不申候に付何卒右御寄附米四つ物成にて御下け渡被成下候樣去る二月奉願候處今以何等之御沙汰不被成下候儀押て相願候儀恐縮の至に御座候得共今般當山貫首日習事及老年退山隱居仕度奉存候に付後住日貫へ當七月十四日限にて方丈向都て一山之儀傳讓仕候就ては去る子年初て　御旅舘に御賴に相成候儀日習代にて御受仕引續度々　御旅舘相勤候に付前書奉願上候　御墨附幷石盛御引直し等之儀も日習住山之内被仰付被成下候はゝ後年迄も日習之規模に相成猶更難有奉存候に付何卒後住へ引渡日限前に御取扱被成下置候樣只管奉願上候以上

慶應四辰年六月十七日

本法寺　院代　教行院　印

役者總代　尊陽院　印

紀州様

御留守居方衆中様

右に付同年七月十四日御留守居を以て左之通相達す

本　法　寺

春來當院　御本陣に相成候に付被下米之儀願之品無餘儀相聞候得共難及取扱事

七　月

金三百兩也

本　法　寺

春來爲　御本陣借請料被下之

七　月

右之趣申渡の處三百兩は一ヶ月の被下に有や抔彼是申立たれ共詰り御本陣勤に付不取敢被下難有受領の旨尊陽院より受領証を提出すといふ

（一本ナシ伊都郡橋本驛地士土屋氏舊記に曰く高野山大德院へ貳百石興山寺へ百石右三百石從　公儀伊都上組之內中道村下上田村兩村にて慶安二年丑八月に御寄附被遊候右御替地は勢州白子領川曲郡北長太村出候事とあり）

昭和八年七月十七日印刷
昭和八年七月二十七日發行

南紀德川史 自第百四十七卷 至第百五十七卷

No 396

第十六回配本

編輯者　堀内信
發行者　和歌山市宇須町三百七十八番地　山崎順平
印刷者　和歌山市新堀四丁目三番地　福本芳太郎
印刷所　和歌山市新堀四丁目三番地　福本印刷所

發行所　和歌山市宇須町三百七十八番地　南紀德川史刊行會
振替口座大阪四五八五二番